

上植木光仙房遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

上植木光仙房遺跡正誤表

(以下を追加して下さい) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

凡例10.	遺構図中の■は石製品を◆は金属製品を表す。
第1表14	洞山遺跡の北に位置する独立丘陵上の古墳群。
17	達磨山古墳・塚手塚古墳をはじめ5～8世紀の55基からなる古墳群。
22	粕川左岸の洪積微高地上に位置する白鳳時代の寺院跡で、伊勢崎市教育委員会によって調査が進められており、紀寺式を反転した伽藍配置とみられている。
25	旧石器の出土で有名、周囲に古墳群が存在する。
30	奈良・平安時代の集落跡。「金・布」等の墨書土器が多量に出土。
B・C	金坂清則「上野国府とその周辺の東山道、およ群馬、佐位駅家について」『交通の歴史地理』歴史地理学紀要16 歴史地理学会 1974年
図版1上	矢印=左から7cm、上から3cmの位置
図版5下	(誤)遺特出土状況近接→(正)遺物出土状況近接

資料	群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	11
No. 1-2509	平成2年3月31日	(6)

上植木光仙房遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

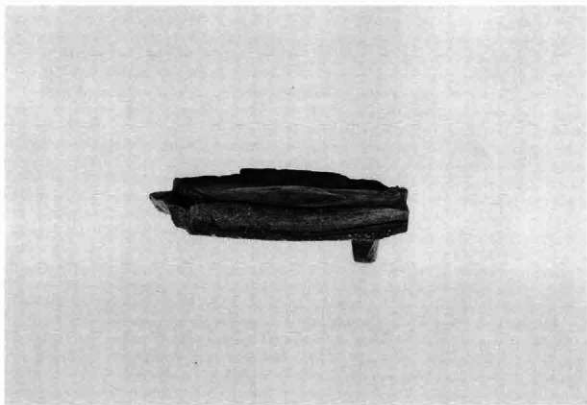
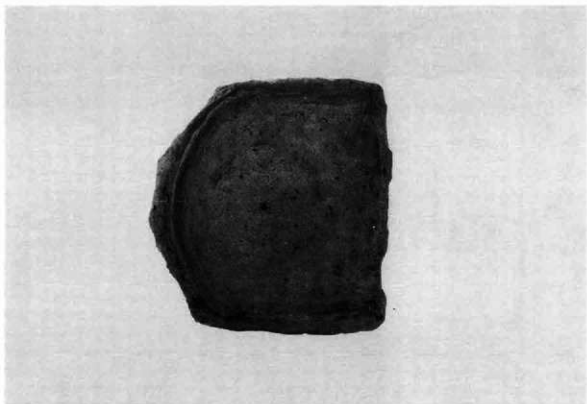
建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



26号溝出土緑釉陶器



上植木光仙房遺跡出土緑釉陶器



77号住居跡出土銅字鏡

序

交通混雑に対処するため、群馬県と埼玉県を結ぶ国道17号のバイパスとして上武道路が建設されることとなりました。その事前調査として37遺跡、延べ51万㎡におよぶ埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

昭和49年1月から群馬県教育委員会により、引き続いて昭和54年度からは勅群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施してまいりました。

この事業も15年余の歳月をかけ、昭和62年度には所期の目的でありました国道354号から国道50号までの発掘調査が終了し、道路としての全面開通も間近となりました。

上武道路の完成は、群馬県南東部から中央部にかけての産業経済に大きな影響をもたらすことと思います。また、周辺地域への波及効果も多大なるものがあると予想されます。

調査後の整理事業は、勅群馬県埋蔵文化財調査事業団が鋭意進めており、地中に残された先人の歴史が次々に解明されつつあります。

ここに報告いたします「上植木光仙房遺跡」は、古墳群と平安時代の集落を中心とする遺跡で、赤城山南麓における湧水地帯から流れ出した小河川が谷地を広げ、平坦面を形成した伊勢崎市の北東部に位置しています。周辺には、旧石器時代からの歴史が連続と続いております。特に古墳時代には多くの群集墳が造られ、白鳳時代には群馬県にあっていはやく仏教文化が華開いた地域でもあります。

調査の実施に当たりご協力をいただきました建設省高崎工事事務所、群馬県教育委員会、地元関係者各位に感謝申し上げますと共に、厳しい自然条件の中で調査に携わりました皆様の労をねぎらいます。

終わりに、本報告書により不明な部分が残されている原始・古代社会の究明が多少なりとも前進し、県民の学習の一助となりますれば幸いです。

平成元年3月31日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い事前調査された、事業名称「JK23 光仙房遺跡」の発掘調査報告書である。報告書名に掲げた遺跡名「上植木光仙房遺跡」は、当該地区の通称と小字名を併記したものである。
2. 遺跡は、群馬県伊勢崎市三和町1955番地の1他に所在する。
3. 事業主体 建設省関東地方建設局
4. 調査主体 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 昭和58年5月6日～昭和58年7月9日
昭和58年9月3日～昭和58年10月10日
昭和59年4月1日～昭和59年10月31日
6. 調査組織 群馬県埋蔵文化財調査事業団
昭和58年度
常務理事 小林起久治 事務局長 白石保三郎
管理部長 大澤秋良 調査研究部長 松本 浩一
調査研究第2課長 秋池 武
調査担当者 原 雅信・大木紳一郎・飯塚 誠（調査研究員）
庶務課主事 国定 均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏
昭和59年度
常務理事 白石保三郎 事務局長 梅沢重昭
管理部長 大澤秋良 調査研究部長 松本浩一
調査研究第2課長 秋池 武 庶務課調査員 定方隆史
調査担当者 原 雅信・藤巻幸男・飯塚 誠・小島敦子・須田 努・中山純一
友廣哲也・大西雅広（調査研究員）
庶務課主事 国定 均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏
7. 整理主体 群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 昭和62年8月1日～昭和63年11月30日
9. 整理組織 事務担当職員
常務理事 白石保三郎 事務局長 井上唯雄（昭和62年度）・松本浩一
管理部長 田口紀雄 調査研究部長 上原啓巳
庶務課長 定方隆史（昭和62年度）・住谷 進 調査研究第2課長 板場一寿
庶務課員 国定 均・笠原秀樹（主任）
小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏（主事）
（臨時職員） 野島のお江・今井もと子・松井美智子・大澤美左保・大島敬子
小野沢春美
整理担当職員 主任調査研究員 飯塚 誠 嘱託員 青木静江・浅井良子
補助員 安藤三枝子・今井智恵美・大川明子・大友美代子・尾田正子・小淵トモ子
笠井初子・金子吉江・串渕すみ江・島崎敏子・関口貴子・高橋初美

田中晩美・田村紀子・土田三代子・中沢久子・新平美津子・萩原由美子
長谷川春美・蜂巣綾子・馬場信子・藤井輝子・増田政子・丸山明子

- 写真撮影は、遺構は調査担当者が行い、遺物は佐藤元彦（技師）による。
- 本書の編集は飯塚誠が行い、執筆は以下に掲げる他は、各調査担当者の協力の下に飯塚が行った。
第II章第1節 原 雅信
第II章第2節(2)・(3) 藤巻幸男
第II章第3節(2)、第三章1 板場一寿
第II章第7節 大西雅広
- 石材の鑑定は飯島静男（群馬地質研究会所属）にお願した。
- 実測図のトレースは株式会社・測設に委託して行った。
- 井戸の調査に当たっては、掘削を原澤ボーリング株式会社に委託して行った。
- 遺構実測の一部を富永調査事務所に委託して行った。
- 本書の作成に当たっては、関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際しては伊勢崎市教育委員会並びに地元関係者の多大なるご支援を戴いた。ここに記して感謝の意を表す次第である。
- 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 遺構番号については、原則として発掘調査時に付したものを使用したが、検討の結果、当初の名称が適切でないもの及び溝・土坑等については改めた。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として以下の通りとし、スケールを入れて示した。
古墳 全体図 $\frac{1}{100}$ 。石室 $\frac{1}{4}$ 。 竪穴住居跡 $\frac{1}{4}$ 。（細部 $\frac{1}{40}$ ） 掘立柱建物跡 $\frac{1}{4}$ 。 井戸 $\frac{1}{4}$ 。
溝 $\frac{1}{4}$ 。 土坑 $\frac{1}{4}$ 。
遺物実測図 土器 $\frac{1}{4}$ 石器 $\frac{1}{4}$ 金属製品 $\frac{1}{4}$ その他の遺物は大きさにより縮尺を変えたが、スケールを入れて示した。
なお、遺物写真図版の縮尺率は統一されていない。
- 遺構図中の方位記号は磁北を示す。
- 遺構の面積は、プランメーターで3回計測したものの平均値を示した。
- 遺物重量の計測には電磁式はかりを使用した。
- 遺構図・遺物図・遺物観察表・遺物写真図版のNoは一致させてある。
- 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局・財日本色彩研究所監修『標準土色帖』を使用した。
- 金属遺物の実測図は、ソフトX線写真撮影の成果を使用して図化したものである。
- 遺物実測図の内、還元炎焼成の須恵器については断面を塗り潰した。
黒色処理を施された遺物についてはスクリーントーンを貼って示した。

目 次

序 例 言 凡 例 目 次

第I章 発掘調査の経過と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過と調査の経過	1
(1) 発掘調査に至る経過	1
(2) 発掘調査の方法と経過	4
(3) 整理作業の経過	6
第2節 遺跡の位置と環境	7
(1) 遺跡の位置と地形	7
(2) 周辺遺跡の分布	9
第3節 遺 跡 の 概 要	15

第II章 検出された遺構と遺物

第1節 先土器時代の出土遺物	23
第2節 縄文時代の遺構と遺物	25
(1) 陥 し 穴	25
(2) 1号埋設土器	26
(3) グリッド出土の遺物	27
第3節 古墳と出土遺物	34
(1) 古 墳	34
(2) 殖蓮村第71号古墳	58
第4節 平安時代の住居と出土遺物	64
(1) 竪穴住居跡	64
(2) 掘立柱建物跡	285
第5節 その他の遺構と出土遺物	300
(1) 小 鍛 冶 跡	300
(2) 土墳墓・火葬跡	304
(3) 井 戸 跡	306
(4) 溝 跡	326
(5) 土 坑	333
第6節 グリッド出土の遺物	350
第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について	358

第III章 調査のまとめ

1. 古墳のまとめ	378
2. 集落のまとめ	380

挿 図 目 次

第 1図	遺跡位置図	1	第 500図	第10号住居跡実測図	89	第117図	第41・43・101号住居跡実測図	155
第 2図	調査区位置図	5	第 600図	第10号住居跡出土遺物実測図	89	第118図	第41・43・101号住居跡 出土遺物実測図	156
第 3図	遺跡地帯周辺地形図	8	第 610図	第12号住居跡実測図	90	第119図	第42・102号住居跡実測図	157
第 4図	周辺遺跡分布図	10	第 620図	第12号住居跡掘り方実測図	91	第1200図	第42・102号住居跡 掘り方実測図	158
第 5図	先土器時代調査区位置図	23	第 630図	第12号住居跡出土遺物実測図	91	第121図	第42号住居跡出土遺物実測図	159
第 6図	尖頭器実測図	24	第 640図	第13号住居跡実測図	93	第122図	第44号住居跡出土遺物実測図	161
第 7図	陶し穴実測図	25	第 650図	第13号住居跡出土遺物実測図	94	第123図	第44号住居跡出土遺物実測図	162
第 8図	縄文土器拓影・実測図	26	第 660図	第14号住居跡実測図	96	第124図	第45号住居跡実測図	163
第 9図	縄文土器拓影・実測図	29	第 670図	第14号住居跡出土遺物実測図	97	第125図	第45号住居跡出土遺物実測図	163
第10図	グリッド出土土器実測図①	30	第 680図	第15号住居跡実測図	98	第126図	第44・45号住居跡掘り方実測図	164
第11図	グリッド出土土器実測図②	31	第 690図	第15号住居跡出土遺物実測図	99	第127図	第46号住居跡出土遺物実測図	166
第12図	グリッド出土土器実測図③	32	第 700図	第16号住居跡実測図	100	第128図	第46号住居跡出土遺物実測図	166
第13図	グリッド出土土器実測図④	33	第 710図	第16号住居跡出土遺物実測図	100	第129図	第47号住居跡実測図	167
第14図	1号壕全体図	34	第 720図	第18号住居跡実測図	101	第130図	第47号住居跡出土遺物実測図	167
第15図	1号壕石室実測図	36	第 730図	第19号住居跡実測図	102	第131図	第48・106号住居跡実測図	169
第16図	1号壕石室掘り方実測図	37	第 740図	第19号住居跡出土遺物実測図	103	第132図	第48号住居跡実測図	170
第17図	2号壕全体図	38	第 750図	第20号住居跡実測図	105	第133図	第49号住居跡実測図	172
第18図	2号壕石室実測図	40	第 760図	第20号住居跡出土遺物実測図	105	第134図	第49号住居跡出土遺物実測図	173
第19図	3号壕全体図	41	第 770図	第21号住居跡実測図	107	第135図	第50号住居跡実測図	174
第20図	3号壕石室実測図	43	第 780図	第21号住居跡出土遺物実測図	108	第136図	第50号住居跡出土遺物実測図	174
第21図	4号壕全体図	44	第 790図	第22号住居跡実測図	109	第137図	第51号住居跡実測図	175
第22図	4号壕石室実測図	45	第 800図	第22号住居跡掘り方実測図	111	第138図	第51号住居跡出土遺物実測図	177
第23図	5号壕全体図	46	第 810図	第22号住居跡出土遺物実測図	111	第139図	第52号住居跡実測図	179
第24図	6号壕全体図	—評決—	第 820図	第23・24号住居跡実測図	113	第140図	第52号住居跡掘り方実測図	179
第25図	6号壕石室実測図	48	第 830図	第23号住居跡出土遺物実測図	114	第141図	第52号住居跡出土遺物実測図	179
第26図	7号壕全体図	—評決—	第 840図	第25号住居跡実測図	116	第142図	第53号住居跡実測図	180
第27図	8号壕全体図	49	第 850図	第25号住居跡掘り方実測図	117	第143図	第54号住居跡実測図	181
第28図	8号壕石室実測図①	50	第 860図	第25号住居跡出土遺物実測図	118	第144図	第54号住居跡出土遺物実測図	181
第29図	8号壕石室実測図②	51	第 870図	第26号住居跡実測図	119	第145図	第55号住居跡実測図	182
第30図	9号壕全体図	52	第 880図	第26号住居跡出土遺物実測図	119	第146図	第55号住居跡出土遺物実測図	183
第31図	10号壕石室実測図	53	第 890図	第28号住居跡実測図	121	第147図	第56号住居跡実測図	184
第32図	古墳出土遺物実測図①	54	第 900図	第28号住居跡出土遺物実測図	121	第148図	第56号住居跡出土遺物実測図	185
第33図	古墳出土遺物実測図②	55	第 910図	第29号住居跡実測図	123	第149図	第57号住居跡実測図	187
第34図	古墳出土遺物実測図③	57	第 920図	第29号住居跡出土遺物実測図	123	第150図	第58・57号住居跡掘り方実測図	187
第35図	横蓮村第71号墳全体図	60	第 930図	第30号住居跡実測図	124	第151図	第57号住居跡出土遺物実測図	188
第36図	横蓮村第71号墳石室実測図	61	第 940図	第30号住居跡出土遺物実測図	125	第152図	第58・59・96号住居跡実測図	190
第37図	横蓮村第71号墳出土遺物実測図①	62	第 950図	第31号住居跡実測図	128	第153図	第58・59・96号住居跡 掘り方実測図	191
第38図	横蓮村第71号墳出土遺物実測図②	63	第 960図	第31号住居跡出土遺物実測図	128	第154図	第58・59・96号住居跡 掘り方実測図	192
第39図	第1号住居跡実測図	64	第 970図	第32号住居跡実測図	129	第155図	第60・63号住居跡実測図	193
第40図	第1号住居跡出土遺物実測図	65	第 980図	第32号住居跡出土遺物実測図	129	第156図	第60・63号住居跡 出土遺物実測図	194
第41図	第2号住居跡実測図	66	第 990図	第33号住居跡実測図	132	第157図	第61・62号住居跡実測図	196
第42図	第2号住居跡出土遺物実測図	67	第1000図	第33号住居跡出土遺物実測図	133	第158図	第60・61・62・63号住居跡 掘り方実測図	197
第43図	第3号住居跡実測図	69	第1010図	第34号住居跡実測図	134	第159図	第61・62号住居跡 出土遺物実測図	198
第44図	第3号住居跡出土遺物実測図	70	第1020図	第34号住居跡出土遺物実測図	135	第160図	第64号住居跡実測図	199
第45図	第4号住居跡実測図	70	第1030図	第35号住居跡実測図	137	第161図	第64号住居跡出土遺物実測図	200
第46図	第4号住居跡出土遺物実測図	71	第1040図	第35号住居跡出土遺物実測図	137	第162図	第65・97号住居跡実測図	201
第47図	第5・119号住居跡実測図	72	第1050図	第36・37号住居跡実測図	139	第163図	第65・97号住居跡 出土遺物実測図	202
第48図	第5・119号住居跡 出土遺物実測図	74	第1060図	第36号住居跡出土遺物実測図	140	第164図	第66号住居跡出土遺物実測図	205
第49図	第6号住居跡実測図	75	第1070図	第37号住居跡出土遺物実測図	142	第165図	第67号住居跡実測図	206
第50図	第6号住居跡出土遺物実測図	76	第1080図	第36・37号住居跡 掘り方出土遺物実測図	143	第166図	第67号住居跡出土遺物実測図	206
第51図	第7号住居跡実測図	77	第1090図	第38号住居跡実測図	145	第167図	第68号住居跡実測図	207
第52図	第7号住居跡出土遺物実測図①	79	第1100図	第38号住居跡掘り方実測図	146			
第53図	第7号住居跡出土遺物実測図②	80	第1110図	第38号住居跡出土遺物実測図	146			
第54図	第8号住居跡実測図	82	第1120図	第39号住居跡実測図	148			
第55図	第8号住居跡出土遺物実測図①	83	第1130図	第39号住居跡出土遺物実測図①	149			
第56図	第8号住居跡出土遺物実測図②	84	第1140図	第39号住居跡出土遺物実測図②	150			
第57図	第9号住居跡実測図	87	第1150図	第40号住居跡実測図	152			
第58図	第9号住居跡出土遺物実測図	87	第1160図	第40号住居跡出土遺物実測図	153			

第166回	第68号住居跡出土遺物実測図	208	第225回	第113号住居跡実測図	264	第287回	土坑実測図71	340
第169回	第69号住居跡実測図	209	第226回	第113号住居跡出土遺物実測図	265	第288回	土坑実測図81	341
第170回	第69号住居跡出土遺物実測図	209	第227回	第114号住居跡実測図	266	第289回	土坑実測図91	342
第171回	第70号住居跡実測図	210	第228回	第114号住居跡出土遺物実測図	267	第290回	土坑実測図10	343
第172回	第69・70号住居跡掘り方実測図	211	第229回	第115号住居跡実測図	269	第291回	土坑実測図10	344
第173回	第70号住居跡出土遺物実測図	212	第230回	第115号住居跡掘り方実測図	270	第292回	土坑実測図10	345
第174回	第71号住居跡実測図	213	第231回	第115号住居跡出土遺物実測図	271	第293回	土坑実測図10	346
第175回	第71号住居跡出土遺物実測図	214	第232回	第116号住居跡実測図	272	第294回	土坑実測図10	347
第176回	第72号住居跡実測図	216	第233回	第116号住居跡出土遺物実測図	273	第295回	土坑実測図10	348
第177回	第73号住居跡実測図	216	第234回	第117号住居跡実測図	274	第296回	土坑実測図10	349
第178回	第73号住居跡出土遺物実測図	217	第235回	第117号住居跡出土遺物実測図	274	第297回	グリッド出土遺物実測図	350
第179回	第74・79・107・108・109号住居跡実測図	219	第236回	第118号住居跡実測図	275	第298回	石臼実測図	352
第180回	第71・73・74・79・107・108・109号住居跡掘り方実測図	220	第237回	第120号住居跡実測図	276	第299回	砥石実測図	353
第181回	第74・107・108・109号住居跡出土遺物実測図	221	第238回	第120号住居跡出土遺物実測図	276	第300回	グリッド出土瓦形影・実測図11	353
第182回	第75・104・105号住居跡実測図	222	第239回	第121号住居跡実測図	277	第301回	グリッド出土瓦形影・実測図21	355
第183回	第76号住居跡実測図	224	第240回	第121号住居跡出土遺物実測図	278	第302回	幕末7年・上植木村絵図	360
第184回	第77・100号住居跡実測図	225	第241回	第122号住居跡実測図	281	第303回	明治6年・上植木村地引絵図	361
第185回	第76・77号住居跡出土遺物実測図	226	第242回	第122号住居跡出土遺物実測図	278	第304回	明治29年・地方迅速書簡	362
第186回	第78・95号住居跡実測図	228	第243回	第124号住居跡実測図	280	第305回	明治6年・地引絵図	363
第187回	第78・95号住居跡出土遺物実測図	229	第244回	第124号住居跡掘り方実測図	281	第306回	陶磁器実測図11	364
第188回	第80号住居跡実測図	230	第245回	第124号住居跡出土遺物実測図	281	第307回	陶磁器実測図12	365
第189回	第80号住居跡出土遺物実測図	231	第246回	第125号住居跡実測図	282	第308回	陶磁器実測図13	366
第190回	第81号住居跡実測図	232	第247回	第125号住居跡掘り方実測図	283	第309回	陶磁器実測図14	367
第191回	第81号住居跡掘り方実測図	233	第248回	第125号住居跡出土遺物実測図	283	第310回	陶磁器実測図15	368
第192回	第81号住居跡出土遺物実測図	233	第249回	1号掘立柱建物跡実測図	285	第311回	陶磁器実測図16	369
第193回	第82号住居跡実測図	234	第250回	2号掘立柱建物跡実測図	286	第312回	陶磁器実測図17	370
第194回	第82号住居跡出土遺物実測図	235	第251回	紡錘・土埴				
第195回	第83号住居跡実測図	236	第252回	石製機道具実測図	288			
第196回	第84号住居跡実測図	237	第253回	住居跡出土金銅製品実測図1	289			
第197回	第84号住居跡出土遺物実測図	238	第254回	住居跡出土金銅製品実測図2	290			
第198回	第85号住居跡実測図	239	第255回	住居跡出土磁石実測図1	291			
第199回	第85号住居跡出土遺物実測図	240	第256回	住居跡出土磁石実測図2	292			
第200回	第86号住居跡実測図	241	第257回	住居跡出土瓦形影・実測図1	293			
第201回	第86号住居跡出土遺物実測図	242	第258回	住居跡出土瓦形影・実測図2	294			
第202回	第87号住居跡実測図	243	第259回	住居跡出土瓦形影・実測図3	295			
第203回	第87号住居跡出土遺物実測図	243	第260回	住居跡出土瓦形影・実測図4	296			
第204回	第88号住居跡実測図	244	第261回	小竈跡実測図	301			
第205回	第88号住居跡出土遺物実測図	245	第262回	竈口実測図	302			
第206回	第89号住居跡実測図	246	第263回	竈扉実測図	303			
第207回	第89号住居跡出土遺物実測図	247	第264回	土埴実測図	304			
第208回	第91・93号住居跡実測図	248	第265回	火葬跡実測図	305			
第209回	第91号住居跡出土遺物実測図	249	第266回	火葬跡出土遺物実測図	305			
第210回	第92号住居跡実測図	250	第267回	井戸跡実測図1	308			
第211回	第92号住居跡出土遺物実測図1	251	第268回	井戸跡実測図2	310			
第212回	第92号住居跡出土遺物実測図2	252	第269回	井戸跡実測図3	313			
第213回	第94号住居跡実測図	253	第270回	井戸跡実測図4	317			
第214回	第94号住居跡出土遺物実測図	253	第271回	井戸跡実測図5	320			
第215回	第98号住居跡実測図	255	第272回	井戸跡出土遺物実測図	322			
第216回	第98号住居跡出土遺物実測図	256	第273回	井戸跡出土木製品実測図1	323			
第217回	第99号住居跡実測図	257	第274回	井戸跡出土木製品実測図2	324			
第218回	第99号住居跡出土遺物実測図	258	第275回	井戸跡出土木製品実測図3	325			
第219回	第103号住居跡実測図	259	第276回	溝跡全体図	326			
第220回	第103号住居跡出土遺物実測図	260	第277回	溝跡断面実測図1	327			
第221回	第110号住居跡実測図	261	第278回	溝跡断面実測図2	328			
第222回	第110号住居跡出土遺物実測図	261	第279回	溝跡断面実測図3	329			
第223回	第111・112号住居跡実測図	262	第280回	溝跡出土遺物実測図1	330			
第224回	第111・112号住居跡出土遺物実測図	263	第281回	溝跡出土遺物実測図2	331			
			第282回	土坑実測図11	334			
			第283回	土坑実測図12	335			
			第284回	土坑実測図13	336			
			第285回	土坑実測図14	337			
			第286回	土坑実測図15	338			
			第287回	土坑実測図16	339			

表 目 次

第 1 表	周辺道路一覧表	11	第 44 表	第 38 号住居跡出土遺物観察表	147	第 81 表	第 84 号住居跡出土遺物観察表	244
第 2 表	調査古墳一覧表	16	第 45 表	第 39 号住居跡出土遺物観察表	150	第 82 表	第 85 号住居跡出土遺物観察表	240
第 3 表	第六住居跡一覧表	17	第 46 表	第 40 号住居跡出土遺物観察表	152	第 83 表	第 86 号住居跡出土遺物観察表	242
第 4 表	井戸跡一覧表	19	第 47 表	第 41・43・101 号住居跡 出土遺物観察表	155	第 84 表	第 87 号住居跡出土遺物観察表	243
第 5 表	溝跡一覧表	20	第 48 表	第 42 号住居跡出土遺物観察表	159	第 85 表	第 88 号住居跡出土遺物観察表	245
第 6 表	土坑一覧表	20	第 49 表	第 44 号住居跡出土遺物観察表	161	第 86 表	第 89 号住居跡出土遺物観察表	247
第 7 表	石置観察表	28	第 50 表	第 45 号住居跡出土遺物観察表	164	第 87 表	第 91 号住居跡出土遺物観察表	249
第 8 表	古墳出土土遺物観察表	55	第 51 表	第 46 号住居跡出土遺物観察表	166	第 88 表	第 92 号住居跡出土遺物観察表	252
第 9 表	古墳出土金属遺物観察表	56	第 52 表	第 47 号住居跡出土遺物観察表	168	第 89 表	第 94 号住居跡出土遺物観察表	254
第 10 表	城邊村第 71 号墳出土土遺物観察表	63	第 53 表	第 48 号住居跡出土遺物観察表	171	第 90 表	第 98 号住居跡出土遺物観察表	256
第 11 表	城邊村第 71 号墳出土 金属遺物観察表	63	第 54 表	第 49 号住居跡出土遺物観察表	173	第 91 表	第 99 号住居跡出土遺物観察表	258
第 12 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表	65	第 55 表	第 50 号住居跡出土遺物観察表	175	第 92 表	第 103 号住居跡出土遺物観察表	260
第 13 表	第 2 号住居跡出土遺物観察表	67	第 56 表	第 51 号住居跡出土遺物観察表	176	第 93 表	第 110 号住居跡出土遺物観察表	261
第 14 表	第 3 号住居跡出土遺物観察表	68	第 57 表	第 52 号住居跡出土遺物観察表	179	第 94 表	第 111・112 号住居跡 出土遺物観察表	263
第 15 表	第 4 号住居跡出土遺物観察表	71	第 58 表	第 54 号住居跡出土遺物観察表	181	第 95 表	第 113 号住居跡出土遺物観察表	265
第 16 表	第 5・119 号住居跡 出土遺物観察表	73	第 59 表	第 55 号住居跡出土遺物観察表	183	第 96 表	第 114 号住居跡出土遺物観察表	268
第 17 表	第 6 号住居跡出土遺物観察表	76	第 60 表	第 56 号住居跡出土遺物観察表	186	第 97 表	第 115 号住居跡出土遺物観察表	270
第 18 表	第 7 号住居跡出土遺物観察表	78	第 61 表	第 57 号住居跡出土遺物観察表	188	第 98 表	第 116 号住居跡出土遺物観察表	273
第 19 表	第 8 号住居跡出土遺物観察表	85	第 62 表	第 58・59・96 号住居跡 出土遺物観察表	191	第 99 表	第 117 号住居跡出土遺物観察表	274
第 20 表	第 9 号住居跡出土遺物観察表	88	第 63 表	第 60・63 号住居跡 出土遺物観察表	195	第 100 表	第 120 号住居跡出土遺物観察表	276
第 21 表	第 10 号住居跡出土遺物観察表	88	第 64 表	第 61・62 号住居跡 出土遺物観察表	197	第 101 表	第 121 号住居跡出土遺物観察表	278
第 22 表	第 12 号住居跡出土遺物観察表	92	第 65 表	第 64 号住居跡出土遺物観察表	200	第 102 表	第 122 号住居跡出土遺物観察表	279
第 23 表	第 13 号住居跡出土遺物観察表	94	第 66 表	第 65・97 号住居跡 出土遺物観察表	203	第 103 表	第 124 号住居跡出土遺物観察表	280
第 24 表	第 14 号住居跡出土遺物観察表	96	第 67 表	第 66 号住居跡出土遺物観察表	205	第 104 表	第 125 号住居跡出土遺物観察表	284
第 25 表	第 15 号住居跡出土遺物観察表	99	第 68 表	第 67 号住居跡出土遺物観察表	207	第 105 表	鉢蓋・土師・ 石製模造品観察表	287
第 26 表	第 16 号住居跡出土遺物観察表	101	第 69 表	第 68 号住居跡出土遺物観察表	208	第 106 表	住居跡出土金属製品一覧表	287
第 27 表	第 19 号住居跡出土遺物観察表	104	第 70 表	第 69 号住居跡出土遺物観察表	210	第 107 表	住居跡出土磁石一覧表	292
第 28 表	第 20 号住居跡出土遺物観察表	106	第 71 表	第 70 号住居跡出土遺物観察表	212	第 108 表	住居跡出土瓦観察表	297
第 29 表	第 21 号住居跡出土遺物観察表	108	第 72 表	第 71 号住居跡出土遺物観察表	214	第 109 表	羽口計測値一覧表	303
第 30 表	第 22 号住居跡出土遺物観察表	110	第 73 表	第 73 号住居跡出土遺物観察表	217	第 110 表	鉾津計測値一覧表	303
第 31 表	第 23 号住居跡出土遺物観察表	113	第 74 表	第 74・107・108・109 号住居跡 出土遺物観察表	221	第 111 表	井戸跡出土遺物観察表	322
第 32 表	第 25 号住居跡出土遺物観察表	117	第 75 表	第 75 号住居跡出土遺物観察表	222	第 112 表	井戸跡出土木製品観察表	325
第 33 表	第 26 号住居跡出土遺物観察表	120	第 76 表	第 76・77 号住居跡 出土遺物観察表	226	第 113 表	溝跡出土遺物観察表	331
第 34 表	第 28 号住居跡出土遺物観察表	122	第 77 表	第 78・95 号住居跡 出土遺物観察表	229	第 114 表	グリップ出土土遺物観察表	351
第 35 表	第 29 号住居跡出土遺物観察表	122	第 78 表	第 80 号住居跡出土遺物観察表	231	第 115 表	グリップ出土磁石一覧表	353
第 36 表	第 30 号住居跡出土遺物観察表	126	第 79 表	第 81 号住居跡出土遺物観察表	233	第 116 表	グリップ出土瓦観察表	356
第 37 表	第 31 号住居跡出土遺物観察表	127	第 80 表	第 82 号住居跡出土遺物観察表	235	第 117 表	陶磁器観察表(Ⅰ)	370
第 38 表	第 32 号住居跡出土遺物観察表	131				第 118 表	陶磁器観察表(Ⅱ)	373
第 39 表	第 33 号住居跡出土遺物観察表	133				第 119 表	陶磁器観察表(Ⅲ)	377
第 40 表	第 34 号住居跡出土遺物観察表	136				第 120 表	横穴式室塚一覧表	378
第 41 表	第 35 号住居跡出土遺物観察表	137				第 121 表	聖穴系内部土師古墳一覧表	379
第 42 表	第 36 号住居跡出土遺物観察表	141				第 122 表	墨書土師一覧表	383
第 43 表	第 37 号住居跡出土遺物観察表	141						

図 版 目 次

図版 1	遺跡地透査 (矢島が調査地点) 遺跡地より西側を望む	第2号住居跡全景 (西側より) 第2号住居跡遺物出土状況	第33号住居跡掘り方
図版 2	I区全景 (東側より) II区全景 (西側より)	第3号住居跡全景 (西側より) 第3号住居跡電	図版 37
図版 3	III区全景 (東側より) IV区全景 (西側より)	第4号住居跡全景 (西側より) 第4号住居跡遺物出土状況	第34号住居跡全景 (西側より) 第34号住居跡電
図版 4	V・VI区全景 (西側より) VII区全景 (北側より)	図版 29	第35号住居跡全景 (西側より) 第35号住居跡電
図版 5	遺物出土状況 遺物出土状況近接 横先形尖頭部	第119号住居跡電掘り方 第6号住居跡遺物出土状況	第36・37号住居跡全景 (西側より) 第38号住居跡全景 (西側より) 第38号住居跡電
図版 6	隠し穴全景 左上: 埋設土葬出土状況 右上: 埋設土葬全景 右下: 埋設土葬	第6号住居跡遺物出土状況 第7号住居跡遺物出土状況 第7号住居跡電遺物出土状況	第39号住居跡全景 (西側より) 第39号住居跡電
図版 7	ドリッド出土土器文土器	図版 30	第40・103号住居跡遺物出土状況 第40・103号住居跡電
図版 8	ドリッド石籬①	第8号住居跡電掘り方 第8号住居跡電	第103号住居跡電掘り方
図版 9	ドリッド石籬②	図版 31	図版 39
図版 10	ドリッド石籬③	第9号住居跡遺物出土状況 第9号住居跡電	第41・43・101号住居跡全景 第101号住居跡全景 (西側より)
図版 11	ドリッド石籬④	第10号住居跡全景 (西側より) 第10号住居跡電掘り方	第101号住居跡遺物出土状況 第43号住居跡遺物出土状況
図版 12	1号墳全景 (西側より) 石室検出状況 掘り方全景	第12号住居跡遺物出土状況 第13号住居跡全景 (西側より) 第13号住居跡電掘り方	図版 40
図版 13	石室全景 (南西より) 石室側壁 石室床面掘り方 石室柱石・掘り方	図版 32	第42・102号住居跡遺物出土状況 第42号住居跡電遺物出土状況 第44号住居跡遺物出土状況 第44号住居跡電
図版 14	2号墳全景 (南側より) 周溝内遺物出土状況 石室検出状況 石室天井石積置状況 石室天井石残存状況	第14号住居跡遺物出土状況 第120号住居跡電遺物出土状況 第15号住居跡遺物出土状況 第15号住居跡遺物出土状況 第16号住居跡遺物出土状況 第18号住居跡全景 (東側より) 第18号住居跡電	第45号住居跡遺物出土状況 第46号住居跡遺物出土状況 第47号住居跡遺物出土状況 第47号住居跡電
図版 15	石室全景 石室掘り方全景	図版 33	第48・49・104号住居跡全景 第48号住居跡電・貯蔵穴 第49号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
図版 16	3号墳全景 (東側より) 石室検出状況	第19号住居跡遺物出土状況 第19号住居跡遺物出土状況 第20号住居跡遺物出土状況	図版 42
図版 17	石室全景 石室掘り方全景	第20号住居跡遺物出土状況 第21号住居跡遺物出土状況 第21号住居跡遺物出土状況 第22号住居跡遺物出土状況	第50号住居跡全景 (西側より) 第50号住居跡電
図版 18	4号墳全景 (南側より) 石室検出状況	図版 34	第51号住居跡全景 (西側より) 第51号住居跡電
図版 19	石室全景 石室掘り方全景	第23号住居跡遺物出土状況 第23号住居跡電掘り方	第52号住居跡全景 (西側より) 第52号住居跡電
図版 20	5号墳透査 (北側より) 5号墳全景	第24号住居跡遺物出土状況 第25号住居跡遺物出土状況	第53号住居跡掘り方
図版 21	6号墳全景 (北側より) 石室全景	第25号住居跡遺物出土状況 第26号住居跡遺物出土状況 第26号住居跡電	図版 43
図版 22	7号墳全景 (南側より) 6・7号墳透査	図版 35	第55号住居跡全景 (西側より) 第55号住居跡遺物出土状況 第56・57号住居跡全景 (北側より) 第56号住居跡遺物出土状況 第56号住居跡電
図版 23	8号墳全景 (南側より) 石室残存状況	第28号住居跡遺物出土状況① 第28号住居跡遺物出土状況② 第29号住居跡遺物出土状況	第58・59・96号住居跡全景 第58・59・96号住居跡遺物出土状況
図版 24	9号墳全景 (北側より) 10号墳全景	図版 36	第58号住居跡遺物出土状況 第58号住居跡電掘り方 第96号住居跡電
図版 25	2・7・8・9号墳出土遺物 稲瀧村第71号墳出土遺物	第30号住居跡遺物出土状況 第31号住居跡遺物出土状況 第31号住居跡電掘り方	図版 44
図版 26	古墳出土金属製品	第32号住居跡遺物出土状況 第32号住居跡電掘り方	第60・63号住居跡全景 第60号住居跡遺物出土状況 第63号住居跡遺物出土状況
図版 27	稲瀧村第71号墳出土金属製品	第33号住居跡全景 (西側より) 第32号住居跡遺物出土状況 第33号住居跡電掘り方	第60号住居跡電・貯蔵穴 第60・63号住居跡掘り方
図版 28	第1号住居跡全景 (西側より) 第1号住居跡電	第32号住居跡全景 (西側より) 第32号住居跡遺物出土状況 第33号住居跡電掘り方	図版 46
			第62号住居跡遺物出土状況 第62号住居跡電・貯蔵穴 第64号住居跡遺物出土状況 第64号住居跡電・貯蔵穴

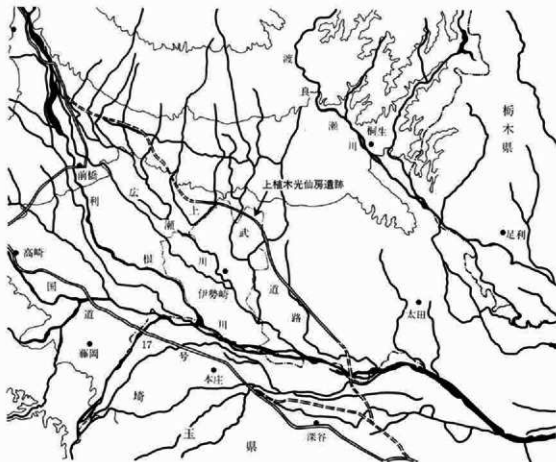
	第65・97号住居跡掘り方	第114号住居跡全景 (西側より)	図版 93	1号井戸全景
	第65・97号住居跡セクション	第114号住居跡電		2号井戸全景
	第66号住居跡遺物出土状況	第115号住居跡遺物出土状況		3号井戸全景
	第66号住居跡電・貯蔵穴掘り方	第115号住居跡遺物出土状況		4号井戸全景
図版 47	第67号住居跡全景 (西側より)	第116号住居跡遺物出土状況		5号井戸全景
	第67号住居跡電	第116号住居跡遺物出土状況		6号井戸全景
	第68号住居跡全景 (西側より)	図版 57	第117号住居跡全景 (西側より)	7号井戸全景
	第68号住居跡遺物出土状況		第121号住居跡遺物出土状況	9号井戸全景
	第69号住居跡全景 (西側より)		第121号住居跡電	図版 94
	第69号住居跡遺物出土状況		第124号住居跡遺物出土状況	8号井戸基部
	第71号住居跡全景 (西側より)		第124号住居跡掘り方	10・20号井戸全景
	第71号住居跡電		第125号住居跡遺物出土状況	11号井戸全景
図版 48	第72号住居跡全景 (西側より)		第125号住居跡遺物出土状況	12号井戸全景
	第73号住居跡全景 (西側より)	図版 58	1～5・119号住出土遺物	13号井戸全景
	第73号住居跡電	図版 59	6～8号住出土遺物	14号井戸全景
	第73号住居跡遺物出土状況	図版 60	8・9号住出土遺物	14号井戸上部
	第73号住居跡掘り方	図版 61	12～16・19号住出土遺物	図版 95
図版 49	第75・104・105号住居跡全景	図版 62	19～22号住出土遺物	15号井戸基部
	第76号住居跡遺物出土状況	図版 63	22・23・25号住出土遺物	16号井戸全景
	第76号住居跡全景 (西側より)	図版 64	25・26・28～30号住出土遺物	17号井戸全景
	第76号住居跡遺物出土状況	図版 65	30～32号住出土遺物	18号井戸全景
	第77号住居跡電・貯蔵穴	図版 66	32～35号住出土遺物	19号井戸全景
図版 50	第78・77・100号住居跡全景	図版 67	36～39号住出土遺物	21号井戸全景
	第77号住居跡遺物出土状況	図版 68	39・40・43・101号住出土遺物	22号井戸全景
	第100号住居跡遺物出土状況	図版 69	42・44・47号住出土遺物	図版 96
	第78・95号住居跡掘り方	図版 70	48～51号住出土遺物	23号井戸全景
	第78号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版 71	51・52・54～56号住出土遺物	24号井戸全景
図版 51	第80号住居跡遺物出土状況 (西側より)	図版 72	57・58・60～66号住出土遺物	25号井戸全景
	第80号住居跡電・貯蔵穴	図版 73	66～71・73・76・77号住出土遺物	26号井戸全景
	第81号住居跡全景 (西側より)	図版 74	78・80～82・84・85・95号住出土遺物	28号井戸全景
	第81号住居跡遺物出土状況	図版 75	85～89・91・92・94号住出土遺物	29号井戸全景
	第82号住居跡遺物出土状況 (西側より)	図版 76	98・99・103・107～110・113号住出土遺物	図版 97
	第83号住居跡セクション			21号溝遺物出土状況
	第84号住居跡全景 (西側より)	図版 77	114～116号住出土遺物	26号溝
	第84号住居跡遺物出土状況	図版 78	120・121・124・125号住出土遺物	26号溝遺物出土状況
図版 52	第85号住居跡遺物出土状況	図版 79	紡績糸・石製模造品	23号溝地層断面
	第85号住居跡電	図版 80	住居跡出土金属製品①	29号溝地層断面
	第86号住居跡全景 (北側より)	図版 81	住居跡出土金属製品②	22号溝遺物出土状況
	第86号住居跡遺物出土状況	図版 82	住居跡出土磁石①	36号溝全景
	第87号住居跡全景	図版 83	住居跡出土磁石②	図版 98
	第87号住居跡掘り方		7・8・15・125号住電用材	溝・井戸跡出土遺物
	第88号住居跡遺物出土状況	図版 84	住居跡出土瓦	図版 99
	第88号住居跡電	図版 85	住居跡・グッド出土瓦	井戸跡出土木製品①
図版 53	第89号住居跡全景 (南側より)	図版 86	独立柱建物跡遺棄 (南側より)	図版100
	第89号住居跡遺物出土状況		第一次調査・VES近景 (南側より)	井戸跡出土木製品②
	第90号住居跡	図版 87	1号独立柱建物跡全景 (東側より)	図版101
	第91・93号住居跡全景 (西側より)		2号独立柱建物跡全景 (東側より)	50号土坑地層断面
	第91号住居跡遺物出土状況	図版 88	1号小竈跡遺棄	51号土坑全景
図版 54	第92号住居跡遺物出土状況		遺物出土状況	52号土坑地層断面
	第92号住居跡遺物出土状況		1号小竈跡近接	53号土坑全景
	第94号住居跡全景 (西側より)		2号小竈跡遺物出土状況	57号土坑全景
	第94号住居跡遺物出土状況			63号土坑全景
	第98号住居跡全景 (南側より)	図版 89	羽口	65号土坑遺物
	第98号住居跡遺物出土状況 (南側より)	図版 90	藍押・石白	図版102
	第99号住居跡遺物出土状況 (西側より)	図版 91	1号墓全景	64号土坑全景
	第99号住居跡掘り方 (北側より)		遺物出土状況	65号土坑全景
図版 55	第107・109号住居跡全景		遺物出土状況近接	95号土坑全景
	第110号住居跡遺物出土状況	図版 92	1号墓出土遺物 (隅元遺室)	101号土坑全景
	第110号住居跡電		63・65号土坑出土遺物	区土坑器全景
	第111・112号住居跡全景	図版 93	火葬跡遺物出土状況	図版103
	第111号住居跡全景		火葬跡全景	グッド出土磁石
図版 56	第113号住居跡遺物出土状況		地層断面	図版104
	第113号住居跡遺物出土状況		調査風景	陶磁器①
				陶磁器②
				陶磁器③
				遺棄土器①
				遺棄土器②
				遺棄土器③
				遺棄土器④

第I章 発掘調査の経過と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過と調査の経過

(1) 発掘調査に至る経過

本調査は、建設省が行う一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。昭和46年に発表された上武道路建設計画は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川を横断して、新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号に接続する、総延長35.1kmに及ぶものであった。開通の晩には高崎・前橋両市街地の交通渋滞を緩和するばかりではなく、埼玉県と群馬県を結ぶ幹線道路の建設による経済的波及効果の大きさに期待が寄せられた。しかし、建設が計画された地域は、関東平野の北西部・赤城山南麓の台地縁辺・赤城山南西山麓に当たり、群馬県内でも有数の遺跡分布地帯であったため、埋蔵文化財の取り扱いについて、建設省と群馬県教育委員会との協議が重ねられ、昭和46年11月に正式路線の発表が為された。昭和47年度には、開通が急がれている尾島町から前橋市二之宮町の国道50号間の遺跡について協議が行われ、昭和48年4月1日付けで「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結された。これに基づき、工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなり、今日までに以下の遺跡の発掘調査が為された。



第1図 遺跡位置図

第1章 発掘調査の経過と遺跡の概要

- 昭和48年度 県園芸試験場第二遺跡（書上上原之城遺跡の一部）（伊勢崎市三和町）
下江田前遺跡（新田郡尾島町世良田）
- 昭和49年度 歌舞伎A遺跡（新田郡尾島町世良田）
- 昭和50年度 歌舞伎A遺跡・補充調査 報告済み。【歌舞伎遺跡】^{※1} 1982年
歌舞伎B遺跡（新田郡尾島町世良田） 報告済み。【歌舞伎遺跡】 1982年
西今井遺跡（佐波郡境町大字西今井、新田郡新田町大字下田中）
- 昭和51年度 三ッ木遺跡（佐波郡境町大字三ッ木） 報告済み。【三ッ木遺跡】 1985年
西今井遺跡 報告済み。【西今井遺跡】 1985年
小角田前遺跡（新田町尾島町世良田字小角田前）
- 昭和52年度 小角田前遺跡 報告済み。【小角田前遺跡】 1986年
下瀧名遺跡（下瀧名塚越遺跡）（佐波郡境町下瀧名）
- 昭和53年度 下瀧名遺跡・継続調査
上瀧名遺跡（上瀧名真神谷遺跡）（佐波郡境町上瀧名）
- 昭和54年度 上瀧名II遺跡（佐波郡境町上瀧名）
- 昭和55年度 今宮遺跡（伊勢崎市波志江町）
- 昭和56年度 三室A遺跡（佐波郡東村東小保方字三室）
小保方遺跡（佐波郡東村東小保方）
- 昭和57年度 三室B遺跡（三室坊主林遺跡）（佐波郡東村東小保方字三室）
八寸A遺跡（八寸大道上遺跡）（佐波郡東村東小方）
八寸B遺跡・試掘調査（伊勢崎市豊城町）
書上遺跡・試掘調査（伊勢崎市三和町）
- 昭和58年度 八寸B遺跡 報告済み。【書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木老町田遺跡】 1988年
書上遺跡・部分調査（古墳2基 報告済み。）同 上
鯉沼東II遺跡（上植木老町田遺跡）（伊勢崎市三和町） 報告済み。同 上
光仙房遺跡・部分調査（伊勢崎市本間町）
鯉沼東II遺跡～光仙房遺跡・試掘調査
- 昭和59年度 光仙房遺跡・本調査
鯉沼東II遺跡・補充調査
書上遺跡・本調査
五日牛清水田遺跡（佐波郡赤堀町五日牛）
五日牛南組遺跡（佐波郡赤堀町五日牛）
堀下八幡遺跡（佐波郡赤堀町堀下）
- 昭和60年度 阿久津宮内遺跡（新田郡尾島町阿久津）
安養寺森西遺跡（新田郡尾島町大字安養寺字森西）
五日牛清水田遺跡・継続調査
五日牛南組遺跡・継続調査
波志江中峰岸遺跡（伊勢崎市波志江町）
波志江六反田遺跡（伊勢崎市波志江町）

波志江天神山遺跡（伊勢崎市波志江町）
 波志江今宮遺跡（伊勢崎市波志江町）
 飯土井二本松遺跡（前橋市飯土井町）
 飯土井中央遺跡（前橋市飯土井町）
 飯土井上組遺跡（前橋市飯土井町）
 二之宮宮東B遺跡（前橋市二之宮町）
 利根川～国道354号間試掘調査（尾島町）
 市道二之宮1号～市道二之宮30号間試掘調査（前橋市）

- 昭和61年度 飯土井中央遺跡・継続調査
 飯土井上組遺跡・継続調査
 二之宮宮東遺跡・継続調査
 二之宮宮下西遺跡（前橋市二之宮町字宮下）
 二之宮千足遺跡（前橋市二之宮町字千足他）
 二之宮洗橋遺跡（前橋市二之宮町字洗橋）
 二之宮谷地遺跡（前橋市二之宮町字谷地）
 今井道上・道下遺跡（前橋市今井町字道上・道下）
- 昭和62年度 阿久津宮内遺跡・補充調査
 大館馬場遺跡（新田郡尾島町大字大館）
 安養寺森西遺跡・補充調査
 二之宮宮下東遺跡（前橋市二之宮町字宮下東）
 二之宮千足遺跡・継続調査
 二之宮洗橋遺跡・継続調査
 二之宮谷地遺跡・継続調査
 今井道上・道下遺跡・継続調査

なお、昭和59年度からは、調査体制を三班に増強し、開通の急がれている尾島町の国道354号線から前橋市二之宮町の国道50号線までの早期供用開始を実現させるよう努力した。また現在、国道50号線以北については、都市計画決定が図られつつある。

(2) 調査の方法と経過

発掘調査は、都合四次に亘って行われたため、調査時の状況及び諸制約から、必ずしも統一的な方法で行い得なかった。特に、試掘調査及び第一・二次調査は昭和58年度事業であり、調査担当者三名という体制の下に、JK16・17（書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡）、JK18（上植木町町田遺跡）の調査と同時に並行で行ったため多忙を極めた。以下は、各調査毎の概要である。

試掘調査 路線内の民家の移転が完了するのを待って、分布調査が十分に出来なかった範囲に、試掘トレンチを設けて、遺跡の内容・範囲を確定するために行った。調査の主担当、原 雅信。

第一次調査 粕川橋梁（赤城見大橋）の基礎工事に対応するために、昭和58年5月6日から7月9日の期間で、1,000㎡の全面発掘を行い、古墳1基（円墳、半地下式横穴式石室）・竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡2棟・溝跡1条を検出した。調査の主担当、大木紳一郎。

第二次調査 粕川橋梁の基礎工事中に古墳の周堀と考えられる遺構が認められたために緊急に調査した。掘削部分を除いた800㎡を対象にして、昭和58年9月3日から10月10日の調査で、検出した遺構は、陥し穴1基・古墳4基（円墳、箱式棺状竪穴式石室）である。調査の主担当、飯塚 誠。

第三次調査 試掘調査の成果に基づいて、重機により全面の表土を掘削し、調査体制を整えて行った本格的調査である。

調査期間 昭和59年4月1日～昭和59年10月31日

昭和59年6・7月の二箇月間は、調査担当者6名で調査を行った。

調査対象面積 22,000㎡。

調査区とグリッド 遺跡地内の生活道路によって7つに分割されていたので、便宜的に東側からⅠ～Ⅶ区に分けて調査を進めた。また、上武道路のセンター杭を基準に2m×2mのグリッドを設け、東西方向は100m毎に数字と共にアルファベットを付し、北東隅の座標をグリッドの呼称番号とした。遺構に伴わない遺物については、東西方向10m・南北方向6mのグリッドを単位として図面を作成し遺物を取り上げた。

記録 遺構毎の個別図面記録は、縮尺20分の1を基本として平板測量及び簡易遺り方測量で作成した。なお、細部については縮尺10分の1で実測した。竪穴住居跡の場合は、床面の状況及び掘り方面の状況を実測した。写真記録は、モノクロ（35mm・6×9判）と35mm判カラーライド写真撮影を行った。



第1節 調査に至る経過と調査の経過



第2図 調査区位置図

(3) 整理の経過

整理作業は、昭和62年8月から昭和63年11月までの16箇月を費やして行った。出土遺物の洗浄及び注記作業は、天候不順な時間を活用することによって、発掘調査遂行時に殆ど完了していたが、四次に亘る調査資料の全容把握と資料の点検・確認に思わぬ時間を要してしまった。

遺物整理に当たっては、調査現場で付けられたラベルと注記内容とを確認しながら、遺物の種別と数量とを遺物台帳に記載すると共に、床面からのレベル差を記入してから接合作業に着手した。接合作業に当たっては、遺物の注記内容を損なわないように注意すると共に、接合関係を記録し、実測図の作成を要する遺物については通し番号を付して、整理の遺物番号とした。復元作業は、実測及び写真撮影のために必要最小限の範囲で行った。実測に当たっては、写真撮影の済んだものから、原寸で実測した。なお、錆化の著しい金属製品については、砂塵のクリーニング作業後のソフトX写真撮影の成果品によって復元的に実測したものである。また、一部の石製遺物については簡易写真実測で素図を作成し、修正を加えて完成図とした。

完成した遺物実測図はコピー縮小し、遺構毎に作成した遺物カードに貼付して整理すると共に、外部委託によるトレース作業の成果品で印刷の版下図を作成した。

遺構の整理に当たっては、調査時の原図を検討し、コピー縮小してから編集し、外部委託によるトレース作業の成果品で印刷の版下図を作成したが、計測値等は調査時の記録及び原図上で計測したものをを用いた。



第2節 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置と地形

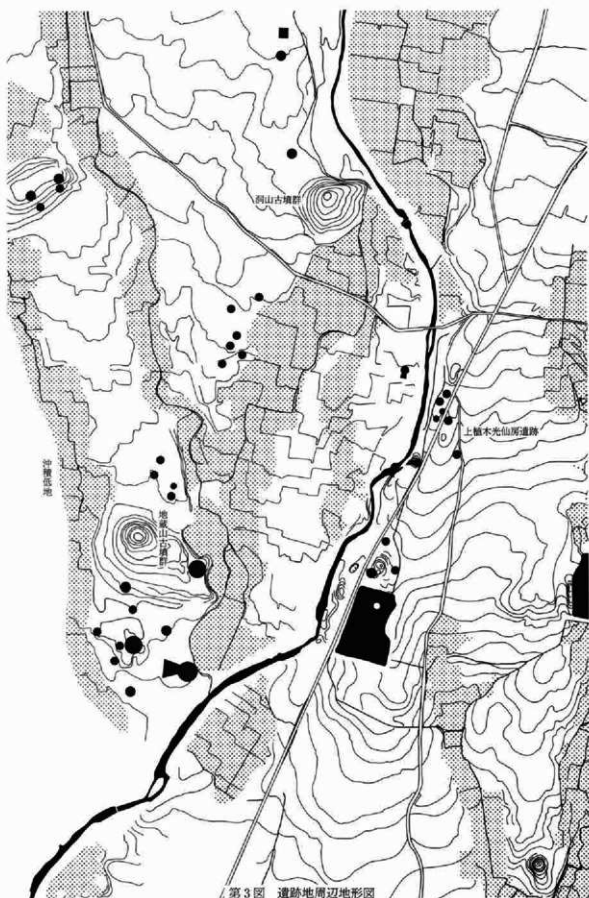
本遺跡は、群馬県の中央部からやや南東寄りの伊勢崎市北東部に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と表現された時には、ちょうど首の付け根部分に当たる。遺跡の北側約24kmには赤城火山が裾野を長く引いて見え、8km程南には利根川の清流が東南流している。東側には、広大な関東平野の沃野が開け、遙か西側には関東山地の峰々が見渡せる。

伊勢崎市は、昭和15年に、伊勢崎町・茂呂村・殖蓮村が合併して、市制施行して誕生した。昭和30年に、三郷村・宮郷村・名和村・豊受村を合併し、現在の市域となった。人口は11万人余りで、江戸時代以来耕の生産が盛んで、「伊勢崎銘仙」や「伊勢崎餅」の産地として有名であったが、近年は工業団地の造成により機械金属・輸送機器・食品工業を中心とした工業生産都市へと変貌を遂げている。また、かつての桑園も生鮮野菜や花木栽培を積極的に取り入れた経営に変わり、都市近郊型農村へと移行する中で次第に姿を消しつつある。市名の由来は、中世末期に由良成繁が伊勢宮を勧請したことちなみ、古くは「伊勢の前」と呼ばれたと言われる。

伊勢崎市の大半は平坦地であるが、北東部を粕川が南流し、中央部を菑川、南西部を利根川が東流する。また、中央部を北西から南東に流れる広瀬川を境に、東岸は洪積台地、西岸は沖積台地に大別される。本遺跡が所在する北東部は、足尾山地から流下する渡良瀬川によって形成された大間々扇状地の扇端部に当たり、洪積台地上に湧水池が点在し細長い浸食谷が形成され、各地状の水田と畑地帯となっている。標高は約86m 現在の水田面との比高差は約2m、3°程傾斜している。遺跡地の水捌けは良く、粕川の水を利用すると共に、溜池や大正用水等の灌漑施設の整備に伴って耕地の拡大が図られてきた。調査区の400m程南側にある「新沼」も元治元年(1864)に完成し、上植木地域を潤したものであり、沼の築堤工事によって2基の古墳が埋没したとされている。なお、遺跡の西を画する粕川の氾濫は激しく、右岸の沖積微高地に発達した集落を潰滅させたり、左岸の洪積台地上に営まれた古墳を損壊させたりしている。また、遺跡の東側には、「角弥清水」・「大井戸」の湧水によって形成された幅60m程の開析谷があり、水田として利用されている。なお、「大井戸」の湧水は、鎌倉時代に田部井氏によって造られたとされる「鯉沼」に蓄えられ、現在は養魚場として利用されている。

現存地形及び地形図等を見ると、今回発掘調査した地点は、東西方向約400m・南北方向約900mを測る洪積微高地の中央部からやや北側に寄った部分である。北接する赤堀町境には赤城神社が祭られており、嘉永7年(1854)の上植木村絵図には、「新沼」の位置に八幡宮と村神大明神が祭られていたことが記されている。平安時代の集落の広がりについては、調査区周辺の十分な遺物分布調査を行っていないが、ほぼ全面に遺跡が広がっているものと思われる。

遺跡地周辺の原地形は、約30万年前に形成された赤城火山斜面であり、付近には剃山・権現山等の様に水蒸気爆発に伴う泥流丘が幾つも見られるが、遺跡地の基盤層は約5万年前に形成された大間々扇状地古期面であり、赤城火山系の安山岩やチャート・粘板岩等の礫層からなっている。扇状地は、山田郡大間々町を扇尖として、伊勢崎市から太田市に及ぶ標高55～60mのラインを扇端とする。東西方向12km・南北方向16kmの範囲に互って広がっており、この上を関東ローム層が覆っている。また、表層には、浅間火山給源の軽石や火山灰の堆積が認められ、発掘調査の成果を対比する上で重要な役割を果たしている。



第3図 遺跡地周辺地形図

(2) 周辺の遺跡分布

本遺跡地周辺では、第1表に掲げた遺跡の発掘調査が実施されている。大部分が土地改良事業に伴う事前発掘調査であり、時間的制約から概要報告にとどまっているものが殆どである。

旧石器時代の遺物は、古くは昭和23年に、伊勢崎市豊城町で権現山遺跡(25)が相沢忠洋氏によって発見されている。書上本山遺跡(32)からも二箇所の石器ブロックからナイフ形石器等が出土しているが、ローム層を対象とした調査は最近のことであり、未だ不十分な段階にあると言える。伊勢崎市の波志江六反田遺跡(8)や、赤堀町の堀下八幡遺跡(11)・磯十二所遺跡・石山遺跡・下触牛伏遺跡等で発掘調査が行われている他、数点の表採資料も知られている。県内では、発掘調査の増加に伴って、後期旧石器時代の研究が進みつつある段階である。

縄文時代になると遺跡数も増加し、草創期の資料は未発見であるが、ローム台地のほぼ全域に遺跡の広がり認められる。土偶を出土した五目牛洞山遺跡(13)・北通遺跡(7)や、五目牛清水田・中田遺跡(15)・鯉沼東遺跡(34)・書上大吉寺遺跡(29)・曲沢遺跡等で集落跡が調査されている。

弥生時代の遺跡は、中期後半から形成されたものであり、「古刀根川」とされる広瀬川低地帯や大間々扇状地の伏流水の湧水池に隣接した洪積扇高地周辺に見られる。伊勢崎市内では、西太田遺跡・中組遺跡・間之山遺跡(19)等で6軒の住居跡が確認されているが、生産遺構は検出されていない。赤堀町では、今井南原遺跡(3)・五目牛南組遺跡(12)等で調査が行われている他、粕川・桂川沿いを中心に樽式土器の散布が認められる。弥生時代の終末頃から構築された方形周溝基は、伊勢崎市・上西根遺跡(21)、赤堀町・下触下寺遺跡(1)・今井南原遺跡・鹿島遺跡等で検出されている。

古墳時代になると、本遺跡地の西側部分は、6世紀の前半から7世紀の中頃にかけて永続的に古墳が構築され、本関町古墳群を形成した。粕川の対岸には、八幡林古墳群(10)・洞山古墳群(14)・地蔵山古墳群(17)・蟹沼東古墳群(18)等、多くの古墳が見られる。五目牛東遺跡群(16)の調査では、粕川や桂川の相次ぐ氾濫にも拘わらず陸続と生活していた人々の住居が検出されている。調査区域内では当時の住居跡は検出されなかったが、本遺跡の古墳は、鯉沼東遺跡・舞台遺跡(37)・上植木沓町田遺跡(35)等に生活した人々の奥津城として利用されていたものと思われる。また、粕川右岸の五目牛清水田・中田遺跡では、古墳時代から平安時代に及ぶ水田跡・畝跡が調査されている。本遺跡地東側に広がる沖積地にも、生活の糧を求めて拓かれた水田があったものと思われるが、現時点では明確な遺構は検出されていない。

遺跡地周辺では、「上古毛植原」に拠ると、伊勢崎市では514基、赤堀町では333基の古墳が確認されている。華蔵寺裏山古墳(20)や地蔵山古墳群の二子山古墳(前方後円墳・全長120m)等のように発掘調査を経ぬままに消滅してしまったものが殆どで、現在に残っているものは数少ないが、赤堀町今井の茶白山古墳は5世紀後半に築造されたもので、昭和4年に調査され、豪族の生活を写した優美な埴輪が出土したことで知られている。また、伊勢崎市安堀町の御富士山古墳は5世紀中頃に築造されたもので、西日本の大王陵に匹敵する長持形石棺が出土したことで有名である。調査区の周囲では、恵下古墳・丸塚山古墳(24)・上原古墳(38)・重田古墳(39)・蘆刈村71号墳(40)・関山古墳群等の他、権現山遺跡・高山遺跡(38)等で古墳の調査がなされている。なお、原之城遺跡(28)は、幅数十mの堀で囲まれた東西方向110m・南北方向170mの規模を持つ6世紀中頃の豪族居館で、現在も調査が進められている。更に、原之城遺跡の居館と密接な関係に有ると考えられている八寸大道上遺跡(27)の整理作業も進められているので、今後の成果が待たれる。

調査区の1km程南側では、白鳳時代に上植木亮寺(22)が創建され、本遺跡地周辺にも仏教文化が波及したことが窺われるが、調査区内からはこの時期の遺構は検出されていないので、荒地として放置されてい



たものと思われる。なお、推定・東山駅跡(B)や佐位駅家(C)に近接していることから、牧草を供給する土地だったのかも知れないが、詳細は不明である。調査地は8世紀の末頃になって、宅地として活用されるようになり、平安時代を通じて集落が営まれた。

遺跡地周辺は古代律令制下にあつては、『和名類聚抄』に掲げば「佐位郡」に属し、8つの郷が置かれていた。郡衙跡の可能性を残す境町の十三宝塚遺跡とは、約5km程の距離に有り、獨立柱建物跡の規則的な配列が認められた書上上原之城遺跡(30)・今井南原遺跡とは指呼の間に有る。残された文献資料は少ないが、天平感寶元年(749)銘の正倉院庸布に見られる、佐位郷戸主・檢前部君黒麻呂や郡司大領外・檢前部君賀味麻呂等に代表される檢前部君一族が力を奮っていたことが知られる。また、川上遺跡(4)でも奈良時代から平安時代に及ぶと考えられる瓦葺き建物跡が検出されており、北隣りの下軸向井遺跡(2)からは8世紀中頃に降の土器に「中臣」或は「中」と墨書されたものが出土しており、中臣氏に関係した人々が住んでいたことを物語っている。更に、高栗遺跡(6)では「川郡」と墨書された注目すべき資料が出土している。

古代末から中世にかけての様子を語る資料は断片的で、舞台遺跡・上植木老町田遺跡等で板葺が出土している他に、川上遺跡・書上本山遺跡・書上上原之城遺跡で瓦塔・石製蔵骨器が出土している。なお、調査区周辺からも2点の石製蔵骨器が出土している。人々の信仰生活を語る資料としては、伊勢崎市上植木本町新屋敷地内に建長3年(1251)の造立銘を持つ石仏が有り、洞山や石山には室町時代の摩崖仏が刻まれている。生産遺構としては、天仁元年(1108)の浅間山噴火によって埋没した水田跡が、波志江六反田遺跡・波志江中峰岸遺跡(9)・五日牛清水田・中田遺跡等で検出されており、噴火後の耕地復旧のために開削が計画されたと考えられる女堀遺構(A)の様、大規模なものは見つかっているが、人々の居住の様子を知らせてくれる資料は少ない。

中世には、調査区周辺は源名大夫兼行が開発したとされる「源名荘」に含まれた。源名荘は、「佐位荘」・「西荘」とも呼ばれ、田109町5段25段・畠18町2段10代に及ぶ大荘園で、大治5年(1130)に創建された京都仁和寺の法金剛院に寄進されているので、成立はこの頃と考えられている。また、源名氏が没落すると、中原季時が地頭職になったが、鎌倉時代後期には中原氏の手を離れて、北条氏・上杉氏等の支配へと移って行った。

関ヶ原の戦いが終結した後、慶長6年(1601)に勢多郡新川の稲垣長茂が佐位郡の内1万石を与えられ伊勢崎に入封したが、元和2年(1616)に稲垣氏が越後に転封になってからは、前橋藩領・伊勢崎藩領の違いはあるが、酒井氏の支配が明治になるまで続いた。近世の人々の生活を語る遺構は、五日牛南組遺跡で固定忠次に関する屋敷跡が調査されたが、他の遺跡では井戸や溝・墓等の断片的資料が検出されているのみで、今後の調査・研究に期待が寄せられる。

第1表 周辺遺跡一覧表

(C)住居、●墓、△水田、▲池、■土坑

No	時 期	遺 跡 名	編 文	発 生	古 墳	古 墳	中 近 世	遺 跡 の 概 要
1		下軸下寺遺跡 (佐波郡赤堀町下軸)			○	●	井戸 溝	桂川右岸の洪積低台地上に位置する古墳時代後期～奈良時代の遺跡。47軒の住居跡と6世紀前半に構築された5基の方形周溝墓が調査された。
2		下軸向井遺跡 (佐波郡赤堀町下軸)	■		○	○		毒島湧水池による開所谷右岸の微高地上に位置する古墳時代後期～奈良・平安時代の集落遺跡。縄文時代の土坑からは早期末の須文土器が、平安時代の住居跡・土坑からは、「中」・「中臣」・「升」等の墨書が出土。
3		今井南原遺跡 (佐波郡赤堀町今井)		○	○	○	溝	桂川右岸の洪積低台地上に位置する縄文時代前期～奈良・平安時代の集落遺跡。弥生時代後期から定住が開始された。本遺跡地の北側に広がる「南原古墳群」に属する方形周溝墓1基が調査され、小形の乳文鏡が出土している。4世紀後半の構築。墨書・鏡刻跡が出土。

第1章 発掘調査の経緯と遺跡の概要

4	川上遺跡 (佐波郡赤堀町下敷)		○	○	●	粕川と桂川に挟まれた洪積台地上に位置する。古墳時代前～後期の竪穴住居跡30軒と平安時代の竪穴住居跡18軒及び瓦葺き建物跡、石製炊爨器を伴う墓を調査。「安」・「長」・「生」・「寺」・「至」・「忍」・「信」の墨書出土。		
5	中田遺跡 (佐波郡赤堀町下敷)			○		西桂川右岸の洪積台地の東縁部に位置する。古墳時代中～後期の竪穴住居跡35軒を調査した。		
6	置栗遺跡 (佐波郡赤堀町下敷)	○ ■		○	■	洪	旧桂川左岸の洪積台地西縁部に位置する。縄文時代前期の住居跡2軒と土坑1基、平安時代の住居跡18軒・土坑等を調査。「中」・「川部」等の墨書土器が出土。	
7	北通遺跡 (佐波郡赤堀町五日午)	○ ■		○		井戸	縄文時代の遺構は前期透籠期に属するが、他に後期の土偶が出土している。他に時期不明の溝と道路伏遺構を検出している。「大門」の墨書土器が出土。	
8	波志江中峰岸遺跡 (伊勢崎市波志江町)			○	■	井戸 溝	桂川右岸の低台地上、波志江中峰岸遺跡の西側に位置する。平安時代の竪穴住居跡3軒と浅間山給部のBテフラによって埋没した水田と溝が検出された。調査区内に旧桂川の流れが発見され、西側の洪積台地からは先土器時代の遺物9点が出土した。	
9	波志江中峰岸遺跡 (伊勢崎市波志江町)				△		西桂川左岸の沖積台地上に位置する。浅間山給部のBテフラによって埋没した水田と溝が検出された。	
10	八幡林古墳群 (佐波郡赤堀町下敷)	○		●			旧桂川右岸に位置する高さ約7mの独立丘の南側斜面に営まれる。径10～15mの円墳。6世紀初頭～7世紀前半に構築された3基の横穴式石室を調査。墳丘下に縄文時代前期の住居跡4軒を検出。	
11	堀下八幡遺跡 (佐波郡赤堀町下敷)	○ ■		溝	○	井戸 溝	旧桂川右岸の洪積低台地上に位置する集落遺跡。透籠期の住居跡1軒・土坑2基、平安時代の住居跡9軒を調査。墨書土器が出土した。調査区西縁部では暗色部上部から約1,500点の先土器時代の副片が出土した。	
12	五日午南組遺跡 (佐波郡赤堀町五日午)	○ ■	■	●		層 井戸	粕川右岸の洪積低台地上に位置する縄文時代～近世の複合遺跡。縄文時代の遺構は、前期花壇下層期の住居跡4、陥し穴・集石土坑。弥生時代の土坑からは後期樽式土器壺が出土。古墳は6世紀前半の構築。	
13	五日午東組遺跡 (佐波郡赤堀町五日午)	○ ■					粕川右岸の洪積台地の東縁部に位置する。縄文時代後期の住居跡3軒(内1軒は竪穴住居跡)・土坑12基が調査され、土偶・石葺等が出土している。	
14	地蔵山古墳群 (佐波郡赤堀町五日午)			●				
15	五日午清水田中出遺跡 (佐波郡赤堀町五日午)	○ ■	●	○	○	○	井戸 溝	粕川右岸の位置する。洪積微高地上では縄文時代前期から奈良時代に及ぶ55軒と前方後円墳1基・祭祀跡等を、沖積地では古墳時代～平安時代の竪・水田跡を調査。
16	五日午東遺跡群 (佐波郡赤堀町五日午)	○		○	○	○	道路	A地点 粕川右岸の洪積微高地上に位置する古墳時代の集落遺跡。12軒の住居跡を検出した。 B地点 粕川及び旧桂川の氾濫によって形成された沖積微高地上に位置する古墳時代後期～平安時代の集落遺跡。22軒の住居跡が検出され「赤」・「太」・「日」の墨書土器が出土。他に道路を検出。 C地点 旧桂川右岸の洪積台地上に位置する。縄文時代前期の竪穴住居
17	地蔵山古墳群 (佐波郡赤堀町五日午)			●				
18	蟹沼東古墳群 (伊勢崎市波志江町)			●				西桂川左岸の低独立丘上に営まれた古墳群。地蔵山古墳群の西側500mに位置する。61基の古墳と墳丘を持たない箱式竪穴式石室を調査。6世紀～7世紀前半の構築。跡2軒と時期不明の掘立柱建物跡1棟を検出した。
19	間之山遺跡 (伊勢崎市波志江町)							西桂川が粕川に合流する手前の右岸に位置する。浅間C軽石で覆われた住居跡1軒を調査。間之山裾部からは縄文時代早期前期の土器が出土しており、東側には中期の遺物が散布している。

第2部 遺跡の位置と環境

20	華嚴寺満山古墳 (伊勢崎市華嚴寺町)					箱川右岸の独立丘上に位置する、主軸長約40mの前方後方墳。埋葬主体部は粘土層と推定されている。5世紀初頭の構築。		
21	上西供進跡 (伊勢崎市豊島町)					箱川左岸の洪積台地上に位置する。古墳時代前期～奈良時代に互る住居跡26軒・方形周溝墓5基・箱式棺状壱穴式石室を持つ古墳1基・井戸跡3基・溝跡15条等を調査した。		
22	上植木築寺 (伊勢崎市本間町・上植木本町)							
23	恵下遺跡 (伊勢崎市上植木本町)			○	○	井戸 ● 溝	大間ヶ原伏地西端の洪積微高地の東縁部に位置する古墳時代前期～奈良・平安時代の集落遺跡。古墳3基は径8.50～17mの円墳で、埋葬主体部は確認されていないが、6世紀の構築と考えられる。他に時期不明の壱1基が調査されている。遺書土器・磁刻絞輪車が出土。	
24	恵下古墳 丸塚山古墳 (伊勢崎市三和町)				○	●	大間ヶ原伏地西端の洪積微高地の東縁部に位置する。径約27mの円墳(竪立貝式前方後円墳の可能性も指摘されている)で、凝灰岩製の石椁式壱穴式石室を持つ。6世紀前半の構築。遺物は東京国立博物館蔵。 大井戸湧水池による開析谷に挟まれた洪積微高地の南端部に位置する。後円部墳頂に箱式棺状壱穴式石室3基を持つ、全長81mの竪立貝式前方後円墳。5世紀後半の構築。	
25	龍現山遺跡							
26	八寸坊主井遺跡 (佐渡郡東村東小保方)				○	井戸 溝	天ヶ池湧水池による開析谷左岸の洪積台地上に位置する。古墳時代前期からの住居跡3軒と、コの字或は方形に高る二重の溝を調査。縄文時代の遺構は検出されなかったが、豊富な遺物が出土している。	
27	八寸大遺上遺跡 (佐渡郡東村東小保方)	黒石		○	○	溝 土坑	天ヶ池湧水池による開析谷左岸の洪積台地上に位置する。縄文時代の集石遺構10基、古墳時代後期の住居跡48軒、奈良・平安時代の住居跡11軒・竪立建物跡9棟等を調査。子持器台や古墳時代の工房跡から出土した多量の雷石製品が目目される。また、「下」・「冨」等の遺書土器が出土している。	
28	原之城遺跡(摩瀬跡) (伊勢崎市豊城町)				○		天ヶ池湧水池による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。東西方向約105m・南北方向約165mの長方形区画の溜りに幅約20mの溝を持つ古墳時代中期の環濠居館跡。壱穴式住居跡・竪立建物跡・祭祀跡・内部区画の溝等が検出されている。	
29	書上土宮寺遺跡 (伊勢崎市豊城町)	○ 土坑		○	○	● 溝	天ヶ池湧水池による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。	
30	書上土原之城遺跡 (伊勢崎市豊城町)							
31	天野沼遺跡 (伊勢崎市三和町)				○		古墳時代末期の壱穴住居跡5軒を調査した。	
32	書上本山遺跡 (伊勢崎市三和町)				○	○	井戸 土坑 溝	大井戸湧水池による開析谷左岸の台地上に位置する。古墳時代の住居跡2軒・井戸跡1基、平安時代の竪立建物跡2棟・溝7米等を調査。旧石器時代のユニット2箇所からナイフ形石器、石製破骨器、瓦片等が出土している。
33	高山遺跡 (伊勢崎市三和町)					●	赤城山の噴火によって形成された火山砕屑物の舌状台地の先端部に位置する。径24mで壱穴式石室を持つもの、径20mで横穴式施無形石室を持つもの、径34mで横穴式石室が破壊されたものの3基が調査された。6世紀後半の構築。駒形埴輪が出土。	
34	龍沼東遺跡 (伊勢崎市三和町)	○		○	○	井戸 溝	大井戸湧水池の開析谷に挟まれた洪積微高地に位置する縄文時代中期～平安時代の集落遺跡。33軒の住居跡が検出されたが、構成は縄文時代5軒、古墳時代前期10軒・後期4軒、平安時代6軒、その他である。	

第1章 発掘調査の経過と遺跡の概要

35	上頼木巻町田遺跡 (伊勢崎市三和町)				○	○	●	大井戸湧水池による開析谷右岸の洪積微高地に位置する。古墳時代前期から平安時代に及ぶ住居跡12軒、地下式土塚1基・土塚墓13基・火葬跡1基、井戸跡12基、溝跡25条を調査。井戸跡からは呪符木簡が出土している。
36	天ヶ原遺跡 (伊勢崎市三和町)							
37	鶴台遺跡 (伊勢崎市三和町)				○	○	井戸	大間々扇状地西端の洪積微高地の南西部に位置する古墳時代前期～平安時代の集落遺跡。10軒の住居跡の内5軒が古墳時代後期に属する。井戸からは14世紀代の板碑が出土している。
38	上原古墳 (伊勢崎市本関町)							大井戸湧水池による開析谷右岸の洪積微高地東縁部に位置し、輝石安山岩割石を使用した横穴式両袖型石室を持つ径約12mの円墳。7世紀末の構築。
39	重田古墳 (伊勢崎市本関町)							粕川左岸の洪積台地上に位置し、「本関町古墳群」に属する。凝灰岩切石を用いた箱式椎状型穴式石室を持つ径12m程の円墳。6世紀前半の構築。
40	須藤7号墳 (伊勢崎市本関町)							粕川左岸の洪積台地上に位置し、「本関町古墳群」に属する。自然石乱石積みみの横穴式両袖型石室を持つ前方後円墳。6世紀前半の構築。
A	女 廻遺構							赤城山南麓から大間々扇状地の古期間に位置する。前橋市上泉町付近の旧利根川を起点に、幅15～30m・深さ3～4mの規模で佐波郡東村西園定の終点まで12.75Kmに亘って開削された用水遺構。古代末の構築。
B	東山駅跡							
C	佐位駅家							

第3節 遺跡の概要

本遺跡地は、前述の通り、大間々扇状地を基盤層とした洪積微高地の上に発達している。必ずしも遺跡の範囲を特定出来たとは言えないが、今回の調査で検出された遺構・遺物の概要は以下の通りである。

先土器時代

上部の調査が終わるのを待って、安定したローム層の堆積が認められたII～IV区についてグリッドを設定して確認調査を行った。その結果、IV区のソフトローム層中より、黒曜石製の柳葉形槍先型尖頭器1点が出土した。周辺遺跡では、書上本山遺跡(32)でナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺構は、I区第88号住居跡の下から検出された前期後半の埋め塞1基と、VII区の南西部で検出された時期不明の陥し穴1基だけである。遺物は、平安時代の整穴住居跡や井戸・溝の覆土中及びグリッドから、土器片および石器が出土している。所属時期別では、前期・黒浜式土器から後期・堀之内式土器が目立つが、晩期の土器片も若干認められる。分布傾向としては、調査地南東部の洪積微高地東縁部及び粕川左岸の縁辺部に濃密な部分が認められる。

本遺跡に最も近い集落遺跡は、東側1.5kmに所在する中期の鯉沼東遺跡④であり、南東4kmに位置する書上下吉祥寺遺跡(29)でも前期の住居跡4軒が検出されているが、粕川右岸の赤堀町に多くの遺跡が存在している。

明確な住居跡を検出し得なかったが、伊勢崎市北西部の縄文時代の様相を解明して行く上での貴重な一資料を得られたものと考えられる。

古墳時代

粕川左岸縁辺部のV～VII区において、後世の削平によって存在が明らかでなくなってしまう9基の古墳を検出した。その概要は第2表の通りであり、貴重な資料を得られたものと思信している。

群馬県では、昭和10年に県下古墳の一斉分布調査を実施し、「上毛古墳総覧」としてまとめられ、今日に至るまで群馬県に於ける古墳研究の基礎となっている。これによれば、本遺跡地周囲の上植木地内には79基の古墳が所在したとされており、今回の調査地内では以下の3基の古墳が記載されている。

古墳番 古墳名	形状	現状	發掘 有無	所 在 地 大字 字	番 地 番 地	面積 畝	規模 大サ 高サ	所有者	出土品	備 考
第65號	圓型	畑	有	上植木關山	1,268	畑 11:16	不詳			
第66號	同	同	同	同	1,268他1筆	同 22:20	同			
第67號	同	山林	同	同	1,268	山林 8:24	18尺:6尺			

しかし、昭和36・37年には、伊勢崎市本関町に所在する古墳(遺跡番号1798)の状況として「本関町から堤町にかけて古墳が点在し、前方後円墳は丸塚山と無名墳の2基であり、後者は主軸を東西にとり全長50m、高さ4mで横穴式石室が開口している。」と述べられている。円墳については直接的に述べられていないが、前記の3基の古墳は既に削平されていたものと思われる。〔群馬県の遺跡〕に無名墳とされているものは、現地状況から推して、「菴蓮村第71號」墳と考えられる。なお、本書にその概要を掲載した。

第1章 発掘調査の経過と遺跡の概要

調査された10基の古墳の構築時期については、おおまかに見て、次のように考えられる。

まず、箱式棺状竪穴式石室を持った3基の古墳について見ると、2号墳出土の鉄鏝は5世紀後半から見られるものであるが、周溝内より出土した土師器環は6世紀前半の土師の特徴を良く示している。二つの資料を勘案して、2号墳の構築時期は5世紀末～6世紀初頭と考えて大過無いものと思われる。3号墳の石室周囲の貼石には、2号墳のそれよりもやや退化傾向が認められることから、2号墳に後出するものと考えられる。更に、4号墳の石室は、一層の省力化傾向が窺われることから、3基の中では最も後に構築されたことが考えられる。即ち、2号墳→3号墳→4号墳の順に構築され、北から南へと墓域が拡大していったものと思われる。なお、10号墳については、石室の構築技法が若干異なり、2号墳よりも先行する可能性が大きい。

次に、埋葬主体部に横穴式石室を採用したと考えられる4基の古墳については、石室の構築面レベルの違い・周溝の形状・前庭の有無等から、6号墳→7号墳→8号墳→1号墳という変遷が考えられる。構築時期を示すような資料は得られなかったが、他遺跡の古墳の石室及び遺物の様相から推して、1号墳は7世紀になって構築されたと考えられる。

なお、『上毛古墳総覧』の記載から、1号墳は「菟蓮村第66號」墳、9号墳は「菟蓮村第67號」墳、10号墳は「菟蓮村第65號」墳に相当すると考えられる。

第2表 調査古墳一覧表

No.	周溝外径 (楕形)	埋葬主体部 周溝内径 規 模	主軸方位	備 考
1号墳 (円墳)	—	横穴式石室 全長295cm	N-41°-E	周溝は不明確であったが、地下の掘り方内に、河原石を使用して側壁を持った両袖型石室を構築する。径約2.9mの前庭を有する。玄室内より鉄釘20本が出土。
2号墳 (円墳)	11.6m	竪穴式石室 180×30cm	N-67°-E	環状周溝のほぼ中央部に、割れ石を使用した箱式棺状石室を地下の掘り方内に構築する。攪乱を受けていたが、石室内より鉄鏝9点、周溝中から土師環3点が出土。
3号墳 (円墳)	14.5m	竪穴式石室 200×32cm	N-85°-E	環状周溝のほぼ中央部に、河原石を使用した箱式棺状石室を地下の掘り方内に構築する。天井石の上面に鉄鏝1点を副葬。
4号墳 (円墳)	7.6m	竪穴式石室 186×42cm	N-81°-E	袂状周溝の南東部に、河原石を使用した箱式棺状石室を地下の掘り方内に構築する。未空堀であったが、出土遺物無し。
5号墳 (円墳)	約10.0m	竪穴式石室 —	東西方向	部分調査のため詳細は不明。
6号墳 (円墳)	22~24m	横穴式石室 全長240cm	—	環状周溝のほぼ中央部に、河原石を使用して両袖型石室を構築する。石室床面はローム層上面とほぼ同レベルである。出土遺物無し。
7号墳 (円墳)	20.0m	横穴式石室 —	—	船平が著しく、袂状周溝のみを検出した。埋葬主体部は横穴式石室が考えられる。
8号墳 (円墳)	15~20m	横穴式石室 —	—	袂状周溝及び前庭と石室の残骸を検出した。埋葬主体部は河原石を使用した横穴式石室と考えられる。前庭はローム層を浅く掘り溜めたものである。
9号墳 (円墳)	—	不詳 —	—	部分調査のため詳細は不明。
10号墳 (円墳)	—	竪穴式石室 250×70cm	N-11°-W	周溝は不明確であったが、河原石を使用した箱式棺状石室の残骸を検出した。石室床面はローム層上面とほぼ同レベルである。

平安時代

検出された遺構の大半が平安時代に属するものであり、竪穴住居跡123軒・掘立柱建物跡2棟・小銀治跡2

第3節 遺跡の概要

基・火葬跡1基・溝跡2条を調査した。8世紀末になって拓かれた集落であり、推定「佐井駅」(C)や上植木庵寺(22)と深い構わりを持った集落である。また、東側に所在する上植木老町田遺跡(35)・書上上原之城遺跡(30)や柏川対岸の下向井遺跡(2)・鷹巣遺跡(6)・五日牛東遺跡群(6等)との関連で、多量の墨書土器は、上野国の古代氏族を考える上で貴重な資料を提供した。なお、調査した竪穴住居跡の概要は第3表の通りである。

第3表 竪穴住居跡一覧表

住居 No	規模 東西×南北	形態 方位	軸方位	施設				土器				須恵器				灰輪陶器		金属 製品	石製品	備考		
				溝	柱	野	塼	環	壺	環	壺	蓋	変	蓋	皿	壺	その他				陶	磁
1	3.42×4.56	横長東	14-E	○	○	○	○											鎌	砥石			
2	3.20×3.78	横長東	12-E				○	○	○										紡錘車			
3	3.30×4.50	横長東	5-E	○	○	○	○															
4	5.88×3.45	縦長東	74-W				○	○											刀子			
5	2.20×3.20	東	21-E	○	○					○												
6	3.25×5.50	横長東	11-E	○	○	○	○	○	○	○									釘			
7	4.45×5.80	横長東	16-E	○	○	○	○	○	○	○									鉄線	紡錘車	瓦	
8							○	○											釧・釘	紡錘車	瓦	
9	3.80×5.30	横長東	21-E	○	○	○	○													砥石		
10	3.11×3.60	横長東	61-W	○		○				○											瓦	
11	欠																					
12	5.25×3.95	縦長東	87-W	○	○	○	○	○												紡錘車	瓦	
13	3.50×3.50	横長東	24.5-E				○	○	○	○	○									刀子	土器	
14	4.03×4.04	東	19.5-E	○			○	○	○	○	○									刀子	瓦	
15	3.90×2.30	東	17-E				○	○	○	○												
16	4.20×4.05	横長	27-E					○	○	○										瓶	砥石	
17	欠																					
18	4.16×	東	8-E																			
19	2.34×3.34	縦長東	19.5-E				○	○	○	○												
20	3.53×4.50	横長東								○										刀子		
21	3.28×4.00	横長東	18-E				○	○	○	○	○											
22	3.75×3.35	縦長東	8-E	○			○													紡錘車		
23																				鎌		
24																						
25	4.80×3.38	縦長東	65-W				○	○	○	○	○									刀子	瓦	
26	2.90×3.90	横長東	30.5-E	○			○	○														
27	欠																					
28	2.48×3.47		11.5-E				○			○	○										砥石	
29	2.50×2.72	横長東	12-E																			
30	3.20×4.20	横長東	20.5-E							○	○									鉢		
31	3.20×4.75	横長東	13-E																	釘	砥石	
32	2.95×2.60	横長東	61-W							○												
33	2.95×3.07	縦長東	14.5-E				○	○	○	○										鎌		
34	2.75×4.15	横長東	19-E				○	○	○	○												
35	1.10×2.75	東	12.5-E							○												
36	2.25×2.55	横長東	21-E				○													釧	紡錘車	瓦
37	6.00×4.60	縦長東	32-E				○	○	○	○										釘	砥石	瓦
38	3.60×4.80	横長東	3-E				○	○	○	○										瓶	鎌	砥石
39	4.30×5.10	横長東	31.5-E	○			○	○	○	○										提燈	鎌	瓦
40	3.22×4.34	横長東	24-E				○	○	○	○												
41	2.90	西																				
42	3.44×4.90	横長東	19-E	○			○	○	○	○											釘・?	砥石
43	3.24×4.08	横長東					○															
44	3.30×3.50	横長東	21-E	○						○										長頸瓶	?	
45	2.43×3.68	横長東					○			○											?	
46	2.85×4.05	横長東	0	○			○	○	○	○											砥石	
47	2.65×3.50	横長東	30.5-E				○	○	○	○												
48	4.81×3.66	縦長東					○	○	○	○										○		
49	2.61×3.25	横長東	28-E	○			○	○	○	○												
50	3.73×4.18	横長東	31.5-E				○	○														瓦

第1章 発掘調査の経過と遺跡の概要

第5表 溝跡一覧表

No.	区・グリッド位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	走向	東側へ長さ	備	考
1	V区・29D-12-18D-41	61.00	60-70	15	N-33'-E	南-52.0	2号溝と共に道路の側溝か。	
2	V区・28D-13-18D-41	84.10	50	15	N-33'-E	南-55.0	1号溝と共に道路の側溝か。	
3	V区・13D-13-30D-19	36.40	45	10	N-121'-E	東-19.0	出土遺物無し。	
4	V区・27D-19-23D-19	21.80	50	5.5	N-33'-E	南-23.0	出土遺物無し。	
5	V区・56C-11-47C-19	15.60	60-90	74-83	N-33.5'-E	南-25.0	8号溝と一連のもの。	
6	V区・8D-32-4D-48	34.00	50	14	N-37'-E	南-12.0	出土遺物無し。	
7	V区・19D-21-21D-19	14.30	40	5	N-72'-E	南-3.0	出土遺物無し。	
8	IV区・45C-24-38C-46	47.80	65-110	72	N-20.5'-E	南-37.5	5号溝と一連のもの。	
9	IV区・43C-19-37C-32	29.00	40	32	N-13.5'-E	南-17.5	10号溝と共に道路の側溝か。	
10	IV区・43C-15-37C-26	25.00	30-45	14-34	N-9'-E	南-2.0	9号溝と共に道路の側溝か。	
11	IV区・15C-13-8C-31	39.00	270-300	85-119	N-12'-E	南-18.0	13号溝と一連のもの。	
12	IV区・12C-14-4C-25	30.60	30-200	14-23	N-12.5'-E	南-33.0	陶磁器破片が出土。	
13	III区・5C-33-50B-50	36.00	70-250	75-109	N-6.5'-E	南-32.5	11号溝と一連のもの。19C前半。	
14	III区・17C-39-17C-48	15.50	90	38	N-19'-E	南-15.0	出土遺物無し。	
15	IV区・36C-13-35C-19	12.50	50-100	25	N-19'-E	南-12.0	出土遺物無し。	
16	IV区・20C-24-17C-29	13.00	40-80	14.5-18.5	N-12'-E	北-26.0	出土遺物無し。	
17	IV区・19C-21-15C-30	22.50	40	26.5	N-14.5'-E	南-18.0	出土遺物無し。	
18	IV区・11C-13-2C-27	33.20	20-100	12	N-13.5'-W	南-21.5	出土遺物無し。	
19	III区・0C-29-49C-32	4.80	150	19	N-1'-W	南-6.5	無土遺物無し。	
20	V区・28D-22-27D-22						36号溝と一連のもの。資料不備。	
21	I区・0B-51-0B-54	4.10	160	46	N-39'-E	南-12.0	26号溝と一連のもの。	
22	I区・49A-51-48A-54	6.40	90	29	N-20.5'-E	南-24.0	26号溝と一連のものか。	
23	I区・41A-49-42A-52	11.50	50-70	68	N-50'-E	南-4.0	29号溝と一連のもの。出土遺物無し。	
24	I区・40A-48-48A-51	17.60	40	27	N-104'-E	西-1.0	陶磁器破片が出土。	
25	I区・21A-51-33A-52	31.60	20-40	34	N-79.5'-E	東-6.0	19Cの溝。	
26	II区・47B-24-50B-47	47.00	50-120	21-42	N-58.5'-E	南-19.0	古代の溝。	
27	II区・1B-30-6B-49	42.40	20-70	28	N-102'-E	南-40.0	出土遺物無し。	
28	II区・9B-22-13B-50	56.40	40	30	N-65'-E	南-43.0	19Cの溝。	
29	II区・35A-26-37A-43	35.50	50	50	N-60'-E	南-7.0	古代の溝。	
30	I区・21A-43-26A-47	14.00	25-30	14	N-92'-E	東-6.5	24号溝と一連のものか。出土遺物無し。	
31	II区・20B-19-17B-28	13.80	30	9-12	N-30.5'-E	0	32号溝と共に道路の側溝か。	
32	II区・18B-22-15B-24	12.40	20	11	N-29'-E	南-23.0	31号溝と共に道路の側溝か。	
33	II区・7B-22-4B-28	13.40	60	23	N-27'-E	南-8.0	出土遺物無し。	
34	II区・3B-23-2B-27	10.00	30	22	N-25'-E	南-7.0	出土遺物無し。	
35	II区・46A-34-45A-35	5.10	20	20	N-18'-E	北-18.0	出土遺物無し。	
36	VI区・48D-24-36D-24	21.60	10-15	20-30	N-67'-E	西-21.0	第一次調査1号溝、20号溝と一連のもの。	

第6表 土坑一覧表

(単位: cm)

No.	位置	形状	大きさ	深さ	長軸方位	遺物	備考・旧名称
1	V区・25D-13	横丸方形	112×136	23.0			SK-1
2	V区・4D-18	円形	径112-128	42.0		土師器・須恵器破片	SK-2
3	V区・4D-17	円形	径112-120	43.0			SK-3
4	V区・4D-15	円形	径120	48.0		須恵器破片	SK-4
5	V区・3D-16	円形	径120	34.0		土師器・須恵器破片	SK-5
6	V区・2D-15	円形	径104-112	13.0			SK-6
7	V区・12D-29	横丸方形	52×72	33.0			SK-7
8	V区・11D-28	横丸方形	96×120	31.0			SK-8
9	V区・6D-30	円形	径96	19.0			SK-9
10	不明						
11	IV区・40C-15	横丸方形	96×140	33.0		土師器破片	11号土坑
12	IV区・38C-16	横丸方形	85×120	46.0			12号土坑
13	IV区・44C-36	不整形円形	径50-54	48.0		土師器破片	13号土坑
14	IV区・33C-21	円形	径136	41.0		土師器・須恵器破片	14号土坑
15	IV区・33C-22	円形	径112-130	11.0		土師器・須恵器破片	15号土坑
16	不明						
17	IV区・42C-27	円形	径100	41.0			17号土坑
18	不明						

第3節 遺跡の概要

19	IV区・28C-19	隅丸方形	120×214	26.0			19号土坑
20	IV区・25C-18	不整形	108×142	77.0		土師器・須恵器破片	20号土坑
21	IV区・40C-14	隅丸方形	90×130	57.0		土師器・須恵器破片	21号土坑
22	IV区・49C-35	不整形	190×360	35.5			22号土坑
23	IV区・37C-33	円形	径144~152	31.5			23号土坑
24	IV区・36C-33	円形	径120~128	24.5			24号土坑
25	IV区・30C-24	円形	径106~114	37.5			25号土坑
26	IV区・41C-27	不整形	160×240	28.5			26号土坑
27	IV区・29C-30	円形	径120~130	20.0			27号土坑
28	IV区・28C-30	円形	径109~130	20.0			28号土坑
29	IV区・27C-32	長方形	80×248	24.0	N-18'-E	土師器破片	29号土坑
30	IV区・28C-29	円形	径132~140	20.5			30号土坑
31	IV区・21C-32	長方形	96×176	11.0	N-19'-E		31号土坑
32	IV区 不明						32号土坑
33	IV区 不明						33号土坑
34	IV区・30C-31	円形	径76~80	25.5			34号土坑
35	IV区・21C-33	円形	径140~160	11.0			35号土坑
36	IV区・17C-22	隅丸方形	130×180	28.0			36号土坑?
37	IV区・15C-24	隅丸方形	100×180	43.0			37号土坑?
38	IV区・14C-27	隅丸方形	62×90	30.0			38号土坑
39	V区・26D-16	円形	径90~100	36.5			S K-39
40	V区 不明						40号土坑
41	III区・35B-31	円形	径120~128	22.0			41号土坑
42	III区・40B-27	不整形	径136~176	16.0	N-78'-E		42号土坑
43	V区・49C-16	不整形	104×360	51.0			S K-43
44	III区 不明						44号土坑
45	III区 不明						45号土坑
46	III区 不明						46号土坑
47	III区 不明						47号土坑
48	III区・2C-40	長方形	148×164	31.5		48号土坑	
49	III区・35B-37	不整形	径70~88	62.0			S K-49
50	II区・24B-48	円形	径96~100	26.5			50号土坑
51	II区・24B-34			5.0			39号住内31号土坑
52	II区・2B-40	隅丸方形	192×260	50.0		土師器・須恵器・灰釉陶器破片	52号土坑
53	II区・4B-35	不整形	径85~95	76.0			53号土坑
54	II区・8B-37	円形	径100~120	25.0		土師器・須恵器破片	54号土坑
55	V区・6D-31	円形	径88~104	27.0			S K-15
56	V区・32D-15	円形	径40~50	35.0		土師器・須恵器破片	S K-3
57	III区・35B-45	隅丸方形	144×256	24.0	N-45'-E	1161・1164須恵器	29・30号住内土坑。土壇墓?
58	I区・21A-46	円形	径90~110	20.0			A土坑
59	I区・21A-47	円形	径109~120	36.5			B土坑
60	I区・20A-48	円形	径64~84	39.5			C土坑
61	I区・20A-48	円形	径120~130	34.0			D土坑
62	I区・17A-50	長方形	70×168	10.5	N-3'-W		E土坑
63	I区・16A-50	円形	径104~108	20.5		キセル・磁器	F墓
64	I区・16A-51	円形	径112~120	48.0			G土坑
65	I区・16A-50	円形	径300~400	62.0		1024~1079・1120陶磁器	H土坑
66	I区・16A-51	長方形	60×320	42.0	N-8'-W	1135陶器・須恵器破片・鉄片	A溝
67	I区・16A-52	長方形	80×380	38.0	N-5'-E		B溝
68	I区・18A-52	長方形	60×700	7.0	N-10'-E	須恵器・陶器破片	C溝
69	I区・19A-52	長方形	82×760	11.0	N-14'-E	須恵器破片	D溝
70	I区・20A-52	長方形	80×700	20.0	N-8'-E	1136~1139陶磁器	E溝
71	I区・20A-54	長方形	85×1072	82.0	N-4'-E		F溝
72	I区・20A-54	長方形	76×300	26.0	N-63'-W	1140・1141陶器	G溝
73	I区・24A-54	長方形	60×240	17.0	N-5'-E		H溝
74	I区・24A-55	長方形	72×400	28.0	N-10'-E	瓦・縄文土器破片	I溝
75	I区・26A-55	長方形	100×600	19.0	N-80'-W	1142陶器・須恵器破片	K溝
76	I区・19A-49	長方形	200×1090	23.0	N-86'-W		L溝
77	I区・25A-55	長方形	84×360	30.5	N-81'-W	土師器・須恵器・陶器破片	J溝
78	VI区・32D-46	円形	径89~96	5.0			S K-1
79	VI区・32D-46	円形	径96~104	9.0		土師器破片	S K-2
80	VI区・34D-46	不整形	224×360	29.0		土師器・須恵器破片	S K-3

第 I 章 発掘調査の経過と遺跡の概要

81	Ⅵ区・35D-45	円形	径128~136	42.5		土師器破片	SK-4
82	Ⅵ区・29D-43	不整形	112×144	19.0		土師器破片	SK-5
83	Ⅵ区・31D-44	円形	径64~72	22.0		土師器破片	SK-6
84	Ⅵ区・45D-43	長方形	64×144	19.0	N-71'-W		SK-7
85	Ⅵ区・45D-45	不整形	径48~72	10.0			SK-8
86	Ⅵ区・40D-46	円形	径104	51.5			SK-9
87	Ⅵ区・42D-44	不整形	径48~72	35.0			SK-5
88	Ⅵ区・44D-43	円形	径72~80	64.0			SK-6
89	Ⅳ区・49B-18	不整形	262×342	24.0			SX-1
90	Ⅵ区・35D-43	不整形	径49~59	21.5			SK-1
91	Ⅵ区・37D-44	円形	径75~80	36.0			SK-2
92	Ⅵ区・40D-42	円形	径42~52	23.0			SK-3
93	Ⅵ区・41D-43	不整形	径64~96	47.0			SK-4
94	Ⅲ区	不明					SK-49
95	Ⅲ区・42B-31	不整形	176×270	131			121号住北土坑
96	Ⅱ区・13B-49			19.0			56号土坑
97	Ⅱ区・8B-22	不整形	102×210	21.5			69号住家側土坑
98	Ⅰ区・29A-46			23.0			55号土坑
99	Ⅱ区	不明					57号土坑
100	Ⅱ区・8B-34	不整形	106×286	59.5			66号住内

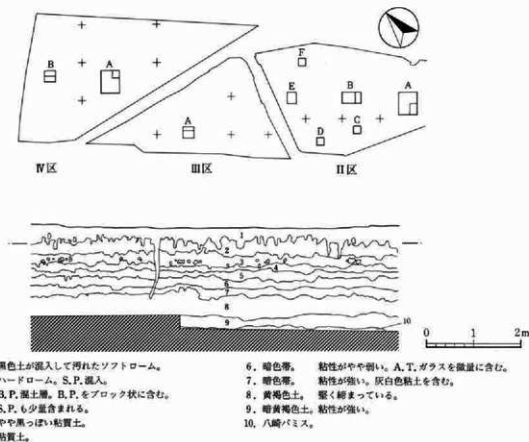
第II章 検出された遺跡と遺物

第1節 先土器時代の出土遺物

先土器時代の調査については、工事工程との関係もあり十分な時間が採れたとは言えない。このことは、試掘調査の量にも影響を及ぼすものとなり、すなわち遺物の検出される可能性が低くならざるを得ない。

この遺跡は調査結果からも明らかなように、多数の住居のほか、土坑・井戸・溝・古墳などが全面にわたって広がっている。いずれもローム層を掘り込む遺構であり、その深浅は様々であるものの、ローム層中に遺物が包含されていれば、これらの遺構と関連して検出される可能性もあり得る。先土器時代の試掘調査についてはグリッド調査を基本としているが、各遺構の壁面・床面からも情報を集めるものとし、調査工程上の制約を多少なりとも解消するように努めた。

試掘グリッドは遺跡全面にわたるものとし、同時期の遺物の検出及び土層状況の確認を目的とした。調査は八崎軽石層に達するまでとし、各グリッドとも土層図の作成を作った。調査により、遺跡北西側では安定した土層状態が認められ、赤城南麓における一般的堆積状態を示すものであった。北東側については、地下水の影響とみられるが、暗色帯以下の層が粘質土となり、基本的な層序は北西側と類似するものの、土層状態は著しく異なるものであった。とくに暗色帯に相当する層は漆黒の色調を示し、極めて粘性の強いものとなっていた。さらに同層下位付近から湧出水があり、この部分については以下調査不能となっている。



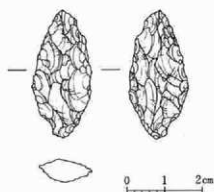
- | | |
|---|---------------------------------|
| 1. 黒色土が混入して汚れたソフトローム。 | 6. 暗色帯。粘性がやや弱い。A, T. ガラスを微量に含む。 |
| 2. ハードローム。S, P. 混入。 | 7. 暗色帯。粘性が強い。灰白色粘土を含む。 |
| 3. B, P. 凝土層。B, P. をブロック状に含む。S, P. も少量含まれる。 | 8. 黄褐色土。堅く締まっている。 |
| 4. やや黒っぽい粘質土。 | 9. 暗黄褐色土。粘性が強い。 |
| 5. 粘質土。 | 10. 八崎パミス。 |

第5図 先土器時代調査区位置図

第II章 検出された遺構と遺物

本遺跡周辺では、先土器時代の調査例は少なく、その動向は不明な部分が多い。その中で注目すべき遺跡としては、同じ上武道路関連の調査である書上本山遺跡がある。ここでは、暗色帯を主とする層位から10数点に及ぶ石器類が検出され、良好な資料を提供している。更に、上武道路関連の調査で、五目牛南組遺跡・堀下八幡遺跡等、先土器時代の遺跡が相次いで確認されることになった。

今回の調査では、遺跡中央部に当たるIV区-Bグリッドにおいて、ソフトローム層下部から黒曜石製の尖頭器1点が検出された。この他にはユニットを含め、石器の出土は確認されていない。出土石器は、小型の槍先形尖頭器で、全体の形状は木葉状を示す。調整加工は全面に及ぶが、裏面の一部に自然面が残存する。部分的には、斜行並行状の剝離となっている。横長の不定形剥片を素材とし、器体の最大長は右側縁の上半部に偏する。長さ3.3cm・幅1.5cm・重さ3.2gである。



第6図 尖頭器実測図



第2節 縄文時代の遺構と遺物

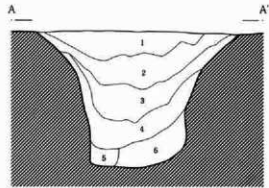
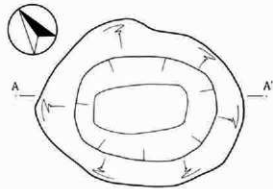
(1) 陥し穴 (第7図、図版6) 位置 VII区10E-45ポイント付近

本遺構は、粕川左岸の崖に接しており、周囲に同様な遺構は認められず、単独で検出された。確認面はローム層直上である。平面形は、上端部は東西方向に長い不整隅丸方形で、底部は比較的整った隅丸方形を呈する。遺構確認面から50cm程下位からは約41°の角度でラッパ状に上に広がっている。

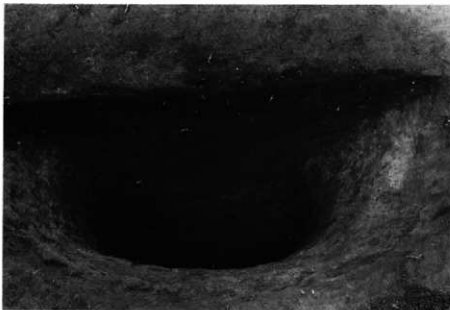
規模は、上端部で東西方向2.20m・南北方向1.75m、底部では東西方向1.00m・南北方向0.50mを測る。深さは、現状で1.45mを測り、底面ピット等は検出されなかった。

内部から遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の遺構としておく。

- | | |
|--------------|------------------|
| 1, 黒色土。 | C軽石を含む。 |
| 2, 暗褐色土。 | C軽石・ローム粒を含む。 |
| 3, 褐色土。 | C軽石を含む。 |
| 4, 淡黄褐色土。 | ローム粒を含む。 |
| 5, 黄褐色土。 | ロームブロックとローム粒の混土。 |
| 6, ローム層。(壁面) | |

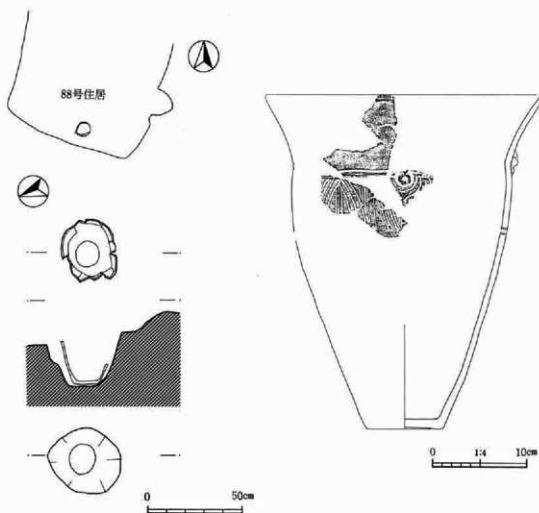


第7図 陥し穴実測図



(2) 1号埋設土器

第88号住居跡の南壁際の床面下から検出された。確認時には深鉢の胴下半部のみ状態であったが、住居の床下出土遺物中に同一個体の上半部破片が含まれていたことから、本来は完形品での正位埋設であることが判明した。埋設されていた土器は、胴部の張りが弱く、口縁部が外反する大型の深鉢である。口縁部は無文で、口唇部内面に弱い段が認められる。頸部には文様帯を画する2条の沈線と文様単位を示す「8の字」形の貼付文を施し、胴部には3本を単位とする沈線で懸垂と弧状を組み合わせた文様を構成しているが、埋設されていた胴下半部に文様は及んでいない。なお、胴部に縄文は施されておらず、胎土には砂粒を含む。色調は口縁部・胴下半部及び内面が白い灰褐色、胴部上半が黒褐色で、胴下半部の下位3分の1及び底部は二次加熱で器面が脆くなっている。以上の特徴から、本土器は堀之内1式でも新しい段階に比定されよう。



第8図 縄文土器拓影・実測図

(3) グリッド出土の遺物

1. 土器 (第9図)

出土総数は194点と少ないが、時間幅は長く、前期黒浜式から晩期安行式に至る型式が断続的に出土している。この内、前期後半と中期後半は本地域で遺跡数が急増する時期に当たり、本遺跡地からもこの時期の遺物が出土しているが、量的には遺構の存在する後期が中心である。遺物の分布は散在的であるが、出土量の8割は台地東半部から出土している。

前期 (1~7)

1は黒浜式土器の胴部破片で、0段多条R Lの縄文を縦横に交互施文して菱形縄文を構成している。胎土には多量の繊維を含む。2~4は諸磯a式土器である。2は波状口縁のもので、口唇下に爪形文を巡らし、以下に縄文R Lを施している。3は口縁部に3条単位の櫛状施文具で波状文を施したもので、文様単位を示す円形竹管文が施されている。4は半載竹管による平行沈線で、菱形の文様を施した口縁部破片である。5~7は諸磯b式土器である。5は内湾する口縁部破片で、口唇部に刻みが施されている。文様は縄文L Rを地文に、半載竹管による集合沈線で曲線的な文様が構成される。6も同様の集合沈線で、7は幅広の爪形文で文様が施されている。

中期 (8~16)

8・9は勝坂1式土器である。8は半載竹管による2条の平行沈線で、9は刻みを施した隆帯で三角形の区画文を構成し、その両側に幅広の押し引き文と二列のベン先文を施している。10・11は加曾利E 1式土器である。10は内湾する口縁部に外反ぎみに立ち上がる口唇部が付く。口唇下に交互刺突を伴う数条の沈線を巡らし、口縁には突出する隆帯渦巻文を施している。地文は燃糸文Lである。11は口縁部区画文を縦位の沈線で充填する土器である。12~15は加曾利E 3式土器である。12は連孤文土器で、口唇下に刺突を伴う平行沈線を巡らし、口縁に2本の平行沈線で連孤文を描いている。地文は不明。13は楕円区画文が施された口縁部破片で、区画内は縄文R Lで充填されている。14は沈線区画縄文帯を懸垂文とする胴部破片で、区画内を充填する縄文はR L Rである。15は上端がアーチ状に連結する沈線区画無文帯を垂下させた胴部破片で、区画外を充填する縄文はL Rである。16は加曾利E 4式土器である。口縁無文帯下に微隆帯を巡らし、以下に縄文R Lを施すが、微隆帯下の一帯のみ横位施文、以下を縦位施文して羽状を構成している。

後期 (17~26)

17~19は称名寺2式土器である。17・19は縄文L Rで充填された縄文帯で文様を構成するタイプで、19は口縁が波状を呈し、文様は波頂下の刻みを施した隆帯で分割されている。18は一列の列点を伴う平行沈線で文様を構成するタイプである。20~21は堀之内1式土器である。20は波状口縁のもので、口唇下と胴くびれ部に刺突を伴う平行沈線を巡らし、胴部に上端がアーチ状沈線を施している。波頂下には刺突による文様が施され、沈線はこの部分で連結している。21は外傾する口縁部で、口唇下に沈線が巡る。22~24は堀之内2式土器である。22は横帯文が施されたもので、沈線区画内は縄文L Rで充填されている。24は口縁に2条の刻みを施した隆帯を巡らすもので、口唇下面には1本の沈線が巡る。25は縄文L Rを地文に数条の集合沈線で曲線的な文様を描くもので、沈線間の地文は磨り消されている。25・26は加曾利B式土器である。25は胴部が張り出し、口縁部が外傾する土器で、胴部には羽状沈線が施されている。B 2式に比定されよう。26は

粗製土器で、口唇部に紐線文を巡らし、以下には条線を施している。

晩期 (27~32)

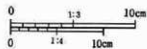
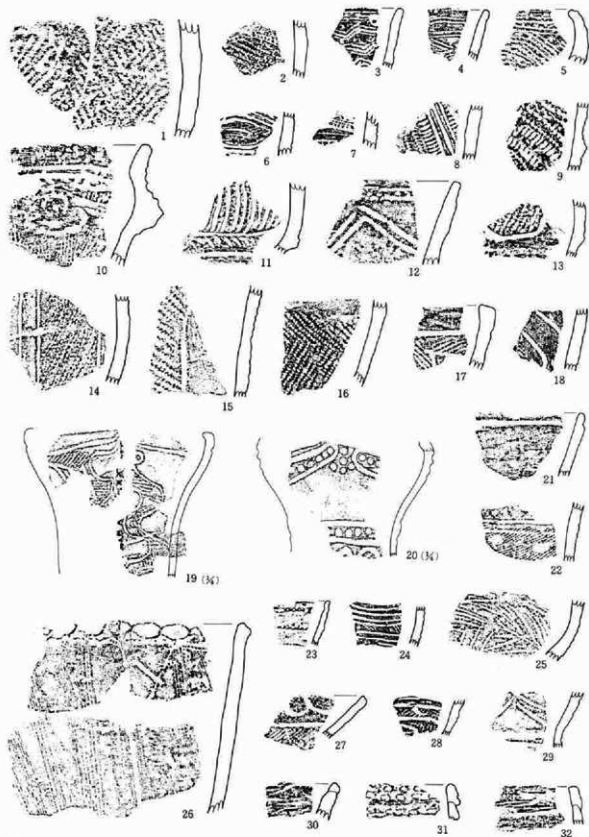
27は皿の口縁部破片で、口縁無文部に沈線で入組み状の文様を施し、無文部沈線下に縄文LRを充填している。無文部は研磨されている。28は帯状文を施すもので、細片のため文様構成は不明である。地文は縄文LR。29は胴部にくびれを持つ土器で、口縁部に3本の沈線で山形の文様を施し、沈線間に縄文LRを充填している。30は口縁に二山の貼付小突起が付くもので、外面には削り痕が明瞭に残る。31・32は口縁部に輪積み痕を残す粗製土器で、31は輪積み帯に二列の刺突を施している。いずれも内面に整形痕を残している。以上の土器は安行3b~3c式に比定されよう。

2. 石器 (第10~13回)

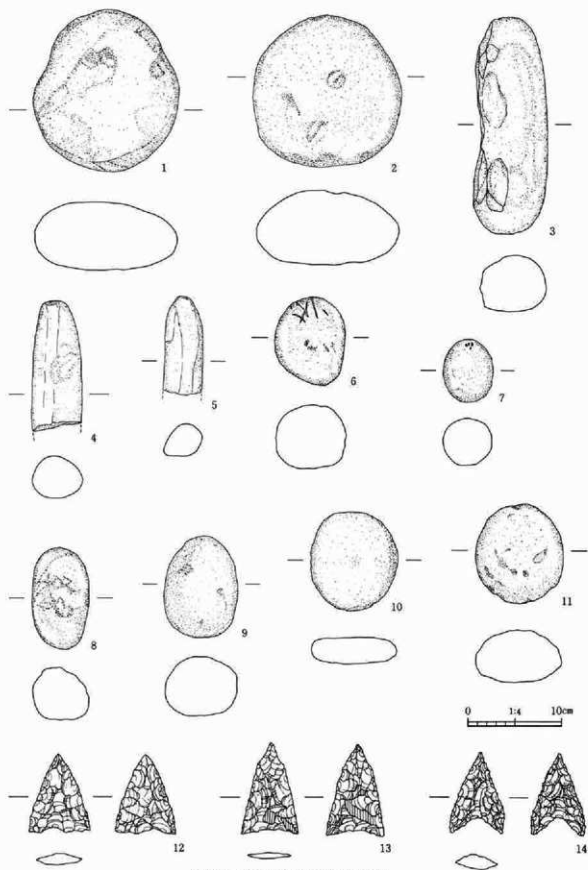
総計52点が出土している。観察結果は第7表の通りであるが、第10図1~7及び第11図8・9等は縄文時代以降の時期に所属する可能性も有る。

第7表 石器観察表

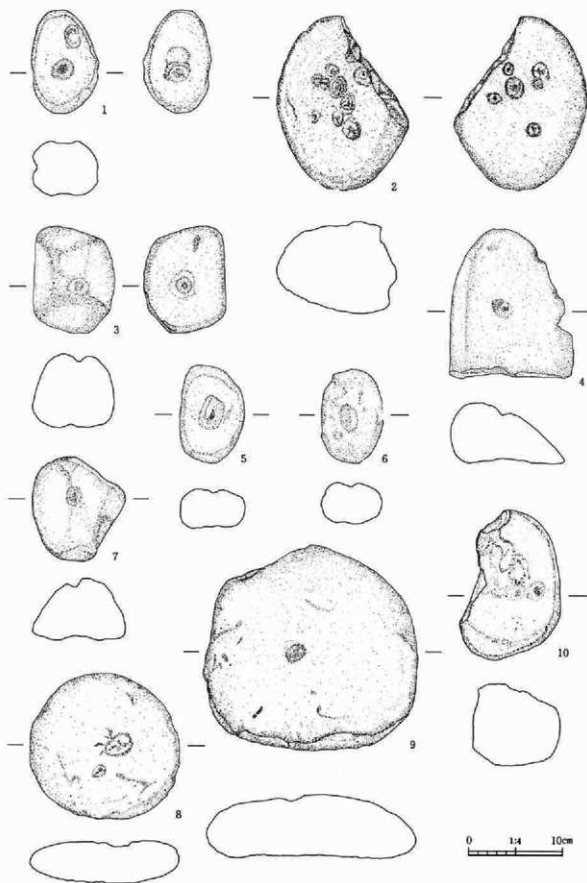
No	器種	出土位置	石質	①長さ (cm)	②幅 (cm)	③厚さ (cm)	④重さ (g)	⑤特徴
1-1	台石	2B-30	輝石安山岩	①17.1	②15.6	③7.2	④2460	⑤凹穴は集合打痕。
1-2	台石	2B-30	輝石安山岩	①16.1	②15.9	③7.9	④2320	⑤凹穴は集合打痕。
1-3	敲石	17B-30	輝石安山岩	①22.9	②8.0	③5.9	④1720	⑤上方頂部に敲打痕。
1-4	敲石	10B-31	輝石安山岩	①13.7	②5.3	③4.4	④520	⑤側面に集合打痕による凹穴を持つ。凹石と兼用。
1-5	?	7B-22	輝石安山岩	①10.4	②4.1	③3.4	④250	⑤
1-6	?	24号溝	輝石安山岩	①9.2	②7.5	③6.6	④620	⑤敲打痕と線刻有り。
1-7	?	14A-54	輝石安山岩	①6.6	②5.3	③4.8	④240	⑤
1-8	敲石	1号溝	輝石安山岩	①10.2	②6.0	③5.5	④640	⑤両面に面的な敲打痕が多数有る。
1-9	?	2号溝	輝石安山岩	①10.7	②7.9	③6.2	④690	⑤
1-10	磨石	27A-45	輝石安山岩	①10.4	②9.3	③2.8	④290	⑤両平組面を使用している。
1-11	?	1号溝	輝石安山岩	①10.5	②9.4	③5.4	④500	⑤
1-12	石鏃	8号墳	チャート	①2.1	②1.7	③0.35	④0.98	⑤両脚が僅かに欠損。
1-13	石鏃	2号土坑	黒曜石	①2.4	②1.6	③0.18	④0.58	⑤燗溝で局部磨製。
1-14	石鏃	44号住	黒色安山岩	①2.15	②1.5	③0.4	④0.72	⑤
2-1	凹石	44A-36	輝石安山岩	①10.9	②7.1	③5.7	④480	⑤両面と両側に各1個の集合打痕。
2-2	多孔石	26号溝	輝石安山岩	①18.4	②14.0	③9.8	④2680	⑤凹穴はいずれもロート状。
2-3	多孔石	10B-31	輝石安山岩	①12.3	②8.7	③7.8	④980	⑤両面に各1個の雞排み状の凹穴が有る。
2-4	多孔石	45A-36	輝石安山岩	①15.6	②13.2	③6.3	④1450	⑤
2-5	凹石	5B-33	輝石安山岩	①10.3	②6.9	③4.1	④420	⑤
2-6	凹石	5B-33	輝石安山岩	①9.9	②6.6	③4.4	④220	⑤両面を使用している。
2-7	多孔石	12C-25	輝石安山岩	①10.9	②10.0	③6.5	④840	⑤雞排み状の凹穴が1個有る。
2-8	台石	2B-30	輝石安山岩	①15.3	②16.0	③4.3	④1260	⑤両平組面に敲打痕と研磨痕が有る。
2-9	台石	21B-35	輝石安山岩	①22.7	②21.7	③6.4	④4660	⑤凹穴は集合打痕。
2-10	多孔石	44A-36	輝石安山岩	①15.8	②10.7	③8.6	④1460	⑤
3-1	打製石斧	10号住	ホルンフェルス	①12.8	②6.2	③1.6	④155	⑤
3-2	打製石斧	II区	黒色頁岩	①14.4	②5.9	③2.0	④183	⑤刃部磨耗。
3-3	削器	7号住	黒色頁岩	①12.3	②10.1	③1.9	④200	⑤
3-4	打製石斧	49号住	頁岩	①9.5	②5.0	③1.2	④50	⑤
3-5	打製石斧	2号井戸	頁岩	①12.0	②4.4	③1.5	④98	⑤刃部単純後に再調整。
3-6	打製石斧	V区	黒色頁岩	①9.3	②4.8	③2.1	④113	⑤柄部欠損。
3-7	打製石斧	8号溝	頁岩	①8.1	②5.5	③0.7	④43	⑤柄部欠損。
3-8	打製石斧	12号溝	ホルンフェルス	①8.3	②4.3	③1.3	④54	⑤柄部欠損。
3-9	打製石斧	26号溝	頁岩	①7.0	②4.3	③1.1	④35	⑤小形の完形品。刃部磨耗。
3-10	打製石斧	7号墳	黒色頁岩	①5.2	②4.0	③1.1	④29	⑤柄部欠損。刃部磨耗。
3-11	削器	V区	黒色頁岩	①5.5	②4.7	③1.1	④33	⑤
3-12	打製石斧	103号住	頁岩	①5.1	②5.5	③1.8	④38	⑤



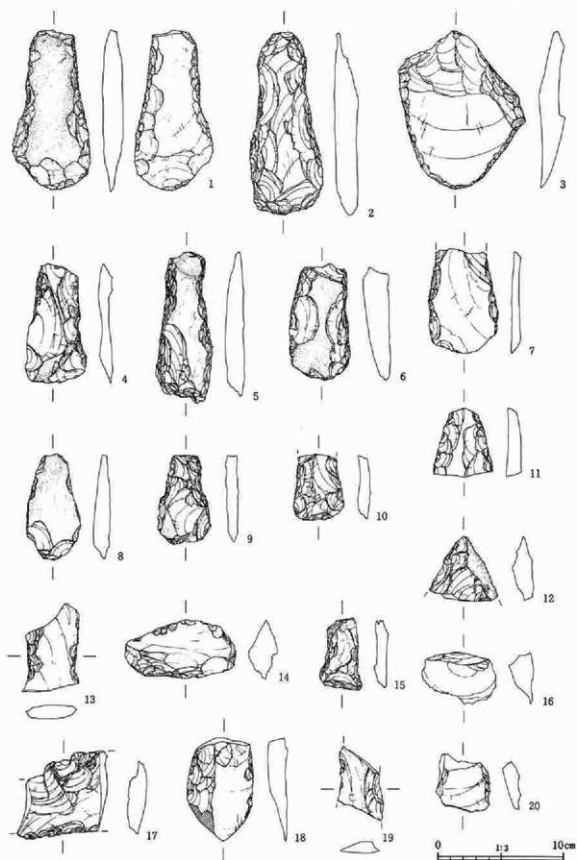
第9図 縄文土器拓影・実測図



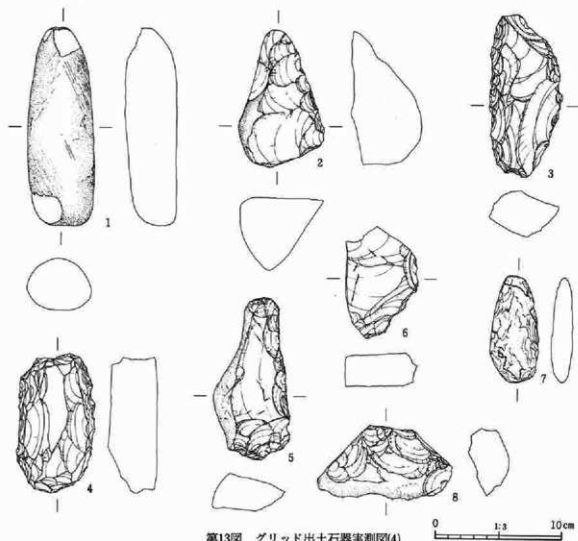
第10図 グリッド出土石器実測図(1)



第11図 グリッド出土石器実測図(2)



第12図 グリッド出土石礫実測図(3)



第13図 グリッド出土石器実測図(4)

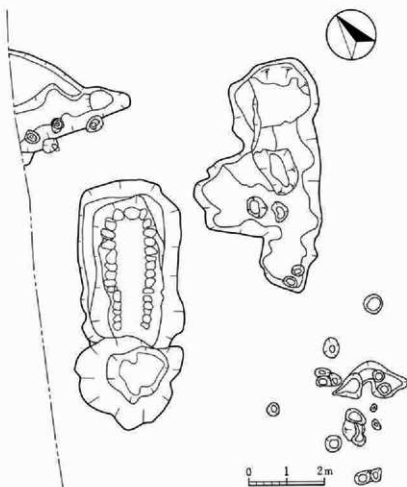
3-13	打製石斧	48号住	輝石安山岩細粒	① 7.1 ② 4.5 ③ 1.1 ④ 49 ⑤刃部と柄部一部欠損。
3-14	削 器	23B-41	黒色頁岩	① 8.9 ② 4.7 ③ 2.3 ④ 103 ⑤上方が刃部。
3-15	打製石斧	77号土坑	頁岩	① 5.7 ② 3.1 ③ 1.1 ④ 21 ⑤刃部片。
3-16	?	II区	輝石安山岩細粒	① 6.0 ② 4.2 ③ 2.0 ④ 41 ⑤
3-17	削 器	V区	黒色頁岩	① 6.9 ② 7.3 ③ 1.5 ④ 81 ⑤
3-18	削 器	75号住	黒色頁岩	① 8.2 ② 5.2 ③ 1.6 ④ 76 ⑤右側縁が刃部。
3-19	削 器	表 採	黒色頁岩	① 5.8 ② 3.6 ③ 0.9 ④ 20 ⑤左側縁が刃部。
3-20	削 器	107号住	黒色頁岩	① 4.5 ② 4.3 ③ 1.4 ④ 28 ⑤右側縁が刃部。
4-1	敲 石	11B-24	珉質燧頁岩	①15.6 ② 5.4 ③ 4.1 ④ 540 ⑤上方が敲打部。押痕有り。
4-2	削 器	IV区	黒色頁岩	①10.7 ② 6.8 ③ 5.7 ④ 440 ⑤
4-3	削 器	44A-36	黒色頁岩	①12.9 ② 5.8 ③ 3.7 ④ 240 ⑤
4-4	削 器	III区	黒色頁岩	①11.0 ② 6.3 ③ 3.9 ④ 380 ⑤
4-5	削 器	73号住	黒色頁岩	①12.9 ② 6.2 ③ 3.0 ④ 220 ⑤
4-6	石 核?	表 採	黒色頁岩	① 8.8 ② 5.8 ③ 2.6 ④ 171 ⑤
4-7	?	13号住	ホルンフェルス	① 8.3 ② 3.7 ③ 1.7 ④ 66 ⑤
4-8	削 器	66号住	黒色頁岩	①10.2 ② 5.7 ③ 3.2 ④ 198 ⑤

第3節 古墳と出土遺物

(1) 古墳

1号墳 (第14～16・34図、図版12・13・26) 位置 VII区45D-36グリッド

本古墳は試掘調査によって検出されたが、後世の削平のため墳丘盛土が全く失われており、明確な周濠も確認されなかったため、外形は不明である。埋葬主体部は、輝石安山岩の河原石を用いた、自然石乱石積みによる横穴式両袖型石室である。全長は2.95mを測り、玄室の主軸方位はN-41°-Eであり、両側に開口する。上部が後世の擾乱によって削平されており、天井石が遺存しないために判然としない部分も有るが、地表面を掘り穿めた掘り方内に石室が構築されており、開口部に素掘りの前庭を持った「地下式」或は「半地下式」の古墳である。なお、葦石・埴輪等は認められなかった。



第14図 1号墳全体図

前庭

形態は不整形円形で、上端部で東西方向2.90m・南北方向2.50m程の撻鉢状の掘り方を生かして設けられており、石室掘り方よりも45cm程深く掘り下げている。石室寄りの部分には、20cm大の河原石を積み上げて石室の補強を行っており、現状で羨道入り口から東側に70cm・西側に90cmに亘って直線的に開いている。上部からは転落したと考えられる石室用材が出土したが、底面には特別な構造は認められなかった。

羨道・閉塞

平面形は、前幅50cm・奥幅55cm・長さ110cmで右壁に弱い胴張りを持った方形を呈する。床面には径6cm前後の円礫が厚さ約10cm敷かれており、礎床をなしていた。床面からの高さは、現状で47cmを測る。

右壁面はやや膨らみを持っており、25cm大の河原石の小口面を内側にして6石の根石を据え、その上に横目を揃えるようにして積んでおり、現状で4段残っている。左壁面はほぼ直線状を呈しており、右壁よりもやや大振りの5個の根石を据えている。現状で5段目まで残っていたが、さらに上段が有ったものと考えられる。羨道奥には長さ50cm・幅30cm・厚さ30cm程の榑石が据えられており、前端部にはやや小振りで、長さ40cm・幅25cm・厚さ15cmの間仕切りの河原石が設置され、その間に径20cm前後の河原石を充填して閉塞していた。

玄室

平面形は、床面で前幅75cm・中央部幅83cm・奥幅75cm・全長185cmで、右壁に弱い胴張りを持った隅丸長方形を呈する。床面には羨道部よりもやや大振りの円礫が厚さ15cm程敷かれており、礎床をなしていた。床面からの高さは、現状で48cmを測る。

右壁面は、30cm大の河原石8個を用い、小口面を内側にして据えて根石としていた。左壁面の根石も8石で構成しているが、手前から5個目の石は横口面を内側に向けていた。奥壁は3石で構成されており、中央に40cm大の石を横口面を内側にして置き、両側に30cm大の石を据えていた。側壁・奥壁共に横目を揃えるようにして積まれており、現状で右壁5段・左壁4段・奥壁2段が残っていた。壁面は右壁が約7°内傾している他はほぼ垂直に立ち上がっていた。

掘り方

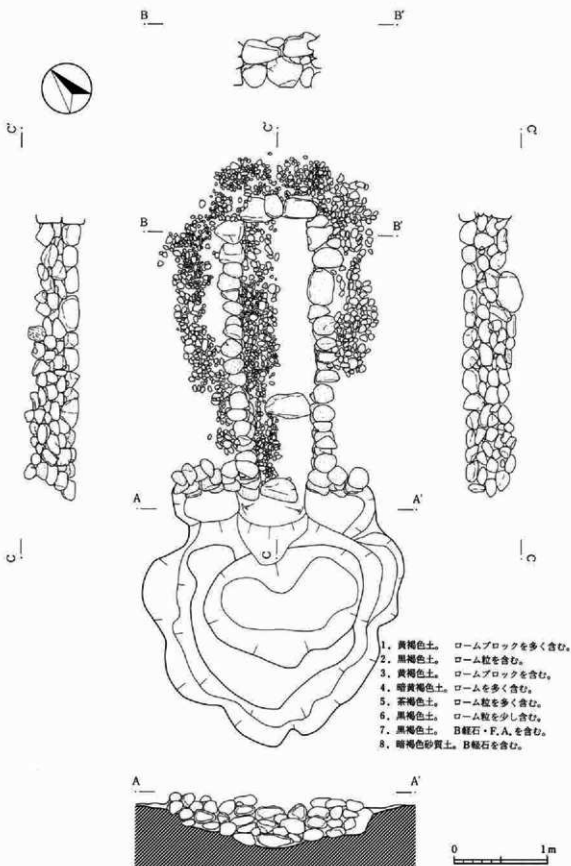
平面形は、上端部で幅270cm・長さ435cmの隅丸長方形を呈する。壁面は50°程外傾して掘られており、底部では、幅210cm・長さ405cmを測る。深さは56cm前後で、底面は羨道側が若干低くなっていた。石室は掘り方のほぼ中央に構築されており、根石が据え置かれた部分は5cm程窪んでいた。

壁石と掘り方の間は、ロームブロックを含む黄褐色土と黒褐色土とで互層をなして埋め戻されており、裏込め石は認められなかった。

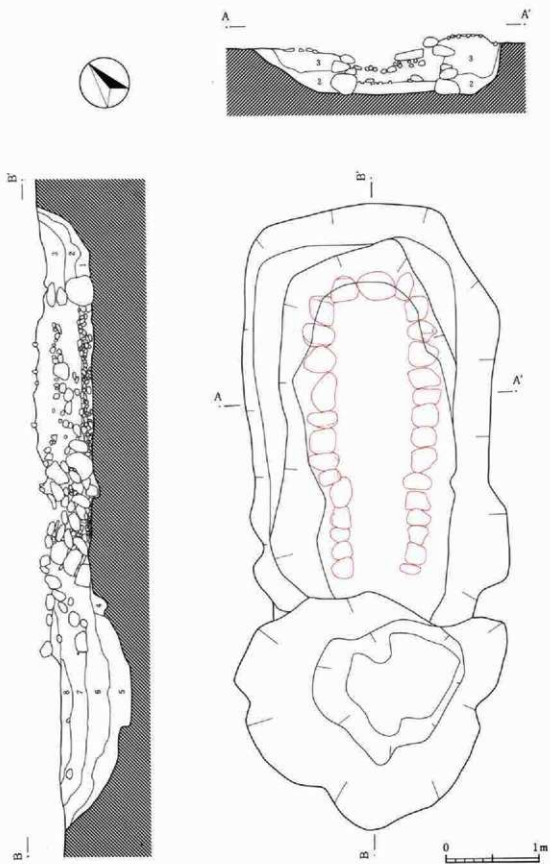
出土遺物

遺物は、鉄釘接合木棺に使用されたと考えられる鍛造製角釘20片が、玄室内東半部から出土したのみである。形態はいずれもL字状をなし、端部を薄く圧延した後に一方に折り曲げた頭部を持ち、胴部との境はくびれこんでいる。概要は第9表の通りであり、鋳は検出されなかった。

出土状況としては、玄室北東部の南北方向118cm・東西方向24cmの方形の範囲に散在しており、後世の攪乱のためか、南側がやや不自然な状況を呈していたが、追葬の影響とは考えられない。



第15図 1号墳石室展開図



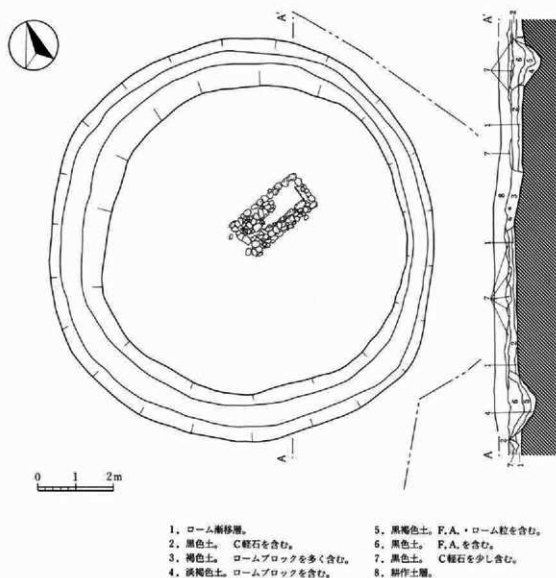
第16図 1号墳石室掘り方実測図

第II章 検出された遺構と遺物

2号墳 (第17・18・32・34回、図版14・15・25・26) 位置 VII区10E-21グリッド

本古墳は第二次調査で、橋脚の基礎工事によって周堀の一部を壊されてしまった3号墳の北側13mの位置で検出された円墳である。耕作のため削平が進んでおり墳丘盛土は全く失われていたが、外周径11mの周堀を確認した。周堀の断面形はU字状を呈しており、東側がやや狭まる傾向に有るが、上部幅135~180cm・下端部幅24~64cm・深さ80cm前後を測る。底面のレベルは一定しておらず、西半部がやや深い傾向に有り、北西部は南東部よりも25cm程低くなっていた。南側周堀の底面から10cm程浮いた位置で、完形の土師器杯3個体が口縁部を上にして据え置かれた様な状態でまとも出土した。なお、石室の攪乱土層中からも同一形態の杯の破片が出土した。

なお、基石・埴輪等は認められなかった。



第17図 2号墳全体図

石室

輝石安山岩の割れ石を用いた箱式棺状壁穴式石室である。周堀の中心よりもやや東に偏した位置に構築されていた。東西方向に長軸を持ち、北壁の東半部が攪乱を受けており、西半部に4石の天井石が残っていたが、被覆粘土等は認められなかった。規模は180cm×30cm・深さ22~24cmで、西壁よりも東壁の方がやや広いので、頭位を東にとった伸展葬と考えられる。主軸方位はN-67°-Eである。東西の壁は1石構成で、用材の平面を内側にしていずれも横長に使用していた。南北の側壁は、概ね用材の平面を内側にして縦長に立てており、東側に大振りな石を使用する傾向が認められた。南壁は7石構成であり、北壁は攪乱を受けていたが、掘り方調査の結果8石構成であったことが確認された。床面は緩い蒲鉾状を呈していたが、特別な造作は認められなかった。なお、ローム層の上面に当たる部分に、20cm大の河原石を用いて、240cm×120cmの長方形の貼石面を構築していた。用材の平面を使用した丁寧な造りであったが、西側及び攪乱を受けた北東部が若干乱れていた。攪乱を受けた部分には、B軽石を含む黒色土が詰まっていた。

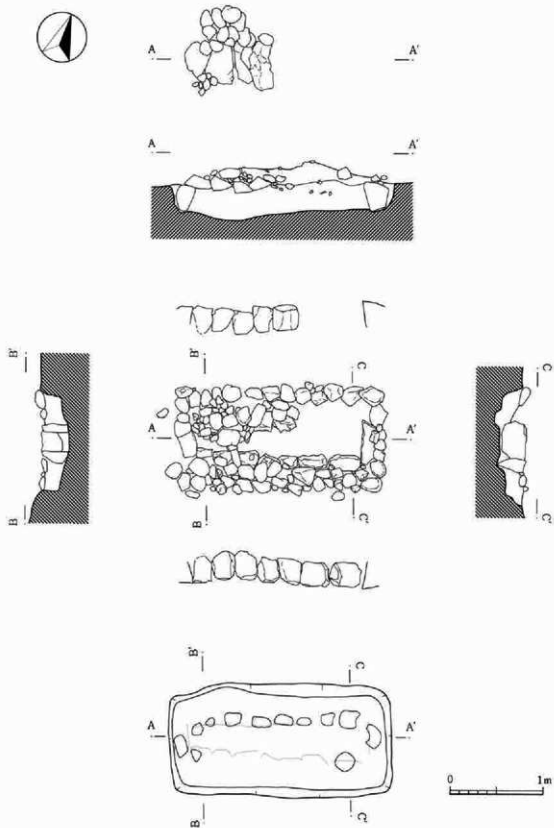
掘り方

C軽石を含む黒色土の上部から掘り込んだもので、ローム層を25cm程掘り落めていた平面形は北西部がやや歪んだ隅丸長方形で、上端部で、長さ240cm・幅120cm、下端部で長さ228cm・幅100cm、深さ28cmを測る。壁面は20°程外傾して掘られており、底面は西側が10cm程低くなっていた。主軸方位はN-70°-Eであり、石室の軸方位とほぼ一致している。壁石と掘り方との間は、ロームブロックを含む黒褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物

遺物は、前述の土師器坏4個体の外に、石室内の南壁際から鉄鎌9個体以上の破片及び刀の茎と考えられる板状鉄片1個体が出土した。概要は第8・9表の通りである。



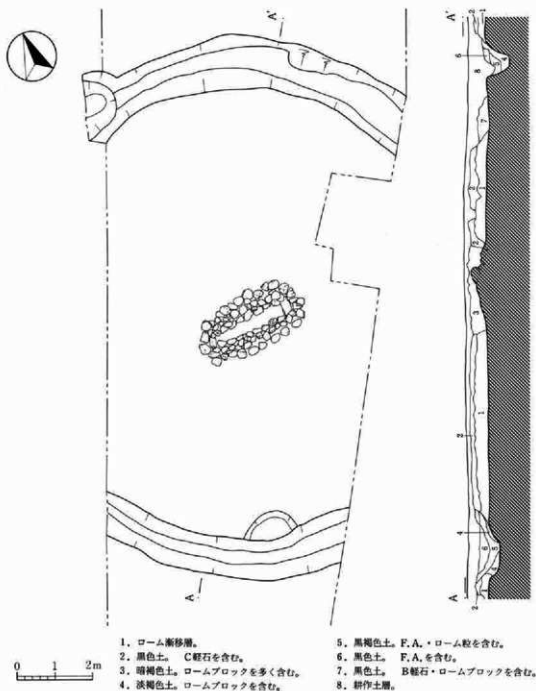


第18図 2号墳石室展開図

3号墳 (第19・20図、図版16・17) 位置 VII区10E-33グリッド

本古墳は前述の通り、橋脚の基礎工事によって周堀の東半部を掘り壊されてしまった。また、西半部は粕川の侵食作用によって削り取られてしまっていたが、外周径14.5mの環状の周堀を持つ円墳であると考えられる。耕作のため墳丘盛土は全て失われていた。周堀の断面形はU字形を呈しており、上端部幅100~150cm・下端部幅30~85cm・深さ30~60cmを測り、比較的整った円形を呈すると考えられる。底面のレベルは一定しておらず、南半部が30cm程低くなっていた。

なお、葦石・埴輪等は認められなかった。



第19図 3号墳全体図

石室

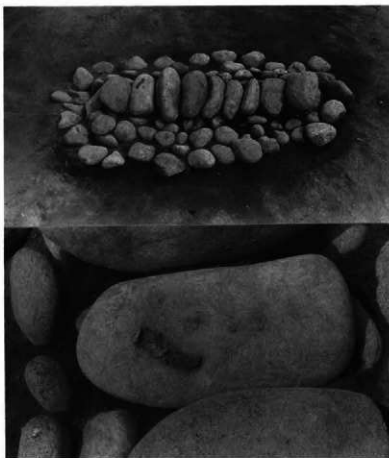
輝石安山岩の河原石を用いた箱式椁状堅穴式石室である。周廻のほぼ中心に構築されており、東西方向に長軸を持つ。地下の掘り方内に構築されており、9石の天井石と間詰め石の上部は黄褐色粘土で丁寧に覆われていた。東側から2石目の天井石の上には鉄製の鎌（42頁の写真参照）が副葬されていたが、遺憾ながら所在不明になってしまった。規模は200cm×32cm・深さ34cmを測り、西壁よりも東壁の方がやや広いので、頭位を東にとった伸展葬と考えられる。主軸方位はN-85°-Eである。東西の壁は1石構成で、用材の平面を内側にしていずれも横長に使用していた。南北の側壁は共に8石構成で、30cm大の石を縦長に用いて平面を内側に向けてほぼ垂直に立てていた。床面には黄褐色粘土交じりの土が4cm程敷き均されていた。なお、ローム層の上面に当たる部分には、20~30cm大の河原石を用いて、石室を二重に取り囲むようにして314cm×160cmの長円形の貼石面が認められた。

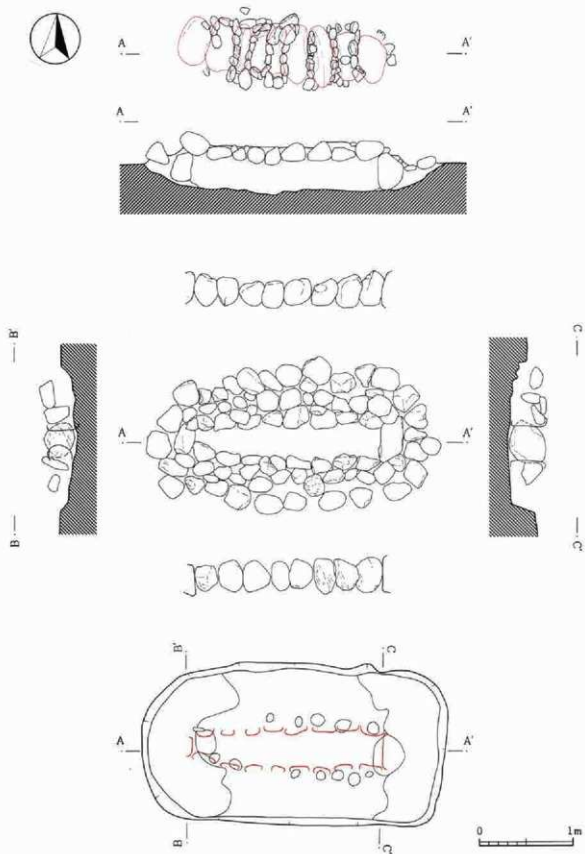
掘り方

C軽石を含む黒色土の上部から掘り込んだもので、ローム層を30cm程掘り窪めていた。平面形は西側が大きく丸まった不整隅丸方形で、上端部で長さ330cm・幅170cm、下端部で長さ310cm・幅155cm・深さ25~30cmを測る。南北の壁面はほぼ垂直に掘り込まれているが、東西の壁面は15°程外傾して掘られていた。底面には小さな凹凸が認められたが、ほぼ水平であった。主軸方位はN-87°-Eであり、石室の軸方位とほぼ一致している。壁石と掘り方との間は、ロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物

遺物は、擾乱を受けていなかったにも拘わらず、前述の鉄製鎌1点が出土しただけである。





第20図 3号墳石室展開図

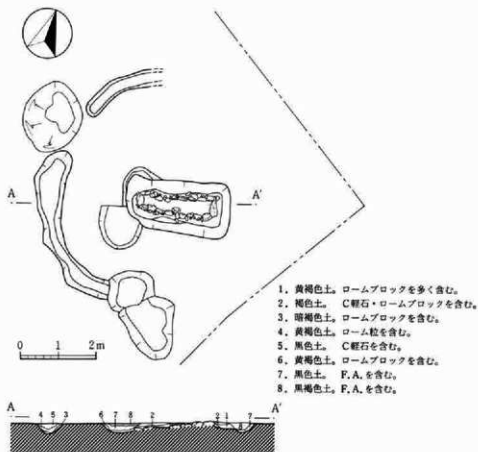
第II章 検出された遺構と遺物

4号墳 (第21・22図、図版18・19) 位置 VII区0E-42グリッド

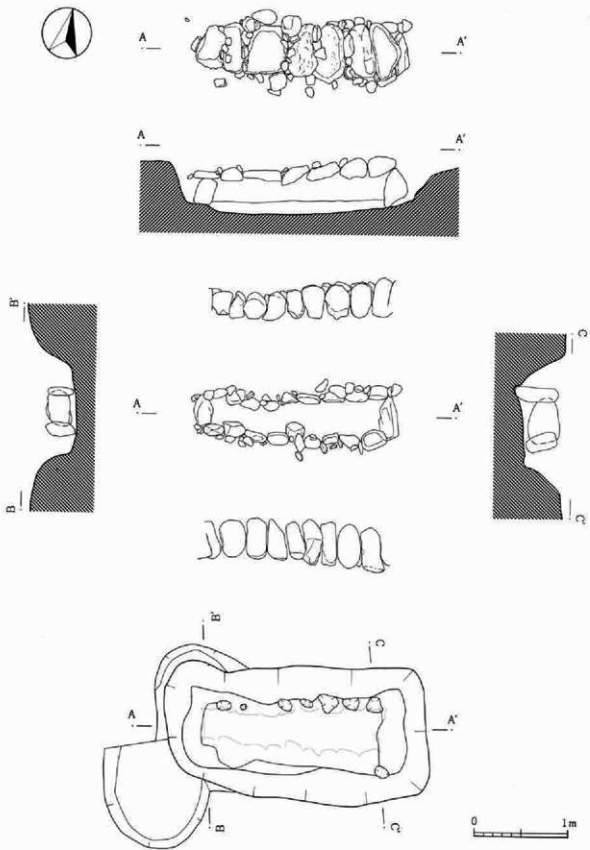
本古墳は、3号墳の南側8mの位置で検出された円墳である。後世の削平のため墳丘は全く失われており、周溝と箱式棺状竪穴式石室の埋葬主体部を確認した。周溝は、北側及び東側は調査不能であったため、西半部のみを検出にとどまってしまったが、現状で2箇所途切れていた。断面形は鍋状を呈しており、上端部幅40~60cm・下端部幅15~25cm・深さ25~30cmを測る。底面には多少の凹凸が認められたものの、レベルはほぼ一定であった。周溝外縁での復元では、径7m程の規模になる。なお、墓石・埴輪等は認められなかった。

石室

輝石安山岩の河原石を用いた箱式棺状竪穴式石室である。復元される周溝の中心よりも著しく東側に偏って構築されている。地下の掘り方内に構築されており、7石の天井石と間詰め石の上部は黄灰色粘土で丁寧に覆われており、上部はC軽石とロームブロックを含む褐色土によって埋め戻されていた。規模は、186cm×42cm・深さ30cmを測り、西壁よりも東壁の方がやや広いので、頭位を東にとった伸長葬と考えられる。主軸方位はN-81°-Eである。東西の壁は1石構成で、用材の平面を内側にしていずれも横長に使用していた。南北の側壁は共に9石構成で、40~50cm大の石の平面を内側にし縦長に用いてほぼ垂直に立てていた。床面には、掘り方底面から20cm程の厚さで黄灰色粘土交じりの土が敷き均されていた。なお、2・3号墳に見られたような貼石は認められなかった。



第21図 4号墳全体図



第22図 4号墳石室展開図

第II章 検出された遺構と遺物

掘り方

構築当時の地表面と考えられるC軽石を含む黒色土の上から掘り込んだもので、ローム層を50cm程掘り窪めていた。平面形は、西側の上部がやや攪乱されていたが、東西方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、上端部で長さ290cm・幅145cm、下端部で長さ240cm・幅80cm、深さ40～50cmを測る。主軸方位はN-82°-Eであり、石室の方位とほぼ一致している。底面は、中央部が溝状に盛り上がっており、全体的には東側よりも西側の方が8cm程低くなっていた。壁石と掘り方との間には、裏込め石や間詰め粘土等は認められず、ロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物

遺物は、石室自体が攪乱を受けていなかったにも拘わらず、周溝の覆土中から土師器・須恵器の破片が出土したのみで、古墳の構築時期を示すような資料は認められなかった。

5号墳（第23図、図版20） 位置 VII区5E-51ポイント

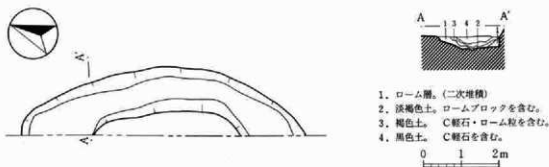
本古墳は、調査区の南西隅に於いて周溝の一部を検出したのみである。西側が調査区域外にかかるため未完器であるが、検土杖による調査の結果、箱式棺状竪穴式石室を持った円墳であることが確認されている。周溝は歪みが目立つが、上端部幅100～120cm・下端部幅50～60cm・深さ20～32cmを測る。断面形は鍋底状を呈しており、確認された範囲内においては、東側がやや狭まる傾向に有る。底面のレベルは一定しておらず、北側が10cm程低くなっていた。周溝外縁での復元では、径10m程の規模になる。なお、葦石・埴輪等は認められなかった。

石室

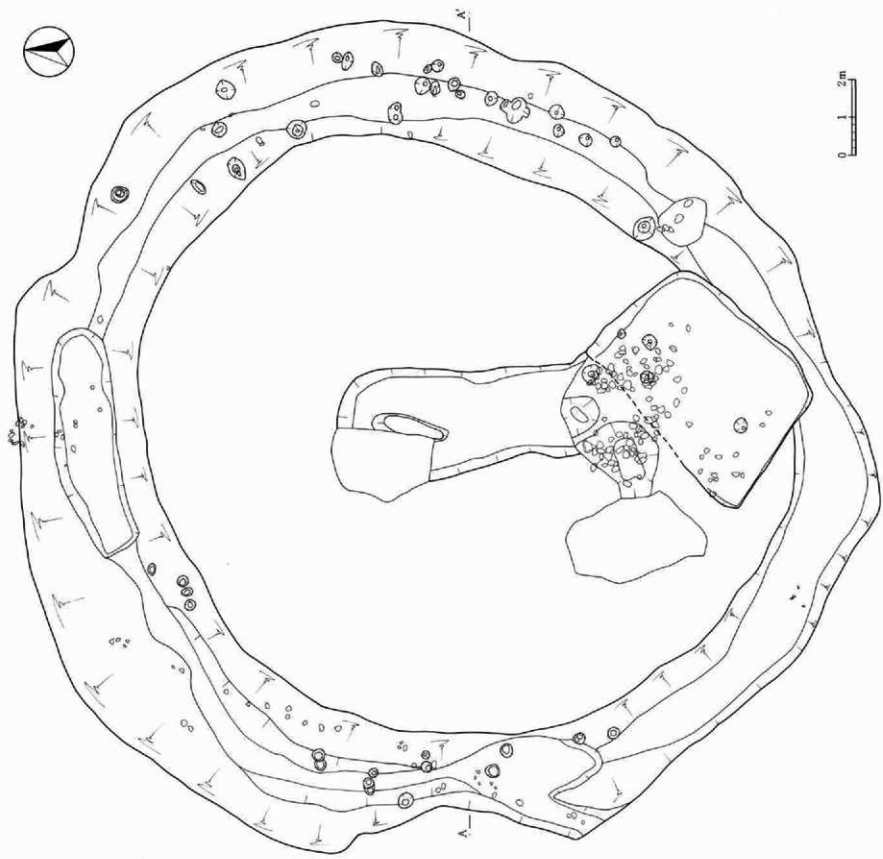
検土杖による調査では、東西方向に長軸を持ち、石室の輪郭部で長さ200cm・幅60cm程の規模を有する箱式棺状竪穴式石室であると考えられる。

出土遺物

遺物は全く出土しなかった。



第23図 5号墳全体図



第24图 6号墳全体图

6号墳 (第24・25・32・34回、図版21・22・26) 位置 V区15D—27ポイント

本古墳は、後世の削平が著しく、墳丘は全く失われており、環状の周溝と南側に開口する横穴式石室の残骸を確認したのみである。規模は、周溝外縁で22~24mを測り、今回の調査事例の中では最も大きい円墳である。周溝は、南北方向がやや長いが、比較的整った円形で、上端部幅2.2~4.2m・下端部幅0.7~1.5m・深さ15~60cmを測る。断面形は鍋底状を呈しており、底面には若干の凹凸が認められるが、全体的には南半部が10cm程低くなっていた。なお、葦石・埴輪列等は認められなかった。

石室

遺存状態は芳しくないが、敷石の状況から推して、輝石安山岩の河原石を用いた横穴式両袖型石室であると考えられる。石室は隅丸長方形の掘り方の中に作られており、掘り方に30cm程の厚さで客土して地形した上に床面が有る。床面には5~10cm大の河原石が敷かれており、壁石は玄室前半部の根石が残っているのみであるが、30~40cm大の河原石の横口面を内側にして据えられている。玄室の左右の壁には「胴張り」が認められる。玄室は、敷石及び壁石の遺存状況から推して、長さ2.40m・最大幅1.50m程の大きさであると考えられる。(長さについては、上部に攪乱が認められたため定かでないが、北東部の3石はさほど動いていないものとして割り出した数値である。)羨道の壁石は全く残っていないが、敷石及び閉塞石と思われる石の状況から推して、長さ1.20m・幅60cm程の大きさであると考えられる。主軸方位は、磁北から僅かに西偏する程度であると考えられる。(羨道の前面にも方形の攪乱部分が有るため、長さについてはやや不安が残る数値である。)

石室の床面レベルは、羨道部よりも玄室部の方が10cm程低くなっていた。

掘り方

南側及び北西部に攪乱が有るが、平面形は、長さ6.0m・幅2.5~3.0m程の南側がややすばまった隅丸長方形を呈する。ローム層を60cm程掘り込んでいるが、前述の通り、底面から20~30cmの厚さで地形を行っている。

出土遺物

周溝覆土及び石室攪乱土の中から土師器・須恵器破片等が出土したが、古墳の構築時期を示すような資料は認められなかった。なお、埴輪破片2・緑釉陶器皿1も出土している。

7号墳 (第26・32・34回、図版22・25・26) 位置 V区10D—18ポイント

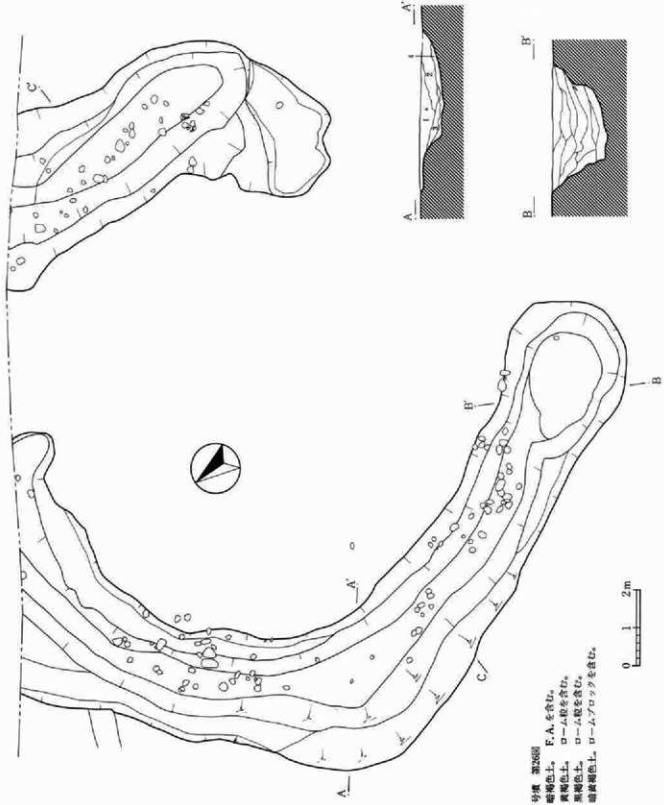
本古墳は、後世の削平が著しく、墳丘・埋葬主体部は全く失われており、周溝のみの調査にとどまった。北側は調査区域外にかかるため未発掘であるが、南側が途切れた不整形の扶状周溝を持った円墳と考えられる。周溝の平面形は、西側に隣接する6号古墳を意識したためか、南西部の歪みが特に目立つ。規模は、上端部幅2.6~3.0m・下端部幅60~80cm・深さ60~100cmを測る。断面形は鍋底状を呈しており、内部には底面からやや浮いた状態で径20~50cm大の河原石が落ち込んでいた。或は、葦石が有ったのかも知れない。周溝外縁での復元では、径20m程の規模になる。埋葬主体部は横穴式石室と思われる。

出土遺物

周溝の覆土から須恵器甕等の破片が出土したが、古墳の構築時期を示すような資料は認められなかった。



第25図 6号墳石室実測図

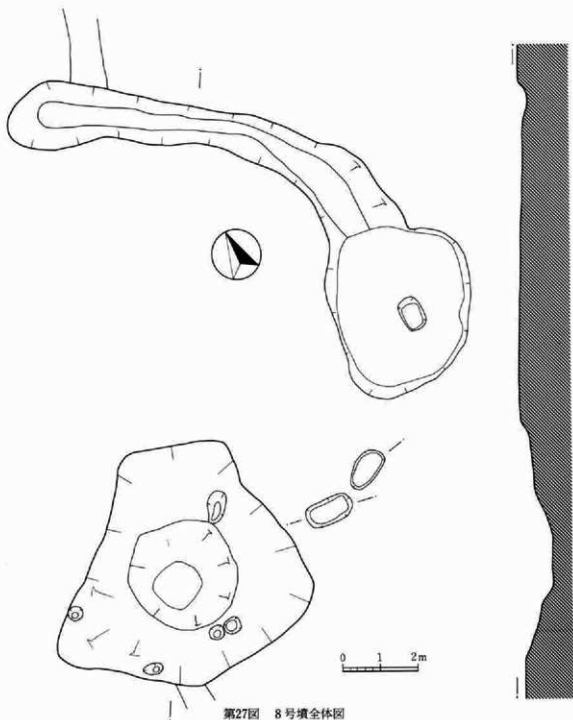


第288図 7号墳全体図

▼ 墳頂部上

8号墳 (第27～29・32図、図版23・25) 位置 V区15D-42ポイント

本古墳は、後世の削平が著しく墳丘は全く失われており、弧状の周溝と前庭及び羨道の一部を確認したにすぎない。また、西側は生活道路にかかっていたため未完掘である。周溝は、北東部のみに遺存しており、上端部幅90～120cm・下端部幅30～50cm・深さ12～30cmを測る。断面形は鍋底状を呈しており、ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。遺存状況から推して、全周していなかったことは明らかであり、現状で2箇所途切れている。周溝外縁での復元では、径15～20mの円墳と考えられる。なお、葦石・埴輪列等は認められなかった。また、確認された周溝の南端部には小鍛冶跡が重複していた。



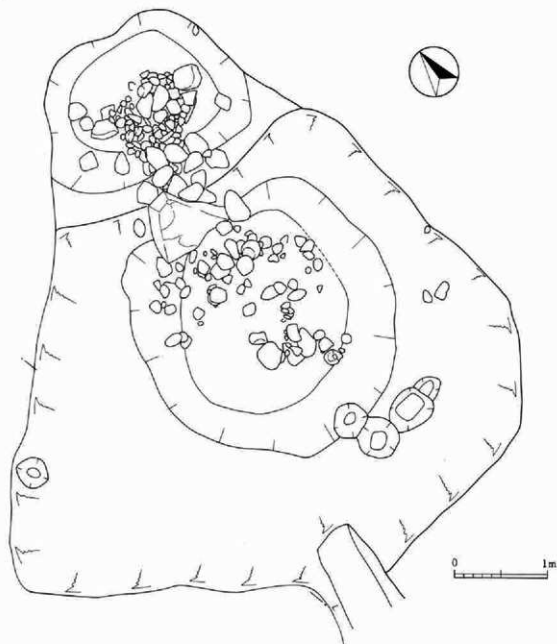
第II章 検出された遺構と遺物

前庭

羨道部の南側には、石積みは残っていないが石室の掘り方に接して、前庭と考えられる遺構が検出された。平面形は不整形形で、上端部の長さは東西方向6.0m・南北方向4.2mで、深さ70cm程の摺鉢状の窪みが認められた。内部には石室用材と考えられる径20cm大の河原石が落ち込んでおり、天井石に用いたと思われる70cm×100cm程の輝石安山の割れ石も残っていた。

石室

南側に開口した横穴式石室であると考えられる。壁石は残っていないが、床面には10cm大の河原石が敷かれており、遺存状況から推して、羨道長60cm・幅30cm、玄室長1m前後の小規模なものであったと思われる。



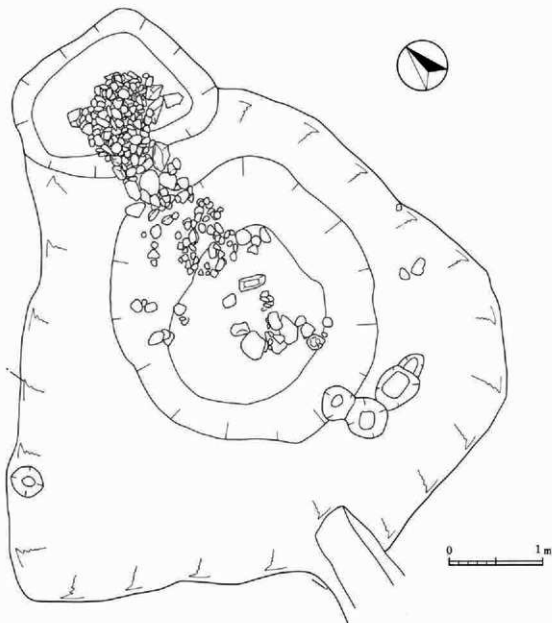
第28図 8号墳石室実測図(1)

掘り方

前庭部との境界が明確でないが、東西方向2.0m・南北方向2.0m、深さ35cmの不整隅丸方形の掘り込みが確認された。底面は、羨道部分よりも玄室部の方が10cm程低くなっていた。

出土遺物

周溝の覆土中から、土師器・須恵器の破片約170点が出土したが、古墳の構築時期を示すような資料は認められなかった。



第29図 8号墳石室実測図(2)

第II章 検出された遺構と遺物

9号墳 (第30・33図、図版24・25) 位置 VI区36D-47グリッド

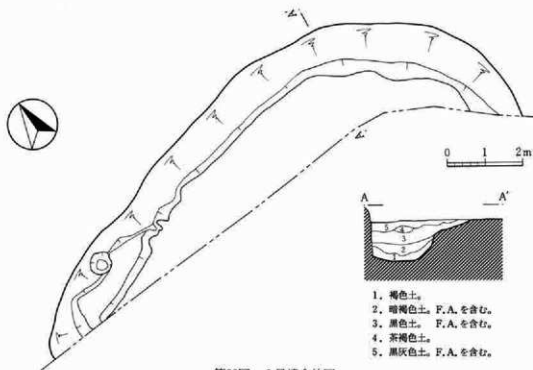
本古墳は、調査区の南西隅に於いて弧状の溝を検出し、覆土の状況から推して古墳と認定したものである。南側には民家が建てられており、部分的な調査であるため詳細は不明である。おな、民家の庭には、建築工事の地盤の際に出土したと言う石室の用材と考えられる石が残されている。周溝は、確認された範囲内に於いては著しく歪んでおり、墳形・規模は明らかにし得ない。なお、内側の立ち上がりは確認されていないが、覆土の堆積状況から推して、幅4m程の周溝と思われる。

石室

埋葬主体部は、周溝の規模及び出土遺物の様相から推して、地表下面に構築された横穴式石室と思われる。

出土遺物

溝の底部からほぼ完形の須恵器環1が、肩部から須恵器甕の破片1が出土した。また、覆土中からは、瓦2、土師器・須恵器の破片約300点が出土したがいずれも古墳の構築時期を示すような資料は認められなかった。



第30図 9号墳全体図

10号墳 (第31図、図版24) 位置 VI区34D-18ポイント

本古墳は、墳丘・周溝等の外部施設は全く検出されておらず、埋葬主体部も攪乱が著しく、遺存状態が極めて芳しくなかった。また、遺物も全く出土しなかった。

石室

輝石安山岩の河原石及び割れ石を用いた、南北方向に長軸を持つ箱式棺状竅穴式石室であると考えられる。西壁の根石5石と北東隅の2石が辛うじて原位置を保っており、30~40cm大の河原石の小口面を内側に据えられていた。なお、北端部には5石の割れ石が崩れ落ちたような状態でまもっていた。また、北半部では、床面に径10~15cm大の河原石を敷き並べた状態が確認された。規模は、南側に偏って構築されてい

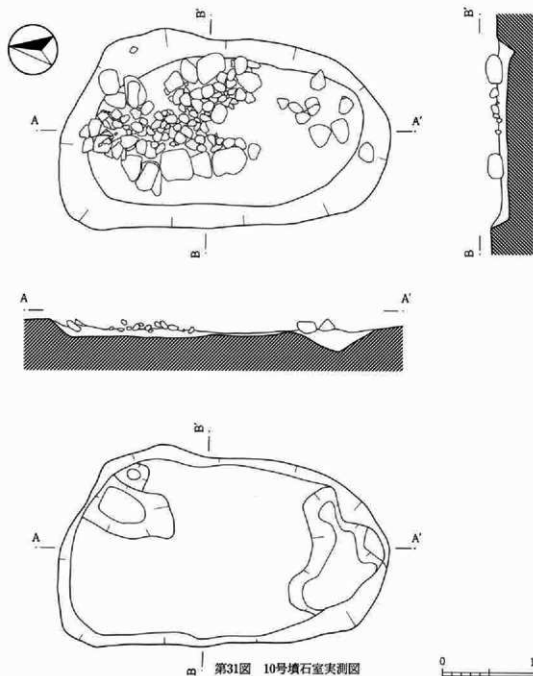
るが掘り方の状態から推して、長さ2.5m・幅70cm程の大きさと思われる。遺存した西壁の走向はN-11'-Wである。

掘り方

重機による表土掘削終了後の遺構検出段階で確認されたものであるため、掘り込み面及び上部の状況は詳らかでないが、平面形は南北方向に長軸を持つ不整隅丸方形を呈する。規模は、東西方向1.8~2.1m・南北方向3.5m、深さ10~20cmを測る。約15°前後の傾斜を以てローム層を20cm程掘り埋めており、底面は中央部がややこもりとしていた。石室は、底面に10cm程の厚さで客土して整地した上に根石を据えて構築されていた。

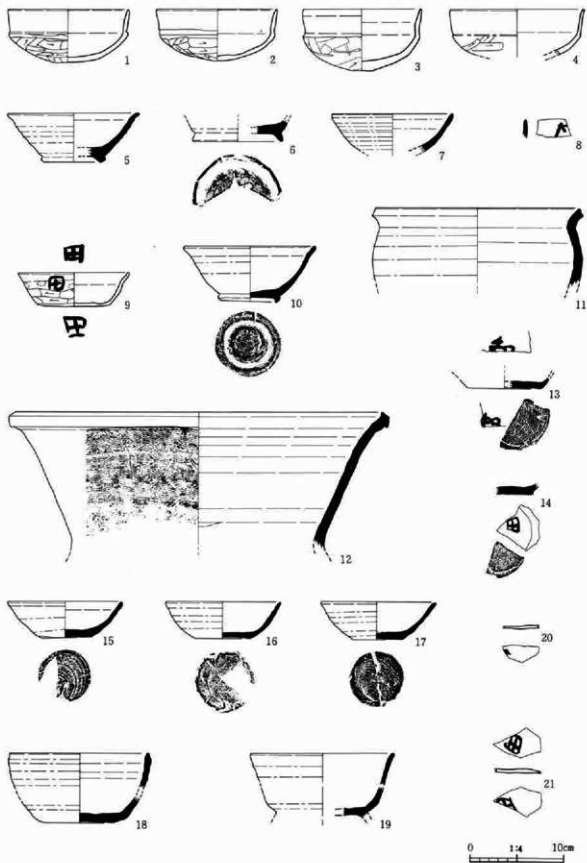
出土遺物

遺物は全く出土しなかった。

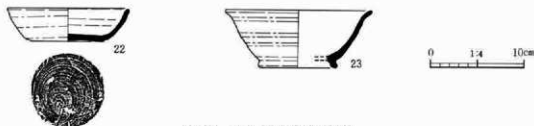


第31図 10号墳石室実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第32図 古墳出土遺物実測図(1)



第33図 古墳出土遺物実測図(2)

第8表 古墳出土遺物観察表

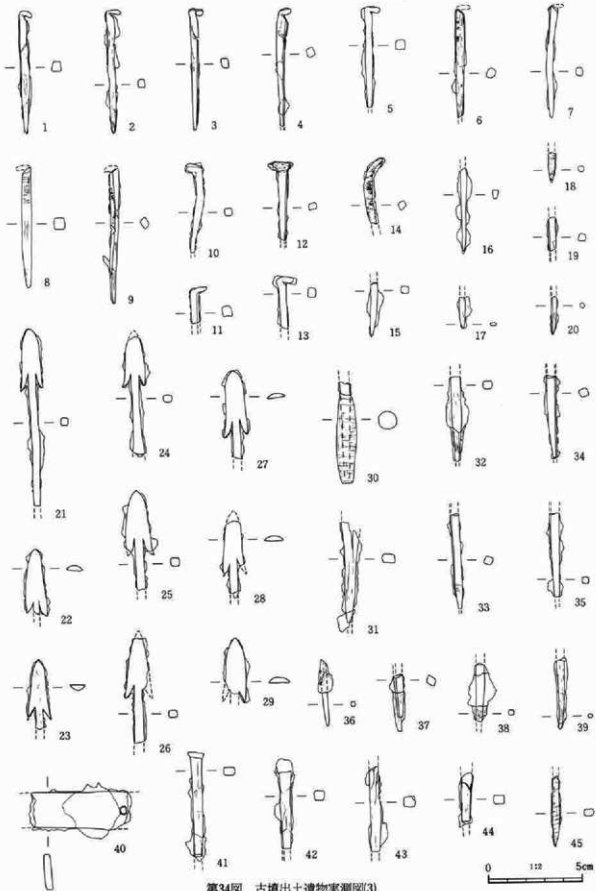
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 0001	坏 (土師器)	完形 口 13.0cm 高 5.6cm	2号墳 周堀内	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。棒状工具によるナデで横を作る。体部へ口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 0002	坏 (土師器)	完形 口 13.0cm 高 5.5cm	2号墳 周堀内	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。棒状工具によるナデで横を作る。体部へ口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 0003	坏 (土師器)	口縁一部欠 口 13.0cm 高 6.5cm	2号墳 周堀内	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。棒状工具によるナデで横を作る。体部へ口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 0004	坏 (土師器)	口残存 口 14.4cm	2号墳 主体部覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。棒状工具によるナデで横を作る。体部へ口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
5 0005	高台付筒 (須恵器)	口残存 口 14.2cm 高 5.2cm 底 6.9cm	6号墳 周堀覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 0006	高台付筒 (須恵器)	底部口残 底 9.7cm	6号墳 周堀覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
7 0007	坏 (須恵器)	口縁口残 口 13.0cm	6号墳 主体部覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 0008	坏 (須恵器)	口縁部破片	6号墳 周堀覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明
9 0009	坏 (土師器)	口残存 口 12.0cm 高 3.6cm	7号墳 周堀覆土中	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部下半周削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 底部内・外面、体部外面に墨書有り。釈文「田」	墨書土器
10 0010	高台付筒 (須恵器)	完形 口 14.2cm 高 5.8cm 底 6.6cm	7号墳 不詳	①細砂を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炭・軟質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
11 0011	広口罍 (須恵器)	口縁部小片 口 22.0cm	7号墳 周堀覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
12 0012	罍 (須恵器)	口縁口残 口 39.3cm	7号墳 周堀覆土中	①砂粒・細砂を含む ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 櫛歯き波状文。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
13 0013	坏 (須恵器)	底部口残 底 8.0cm	7号墳 周堀覆土中	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。 内面 回転によるナデ。	底部内・外 面に墨書有 り。 釈文「知?」
14 0014	坏 (須恵器)	底部破片	7号墳 不詳	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・硬質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。体部下端強い横 ナデ。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文「田」

第2章 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考	
15	0015	環 (須恵器)	口縁一部欠 口 12.4cm 高 3.8cm 底 5.4cm	8号墳 周瀬屋土中	①細礫を多く含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
16	0016	環 (須恵器)	1/2残存 口 12.4cm 高 6.0cm 底 5.9cm	8号墳 周瀬屋土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
17	0017	環 (須恵器)	口縁1/2欠 口 12.3cm 高 4.0cm 底 5.6cm	8号墳 周瀬屋土中	①細礫を含む。 ②灰黄褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
18	0018	鉢? (須恵器)	1/2残存 口 14.8cm 底 7.5cm	8号墳 不詳	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
19	0019	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.6cm	8号墳 周瀬屋土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(剝落)口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
20	0020	環 (土師器)	底部破片	8号墳 周瀬屋土中	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色 ③酸化灰・良好	外面 手持ち置削り。 内面 蓋ナデ後、ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明
21	0021	環 (土師器)	底部破片	8号墳 周瀬屋土中	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色 ③酸化灰・良好	外面 手持ち置削り。 内面 蓋ナデ後、ナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「田」
22	0023	環 (須恵器)	口縁一部欠 口 13.0cm 高 3.5cm 底 7.7cm	9号墳 周堀内	①砂粒を少し含む。 ②灰黄褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
23	0024	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.8cm 高 6.1cm 底 8.6cm	9号墳 周瀬屋土中	①砂粒を含む。 ② ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第9表 古墳出土金属遺物観察表

No.	名称	出土遺構	長さcm	重さg	備考	No.	名称	出土遺構	長さcm	重さg	備考	
1	釘	1号墳	6.5	4.5	頭部は一端を薄く圧縮した後、一方に折り曲げており、胴部との境はタガネ使用のために鋭くびれ込んでいる。1〜3はほぼ定形で胴部の一辺は4〜5mmを測る。	24	鏃	2号墳	6.0	5.8	身部には長さ9mm程の傷が有る。厚さ約3mmで、片丸造り。30には鍔縁が認められるが、他のものははっきりとしない。また、完形品は無いが、長頸部の種類に属する。	
2	釘	#	6.6	4.2		25	鏃	#	5.3	5.7		
3	釘	#	6.5	3.6		26	鏃	#	5.6	4.4		
4	釘	#	6.2	3.9		27	鏃	#	4.7	3.7		
5	釘	#	5.3	3.3		28	鏃	#	4.1	3.1		
6	釘	#	5.9	3.8		29	鏃	#	3.5	2.4		
7	釘	#	6.0	2.9		30	鏃	#	5.6	5.6		
8	釘	#	6.5	4.9		31	鏃	#	5.6	6.7		
9	釘	#	7.1	4.4		32	鏃	#	4.5	4.5		
10	釘	#	4.8	2.9		33	鏃	#	5.1	3.3		
11	釘	#	2.1	1.5		34	鏃	#	4.6	3.3		
12	釘	#	4.2	3.1		35	鏃	#	4.5	3.4		
13	釘	#	2.9	1.9		36	鏃	#	3.6	1.5		
14	釘	#	3.5	2.1		37	鏃	#	3.1	2.1		
15	釘	#	2.8	1.4		38	鏃	#	2.9	3.7		
16	釘	#	4.5	1.8		39	鏃	#	3.8	2.2		
17	釘	#	1.7	0.7		40	不明	#	5.5	19.2		刀の茎部分か。
18	釘	#	1.2	0.5		41	釘	6号墳	5.8	5.9		1号墳出土のものよりもやや大振りの釘。
19	釘	#	1.8	0.8		42	釘	#	4.8	4.9		
20	釘	#	2.1	0.4		43	釘	#	4.6	5.6		
21	鏃	2号墳	9.5	7.1		44	釘	#	2.9	2.3		
22	鏃	#	3.6	2.9		45	釘	7号墳	3.8	1.9		
23	鏃	#	4.8	2.6								



第34図 古墳出土遺物実測図(3)

(2) 殖蓮村第71号古墳

上武道路の南側、粕川と主要地方道伊勢崎・大間々線とに挟まれてある。伊勢崎市本関町1298-1に所在し、本報告の古墳からは約200m南のところに位置する。

昭和43年3月、群馬大学の尾崎喜左雄教授が、伊勢崎市教育委員会から委託を受け、大沢文之七氏が発掘調査を実施した。その後、「群馬県史 資料編3」に大沢氏が概要を発表しているが、出土遺物の実測図が発表されていなかった。今回、本関町古墳群の一部が上植木光仙房遺跡として発掘調査され、公刊されるに伴い、殖蓮村第71号古墳がその中核的位置を占めることから、出土遺物を実測させていただき、年代観を確定することになった。^{注1}

墳丘

前方部をN-49°-Wで北西面する小型の前方後円墳である。前方部前半は、西側を南流する粕川の浸蝕で削られており全長は不明である。

墳丘は、後円部の径20.7m・高さ3.46m（南側）、くびれ部幅11.5mの規模を持つ、通常の前方部を持つとすれば全長は40m内外と考えられる。前方後円墳としては小型の部類になる。

墳丘は二段築成であり、墳丘斜面には河原石の葦石がある。下段の高さは0.35~0.65mあり、上段丘との間に幅1.2~1.5mの平坦面があり、円筒墳輪列の樹立があった。墳丘裾部には葦石根石として大振りな河原石が使用されているが、北側くびれ部では、後円部裾の根石が前方部墳丘内に入り込み、前方部から後円部に接続する葦石根石は、それより0.24mほど高く設置されている。くびれ部の前方部根石は、明らかに盛土の上に設置されており、少なくとも後円部下段丘造成後の設置であることがわかる。後円部と前方部の接続を断ち割り調査した結果でないので断定はできないが、前橋市王山古墳も同様の例として知られており、前方後円墳の築造方法を解明する資料として貴重である。

周堀は周辺が民地のため調査できなかったが、南側には窪みがあり、明らかに周堀の痕跡と思われた。

石室

横穴式石室は、後円部南側にS-16°-Wで開口する。扉石安山岩割石を用いた乱石積の両袖型石室である。後道部の天井石がはずされている他は、完存していた。

石室全長は6.14mである。玄室は地山の黒色土を数10cm削り込み、ローム漸移層上に構築される。長さ3.40m・奥壁幅1.75m・奥壁高2.04mである。床面には魔大の河原石が敷かれている。

後道は柵石より0.2m高い床になる。長さ2.74m・奥壁1.23m・入口幅0.94mである。入口部から奥方1mほどが奥へ20cmほど下り傾斜となっている。従って玄室床面より入口が40cm高くしつらえてあることになる。

石室入口は上段葦石と両端部を合致しており、閉塞石も葦石面とそろえている。ただ、この部分の葦石は60°ほどの傾斜を持ち、周辺の葦石より急勾配となっている。

入口床は上段葦石根石より10cmほど低い。

入口前方には墳丘裾からのスロープがつくられ、両側は下段葦石からの石積で構成される。遺存状態の良い左側では、葦石から直角に屈曲した石積は上り勾配で石室入口左壁にとりつく。この石積の根石は石室入口左袖より50cm高く、左側上段葦石より40cm高い。スロープの底面はローム土で固められていた。このことは、このスロープおよび石積が石室への通路を形成していると共に、その造成は、石室への埋葬が終了し、閉塞が行われた後のものであることを示している。ちなみにスロープ面と石室入口上端との隙間は、高さで

25cmしかないことになる。

出土遺物

石室内は玄室が床面下まで荒らされていたためか、無柄平根鉄鍔4（第38図1～4）および柳葉形鉄鍔1（第38図5）が出土したのみである。後藤分類^{註1}によれば1～4は有孔広鋒凹長三角形形式に当たり、いずれも鉄鍔の中心部に穿孔がみられ、1・2には篋の木質痕がみられる。5は関無片丸造鬘箭式に属する。多分、棘篋被を伴うものであろう。

石室入口右側の基段上から須恵器の高坏・横瓶・提瓶、土師器の甕・小型甕・坏が出土している。いずれも調査終了間際の出土のため、詳細な位置が不明瞭であるが、状況からして一括とみてよいものである。

土師器はいずれも焼き締まりの良い赤褐色を呈し、2・3の胴部は粗い篋削りが顕著である。3の球形胴は古式を残すものの底部の削り痕を助案し、鬼高Ⅱ式の特徴を示しているといえる。

須恵器は灰褐色を呈し、成形・胎土等から在地の焼成になるものである。高坏の脚部の長脚化と一段透かし、提瓶および横瓶の口縁端部の整形からTK-10ないしTK-43並行と考えられる。

年代

古墳は小型の前方後円墳で葦石及び埴輪の配列が認められる。円筒埴輪は間隔をあけて基段上に設置される。破片ではあるが、形象埴輪も認められた。

石室は巨石を用い、玄室は若干の掘り方内に設置され、長さとの幅の比が2:1になる長方形プランを持つ。羨道は玄室よりやや短くなる。入口は閉塞後に石室入口下半および上段葦石の下部60cmほどを埋めて基段が設けられ、さらに入口へ向けての通路が付設されている。この施設は古墳への埋葬儀礼が終了した段階で造られたことは前述のとおりであり、この段階で古墳本来の使命が終わったとみてよい。入口右方の基段上から出土した土器群も、これの造作と一緒にその後の墓前儀礼に伴うものとみてよい。

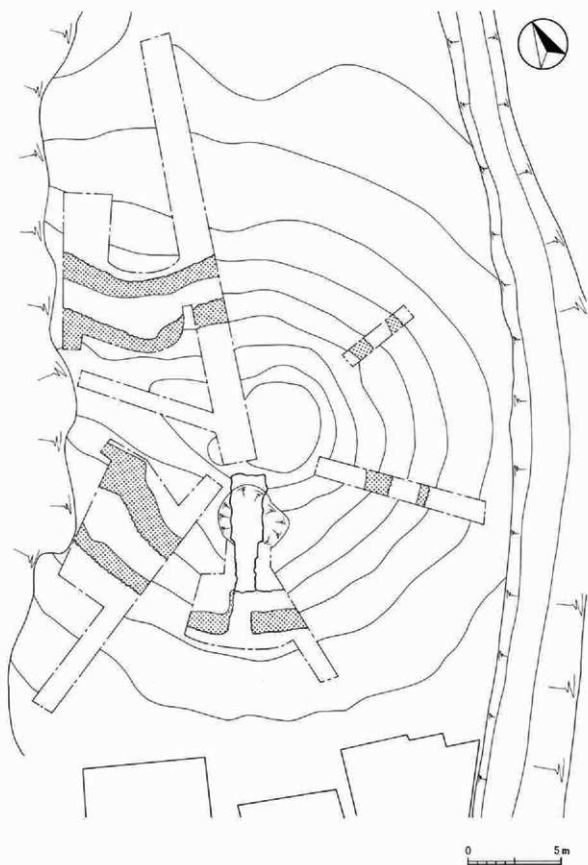
土器の示す年代は6世紀中頃を示している。また、玄室出土の鉄鍔は古式の無茎鍔と棘篋被の新式のもととがあり、鉄鍔の形式の期間からみて、若干問題はあるものの、形式差があるものとみたい。おおよそ築造は6世紀第2四半期とみておきたい。

この年代観によれば、本調査で出土した堅穴小石室の古墳は、おおよそ5世紀末から6世紀中頃に位置付けられることから、殖蓮村第71号墳は、当初、堅穴小石室を主体部とする小古墳の被葬者から発展し、6世紀前半の段階で小規模とはいえ前方後円墳を築造し得る階層にまで伸展したことがうかがえる。しかし、その後はこの本関町古墳群には前方後円墳は築造されず、再び横穴式石室を主体部とする小円墳で構成されるようになる。

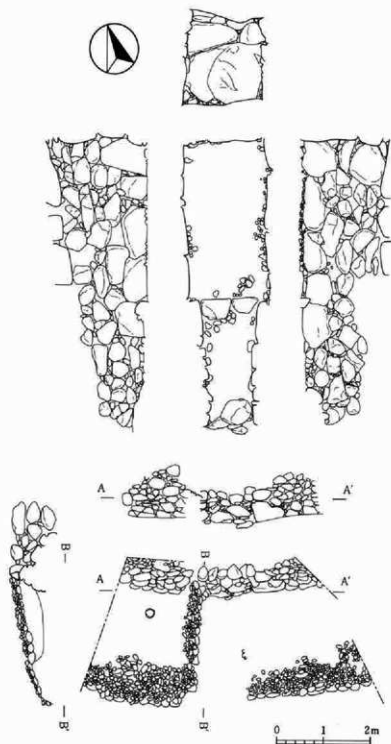
註1 本文を草するにあたり、実測図作成については調査主体の伊勢崎市教育委員会、調査担当の大沢玄之七氏よりご承諾を得た。

大沢玄之七 「殖蓮村71号古墳」 『群馬県史 資料編3』 昭和56年

註2 後藤守一 「上古時代鉄鍔の年代研究」 『日本古代研究』 所収 昭和17年

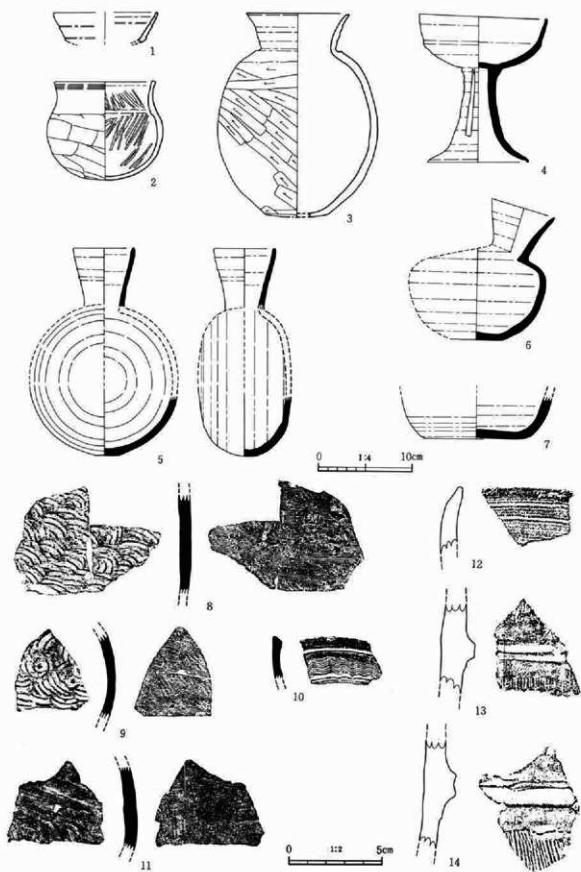


第35図 菟蓮村第71号墳全体図

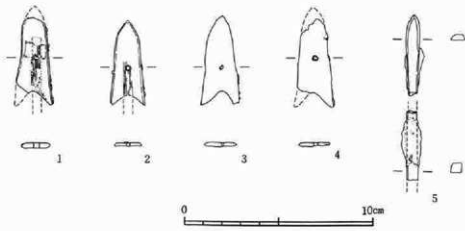


第36図 菟蓮第71号墳石室展開図

第II章 検出された遺構と遺物



第37図 瀬蓬第71号墳出土遺物実測図(1)



第38図 殖蓮第71号墳出土遺物実測図(2)

第4節 平安時代の住居と出土遺物

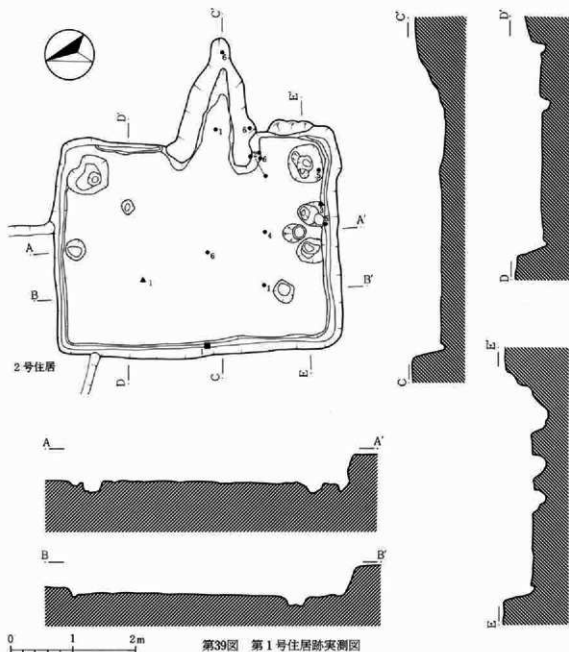
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第39・40図、図版28・58) 位置 VI区35D—33グリッド

本住居跡は、2号住居跡を壊して作られていた。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.42m・南北方向4.56mを測り、床面積は13.3m²である。主軸方位はN-14°-Eである。

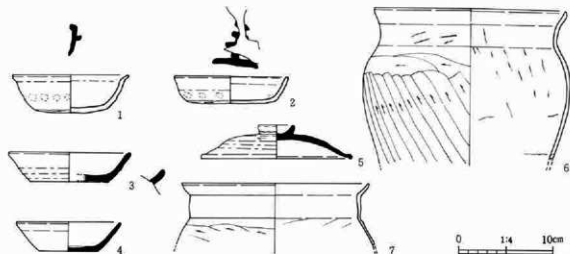
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高12~28cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、西側の両隅を除いて強く踏み締められている。各辺の壁下には、幅約10cm・深さ10cm前後の周溝が巡っていた。南東隅には長径63cm・短径53cm・深さ



25cmの貯蔵穴が穿たれており、焼土・炭化物を含む暗褐色土が詰まっていた。他の7個のピットについては、本住居に後出するものであるが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から45cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。長さ約45cmの袖を持ち、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。燃焼部の中心はちょうど壁際に有り、強く焼け込んでいた。焚口幅60cm・奥行き95cmを測り、全長165cmを確認した。火床面から約30°の角度で30cm程立ち上がった位置に、煙道に用いられたと考えられる土師器壁が残っていた。掘り方はやや先ぼりをする馬蹄形であったが、特別な遺構は検出されなかった。遺物は竈周辺に集中して出土した。鎌・砥石等も出土している。



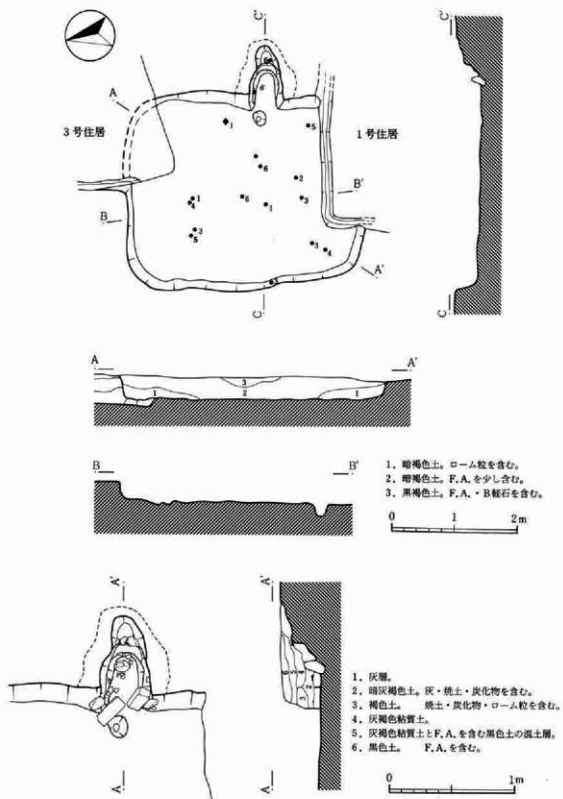
第40図 第1号住居跡出土遺物実測図

第12表 第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 30	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.4cm 高 4.0cm 底 7.6cm	竈周辺	①砂粒を少し含む。 ②におい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち煎削り。体部指張圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「人」
2 31	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.2cm 高 2.9cm 底 9.5cm	竈周辺	①砂粒を少し含む。 ②におい橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち煎削り。体部指張圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「王」
3 32	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 3.1cm 底 8.4cm	南東部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明。
4 33	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.2cm 高 3.1cm 底 6.2cm	南東部	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部全面回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	口唇部にタール付着。
5 34	蓋 (須恵器)	1/2残存 口 16.2cm 高 3.6cm 横 3.9cm	南東部	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 天井部回転削り；握み貼付け後ナデ。口唇部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口唇部握伏工具による押さえ。	
6 35	甕 (土師器)	口～体部 口 20.6cm	煙道部	①砂粒を多く含む。 ②におい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向煎削り。肩部横方向煎削り。口縁部横ナデ。 内面 体部粗い荒ナデ。後ナデ。口縁部横ナデ。	煙道の構造材に使用されていた。
7 36	甕 (土師器)	口縁部1/2 口 20.3cm	覆土上層	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向煎削り。肩部横方向煎削り。口縁部横ナデ。 内面 体部粗い荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第2号住居跡 (第41・42図、図版28・58) 位置 VI区35D-30グリッド

本住居跡は、1・3号住居跡と重複していた。先後関係については、3号住居跡→本住居跡→1号住居跡



第41図 第2号住居跡実測図

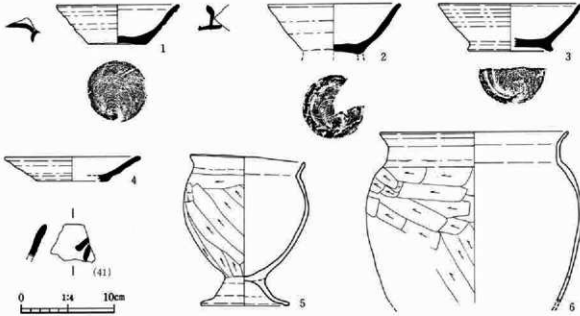
の順であることが確認できたが、平面での遺構確認段階では特定できなかったために北東隅の壁を一部壊してしまった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、南辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.20m・南北方向3.78mを測り、主軸方位はN-12°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高15~22cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、砂岩の加工材及び川原石と粘土を使用して構築されていた。焼き込みは強く、焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。両袖部に川原石を立て、砂岩の加工材2石を架構して焚口を作り、燃焼部の中央に川原石の支脚を据えて使用したものと考えられる。焚口幅40cm・奥行60cmを測り、全長105cmを確認した。火床面から約30°の角度で35cm程立ち上がった位置に、煙道に用いられたと考えられる土師器甕が残っていた。掘り方は不整半円形で、川原石の据え痕が認められた他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。蛇紋岩製紡錘車・砥石等も出土している。



第42図 第2号住居跡出土遺物実測図

第13表 第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 37	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 4.1cm 底 6.2cm	中央部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文「丁」
2 38	高台付甕 (須恵器)	1/2残存 口 14.2cm	南東部	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台付付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	二次焼成によりやや軟化。

第11章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3 39	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.4cm 高 5.6cm 底 9.1cm	南西部	①砂粒・細礫を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 40	皿 (須恵器)	1/2残存 口 14.6cm 高 2.5cm 底 7.2cm	北西部	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
5 42	脚台付壺 (土師器)	完形 口 12.4cm 高 16.0cm 底 9.6cm	南東部	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部斜め方向寛削り。肩部縦方向寛削り。 口縁部横ナデ。底部脚貼付け後、全周ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 43	壺 (土師器)	下半部欠損 口 20.2cm	壺周辺	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部斜め方向寛削り。肩部縦方向寛削り。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、粗いナデ。口縁部横ナデ。	

第3号住居跡（第43・44回、図版28・58） 位置 VII区35D-27グリッド

本住居跡は、北側の上部を新しい2条の溝によって壊されていた上に、南西隅の上部を2号住居跡によって削られていた。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が長い横長型で、均整のとれた隅丸方形を呈する。東辺の甕以南には、50×80cmの棚状施設と考えられる底面に粘土が張られた落ち込みが認められた。規模は、東西方向3.30m・南北方向4.50mを測り、床面積は13.4m²である。主軸方位はN-5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高39～47cmのローム層の壁面を検出した。

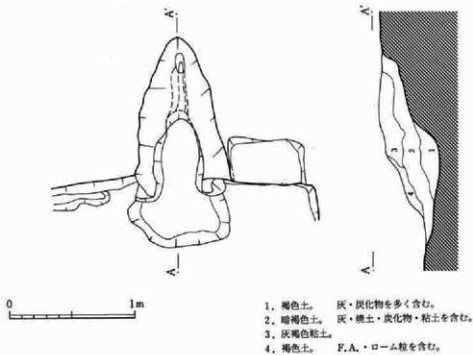
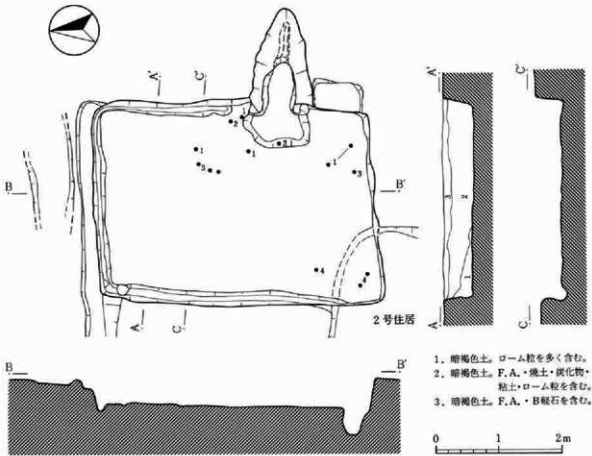
床面はほぼ平坦で、南辺及び南東部を除いた壁下には、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っており、南東隅には隅丸方形の貯蔵穴が穿たれていた。（図面記録に一部不備があるために詳細は不明である。）なお、柱穴は検出されなかった。

甕は、東辺の中央から75cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。長さ約15cmの袖を持ち、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焼け込みは強く、焚口幅45cm・奥行80cmを測り、全長165cmを確認した。火床面から約45°の角度で35cm程立ち上がった位置から煙道部になる。煙道は径約15cmで、60cm程ほぼ水平に延びて立ち上がる。掘り方はやや先ぼりをする馬蹄形で、火床面下は30cm程掘り進めて客土していたが、他に特別な遺構は検出されなかった。

遺物は甕周辺に集中して出土した。

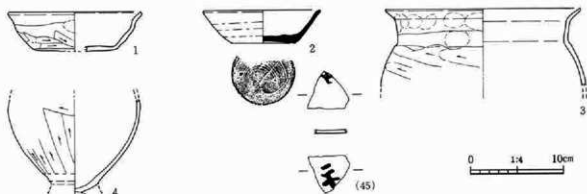
第14表 第3号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 44	坏 (土師器)	1/2残存 口 14.3cm 高 4.2cm	壺周辺	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭正直を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 46	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.6cm 高 3.4cm 底 6.8cm	壺周辺	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 47	壺 (土師器)	1/2残存 口 21.0cm	壺周辺	①細粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・良好	肩部縦方向寛削り。胴部指頭正直を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 48	脚台付壺 (土師器)	1/2残存	南西部	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向寛削り。脚貼付け後、ナデ。 内面 粗い指ナデ。火はぜによる割傷有り。	



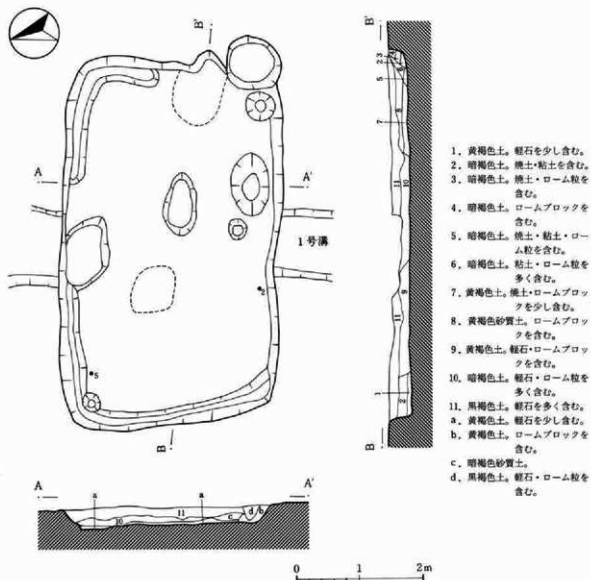
第43図 第3号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第44図 第3号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡 (第45・46図、図版28・58) 位置 V区26D-17グリッド



第45図 第4号住居跡実測図

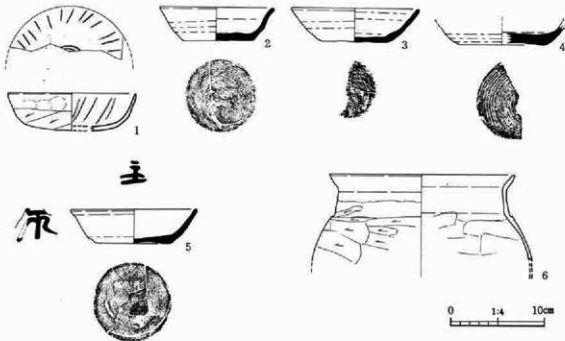
本住居跡は、耕作に伴うと考えられる擾乱に加えて、1号溝及び39号土坑が重複していたが、比較的良好な遺存状態であった。先後関係は、本住居がいずれにも先行することが確認されている。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、南及び西辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向5.88m・南北方向3.45mを測り、床面積は17.3㎡である。主軸方位はN-74°-Wである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高28~43cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、踏み締まりはさほど強くなかった。南辺及び東辺の南半部を除いて、幅約20cm・深さ3cm前後の浅い周溝が巡っていた。P₁は長径98cm・短径56cm・深さ10cmで、灰色粘質土及び焼土を含む褐色土が詰まっていたが性格は不明である。他の5個のピットは、いずれも本住居より後の所産と思われる。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から45cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、竈前約80cmまで焼土の分布が認められたことから推して、燃焼部はちょうど壁際に位置すると思われる。掘り方は約6cmの浅い窪みで、西側に緩く傾斜していた。

遺物はほぼ全域に散在して出土したが、量は少なかった。覆土中より刀子が出土している。



第46図 第4号住居跡出土遺物実測図

第15表 第4号住居跡出土遺物観察表

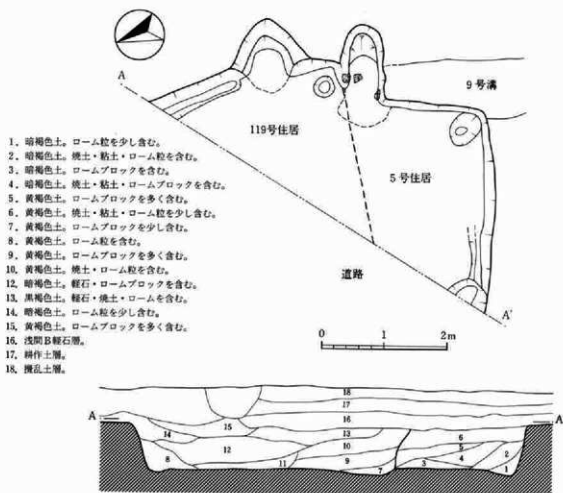
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 49	坏 (土器類)	片残存 口 13.8cm 高 3.9cm 底 4.5cm	竈内	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持ち良削り。体部指痕旺盛を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。二重端文を施す。	
2 50	坏 (須恵器)	完形 口 12.2cm 高 3.5cm 底 7.6cm	南西部	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元灰・硬質	右側転クロコ整形。 外面 底部回転未削り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。火はぜによる剥離有り。二次焼成によりやや軟質化。	

第II章 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
3 51	環 (須恵器)	1/2残存 □ 13.6cm 高 3.5cm 底 7.2cm	竈内	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 53	環 (須恵器)	1/2残存 高 9.2cm	竈内	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
5 52	環 (須恵器)	1/2残存 □ 13.6cm 高 3.6cm 底 8.2cm	北西部	①砂粒を含む。 ②にぶい黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部全面回転施相り。体部下端絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内面・体部外面に書有有り。釈文「主」
6 54	甕 (土師器)	1/2残存 □ 19.8cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向更相り。肩部粗い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第5号住居跡(第47・48図、図版29・58) 位置 IV区42C-14グリッド

本住居跡は、西側が生活道路にかかっていた上に、119号住居跡及び9号溝によって壊されていたので部分的な調査にとどまってしまった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東辺2.20m・南辺3.20mの範囲まで確認した。東辺の走向はN-21°Eである。



第47図 第5・119号住居跡実測図

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高64～75cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、南側を除いては掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南辺の西側には、幅約15cm・深さ10cm前後の周溝が掘られていた。南東隅には長径57cm、短径45cm・深さ48cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から焼石と土器が出土した。(土器は所在不明のため図示できなかった。)また、南西部には深さ7cmの落ち込みが認められたが、詳細は不明である。なお、柱穴は検出されなかった。南側の掘り方は、10～20cmの深さがあった。

竈は、東辺の南東隅から210cm程北寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。左袖部を壊されていたが、石の遺存状態から推して、焚口幅40cm・奥行70cm程の大きさと考えられる。掘り方は馬蹄形で約10m掘り下げ、火床面下には長径60cm・短径50cm・深さ28cmの長円形の窪みが認められた。

遺物は、墨書土器の破片が多く出土した。

第119号住居跡(第47・48図、図版29・58) 位置 IV区42C-14グリッド

本住居跡は、5号住居跡及び9号溝と重複しており、西側が生活道路にかかっていたため、部分的な調査にとどまってしまった。先後関係については、土層断面の記録に明らかのように5号住居跡→本住居跡→9号溝の順になることが確認されている。平面形は、5号住居跡と殆ど重なっていたため、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると思われるが、定かではない。

床面は、中央部がややこもりとしていたがほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。5号住居跡の床面とのレベル差は約3cmで、東辺の竈以北には、幅15～20cm・深さ5cm前後の周溝が確認された。また、竈の南側には径約37cm・深さ11cmの円形ピットが有り、内部から土師器が出土した。

竈は、南東部に粘土を使用して構築されており、燃焼部はちょうど壁際に有る。袖部を明確にし得なかったが、掘り方調査の結果、壁線上には径約25cm・深さ10cmの不整形ピットが穿たれていた。

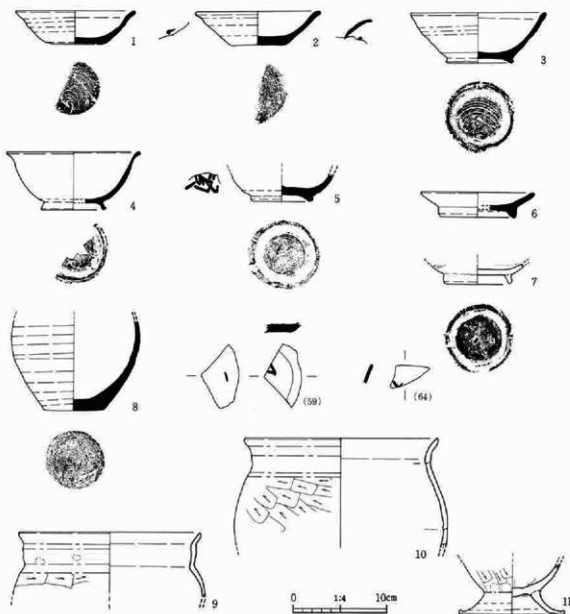
全体の様相から推して、5号住居跡の建て替えの可能性が高い。

第16表 第5・119号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 55	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 3.5cm 底 5.4cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。体部下端絞り込み。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 57	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 3.5cm 底 5.9cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文不明
3 56	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.5cm 高 5.3cm 底 7.2cm	南西部	①砂粒を少し含む。 ②赤黒色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	二次焼成によりやや軟質化。
4 58	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.3cm 高 6.1cm 底 7.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②黄灰色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 60	高台付碗 (須恵器)	底部完形 底 6.0cm	覆周刃	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	体部外面に 漆書有り。 釈文「酒人」
6 62	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 口 12.1cm 高 2.6cm 底 8.4cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り難し技法不明。高台貼付け。口縁部 横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	秋岡産か。
7 63	高台付碗 (灰輪陶器)	底部完形 底 6.8cm	覆土中	①均質。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。覆け掛け。 外面 底部全面回転置削り後、高台貼付け。体部下 端回転置削り。 内面 回転によるナデ。	
8 1023	鉢 (須恵器)	1/2残存 底 6.6cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	

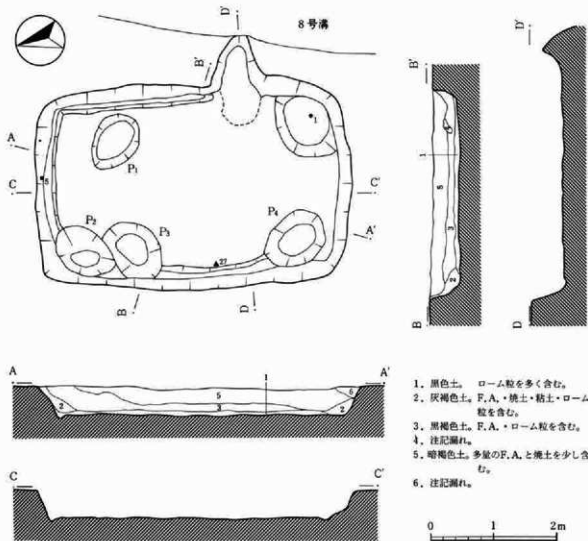


第48図 第5・119号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
9 569	壺 (土師器)	口縁部破片	床面直上	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向隆起。頸部指頸圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 561	壺 (土師器)	口縁部破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向隆起。頸部指頸圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 562	脚台付壺 (土師器)	1/3残存 高 11.4cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部脚貼付け後、丁寧なナデ。体部縦方向瓦削り。 内面 瓦ナデ後、ナデ。	

第6号住居跡 (第49・50図、図版29・59) 位置 IV区40C-38グリッド

本住居跡は、竈の先端部を8号溝によって切られていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的良好な隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.25m・南北方向5.50mを測り、床面積は12.7㎡程になるとと思われる。主軸方位はN-11°-Eである。



第49図 第6号住居跡実測図

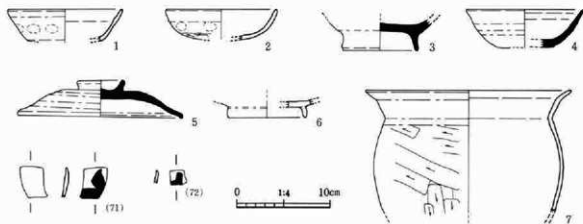
第二章 検出された遺構と遺物

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高42～49cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、径105～115cm・深さ14cmの不整形形の貯蔵穴が穿たれていた。覆土は、焼土・炭化物・ローム粒を含む暗褐色土であり、内部からは土器の細片と焼石が出土した。また、南辺を除いて幅約20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴は検出されなかったが、後世に掘られたと考えられる4個のピットの確認された。P₁は長径95cm・短径70cm・深さ26cm、P₂は長径105cm・短径70cm・深さ24cm、P₃・P₄は長径105cm・短径75cm・深さ21cmを測るが、いずれも性格は不明である。

竈は、東辺の中央から95cm程南寄りの位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。右袖には加工石材が残っており、焚口幅50cm・奥行77cmを測り、全長93cmを確認した。火床面下には、径55cm・深さ17cmの截頭円錐状の穴が掘られていた。

出土遺物は少なく、竈前面に集中して出土した。鉄釘が出土している点が注目される。



第50図 第6号住居跡出土遺物実測図

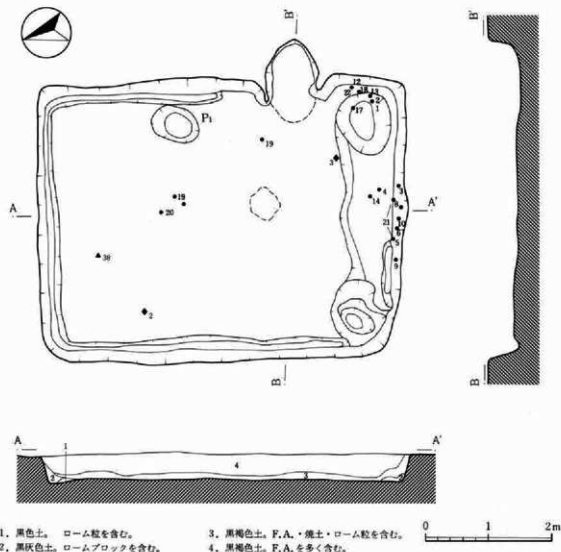
第17表 第6号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 65	坏 (土師器)	1/2残存 □ 14.8cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り痕有り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 66	坏 (土師器)	1/2残存 □ 11.8cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り痕有り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
3 70	高台付碗 (須恵器)	底部残存 底 8.0cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4 73	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 12.6cm 高 4.0cm 底 6.0cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 74	蓋 (須恵器)	1/2残存 口 17.7cm 高 3.8cm 横 5.2cm	北東部 26cm	①細礫を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 天井部回転旋削り後、柄み貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
6 75	高古付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 底 8.3cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 貼付け高台。	
7 76	壺 (土師器)	1/2残存 口 22.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②におい橙色 ③還元炎・良好	外面 体部縦～斜め方向旋削り。肩部横方向旋削り。 頸部粗い旋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 旋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第7号住居跡(第51～53回、図版29・59) 位置 IV区42C-42グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南辺がやや乱れるが均整のとれた長方形を呈する。規模は、東西方向4.45m・南北方向5.80mを測り、床面積は22.5㎡である。主軸方位はN-16°-Eである。



第51図 第7号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高44～49cmのローム層の壁面を検出した。

床面は、南壁付近を除いてほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。中央部に強く焼けた部分が認められ、南辺と東辺の南側を除いた壁下には、幅15～20cm・深さ8cm前後の周溝が掘られていた。また、南東隅には長径100cm・短径90cm・深さ23cmの不整形の貯蔵穴が穿たれており、上層部からは須恵器杯の上に土師器杯2個が重なった状態で出土した。P₁は長径75cm・短径50cm・深さ15cmを測り、南壁付近は不整形に深さ10cm程窪んでおり遺物が集中して出土したが、共に性格は不明である。床面下精査の結果、北東部において4個のビットを確認したが、性格は不明である。

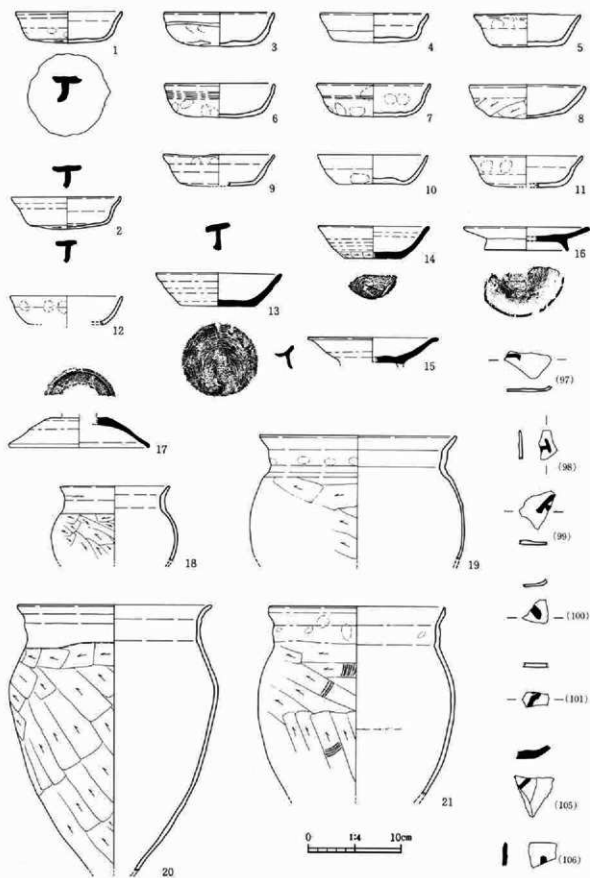
竈は、東辺の中央から115cm程南寄りの位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。袖が20cm程張り出し、燃焼部は馬蹄形に壁外に位置する。焚口幅45cm・奥行90cmを測る。掘り方は半円形で、火床面下は長径145cm・短径100cm・深さ16cm程の長円形の窪みであり、砂岩の加工材3石が立てられたまま残っていた。

遺物は、南壁際に多く集中して出土した。土師器壺は、貯蔵穴に倒れ込むような形で潰れた状態で検出された。鉄鍬及び紡錘車2個が出土したことは注目される。布目瓦の出土も認められた。

第18表 第7号住居跡出土遺物観察表

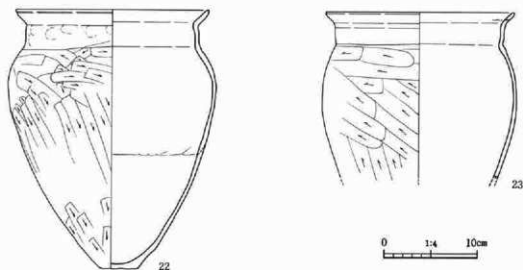
No	種類・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 77	杯 (土師器)	完形 □ 11.5cm 高 3.3cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。口唇部内側にやや折れ曲がる。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「丁」
2 78	杯 (土師器)	完形 □ 11.8cm 高 3.3cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「丁」
3 79	杯 (土師器)	ほぼ完形 □ 11.8cm 高 3.6cm	南東部 17.5cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
4 80	杯 (土師器)	1/2残存 □ 11.6cm 高 3.1cm	南東部 -1.5cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
5 82	杯 (土師器)	1/2残存 □ 11.4cm 高 3.3cm	南西部 -3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
6 83	杯 (土師器)	ほぼ完形 □ 11.9cm 高 3.5cm	南西部 10.5cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 85	杯 (土師器)	1/2残存 □ 12.2cm 高 3.5cm	東岡辺	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
8 86	杯 (土師器)	1/2残存 □ 12.6cm 高 3.6cm	南東部 -16.5cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文不明
9 87	杯 (土師器)	1/2残存 □ 11.9cm 高 3.4cm	南西部 12.5cm	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
10 89	杯 (土師器)	1/2残存 □ 11.8cm 高 3.0cm	南西部 13.5cm	①砂粒を少し含む。 ②黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り製削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第52図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)

第II章 検出された遺構と遺物



第53図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
11 93	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.3cm	竈場辺	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り箇所削り。体部指頭圧痕を削い ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
12 94	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.0cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り箇所削り。体部指頭圧痕を削い ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
13 102	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 3.5cm 底 6.8cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	外面 底部回転糸切り後。周辺部回転箇所削り。口縁 部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「丁」
13 102	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.9cm 高 3.4cm	南東部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	外面 底部回転糸切り未調整。体部下端手持り箇所 削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
15 108	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 口 13.9cm 高 2.7cm 底 6.7cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後。高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「人」
16 107	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 口 13.5cm 高 2.5cm 底 9.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後。高台貼付け。口縁部横 ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
17 109	蓋 (須恵器)	1/2残存 口 14.7cm	貯蔵穴中	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 天井部上半回転箇所削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
18 169	壺 (土師器)	1/2残存 口 11.8cm	南東部 2.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向箇所削り。肩部横方向箇所削り。 頸部指頭圧痕を削い ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
19 111	壺 (土師器)	1/2残存 口 21.0cm	竈場辺 3.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部上平斜め方向箇所削り。肩部横方向箇所削り。 頸部指頭圧痕を削い ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
20 110	壺 (土師器)	1/2残存 口 29.7cm	中央部 1.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向箇所削り。肩部横方向箇所削り。 頸部指頭圧痕を削い ナデで消す。頸部～口縁部横 ナデ。 内面 底ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
21 112	甕 (土師器)	1/2残存 口 19.0cm	南東部 -7.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部下縦方向篋削り。体部上半斜め方向篋削り。肩部横方向篋削り。頸部指頭圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
22 114	甕 (土師器)	1/2残存 口 20.6cm 高 27.4cm 底 4.0cm	南東部 2.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部篋削り。体部斜め方向篋削り。肩部横方向篋削り。頸部指頭圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	口唇部に沈線が認められる。
23 113	甕 (土師器)	1/2残存 口 20.2cm	中央部 10.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部下縦方向篋削り。体部上半斜め方向篋削り。肩部横方向篋削り。頸部指頭圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第8号住居跡(第54~56図、図版30・59・60) 位置 IV区35C-35グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に2箇所・北辺に1箇所をもち南北方向が長い横長型で、南・北辺がやや張り出した隅丸不整形を呈する。床面から約50cm上面には四壁に沿って幅40~135cm程のベランダ状の落ち込みが認められた。規模は、外周の落ち込みが、6.00×6.10m・深さ約20cm、堅穴部分が東西方向3.60m・南北方向4.72m・床面積16.9㎡を測る。主軸方位は、ベランダ部がN-23°-E、堅穴部がN-25°-Eである。平面的にはやや北側に偏しているが、主軸方位はほぼ一致しているので、同時に設計されたものと考えられる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高48~50cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこもりとしており、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。東辺を除いた壁下には、幅約15cm・深さ6cm前後の周溝が巡っていた。南東隅には径80cm・深さ33cmの不整形の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器杯・甕が出土した。なお、柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、深さ10~30cmの4箇所のピットを検出したが、いずれも性格は不明である。

ベランダ部分の底面は、さほど強く踏み締められておらず、7箇所に径約40cm・深さ25cm前後のピットが検出されたが、配置がややまばらなため柱穴とは考えにくい。遺物は須恵器杯・皿等が底面に接した状態で出土している。

甕は3箇所に検出されているが、北東部のものは作り替えられたものであり、甕1が最終的に使用されていたものと考えられる。1は、川原石と粘土を使用して構築されており、袖部を明確にし得なかったが、燃焼部の中心はちょうど壁際に有る。火床面には川原石の支脚が立てられたまま残っており、上から土師器台付甕が被せられた状態で出土した。火床面から約80°の角度で50cm程立ち上がった位置から煙道部になる。煙道は約30°の角度で延びており、先端には土師器甕が伏せられて、補強材の役目を果たしていた。焚口幅60cm・奥行90cm程の大きさと思われる。

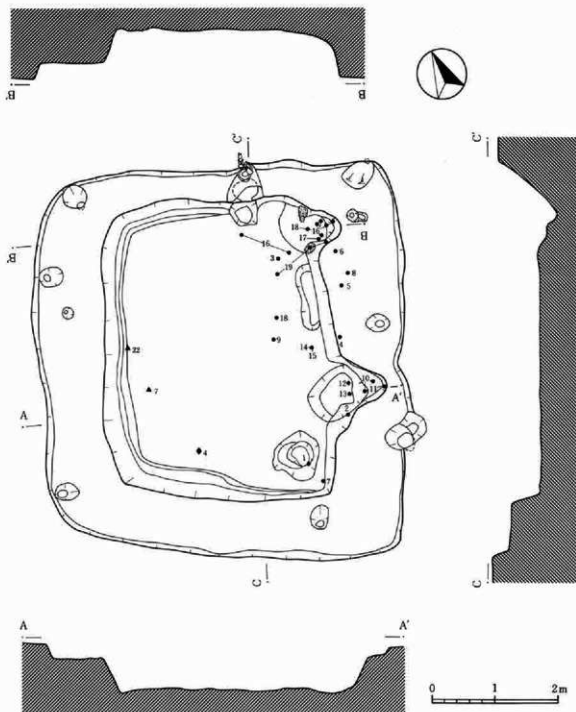
2は、砂岩・川原石・粘土を使用して構築されており、焚口がちょうど壁際に有り、燃焼部は半円形状に壁外に張り出す。両袖部に川原石を立て、砂岩の加工材を架構して焚口を作り、火床面の中央に川原石を立てて支脚としていた。焚口幅40cm・奥行45cmを測り、内部には土師器甕の口縁部と底部が組み合わされた状態で残っていた。火床面から約80°の角度で70cm程立ち上がる。

3は、粘土を使用して構築されており、袖部を明確にし得なかったが、燃焼部の中心はちょうど壁際に有り、火床面下には径40cm・深さ15cmの円形の窪みが認められた。火床面から約50°の角度で50cm程立ち上った

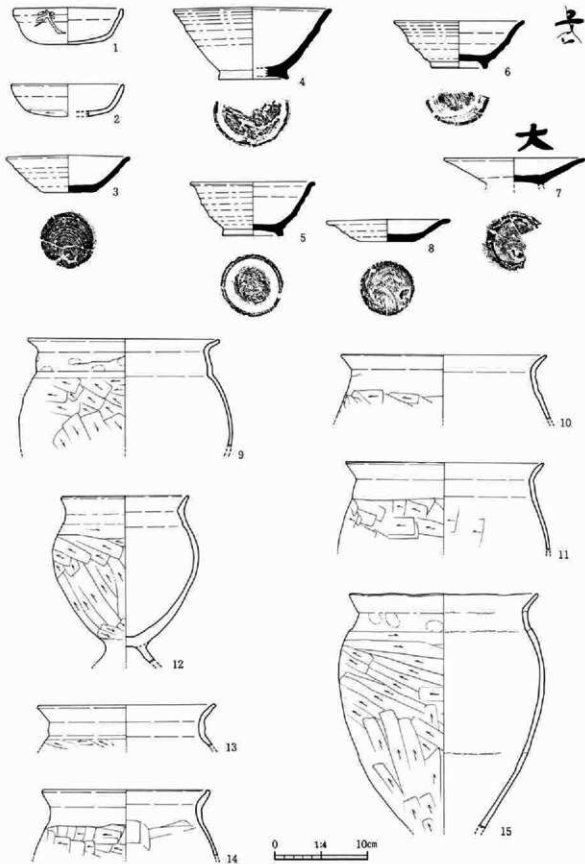
第II章 検出された遺構と遺物

た位置から煙道部になる。煙道には、土師器甕を上手に打ち欠いて使用していた。焚口幅45cm・奥行70cm程の大きさと思われる。3基のいずれについても、掘り方の調査では特別な遺構は検出されなかった。

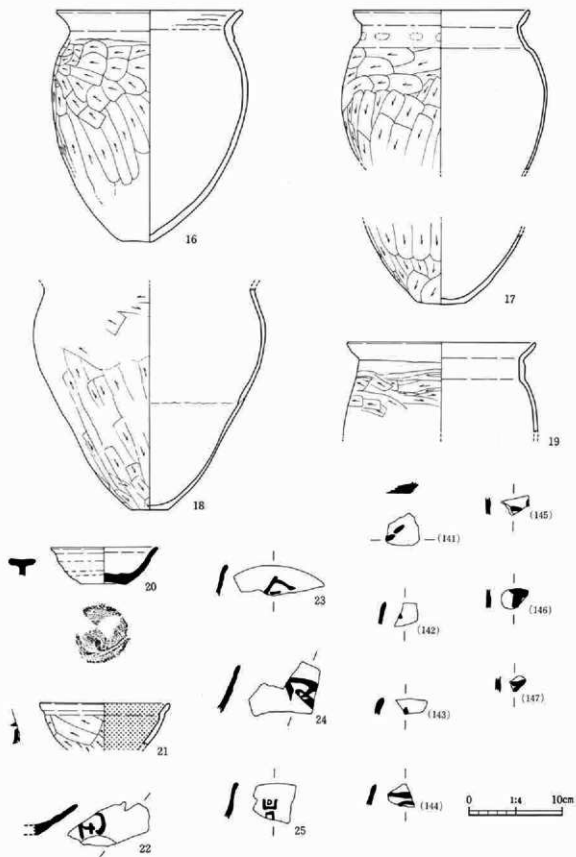
遺物は、東側に集中して出土しており、鉄製品・石製紡錘車・墨書土器・布目瓦の出土が注目される。



第54図 第8号住居跡実測図



第55図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第19表 第8号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 115	坏 (土師器)	1/2残存 口 11.7cm 高 3.9cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛がり。体部指頭圧痕を相い寛ナゲで消す。口縁部強い横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部強い横ナゲ。 底部内面に墨書有り。釈文不明。	体部外面に墨書有り。 釈文「夫」
2 117	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.2cm	龍岡辺 -7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛がり。体部指頭圧痕を相い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 132	坏 (須恵器)	2/3残存 口 13.3cm 高 3.9cm 底 6.0cm	北東部 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い縦り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 123	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 17.0cm 高 7.6cm 底 7.5cm	北東部 ベランダ -10.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
5 134	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 5.7cm 底 6.5cm	北東部 ベランダ 0.5cm	①砂粒・細礫を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。	
6 124	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm 高 5.0cm 底 6.0cm	北東部 ベランダ 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	体部内面に墨書有り。 釈文「子前」
7 128	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 口 15.1cm	南東部 11.5cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(刺窟) 口縁部横ナゲ。	底部内面に墨書有り。 釈文「大」
8 135	皿 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 2.4cm 底 5.6cm	北東部 ベランダ 2.5cm	①砂粒・細礫を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、未調整。口縁部強い横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。	
9 151	壺 (土師器)	1/2残存 口 20.5cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向寛がり。肩部横方向寛がり。頸部粗い寛ナゲ。口縁部強い横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部強い横ナゲ。	
10 167	壺 (土師器)	1/2残存 口 21.9cm	壺-1 6.5cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向寛がり。肩部横方向寛がり。頸部粗い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
11 164	壺 (土師器)	1/2残存 口 21.1cm	龍岡辺 7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色部 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向寛がり。頸部粗い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 強い寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
12 148	脚台付壺 (土師器)	1/2残存 脚台欠損 口 13.5cm	龍岡辺 3.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向寛がり。肩部横方向寛がり。頸部強い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。脚貼付け後、ナゲ。	
13 153	壺 (土師器)	1/2残存 口 19.0cm	壺-3 10.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向寛がり。頸部強い寛ナゲ。口縁部強い横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部強い横ナゲ。	
14 166	壺 (土師器)	1/2残存 口 18.0cm	壺-3 3.5cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向寛がり。頸部粗い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
15 150	壺 (土師器)	底部欠損 口 20.0cm	壺-3 3.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部下半縦方向寛がり。体部上半斜め方向寛がり。肩部横方向寛がり。頸部指頭圧痕を相い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
16 152	壺 (土師器)	1/2残存 口 19.9cm 高 24.5cm 底 3.1cm	龍岡辺 17.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部寛がり。体部下半縦方向寛がり。体部上半~肩部横方向寛がり。頸部粗い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
17 149	壺 (土師器)	下半部欠損 口 19.0cm	電-2	①砂粒を含む。 ②ふい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部下半縦方向削り。体部上半～肩部横方向削り。頸部強い横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
17 149	壺 (土師器)	高部完存 底 5.2cm	電-2	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部削り。体部縦方向削り。 内面 寛ナデ後、ナデ。	接点を持たないが上と同一体と考えられる
18 154	壺 (土師器)	1/2残存	電周辺 4.0cm	①砂粒を少し含む。 ②赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部削り。体部下半縦方向削り。体部上半～肩部横方向削り。 内面 寛ナデ後、ナデ。	
19 155	壺 (土師器)	1/2残存 口 20.2cm	電-2 9.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向削り。頸部粗い横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 強い横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
20 133	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.5cm 高 3.8cm 底 4.8cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端角い絞り込み。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「丁」
21 121	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②ふい褐色 ③酸化炭・硬質	外面 体部削り。口縁部強い横ナデ。 内面 黒色処理。墨磨き。口縁部強い横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
22 136	坏 (須恵器)	1/2残存	電掘り方	①砂粒を含む。 ②ふい黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「田」
23 137	坏 (須恵器)	小破片	貯蔵穴	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
24 138	坏 (須恵器)	小破片	電掘り方	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「刀」
25 139	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明

第9号住居跡(第57・58図、図版31・60) 位置 IV区28C-33グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に電を持ち南北方向が長い横長型で、西辺が長い隅丸の等脚台形状を呈する。規模は、東西方向3.80m・南北方向4.50～5.30mを測り、床面積は15.5㎡である。主軸方位はN-21°-Eである。

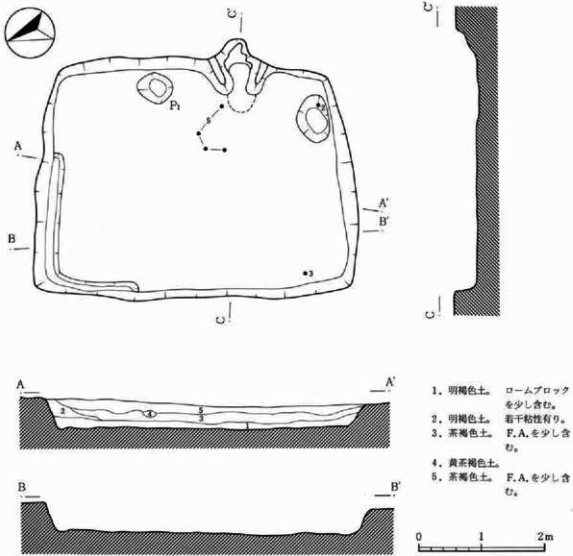
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高33～49cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み固められていた。北西隅には幅14～20cm・深さ3cm前後の浅い周溝が「L」状に掘られていた。また、南東隅には長径75cm・短径55cm・深さ10cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から墨書された土師器坏と須恵器甕の破片が出土した。P₁は径約50cm・深さ18cmを測るが、性格は不明である。

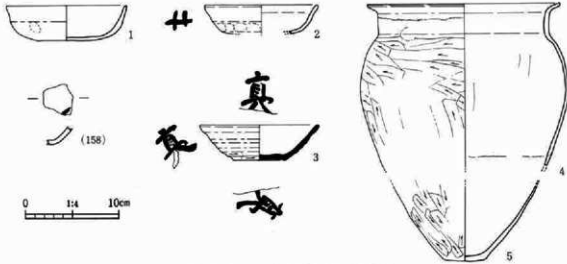
竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、瓦と粘土を使用して構築されていた。袖が35cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際にある。燃焼部の奥がしだいに広がるが、焚口幅40cm・奥行50cm程の大きさで、全長90cmを確認したが、焼け込みはさほど強くなかった。掘り方は、深さ15cm前後の不整半円形であり、灰と炭化物を少し含む黒褐色土が詰まっていた。

遺物は、竈の前面に集中して出土しており、瓦が散乱していた状況から推して、住居の廃棄に当たって意図的に竈を壊したものと考えられる。

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第57図 第9号住居跡実測図



第58図 第9号住居跡出土遺物実測図

第20表 第9号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 156	坏 (土師器)	片残存 □ 12.9cm 高 3.6cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 157	坏 (土師器)	片残存 □ 12.3cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②におい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
3 159	坏 (須恵器)	片残存 □ 12.8cm 高 3.7cm 底 5.6cm	南西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③還元炭・硬質	外面 底部回転糸切り未調整。体部下端手持り寛削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内・外面、体部外面に「真」墨書有り。
4 160	壺 (土師器)	片残存 □ 20.4cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向寛削り。肩部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。	
5	壺 (土師器)	片残存 底 4.4cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部斜め方向寛削り。 内面 寛ナデ後、ナデ。	4の下半部と考えられる。

第10号住居跡(第59・60図、図版31) 位置 IV区17C-28グリッド

本住居跡は、南東隅の上部に耕作に伴うと思われる擾乱が認められたが、比較的良好的な遺存状態であった。

平面形は、東辺に甍を持ち南北方向がやや長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.11m・南北方向3.60mを測り、床面積は9.2㎡である。主軸方位はN-61°-Wである。

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高41～50cmのローム層の壁面を検出した。

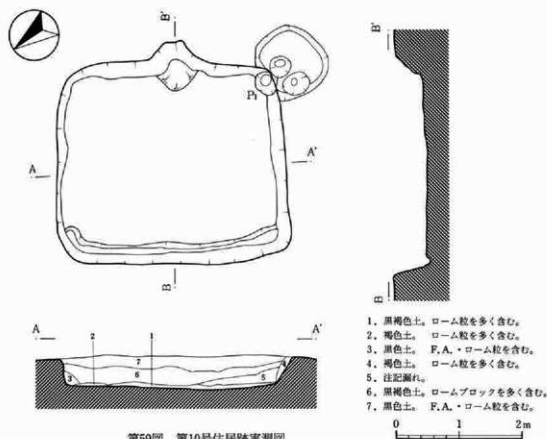
床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さで黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。中央部には薄い炭化物の層が認められ、西壁下には幅15～20cm・深さ3cm前後の周溝が掘られていた。P₁は径35～40cm・深さ23cmを測るが、性格は不明である。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

甍は、東辺のほぼ中央部に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、現状では燃焼部が20cm程度壁外に張り出している。火床面は若干窪んでいたが、焼け込みはさほど強くなかった。火床面の掘り方は長径65cm・短径60cm・深さ7cm程度の不整形円形の窪みであり、焼土を少し含む褐色土が詰まっていたが、あまり焼けていなかった。

遺物は、覆土中に土師器・須恵器の細片と布目瓦が認められたが、電前面の床面に密着した石が1個出土した。

第21表 第10号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 161	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 13.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 162	高台付椀 (灰輪陶器)	片残存 口 15.5cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
3	坏 (土師器)	底部小破片	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②におい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。 内面 ナデ。火はげによる剝離有り。	底面外面に墨書有り。 釈文不明



第59図 第10号住居跡実測図



第60図 第10号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡(第61～63図、図版31・61) 位置 IV区20C—15グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向5.25m・南北方向3.95mを測り、床面積は20.7㎡である。主軸方位はN-87°-Wである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高52～61cmのローム層の壁面を検出した。

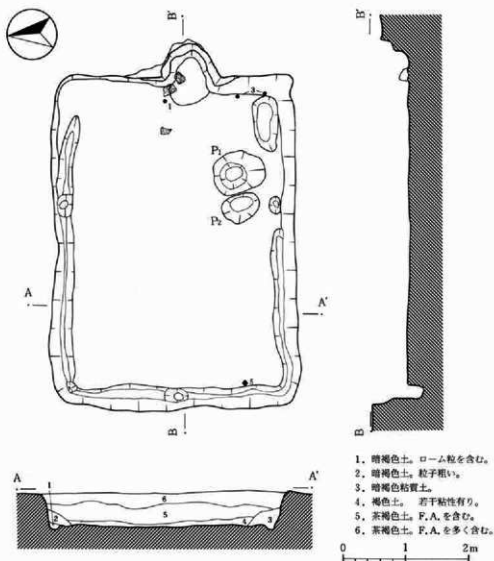
床面はほぼ平坦で、南西隅及び北東隅を除いて、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。東辺及び南東部を除いた壁下には、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っており、南東隅には長径95cm・短径43cm・深さ19cmの不整長円形の貯蔵穴と考えられる穴が穿たれていた。P₁は深さ27cm、P₂は深さ20cmを測るが、共に性格は不明である。なお、柱穴は検出されなかった。また、床面精査の結果、3個のピットを確認した。P₃は深さ18cm、P₄は深さ20cm、P₅は深さ10cmを測るが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。住居の南

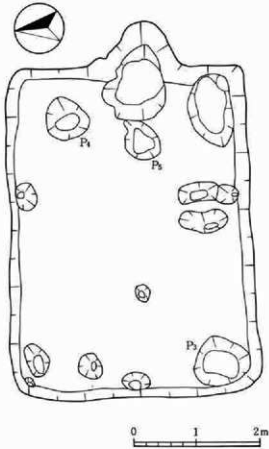
第II章 検出された遺構と遺物

窯に当たって意図的に壊したためか、遺存状態が芳しくなかった。袖部を明確にし得なかったが、燃烧部の中心はちょうど壁際に位置すると思われる。火床面の窪みから推して、焚口幅50cm・奥行65cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、火床面下は15cm程窪んでおり、焼土・灰を含む暗褐色土が詰まっていた。

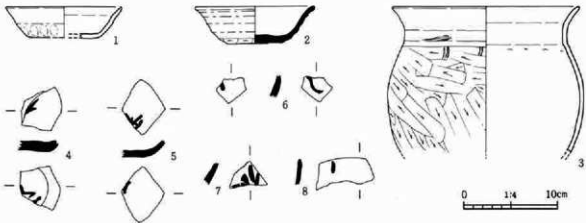
遺物は甕周辺に集中して出土したが少量であった。瓦・紡錘車の出土が目される。



第61図 第12号住居跡実測図



第62図 第12号住居跡掘り方実測図



第63図 第12号住居跡出土遺物実測図

第22表 第12号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調焼成	成・整形の特徴	備考
1 170	坏 (土師器)	5残存 口 12.4cm 高 3.3cm	電周辺	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋形。体部指痕圧痕を粗い篋ナ デで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 171	坏 (須恵器)	5残存 口 12.9cm 高 4.0cm 底 6.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転永切り未調整。体部下端手持ち篋形 り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 172	壺 (土師器)	5残存 口 20.0cm	南東部 12.0cm	①砂粒を含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向篋形。肩部横方向篋形。頸 部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 173	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転永切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底部内・外 面に墨書有 り。 釈文「依」
5 175	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部全面回転篋形。 内面 回転によるナデ。	底部内・外 面に墨書有 り。 釈文不明
6 174	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰オレンジ ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。	体部内・外 面に墨書有 り。 釈文不明
7 176	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。	体部外面に 墨書有り。 釈文「依」
8 177	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 内・外面 口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明

第13号住居跡 (第64・65図、図版31・61) 位置 IV区30C-11グリッド

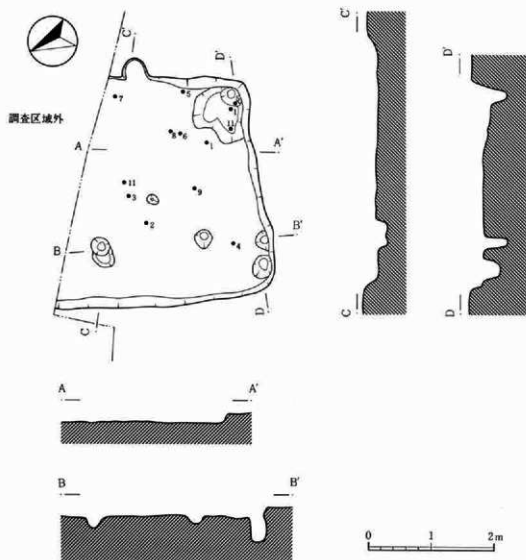
本住居跡は、北側が調査区域外になるため未完掘である。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が長い横長型で、南辺が歪んだ隅丸不整形を呈すると考えられる。規模は、東西方向3.50mを測り、南北方向は南辺から3.50mの範囲まで確認した。主軸方位はN-24.5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高さ14~18cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方をそのまま整地して使用しており、ほぼ全域に亘って強く踏み締められていた。南東隅には長径95cm・短径85cm・深さ20cmの不整形の貯蔵穴が穿たれており、焼石と土師器壺・須恵器杯の破片が出土した。その他のピットは本住居よりも後出するものであるが性格は不明である。なお、確認された範囲内においては、周溝及び柱穴は検出されなかった。

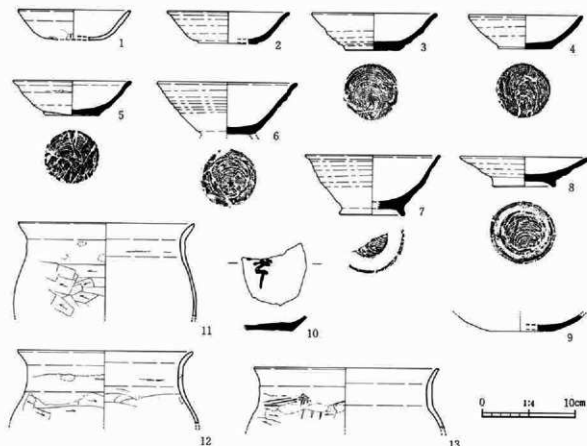
甕は、東辺の南東隅から170cm程北寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にできなかったが、燃焼部の中心はちょうど壁際にある。掘り方には径45cm・深さ14cmのピットが認められた。なお、右側のピットは後世のものである可能性が高い。

遺物はほぼ全域に散在して出土したが、少量であった。土鍾・刀子等も出土している。



第64図 第13号住居跡実測図

第二章 検出された遺構と遺物



第65図 第13号住居跡出土遺物実測図

第23表 第13号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・流量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
178	1 環 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.2cm	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・貝殻	外面 底部手持ち製削り。体部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
179	2 環 (須恵器)	1/2残存 口 13.0cm 高 3.3cm	中央部 2.5cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
181	3 環 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 4.0cm	中央部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
182	4 環 (須恵器)	1/2残存 口 12.2cm 高 3.6cm 底 5.7cm	南西部 9.0cm	①砂粒・細糠を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
184	5 環 (須恵器)	1/2残存 口 12.7cm 高 3.7cm 底 5.8cm	南東部 13.0cm	①砂粒を含む。 ②黒褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
186	6 高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.0cm	南東部 4.0cm	①砂粒・細糠を含む。 ②灰白色 ③還元炭・軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7 183	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 □ 14.4cm 高 6.3cm 底 7.0cm	電馬辺	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
8 185	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 □ 14.0cm 高 3.2cm 底 6.8cm	南東部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
9 186	皿 (須恵器)	1/2残存 底 6.4cm	南西部	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナゲ。	
10 187	坏 (須恵器)	小破片 底 7.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナゲ。	底部内面に墨書有り。 釈文「依」
11 188	壺 (土師器)	1/2残存 □ 18.8cm	中央部 -7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部斜め方向削り。肩部幅広い器ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 体部直ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
12 190	壺 (土師器)	1/2残存 □ 18.8cm	貯蔵穴中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部斜め方向削り。肩部幅広い器ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 体部直ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
13 191	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.8cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部斜め方向削り。肩部幅広い器ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 体部直ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	

第14号住居跡(第66・67図、図版32・61) 位置 IV区29D-26グリッド

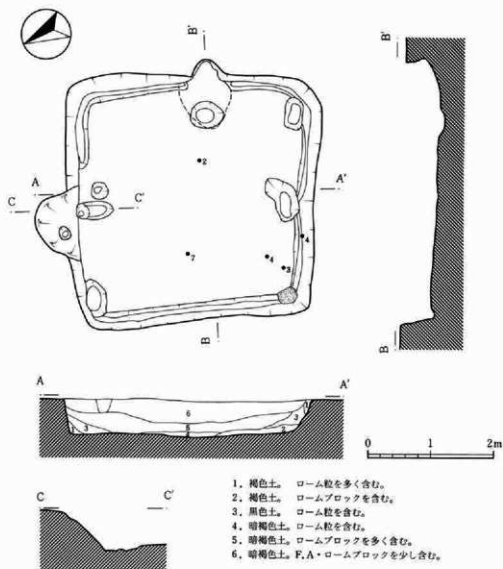
本住居跡は、120号住居跡を壊して作られていた。平面形は、東辺に竈を持ち、南東隅がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.70~4.03m・南北方向4.04mを測り、床面積は15.4m²である。主軸方位はN-19.5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高47~58cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さでローム粒を含む褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全域に互って強く踏み締められていた。北辺の一部を除いて幅約15cm・深さ3cm前後の浅い周溝が巡っていた。5箇所のビットについては、本住居よりも後出するものと思われるが性格は不明である。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の中央から21cm程南寄り位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、焼土の分布状況から推して、焚口幅60cm・奥行80cm程の大きさと思われる。火床面の中央には川原石の支脚が残っていた。電用材の散らばりからみて、本住居の廃棄に当たって意図的に竈を壊していったものと思われる。更に、北辺には別の竈の痕跡と思われる部分が認められたが詳細は不明である。

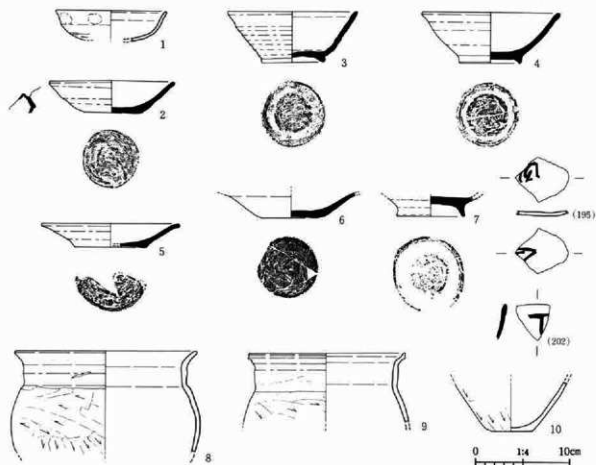
遺物は少なく、散在して出土した。布目瓦・刀子等も出土している。



第66図 第14号住居跡実測図

第24表 第14号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 194	坏 (土部器)	1/3残存 □ 12.0cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 器部手持ち箇所。体部指頭圧痕を軽い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 198	坏 (須恵器)	1/3残存 □ 13.4cm 高 3.4cm 底 6.0cm	中央部 19.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
3 196	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.0cm 高 5.4cm 底 6.9cm	南西部 14.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 器部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 197	高台付碗 (須恵器)	1/3残存 □ 14.7cm 高 5.4cm 底 6.2cm	南西部 11.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 器部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	



第67図 第14号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 200	皿 (土師器)	1/4残存 口 14.8cm 高 2.5cm 底 7.6cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 201	皿 (須恵器)	口縁部欠損 底 6.2cm	覆土中	①砂粒・細礫を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
7 199	高台付碗 (須恵器)	底部完存 底 7.4cm	北西部 7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「社」
8 203	薬 (土師器)	1/4残存 口 19.4cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部縦方向寛削り。肩部横方向寛削り。頸部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 204	薬 (土師器)	1/4残存 口 16.8cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向寛削り。頸部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。	
10 205	薬 (土師器)	底部完存 底 4.3cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②黄灰色 ③還元炎・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部縦方向寛削り。 内面 寛ナデ後、ナデ。	

第15号住居跡 (第68・69図、図版32・61) 位置 IV区41C-13グリッド

本住居跡は、西側が生活道路にかかっていたため未完掘である。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると考えられるが、全容は不明である。規模は、東辺3.90m・南辺2.30mまで確認した。東辺の走向はN-17-Eである。

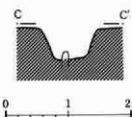
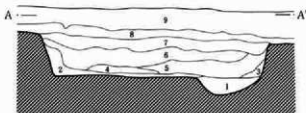
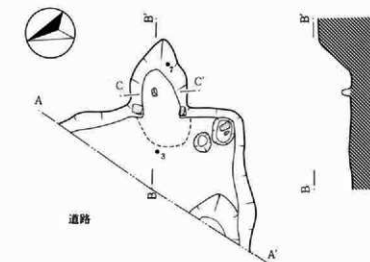
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高50~58cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約6cmの厚さで灰褐色土を客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東隅には長径45cm・短径35cm・深さ15cmの隅丸方形の貯蔵穴が穿たれており、内部から竈に使用されたと考えられる砂岩の加工材が出土した。床面下精査の結果、南西の境界にかかって深さ26cmのピットが検出されたが、詳細は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、南東隅から130cm北寄りの位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょう

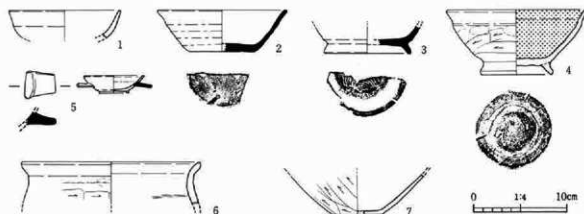
ど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外へ張り出す。両袖には砂岩の加工材が、火床面の中央には支脚が原位置をとどめていた。焚口幅58cm・奥行78cmを測り、全長120cmまで確認した。掘り方は、袖部の石材を据えた痕跡と、火床面下に径約75cm・深さ15cmの不整形のピットが掘られていた他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈部分に集中して出土したが少量であった。



1. 灰褐色土。粘土・炭化物を含む。
2. 注記漏れ。
3. 暗褐色土。
4. 灰褐色粘質土。
5. 灰褐色土。炭化物・ロームブロックを含む。
6. 暗褐色土。F.A.を少し含み、粒子粗い。
7. 暗褐色土。F.A.を少し含む。
8. 暗褐色土。F.A.を少し含み、粘性有り。
9. 明褐色土。粒子粗い。

第68図 第15号住居跡実測図



第69図 第15号住居跡出土遺物実測図

第25表 第15号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形 (須恵器)	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 192	坏 (土師器)	ㄱ残存 口 13.0cm	甕周辺	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良砂	外面 体部指頸圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 209	坏 (須恵器)	ㄱ残存 口 13.9cm 高 4.4cm 底 6.8cm	不詳	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コケロ整形。 外面 底部回転糸切り後調整。体部下層強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 207	高台付椀 (須恵器)	ㄱ残存 底 9.4cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転コケロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4 208	高台付椀 (須恵器)	完形 口 15.1cm 高 7.0cm 底 7.6cm	不詳	①砂粒を多く含む。 ②明黄褐色。 ③酸化炭・硬質	外面 底部砂底。体部指頸圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 黒色処理。荒磨き。口縁部横ナデ。	
5 210	双耳坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	鋭い篋ナデで仕上げている。 内面 回転によるナデ。	
6 211	壺 (土師器)	小破片 口 19.2cm	不詳	①砂粒を含む。 ②明黄褐色。 ③酸化炭・良砂	外面 肩部横方向荒削り。頸部指頸圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 強い篋ナデ。口縁部横ナデ。	
7 212	壺 (土師器)	ㄱ残存 底 5.3cm	甕周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良砂	外面 底部荒削り。体部斜め方向荒削り。 内面 荒ナデ後、ナデ。	

第16号住居跡 (第70・71図、図版32・61) 位置 IV区12C-33グリッド

本住居跡は、IV区の南端部に位置しており、南側は生活道路にかかっていた。加えて、東側には擾乱があったために遺存状態は芳しくなかった。平面形は、東西方向が長い横長型で、各辺がやや膨らみを持った隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向4.20mを測り、東西方向は西壁から4.05mまで確認した。西辺の走向はN-27°-Eである。

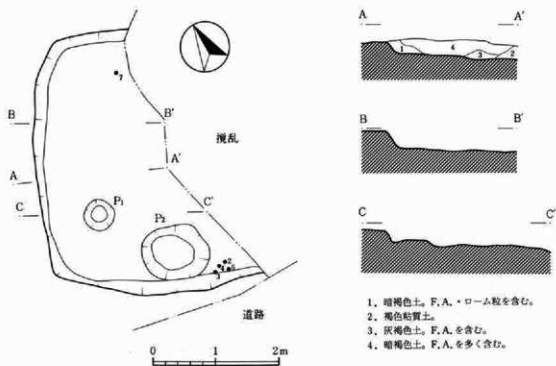
壁は、現状で35°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高12~34cmのローム層の壁面を検出した。

床面は、西側が若干高くなっていたが、ほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南西部には2個のピットが穿たれており、P₁は径50cm・深さ6cm、P₂は長径110cm・短径95cm・深さ17cmを測るが、共に性格は不明である。確認された範囲内においては、

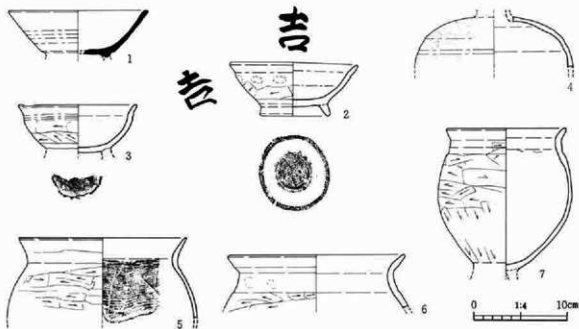
第II章 検出された遺構と遺物

周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、掘り方精査の結果でも特別な遺構は検出されなかった。竈については全く資料を欠く。

遺物は、南壁際に須恵器碗がまとまって出土した他は、全体に散在して出土した。



第70図 第16号住居跡実測図



第71図 第16号住居跡出土遺物実測図

第26表 第16号住居跡出土遺物観察表

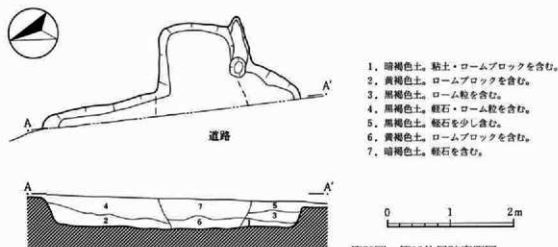
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 216	高台付椀 (土師器)	ㄱ残存 口 14.9cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロコロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 213	高台付椀 (須惠器)	完形 口 13.8cm 高 5.6cm 底 7.6cm	南東部 3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②におい褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部砂底。高台貼付け後、ナデ。体部下端指頭圧痕を粗い篋削りで消す。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	底部内面・体部外面に墨書有り。 釈文「吉」
3 214	高台付椀 (須惠器)	ㄱ残存 口 12.1cm	南東部 11.0cm	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 高台剥落。高台貼付け後、ナデ。体部下端指頭圧痕を粗い篋削りで消す。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
4 232	瓶 (灰輪陶器)	肩部破片	南東部 19.0cm	①均質。 ②オリブ灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロコロ整形。 外面 淡い緑灰色の灰輪が厚く掛かる。 内面 ナデ。	
5 218	壺 (土師器)	ㄱ残存 口 18.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向篋削り。肩部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 強い篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 219	壺 (土師器)	ㄱ残存 口 19.0cm	南東部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向篋削り。肩部強い篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 217	脚台付壺 (土師器)	ㄱ残存 口 12.8cm	北西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 脚部剥落。体部下半縦方向篋削り。体部上半～肩部横方向篋削り。頸部強い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	

第18号住居跡(第72図、図版32) 位置 V区29D-19グリッド

本住居跡は、V区の北西隅に位置しており、西側が生活道路にかかっているため未完掘である。加えて、竈部分に土坑による擾乱が有るために、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形形を呈すると考えられる。規模は、南北方向4.16mを測り、東西方向については南北の隅角部を確認したにとどまった。南東隅が若干歪むが、東辺の走向はN-8°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高30～45cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、全面に亘って強く踏み締められていた。床面精査の結果、掘り方をそのまま整地して使用しており、特別な施設は認められなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵



第72図 第18住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

穴は検出されなかった。

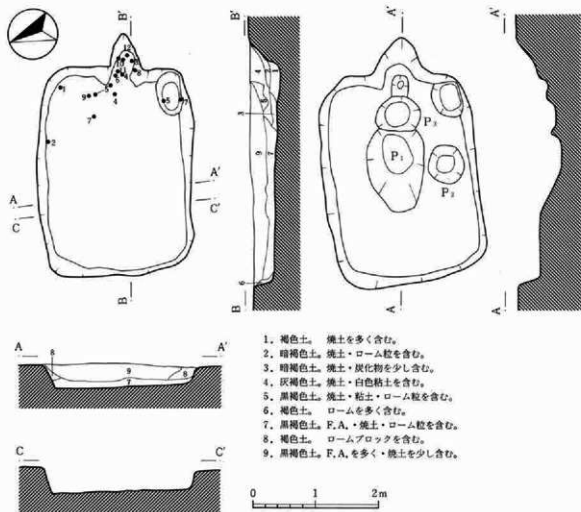
竈は、東辺の中央から96cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていたが、前述の通り北半部は土坑によって掘り取られてしまっていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。火床面は5cm程窪んでいた。掘り方調査の結果、右袖部には径25cm・深さ10cmの不整形形の穴が検出されたが、焚口を構成する石材を立てたものと思われる。焚口幅50cm・奥行50cm程の燃焼部になると思われ、全長85cmを確認した。

出土遺物は、覆土中の土師器・須恵器の細片だけであり、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。

第19号住居跡（第73・74図、図版33・61・62） III区42B-26グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、遺存状態も良好であった。平面形は、東辺に竈を持ち、東西方向が長い縦長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.34m・南北方向3.34mを測り、床面積は7.8㎡程になると思われる。主軸方位はN-19.5°-Eである。

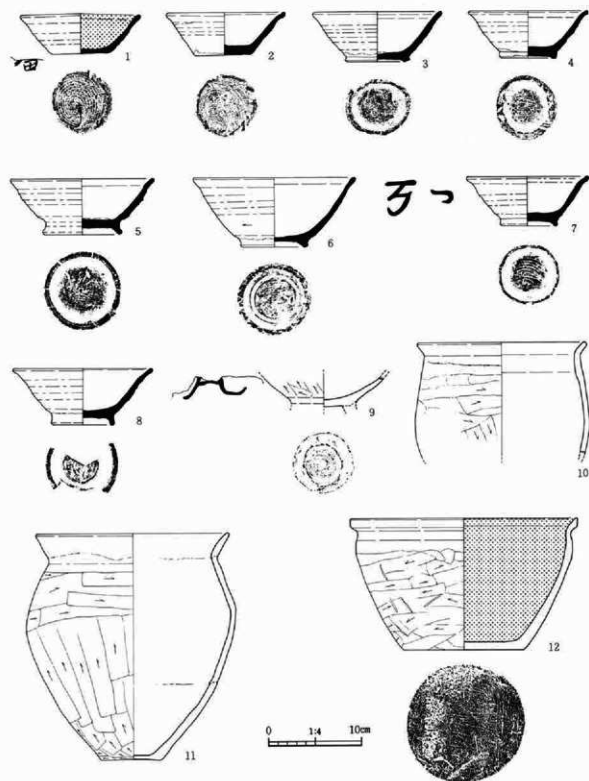
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高26.5～36.5cmのローム層の壁面を検出した。



第73図 第19号住居跡実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には径39・59cm・深さ22cmの貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、中央部に認められた炭化物の下から所謂「床下土坑」と考えられる3個のピットを検出した。P₁



第74図 第19号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

は長径140cm・短径90cm・深さ34cm、P₂は径約70cm・深さ26cm、P₃は径60cm・深さ13cmを測り、いずれのピットにも焼土及び炭化物を多量に含む土が詰まっていた。

竈は、東辺のほぼ中央に、粘土を使用して構築されていた。袖が15cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅30cm・奥行45cmを測り、全長79cmを確認した。内部には土師器甕・須恵器碗が残っていた。掘り方は不整半円形で、火床面下には径約35cm・深さ13cmの円形の窪みか認められた。

遺物は、東半部に集中して出土した。

第27表 第19号住居跡出土遺物観察表

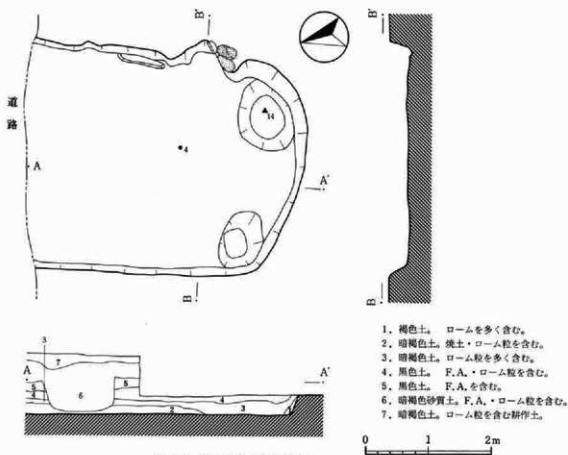
No	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 220	坏 (須恵器)	ㄥ残存 口 13.0cm 高 4.2cm 底 8.0cm	北東部 15.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。所謂ロクロ土師器。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 黒色処理。丁寧な磨き。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「田」
2 223	坏 (須恵器)	完形 口 12.8cm 高 4.5cm 底 6.0cm	北東部 32.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 222	高台付椀 (須恵器)	ㄥ縁部欠損 口 13.8cm 高 5.3cm 底 6.0cm	竈周辺 9.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 226	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 12.8cm 高 4.9cm 底 5.6cm	竈周辺 -12.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
5 221	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 15.4cm 高 5.8cm 底 8.0cm	竈周辺 -5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 224	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 17.4cm 高 7.3cm 底 7.3cm	竈周辺 -12.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 225	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 13.1cm 高 5.2cm 底 6.1cm	貯蔵穴中 -12.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
8 228	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 15.0cm 高 5.9cm 底 6.8cm	竈周辺 -12.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 227	高台付椀 (須恵器)	ㄥ底部欠損	北東部 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にふい褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部平底。貼付け高台。割落。体部指頭正直を粗い磨りで消す。 内面 丁寧なナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文不明
10 230	脚台付甕 (土師器)	ㄥ残存 口 18.0cm	竈周辺	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向直削り。肩部横方向直削り。頸部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 強い横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 233	甕 (土師器)	ほぼ完形 口 20.6cm 高 23.8cm 底 6.5cm	竈周辺 23.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③酸化炭・良好	外面 割離のため底部調整不明。体部縦方向直削り。肩部横方向直削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
12 231	鉢 (須恵器)	ㄥ残存 口 24.2cm 高 13.9cm 底 12.8cm	竈周辺 12.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部全面手持ち磨削り。体部直削り。頸部・口縁部丁寧な横ナデ。 内面 黒色処理。丁寧な磨き。	

第20号住居跡 (第75・76図、図版33・62) 位置 III区39B-35グリッド

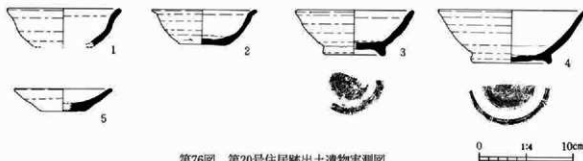
本住居跡は、北側に生活道路がかかっていたため未完掘である。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南辺が膨らんだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向3.53mを測り、南北方向は南壁から4.50mの範囲まで確認した。主軸方位はおよそN-18°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高13~25cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南側の両隅が5cm程窪んでおり下層から土師器甕が出土した。貯蔵穴あるいは所謂「床下土坑」の可能性が考えられるが詳細は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。



第75図 第20号住居跡実測図



第76図 第20号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

竈は、東辺の南東隅から150cm程南寄りの位置に、川原石及び砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、焼け込みはさほど強くなく燃焼部の中心はちょうど壁際に有る。掘り方は深さ約6cmの不整半円形であったが、特別な遺構は認められなかった。

遺物は竈部分に集中して出土した。貯蔵穴中から刀子が出土している。

第28表 第20号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	現存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・量形の特徴	備考
1 237	坏 (須恵器)	1/2現存 口 12.2cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 235	坏 (須恵器)	1/2現存 口 11.3cm 高 3.6cm 底 5.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②黒褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、体部下端箇所削り。口縁部強い横ナデ。 内面 ナデ、黒色処理。口縁部強い横ナデ。	
3 238	高台付椀 (須恵器)	1/2現存 口 12.8cm 高 4.7cm 底 6.2cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのための底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 239	高台付椀 (灰釉陶器)	1/2現存 口 15.7cm 高 5.6cm 底 8.0cm	中央部 14.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。磨き塗りによる薄い灰釉。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	リング状の重ね焼痕が有る。
5 234	小皿 (須恵器)	1/2現存 口 10.4cm 高 2.3cm 底 4.5cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②濃い黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。口唇部に煤付着。	

第21号住居跡 (第77・78図、図版33・62) 位置 III区42B-30グリッド

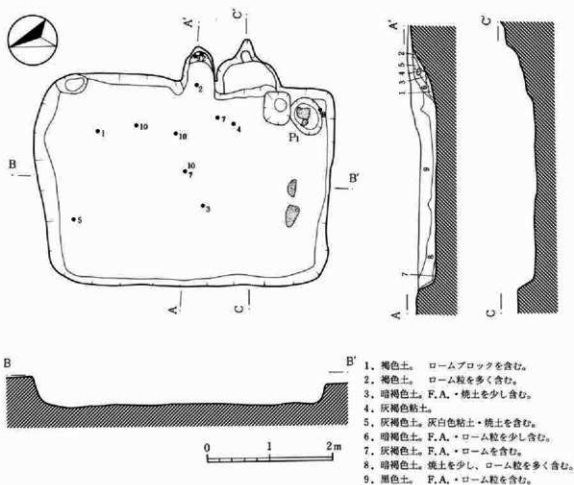
本住居跡は、調査時点では識別できなかったがほぼ同規模と思われる2軒の住居が重複していた。後出する住居跡については、竈を部分的に調査したにとどまってしまったので詳細は不明であるが、同一の居住者が建て替えたものと思われる。先行する住居跡の平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北辺が歪んだ隅丸不整形を呈すると思われる。規模は、東西方向3.28mを測り、南北方向は3.80~4.00m程になるとと思われる。床面積は12.6㎡である。主軸方位はN-18°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高31~48cmのローム層の壁面を検出した。

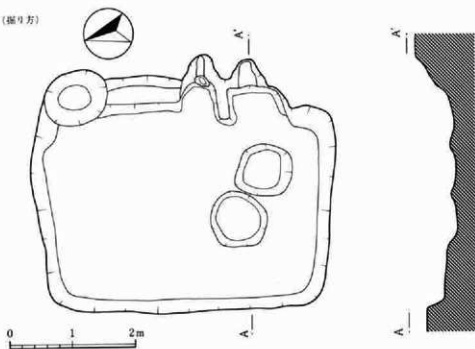
床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東部には45×50cm・深さ17cmの隅丸方形の貯蔵穴と考えられるピットが検出された。竈前面には、床面から5cm程浮いた状態で焼土を含む白色粘土の分布が認められた。(地層断面の記録と一致しないが、後出する21-B号住居の竈用材と思われる。P₁は、長径65cm・短径50cm・深さ約5cmを測り、貯蔵穴と考えられる。内部からは焼けた川原石が出土している。)

竈は、東辺の中央からやや南寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅45cm・奥行60cmを測る。掘り方は6cm程窪んでいたが特別な遺構は認められなかった。

遺物は竈周辺に集中して出土した。

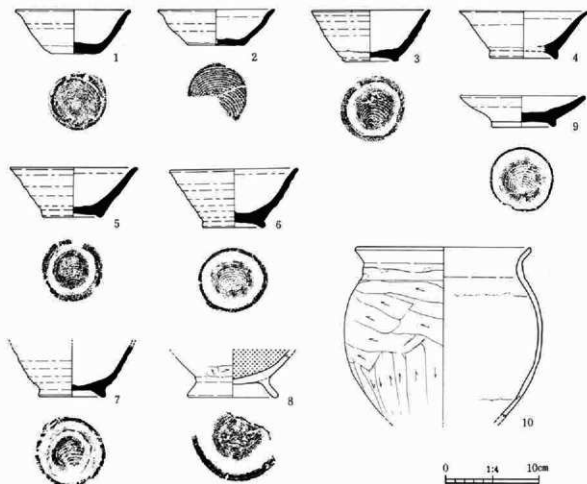


(掘り方)



第77図 第21号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第78図 第21号住居跡出土遺物実測図

第29表 第21号住居跡出土遺物観察表

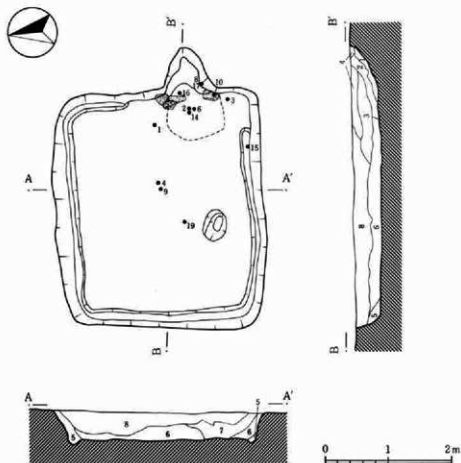
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 241	坏 (土師器)	写残存 口 12.3cm 高 4.6cm 底 4.7cm	北東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整、体部下端緩な荒調整。 口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 242	坏 (須恵器)	写残存 口 12.5cm 高 3.7cm 底 5.9cm	壺周辺	①砂粒を多く含む。 ②淡黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整、体部下端削り絞り込み。 口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 243	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 12.7cm 高 5.4cm 底 5.3cm	南西部 17.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 244	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 13.8cm 高 5.0cm 底 7.3cm	壺周辺 12.0cm	①砂粒を含む。 ②にょい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
5 308	高台付椀 (須恵器)	完形 口 13.6cm 高 5.2cm 底 6.7cm	北西部 10.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	器種・器形	残存・流量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6 307	高台付碗 (須惠器)	完形 口 13.8cm 高 6.2cm 底 6.7cm	貯蔵穴中 上層部	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転による粗いナデ。口縁部横ナデ。	
7 246	高台付碗 (須惠器)	口縁部欠損 底 7.2cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転による丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
8 245	高台付碗 (須惠器)	1/2残存 底 9.2cm	南東 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部粗い手持ち製削り。 内面 黒色処理。寛鬆さ。	
9 309	高台付皿 (須惠器)	完形 口 13.5cm 高 3.4cm 底 6.2cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転による丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
10 247	甕 (土師器)	1/2残存 口 18.4cm	甕周辺 9.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部下半部方向製削り。体部上半～肩部横方向製削り。頸部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第22号住居跡 (第79~81図、図版33・62・63) 位置 III区39B-32グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に甕を持



第79図 第22号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

ち、東西方向が長い縦長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.75m・南北方向3.35mを測り、床面積は10.3㎡である。主軸方位はN-8°-Eである。

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高42~46cmのローム層の壁面を検出した。

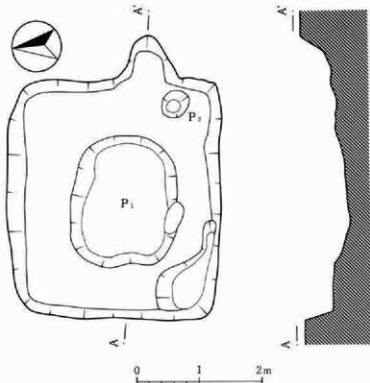
床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全域に亘って強く踏み締められていた。南東部を除いて、幅10~20cm・深さ8cm前後の周溝が巡っていた。長円形のP₁は長径50cm・短径35cm・深さ41cmを測るが、性格は不明である。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、南西隅が三角形に深さ約12cm程窪んでいた。また、中央部には170×205cm・深さ22cmの隅丸方形の穴P₂が認められた。P₂は径40cm・深さ18cmを測るが、共に性格は不明である。

竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口部には2個の川原石が立てられており、幅40cm・奥行60cmを測り、全長90cmを確認した。竈周辺には土師器坏の完形品がまともまっていた。掘り方は隅丸不整形を呈するが、特別な遺構は認められなかった。

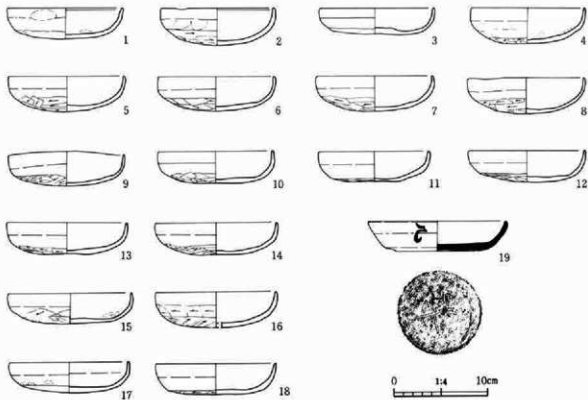
遺物は、竈周辺と中央部に集中して出土した。鉄製の紡錘車出土している。

第30表 第22号住居跡出土遺物観察表

No	種類・形状 (土師器)	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 248	坏 (土師器)	完形 口 12.4cm 高 3.2cm	電周辺 床面直上	①ほぼ均質 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 249	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.3cm 高 3.9cm	電周辺 床面直上	①ほぼ均質 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 250	坏 (土師器)	完形 口 12.4cm 高 2.7cm	電周辺 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 251	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.3cm 高 3.7cm	中央部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
5 252	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.6cm 高 3.7cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 253	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.6cm 高 3.7cm	電周辺 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 254	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.7cm 高 3.7cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8 255	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.6cm 高 3.8cm	電周辺 34.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 256	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.5cm 高 3.6cm	中央部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 259	坏 (土師器)	完形 口 12.5cm 高 3.4cm	電周辺 33.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 261	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 12.0cm 高 3.2cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
12 265	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.6cm 高 3.3cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	



第80図 第22号住居跡掘り方実測図



第81図 第22号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①粘土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
13 257	坏 (土師器)	ほぼ完形 □ 13.0cm 高 3.3cm	甕周辺 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
14 258	坏 (土師器)	完形 □ 13.2cm 高 3.4cm	甕周辺 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
15 260	坏 (土師器)	5/6残存 □ 13.5cm 高 3.2cm	南東部 15.0cm	①砂粒を少し含む。 ④明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
16 262	坏 (土師器)	5/6残存 □ 13.1cm	甕周辺 6.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
17 263	坏 (土師器)	5/6残存 □ 12.9cm 高 3.2cm	甕周辺 34.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
18 264	坏 (土師器)	5/6残存 □ 13.0cm 高 3.3cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
19 267	甕 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.8cm 高 3.2cm 底 9.0cm	中央部 床面直上	①ほぼ均質 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部～体部下端回転削り。口縁部横ナデ。 底部外面に貫記号有り。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明

第23号住居跡（第82・83図、図版） 位置 III区10C-45グリッド

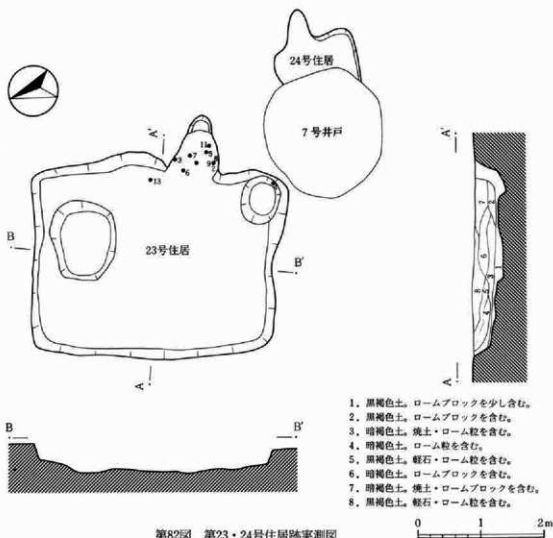
本住居は、24号住居及び7号井戸と重複していた。7号井戸に先行することは確認され、遺物の様相から推して、24号住居にも先行すると思われる。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が長い横長型で、比較的整った隅丸方形を呈する。規模は、東西方向4.10m・南北方向3.30mを測り、床面積は4.7㎡である。主軸方位はN-20°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高22～28cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを含む黒褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、長さ75cm・短径60cm・深さ20cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器製の破片が出土した。さらに、北壁際には、110×125cm・深さ15cmの隅丸方形の穴が検出されたが性格は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は検出されなかった。

甕は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が僅かに張り出す程度で、燃焼部は壁外に有る。焚口幅80cm・奥行70cm程の大きさで、煙道部を含め全長105cmを確認した。焼き込みは強く、1.2m程手前まで灰層の広がりが認められた。また、内部からは土師器製の破片が多量に出土した。なお、掘り方の調査では特別な遺構は検出されなかった。

遺物は、甕の周辺に集中して出土した。

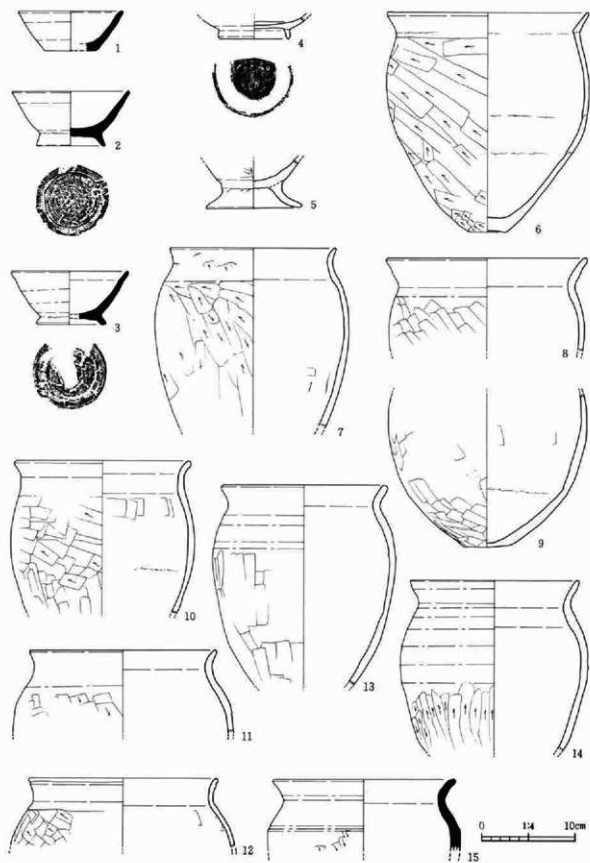


第82図 第23・24号住居跡実測図

第31表 第23号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 269	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.2cm 高 4.2cm 底 5.4cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 270	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 12.7cm 高5.3~6.2 底 7.3cm	甕周辺 33.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部砂底。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 271	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 12.5cm 高 5.6cm 底 7.5cm	甕周辺 21.0cm	①砂粒を含む。 ②におい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 272	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 底 7.8cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転製削り後、高台貼付け。体部下端回転製削り。 内面 回転によるナデ。	
5 282	脚台付壺 (土師器)	脚台部完存 底 10.3cm	甕周辺 14.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄橙色 ③還元炎・良好	外面 脚部貼付け後ナデ。体部斜め方向製削り。 内面 脚部ナデ。体部製ナデ後、ナデ。	

第二章 検出された遺構と遺物



第83図 第23号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①陶土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6 283	壺 (土師器)	1/2残存 □ 21.5cm 高 23.2cm 底 3.8cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②橙・赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部砂底。体部斜め方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 体部下半火はぜによる割離。体部上半篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 274	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 17.8cm	甕周辺 29.0cm	①砂粒を含む。 ②棕色 ③酸化炭・硬質	外面 体部下半縦方向篋削り。体部上半斜め方向篋削り。肩部横方向篋削り。頸部横ナデ後、粗いナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8 275	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 21.6cm	甕周辺 33.0cm	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色 ③還元炭・硬質	外面 体部斜め方向篋削り。肩部回転による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 276	土 釜 (須恵器)	1/2残存 底 4.6cm	甕周辺 33.0cm	①砂粒を多く含む。 ②におい黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部砂底。体部斜め方向篋削り。 内面 篋ナデ後、ナデ。	
10 279	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 19.0cm	甕周辺	①砂粒を多く含む。 ②棕色 ③酸化炭・硬質	外面 体部下半縦方向篋削り。体部上半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 278	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 20.0cm	甕周辺 -1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 体部縦方向篋削り。肩部回転による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。口縁部横ナデ。	
12 280	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 20.3cm	甕覆土中	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 体部斜め方向篋削り。肩部回転による弱いナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
13 277	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 17.8cm	甕周辺 18.0cm	①砂粒を多く含む。 ②棕色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 体部縦方向篋削り。肩部回転による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部火はぜにより割離。口縁部横ナデ。	
14 273	土 釜 (須恵器)	1/2残存 18.0cm	甕周辺 □ 18.0cm	①砂粒を含む。 ②棕色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 体部下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 体部下半粗い指ナデ。体部上半篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
15 281	土 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 20.4cm	甕覆土中	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 体部縦方向篋削り。肩部回転による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

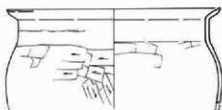
第24号住居跡

本住居は、遺構確認段階では検出が難しい程に遺存状態が芳しくなく、7号井戸の調査を進める際に、焼土の存在に注意し、辛うじて検出されたものである。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると思われるが、詳細は不明である。

床面は竈の手前で一部確認されたが、あまりしっかりとしていなかった。

竈は、40×50cm程の範囲に焼土が認められたがき程強く焼けていなかった。

遺物は、竈部分から土師器製の破片が出土した。

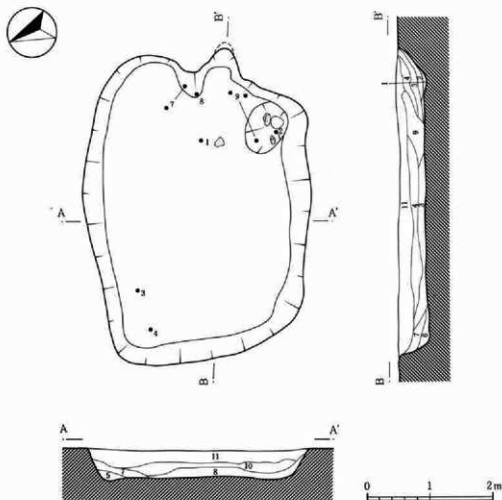


第25号住居跡 (第84~86図、図版34・63・64) 位置 III区5C-40グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、北東部が歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向4.50~4.80m・南北方向3.05~3.38mを測り、床面積は11.1m²である。主軸方位はN-65°-Wである。

壁は25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高40~53cmのローム層の壁面を検出した。

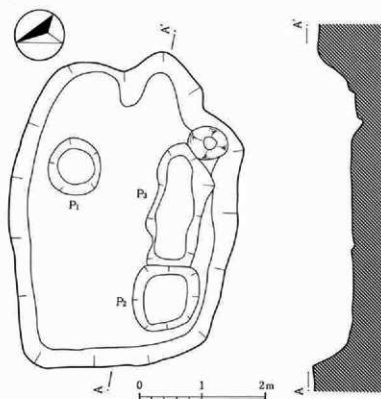
床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを含む黒褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全域に亘って強く踏み締められていた。南東隅には長径74cm・短径62cm・深さ30cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から焼石と土師器壺・須恵器椀が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、3箇所落ち込みが認められた。P₁は径90cm・深さ11cm、P₂は一辺100~105cm・深さ12cmを測る。P₃は深さ10cm程の不整形の落ち込みである。共に性格は不明である。



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 褐色土。灰・炭化物・粘土を多く含む。 | 7. 暗褐色土。ローム粒を多く含む。 |
| 2. 灰褐色粘質土。灰・炭化物を多く含む。 | 8. 黒褐色土。ロームブロックを少し含む。 |
| 3. 灰褐色土。灰・炭化物を多く含む。 | 9. 黒褐色土。焼石・ロームブロックを含む。 |
| 4. 暗褐色土。灰・ロームブロックを含む。 | 10. 黒褐色土。軽石・ローム粒を含む。 |
| 5. 黒褐色土。ローム粒を含む。 | 11. 黒褐色土。軽石を多く含む。 |
| 6. 黒褐色土。ローム粒を少し含む。 | |

第84図 第25号住居跡実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第85図 第25号住居跡掘り方実測図

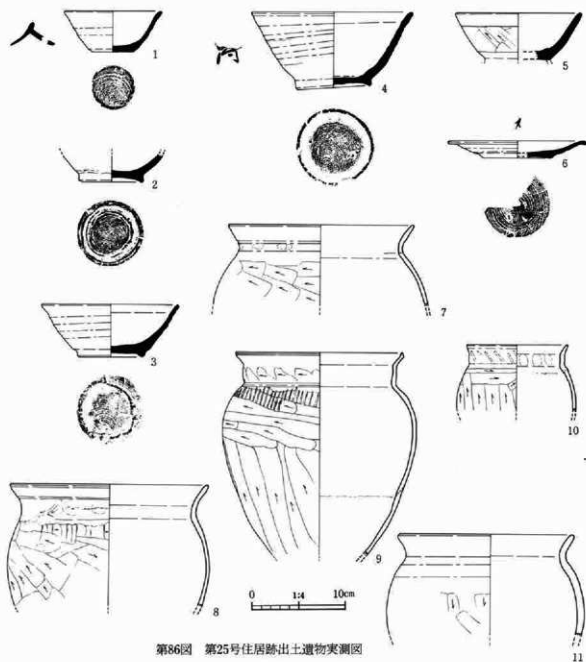
竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。右袖部分を明確にし得なかったが、袖が20cm程張り出し、燃烧部はちょうど壁際に有る。焚口幅40cm・奥行60cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、特別な遺構は認められなかった。

遺物は、竈及び貯蔵穴付近に集中して出土した。布目瓦・刀子等も出土している。

第32表 第25号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 290	(須恵器)	1/2残存 □ 10.4cm 高 4.3cm 底 4.3cm	床下P ₁	①砂粒を少し含む。 ②灰黄・灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「人」
2 285	高台付筒 (須恵器)	1/2残存 下半部完存 底 6.9cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
3 287	高台付筒 (須恵器)	1/2残存 □ 14.9cm 高 5.6cm 底 7.1cm	竈周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「子」
4 288	高台付筒 (須恵器)	ほぼ完形 □ 17.3cm 高 8.0cm 底 7.8cm	北西部 14.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
5 268	高台付筒 (須恵器)	1/2残存 □ 13.5cm	竈覆土中	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面	
6 289	皿 (須恵器)	1/2残存 □ 15.0cm 高 1.8cm 底 7.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(割落) 体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	底部内外面に墨書有り 釈文不明
7 293	壺 (土師器)	1/2残存 □ 20.0cm	竈周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部斜め方向捩り。肩部横方向捩り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

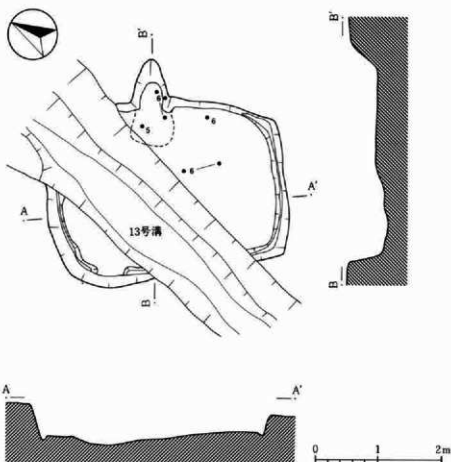


第86図 第25号住居跡出土遺物実測図

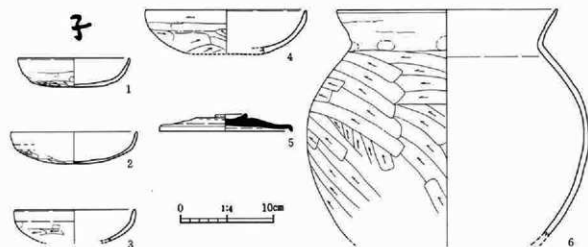
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
8 294	甕 (土師器)	1/2残存 □ 21.2cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②赤色 ③酸化炎・良好	外面 体部斜め方向直削り。肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部強い横ナゲ。 内面 体部荒ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
9 295	甕 (土師器)	1/2残存 □ 18.2cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②棕色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向直削り。肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 体部荒ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
10 292	小型甕 (土師器)	1/2残存 □ 10.8cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向直削り。肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 体部荒ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
11 291	土 (須恵器)	1/2残存 □ 18.9cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部縦方向の粗い直削り。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	

第26号住居跡 (第87・88図、図版34・64) 位置 III区47B-40グリッド

本住居跡は、中央部を11号溝によって床面下まで掘り取られていた。北東隅が確認されなかったが平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北及び東辺が膨らんだ隅丸不整形を呈すると考えられる。規模は、東西方向2.90m・南北方向3.90mを測る。床面積は約11.3m²で、主軸方位はN-30.5°-Eである。



第87図 第26号住居跡実測図



第88図 第26号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高16～30cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さで黄褐色土を客土して整地しており、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。東辺を除いて、幅約10cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、確認された範囲内においては柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の中央から26cm程北寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が僅かに出るが、焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅40cm・奥行50cmを測り、全長80cmを確認した。火床面下には深さ約7cmの浅い窪みが認められた他は、特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈の前面に散在して出土した。

第33表 第26号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 296	坏 (土師器)	ㄱ残存 口 12.0cm 高 3.0cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部粗い瓦ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「子」
2 298	坏 (土師器)	ㄱ残存 口 13.6cm 高 3.4cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
3 299	坏 (土師器)	ㄱ残存 口 13.0cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
4 300	坏 (土師器)	ㄱ残存 口 17.3cm	甕周辺	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
5 301	蓋 (須恵器)	ㄱ残存 口 14.3cm 高 1.8cm 胴 3.4cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炭・硬質	右回転ログロ整形。 外面 天井部回転削り後、横貼付け。 内面 回転によるナデ。	
6 302	壺 (土師器)	ㄱ残存 口 23.6cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向寛削り。頸部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 体部横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第28号住居跡(第89・90図、図版35・64) 位置 III区37B-40グリッド

本住居跡は、西壁部分に擾乱があり、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、北辺及び南東隅に竈を持ち南北方向が長い隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.48m・南北方向3.47mを測り、床面積は7.0㎡である。主軸方位はおおよそN-11.5°-Eである。

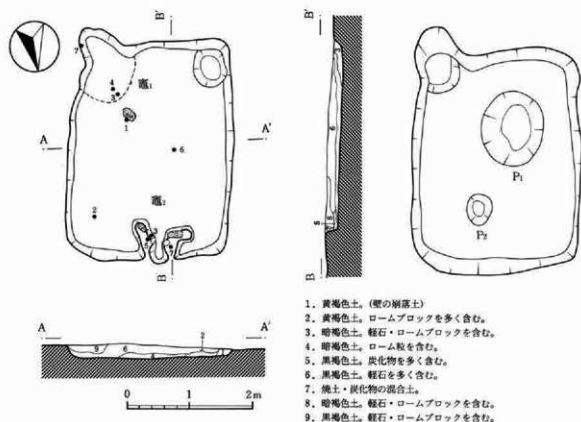
壁は、掘り込みが浅かったが、現存高12～24cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南西隅には、径60cm・深さ22cmの隅丸方形の貯蔵穴と考えられる掘り込みが認められた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、2個のピットが検出され、P₁は長径115cm・短径100cm・深さ28cm、P₂は径50cm・深さ12cmを測るが、共に性格は不明である。

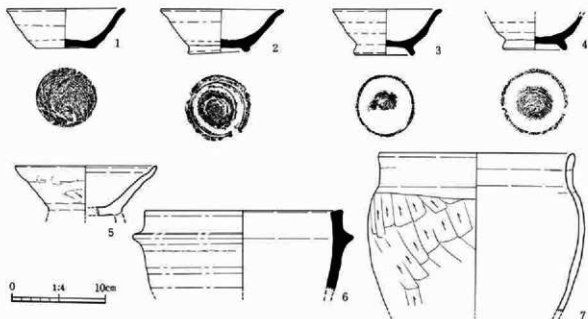
南東隅の竈1は、粘土を使用して構築されており、焚口が壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅40cm・奥行55cmを測るが、焼け込みはさほど強くなかった。掘り方は不整半円形で、火床面下には径60cm・深さ10cmの窪みが認められた他は特別な遺構は検出されなかった。竈2は、川原石と粘土を使用して構築されており、燃焼部が全て屋内に有る。焚口及び支脚に使用された石が、立てられたまま残っていたが焼け込みはさほど強くなかった。支脚には須恵器杯が被せられていた。掘り方調査の結果でも特別な遺構は

検出されなかった。出土遺物の検討でも竈の新旧関係は明確にし得なかった。

遺物は竈部分に集中して出土した。



第89図 第28号住居跡実測図



第90図 第28号住居跡出土遺物実測図

第34表 第28号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 306	坏 (須恵器)	完形 口 12.7cm 高 4.1cm 底 6.3cm	南西部 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 303	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 4.6cm 底 6.6cm	北東部 9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 304	高台付碗 (須恵器)	完形 口 11.6cm 高 4.8cm 底 6.6cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 305	高台付碗 (須恵器)	底部完存 底 6.9cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
5 1186	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.1cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。体部指頭正直を帯い器ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
6 1200	羽蓋 (須恵器)	1/2残存 口 21.4cm	中央部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 脚貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 1019	土蓋 (須恵器)	1/2残存 口 20.9cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部縦方向寛削り。頸部粗い器ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部器ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第29号住居跡(第91・92図、図版35・64) 位置 III区35B-44グリッド

本住居跡は、北東部の一部に土坑による攪乱が有ったが、比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に甍を持ち南北方向が長い横長型で、西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.26~2.50m・南北方向2.72mを測り、床面積は5.2㎡である。主軸方位はN-12°Eである。

壁は25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高11~15cmのローム層の壁面を検出した。

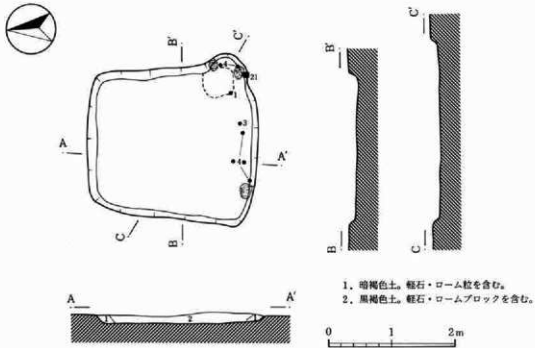
床面はほぼ平坦で、掘り方に約15cmの厚さでロームを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下の精査でも特別な遺構は認められなかった。

第35表 第29号住居跡出土遺物観察表

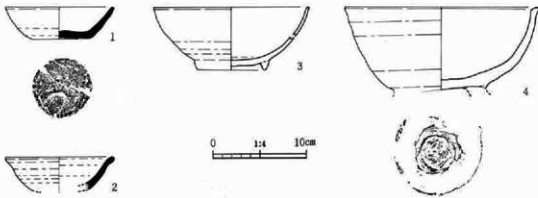
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 310	坏 (須恵器)	完形 口 11.6cm 高 3.4cm 底 6.3cm	甍周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 311	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.6cm	甍周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 313	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 口 16.7cm 底 7.4cm	南東部 3.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 312	鉢 (須恵器)	高台部欠損 口 20.7cm	甍周辺 南西部 2.0cm	①砂粒・細粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

竈は、東辺の南東隅に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口部は明確にし得なかったが、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。右袖部及び燃焼部左壁に、川原石が2個遺存しており、焚口幅45cm・奥行65cm程の大きさになると考えられる。掘り方は不整半円形で、特別な構造は認められなかった。

出土遺物は、南辺及び竈部分に集中して出土した。



第91図 第29号住居跡実測図



第92図 第29号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

第30号住居跡 (第93・94図、図版36・64・65) 位置 III区33B-44グリッド

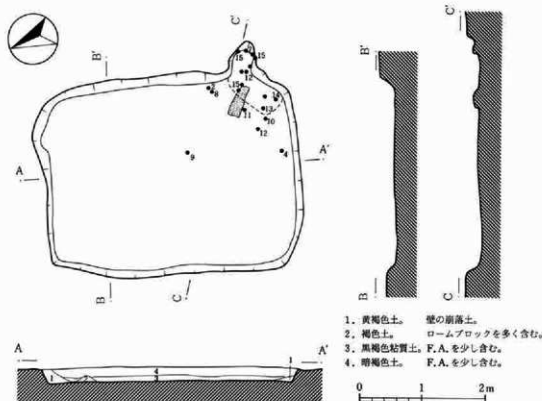
本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.90～3.20m・南北方向4.05～4.20mを測り、床面積は10.9m²である。主軸方位はN-20.5°-Eである。

壁は、現状で30°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高14～22cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部がややこんもりとしていたが、掘り方に約15cmの厚さでロームを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下の精査でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の南東隅に、石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。両袖部には川原石が立てられたまま残っており、火床面には焚口の架構材と考えられる砂岩の加工材が残っていた。また、火床面の中央からは支脚に使用された川原石が、半ば倒れた状態で出土した。焚口幅36cm・奥行40cmを測り、全長55cmを確認した。掘り方は、50×58cmの隅丸方形で、内側に傾斜して掘られていたが、特別な構造は認められなかった。

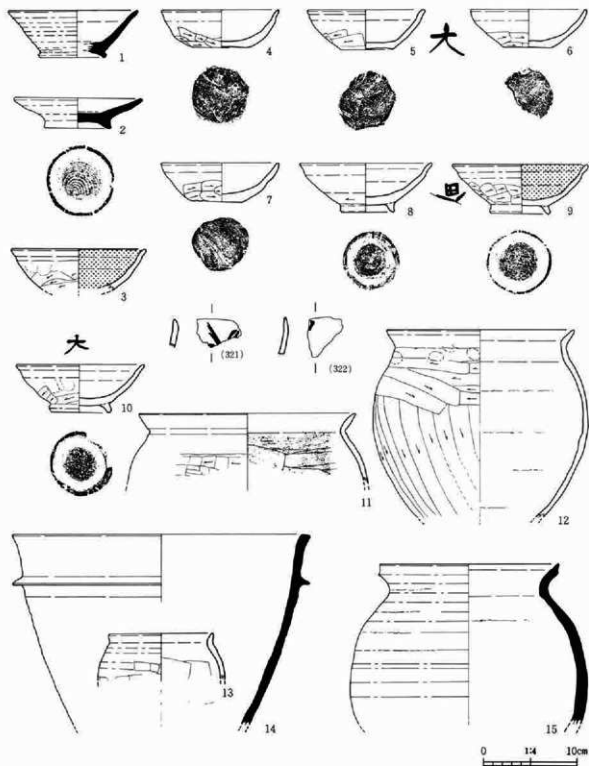
出土遺物は、竈部分に集中して出土した。覆土中出土ではあるが、「畚」の墨書土器がある。



- 1. 黄褐色土。 壁の原高土。
- 2. 褐色土。 ロームブロックを多く含む。
- 3. 黒褐色粘質土。 F.A.を少し含む。
- 4. 暗褐色土。 F.A.を少し含む。

第93図 第30号住居跡実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第94図 第30号住居跡出土遺物実測図

第36表 第30号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 320	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 □ 14.0cm 高 5.0cm 底 6.8cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転クワ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼り付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 326	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 □ 13.8cm 高 3.2cm 底 7.2cm	電周辺 13.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 319	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 □ 14.4cm	電周辺 4.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部下端手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。内面処理。	
4 315	環 (須恵器)	1/2残存 □ 12.6cm 高 4.0cm 底 6.1cm	南東部 7.0cm	①砂粒・細糠を含む ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部・体部下端手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
5 316	環 (土師器)	完形 □ 12.6cm 高 4.2cm 底 5.7cm	電周辺 5.0cm	①砂粒・細糠を含む ②灰白色 ③酸化炎・硬質	外面 底部・体部下端手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「大」
6 317	環 (須恵器)	1/2残存 □ 12.5cm 高 4.0cm 底 5.5cm	腹土中	①砂粒・細糠を含む ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部・体部下端手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 324	環 (須恵器)	1/2残存 □ 12.6cm 高 4.1cm 底 5.5cm	電周辺 16.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部・体部下端手持り寛削り。体部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8 323	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.2cm 高 5.2cm 底 5.8cm	電周辺 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	右回転クワ整形。 外面 底部砂底・貼付け高台。体部下端回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 325	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.5cm 高 5.2cm 底 6.5cm	中央部 3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂底・貼付け高台。底部・体部下端手持り寛削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。寛削き・内面処理。	体部外面に墨書有り。 釈文「命」
10 318	環 (須恵器)	ほぼ完形 □ 13.7cm 高 5.0cm 底 6.2cm	電周辺 2.0cm	①砂粒・細糠を含む ②灰白色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂底・貼付け高台。体部下端手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 ナデ。口縁部強い横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「大」
11 328	罎 (土師器)	1/2残存 □ 23.3cm	電周辺 17.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向削り。頸部棒状工具による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 罎ナデ。口縁部横ナデ。	
12 327	罎 (須恵器)	1/2残存 □ 19.8cm	電周辺 12.0cm	①砂粒・細糠を含む ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部縦方向削り。肩部横方向削り。口縁部横ナデ。 内面 体部粗い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
13 329	小型罎 (須恵器)	1/2残存 □ 11.2cm	電周辺 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クワ整形。 外面 肩部横方向の粗い削り。口縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ。口縁部横ナデ。	
14 331	罎 (須恵器)	1/2残存 □ 22.0cm	電周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転クワ整形。 外面体部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。筒貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
15 332	罎 (須恵器)	1/2残存 □ 19.1cm	電周辺 7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワ整形。 外面 体部回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第31号住居跡 (第95・96図、図版36・65) 位置 III区32B-39グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北西部が若干歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.15～3.20m・南北方向4.75mを測り、床面積は13.0㎡である。西辺の走向はN-13°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高18～25cmのローム層の壁面を検出した。

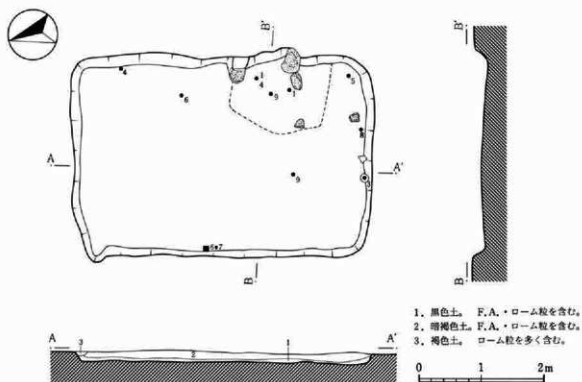
床面には多少の凹凸が認められ中央部がややこもりとしていた。北東部を除いて掘り方をそのまま整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。北東隅の掘り方は、不整長円形に10cm程深くなっていた。

竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。遺存状態が芳しくなかったために詳細は不明であるが、燃焼部は屋内に有る。火床面の下部には長径36cm・短径27cm・深さ23cmの長円形ピットが認められたが、性格は不明である。

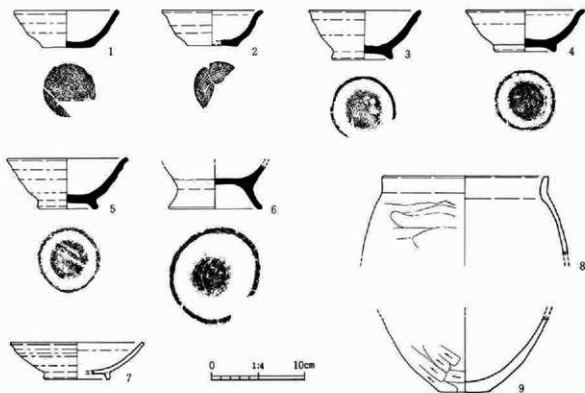
遺物はほぼ全域に散在して出土したが少量であった。釘・磁石等も出土している。

第37表 第31号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 333	坏 (須恵器)	5/残存 口 11.2cm 高 3.8cm 底 5.5cm	電周辺 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部砂底。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 334	坏 (須恵器)	5/残存 口 10.8cm 高 3.7cm 底 5.4cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 336	高台付 轆 (須恵器)	完形 口 12.0cm 高 5.2cm 底 6.6cm	南西部 7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 340	高台付 轆 (須恵器)	5/残存 口 12.7cm 高 4.4cm 底 6.6cm	北東部 -1.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 貼付け高台後のナデのため底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 335	高台付 轆 (須恵器)	5/残存 口 13.0cm 高 5.3cm 底 6.5cm	南東部 5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 337	高台付 轆 (須恵器)	底部完存 底 10.0cm	北東部 -4.0cm	①砂粒を含む。 ②黒褐・黒色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。中心部を残して丁寧なナデ。 内面 回転によるナデ。	
7 338	高台付 皿 (灰輪陶器)	5/残存 口 14.4cm 高 3.9cm 底 7.3cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転削り。貼付け高台。体部下端回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 342	土 盤 (須恵器)	5/残存 口 17.8cm	南東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 肩部横方向削り。口縁部横ナデ。 内面 尻ナデ後、回転による粗いナデ。口縁部横ナデ。	
9 341	羽 蓋 (須恵器)	5/残存 底 5.0cm	電周辺 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・硬質	外面 手持り削り。体部縦方向削り。 内面 摩耗しているため調整技法不明。	



第95図 第31号住居跡実測図



第96図 第31号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡 (第97・98図、図版36・65・66) 位置 III区27B-48グリッド

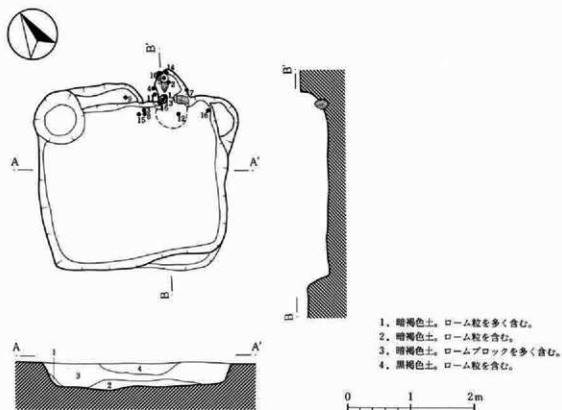
本住居跡は、北西部が土坑によって壊されていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、北辺に竈を持ち東西方向が長い横長型で、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.95m・南北方向2.60mを測り、床面積は6.1㎡である。主軸方位はN-61°-Wである。なお、北辺の竈以西には幅30cm程の棚状施設が認められた。床面から約20cm上がっており、土師器が被せられた状態で出土した。

壁は、上半部はやや崩れていたがほぼ垂直に掘り込まれており、現存高32~38cmのローム層の壁面を検出した。

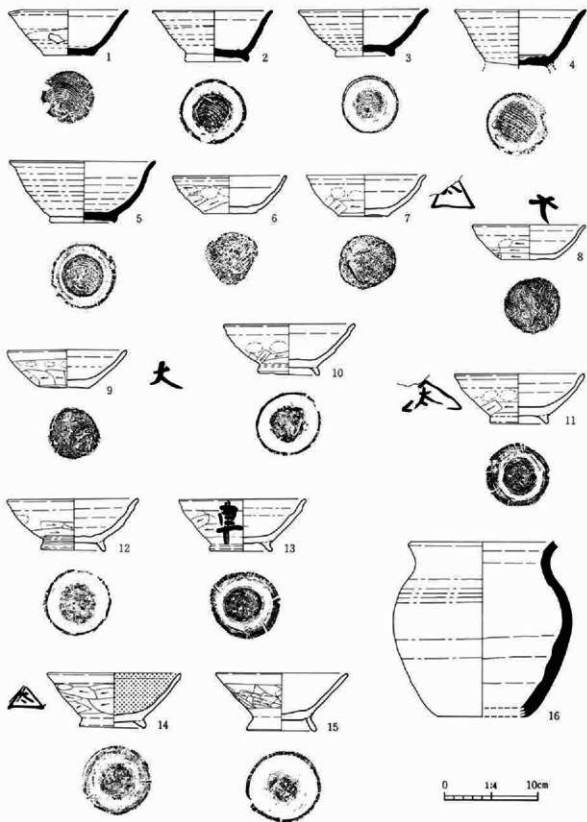
床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方をそのまま整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北辺の中央から約70cm程東寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に入り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。袖部に川原石を立て、砂岩の加工材を架構して焚口を作っており、火床面の中央やや奥寄りの位置には川原石の支脚が立てられていた。支脚には須恵器が被せられており、竈付近から完形品の杯・椀類がまとめて出土している。焚口幅52cm・奥行50cmを測り、全長70cmを確認した。掘り方は、幅60cm・長さ95cmの細長い馬蹄形であったが、特別な遺構は認められなかった。

遺物は竈周辺に集中して出土した。



第97図 第32号住居跡実測図



第98図 第32号住居跡出土遺物実測図

第38表 第32号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 351	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 12.9cm 高 4.8cm 底 5.3cm	甕周辺 10.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 346	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.0cm 高 5.4cm 底 6.6cm	甕周辺 19.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰色 ③還元炭・軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 354	高台付碗 (須恵器)	完形 口 14.0cm 高 4.9cm 底 6.4cm	甕周辺 18.0cm	①砂粒を含む。 ②黒褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 345	高台付碗 (須恵器)	高台部欠損 口 14.1cm 高 6.0cm 底 6.1cm	甕周辺 43.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部静止未切り(?)後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 353	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 15.6cm 高 6.5cm 底 6.7cm	甕周辺 24.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 344	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.3cm 高 4.0cm 底 5.3cm	甕土中	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色 ③酸化炭・硬質	外面 底部・体部手持ち寛削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 347	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 12.8cm 高 4.4cm 底 5.2cm	甕周辺 41.0cm	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部・体部下端手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「△」
8 350	坏 (須恵器)	完形 口 12.2cm 高 3.6cm 底 5.7cm	甕周辺 16.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化炭・硬質	外面 底部・体部下端手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「大」
9 349	坏 (須恵器)	完形 口 13.9cm 高 4.0cm 底 5.4cm	甕周辺 26.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③酸化炭・硬質	外面 底面・体部下端手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「大」
10 352	高台付碗 (須恵器)	完形 口 14.1cm 高 5.0cm 底 6.3cm	甕周辺 21.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。体部下端手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11 356	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.8cm 高 5.2cm 底 6.0cm	甕周辺 44.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未削り。貼付け高台。体部下端手持ち寛削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「△」
12 355	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.1cm 高 5.3cm 底 6.6cm	甕周辺 14.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③酸化炭・硬質	外面 貼付け高台後のナデのため底部切り離し技法不明。体部下端手持ち寛削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
13 357	高台付碗 (須恵器)	完形 口 13.6cm 高 5.5cm 底 6.8cm	甕周辺 10.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未削り。貼付け高台。体部下端手持ち寛削り。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「車」
14 358	高台付碗 (須恵器)	完形 口 14.4cm 高 5.8cm 底 7.2cm	甕周辺 21.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・硬質	外面 貼付け高台後のナデのため底部切り離し技法不明。体部手持ち寛削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「△」

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
15 359	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.2cm 高 6.1cm 底 7.5cm	甕周辺 16.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部砂肌。貼付け高台。体部粗い手持ち磨り。 内面 底部置ナデ。体部ナデ。口縁部横ナデ。	
16 348	甕 (須恵器)	1/2残存 口 15.1cm 高 18.5cm 底 9.5cm	南東部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り磨し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 置ナデ後、回転による粗いナデ。口縁部横ナデ。	

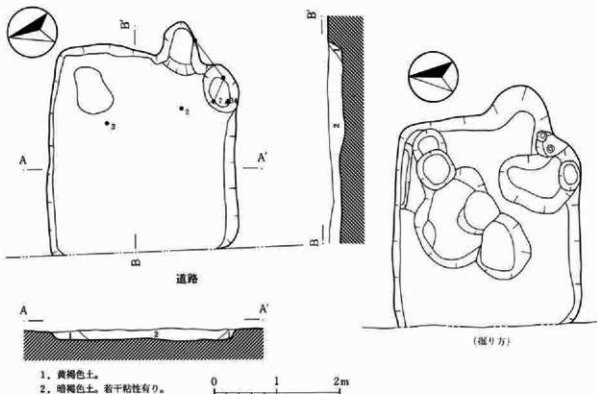
第33号住居跡 (第99・100図、図版36・66) 位置 II区31B-23グリッド

本住居跡は、北東隅に耕作に伴う穴が掘られていた。また、西辺部は生活道路にかかっていたために未完掘である。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、東辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、南北方向2.95mを測り、東西方向は3.07mを確認した。主軸方位はN-14.5°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高15~22cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に若干の客土をして整地しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には50×70cm・深さ25cmの楕円状の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器甕、須恵器坏が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、南東部に径100~110cm・深さ26cmの不整形の穴を検出した。覆土層の記録は残されていないが、出土遺物の様相から推して、所謂「床下土坑」と考えられる。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有



第99図 第33号住居跡実測図

り、焚口幅45cm・奥行65cmを測り、全長75cmを確認した。火床面は床面よりも5cm程窪んでおり、不整半円形の掘り方に粘土を貼り付けただけの竈であった。

遺物は、竈及び貯蔵穴周辺から出土した。鉄鍋及び釘が出土している。



第100図 第33号住居跡出土遺物実測図

第39表 第33号住居跡出土遺物観察表

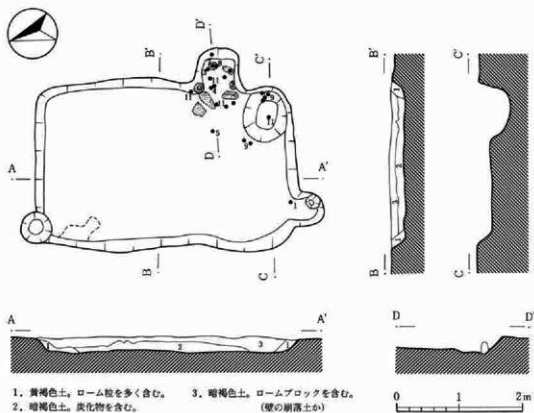
No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 360	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.2cm 高 4.3cm 底 4.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 361	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.4cm 高 4.4cm 底 5.2cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②にぶい黄棕色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 362	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.4cm 高 6.1cm 底 7.5cm	北東部	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 363	高台付碗 (須恵器)	3/4残存 口 14.1cm 高 5.3cm 底 7.2cm	電周辺	①砂粒を多く含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。体部下端手持ち貫明り。体部指頭圧痕を粗い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。蓋跡後、黒色処理	体部外面に墨書有り。 釈文「△」
5 364	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 底 7.6cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 高台貼付け後、ナゲのため底部切り離し技法不明。体部下端回転削り。 内面 回転によるナゲ。	
6 1201	甕 (土師器)	1/2残存 口 19.4cm	電周辺	①砂粒を含む。 ②にぶい黄棕色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向削り。頸部粗い寛ナゲ。口縁部横ナゲ。 内面 覆ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
7 1020	土師器	1/2残存 口 19.2cm	貯蔵穴中	①砂粒を含む。 ②にぶい黄棕色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 体部下端斜方向削り。口縁部横ナゲ。 内面 覆ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	

第34号住居跡 (第101・102図、図版37・66) 位置 II区29B-25グリッド

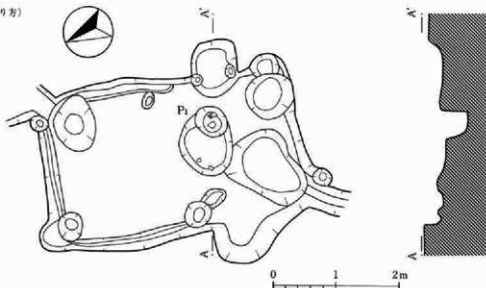
本住居跡は重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南東隅がやや歪んでいる。規模は、東西方向2.75m・南北方向4.15mを測り、床面積は9.0㎡である。主軸方位は、N-19°-Eである。

壁は、15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高14~24cmのローム層の壁面を確認した。

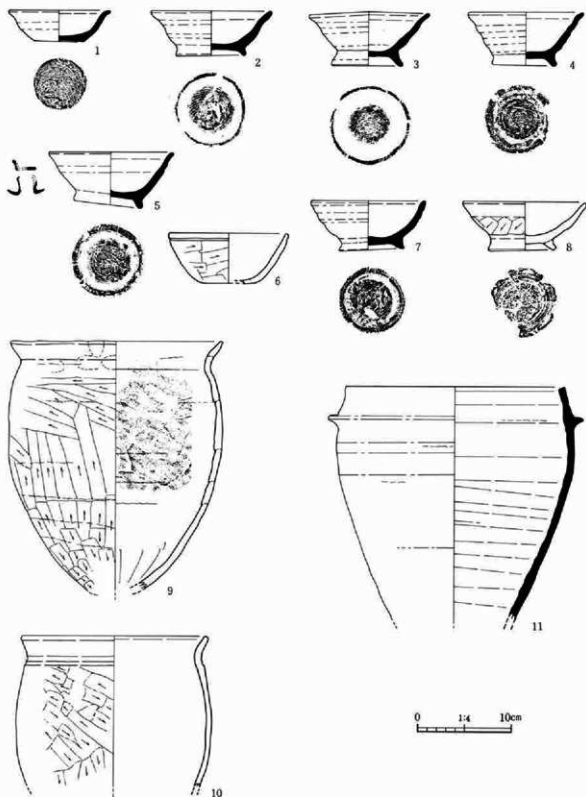
床面はほぼ平坦で、ローム層をそのまま整地して利用しており、竪の手前を中心に強く踏み締められている。



(掘り方)



第101図 第34号住居跡実測図



第102図 第34号住居跡出土遺物実測図

第11章 検出された遺構と遺物

た。南東隅には75×95cm・深さ31cmの隅丸方形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、径55cm・深さ42cmの截頭円錐状のP₁を検出したが、先後関係については不明である。

竈は、東辺の中央から80cm程南寄りの位置に、川原石と白色粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅30cm・奥行50cmを測り、全長70cmを確認した。掘り方は、50×55cmの隅丸方形で、床面よりも10cm程掘り窪められており、四隅に川原石を立てて構造材としていた。また、焚口部の手前にも架構材に使用したと考えられる石が3個残っていた。

遺物は、南西部に集中して出土しており、竈内には須恵器碗3個体が重ねられて被せられていた。

第40表 第34号住居跡出土遺物観察表

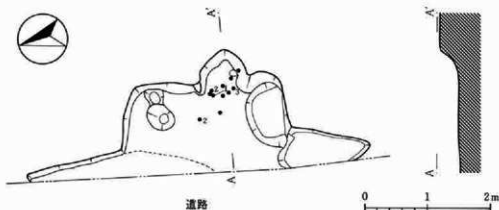
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 365	環 (須恵器)	完形 □ 10.8cm 高 3.3cm 底 5.3cm	南西部 -7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 372	高台付機 (須恵器)	完形 □ 13.0cm 高 4.8cm 底 7.5cm	電周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 369	高台付機 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.9cm 高 5.7cm 底 7.6cm	電周辺 19.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 371	高台付機 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.4cm 高 5.6cm 底 7.0cm	電周辺 6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 367	高台付機 (須恵器)	1/2残存 □ 13.3cm 高 5.6cm 底 7.4cm	中央部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明。
6 366	環 (須恵器)	1/2残存 □ 12.8cm 高 5.3cm 底 6.4cm	竈土中	①砂粒を多く含む。 ②灰黄色 ③還元炎・やや軟質	外面 底部砂面。体部手持ち蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 370	高台付機 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.3cm 高 5.3cm 底 6.9cm	電周辺 14.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 368	高台付機 (須恵器)	1/2残存 □ 13.3cm 高 5.2cm 底 7.3cm	電周辺 14.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂面。貼付け高台。体部手持ち蔑削り。 口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
9 375	甕 (土師器)	1/2残存 □ 22.5cm	貯蔵穴中 -5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②におい黄褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向蔑削り。肩部横方向蔑削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 374	土 釜 (須恵器)	1/6残存 □ 20.1cm	電周辺	①砂粒を多く含む。 ②におい橙褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部下半縦方向蔑削り。体部上半～肩部斜め方向蔑削り。頸部棒状工具による強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 377	羽 釜 (須恵器)	1/2残存 □ 23.5cm	電周辺 -6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 髹貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第35号住居跡 (第103・104図、図版37・66) 位置 II区29B—30グリッド

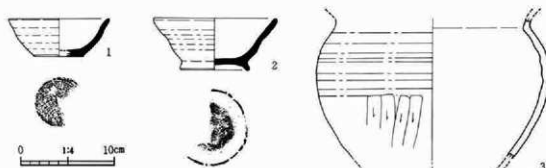
本住居跡は、西側が生活道路にかかっており未完掘である上に、耕作に伴うと考えられる土坑の重複があったため部分的な調査にとどまってしまった。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向2.75mを測り、東西方向は東壁から1.10mの範囲まで確認した。東辺の走向はN—12.5°—Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高21~32cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には長径105cm・短径60cm・深さ12cm程の不整形の窪みが認められた。北側のピットは本住居よりも後



第103図 第35号住居跡実測図



第104図 第35号住居跡出土遺物実測図

第41表 第35号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・流量	出土状況	①粘土②色調③焼成	或・整形の特徴	備考
1 378	坏 (須恵系)	1/2残存 口 10.8cm 高 4.0cm 底 5.3cm	竜周辺 -2.0cm	①粘土 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 379	高台付碗 (須恵系)	1/2残存 口 13.3cm 高 5.5cm 底 7.4cm	竜周辺 -2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 380	土 釜 (須恵系)	1/2残存	竜周辺 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 体部下半縦方向貫削り。口縁部横ナデ。 内面 貫ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

出するものと考えられるが、性格は不明である。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から35cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、左袖が約10cm残り、燃焼部は半円形に壁外に張り出す。火床面が約3cm窪んでいた他は、特別な遺構は認められなかった。焚口幅50cm・奥行55cm程の大きさになると考えられる。掘り方は不整半円形で、焚口部分には径30cm・深さ14cmの円形ビットが穿たれており、焼土を多く含む赤褐色土が詰まっていた。

遺物は、竈部分に集中して出土したが少量であった。

第36号住居跡 (第105・106・108図、図版37・67) 位置 II区25B-31グリッド

本住居跡は、南西部を37号住居跡によってほぼ床面まで掘り壊されていた。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が若干長い横長型で、南東隅に張り出しを持った隅丸不整形を呈する。(各辺共にやや膨らみを持つ上に、南東部には耕作に伴うと考えられる溝が重複しているため、張り出し部の規模は不明。)規模は、東西方向2.25m・南北方向2.55mを測り、主軸方位はN-21°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高14~21cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には、長径70cm・短径55cm・深さ29cmの載頭円錐状の貯蔵穴と考えられる掘り込みが認められた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から35cm程南寄りの位置に、須恵器製を芯材にして粘土を使用して構築されていた。袖が15cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有る。焚口幅40cm・奥行55cmを測り、火床面は6cm程窪んでいた。掘り方は不整半円形で、火床面の下は20cm程掘り窪められ、焼土・炭化物及びロームブロックを多量に含む暗褐色土が詰まっていた。

遺物は細片が多かったが、ほぼ全域に散在して検出された。布目瓦・紡錘車等も出土している。

第37号住居跡 (第105・107・108図、図版37・67) 位置 II区25B-31グリッド

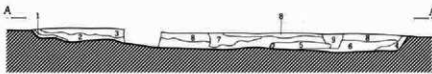
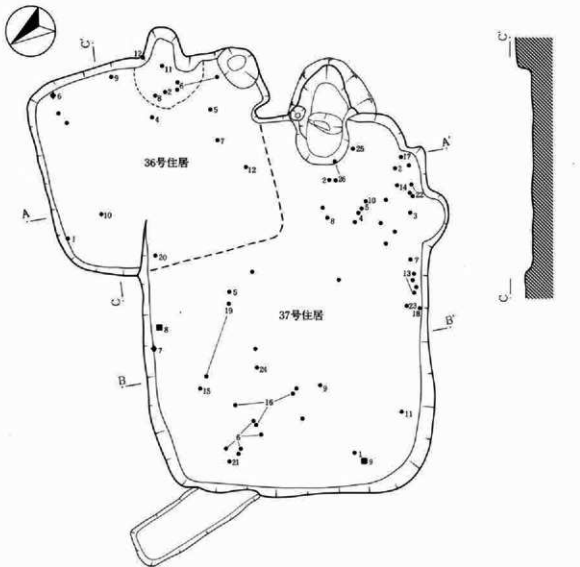
本住居跡は、36号住居跡と重複しており本住居の方が後出するが、平面での遺構確認作業段階では先後関係を捉えられなかったために、北東部の壁を残し得なかった。また、西辺と南辺には土坑の重複が有るためにやや乱れている。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、各辺が若干歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向6.00m・南北方向4.60mを測る比較的大型の住居である。主軸方位はN-32°-Eであり、床面積は約27.6m²程になると考えられる。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高17~32cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部がややこもりとしていたが、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していた。全体的に踏み締まりは弱かった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。掘り方は深さ6cm程度の穴が全面に認められたが、特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から80cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部は明確にし得なかったが、燃焼部はちょうど壁際に有る。現状で焚口幅70cm・奥行90cmを測り、火床面は6cm程窪んでいる。掘り方は、長径130cm・短径85cm・深さ24cmの不整形円形で、壁際には袖の芯材を立てたと思われる径約20cm・深さ5cmのビットが2個認められた。

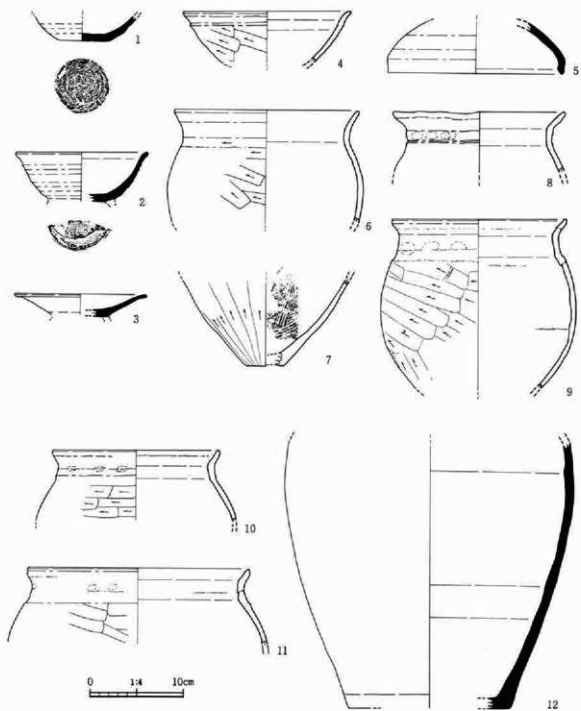
遺物は細片が多かったが、ほぼ全域に散在して検出された。墨書土器・練刻紡錘車・磁石の出土が目される。



- | | |
|------------|----------------------|
| 1. 暗黄褐色土。 | F.A.・ローム粒を含む。 |
| 2. 暗褐色土。 | F.A.・ロームブロックを含む。 |
| 3. 褐色土。 | F.A.・ローム粒を含む。 |
| 4. 黄褐色土。 | F.A.・ローム粒を含む。 |
| 5. 暗褐色土。 | F.A.・ロームブロックを含む。 |
| 6. 褐色土。 | F.A.・ローム粒を含む。 |
| 7. 淡褐色砂質土。 | B軽石・F.A.を含む。やや固い。 |
| 8. 淡褐色砂質土。 | B軽石・F.A.を含む。 |
| 9. 淡褐色土。 | B軽石・F.A.・ロームブロックを含む。 |

第105図 第36・37号住居跡実測図

第二章 検出された遺構と遺物



第106図 第36号住居跡出土遺物実測図

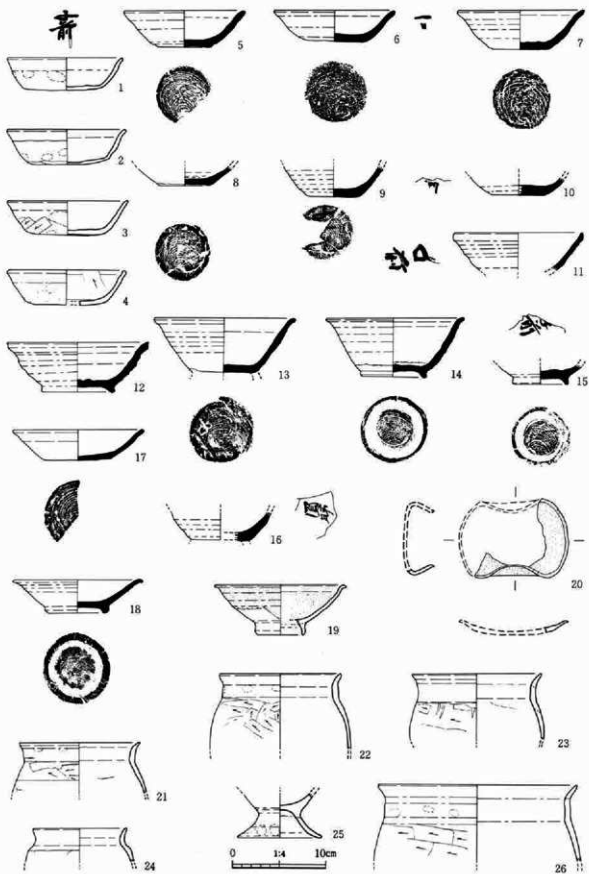
第42表 第36号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 383	坏 (須恵器)	底部残存 高 5.6cm	北西部 13.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
2 384	高台付碗 (須恵器)	1/4残存 口 14.2cm	壺周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 385	高台付皿 (須恵器)	1/4残存 口 14.2cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 432	鉢 (須恵器)	1/4残存 口 18.0cm	壺周辺 6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色 ③還元炎・硬質	外面 体部手持り寛削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。窪磨き。	
5 386	蓋 (須恵器)	1/4残存 口 18.8cm	南東部 16.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 天井部回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 388	甕 (土師器)	1/4残存 口 19.8cm	壺周辺 床面直上	①砂粒・細粒を含む ②ふい褐色 ③還元炎・良好	外面 体部上半～肩部横方向寛削り。口縁部横ナデ。 内面 粗い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 395	甕 (土師器)	1/4残存 底 4.0cm	南東部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②ふい黄褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部縦方向寛削り。 内面 強い寛ナデ後、粗いナデ。	
8 393	甕 (土師器)	1/4残存 口 18.6cm	壺周辺 17.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向削り。肩部指頭圧痕を寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 強い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 394	甕 (土師器)	1/4残存 口 18.8cm	北東部 10.0cm	①砂粒を含む。 ②ふい褐色 ③還元炎・良好	外面 体部下半縦方向削り。体部上半～肩部斜め方向削り。肩部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	
10 389	甕 (土師器)	1/4残存 口 18.0cm	北西部 11.0cm	①砂粒を含む。 ②ふい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向削り。口縁部横ナデ。 内面 粗い寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 391	甕 (土師器)	小破片 口 23.8cm	壺周辺 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②赤色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向削り。肩部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 寛ナデ後、粗いナデ。口縁部強い横ナデ。	
12 396	須恵器	1/4残存 底 16.9cm	壺周辺 23.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部寛削り。 内面 体部下半叩磨め痕をナデで消す。	

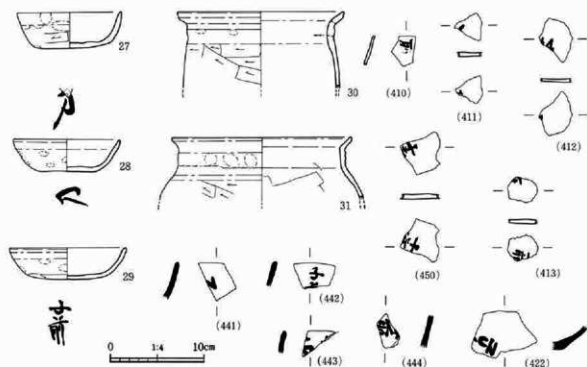
第43表 第37号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 397	坏 (土師器)	完形 口 12.4cm 高 3.4cm	南西部 5.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「子前」
2 398	坏 (土師器)	1/4残存 口 12.8cm 高 3.7cm	南東部 -2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内外面に墨書有り。 釈文「子前」
3 399	坏 (土師器)	1/4残存 口 12.8cm 高 3.6cm	南東部 23.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛削りで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
4 400	坏 (土師器)	1/4残存 口 12.6cm 高 3.7cm	南東部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物



第107図 第37号住居跡出土遺物実測図



第108図 第36・37号住居跡掘り方出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法址	出土状況	①胎土②色③構成	成・整形の特徴	備考
5 415	坏 (須恵器)	2/3残存 口 13.0cm 高 3.9cm 底 5.8cm	南東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「子前」
6 414	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.0cm 高 3.3cm 底 6.2cm	北西部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②よい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内外面に墨書有り。 釈文不明。
7 416	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.6cm 高 4.2cm 底 6.4cm	南東部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
8 420	坏 (須恵器)	底部完存 底 5.5cm	龍岡辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
9 423	坏 (須恵器)	底部完存 底 5.3cm	南西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「子前」
10 421	坏 (須恵器)	1/2残存 底 5.5cm	南東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「子前」
11 433	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.8cm	南西部 -3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「子前」
12 425	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.1cm 高 5.2cm 底 7.7cm	南東部 8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 底部未調整。体部回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明。
13 426	高台付碗 (須恵器)	1/5残存 口 15.2cm 高 5.8cm 底 6.7cm	南東部 6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(剥落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

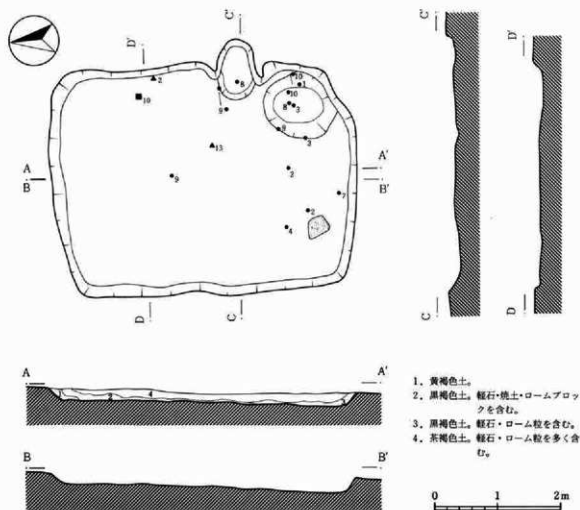
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
14 427	高台付椀 (須恵器)	2/3残存 □ 14.8cm 高 6.1cm 底 7.0cm	南東部 20.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
15 438	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 6.0cm	北西部 26.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「子前」
16 424	高台付椀 (須恵器)	1/2残存	北西部 7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り後、高台貼付け。(割落) 内面 回転によるナデ。	体部内外面に墨書有り 釈文内面「酒人師口」・ 外面不明。
17 439	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 14.1cm 高 3.2cm 底 7.1cm	南東部 床面直上	①砂粒・細線を含む。 ②黄灰色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	
18 440	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 □ 13.9cm 高 3.4cm 底 6.9cm	南西部 9.0cm	①砂粒を含む。 ②オリーブ灰色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
19 446	高台付椀 (灰輪陶器)	1/2残存 □ 14.2cm 高 5.3cm 底 5.4cm	中央部 9.0cm	①均質 ②明緑灰色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。洗け掛けによる淡灰緑色釉。 外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。体部下端回転置閉り。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
20 447	耳皿 (灰輪陶器)	1/2残存 □ 11.7cm	北東部 14.0cm	①均質 ②明緑灰色 ③還元炭・硬質	右回転クワロ整形。洗け掛けによる淡灰緑色釉。 外面 底部切り離し技法不明。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。	38号住の遺物と接合。
21 452	壺 (土師器)	1/2残存 □ 13.0cm	北西部 23.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 足ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	
22 453	小型壺 (土師器)	1/2残存 □ 13.0cm	南東部 15.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 足ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
23 454	壺 (土師器)	1/2残存 □ 13.9cm	南東部 31.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部斜め方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 足ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
24 455	壺 (土師器)	1/2残存 □ 10.1cm	中央部 28.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部置閉り。肩部指頭強い横ナデ。 内面 足ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	
25 451	脚台付甕 (土師器)	1/2残存 底 9.0cm	庵周辺 17.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向置閉り。脚貼付け後、ナデ。 内面 新貼付け後、ナデ。	
26 457	壺 (土師器)	小破片	庵周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部強い横ナデ。内面 足ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	口唇部に沈線有り。
27 387	坏 (土師器)	1/2残存 □ 11.3cm 高 3.8cm 底 5.8cm	掘り方	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置閉り。体部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
28 448	坏 (土師器)	1/2残存 □ 11.5cm 高 3.3cm	掘り方	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置閉り。体部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内外面に墨書有り 釈文「刀」
29 449	坏 (土師器)	1/2残存 □ 12.5cm 高 3.3cm	掘り方	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置閉り。体部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	底部内外面に墨書有り 釈文「子前」
30 392	壺 (土師器)	1/2残存 □ 18.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 足ナデ後、粗いナデ。口縁部強い横ナデ。	
31 390	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.8cm	掘り方	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向置閉り。肩部指頭圧痕を粗い足ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 足ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第38号住居跡(第109~111図、図版38・67) 位置 II区25B-34グリッド

本住居跡は、北西隅及び南辺の上部に耕作に伴うと考えられる攪乱が認められたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、南東隅が若干歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.60m・南北方向4.80mを測り、床面積は14.5㎡である。主軸方位はN-3°-Eである。壁は、現状で25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高16~24cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が有り、掘り方に約5cmの厚さで淡褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。中央部はやや焼けており、付近には鉄滓が認められた。南東隅には、長径115cm・短径100cm・深さ20cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器杯・甕、須恵器皿、焼けた川原石等が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、四隅に深さ12~16cm程の不整形の窪みが認められ他、2つのピットを検出した。P₁は長径60cm・短径45cm・深さ22cmを測り、内部から土師器甕、灰釉陶器瓶、不明鉄器が出土した。P₂は長径60cm・短径35cm・深さ15cmを測り、炭化物・ローム粒を含む黒褐色土が詰まっていたが、遺物は出土しなかった。P₁は、所謂「床下土坑」と考えられるが、P₂の性格は不明である。

竈は、東辺の中央から80cm程南寄りの位置に、白色粘土を使用して構築されていた。竈の端部を明確にで

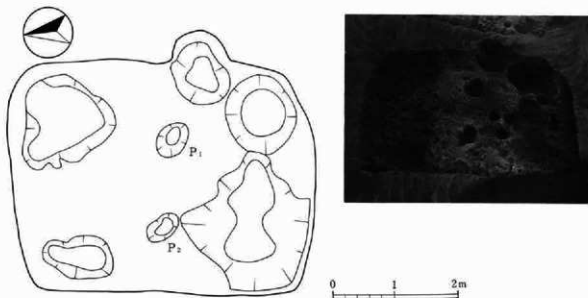


第109図 第38号住居跡実測図

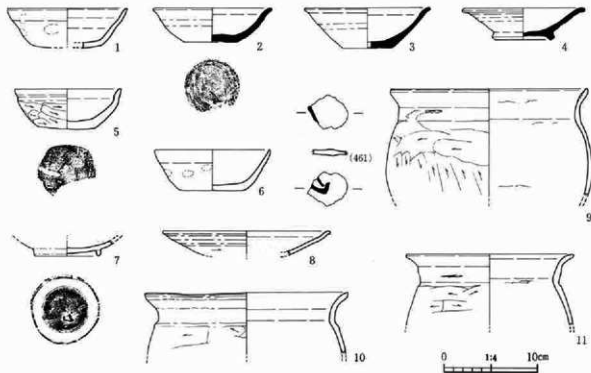
第II章 検出された遺構と遺物

きなかったが、現状で袖が15cm程張り出し、燃焼部は馬蹄形でちょうど壁際に位置し、火床面は8cm程窪んでいた。掘り方は長径110cm・短径95cm・深さ21cmの不整長円形で、左壁際には袖石を据えたと思われる窪みが認められた。更に、東端には長径25cm・短径20cm・深さ14cmの長円形ピットが検出されたが、性格は不明である。掘り方の覆土は殆どが灰であった。

遺物は、竈及び貯蔵穴の他は、南半部に多く認められた。東壁際の石は燻用材、南西部の石については、工作台の可能性が考えられる。覆土中出土土器は、土師器は裏類のみであり、灰釉陶器皿・耳皿が7点、坏・碗類は全て須恵器であった。



第110図 第38号住居跡掘り方実測図



第111図 第38号住居跡出土遺物実測図

第44表 第38号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 460	環 (土師器)	ㄗ残存 口 12.8cm	貯蔵穴中 -10.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭田張を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 462	環 (須恵器)	ㄗ残存 口 12.8cm 高 3.6cm 底 5.8cm	南西部 床面直上	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内外面に 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 463	環 (須恵器)	ㄗ残存 口 13.4cm 高 4.3cm 底 5.2cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 464	高台付皿 (須恵器)	ㄗ残存 口 13.1cm 高 3.3cm 底 6.7cm	南西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰・灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 458	環 (須恵器)	ㄗ残存 口 11.4cm 高 4.2cm 底 5.9cm	貯蔵穴中 -6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持り寛削り。体部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
6 459	環 (須恵器)	ㄗ残存 口 12.4cm 高 4.2cm 底 6.9cm	貯蔵穴中 -5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持り寛削り。体部指頭田張を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 465	高台付碗 (灰胎陶器)	底部完存 底 7.2cm	南西部 10.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
8 466	皿 (灰胎陶器)	小破片 口 18.0cm	貯蔵穴中 -13.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 体部下半回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 467	壺 (土師器)	ㄗ残存 口 21.1cm	甕周辺 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向削り。肩部縦方向削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 468	壺 (土師器)	ㄗ残存 口 21.8cm	貯蔵穴中 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 469	壺 (土師器)	小破片 口 18.0cm	中央部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向削り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第39号住居跡 (第112～114図、図版38・67・68) 位置 II区25B-34グリッド

本住居跡は、四隅に擾乱を受けており上部を削られていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が長い横長型で、北東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向4.30m・南北方向4.80～5.10mを測り、床面積は18.6㎡である。主軸方位はN-31.5°-Eである。

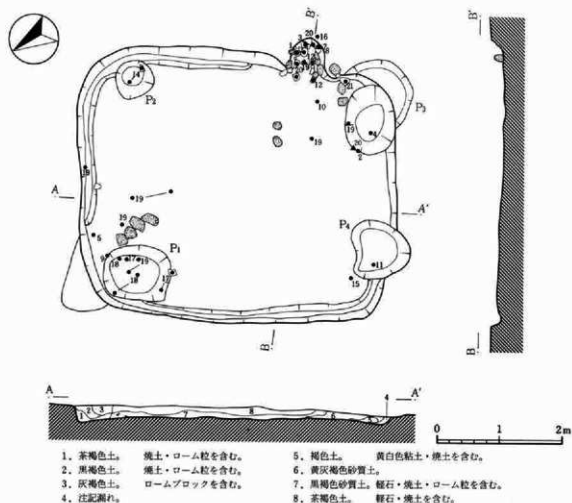
床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方に約5cmの厚さで黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。南東部を除いた壁下には幅10～20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。南東隅には長径110cm・短径80cm・深さ40cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、炭化物・焼土を含む黒灰褐色土が詰まっていた。遺物は主に上層より出土している。なお、柱穴は検出されなかった。P₁は、上端部はやや荒れており、住居の床面で86cm×106cm・深さ32cmを測るが、土層断面の記録に明らかなように上部に別の土坑が重複していると考えられる。遺物は主に上層部より出土しているが、4個並んだ川原石等は、別の土坑に伴う可能性が高い。P₂は径約60cm・深さ22cm、P₃は径約105cm・深さ20cm、P₄は径約120cm・深

第II章 検出された遺構と遺物

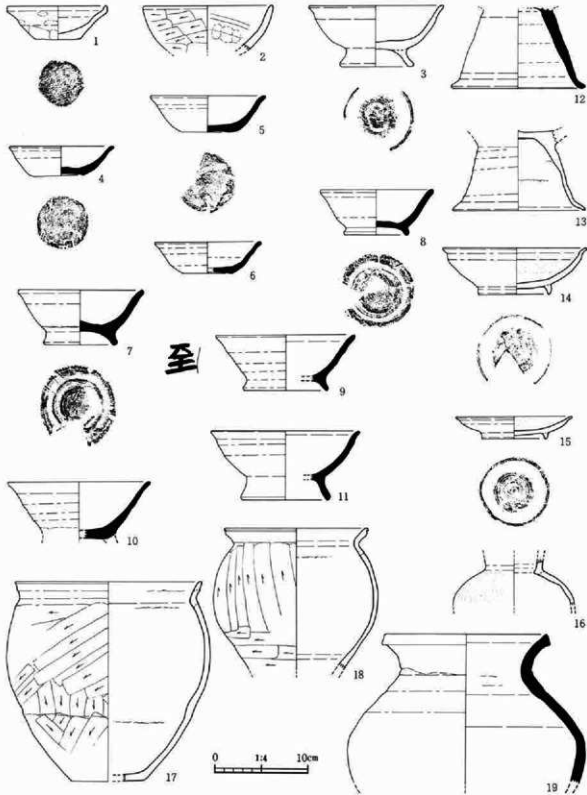
き9cmを測るが、いずれも性格は不明である。なお、出土した遺物は、本住居と同じ様相を示すものであった。床面下精査の結果、東壁際に130cm×200cm・深さ約10cmの不整形の窪みが認められた他、3個のピットを検出した。P₁は径50~60cm・深さ25cmを測り、二重に貼り床がなされていた。P₂・P₃はいずれも径約75cm・深さ15cm前後を測るが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から1m程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。6石が原状を留めており、焚口幅60cm・奥行80cmを測り、火床面の先端近くには支脚が残っていた。掘り方は不整半円形で、石の据え痕が確認された他は特別な遺構は検出されなかった。なお、焚口部前面には袖部に架構されたと考えられる焼石が横たわっていた。

遺物は、ほぼ全域に散在して出土した。覆土中出土物も含めた環・腕類の比率は、土器器1：須恵器2であった。

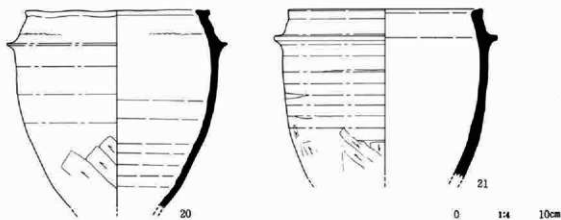


第112図 第39号住居跡実測図



第113図 第39号住居跡出土遺物実測図(1)

第II章 検出された遺構と遺物



第114図 第39号住居跡出土遺物実測図(2)

第45表 第39号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 470	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.8cm 高 3.5cm 底 4.7cm	竜岡辺 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持り足削り。体部下端削り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 482	坏 (土師器)	小破片 口 14.0cm	南東部 9.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部削り。口縁部横ナデ。 内面 粗いナデ。口縁部横ナデ。	
3 479	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.5cm 高 6.5cm 底 8.0cm	竜岡辺 8.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にふい橙色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 高台貼付け後のナデのため底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 荒磨き。口縁部横ナデ。	
4 471	坏 (須恵器)	完形 口 11.2cm 高 3.1cm 底 5.5cm	貯蔵穴中 -26.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 472	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.8cm 底 5.8cm	北西部 5.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 473	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.4cm 高 3.3cm 底 5.3cm	竜岡辺	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 475	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 13.5cm 高 5.8cm 底 7.9cm	竜岡辺 9.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 474	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 12.2cm 高 4.7cm 底 7.0cm	竜岡辺 9.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にふい黄褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 476	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.9cm 高 5.9cm 底 9.2cm	北西部 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「至」
10 478	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.2cm	竜岡辺 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②淡黄色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
11 477	高台付椀 (須恵器)	ㄣ残存 口 16.0cm 高 7.3cm 底 9.5cm	南西部 P ₁ 中	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのため底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
12 480	足高高台椀 (須恵器)	ㄣ残存 底 14.3cm	電周辺 3.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・やや軟質	右回転クワロ整形。 外面 貼付け高台。下部部横ナデ。 内面 未調整。下部部横ナデ。	
13 481	足高高台椀 (須恵器)	ㄣ残存 底 14.1cm	電周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 貼付け高台。下部部横ナデ。 内面 未調整。下部部横ナデ。	
14 484	高台付椀 (灰釉陶器)	ㄣ残存 口 15.4cm 高 4.9cm 底 7.7cm	P ₁ 中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転整形後、高台貼付け。体部下端回転整形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
15 483	高台付皿 (灰釉陶器)	ㄣ残存 口 12.4cm 高 2.3cm 底 7.0cm	南西部 9.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転整形後、高台貼付け。体部下端回転整形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
16 485	提 瓶 (灰釉陶器)	小破片	電周辺 16.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。	
17 487	土 釜 (須恵器)	ㄣ残存 口 19.9cm 高 21.2cm 底 7.6cm	P ₁ 中	①砂粒を含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・硬質	外面 底部切り離し技法不明。体部斜め方向整形。口縁部横ナデ。 内面 蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
18 486	小 型 壺 (須恵器)	ㄣ残存 口 15.3cm	貯蔵穴中 -7.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・硬質	外面 体部下端斜め方向整形。体部上半部方向整形。口縁部横ナデ。 内面 蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
19 490	壺 (須恵器)	下半部欠損 口 17.3cm	北西部 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 未調整。口縁部横ナデ。 内面 未調整。口縁部横ナデ。	
20 488	羽 釜 (須恵器)	ㄣ残存 口 19.5cm	電周辺 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白・黄色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 体部下半部整形。肩貼付け後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
21 489	羽 釜 (須恵器)	ㄣ残存 口 20.8cm	南東部 -2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転クワロ整形。 外面 体部下半部整形。肩貼付け後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第40号住居跡 (第115・116図、図版38・68) 位置 II区25B-39グリッド

本住居跡は、103号住居跡及び50号土坑と重複していたが、先後関係については103号住居跡→本住居跡→50号土坑の順であることが確認されている。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南西部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.22m・南北方向4.13～4.34mを測り、床面積は11.8㎡である。主軸方位はN-24°-Eである。

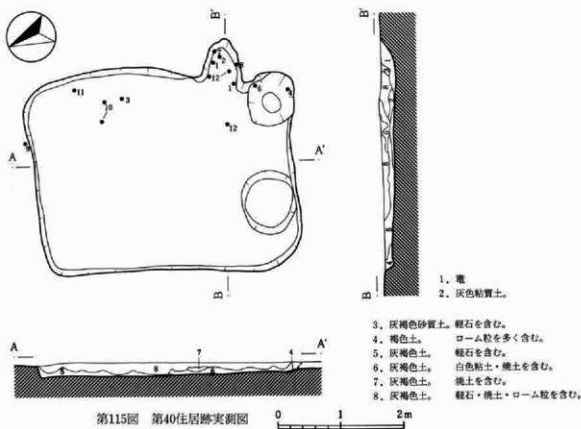
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高7～15cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。特に、103号住居跡と重複する部分については厚さ3cm程の堅い床が認められた。南東隅には、長さ90cm・短径73cm・深さ50cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から須恵器・椀・壺、灰釉陶器等が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竪は、東辺の中央から100cm程南寄り位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅49cm・奥行61cmを測り、全長76cmを確認した。焼付け

第II章 検出された遺構と遺物

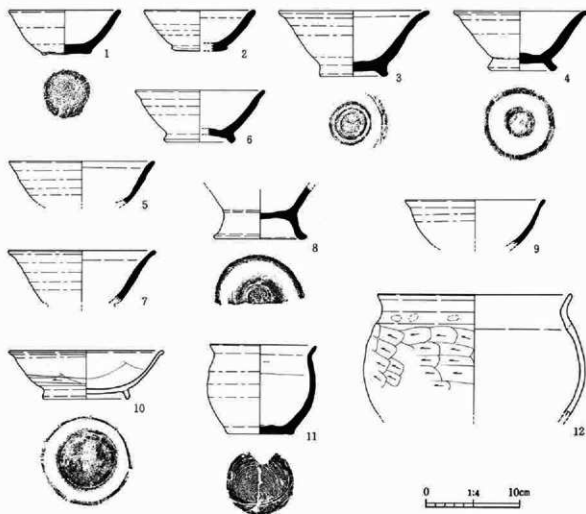
みは強く、焼焼部内には不落した天井材が残っていた。掘り方は不整半円形で、火床面下には深さ約30cmのピットが認められた他は特別な遺構は検出されなかった。遺物はほぼ全域に散在して出土した。



第46表 第40号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 491	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 12.0cm 高 4.6cm 底 5.2cm	甕周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 492	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.9cm 高 4.3cm 底 5.9cm	甕周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 493	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 16.3cm 高 7.0cm 底 7.4cm	北東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 494	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.3cm 高 6.3cm 底 7.4cm	貯蔵穴中 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのため底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 495	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.6cm	甕周辺 16.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 496	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.8cm 高 5.5cm 底 7.6cm	貯蔵穴中 -11.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台。底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第116図 第40号住居跡出土遺物実測図

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7 498	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 □ 16.0cm	竈周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 497	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 10.0cm	竈周辺 16.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロロ整形。 外面 貼付け高台後のナデのため底部切り離し技法不明。 内面 回転によるナデ。	
9 502	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 □ 14.9cm	北西部 18.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。鼠磨き。黒色地肌。	
10 501	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 □ 16.6cm 高 5.1cm 底 9.4cm	北西部 1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロロ整形。 外面 底部回転削削後、高台貼付け。体部下端回転削削。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11 500	甕 (須恵器)	1/2残存 □ 11.4cm 高 9.4cm 底 7.0cm	北西部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロロ整形。 外面 底部回転削削り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
12 514	甕 (土器器)	1/2残存 □ 20.7cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 体部傾方向削削。口縁部横ナデ。 内面 甕ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

第41号住居跡 (第117・118図、図版39) 位置 II区20B-39グリッド

本住居跡は、43号住居跡及び101号住居跡によって壊されていたために、遺存状態が極めて芳しくなかった。壁及び床面は、しっかりとしたものを捉えられなかったが、平面形は、西辺に竈を持つ隅丸方形を呈するとされる。規模は、南北方向2.90m程の大きさが考えられる。

竈は、P₁の上部に焼け込みが認められたので、この部分に構築されていたものと思われる。P₁は径60cm・深さ32cmを測り、内部には焼けた川原石が落ち込んでいた。本住居の貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物は、土師器の細片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。

第43号住居跡 (第117・118図、図版39・68) 位置 II区20B-39グリッド

本住居跡は、41号住居跡及び101号住居跡と重複していた。先後関係は、41号住居跡→本住居→101号住居跡の順になることが確認されている。掘り込みが浅いために不確定な部分があるが、平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、各辺がやや膨らみを持った隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向3.24m・南北方向4.08m程の大きさと考えられる。主軸方位は、歪みが著しいため測定し難い。

壁は、現存高4～9cmのローム層の壁面を検出したが、南緩傾斜地形のため遺存状態が芳しくなかった。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部がややこんもりとしていた。掘り方をそのまま整地して使用したと思われ、竈の手前のこんもりとした部分のみが強く踏み締められていた。南東隅には径78cm・深さ19cmの円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。P₁は径70cm・深さ21cmを測り、本住居の床下土坑である可能性が高い。

竈は、東辺の中央から86cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が若干付き、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焼け込みはさほど強くなく、焚口幅49cm・奥行71cmを測り、全長83cmを確認した。掘り方は不整半円形で、袖部には径約30cm・深さ10cm前後の小ピットが2個、火床面下には長径90cm・短径70cm・深さ20cmの長円形の掘り込みが認められた。袖の用材を立てた穴の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

遺物は、竈内及び中央部に集中して出土したが、破片が多かった。

第101号住居跡 (第117・118図、図版39・68) 位置 II区20B-39グリッド

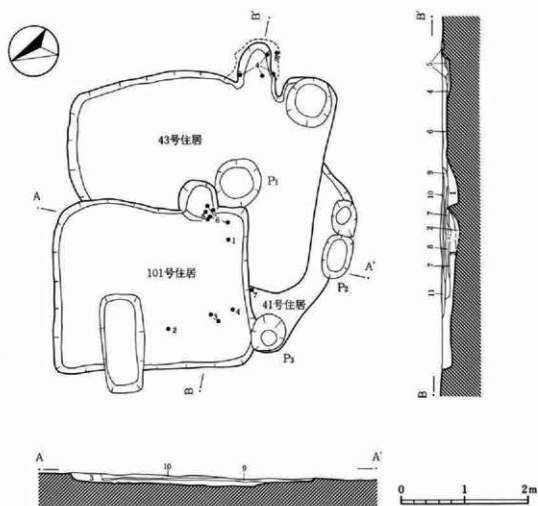
本住居跡は、41号住居跡及び43号住居跡を壊して作られていた。北西部に耕作に伴うと考えられる土坑の重複があつたが、遺存状態は比較的良好であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北西部がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.52m・南北方向3.08～3.28mを測り、床面積は7.8m²である。主軸方位はN-22°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高17～23cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこんもりとしていたがほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、5箇所にピットを認めたが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から68cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際には有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焼け込みはさほど強くなく、焚口幅40cm・奥行51cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、特別な遺構は認められなかった。

遺物は竈周辺に集中して出土した。



- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1. 暗茶褐色土。焼土・ローム粒を含む。 | 7. 茶褐色土。ロームを多く含む。 |
| 2. 黒灰色土。炭化物・灰を多く含む。 | 8. 暗茶褐色土。 |
| 3. 茶褐色土。ロームブロックを含む。 | 9. 暗茶褐色土。F. A.・焼土・ローム粒を含む。 |
| 4. 黒褐色土。焼土・灰を含む。 | 10. 茶褐色土。焼土・ローム粒を含む。 |
| 5. 灰褐色土。焼土・粘土・ローム粒を含む。 | 11. 茶褐色土。擾乱土層か。 |
| 6. 暗茶褐色土。F. A.・ローム粒を含む。 | |

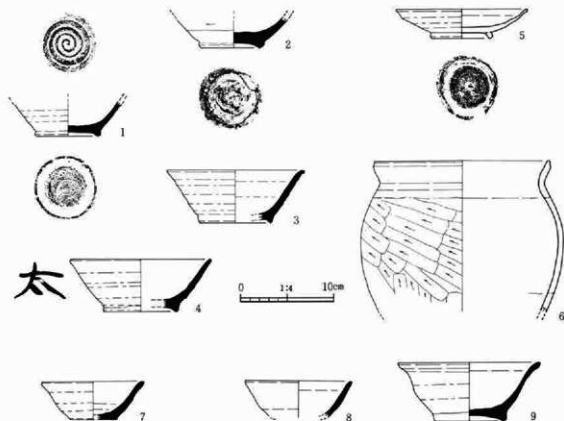
第117図 第41・43・101号住居跡実測図

第47表 第41・43・101号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 527	高台付椀 (須恵器)	写残存 底 7.0cm	南東部 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②に濃い赤褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
2 528	高台付椀 (須恵器)	写残存 底 6.5cm	南西部 14.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
3 529	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 14.8cm 高 5.6cm 底 8.0cm	南西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第二章 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
4 S30	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.3cm 高 5.6cm 底 8.0cm	中央部 ビット内	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「太」
5 S31	高台付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 口 14.2cm 高 3.1cm 底 6.6cm	電周辺 -2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる灰緑色釉。 外面 底部回転糸削り。貼付け高台。体部下端回転 削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 S32	鉢 (土器器)	1/2残存 口 19.1cm	電周辺 -4.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下平坂方向窪削り。体部上半~肩部斜め 方向窪削り。肩部~口縁部横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 S24	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.0cm 高 4.0cm 底 5.0cm	不詳 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 S25	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 11.4cm	電周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②黄灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 S26	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.2cm 高 6.2cm 底 7.2cm	電周辺 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナ デ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	



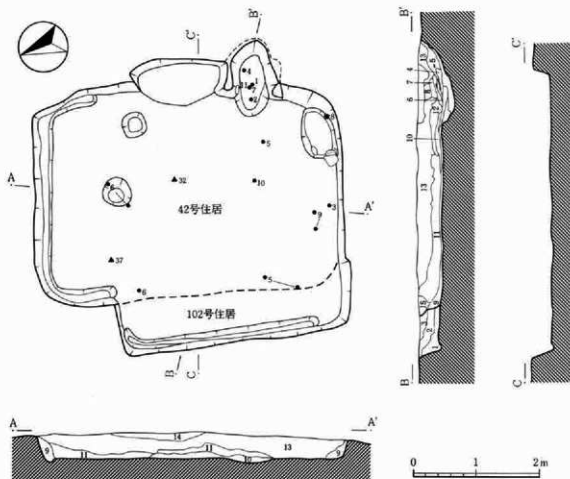
第118図 第41・43・101号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡 (第119～121図、図版40・69) 位置 II区23B-39グリッド

本住居跡は、102号住居跡を壊して作られていた。東壁の一部は耕作に伴うと考えられる土坑によって壊されており、平面的な遺構確認段階で先後関係が捉えられなかったために西壁の大部分を残し得なかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、東辺がやや膨らんだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.44m・南北方向4.90mを測る。主軸方位はN-19°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高25～31cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には長径83cm・短径52cm・深さ30cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部からは土師器・須恵器・灰軸陶器・川原石が出土した。また、北側には幅約15cm・深さ3cm前後の周溝が「コ」字形に巡っていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、竈の手前で径80～90cm・深さ10～15cmの3個の円形ピットを検出したが、性格は不明である。



- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 1. 黒色土。黄褐色土ブロックを含む。 | 9. 黒褐色土。ローム粒を含む。 |
| 2. 黄褐色土。ローム粒を含む。 | 10. 黒色粘質土。ローム粒を少し含む。 |
| 3. 黒褐色土。粘土・ローム粒を含む。 | 11. 黒褐色土。焼土・ローム粒を含む。 |
| 4. 灰層。 | 12. 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。 |
| 5. 焼けた白色粘土。 | 13. 灰褐色土。軽石・焼土・炭化物を含む。 |
| 6. 褐色土。焼土・灰を含む。 | 14. 灰褐色土。焼土・炭化物・白色粘土を含む。 |
| 7. 白色粘土。(天井部崩落土) | 15. 黒褐色土。焼土・ローム粒を含む。 |
| 8. 灰褐色土。焼土・ローム粒を含む。 | |

第119図 第42・102号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

竈は、東辺の中央から115cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃烧部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅50cm・奥行66cmを測り、全長88cmを確認した。掘り方は半円形で、火床面下には径約85cm・深さ18cm前後の、底面が凹凸した穴が検出され、焼土・炭化物を含む暗赤褐色土が詰まっていた。

遺物はほぼ全域に散在して出土しており、金属製品が多く出土したことが注目される。

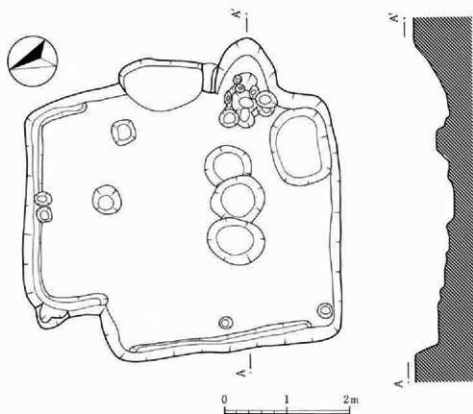
第102号住居跡 (第119・120図、図版40) 位置 II区23B-39グリッド

本住居跡は、大部分を42号住居跡によって壊されていたために部分的な調査にとどまってしまった。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈すると思われる。規模は、南北方向3.82mを測り、東西方向は西壁から98cmの範囲まで確認した。西辺の走向はN-16°-Eである。

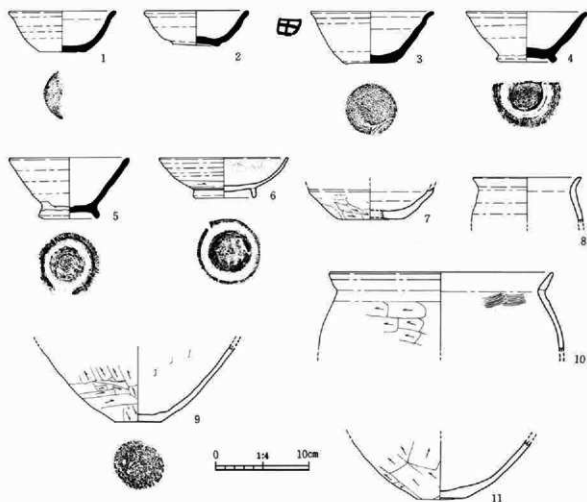
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高30~32cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面が強く踏み締められていた。床面レベルは42号住居とほぼ同じで、西壁下には幅約15cm・深さ4cm前後の周溝が掘られていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、竈についても全く資料を欠く。

遺物は、細片が少量出土した。



第120図 第42・102号住居跡掘り方実測図



第121图 第42号住居跡出土遺物実測図

第48表 第42号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 503	坏 (須恵器)	片残存 口 11.6cm 高 4.4cm 底 4.8cm	甕周辺 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②におい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 504	坏 (須恵器)	片残存 口 11.2cm 高 3.7cm 底 4.8cm	甕周辺 -7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞込み。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 505	坏 (須恵器)	ほぼ完形口 13.2cm 高 5.5cm 底 6.0cm	南西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄橙色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「H」
4 506	高台付罎 (須恵器)	片残存 口 12.9cm 高 5.3cm 底 6.5cm	甕周辺 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 貼付け高台。底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
5 507	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.0cm 高 6.5cm 底 6.4cm	電周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台。底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 508	高台付碗 (灰輪陶器)	ほぼ完形 口 13.8cm 高 4.3cm 底 7.0cm	北西部 20.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転整形。貼付け高台。体部下端回転整形。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 513	坏 (須恵器)	1/2残存 底 7.0cm	電周辺 底 -2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部手持ち整形。体部粗い度削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。	
8 510	壺 (須恵器)	1/2残存 口 11.5cm	貯蔵穴中 -18.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 512	壺 (土師器)	底部完存 底 5.0cm	南西部 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部砂底。体部削削り。 内面 長ナデ後、ナデ。	
10 509	壺 (土師器)	1/2残存 口 24.0cm	中央部 24.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向削削り。口縁部横ナデ。 内面 長ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 511	土 釜 (須恵器)	底部完存 底 5.2cm	電周辺 底 -2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	外面 底部手持ち整形。体部斜め方向削削り。 内面 長ナデ後、ナデ。	

第44号住居跡 (第122・123・126図、図版40・69) 位置 II区20B-44グリッド

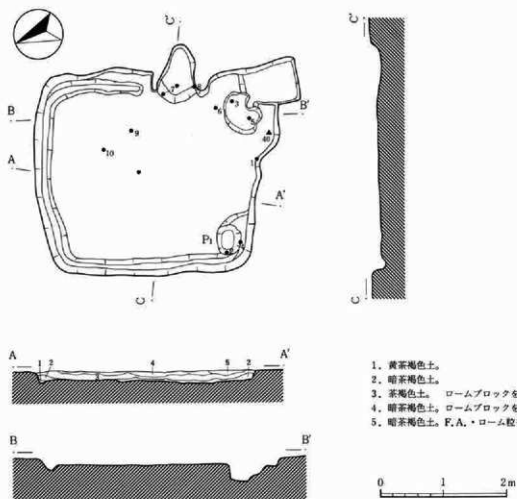
本住居跡は、45号住居跡を壊して作られていたが、南東隅の一部が耕作に伴うと考えられる土坑によって床面下まで壊されていた。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、南東部に張り出し部を持った隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向3.30m・南北方向3.50mを測り、床面積は約10.0㎡である。主軸方位はN-21°-Eである。

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高12～15cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、径約100cm・深さ25cmの円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から須恵器碗2個体と土師器の細片が出土した。P₁は長径45cm・短径40cm・深さ18cmを測り、内部からは須恵器碗2個体と土師器壺の破片が出土したが、性格は不明である。南辺及び南東部を除いた壁下には、幅約20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の中央から35cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。約20cmの袖を持ち、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。火床面の中心はちょうど壁際に有り、焚口幅50cm・奥行75cmを測る。火床面には土師器壺の破片が散乱していた。掘り方は半円形で、5cm程掘り窪められていたが特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。

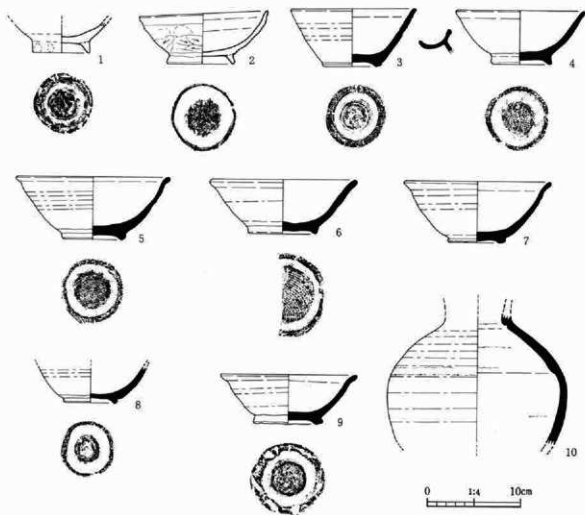


第122図 第44号住居跡実測図

第49表 第44号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 534	高台付鉢 (須恵器)	底部完存 底 6.0cm	南東部 9.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化炭・硬質	外面 高台貼付け後のナデのため底部切り離し技法不明。体部粗い覆削り。 内面 ナデ。粗い覆削り。	
2 536	高台付鉢 (須恵器)	1/2残存 口 13.8cm 高 5.3cm 底 7.3cm	P ₁ 中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・硬質	外面 高台貼付け後のナデのため底部切り離し技法不明。体部下半部削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
3 535	高台付鉢 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 6.1cm 底 5.8cm	貯蔵穴中 -9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に 書き有り。 釈文「人」
4 537	高台付鉢 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.0cm 高 5.6cm 底 6.5cm	P ₁ 中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 538	高台付鉢 (須恵器)	1/2残存 口 16.5cm 高 6.6cm 底 6.7cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物



第123図 第44号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6 539	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 15.8cm 高 5.8cm 底 7.4cm	南東部 1.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②にふい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 542	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 15.8cm 高 6.4cm 底 6.2cm	龍岡辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②にふい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 540	高台付椀 (須恵器)	口縁部欠損 高 5.7cm	龍岡辺 7.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのため底部切り難し技法不明。 内面 回転によるナデ。	
9 541	高台付椀 (須恵器)	写残存 口 14.6cm 高 5.2cm 底 7.5cm	龍岡辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にふい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
10 543	長頸瓶 (須恵器)	写残存	北東部 7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。	

第45号住居跡 (第124～126図、図版40・69) 位置 II区20B-44グリッド

本住居跡は、東辺及び南西部が耕作に伴うと考えられる土坑によって壊されていた上に、西側の上部に44号住居跡の重複が有ったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、西辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.43m・南北方向3.68mを測り、床面積は約8.9m²程になると考えられる。主軸方位はN-21°-Eである。

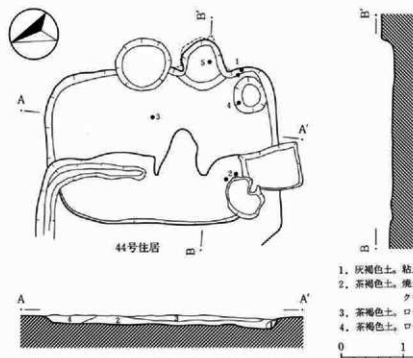
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高2～18cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約12cmの厚さでロームを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、径約60cm・深さ20cmの円形の貯蔵穴が穿たれており、内部からは須恵器杯が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、中央部において、長径84cm・短径74cm・深さ28cmの円形ピットが確認されたが性格は不明である。

竈は、東辺の中央から75cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅57cm・奥行51cmを測り、全長60cmを確認した。焼け込みはさ

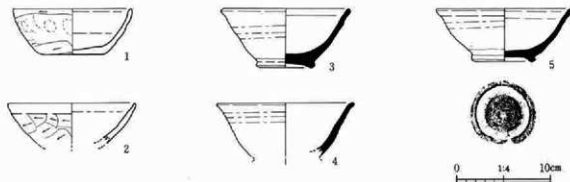
ほど強くなく、火床面には須恵器碗が残っていた。掘り方は半円形で、8cm程掘り溜められていたが、特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土したが、細片が多かった。

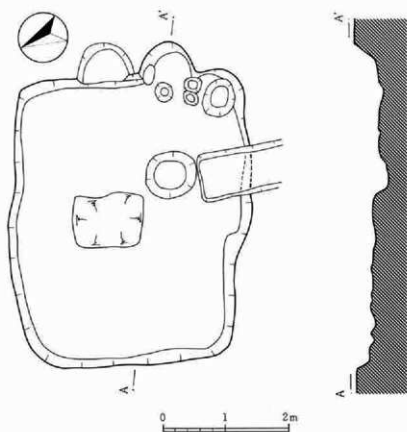


第124図 第45号住居跡実測図

1. 灰褐色土。粘土を含む。
2. 茶褐色土。焼土・炭化物・ロームブロックを含む。
3. 茶褐色土。ロームブロックを多く含む。
4. 茶褐色土。ロームブロックを含む。



第125図 第45号住居跡出土遺物実測図



第126図 第44・45号住居跡掘り方実測図

第50表 第45号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 545	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 12.8cm 高 4.8cm 底 7.0cm	南東部 -1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②暗赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部へ体部下端手持ち整形。体部拍頭圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 546	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 13.8cm	南西部 -7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炭・硬質	外面 体部手持ち荒削り。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 548	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 14.0cm 高 6.2cm 底 6.1cm	中央部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転車切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 547	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 15.0cm	貯蔵穴中 -8.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
5 549	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 14.5cm 高 5.6cm 底 6.8cm	竈周辺 -1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナゲのための底部切り離し技法不明。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	

第46号住居跡 (第127・128図、図版40・69) 位置 II区19B—47グリッド

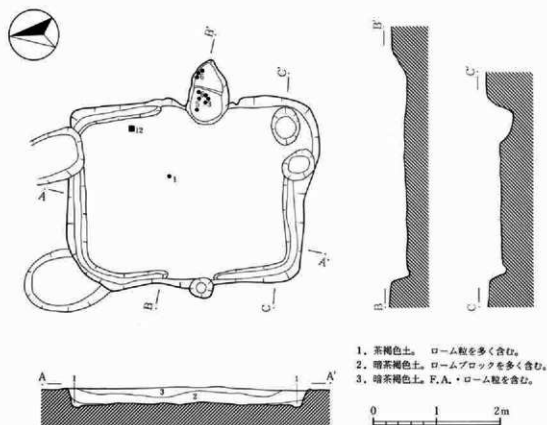
本住居跡は、耕作に伴うと考えられる土坑の重複があったが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南東部が歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.85m・南北方向3.65～4.05mを測り、床面積は9.7m²である。主軸方位は磁北と一致する。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高10～28cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方約10cmの厚さで暗茶褐色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には長径60cm・短径45cm・深さ27cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、南東部を除いた壁下には幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

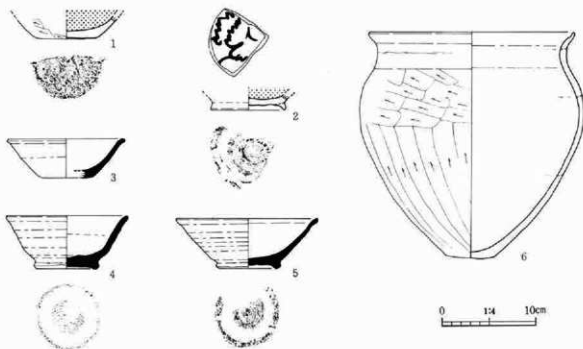
竈は、東辺の中央から30cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅50cm・奥行70cm程の大きさと考えられる。火床面は若干窪んでおり、掘り方は不整半円形で、火床面下の長径58cm・短径40cm・深さ10cmの長円形ピットには焼土粒を多く含む暗茶褐色土が詰まっていた。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。



第127図 第46号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第128図 第46号住居跡出土遺物実測図

第51表 第46号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 551	坏 (須恵器)	1/2残存 底 5.6cm	中央部 9.0cm	①砂粒・細織を含む ②にふい黄褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部～体部手持ち部削り。 内面 磨磨き。黒色処理。	
2 554	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 8.0cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③酸化灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 磨磨き。黒色処理。暗文を施す。	所謂ロクロ土師器。 底部内面に 花状暗文。
3 550	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 4.1cm 底 5.6cm	甕周辺 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 553	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.1cm 高 5.6cm 底 7.0cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 552	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 15.2cm 高 5.2cm 底 6.9cm	甕周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②にふい黄褐色 ③還元灰・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのための底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内外面に 墨書有り 釈文「子前」
6 555	壺 (土師器)	1/2残存 口 22.0cm 高 23.8cm 底 5.2cm	甕周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持ち部削り。体部縦方向削り。肩部横方向削り。肩部指調圧痕を粗い筋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

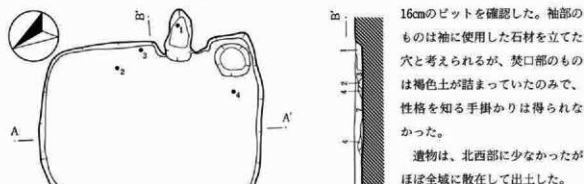
第47号住居跡 (第129・130図、図版41・69) 位置 II区16B-32グリッド

本住居跡は、性格不明の小ピットが重複していたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち、南北方向が長い横長型で、南東部がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.50～2.65m・南北方向3.50mを測り、床面積は7.8㎡である。主軸方位はN-30.5°-Eである。

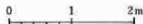
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高9～14cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約20cmの厚さで灰褐色土と黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には一辺54cm・深さ13cmの隅丸方形の貯蔵穴が穿たれており、焼石2個と須恵器壺の破片が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

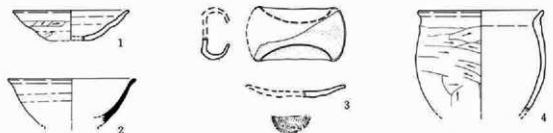
竈は東辺の中央から35cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が15cm程張り出し、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅50cm・奥行60cmを測り、全長72cmを確認した。火床面は若干窪んでおり強く焼けていた。掘り方は不整半円形で、袖部に径25cm・深さ5cmのピット2個、焚口部に径45cm・深さ



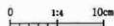
1. 竈
2. 灰褐色粘質土。焼土・炭化物を含む。
3. 茶褐色土。ロームブロックを含む。
4. ロームブロック。
5. 暗褐色土。ローム粒を含む。
6. 茶褐色土。ローム粒を多く含む。
7. 茶褐色土。F.A.・ローム粒を含む。



第129図 第47号住居跡実測図



第130図 第47号住居跡出土遺物実測図



第II章 検出された遺構と遺物

第52表 第47号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 556	坏 (土師器)	小破片 口 11.3cm	東周辺 5.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい橙色 ③酸化炭・良好	外面 底部～体部下端手持ち荒削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 557	高台付碗 (灰黒器)	1/2残存 口 13.2cm	北東部 -6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 559	耳 (灰釉陶器)	1/2残存 口 10.7cm 高 1.3cm 底 3.6cm	東周辺 2.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 558	小型甕 (土師器)	1/2残存 口 13.5cm	南東部 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰赤色 ③酸化炭・良好	外面 体部下半縦方向荒削り。体部上半～肩部横方向荒削り。口縁部横ナデ。 内面 甕ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第48号住居跡 (第131・132図、図版41・70) 位置 II区17B-35グリッド

本住居跡は、耕作に伴うと考えられる土坑が見られた上に、49・106号住居跡及び14号井戸跡と重複していた。平面での遺構確認段階では特定できず、一部の壁を残し得なかったが、先後関係については、49号住居跡→106号住居跡→本住居跡→14号井戸跡の順であることが確認されている。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、やや歪んだ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向4.81m・南北方向3.66m程の大きさと考えられる。主軸方位はN-37°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高25～34cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東隅には長径70cm・短径60cm・深さ10cmの不整形の貯蔵穴が穿たれており、内部から多量の遺物が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、北東隅が9cm程窪んでおり、竈の手前に径95cm・深さ14cmの円形ピット(P₁)を検出したが、性格は不明である。P₂は長径1213cm・短径95cm・深さ20cmを測るが、いずれの住居に属するものか明確にし得なかった。

竈は、東辺の中央から75cm程南寄り位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口の両側には川原石が立てられたまま残っており、焚口幅49cm・奥行74cmを測り、全長94cmを確認した。燃焼部の焼け込みは強く、火床面には土師器製の破片が残されていた。掘り方は馬蹄形で、石を立てたと思われる3個の穴が認められた他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。

第106号住居跡 (第131図、図版41) 位置 II区17B-35グリッド

本住居跡は、南東隅に耕作に伴うと考えられる土坑の重複があった上に、48号住居跡によって大部分が埋されていた。また、西側には14号井戸が掘られており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向3.51m・南北方向4.13m程の大きさと考えられる。西辺の走向はN-37°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高13～32cmのローム層の壁面を検出した。

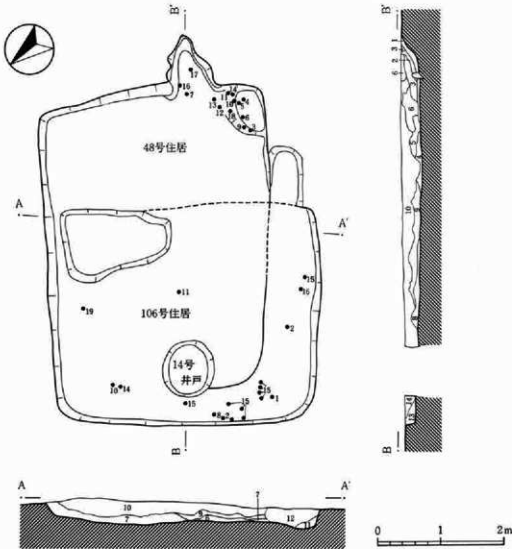
床面のレベルは48号住居よりも僅かに高く、多少の凹凸があり、北東部は攪乱を受けていた。掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。確認された範囲内にお

第4節 平安時代の住居と出土遺物

いは、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、南側に3個のピットを検出した。いずれも径40~45cm・深さ13~20cmであり、P₃は貯蔵穴の可能性が考えられるが詳細は不明である。

竈については全く資料を欠く。

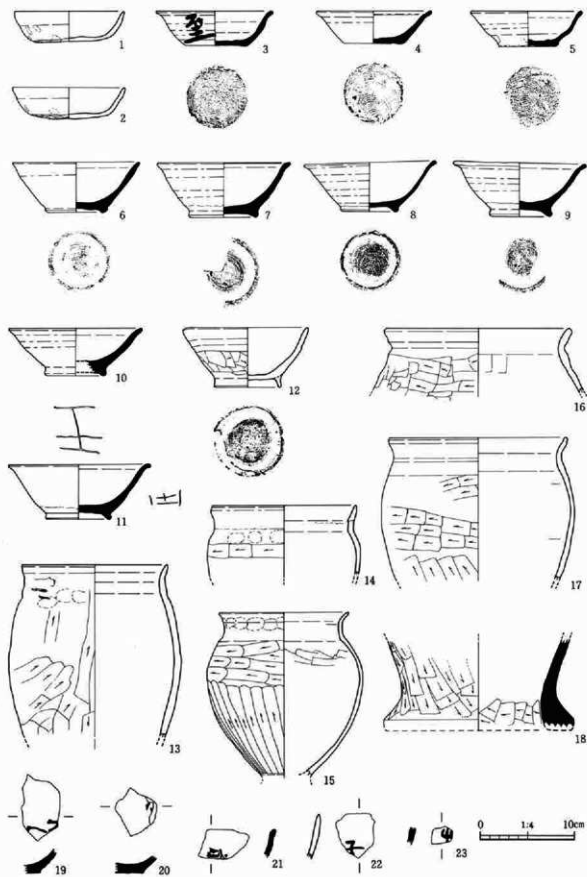
遺物は、西壁際に須恵器碗がまとめて出土した。



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 灰層。 | 8. 黒色土。 焼土・炭化物を含む。 |
| 2. 焼土と灰の混土層。 | 9. 茶褐色砂質土。炭化物を含む。 |
| 3. 褐色砂質土。 焼土を含む。 | 10. 茶褐色砂質土。軽石・ローム粒を含む。 |
| 4. 褐色土。 炭化物を含む。 | 11. 焼土・炭化物の混土層。 |
| 5. 褐色土。 焼土を含む。 | 12. 黒灰色土。 焼土・炭化物を含む。 |
| 6. 茶褐色砂質土。 | 13. 茶褐色土。 ローム粒を含む。 |
| 7. 黒褐色土。 ローム粒を含む。 | 14. 茶褐色砂質土。軽石・ローム粒を含む。 |

第131図 第48・106号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第132図 第48号住居跡出土遺物実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物

第53表 第48号住居跡出土遺物観察表

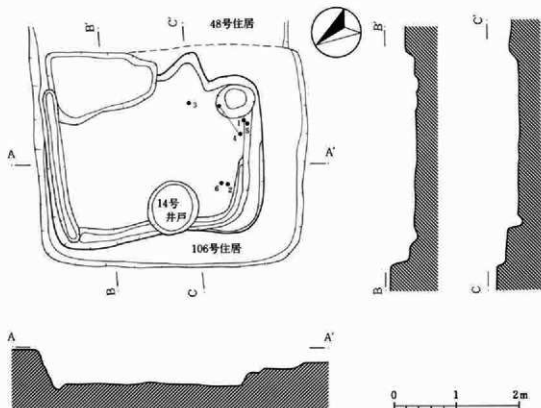
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 563	坏 (土師器)	ㄱ残存 □ 11.8cm 高 3.2cm	49住南西部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち取崩り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。□縁部横ナデ。 内面 ナデ。□縁部横ナデ。	
2 564	坏 (土師器)	ほぼ完形 □ 12.1cm 高 3.3cm	49住南西部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色。 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち取崩り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。□縁部横ナデ。 内面 ナデ。□縁部横ナデ。	
3 565	坏 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.5cm 高 3.6cm 底 6.5cm	南東部 -8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「至」
4 572	坏 (須恵器)	ㄱ残存 □ 12.3cm 高 3.4cm 底 6.2cm	南東部 1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
5 573	坏 (須恵器)	完形 □ 12.0cm 高 3.7cm 底 6.3cm	貯蔵穴中	①砂粒を含む。 ②褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞込み。 □縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
6 566	高台付横 (須恵器)	ㄱ残存 □ 13.5cm 高 5.3cm 底 6.6cm	南東部 -7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
7 567	高台付横 (須恵器)	ㄱ残存 □ 14.3cm 高 5.8cm 底 7.5cm	壺周辺 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい赤褐色。 ③還元炭・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
8 570	高台付横 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.2cm 高 5.1cm 底 6.1cm	49住南西部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
9 574	高台付横 (須恵器)	ㄱ残存 □ 14.3cm 高 5.7cm 底 6.6cm	南東部 8.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰黄褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
10 568	高台付横 (須恵器)	ㄱ残存 □ 14.3cm 高 5.0cm 底 6.7cm	49住北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部切り難し技法不明。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	
11 571	高台付横 (須恵器)	ㄱ残存 □ 15.2cm 高 5.7cm 底 6.9cm	南東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰・灰オリーブ色。 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。□縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。□縁部横ナデ。	体部内面に 刻書有り。 釈文「王・ 田」か。
12 569	高台付横 (須恵器)	ほぼ完形 □ 13.6cm 高 6.3cm 底 7.2cm	南東部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②灰色。 ③還元炭・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部粗い取崩り。□縁部横ナデ。 内面 ナデ。□縁部横ナデ。	
13 586	土 量 (須恵器)	ㄱ残存 □ 15.5cm	南東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②暗赤褐色。 ③酸化炭・硬質	外面 体部下半取崩り。頸部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。□縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。□縁部横ナデ。	
14 585	土 量 (須恵器)	ㄱ残存 □ 15.6cm	南東部 -3.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色。 ③酸化炭・硬質	外面 肩部横方向取崩り。□縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ後、丁寧なナデ。□縁部横ナデ。	
15 588	脚台付要 (土師器)	脚台部欠損 □ 14.0cm	49住南西部 -6.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色。 ③酸化炭・良好	外面 体部下半縦方向取崩り。頸部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。□縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ後、ナデ。□縁部横ナデ。	
16 587	土 量 (須恵器)	ㄱ残存 □ 20.1cm	49住南東部 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。 ③酸化炭・硬質	外面 肩部横方向取崩り。□縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ後、ナデ。□縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
17 589	壺 (土師器)	1/2残存 口 19.2cm	竜岡辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化灰・良好	外面 体部下半縦方向削り。肩部横方向削り。 頸部指頭印痕を粗い段ナデで消す。口縁部横ナデ 内面 体部凹ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
18 590	甕 (須恵器)	1/2残存 底 20.2cm	南東部 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②黄灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 縦方向削り。 内面 体部下端削り。蓋ナデ後、ナデ。	
19 575	坏 (須恵器)	小破片	北西部 32.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底面内面に 墨書有り。 釈文不明。
20 577	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文不明。
21 576	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に 墨書有り。 釈文「子前」
22 583	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい橙色 ③酸化灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「子前」か。
23 582	坏 (須恵器)	小破片	掘り方	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。	体部外面に 墨書有り。 釈文「子」

第49号住居跡 (第133・134回、図版41・70) 位置 II区17B-35グリッド

本住居跡は、48・106号住居跡及び14号井戸跡によって壊されていたために、遺存状態が極めて芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、南西部がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模



第133図 第49号住居跡実測図

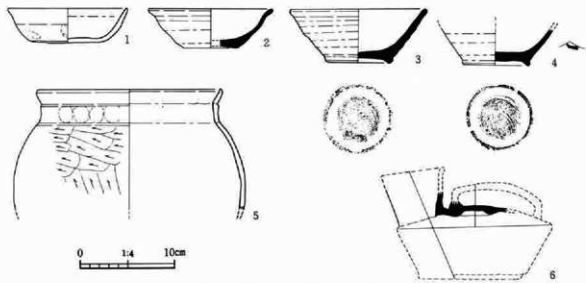
は、東西方向2.61m・南北方向3.12～3.25mを測る。主軸方位はN-28°-Eである。

壁は、部分的ながら、現存高3～10cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさきほど強くなかった。南東隅には、径60cm・深さ6cmの円形の貯蔵穴が穿たれており、内部には焼け石が入っていた。また、南東部を除いて、幅約20cm・深さ9cmの周溝が巡っていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、上部を削られてしまっていたが、東辺の中央から66cm程南寄りの位置に構築されていた。馬蹄形に壁外に張り出した火床面を確認した。焚口幅53cm・奥行55cm程の大きさと考えられるが、詳細は不明である。

遺物は竈周辺に集中して出土した。



第134図 第49号住居跡出土遺物実測図

第54表 第49号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 578	坏 (土器器)	ほぼ完形 口 12.9cm 高 3.6cm	南東部 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持り貫用り。体部指頭圧痕を指い貫ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 貫ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 1194	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.3cm 高 4.1cm 底 5.7cm	南西部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 579	高台付 罎 (須恵器)	1/2残存 口 14.7cm 高 5.6cm 底 7.2cm	竈周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 580	高台付 罎 (須恵器)	底部完形 底 7.0cm	南東部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナゲ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明
5 1202	罎 (土器器)	小破片	南東部 床面直上	①砂粒を含む。 ②によい褐色 ③酸化灰・良好	外面 体部縦方向貫用り。肩部縦方向貫用り。頸部指頭圧痕を指い貫ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 貫ナゲ後、丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	
6 584	平 瓶 (須恵器)	1/2残存	南西部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 (推定復元図)	

第二章 検出された遺構と遺物

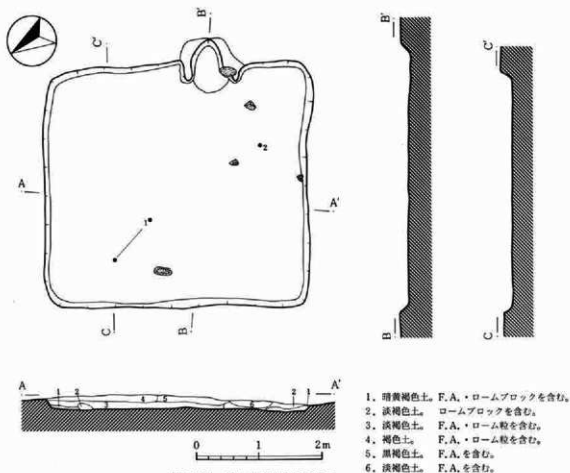
第50号住居跡 (第135・136図、図版42・70) 位置 II区13B-46グリッド

本住居跡は重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長形で、南西部がやや張り出している。規模は、東西方向3.73m・南北方向4.18mを測り、床面積は14.6m²である。主軸方位は、N-31.5°-Eである。

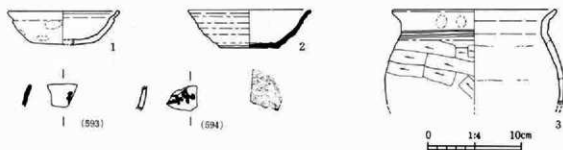
壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高13~19cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約20cm程の厚さに茶褐色土を客土して整地しており、全面に互って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺のほぼ中央に、川原石と白色粘土を使用して構築されていた。袖が30cm程張り出し、燃焼部は



第135図 第50号住居跡実測図



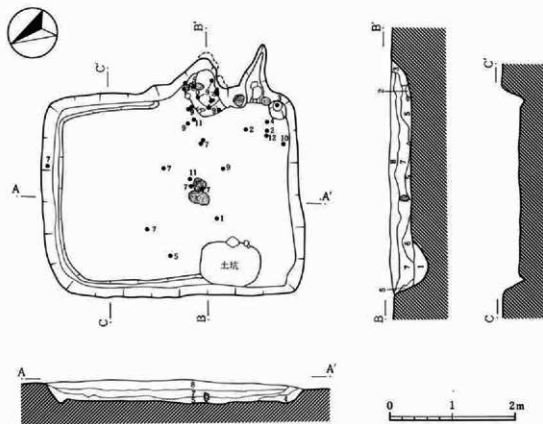
第136図 第50号住居跡出土遺物実測図

ちょうど壁際に有り、焚口幅38cm・奥行70cmを測り、全長88cmを確認した。掘り方は不整半円形で、火床面下にはロームブロックを含む黒褐色土が詰まっていた。右袖部と西壁際には、袖部の芯材に使用したと思われる、長さ30cm程の川原石が残っていた。このことから、住居の廃棄に当たって、竈を意図的に壊したと考えられる。

遺物は、北西から南東部に散らばって出土した。布目瓦の出土が目される。

第55表 第50号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 591	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm	北西部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②桃・黒褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	
2 592	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.0cm 高 6.4cm	不詳 4.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい黄棕色 ③還元炭・硬質	右回転ロコク整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 595	罎 (須恵器)	1/2残存 口 17.4cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②黄白色 ③酸化炭・硬質	外面 肩部横方向寛削り。肩部～口縁部横ナデ。 内面 体部寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	



- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。 | 5. 褐色土。 F. A. ・ロームブロックを含む。 |
| 2. 灰白色粘土。 | 6. 暗黄褐色土。 ロームブロックを多く含む。 |
| 3. 暗黄褐色土。焼土・ローム粒を含む。 | 7. 淡褐色土。 F. A. ・ローム粒を含む。 |
| 4. 淡褐色土。 焼土・ローム粒を含む。 | 8. 褐色土。 F. A. ・B軽石を含む。 |

第137図 第51号住居跡実測図

第51号住居跡(第137・138回、図版42・70・71) II区17B—32グリッド

本住居跡は、南西部を新しい土坑によって壊されていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い楕長型で、南辺がやや歪むが比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.20m・南北方向4.07mを測り、床面積は11.0m²である。主軸方位はN-24.5°-Eである。

壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高10~16cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に10~15cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を客土して整地しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には径約60cm・深さ34cmの載頭円錐状の貯蔵穴が穿たれており、内部から須恵器杯が出土した。また、東辺の竈以南及び南辺部を除いて幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、P₁(径45cm・深さ34cm)・P₂(径25cm・深さ10cm)を検出したが、共に性格は不明である。掘り方は、北東及び南西隅部が他よりも10cm程低くなっていたが、特別な遺構は検出されなかった。

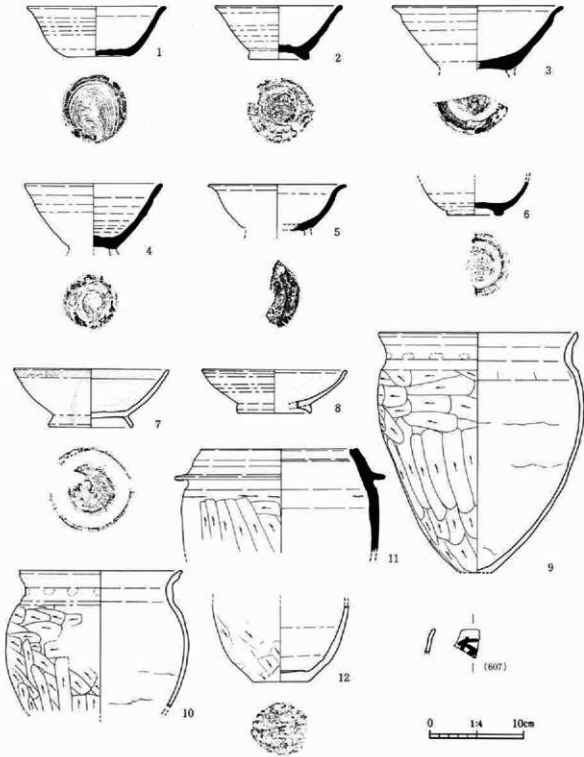
竈は東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、川原石と黄褐色粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部はちょうど壁際に有り、現状で焚口幅60cm・奥行80cmを測り、全長110cmを確認した。火床面は床面よりも若干窪んでいたが、特別な施設は認められなかった。竈掘り方精査の結果、南西隅から60cm程北寄りの位置に、別な竈の痕跡を検出した。幅約50cm・長さ90cmに亘っており、床面から11cm程高い火床面の中央には、川原石の支石が深さ約10cmの据え付け穴の中にやや傾いて残っていた。内部から出土した土師器甕の様相から推して、竈の作り替えがあったと考えられる。

遺物は、竈周辺及び南半部に散らばって出土した。

第56表 第51号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 596	杯 (須恵器)	ㄥ残存 口 14.7cm 高 5.3cm 底 6.5cm	南西部 11.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
2 597	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 13.7cm 高 5.6cm 底 6.5cm	竈周辺 -1.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台り付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 598	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 18.2cm	南東部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②淡黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台り付け。(割落) 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
4 606	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 14.8cm	竈周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(割落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 599	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 口 14.8cm	北西部 10.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台り付け。(割落) 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
6 600	高台付椀 (須恵器)	ㄥ残存 高 6.0cm	中央部 26.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
7 602	高台付椀 (灰釉陶器)	ほぼ完形 口 16.6cm 高 6.1cm 底 8.8cm	中央部 床面直上	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転糸切り後、貼付け高台。体部下半回転 寛削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第138図 第51号住居跡出土遺物実測図

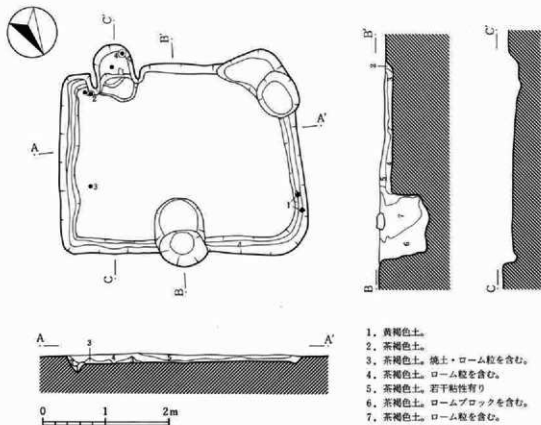
第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
8 603	高台付皿 (灰粘陶器)	残存 口 15.5cm 高 4.6cm 底 8.1cm	中央部 10.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転磨削。貼付け高台。体部下半回転 磨削。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 661	罍 (土師器)	残存 口 21.2cm	甕周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下半縦方向磨削。体部上半～肩部横方 向磨削。頸部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁 部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 660	罍 (土師器)	残存 口 17.4cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②におい赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下半縦方向磨削。体部上半～肩部横方 向磨削。頸部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁 部強い横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	口唇部に沈 積が認めら れる。
11 604	羽 蓋 (須恵器)	残存 口 16.8cm	甕周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③還元炎・硬質	外面 体部縦方向磨削。肩貼付け後、頸部～口縁 部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ	
12 605	罍 (須恵器)	残存 底 6.0cm	甕周辺 1.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部手持ち磨削。体部斜め方向磨削。 内面 回転によるナデ。	

第52号住居跡 (第139～141図、図版42・71) 位置 II区20B-27グリッド

本住居跡は、北辺の中央部及び南西隅が土坑によって壊されていた。平面形は、両辺に竪を持ち東西方向が長い横長型で、西辺がやや歪んだ隅丸台形状を呈する。規模は、東西方向3.78～4.00m・南北方向2.98mを測り、床面積は約9.6㎡である。主軸方位はN-63°-Wである。

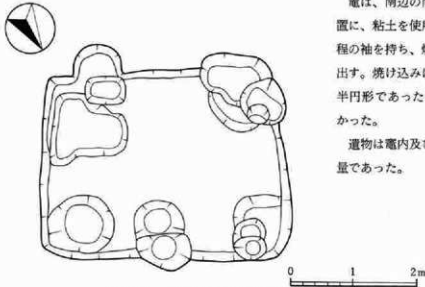
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高10～25cmのローム層の壁面を検出した。



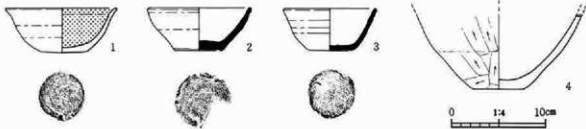
第139図 第52号住居跡実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さでロームブロックを多量に含む黒色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南辺を除いて、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、四隅に約20cm程の窪みが認められた。形状は様々であるが、いずれも性格は不明である。また、電手前には、65cm×45cm・深さ25cmの隅丸方形のピットが認められたため、掘立柱建物跡の検出に務めたが明確にし得なかった。



第140図 第52号住居跡掘り方実測図



第141図 第52号住居跡出土遺物実測図

第57表 第52号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 608	坏 (須恵器)	ほぼ円形 口 12.0cm 高 4.6cm 底 5.0cm	北東部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②淡黄色 ③酸化炭・硬質	右回転ロクロ整形。所謂ロクロ土師器。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部丁寧な横ナデ。 内面 黒色処理。口縁部丁寧な横ナデ。	内面に寛磨き痕は認められない。
2 609	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.2cm 高 4.4cm 底 5.2cm	電周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 610	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.0cm 高 4.3cm 底 4.5cm	南西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②ぶい・黄色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部弱い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部弱い横ナデ。	
4 613	土 蓋 (須恵器)	1/2残存 底 5.3cm	電周辺 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部砂面。体部縦方向窪削り。 内面 覆ナデ後、丁寧なナデ。	

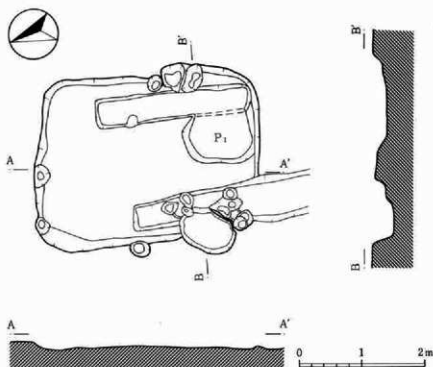
第II章 検出された遺構と遺物

第53号住居跡 (第142図、図版42) 位置 II区25B-24グリッド

本住居跡は、掘り込みが浅かった上に、耕作に伴うと考えられる土坑の重複があったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北西部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.68m・南北方向3.60mを測る。主軸方位はN-20.5°-Eである。

壁は南西隅を除いて、現存高7~11cmのローム層の壁面を確認した。

床面は、中央部がややこんもりとしているが、掘り方をそのまま整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。P₁は径約115cm・深さ15cm程の窪みであるが、検出状況及び出土遺物等から推して、所謂「床下土坑」の可能性が高い。



竈は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に焼け込みが認められたので、この部分に構築されていたと考えられるが詳細は不明である。

遺物は少なかった。

第142図 第53号住居跡実測図

第54号住居跡 (第143・144図、図版71) 位置 II区21B-23グリッド

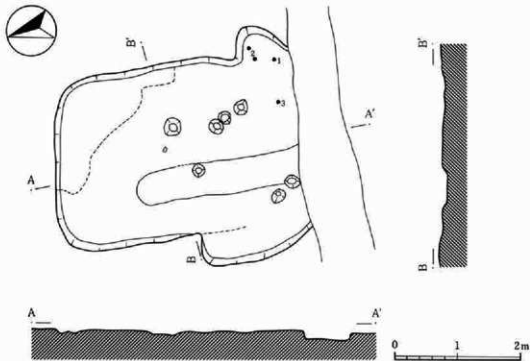
本住居跡は、掘り込みが浅かった上に、耕作に伴うと考えられる土坑の重複があったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向2.80mを測り、南北方向は北壁から3.90mの範囲まで確認した。主軸方位はおよそN-7°-Eである。

壁は、現存高4~5cmのローム層の壁面を検出した。

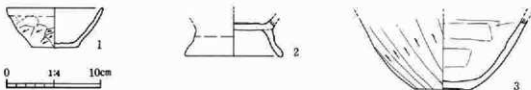
床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、北東部を除いて強く踏み締められていた。なお、確認された範囲内においては周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、南東隅に近い部分に構築されていたと考えられるが詳細は不明である。上部を殆ど削られてしまっていたが、径68cmの半円形状に焼け込みが認められ、遺物がまとまって出土した。

遺物は、竈周辺に集中して出土した。



第143図 第54号住居跡実測図



第144図 第54号住居跡出土遺物実測図

第58表 第54号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	底・整形の特徴	備考
1 614	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.3cm 高 5.2cm 底 5.0cm	甕周辺 25.0cm	①砂粒を多く含む。 ②橙・黒褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部～体部下半手持り寛削り。体部上半に指頭圧痕が残る。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 615	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 10.5cm	甕周辺 14.0cm	①砂粒を多く含む。 ②橙色 ③酸化炭・硬質	右回転口クロ整形。 外面 貼付け高台後のナデのため底部切り難し技法不明。足高高台。 内面 回転によるナデ。	
3 616	壺 (須恵器)	1/2残存 底 6.0cm	甕周辺 -9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③酸化炭・硬質	右回転口クロ整形。 外面 底部寛削り。体部縦方向削り。 内面 底部指で強くナデつける。体部回転によるナデ。	

第55号住居跡 (第145・146図、図版43・71) 位置 II区17B-26グリッド

本住居跡は、5個の小ピットが重複していたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈をもち南北方向が長い横長型で、北東部が若干歪んだ隅丸方形を呈する。(北東隅については、ピットの重複により、壁を掘り過ぎてしまった可能性が高い。)規模は、東西方向2.70m・南北方向3.85mを測り、床面積は8.8m²である。主軸方位はN-6°-Eである。

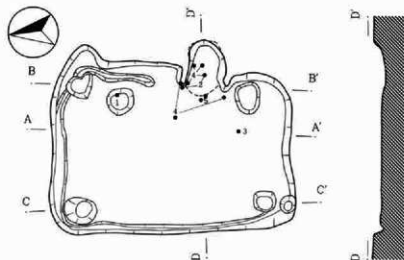
壁は、現状で20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高13~17cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約15cmの厚さで軽石交じりの灰褐色土を客土して整地して使用しており中央部が若干高くなっていたが、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。東辺の南半部と南辺を除いて、幅6~15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っており、南東隅には長径50cm・短径40cm・深さ20cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。重複したピットは、本住居よりも新しいことは確認されているが、性格は不明である。なお、柱穴は検出されなかった。また、床面下の精査でも特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が屋内に15cm程張り出し、

燃焼部は約5cm窪んでおり馬蹄形に壁外に張り出す。袖端部を明確にし得なかったが現状で、焚口幅45cm・奥行70cmを測り、全長80cmを確認した。掘り方は不整半円形で、特別な遺構は認められなかった。

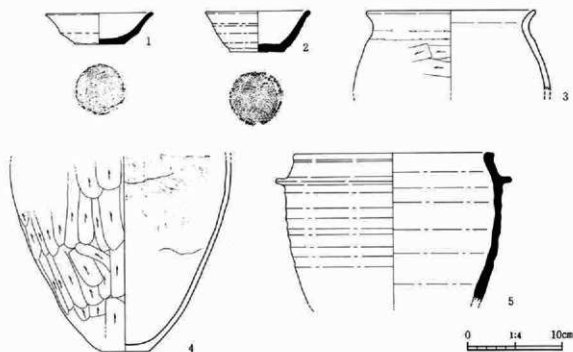
遺物は、竈内に須恵器羽釜が潰れて残っていた他は、南東部に集中して出土した。



1. 注記参照。
2. 暗褐色土。F.A.・ロームブロックを多く含む。
3. 黒褐色土。B軽石を多く含む。
4. 褐色土。 B軽石・ローム粒を含む。



第145図 第55号住居跡実測図



第146図 第55号住居跡出土遺物実測図

第59表 第55号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 617	坏 (須恵器)	1/4残存 口 11.6cm 高 3.4cm 底 5.1cm	北東部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 618	坏 (須恵器)	1/4残存 口 11.2cm 高 4.3cm 底 5.8cm	電周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 1203	甕 (須恵器)	1/4残存 口 18.0cm	南東部 11.0cm	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③還元炎・硬質	外面 肩部横方向莖削り。頸部指頭頂成を粗い莖ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 莖ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
4 619	甕 (土師器)	1/4残存 底 5.0cm	電周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②橙色 ③還元炎・良好	外面 底部砂底。体部縦方向莖削り。 内面 莖ナデ後、ナデ。体部上半強い莖ナデ後、粗いナデ。	
5 620	羽蓋 (須恵器)	1/4残存 口 21.5cm	電周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②黒褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 鉤貼付け後、弱いナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

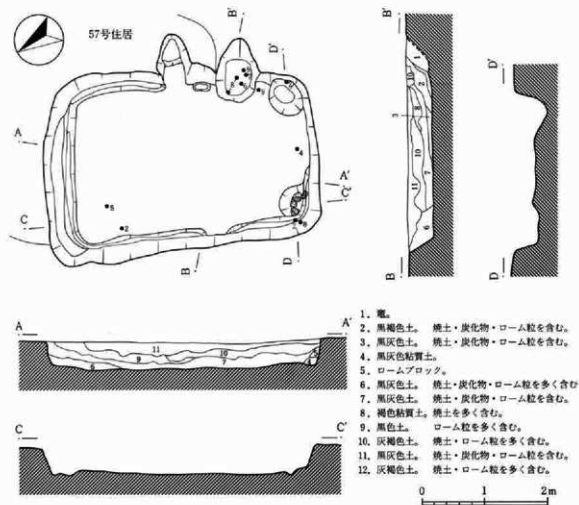
第56号住居跡 (第147・148・150図、図版43・71) 位置 II区10B-28グリッド

本住居跡は、57号住居跡を壊して作られていた。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.98m・南北方向4.40mを測り、床面積は9.3m²である。主軸方位はN-29°-Eである。

壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高38~48cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこもりとしており、掘り方に約5cmの厚さでロームブロックを含む黒色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅を除いた壁下には、幅約15cm・深さ4cm前後の周溝が巡っており、南東隅には、長径60cm・短径47cm・深さ17cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。また、南西隅は7cm程窪んでおり、4個の川原石がまとまっていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、長径100cm・短径65cm・深さ12cmの不整円形の土坑を検出した。

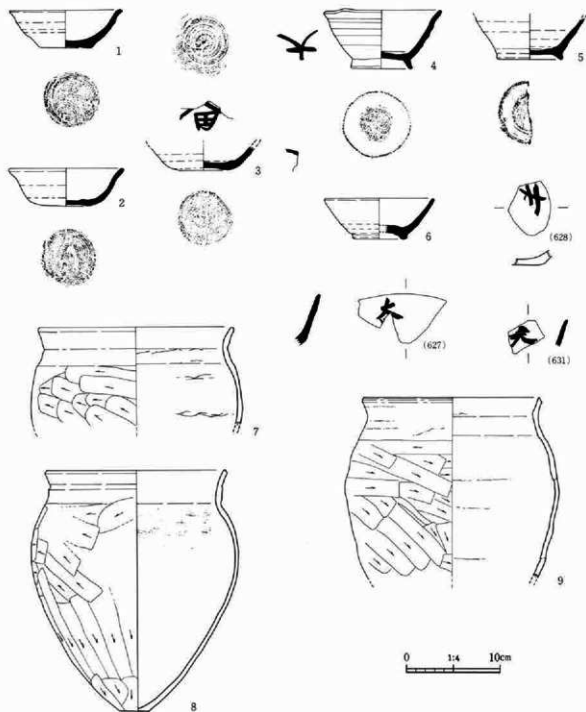
竈は、東辺に2箇所検出されたが、北側の古い竈については焼け込みが弱く、短期間の内に作り替えが行われたものと考えられる。南側のものは、東辺の中央から100cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、焚口はちょうど壁際に有り燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焼け込みはさほど強くなかったが、火床面が6cm程窪んでおり、現状で焚口幅65cm・奥行63cmを測る。内部からは土師器壺が出土した。掘り方は不整半円形で、右袖部に径25cm・深さ8cmの円形ピットが認められた他は



第147図 第56号住居跡実測図

特別な遺構は検出されなかった。

遺物は、竈部分に集中して出土した。



第148図 第56号住居跡出土遺物実測図

第60表 第56号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・量	出土状況	①粘土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 621	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 12.2cm 高 3.9cm 底 5.5cm	竈周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端絞り込み。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 623	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 12.4cm 高 3.9cm 底 5.2cm	南西部 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い寛ナデ。 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 644	坏 (須恵器)	底部完存 底 5.7cm	覆土下層	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端絞り込み。 内面 回転によるナデ。	体部内・外面に墨書有り。
4 624	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 12.8cm 高 6.3cm 底 6.8cm	南東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「命」
5 625	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 6.8cm	北西部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
6 626	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 11.8cm 高 4.3cm 底 5.8cm	竈周辺 -3.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 662	甕 (土師器)	1/2残存 □ 20.9cm	竈周辺 -6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向置削り。頸部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。	
8 663	甕 (土師器)	1/2残存 □ 19.4cm 高 25.5cm 底 3.3cm	竈周辺 -10.0cm	①砂粒を含む。 ②暗赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向置削り。肩部横方向置削り。頸部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 664	甕 (土師器)	1/2残存 □ 18.7cm	竈周辺 -6.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向置削り。肩部横方向置削り。頸部粗い寛ナデ。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第57号住居跡 (第149～151図、図版43・72) 位置 II区10B-28グリッド

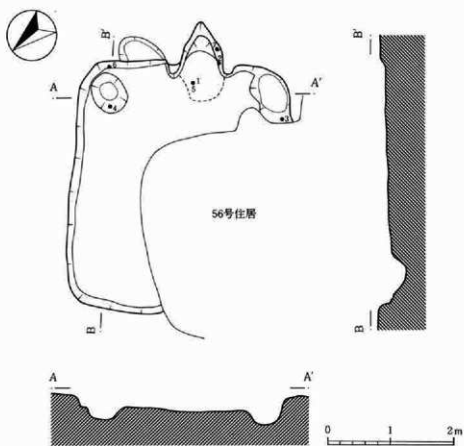
本住居跡は、北東部に耕作に伴うと考えられる土坑の重複があった上に、南西部を56号住居跡によって壊されていた。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向4.10m・南北方向3.40mを測り、主軸方位はN-42°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8～23cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には56号住居によって切られていたが、深さ24cmの貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺のほぼ中央部に、粘土を使用して構築されていた。約15cmの袖を持ち、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。焼け込みはさほど強くなかったが、火床面には炭化物が残っていた。焚口幅60cm・奥行80cmを測る。掘り方は不整半円形で、火床面下が24cm程窪んでいた。

遺物は竈周辺から少量出土した。

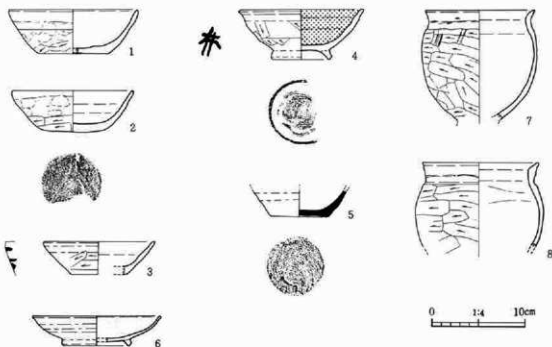


第149図 第57号住居跡実測図



第150図 第56・57号住居跡掘り方実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第151図 第57号住居跡出土遺物実測図

第61表 第57号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 635	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 14.0cm 高 4.6cm 底 7.5cm	甕周辺 7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部手持ち痕有り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
2 636	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 13.0cm 高 4.3cm 底 6.0cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部手持ち痕有り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
3 637	坏 (土師器)	1/2残存 □ 11.8cm 高 3.5cm 底 6.0cm	南東部 -18.0cm	①砂粒を多く含む。 ②棕色 ③酸化炎・硬質	外面 底部手持ち痕有り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
4 638	高台付楕 (須恵器)	1/2残存 □ 13.4cm 高 4.3cm 底 5.9cm	北東部 17.0cm	①砂粒を多く含む。 ②におい橙色 ③酸化炎・硬質	外面 底部手持ち痕有り。貼付け高台。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 黒色処理。並磨き。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「林」
5 639	坏 (須恵器)	口縁部欠損 高 2.8cm 底 6.0cm	甕周辺 7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。 内面 回転によるナデ。	
6 640	皿 (灰陶器)	1/2残存 □ 13.8cm 高 3.2cm 底 7.4cm	北東部 床面直上	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部一体部下半回転磨削有り。貼付け高台。口縁部強い横ナデ。横け掛けによる灰白色軸。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 641	脚台付壺 (土師器)	1/2残存 □ 11.8cm	甕周辺 -10.0cm	①砂粒を含む。 ②におい赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下半斜め方向磨削有り。肩部横方向磨削有り。 頸部〜口縁部横ナデ。脚部落。 内面 荒ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
8 642	脚台付壺 (土師器)	1/2残存 □ 12.4cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②におい赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部斜め方向磨削有り。肩部横方向磨削有り。頸部強い荒ナデ。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	

第58号住居跡 (第152～154図、図版44・72) 位置 II区12B-25グリッド

本住居跡は、59・96号住居跡と重複しており、96号住居跡よりも古いことは確認できたが、59号住居跡との先後関係については明確にし得なかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、やや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.00m・南北方向3.75mを測り、主軸方位はN-54°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高27～32cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cm程の厚さで客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には径40cm・深さ20cmの円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、北東隅に深さ約8cmの不整形の窪みが認められたが、特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から20cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際にあり、燃焼部が馬蹄形に壁外に張り出し、強く焼け込んでいた。焚口幅70cm・奥行85cmを測る。掘り方は不整形半円形で、火床面下には深さ6cm程の長円形の窪みが認められた。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。

第59号住居跡 (第152～154図、図版44) 位置 II区12B-25グリッド

本住居跡は、58・96号住居跡と重複しており、96号住居跡よりも古いことは確認できたが、58号住居跡との先後関係については明確にし得なかった。東壁は全く検出されていないが、平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると思われる。規模は、南北方向3.90mを測り、東西方向は西壁から2.75mまで確認した。主軸方位はN-35°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高10～15cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、中央部に深さ約8cmの窪みを検出したが他に特別な遺構は認められなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は、細片が3片出土したのみである。

第96号住居跡 (第152～154図、図版44) 位置 II区12B-25グリッド

本住居跡は、58・59号住居跡を壊して作られていたが、平面での遺構確認段階では特定できず、壁を残し得なかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.56m・南北方向3.40mを測り、主軸方位はN-26.5°-Eである。

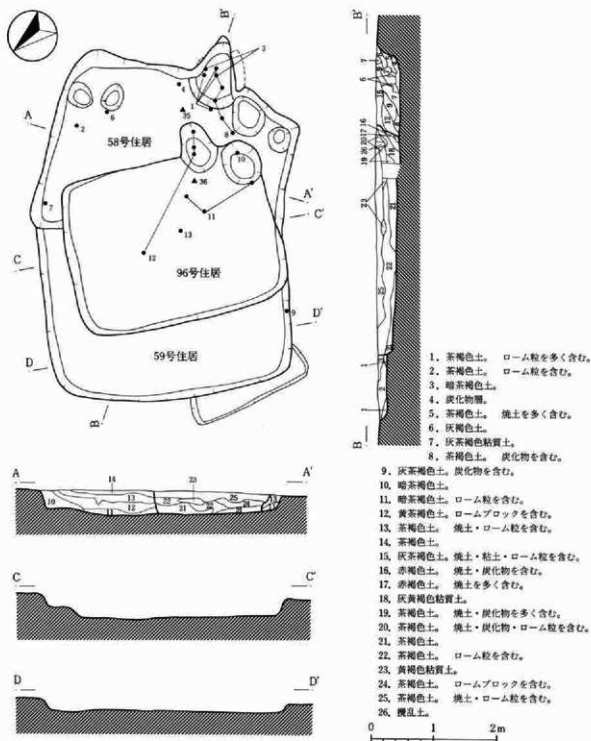
壁は、土層断面の記録で見ると、ほぼ垂直に掘り込まれている。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締めりはさほど強くなかった。南東隅には長径55cm・短径50cm・深さ18cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、所謂「床下土坑」の可能性のある径70cm・深さ10cmの円形の窪みを検出した。

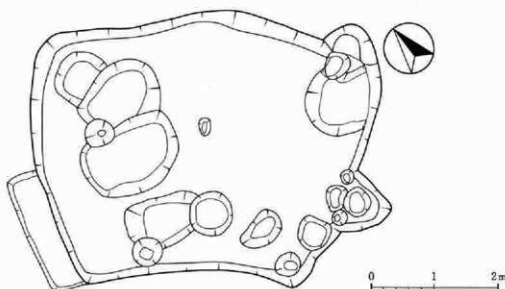
竈は、東辺の中央から65cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていたが、焼け込みが弱かったためか上部を壊してしまった。長径80cm・短径55cm・深さ7cmを測る長円形の火床面の掘り方が認められたのみである。

第II章 検出された遺構と遺物

遺物はほぼ全域に散在して出土した。



第152図 第58・59・96号住居跡実測図

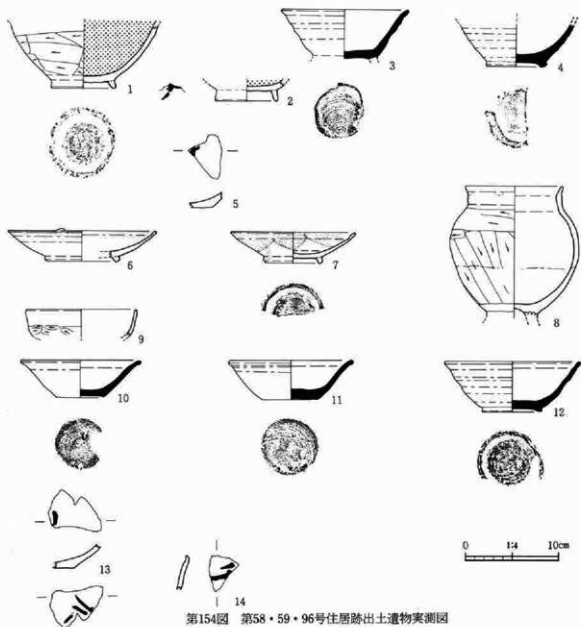


第153図 第58・59・96号住居跡掘り方実測図

第62表 第58・59・96号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 645	高台付椀 (須恵器)	瓦残存 底 7.0cm	竈周辺 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 貼付け高台後のナゲのため底部調整不明。体部手持り痕有り。 内面 黒色処理。寛磨き。	
2 646	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 6.7cm	北東部 4.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 貼付け高台後のナゲのため底部調整不明。 内面 黒色処理。寛磨き。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
3 649	高台付椀 (須恵器)	瓦残存 口 13.7cm	竈周辺 8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。高台剥落。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 655	高台付椀 (須恵器)	瓦残存 底 6.6cm	竈周辺 20.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナゲ。	
5 647	杯 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部一体部手持り痕有り。 内面 丁寧なナゲ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明
6 657	高台付皿 (反輪陶器)	瓦残存 口 15.9cm 高 3.2cm 底 7.9cm	北東部 8.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台。体部下回転痕有り。口縁部強い横ナゲ。輪花状を呈する。潰け掛け。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。	リング状の重ね焼き痕有り。
7 658	高台付皿 (反輪陶器)	瓦残存 口 13.4cm 高 3.3cm 底 6.3cm	北西部 9.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台。体部下回転痕有り。口縁部強い横ナゲ。潰け掛け。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。リング状の重ね焼き痕有り。	
8 665	脚台付壺 (土師器)	瓦残存 口 10.5cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 体部縦方向削り。肩部横方向削り。肩部指頸圧痕を強い横ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 横ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
9 651	杯 (土師器)	瓦残存 口 12.0cm 高 2.9cm	北西部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 体部指頸圧痕を強い横ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	59号住居
10 652	杯 (須恵器)	瓦残存 口 13.0cm 高 4.0cm 底 5.0cm	貯蔵穴中 17.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部強い横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。	

第II章 検出された遺構と遺物



第154図 第58・59・96号住居跡出土遺物実測図

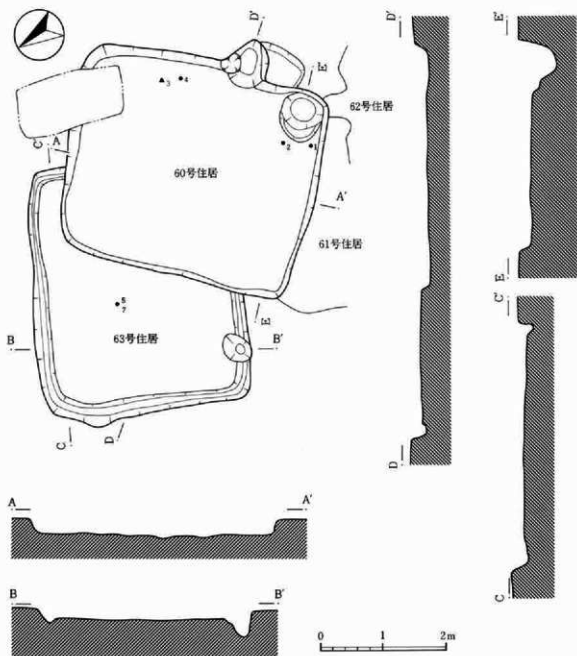
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
11 656	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 4.1cm 底 6.2cm	甕周辺	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
12 659	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.6cm 高 5.3cm 底 6.5cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
13 653	坏 (須恵器)	小破片	中央部	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部手持ち荒削り。 内面 丁寧なナデ。	底部内面・ 体部外面に 墨書有り。 釈文不明
14 654	坏 (土師器)	小破片	貯蔵穴中	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 縦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明

第60号住居跡 (第155・156・158図、図版45・72) 位置 II区13B-30グリッド

本住居跡は、61・62・63号住居跡と重複していた。また、北東部を耕作に伴うと考えられる土坑によって壊されていたが、比較的良好的な遺存状態であった。先後関係については、本住居跡が最も新しいことが確認されている。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.50m・南北方向4.10mを測り、床面積は11.8㎡である。主軸方位はN-47°-Eである。

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高12~24cmの壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、周縁部を除いて掘り方をほぼそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、長径70cm・短径60cm・深さ38cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周



第155図 第60・63号住居跡実測図

第二章 検出された遺構と遺物

溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、周縁部が約10cm窪んでいたが特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。上部を削られてしまっていたため、袖部を明確にし得なかったが、馬蹄形の燃焼部が壁外に張り出し、焚口幅50cm・奥行70cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、火床面下には深さ10cm程の窪みが認められたが、他には特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。鎌・鏃の羽片等も出土している。

第63号住居跡（第155・156・158図、図版45・72） 位置 II区15B-27グリッド

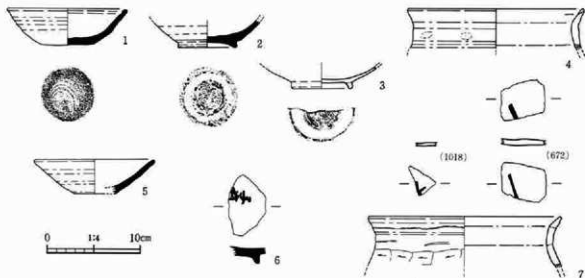
本住居跡は、南東部を60号住居跡によって壊されていた。竈は検出されなかったが、他の遺構の状況から推して、平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、均整のとれた隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向4.00m・南北方向3.50mを測り、主軸方位はN-26.5°-Eである。

壁は25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高13~24cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約20cmの厚さでロームブロックを含む淡黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。四周の壁下には、幅約20cm・深さ6cm前後の周溝が巡っていた。なお、確認された範囲内においては、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、径120cm・深さ15cmの床下土坑と考えられるP₁と、長径110cm・短径70cm・深さ11cmの竈掘り方の一部と考えられるP₂が確認された。

竈については、前記のP₂のみが確認されたが、詳細は不明である。

遺物は、土師器・須恵器の細片が少量出土した。



第156図 第60・63号住居跡出土遺物実測図

第63表 第60・63号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 666	環 (須恵器)	完形 口 12.9cm 高 3.9cm 底 5.9cm	南西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口唇部強い横ナデ。	
2 667	高台付碗 (須恵器)	口縁部欠損 底 6.4cm	南西部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②におい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転による雑なナデ。	
3 669	高台付皿 (灰釉陶器)	瓦残存 底 6.6cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。潰け掛けによる灰緑色釉。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4 668	壺 (土器)	小破片 口 19.0cm	北東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③還元炎・良好	外面 頸部指頭正負を粗い籠ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
5 670	環 (須恵器)	瓦残存 口 13.0cm 高 3.7cm 底 4.2cm	中央部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 713	高台付碗 (須恵器)	小破片	北西部 9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「子前」
7 671	壺 (土器)	小破片 口 20.8cm	中央部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②におい褐色 ③還元炎・良好	外面 頸部横方向置削り。頸部指頭正負を粗い籠ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 籠ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第61号住居跡 (第157～159図、図版72) 位置 II区13B-30グリッド

本住居跡は、南及び東辺が耕作に伴うと考えられる土坑によって壊されていた上に、60・62・63号住居跡と重複していた。掘り込みが浅い上に、重複が著しかったため遺存状態が芳しくなかった。先後関係については、本住居跡→62号住居跡→60号住居跡の順であることは確認されたが、63号住居跡との関係は不明である。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。規模は、東西方向4.00m・南北方向4.50m程度の大きさと考えられる。西辺の走向はN-26°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高4～9cmの壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約30cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。(62号住居跡の掘り方とほぼ同じ深さであったので、明確にならなかった部分が多少ある。)

竈については全く資料を欠く。

遺物は、南側に灰釉陶器皿が出土したが、円形ピット状の覆土中からの出土であるため、別遺構に帰属する可能性が考えられる。(図版45参照)

第62号住居跡 (第157～159図、図版46・72) 位置 II区13B-30グリッド

本住居跡は、60・61号住居跡及び耕作に伴うと考えられる土坑と重複していた。竈の先端部及び壁の上部を削られただけで、比較的良好的な遺存状態であった。先後関係については、61号住居跡→本住居跡→60号住居跡の順であることが確認されている。平面形は、北辺に竈を持ち東西方向が長い横長型で、南西部及び南東隅がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.55m・南北方向2.70mを測り、床面積は7.7m²であ

第II章 検出された遺構と遺物

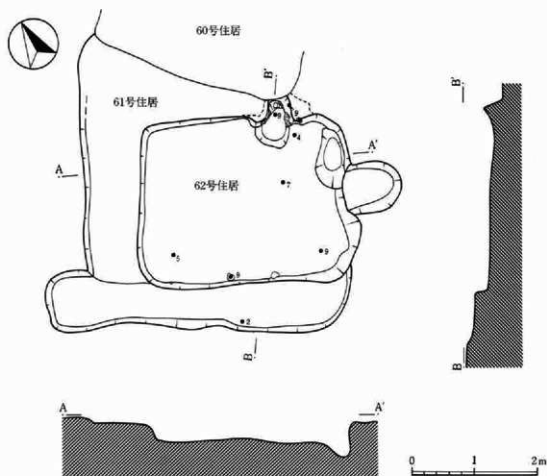
る。主軸方位はN-64°-Wである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高19~29cmの壁面を検出した。

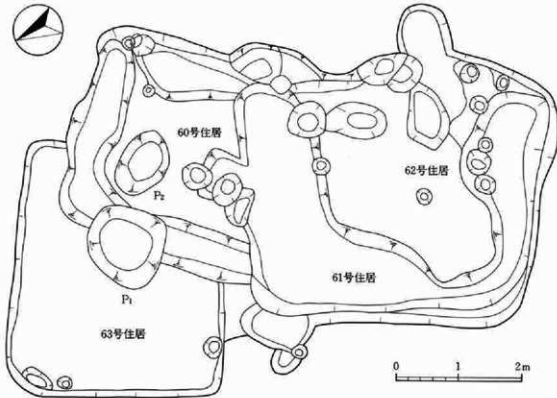
床面は中央部がややこんもりとしており、全面に覆って強く踏み締められていた。北東隅には、長径98cm・短径45cm・深さ27cmの不整長円形の穴が穿たれていた。遺物は出土していないが、貯蔵穴の可能性が高い。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。掘り方については、61号住居跡の内部に作られていたため、詳細は不明である。

竈は、北辺の中央から60cm程東寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。壁際に川原石を立てて袖を作り、馬蹄形の燃焼部が壁外に張り出す。先端部を切られてしまっているが、焚口幅25cm・奥行50cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、火床面の下には径70cm・深さ23cmの不整形の窪みがあり、焼土・灰を含む褐色土が詰まっていた。

遺物は、竈周辺及び南側にまとまって出土した。



第157図 第61・62号住居跡実測図

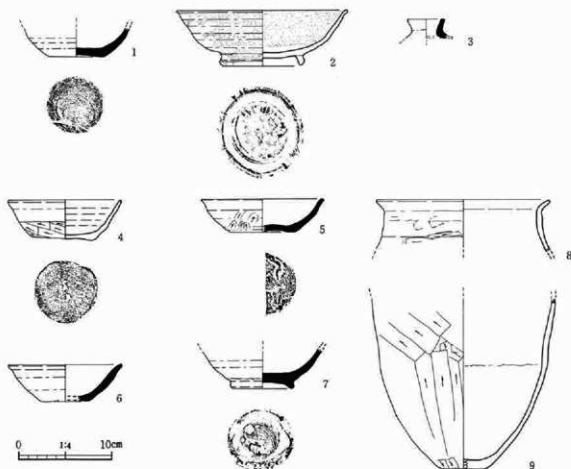


第158図 第60・61・62・63号住居跡掘り方丈測図

第64表 第61・62号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 673	坏 (須恵器)	底部完存 底 6.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
2 674	高台付轆 (灰釉陶器)	1/2残存 口 18.3cm 高 5.9cm 底 9.2cm	南東部 3.0cm	①均質。 ②灰白色、 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。刷毛塗りによる淡灰緑色釉。 外面 底部回転糸切り後、周縁部回転削り。貼付け高台。体部下半回転削り。口縁部横ナデ。 内面 底部回転削り。口縁部横ナデ。	
3 675	器形不明 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。 風類の口縁部と考えられる。	
4 676	坏 (須恵器)	完形 口 12.3cm 高 4.3cm 底 6.6cm	覆土中 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化灰・硬質	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を概い見削りで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
5 677	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 3.5cm	北西部 11.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③還元灰・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 679	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.2cm 高 3.9cm 底 5.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 678	高台付轆 (須恵器)	1/2残存 底 6.8cm	中央部 22.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物



第159図 第61・62号住居跡出土遺物実測図

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
8 681	壺 (土師器)	小破片 口 18.6cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化灰・良好	外面 肩部横方向彫削り。頸部指頭正直を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
9 680	壺 (須恵器)	1/2残存 底 4.7cm	甕周辺 11.6cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部彫削り。体部下半縦方向彫削り。体部上半斜め方向彫削り。 内面 篋ナデ後、ナデ。	

第64号住居跡(第160・161図、図版46・72) 位置 II区10B-36グリッド

本住居跡は、東側の上面に28号溝が重複していたが、床面まで攪乱を受けていなかったために比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が若干長い、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.60m・南北方向3.80mを測り、主軸方位はN-32°-Eである。床面積は、12.5㎡である。なお、28号溝によって削られているために不明確ではあるが、東辺の北半部に70cm×170cmの張り出しが認められた。深さは約10cmで、床面から5cm程上が底面となっており、土師器壺の底部破片2点が出土した。一種の棚状施設と考えられるが、積極的な証拠を欠く。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高21~30cmのローム層の壁面を検出した。

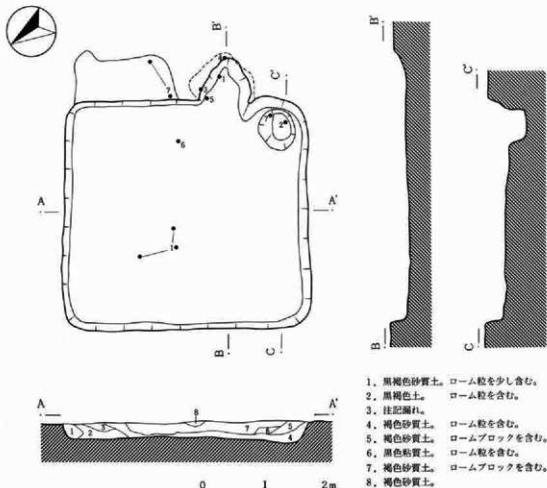
床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には長径57cm・短径48cm・深さ37cmの円筒状の貯蔵穴が穿たれており、内部から焼石と

第4節 平安時代の住居と出土遺物

須恵器碗が出土した。床面下精査の結果、周辺部は若干窪んでおり、北西隅に90cm×100cm・深き26cmの隅丸方形の土坑を確認したが、性格は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖が若干張り出すが、焚口はちょうど壁際に有り、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出す。左袖部が不明確ながら、現状で焚口幅62cm・奥行65cmを測り、全長80cmを確認した。掘り方は不整半円形で、火床面下には長径60cm・短径45cm・深き15cmの不整円形の穴が穿たれていた。

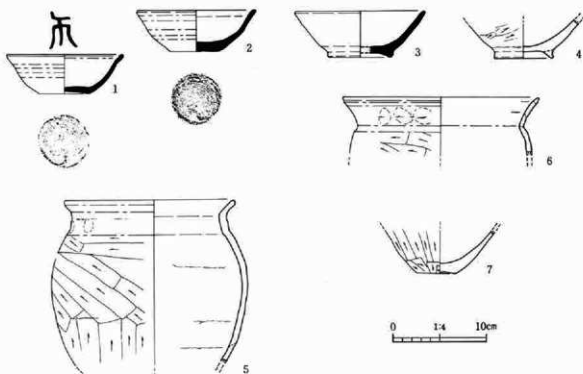
遺物はほぼ全域に散在して出土した。



第160図 第64号住居跡実測図



第II章 検出された遺構と遺物



第161図 第64号住居跡出土遺物実測図

第65表 第64号住居跡出土遺物観察表

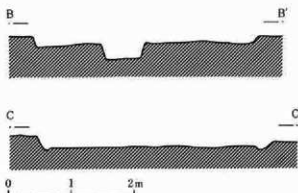
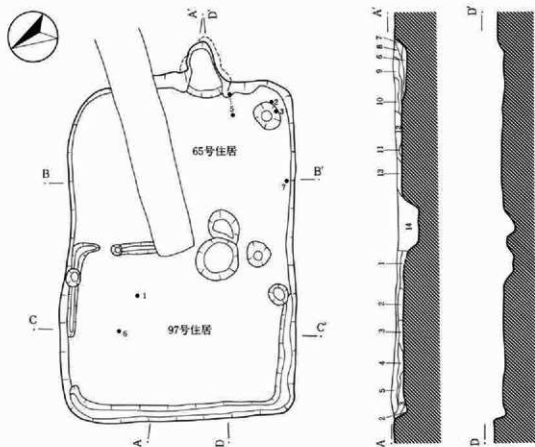
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 684	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.6cm 高 4.1cm 底 5.5cm	中央部 -3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文不明
2 683	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.7cm 高 4.3cm 底 5.4cm	貯蔵穴中 28.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 685	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.9cm 高 4.9cm 底 7.0cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②明褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台が付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 686	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 6.4cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色・暗赤褐色 ③還元炎・硬質	外面 付け高台後のナデのための底部調整不明。体部手持り瓦削り。 内面 ナデ。	
5 687	甕 (土師器)	1/2残存 口 18.3cm	甕周辺 4.5cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部下半縦方向瓦削り。体部上半斜め方向瓦削り。肩部横方向瓦削り。頸部指頸圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 強い瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 688	甕 (土師器)	小破片 口 21.0cm	甕周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②ふい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向瓦削り。頸部指頸圧痕を強い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
7 689	甕 (須恵器)	1/2残存 底 4.2cm	標部分	①砂粒を含む。 ②暗灰色 ③還元炎・硬質	外面 底部瓦削り。体部縦方向瓦削り。 内面 強い指ナデ。	

第65号住居跡 (第162・163図、図版46・72) 位置 II区9B-34グリッド

本住居跡は、97号住居跡・28号溝及び耕作に伴うと考えられる長方形土坑と重複関係にある。先後関係については、97号住居跡→本住居跡→28号溝の順である。平面での遺構確認作業段階では先後関係を把握できなかったために、西壁を残し得なかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向5.25m・南北方向3.60mを測り、主軸方位はN-29°-Eである。

壁は現状で15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高10~23cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を客土



1. 淡黄褐色土。ロームブロックを含む。
2. 暗黄褐色土。焼土・炭化物・ローム粒を含む。
3. 淡黄褐色土。F.A.・ロームブロックを含む。
4. 褐色土。焼土・炭化物・ローム粒を含む。
5. 淡褐色土。B軽石・ローム粒を含む。
6. 淡黄褐色土。炭化物・ロームブロックを含む。
7. 灰層。
8. 暗灰色土。焼土・炭化物を多く含む。
9. 赤褐色土。焼土ブロックを多く含む。
10. 灰白色粘土。
11. 黒色土。炭化物を多く含む。
12. 暗灰色褐色土。B軽石・灰白色粘土を含む。
13. 褐色土。B軽石・ローム粒を含む。
14. 淡灰色褐色土。B軽石・ローム粒を多く含む。

第162図 第65・97号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

して整地して使用していた。全体的に踏み締まりは弱い。南東隅には、径45cm・深さ22cmの截頭円錐状の貯蔵穴が穿たれており、須恵器杯・土師器杯が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下の精査によっても特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から25cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際には有り、燃焼部は「U」字状に壁外に張り出し、火床面が若干窪んでいた。焚口幅50cm・奥行80cmを測る。掘り方は、幅95cm・奥行85cmの馬蹄形で、火床面下には長径70cm・短径50cm・深さ17cmの不整形円の穴が穿たれており、炭化物・ロームブロックを含む淡黄褐色土が詰まっていた。

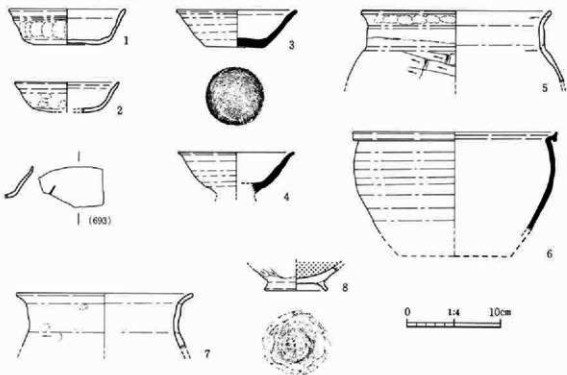
遺物は、竈及び貯蔵穴周辺に集中して出土した。

第97号住居跡 (第162・163図、図版46) 位置 II区9B-34グリッド

本住居跡は、東側を65号住居跡によって掘り壊されていたが、周溝の存在によってほぼ全容が推し量れる。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.84m・南北方向3.80mを測り、主軸方位はN-30°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高15~25cmのローム層の壁面を検出した。(北東部の一部は、風倒木痕が有ったために、褐色土の壁面であった。)

床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。各壁下には断続的ながら、幅15~20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っており、南東隅には径40cm・深さ25cmの截頭円錐状の貯蔵穴が穿たれていた。覆土は焼土・炭化物を含む暗茶褐色土が詰まっていたが、遺物は出土しなかった。P₁・P₂は本住居よりも後出するものである可能性が高い。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、竈掘り方を検出したが、他には特別な遺構は認められなかった。



第163図 第65・97号住居跡出土遺物実測図

甕は、前述の通り、掘り方部分しか残っていなかったが、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に構築されていたと考えられる。燃焼部は壁外に張り出していたものと思われる。火床面下の掘り方は、径70cm・深さ21cmの円形で、東側に径50cm・深さ18cmの不整円形の張り出しが付く。覆土は焼土・炭化物・粘土粒を多量に含む暗茶褐色土であり、内部からは土師器製の破片が出土した。(遺憾ながら、所在不明のため図示し得なかった。)

遺物は少なく、細片が殆どであるが、土師器杯に墨書が認められた。

第66表 第65・97号住居跡出土遺物観察表

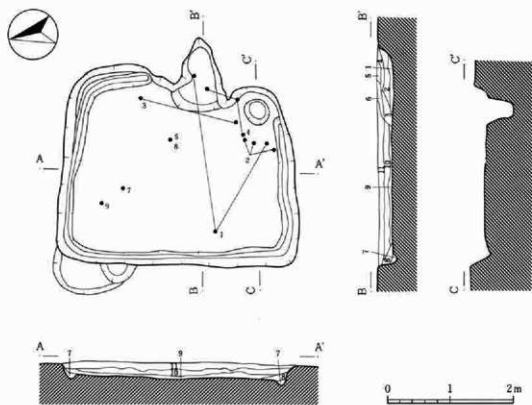
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 690	杯 (土師器)	片残存 口 12.5cm 高 3.7cm 底 7.2cm	97住北東部 4.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛なり。底部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体へ口縁部横ナデ。	
2 691	杯 (土師器)	片残存 口 11.1cm 高 3.2cm 底 7.4cm	南東部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り寛なり。底部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。体へ口縁部横ナデ。	
3 694	杯 (須惠器)	完形 口 12.9cm 高 3.9cm 底 6.5cm	南東部 -6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
4 695	高台付碗 (須惠器)	片残存 口 12.4cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部下縁強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 696	壺 (土師器)	口縁小破片 口 20.3cm	甕周辺 2.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向寛なり。肩部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。口唇部横ナデ。 内面 寛ナデ後縦丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
6 698	鉢 (須惠器)	片残存 口 21.8cm	97住北東部 2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②黄灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 頸部横ナデ。口縁部鋭い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部鋭い横ナデ。	
7 697	壺 (土師器)	小破片 口 19.0cm	97住南東部 11.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向寛なり。肩部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
8 699	高台付碗 (須惠器)	底部残存 底 6.7cm	97住覆土中	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・硬質	外面 底部砂底。高台貼付け後、ナデ。底部寛なり。 内面 黒色処理。寛磨き。	

第66号住居跡 (第164・165図、図版46・72) 位置 II区6B-34グリッド

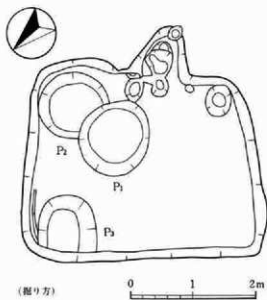
本住居跡は、北西隅に耕作に伴うと考えられる土坑が重複していたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に甕を持ち南北方向が長い横長型で、東辺の北半部がやや張り出した不整丸台形を呈する。規模は、東西方向2.89～3.15m・南北方向3.30～3.85mを測り、床面積は19.3㎡である。主軸方位はN-13.5°-Eである。

壁は、現状で15°前後の傾斜を持って掘り込まれており、現存高26～32cmのローム層の壁面を検出した。

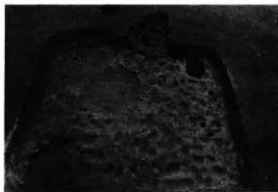
床面はほぼ平坦で、掘り方に約15cmの厚さで黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。東辺の南半部を除いた各壁下には、幅10～20cm・深さ6cm前後の周溝が巡っており、南東隅には径40cm・深さ41cmの截頭円錐状の貯蔵穴が穿たれていた。なお、柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、径110cm・深さ10cm前後の窪みが3箇所認められた。P₁の底部には灰白色粘土が貼られていた。P₂・P₃は、焼土・炭化物・白色粘土粒を含む灰褐色土によって埋められていた。性格は不明ながらも、3箇所とも本住居に伴う床下土坑であると考えられる。



- | | |
|--|---|
| <p>1. 灰層。
2. 焼土。
3. 暗赤褐色土。焼土・ローム粒を含む。
4. 灰白色粘土。
5. 暗灰色粘土。
6. 褐色土。 炭土・炭化物・灰白色粘土を含む。</p> | <p>7. 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
8. 淡褐色土。 F.A.・ローム粒を含む。
9. 褐色土。 F.A.・ローム粒を含む。
10. 黒褐色土。F.A.・焼土粒を含む。
11. 淡褐色土。B軽石を含む。</p> |
|--|---|



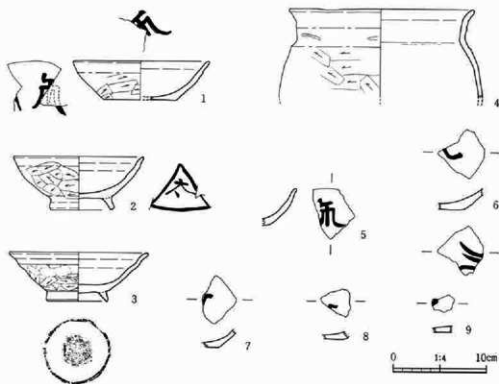
(転り方)



第164図 第66号住居跡実測図

甕は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出す。火床面は3cm程窪んでおり、左袖部を明確にし得なかったが、焚口幅50cm・奥行75cm程の大きさになると考えられる。全長90cmを確認した。掘り方の調査でも特別な遺構は認められなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。「△」の墨書土器が検出されている。



第165図 第66号住居跡出土遺物実測図

第67表 第66号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 701	坏 (須恵器)	5/残存 口 14.6cm 高 4.0cm 底 8.6cm	竈周辺 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部平持ち寛削り。体部粗い寛削り。口縁部横ナゲ。 内面 丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	体部外面・底部内面に墨書有り。釈文不明
2 707	高台付碗 (須恵器)	5/残存 口 13.9cm 高 5.6cm 底 6.9cm	南東部 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部平持ち寛削り。貼付け高台。体部粗い寛削り。口縁部横ナゲ。 内面 丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	体部内面に墨書有り。釈文「△」
3 708	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 15.0cm 高 5.2cm 底 6.7cm	竈周辺 3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部指頭圧痕を粗い寛削りで消す。口縁部強い横ナゲ。 内面 丁寧なナゲ。口縁部強い横ナゲ。	
4 709	甕 (土器部)	5/残存 口 19.8cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向寛削り。肩部指頭圧痕を粗い横ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
5 702	坏 (須恵器)	小破片	中央部 18.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部粗い寛削り。口縁部横ナゲ。 内面 丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	体部外面に墨書有り。釈文不明

第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6 703	坏 (須恵器)	小破片	掘り方覆土	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持ち段削り。体部粗い段削り。 内面 丁寧なナゲ。	体部外面・ 底部内部に 墨書有り。 釈文不明
7 704	坏 (須恵器)	小破片	北西部 18.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持ち段削り。体部粗い段削り。 内面 丁寧なナゲ。	底部内部に 墨書有り。 釈文不明
8 705	坏 (須恵器)	底部小破片	中央部 3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持ち段削り。体部粗い段削り。 内面 丁寧なナゲ。	底部内部に 墨書有り。 釈文不明
9 706	坏 (須恵器)	底部小破片	北西部 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部手持ち段削り。 内面 丁寧なナゲ。	底部内部に 墨書有り。 釈文不明

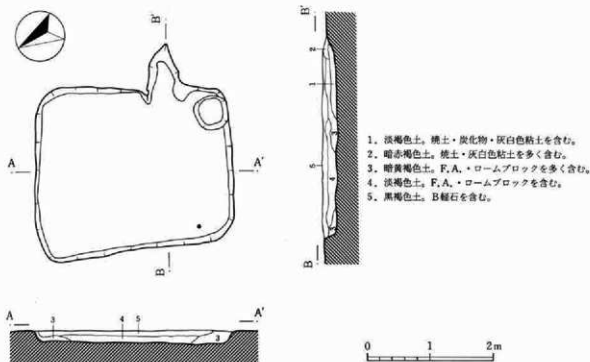
第67号住居跡(第166図、図版47) 位置 II区7B-31グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出されており比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、北西部がやや張り出した隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.40~2.75m・南北方向3.15mを測り、床面積は7.0㎡である。主軸方位はN-25.5°-Eである。

壁は、現状で20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高15~20cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、径54cm・深さ15cmの載頭円錐状の貯蔵穴が穿たれており、焼土・炭化物・灰白色粘土粒を含む淡褐色土が詰まっていた。内部からは瓦の破片が出土した。なお、周溝及び貯蔵穴は検出されなかった。

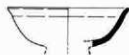
竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、瓦と灰白色粘土を使用して構築されていた。焚口はちよう



第166図 第67号住居跡実測図

ど壁際に有り、燃焼部が「U」字状に壁外に張り出す。焚口幅48cm・奥行68cmを測り、全長85cmを確認した。火床面は若干窪んでいる程度で、燃焼部の左壁面には瓦が貼り付けられていた。火床面下の掘り方は、50×65cmの隅丸方形で、中央部には支脚を立てたと思われる径15cm・深さ6cmの不整円形の穴が掘られていた。

遺物は細片がほぼ全域に散在して出土した。



第68表 第67号住居跡出土遺物観察表

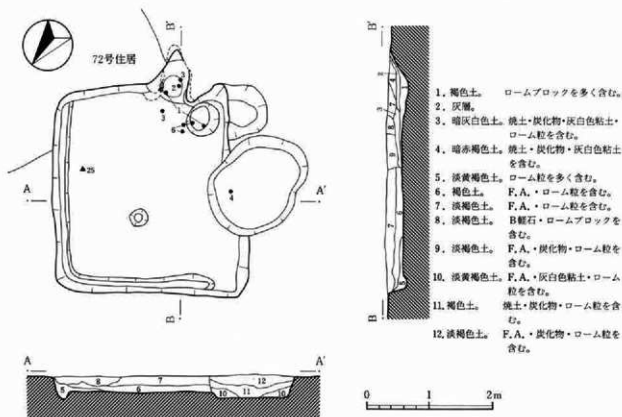
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
I 1196	高台付碗 (須恵器)	片残存 口 13.0cm	南西部 18.0cm	①砂粒を少し含む。 ②におい・棕色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	内外面に保付着。

第68号住居跡 (第167・168図、図版47・73) 位置 II区9B-27グリッド

本住居跡は、72号住居跡を壊して作られていたが、南辺には耕作に伴うと考えられる土坑が重複しており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向がやや長い隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.30m・南北方向3.10mを測り、床面積は約8.1㎡である。主軸方位はおよそN-50.5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高24~37cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこもりとしており、掘り方に約10cmの厚さで白色粘土・ロームブロックを含む褐色土を客土して整地して使用しており、縁辺部を除いて強く踏み締められていた。北及び西壁下には、幅約15cm・深さ6cm前後の周溝が「L」状に巡っており、南東隅には径55cm・深さ24cmの貯蔵穴が穿たれてい



第167図 第68号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

た。なお、柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、周辺部が5cm程窪んでおり、南西隅には長径85cm・短径62cmの隅丸方形の穴が認められた。掘立柱建物跡の存在を考慮して周辺部の調査を行ったが、明確な遺構を検出することはできなかった。

竈は東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焼け込みはさほど強くなく、明確な袖部を検出できなかったが、燃焼部の中心はちょうど壁際に有り、焚口幅40cm・奥行60cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、火床面下には径50cm・深さ13cmの掘り込みが認められたが、他には特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈周辺に集中して出土した。鉄製紡錘車の出土が目される。



第168図 第68号住居跡出土遺物実測図

第69表 第68号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 711	坏 (須恵器)	×残存 口 12.0cm 高 4.0cm 底 6.2cm	竈周辺 -1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部平持ち寛削り。体部削削り。口縁部強い横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部強い横ナデ。	
2 713	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 6.0cm	竈周辺 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部削削り。 内面 丁寧なナデ。	
3 712	高台付椀 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.0cm 高 5.0cm 底 7.8cm	竈周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元灰・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 717	埴 瓶 (灰輪陶器)	小破片 口 11.8cm	兩個土坑中 5.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部削削り。口唇部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
5 715	段 皿 (灰輪陶器)	×残存 底 7.5cm	覆土中	①ほぼ均質。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転クロコ整形。剛毛埴りによる淡灰緑色釉。 外面 底部回転削削り。貼付け高台。体部下半回転削削り。 内面 回転によるナデ。	
6 714	壺 (土器器)	×残存 口 20.0cm	竈周辺 2.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化灰・良好	外面 肩部横方向削削り。頸部指頭正直を組い横ナデで閉す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	

第69号住居跡 (第169・170・172図、図版47・73) 位置 II区8B-21グリッド

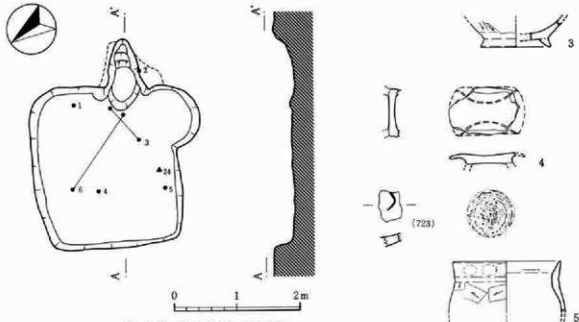
本住居跡は、70号住居跡を壊して作られていた。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が若干長い縦長型で、北辺がやや膨らんだ隅丸方形を呈する。なお、南東隅の一部は、70号住居跡の貼り床を剝がしてしまったために、明確な壁を捉えることができなかった。規模は、東西方向2.30~2.60m・南北方向2.50mを測り、主軸方位はN-28°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高30~36cmのローム層の壁面を検出した。

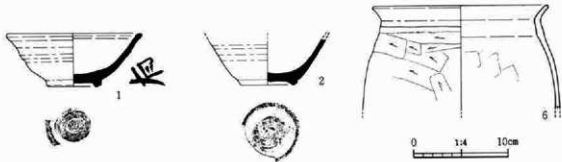
床面はほぼ平坦で、掘り方に客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。(掘り方の埋土については、70号住居の掘り方と同じレベルまで掘られていたために、関係を明確にすることができなかった。) なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下の精査でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、東辺の中央から20cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部が「U」字状に壁外に張り出し、焚口幅50cm・奥行55cmを測り、煙道部を含めて全長98cmを確認した。火床面は6cm程窪んでおり、土師器製の細片が多く出土した。掘り方は、下端部で35×70cmの比較的整った隅丸方形であったが、特別な遺構は認められなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。鉄製紡錘車・布目瓦の出土が注目される。



第169図 第69号住居跡実測図



第170図 第69号住居跡出土遺物実測図

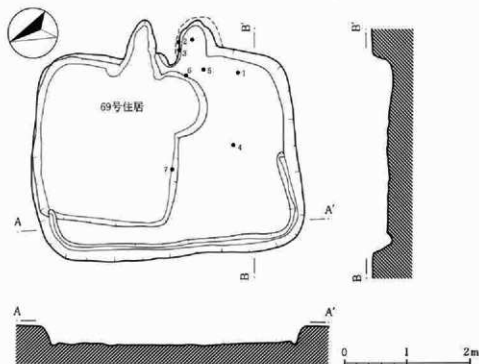
第70表 第69号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 1192	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 14.5cm 高 5.7cm 底 5.8cm	北東部 -2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。粗い荒ナデ。 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部内面に 墨書有り。 釈文「有」
2 720	高台付椀 (須恵器)	口縁部欠損 底 6.4cm	壺周辺 29.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 貼付け高台後のナデのための底部切り離し技法 不明。 内面 回転によるナデ。	
3 721	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 7.4cm	壺周辺 8.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・硬質	外面 貼付け高台後のナデのための底部切り離し技法 不明。 内面 丁寧なナデ。	
4 722	耳 皿 (須恵器)	1/2残存 □ 8.1cm	中央部 7.0cm	①砂粒を含む。 ②黒褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(削落) 口縁部横ナデ。 内面 黒色処。荒磨き。口縁部横ナデ。	
5 725	小型壺 (須恵器)	1/2残存 □ 11.5cm	南西部 22.0cm	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③還元炎・硬質	外面 肩部横方向荒削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナ デで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 724	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.5cm	壺周辺 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向荒削り。頸部粗い荒ナデ。口縁部 横ナデ。 内面 強い荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

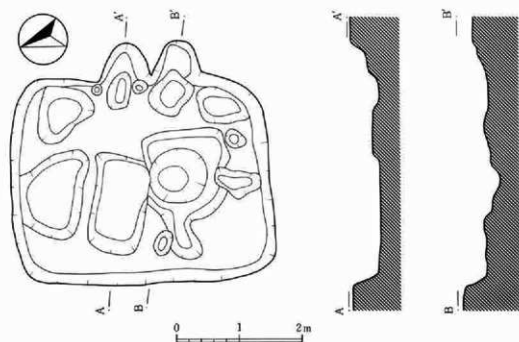
第70号住居跡 (第171~173図、図版73) 位置 II区8B-21グリッド

本住居跡は、北東部に69号住居跡が重複しており、床面下まで掘り取られていた。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、東辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.20~3.30m・南北方向4.00~4.30mを測り、主軸方位はN-17-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高27~37cmのローム層の壁面を検出した。



第171図 第70号住居跡実測図



第172図 第69・70号住居跡掘り方実測図

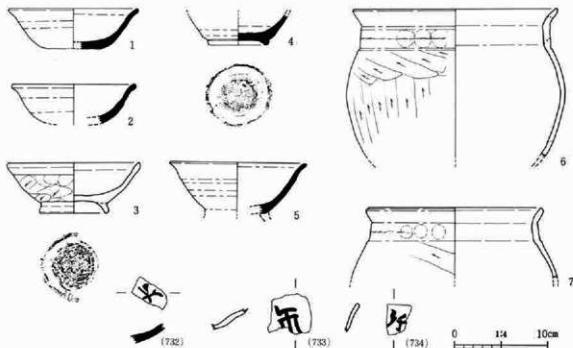


第11章 検出された遺構と遺物

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約15cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み固められていた。北辺は掘り壊された部分が多いため不明確ではあるが、西半部には幅約15cm・深さ12cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、径約90cm・深さ18cmの円形の土坑を確認した。所謂「床下土坑」の可能性はあるが、覆土の記録が無いために詳細は不明である。

竈は、東辺の中央から20cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。右袖部は明確にできなかったが、袖が20cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有り、焚口幅40cm・奥行70cm程の大きさになると思われる。掘り方は不整半円形で、火床面下で約16cm掘り進められていたが、特別な遺構は認められなかった。

遺物は竈内及び竈前面に集中して出土した。



第173図 第70号住居跡出土遺物実測図

第71表 第70号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 727	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 14.0cm 高 4.3cm 底 5.8cm	南東部 22.0cm	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
2 728	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 13.4cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り難し技法不明。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 729	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 14.3cm 高 5.4cm 底 7.4cm	竈周辺 4.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部へ一部露削り。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
4 730	高台付椀 (須恵器)	底部残存 底 6.8cm	中央部 -20.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	

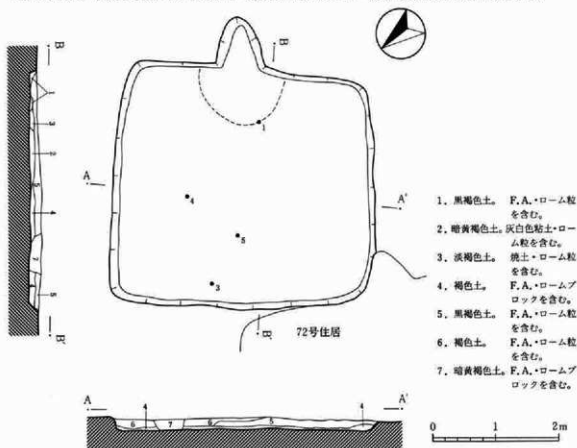
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 731	高台付椀 (灰基器)	1/2残存 口 14.6cm	竈周辺 20.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台台付け。(制落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 735	甕 (土師器)	1/2残存	竈周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②にぶい棕色 ③還元炎・良好	外面 体部縦方向旋削り。肩部横方向旋削り。頸部指頭圧痕を粗い蓋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 蓋ナデ後、丁寧ナデ。口縁部横ナデ。	
7 736	甕 (土師器)	1/2残存 口 19.0cm	中央部 -4.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向旋削り。頸部指頭圧痕を粗い蓋ナデで消す。口縁部横ナデ。口唇部強いナデ。 内面 強い蓋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第71号住居跡 (第174・175・180図、図版47・73) 位置 II区6B-23グリッド

本住居跡は、74・107・108・109号住居跡を壊して作られていた。掘り込みが浅く、南西隅の上部を72号住居跡に削られていたが、比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向がやや長い隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.80m・南北方向4.20mを測り、床面積は15.9m²である。主軸方位はN-37°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高11~15cmの壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していたが、竈の手前が堅くなっていた他は、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、中央部において、径105cm・深さ45cmの円形ピットを検出したが性格は不明である。

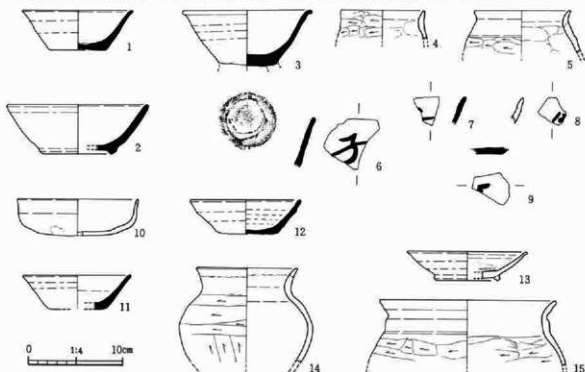


第174図 第71号住居跡実測図

第11章 検出された遺構と遺物

竈は、東辺の中央から60cm程北寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焼け込みが弱く、明確な面を捉えられなかったが、焼土・灰の分布状況から推して、火床面の中心はちょうど壁際に位置するものと考えられる。

遺物はほぼ全域に散在して出土したが少量であった。土器の他には布目瓦・磁石が出土している。



第175図 第71号住居跡出土遺物実測図

第72表 第71号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 740	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.8cm 高 4.2cm 底 6.0cm	南東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 742	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.2cm 高 5.2cm 底 8.2cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 738	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 13.9cm	東周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。底部全面ナデ。口縁部横ナデ。高台割落。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 769	小型壺 (土師器)	1/2残存 口 9.0cm	南西部 8.0cm	①白色砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・硬質	外面 肩部横方向削削り。口縁部横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
5 768	小型壺 (土師器)	1/2残存 口 10.3cm	南東部 12.6cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向削削り。頸部〜口縁部丁寧な横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 743	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「子」

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7 745	環 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に 墨書有り。 釈文不明
8 746	環 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	外面 体部粗い篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明
9 744	環 (須恵器)	底部小破片	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に 墨書有り。 釈文不明
10 748	環 (土師器)	1/2残存 □ 13.0cm 高 3.9cm	掘り方	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持ち篋削り。体部指節圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
11 741	環 (須恵器)	1/2残存 □ 11.6cm 高 3.6cm 底 6.0cm	掘り方	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
12 739	環 (須恵器)	1/2残存 □ 12.0cm 高 3.6cm 底 6.7cm	掘り方	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
13 749	高台付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 □ 12.8cm 高 3.1cm 底 7.0cm	掘り方	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転削削り。貼付け高台。口縁部横ナデ。 刷毛塗りによる淡灰緑色釉。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
14 722	小型壺 (須恵器)	1/3残存 口 10.6cm	北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部下半縦方向篋削り。体部上半～肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、丁寧ナデ。口縁部横ナデ。	
15 771	壺 (土師器)	1/2残存 □ 18.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・良好	外面 肩部横方向篋削り。頸部指節圧痕を淡い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 強い篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第72号住居跡（第176図、図版48） 位置 II区6B-23グリッド

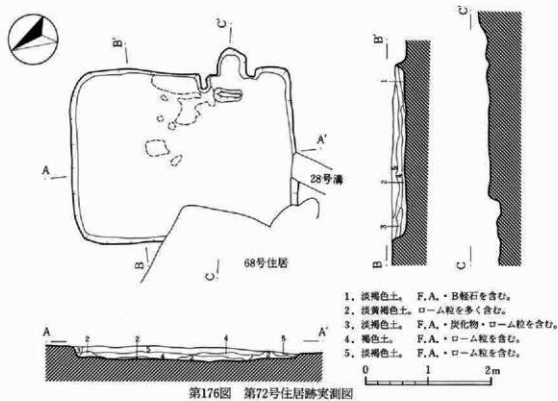
本住居跡は、68号住居跡及び28号溝によって壊されていた。また、71号住居跡と接していたが先後関係は明確にできなかった。（竈の遺存状態からは、本住居の方が新しいと考えられる。）平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.78m・南北方向3.60mを測り、床面積は10.0㎡である。主軸方位はN-25°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高7～21cmのローム層の壁面を検出した。

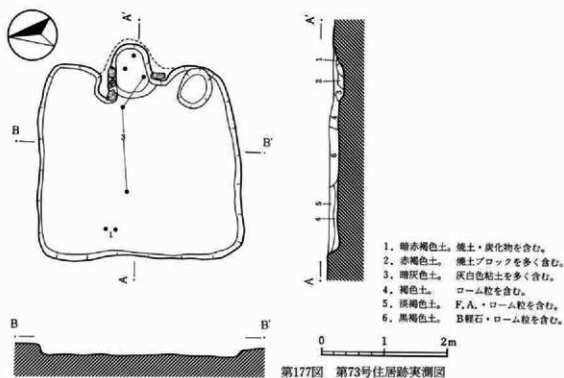
床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。竈の手前に粘土がまとまっていた他は、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果でも特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から80cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。焼け込みが弱く、袖部を明確にしなかったが、馬蹄形の燃焼部が壁外に張り出し、焚口幅35cm・奥行55cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整半円形で、特別な遺構は認められなかった。

遺物は全域に散在して出土したが、少量であった。



第73号住居跡 (第177・178図、図版48・73) 位置 II区4B-25グリッド



第4節 平安時代の住居と出土遺物

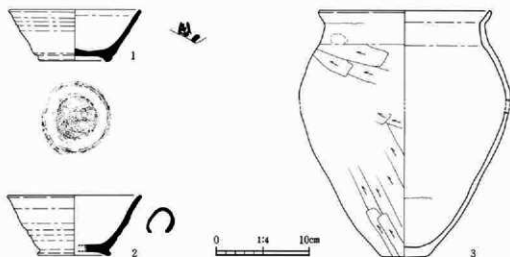
本住居跡は、79・109号住居跡を壊して作られており、中央部に耕作に伴うと考えられる浅い土坑が重複していたが、比較的良好な遺存状況であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向がやや長い縦長型で、南東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.10m・南北方向2.80～3.28mを測り、床面積は9.9m²である。主軸方位はN-5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8～16cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、黒褐色土を踏を締めて床として利用していた。南東隅には、長径63cm・短径50cm・深さ20cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。掘り方から約10cm上に床面があったが、床面下精査の結果では特別な遺構は検出されなかった。なお、周溝・柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から15cm程南寄りの位置に、瓦と川原石及び粘土を使用して構築されていた。焼け込みが弱かったが、左袖を20cm確認し、馬蹄形の燃焼部が壁外に張り出し、燃焼部の中心はちょうど壁際にある。焚口幅50cm・奥行80cm程の大きさと考えられる。掘り方は、不整半円形で、川原石の据え痕が確認された他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈部分に集中して出土した。



第178図 第73号住居跡出土遺物実測図

第73表 第73号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 751	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.2cm 高 5.3cm 底 7.8cm	北西部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ型形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内部に 墨書有り。 釈文「田」
2 752	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.4cm 高 6.3cm 底 7.8cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②によい褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ型形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文不明
3 773	甕 (土師器)	1/2残存 口 18.3cm 底 4.8cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②によい褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部蹴削り。体部斜め方向蹴削り。頸部指頭 圧痕を粗い縄ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

第74号住居跡(第179～181図) 位置 II区5B-24グリッド

本住居跡は、71・79・107・108・109号住居跡と重複していた。掘り込みが浅い上に、重複が著しかったため遺存状態は芳しくなかったが、先後関係については、平面での遺構確認段階の所見によると、79・107・108・109号住居跡→本住居跡→71号住居跡の順である。平面形は、東辺に竈を持ち、北東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.30mを測り、南北方向は不明である。主軸方位はおよそN-36°-Eである。

壁は、竈周辺部のみで、現存高さ約17cmのしっかりとした面を捉えられたが、他の部分については明確にし得なかった。

床面の踏み締まりは弱く、竈の手前部分が若干堅くなっていた。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈周辺に散在して出土した。細片が多く、重複が著しかったため、所属遺構を明らかにし得なかったものが大部分である。

第79号住居跡(第179・180図) 位置 II区5B-24グリッド

本住居跡は、73・74・109号住居跡及び溝と重複していた。掘り込みが浅い上に重複が著しかったため、遺存状態が極めて芳しくなかった。平面形は、他の遺構の状況から推して、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向3.50mを測り、東西方向については東辺から90cmの範囲まで確認した。主軸方位はおよそN-27°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8～10cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は出土しなかった。

第107号住居跡(第179・180図) 位置 II区5B-21グリッド

本住居跡は、71・74・108号住居跡と重複していた。掘り込みが浅く、重複が著しいため遺存状態が極めて芳しくなかった。遺憾ながら、調査上の不手際によって、個別の図面を残せなかったが、調査時の記録によって概要を記すこととする。先後関係については、108号住居跡→本住居跡→74号住居跡→71号住居跡の順になると考えられる。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型の隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方位はおよそN-47°-Wである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、北西部において現存高5～12cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、74号住居跡の竈の北側に焼け込みが認められたので、この部分に構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。

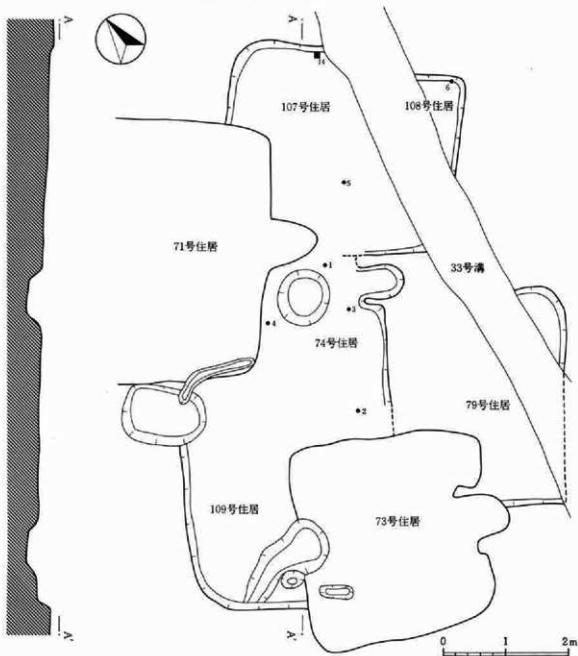
遺物は、土師器・須恵器片の他に瓦が出土している。

第108号住居跡(第179・180図) 位置 II区0B-21グリッド

本住居跡は、71・74・107号住居跡及び33号溝と重複していた。掘り込みが浅く、重複が著しかったため遺存状態が極めて芳しくなかった。先後関係については、本住居跡が最も古いと考えられる。平面形は、他の遺構の状況から推して、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型の隅丸方形を呈すると考えられるが、確証は得られていない。規模は、南北方向2.90mを測り、東西方向は東辺から90cmの範囲まで確認した。主軸方位はおよそN-48°-Wである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東側において現存高4~12cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

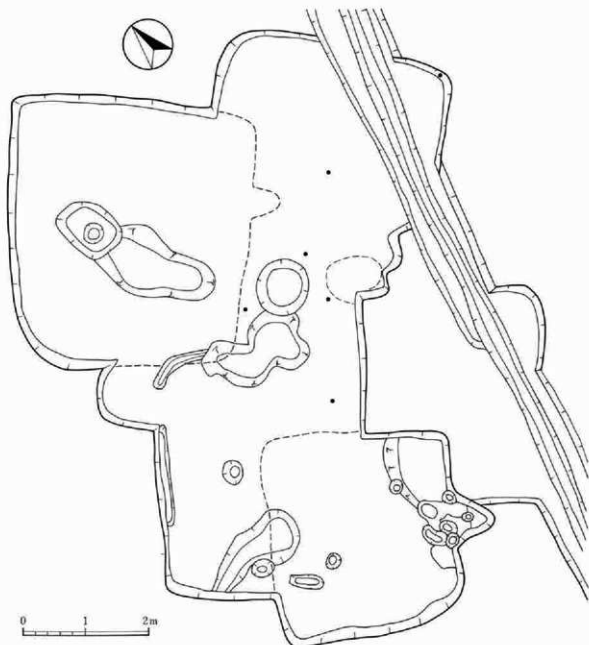


第179図 第74・79・107・108・109号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物

竈は、溝によって削られてしまったと思われる。

遺物は、北東隅から出土した須恵器碗が本住居に所属するものと考えられる。他に布目瓦が出土している。



第180図 第71・73・74・79・107・108・109号住居跡掘り方案測図

第109号住居跡（第179・180図） 位置 II区5B-27グリッド

本住居跡は、71・73・74・79号住居跡及び新しい土坑と重複していた。先後関係については、71・73・74号住居跡よりも古いことは確認できたが、79号住居跡との関係は不明である。掘り込みが浅い上に重複が著しいため、遺存状態が極めて芳しくなかった。平面形は、他の遺構の状況から推して、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると考えられるが、確証は得られなかった。規模は、南北方向4.00mを測り、東西方向については西壁から1.80mの範囲まで確認した。

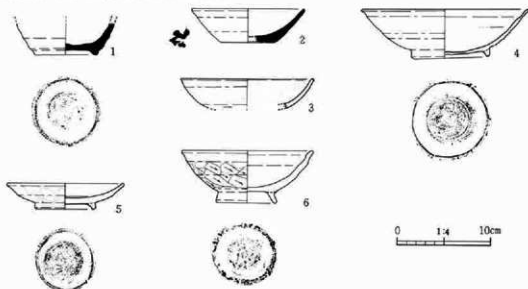
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高14～19cmのローム層の壁面が検出された。なお、西辺の一部は、

土坑によって壊されていた。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下積査の結果、壁隙がやや窪んでいることが確認できたが、他に特別な遺構は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は細片がほぼ全域に散在して出土した。



第181図 第74・107・108・109号住居跡出土遺物実測図

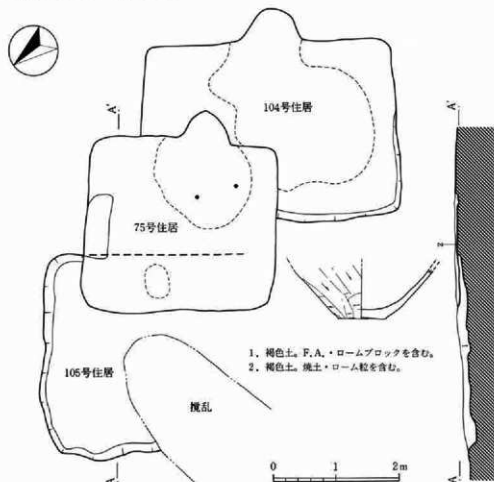
第74表 第74・107・108・109号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・流量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 781	高台付碗 (須恵器)	底部完存 底 6.8cm	南西部 9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
2 786	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.1cm 高 3.5cm 底 5.9cm	北西部 21.0cm	①砂粒を含む。 ②浅黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナデ。内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文不明
3 783	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 口 14.2cm	南西部 床面直上	①均質 ②明緑灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 体部下端回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 782	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 口 17.9cm 高 8.4cm 底 5.2cm	南西部 5.0cm	①均質 ②褐灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転削り。貼付け高台。口縁部強い横 ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
5 784	高台付皿 (灰輪陶器)	1/2残存 口 12.5cm 高 2.7cm 底 6.4cm	中央部 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 体部下端回転削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 785	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.1cm 高 6.5cm 底 5.5cm	北東部 -13.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部握い手持ち削り。 口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、丁寧ナデ。口縁部横ナデ。	

第75号住居跡 (第182図、図版49) 位置 II区0B-28グリッド

本住居跡は、掘り込みが浅かったために、極めて遺存状態が芳しくなかった。また、104・105号住居跡と重複していたが、竈の痕跡と床面の一部を確認できた。先後関係は、本住居跡が最も新しいと考えられる。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向2.80m・南北方向3.10m程の大きさになると思われる。主軸方位はおよそN-4°-Eである。

床面は掘り方をそのまま整地して使用しており、確認された範囲内においては強く踏み締められていた。竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。遺物は竈周辺にまよって出土した。



第182図 第75・104・105号住居跡実測図

第75表 第75号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 776	壺 (土師器)	5/残存 壺 4.8cm	竈周辺 -1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にふい赤褐色 ③酸化炭・硬質	外面 底部削り。体部斜め方向削り。 内面 荒ナブ後、ナブ。火はせ痕有り。	

第104号住居跡 (第182図、図版49) 位置 II区0B-28グリッド

本住居跡は、掘り込みが浅かったために、遺存状態が極めて芳しくなかった。また、75号住居跡と重複していたが、竈の痕跡と床面の一部を確認できた。先後関係は、本住居跡の方が古いと考えられる。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西方向2.80m・南北方向4.05m程の大きさと考えられる。主軸方位はおよそN-33°-Eである。

壁は、南西の一部で現存高約6cmのローム層の壁面を検出した。

床面は掘り方をそのまま整地して使用しており、確認された範囲内においては強く踏み締められていた。

竈は、東辺の中央から20cm程南寄りの位置に構築されていたと考えられるが詳細は不明である。

遺物は、土師器壺・須恵器杯の細片が出土したのみである。

第105号住居跡 (第182図、図版49) 位置 II区0B-28グリッド

本住居跡は、掘り込みが浅かった上に南西部に攪乱があったため、遺存状態が極めて芳しくなかった。また、75号住居跡と重複していたが、竈の痕跡と床面の一部を確認できた。先後関係は、本住居跡の方が古いと考えられる。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西方向3.30mを測り、南北方向は北壁から1.90mまで確認した。主軸方位はおよそN-37°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、北側の一部で現存高約13cmのローム層の壁面を検出した。

床面は掘り方をそのまま整地して使用しており、確認された範囲内においては強く踏み締められていた。

竈は、東辺の北東隅から180cm程南寄りの位置に構築されていたと考えられるが詳細は不明である。

遺物は、土師器壺の細片が出土したのみである。

第76号住居跡 (第183・185図、図版49・50・73) 位置 II区0B-48グリッド

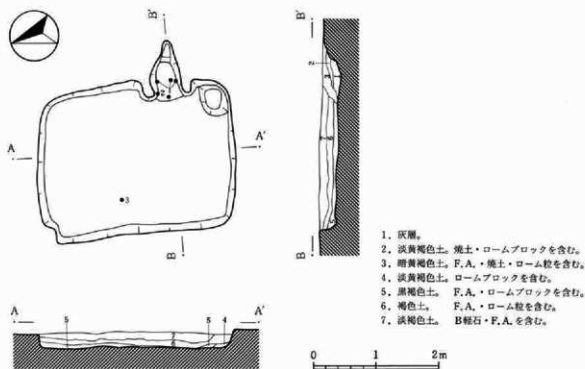
本住居跡は、77・100号住居跡と重複しており、先後関係については77号住居跡→100号住居跡→本住居跡の順であることが確認されている。また、北及び西辺には本住居よりも新しい土坑が穿たれていたが、性格は不明である。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、ややひしゃげた隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.48m・南北方向3.18mを測り、床面積は7.8㎡である。主軸方位はN-14°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高16～25cmのローム層の壁面を検出した。(北東部の壁面は土層観察の結果によって決定したものである。)

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さで客土して整地して使用しており、ほぼ全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には40×48cm・深さ16cmの不整形の貯蔵穴が穿たれており、焼けた川原石が埋まっていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下の精査でも、特別な遺構は認められなかった。P₁は径95cm・深さ30cmを測り、焼土・ローム粒を含む褐色土が詰まっていた。遺物は認められなかった。

竈は、東辺の中央から55cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。袖が15cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有る。焚口幅40cm・奥行85cmを測り、全長100cmを確認した。掘り方は馬蹄形に壁外に張り出し、壁線上には袖部の石を埋めたと考えられる径約25cm・深さ6cmの穴が2個穿たれていた。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。布目瓦の出土が目される。



第183図 第76号住居跡実測図

第77号住居跡 (第184・185図、図版50・73) 位置 II区0 B-48グリッド

本住居跡は、76・100号住居跡によって西半部を掘り取られてしまっていた。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、東辺の北半部に50cm×170cmの長方形の張り出し部が有る隅丸不整形を呈する。規模は、南北方向3.46mを測り、東西方向は東辺の張り出し部から2.30mまで確認した。主軸方位はおよそN-32°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、西壁を除いて現存高12~20cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約20cmの厚さでロームブロックを含む褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み縮められていた。南東隅には径60cm・深さ10cmの浅い貯蔵穴と考えられる窪みが認められた。覆土は、焼土・炭化物を含む黒褐色粘質土である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、中央部に径85cm・深さ20cmの円形ピットが認められた。

竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、瓦と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際になり、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。上半部は削平されてしまっているが、焚口部の両側には丸瓦が据えられており、内法58cm・奥行48cmを測り、全長62cmを確認した。掘り方調査の結果、火床面下には長径60cm・短径45cm・深さ8cmの楕円形のピットが穿たれていた。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。調査中に須恵器杯の完形品1点が盗難にあってしまった。北壁の西側から鳳字硯が出土したことが注目される。

第100号住居跡 (第184図、図版50) 位置 0 B-48グリッド

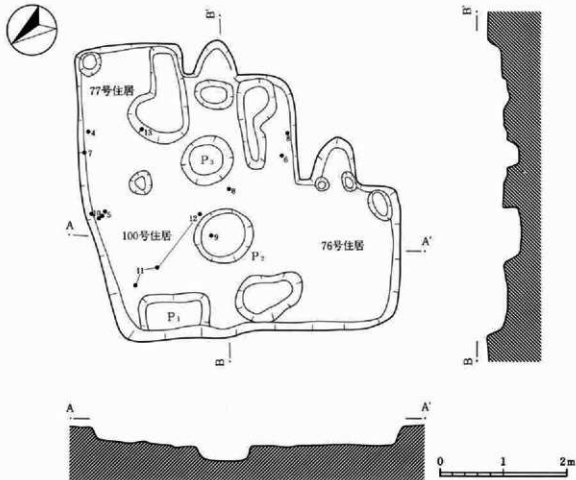
本住居は、76・77号住居跡と重複していた。新旧関係は前述の通りであるが、遺構確認段階では77号住居跡と同一の遺構と認識して調査を進めてしまったために東壁を残し得なかった。平面形は、東辺に竈を持ち、やや歪んだ隅丸方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。規模は、東西方向約2.7mで、南北方向は76号住居によって壊されてしまっていたために不明である。西壁の走向はN-31-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高15~20cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさ程強くなかった。西壁際には、50×110cm・深さ20cmの隅丸方形のP₁が、中央部には径95cm・深さ25cmの円形のP₂が穿たれていた。P₂の内部からは須恵器甕が出土したが、共に性格は不明である。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。また、床面の精査でも特別な遺構は認められなかった。

竈は、火床面下に径約85cm・深さ20cmの不整円形の掘り方P₃を持ち、瓦と粘土を使用して構築されていた。上部を壊してしまったために詳細は不明である。

遺物は東側に集中して出土した。



第184図 第77・100号住居跡実測図



第185図 第76・77号住居跡出土遺物実測図

第76表 第76・77号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 753	杯 (土師器)	1/2残存 口 14.2cm 高 3.8cm 底 7.2cm	竈周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部～体部下半部削り。体部上半部面圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	体部内面に墨書有り。 釈文「子前」
2 754	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.5cm 高 5.6cm 底 5.9cm	竈周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転コクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文「△」
3 755	高台付碗 (灰輪陶器)	1/2残存 口 15.5cm 高 4.6cm 底 7.4cm	北西部 5.0cm	①均質。 ②明青灰色 ③還元灰・硬質	右回転コクロ整形。刷毛塗りによる淡灰白色釉。 外面 底部全面削り。貼付け高台。体部下端回転削り。口縁部横ナゲ。 内外 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 756	杯 (土師器)	1/2残存 口 12.2cm	北東部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持ち削り。体部指頭圧痕を粗い荒ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	器種・器形	残存・量数	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 758	坏 (土師器)	宧形 口 11.8cm 高 3.5cm	北西部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②によい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭正直を組む器ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
6 757	坏 (土師器)	ほぼ宧形 口 15.2cm 高 4.8cm	南東部 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭正直を組む器ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
7 764	坏 (須恵器)	底部完存 高 7.8cm	北東部 1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・硬質	右回転クロコ整形。所謂クロコ土師器。 外面 底部全周回転削り。体部下端回転削り。 内面 黒色処理。丁寧な磨き。	
8 759	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.1cm 高 2.8cm 底 6.2cm	南西部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 763	坏 (須恵器)	1/2残存 口 10.3cm 高 2.8cm 底 5.5cm	中央部 -3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
10 762	坏 (須恵器)	ほぼ宧形 口 11.1cm 高 3.5cm 底 6.8cm	北西部 3.0cm	①砂粒を多く含む。 ②によい褐色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11 760	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.3cm 高 4.7cm 底 7.4cm	北西部 8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
12 761	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 3.4cm 底 7.0cm	中央部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
13 767	蓋 (須恵器)	1/2残存 口 11.2cm	北東部 -3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 天井部回転削り。口縁部横ナデ。積み割落。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第78号住居跡 (第186・187図、図版50・74) 位置 II区0B-34グリッド

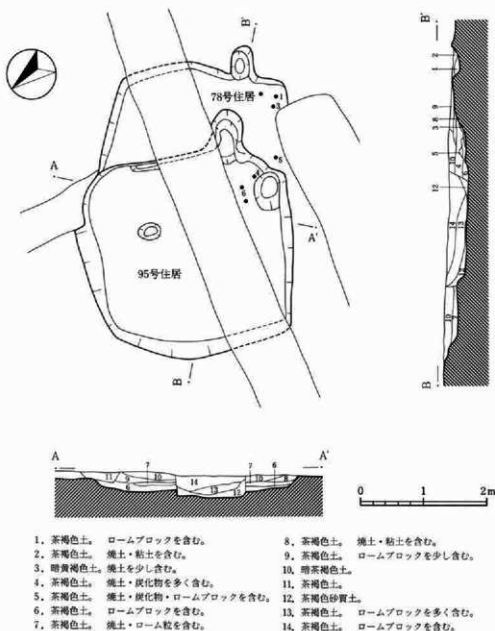
本住居跡は、95号住居跡によって西半部を掘り取られてしまっていた上に、耕作に伴うと考えられる土坑が重複していたため遺存状態が極めて芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち、北辺が歪んだ隅丸不整形方を呈すると考えられる。規模は、南北方向2.75mを測り、東西方向は東辺から1.70mの範囲まで確認した。主軸方位はおおよそN-45°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高約10cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東隅には、長径40cm・短径25cm・深さ13cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部からは土師器壺、須恵器杯・椀が出土した。なお、確認された範囲内においては周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から60cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていたと考えられるが、上部を削られてしまっていたために詳細は不明である。火床面の下部には、長径45cm・短径30cm・深さ18cmの長円形の穴が掘られていた。

遺物は、竈周辺に集中して出土した。土器の他に、布目瓦・砥石が出土している。



第186図 第78・95号住居跡実測図

第95号住居跡 (第186・187図、図版50・74) 位置 II区0B-34グリッド

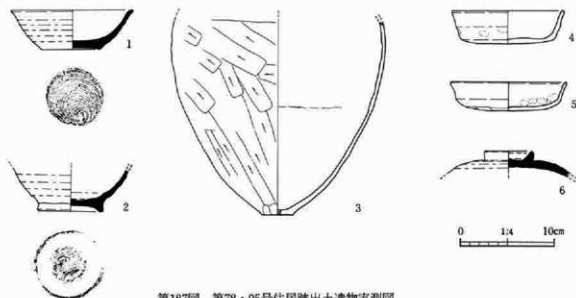
本住居跡は、78号住居跡を壊して作られていたが、掘り込みが浅い上に、耕作に伴うと考えられる土坑が重複していたため遺存状態が極めて芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち、北西部が歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.95m・南北方向3.10mを測り、床面積は9.1m²である。主軸方位はおよそN-32°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高23~30cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこんもりとしており多少の凹凸が認められるが、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、長径60cm・短径45cm・深さ17cmの貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から80cm程南寄りの位置に、瓦と粘土を使用して構築されていた。北半部を掘り取られてしまっていたが、焚口幅40cm・奥行50cm程の大きさと考えられる。焼け込みはさほど強くなかったが、袖部には丸瓦が据えられており、馬蹄形の燃焼部が壁外に張り出している。

遺物は竈周辺に集中して出土した。



第187図 第78・95号住居跡出土遺物実測図

第77表 第78・95号住居跡出土遺物観察表

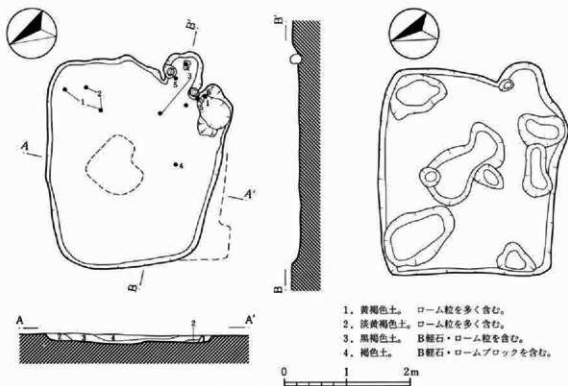
No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 765	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.1cm 高 4.2cm 底 6.3cm	南東部 17.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 766	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 7.0cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 777	碗 (須恵器)	1/2残存	南東部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部絞り。体部斜め方向絞り。 内面 窪ナデ後、ナデ。	
4 778	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.5cm 底 10.0cm	南東部 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい赤褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持ち絞り。体部指頭圧痕を粗い窪ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 窪ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
5 779	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.0cm	南東部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元炎・良好	外面 底部手持ち絞り。体部指頭圧痕を粗い窪ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 窪ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 780	蓋 (須恵器)	1/2残存 横 5.2cm	南東部 灰面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 天井部回転絞り。 内面 回転によるナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

第80号住居跡 (第188・189回、図版51・74) 位置 II区40A-35グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東辺に竪を持ち東西方向が長い縦長形で、南東部が著しく歪んだ不整隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.23m・南北方向2.44~2.94mを測り、床面積は7.3m²である。主軸方位はN-21'-Eである。

壁は10°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高9~13cmのローム層の壁面を確認した。



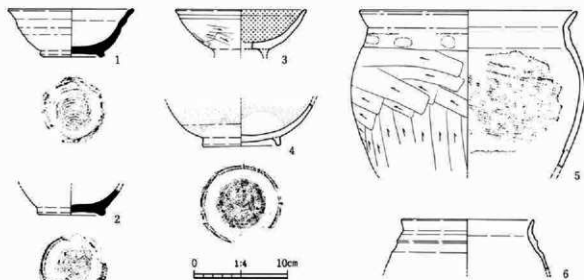
第188図 第80号住居跡実測図



床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでハードロームを主体とした褐色土を客土して整地しており、全面に互って踏み締められていた。南西隅には径45～63cm・深さ18cmのき頭円錐状の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、3個のピットを検出した。P₁は径30cm・深さ33cm、P₂は径46cm・深さ33cm、P₃は不整形丸方形で80×120cm・深さ19cmを測る。P₁及びP₂は、本住居に後出することは確認できたが、共に性格は不明である。

竈は、東辺の中央から48cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。袖が25cm程張り出し、燃焼部は屋外に有り、焚口幅38cm・奥行59cmを測り、全長66cmを確認した。火床面の中央には須恵器碗が被せられた川原石の支石が遺存していたが、左袖の石は抜き取られていた。

遺物は、竈周辺に集中して出土した。



第189図 第80号住居跡出土遺物実測図

第78表 第80号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 787	高台付碗 (須恵器)	完形 □ 13.4cm 高 5.1cm 底 6.9cm	北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②明褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
2 789	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 7.2cm	北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
3 790	高台付碗 (須恵器)	1/2残存	竈周辺 7.0cm	①砂粒を多く含む。 ②暗赤灰色 ③還元炎・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部下半手持ち荒削り。口縁部横ナデ。 内面 黒色処理。腹磨き。口縁部横ナデ。	
4 792	高台付碗 (灰輪陶器)	底部完存 底 8.3cm	中央部 1.0cm	①砂粒を少し含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。横け掛けによる淡灰色釉。 外面 底部回転削り。貼付け高台。体部下半回転削り。 内面 回転による丁寧なナデ。	
5 793	壺 (土師器)	1/2残存 □ 23.2cm	竈周辺 3.0cm	①砂粒・細線を含む ②褐色 ③還元炎・良好	外面 体部下半縦方向削り。体部上半～肩部横方向削り。頸部指頸王痕を粗いナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 強い荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 794	壺 (土師器)	小破片 □ 14.2cm	竈周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 肩部～口縁部横ナデ。 内面 強い荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第81号住居跡 (第190～192図、図版51・74) 位置 I区42A—51グリッド

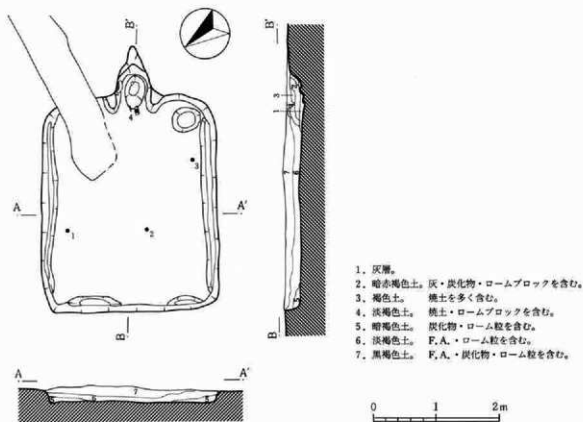
本住居跡は、23号溝が廃棄された後に営まれており、北東部を耕作に伴うと考えられる土坑によって壊されていたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長形で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.41m・南北方向2.76mを測り、床面積は8.2㎡である。主軸方位はN-31.5°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高18～24cmのローム層の壁面を確認した。

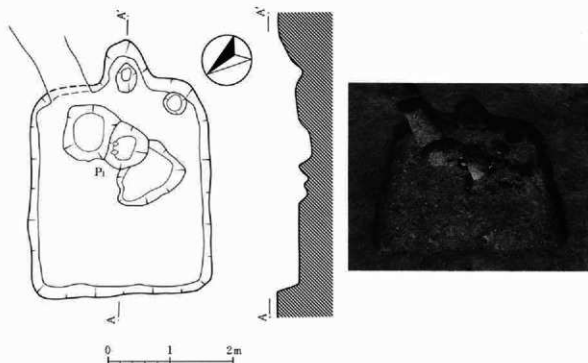
床面はほぼ平坦で、掘り方に約14cmの厚さでハードロームを主体とした褐色土を客土して整地しており、全面に互って強く踏み締められていた。南西隅には径40～50cm・深さ40cmの載頭円錐状の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面精査の結果、深さ25cmの不整形ピットを検出した。P₁の内部には焼土と灰を多量に含む暗褐色土が詰まっていた。地層断面の観察では検出されなかったこと及び出土した土師器壺、須恵器椀が住居内出土遺物とほぼ同時期と考えられることから、所謂「床下土坑」と考えられる。

竈は、東辺のほぼ中央に、褐色粘土を使用して構築されていた。袖が20cm程張り出し、燃燒部はちょうど壁際に有り、焚口幅41cm・奥行61cmを測り、全長107cmを確認した。掘り方は不整半円形で、火床面下には径30～45cm・深さ17cmの長円形の窪みが認められた。

遺物は、竈周辺及び中央部に散らばって出土した。なお、竈付近の覆土中より緑釉陶器皿の破片が出土している。



第190図 第81号住居跡実測図



第191図 第81号住居跡掘り方実測図



第192図 第81号住居跡出土遺物実測図

第79表 第81号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色③焼成	成・整形の特徴	備考
1 795	坏 (土器)	1/2残存 口 12.6cm 高 2.8cm	北西部 19.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰赤色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 796	坏 (土器)	1/2残存 口 11.7cm	中央部 11.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化灰・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 797	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.3cm 高 3.6cm 底 5.8cm	南東部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転余切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 798	甕 (土器)	小破片	竈周辺 9.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化灰・良好	外面 肩部横方向寛削り。肩部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

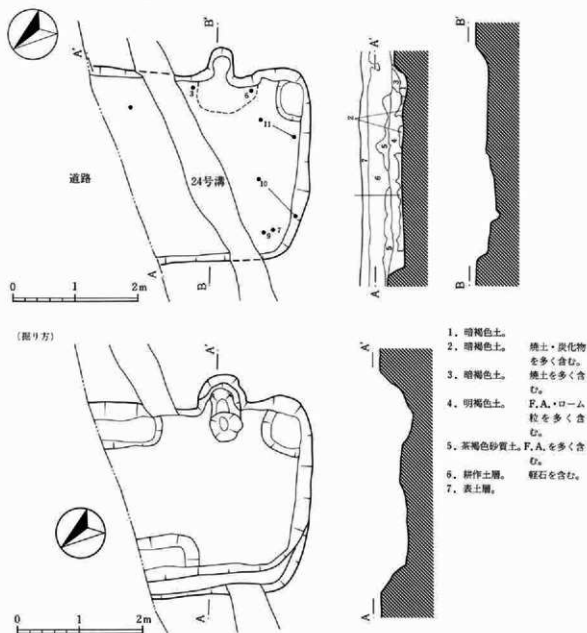
第82号住居跡 (第193・194図、図版51・74) 位置 I区41A-48グリッド

本住居跡は、北半部が生活道路にかかっていたため未完掘である。24号溝による攪乱もあったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長形で、南西部がやや歪んでいる。規模は、東西方向3.00mを測り、南北方向は3.44mを確認した。主軸方位はN-38°Eである。

壁は、30°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高18~32cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約20cmの厚さでロームブロックを多量に含む暗褐色土を客土して整地しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には、44×60cm・深さ17cmの隅丸方形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

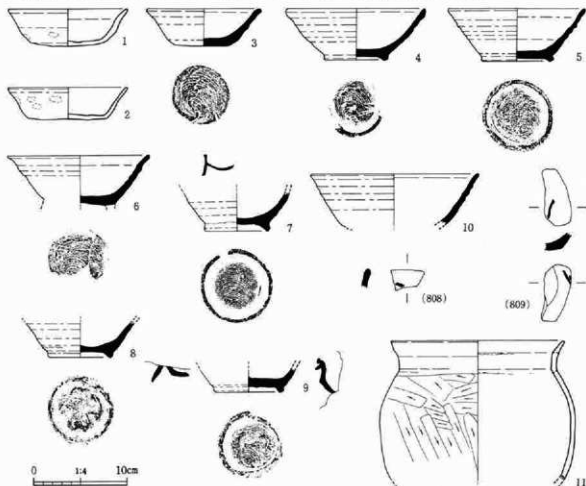
竈は、東辺の南寄りの位置に、暗灰色粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃燒部は屋外に有り、焚口幅40cm・奥行50cmを測り、全長59cmを確認した。掘り方は、不整半円形で、火床面



第193図 第82号住居跡実測図

下には径50～80cm・深き40cmの長円形の窪みが有り、内部には炭化物を多量に含む褐色土が詰まっていた。なお、燃焼中には、焚口の架構材に使用したと思われる砂岩の載石が残っていたことから、住居の廃棄に当たって竈を意図的に壊したと考えられる。

遺物は、竈周辺から南側に散らばって出土した。土器の他には布目瓦が出土している。



第194図 第82号住居跡出土遺物実測図

第80表 第82号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 799	杯 (土師器)	5/残存 口 12.8cm 高 4.0cm	竈周辺	①砂粒を含む。 ②にふい赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭圧痕を帯い踵ナゲで出す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 800	杯 (土師器)	5/残存 口 12.7cm 高 3.3cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭圧痕を帯い踵ナゲで出す。口縁部横ナゲ。 内面 ナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 801	杯 (須恵器)	5/残存 口 12.3cm 高 3.9cm 底 6.1cm	竈周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クワロ整形。 外面 底部回転余切り未調整。口縁部強い横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部強い横ナゲ。	

第II章 検出された遺構と遺物

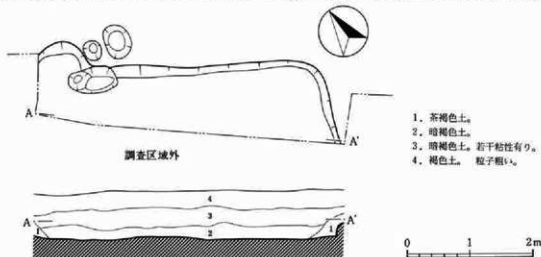
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4 802	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.0cm 高 5.4cm 底 6.9cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 803	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.7cm 高 5.5cm 底 7.7cm	貯蔵穴中	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 804	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.2cm	甕周辺 -0.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け(剥落)。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 805	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 6.5cm	南西部 -6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「人」
8 806	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 7.0cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
9 807	高台付椀 (須恵器)	底部完存 底 7.0cm	南西部 24.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文不明
10 810	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 18.0cm	南西部 19.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11 811	壺 (土師器)	1/2残存 口 18.5cm	南東部 13.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向度削り。肩部横方向度削り。頸部直ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部直ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第83号住居跡(第195図、図版51) 位置 I区43A-53グリッド

本住居跡は、南側が調査区域外にかかっていたため部分的な調査にとどまってしまった。北辺4.50m・東辺1.50mを確認した。地層断面の記録から推して、もう少し大きくなるものと考えられる。東辺の走向はN-33°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高さ19~22cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこんもりとしていたが、掘り方に約10cmの厚さで暗褐色土を客土して整地して使用し



第195図 第83号住居跡実測図

ており、強く踏み締められていた。確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、南東部において深さ7cmの不整形ピットの一部を検出したが詳細は不明である。

竈については全く資料を欠く。

遺物は、土師器製の細片が5点出土したのみである。

第84号住居跡 (第196・197図、図版51・74) 位置 I区32A—47グリッド

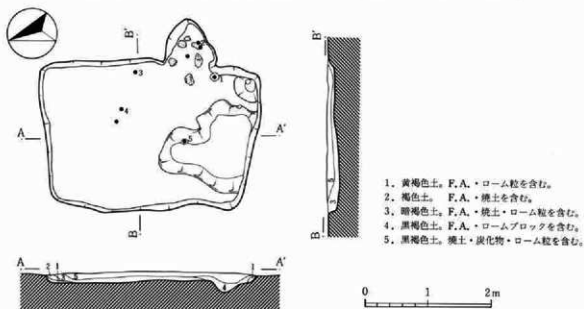
本住居跡は、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長形で、西側の両隅がやや歪んでいる。規模は、東西方向2.28m・南北方向3.52mを測り、床面積は6.9m²である。主軸方位はN-14°-Eである。

壁は、15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高10~21cmのローム層の壁面を確認した。

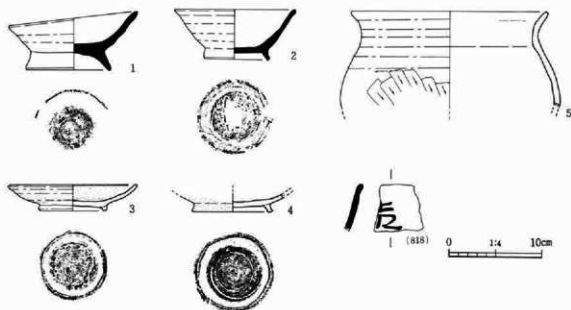
床面は、中央部がややこんもりとしており、掘り方に約20cmの厚さにロームを多量に含む褐色土を客土して整地しており、全面に亘って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から54cm程南寄りの位置に、川原石と灰褐色粘土を使用して構築されていた。燃焼部は屋外に有り、焚口幅65cm・奥行70cmを測り、全長78cmを確認した。火床面の中央には、須恵器碗が伏せられていた。掘り方は、不整半円形で、四隅に川原石を立てて構造材としていた。

遺物は、ほぼ全域に散らばって出土した。土器の他には布目瓦・礮の羽ノ片が出土している。



第196図 第84号住居跡実測図



第197図 第84号住居跡出土遺物実測図

第81表 第84号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・寸法	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 814	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.8cm 高 5.5cm 底 9.0cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を多く含む。 ②明赤褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	高台部がやや傾いているため歪みが著しい。
2 815	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.0cm 高 5.2cm 底 6.8cm	甕周辺 22.0cm	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 内面 底部回転赤切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 819	高台付皿 (灰胎陶器)	1/2残存 口 13.9cm 高 2.7cm 底 6.8cm	甕周辺 13.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。履け掛けによる淡灰色釉。 外面 底部回転赤切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 820	高台付皿 (灰胎陶器)	底部完存 底 8.7cm	中央部 14.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転赤切り後、貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
5 821	鉢 (須恵器)	1/2残存 口 21.0cm	中央部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色 ③還元炎・硬質	外面 体部斜め方向削削り。肩部へ口縁部回転によるナデ。 内面 体部丁寧なナデ。口縁部回転によるナデ。	

第85号住居跡 (第198・199図、図版52・74・75) 位置 I区27A-49グリッド

本住居跡は、掘り込みが浅い上に、土坑及び25号溝によって壊されていたため、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、東辺が歪んだ隅丸不整形を呈すると考えられる。規模は、東西方向2.67mを割り、南北方向は南壁から3.50mの範囲まで確認した。主軸方位はN-16°Eである。なお、土坑の北側の落ち込みについては、本住居に先行する住居跡である可能性が考えられるが、確証は得られなかった。

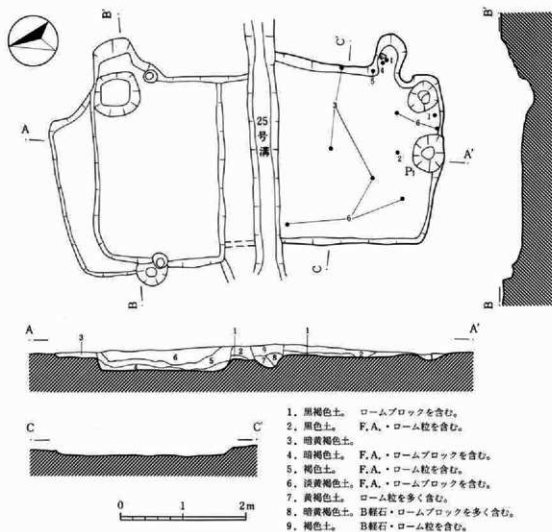
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高5～11cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東

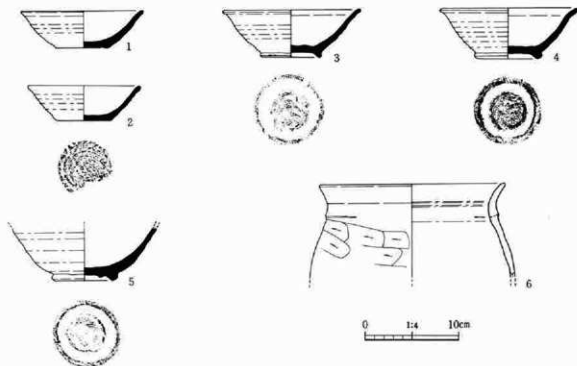
隅には、径52cm・深き19cmの貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器甕の破片が出土した。P₁は径60cm・深き15cmを測るが、本住居よりも新しい時期のものである。

竈は、東辺の南東隅から90cm程北寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。焼け込みが弱く、袖部を明確にし得なかったが、馬蹄形の燃焼部が壁外に約45cm張り出している。焚口幅45cm・奥行60cm程の大きさと考えられ、火床面の中央には川原石の支脚が立てられたまま残っていた。掘り方は不整半円形であったが特別な遺構は検出されなかった。

遺物は南東部に集中して出土した。土器他には布目瓦が出土している。



第198図 第85号住居跡実測図



第199図 第85号住居跡出土遺物実測図

第82表 第85号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 822	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.1cm 高 3.8cm 底 5.6cm	龍周辺 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 823	坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.7cm 底 5.8cm	南東部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 824	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.8cm 高 5.0cm 底 6.1cm	中央部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
4 825	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.8cm 高 5.3cm 底 6.1cm	龍周辺 18.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
5 826	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 7.0cm	龍周辺 18.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
6 827	土 釜 (須恵器)	小破片	南東部 -4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③酸化灰・硬質	外面 肩部横方向削り後、肩部へ口縁部回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。	

第86号住居跡 (第200・201図、図版52・75) 位置 I区27A-53グリッド

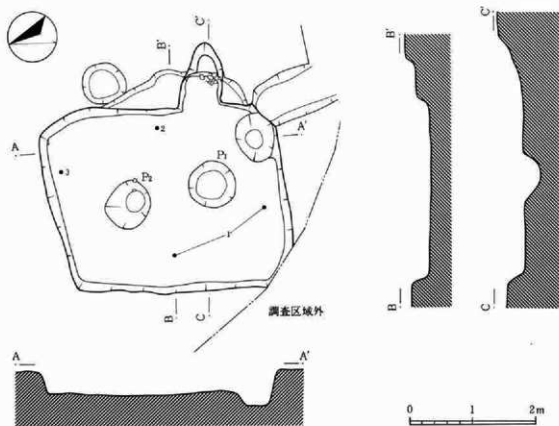
本住居跡は、75号土坑によって壊された部分があったが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、南西部が歪んだ隅丸不整形を呈する。なお、東辺には、床面から20cm程度上がった位置に棚状の施設が認められた。規模は、東西方向2.90m・南北方向3.64~3.78mを測り、床面積は9.3㎡である。主軸方位はN-15°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高24~33cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さでロームブロックを多量に含んだ黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、長径69cm・短径59cm・深さ20.5cmの貯蔵穴が穿たれており、ロームブロックを含む褐色土が詰まっていた。また、P₁は径70cm・深さ21cm、P₂は径80cm・深さ37cmを測るが、共に性格は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

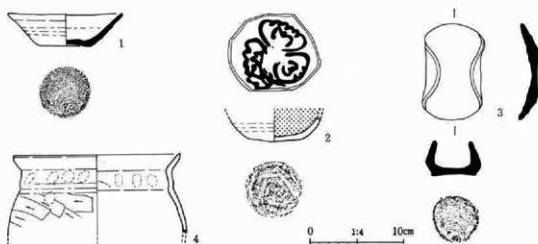
竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にできなかったが、焚口幅50cm・奥行80cm程の大きさと考えられる。焼け込みはさほど強くなかったが、火床面の中央には、川原石の支脚が立てられたまま残っていた。掘り方は不整半円形で、火床面下には長径60cm・短径40cm・深さ12cmの長円形の窪みがあり、焼土・ローム粒を含む暗褐色土が詰まっていたが、他には特別な遺構は認められなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。土器の他には布目瓦の破片が出土している。



第200図 第86号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第201図 第86号住居跡出土遺物実測図

第83表 第86号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 828	坏 (須恵器)	完形 口 12.3cm 高 3.3cm 底 5.3cm	南西部 -3.0cm	①砂粒を含む。 ②暗灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 829	坏 (須恵器)	底部完存 底 6.0cm	東周辺 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部手持り磨削り。 内面 黒色処理。花卉状の暗文を施す。	
3 830	耳 皿 (須恵器)	完形 口 10.1cm 高 2.2cm 底 4.6cm	北東部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 831	壺 (土師器)	1/2残存 口 18.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向磨削り。頸部指環圧痕を粗い磨ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 磨ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第87号住居跡 (第202・203図、図版52・75) 位置 I区21A-46グリッド

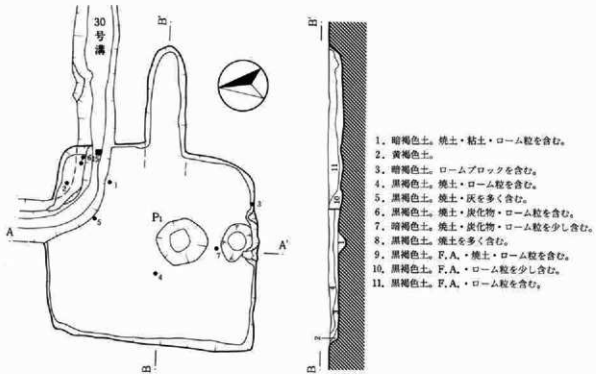
本住居跡は、30号溝及び55号土坑によって壊されていたため、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、南辺に竈を持ち南北方向が長い縦長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.01m・南北方向3.33mを測り、床面積はおおよそ9.1㎡である。主軸方位はN-12°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高12~19cmのローム層の壁面を検出した。

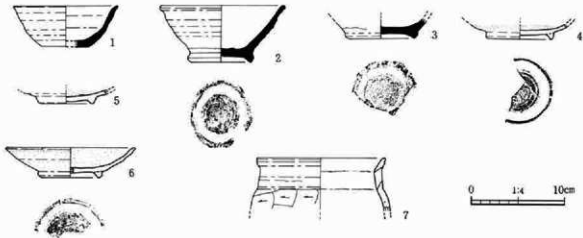
床面はほぼ平坦で、掘り方をほぼそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。中央部に検出されたP₁は、径80cm・深さ16cmを測り、内部からは土師器蓋・須恵器椀の破片が出土した。覆土は焼土・粘土・ローム粒を含む暗褐色土が詰まっていた。本住居に伴う床下土坑の可能性が高いと考えられる。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、南辺の中央から30cm程東寄りの位置に焼土・灰が認められたので、この部分に構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。壁際に径60cm・深さ5cm程の窪みが認められたので、燃焼部の中心は屋内に有ったと考えられる。遺存状態から推して、住居の崩壊に当たって意図的に壊したものと考えられる。

遺物は南壁際に少量認められた。



第202図 第87号住居跡実測図



第203図 第87号住居跡出土遺物実測図

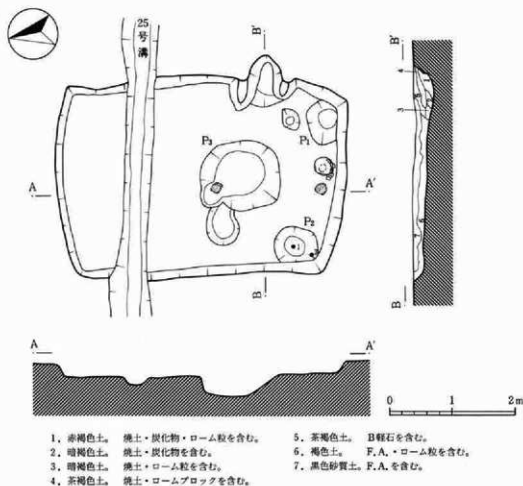
第84表 第87号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 813	坏 (須恵器)	1/2残存 口 11.2cm 高 4.3cm 底 5.0cm	北東部 13.0cm	①胎土②色調③構成 ①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・やや軟質	成・整形の特徴 右回転ロクロ整形。 外面 底部回転半切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
2 833	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.5cm 高 5.9cm 底 6.4cm	北東部 10.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 834	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 7.2cm	南東部 23.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4 1198	高台付碗 (灰釉陶器)	1/2残存 底 7.2cm	中央部 15.0cm	①均質 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡灰色釉。 外面 底部回転龍削り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
5 836	高台付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 底 5.8cm	北西部 17.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転龍削り。削り出し高台。体部下回転龍削り。 内面 回転によるナデ。	リング状の重ね焼き痕有り。
6 835	高台付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 口 13.8cm 高 3.2cm 底 6.1cm	北東部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。刷毛塗りによる淡緑色釉。 外面 底部回転龍削り。貼付け高台。体部下回転龍削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 837	甕 (土師器)	1/2残存 口 13.8cm	南東部 8.9cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③酸化灰・良好	外面 肩部横方向龍削り。頸部指頭圧痕を粗い籠ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 籠ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第88号住居跡 (第204・205図、図版52・75) 位置 I区23A-48グリッド



第204図 第88号住居跡実測図

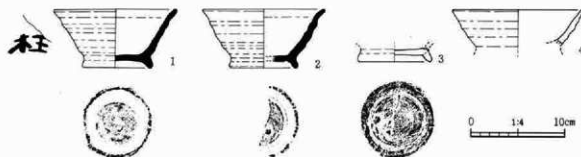
本住居跡は、中央部に新しい攪乱があり、北側の一部が25号溝によって壊されていたが、比較的良好な遺存状態であった。また、南壁際に縄文時代の「堀ノ内式」の埋蔵が検出された。平面形は、東辺に竪を持ち南北方向が長い横長型で、南北辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向3.00m・南北方向4.60mを測り、床面積は11.6㎡である。主軸方位はN-11.5°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高19~20cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南側の隅隅に2個のピットが検出され、P₁・P₂共に径70cm・深さ約10cmを測り、内部からは須恵器杯・碗の破片等が出土した。出土遺物の様相から推して、P₁は本住居跡に伴う貯蔵穴と考えられるが、P₂は新しい土坑と考えられる。P₃は径130cm・深さ24cmを測るが性格は不明である。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

竪は、東辺の中央から105cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。約35cmの袖を持ち、燃焼部の中心はちょうど壁際に位置する。焚口幅35cm・奥行66cm程の大きさと考えられるが、焼け込みはさほど強くなかった。掘り方は不整形半円形で、火床面下には、長径120cm・短径50cm・深さ15cmの長円形のピットが検出されたが、他には特別な遺構は認められなかった。

遺物は、南東部に集中して出土したが少量であった。土器の他には布目瓦の破片が出土している。



第205図 第88号住居跡出土遺物実測図

第85表 第88号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 838	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 6.2cm 底 7.5cm	貯蔵穴中 -16.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「柱」
2 839	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 6.2cm 底 7.4cm	30号溝中 -24.5cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 840	高台付碗 (須恵器)	底部残存 底 7.9cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
4 841	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm	覆土中	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③酸化炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	

第II章 検出された遺構と遺物

第89号住居跡 (第206・207図、図版53・75) 位置 I区37A-46グリッド

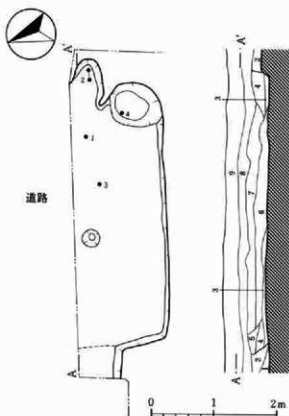
本住居跡は、北側が生活道路にかかっていたため未発掘である。更に、24号溝による攪乱があったために遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持つ隅丸方形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。規模は、東西方向4.10mを測り、南北方向は南壁から1.50mの範囲まで確認した。主軸方位はおよそN-18.5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高8~13cmのローム層の壁面を検出した。

床面は中央部がややこもりとしており、掘り方をそのまま整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東隅には、径約70cm・深さ12cmの貯蔵穴が穿たれており、内部から須恵器杯の口縁部が出土した。なお、確認された範囲内においては周溝及び柱穴は検出されなかった。

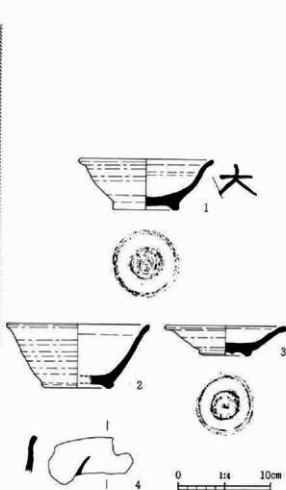
竈は、東辺の南東隅から110cm程北寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。全体を検出できなかったが、焚口幅40cm・奥行70cm程の大きさと考えられる。焼け込みは強くなかったが、燃焼部の中心はちょうど壁際に位置すると考えられる。掘り方は不整半円形で、火床面下には径22cm・深さ13cmの円形ピットが認められた他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物は竈周辺に集中して出土した。



- | | |
|--------------------|--------------|
| 1. 注記漏れ。 | 6. 灰褐色土。 |
| 2. 注記漏れ。 | 7. 黒褐色土。 |
| 3. 暗灰褐色土、灰・炭化物を含む。 | 8. 暗褐色土。 |
| 4. 暗褐色土、炭化物を含む。 | 9. 褐色土。(耕作土) |
| 5. 暗褐色土、炭化物を少し含む。 | |

第206図 第89号住居跡実測図



第207図 第89号住居跡出土遺物実測図

第86表 第89号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	底・整形の特徴	備考
1 844	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 14.5cm 高 5.3cm 底 7.0cm	電周辺 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部内・外面に墨書有り。 釈文「大」
2 843	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 口 15.4cm 高 6.8cm 底 6.8cm	電周辺 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部切り離し技法不明。貼付け高台。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 842	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 口 13.4cm 高 3.1cm 底 5.2cm	南東部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②黒・灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
4 845	坏 (須恵器)	小破片	貯蔵穴中 11.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明

第90号住居跡（図版53） 位置 II区30A-33グリッド

本住居跡は、表土掘削が完了した段階で、竈の痕跡と貯蔵穴と考えられる掘り込みを確認したが、遺物ながら調査上の不手際から詳細な図面記録を残し得なかった。図版53は、遺構確認段階での状況であるが、東辺に竈を持った住居であることを示している。

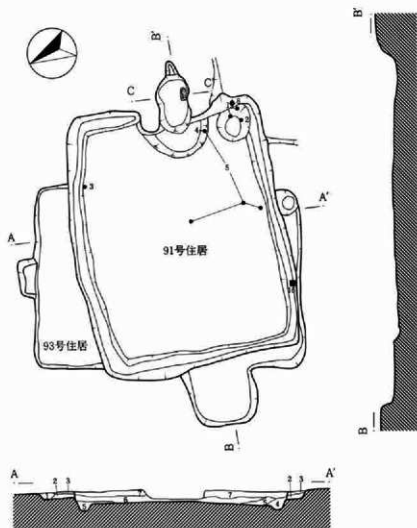
遺物は、貯蔵穴内から須恵器の高台部が出土している。

第91号住居跡 (第208・209図、図版53・75) 位置 II区35A-38グリッド

本住居跡は、南西部の上部が耕作による擾乱を受けているが、92・93号住居跡及び26号溝が廃棄された後に営まれており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、北辺がやや張り出すが比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向4.30m・南北方向3.40mを測り、床面積は12.1m²である。主軸方位はN-14°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高15~21cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの暗褐色土を客土して整地しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には径50~55cm・深さ30cmの截頭円錐状の貯蔵穴が穿たれており、内部から須恵器碗・蛇紋岩製の紡錘車が出土した。また、竈部分を除いて幅約15cm・深さ10cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴



1. 暗褐色土。F. A.・ローム粒を含む。
2. 褐色土。F. A.・ローム粒を含む。
3. 黒褐色土。F. A.を含む。
4. 黒褐色土。F. A.・焼土を含む。
5. 黒褐色土。F. A.・炭化物を含む。
6. 暗褐色土。B磁石・炭化物・ロームブロックを含む。
7. 淡褐色土。F. A.・ローム粒を含む。

第208図 第91・93号住居跡実測図

は検出されなかった。床面精査の結果、中央部が若干高くなってはいたが、特別な遺構は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から18cm程南寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。袖が30cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際に有る。焚口幅40cm・奥行72cmを測り、全長104cmを確認した。掘り方は二段になっており、火床面下には60×75cm・深さ17cmの隅丸方形の掘り込みが有り、内部には炭化物・焼土を多量に含む暗灰色土が詰まっていた。一段高くなった所から、灰白色粘土で天井部及び袖部を造ったものと考えられる。

遺物は、ほぼ全域に散らばって出土した。土器の他には、布目瓦・磁石・輪の羽口が出土している。

第93号住居跡（第208図、図版53） 位置 II区35A—38グリッド

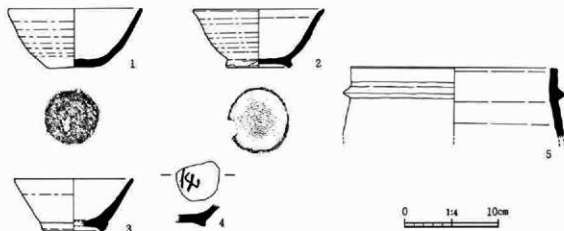
本住居跡は、前述の通り、耕作及び91号住居跡によって大部分が床面下まで壊されていた。遺存状態が芳しくなく、南北両端部を確認し得たに過ぎない。平面形は、南北方向が長い横長型で、南東部がやや歪むが比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.91m・南北方向4.21mを測り、床面積はおよそ12.3m²である。主軸方位はN-27°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高7~18cmのローム層の壁面を確認した。

床面はほぼ平坦で、比較的しっかりとしていた。周溝及び柱穴は検出されなかったが、南東隅に径約40cm・深さ13cmの貯蔵穴と考えられる穴が穿たれていた。床面精査の結果、特別な遺構は検出されなかった。

竈については全く手掛かりを欠くが、恐らくは東辺に構築されていたものと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したのみである。



第209図 第91号住居跡出土遺物実測図

第87表 第91号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 849	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 14.3cm 高 6.1cm 底 5.0cm	貯蔵穴中 3.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 摩耗のための底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 848	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.1cm 高 6.1cm 底 6.7cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 850	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 5.5cm 底 6.8cm	北東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②よい橙色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのための底部切り離し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 852	高台付碗 (須恵器)	小破片	北東部 8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 釈文「子前」
5 854	羽 蓋 (須恵器)	小破片 口 22.0cm	北東部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②淡黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 磨貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第92号住居跡 (第210~212図、図版54・75) 位置 II区33A-39グリッド

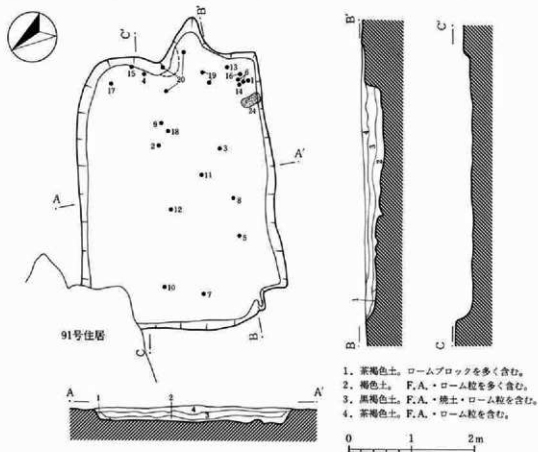
本住居跡は、北西部の一部が91号住居跡によって掘り取られてしまっていた。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、北辺及び南西隅がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向4.34m・南北方向2.92~3.22mを測り、主軸方位はN-29°-Eである。床面積は11.4㎡程と考えられる。

壁は、現状で25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高16~23cmのローム層の壁面を検出した。なお、南東部の一部の壁面は、風倒木痕があったために暗褐色土であった。

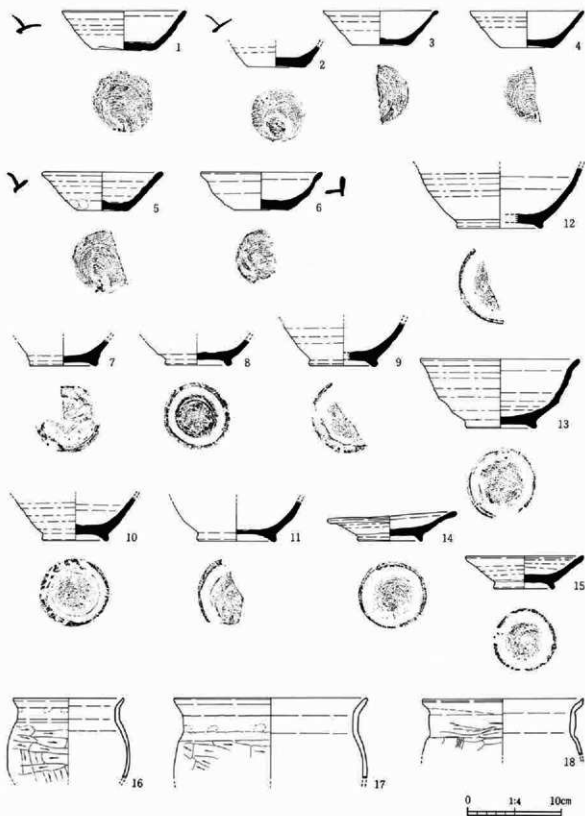
床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さで褐色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。床面下精査の結果、長径200cm・短径95cm・深さ20cmの不整形円形のピットを検出したが、性格は不明である。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から26cm程南寄りの位置に、灰白色粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部はちょうど壁際に有り、現状で長さ77cm程の大きさと考えられる。掘り方は不整形半円形で、径約20cm・深さ10cm前後のピットが3個認められた。

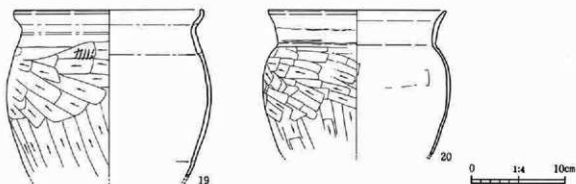
遺物は、竈周辺及び南東部に集中して出土した。南東隅から大型の砥石が出土したのが注目される。



第210図 第92号住居跡実測図



第211図 第92号住居跡出土遺物実測図(1)



第212図 第92号住居跡出土遺物実測図(2)

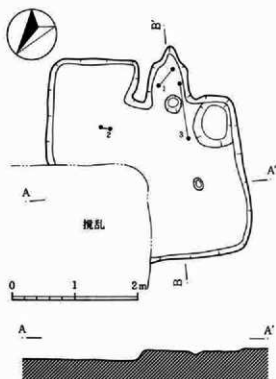
第88表 第92号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
855	1 坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.2cm 高 4.1cm 底 6.7cm	南東部 -5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内・外面に墨書有り。 戳文「人」
856	2 坏 (須恵器)	底部残存 底 6.0cm	北東部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	底部外面に粘土付着。
857	3 坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.5cm 底 6.0cm	南東部 -7.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
858	4 坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.2cm 高 5.6cm	北東部 6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
859	5 坏 (須恵器)	1/2残存 口 12.8cm 高 4.0cm 底 5.2cm	南西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色・黄灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 戳文「人」
860	6 坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.0cm 高 4.0cm 底 5.8cm	南東部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	体部内面に墨書有り。 戳文「人」
864	7 高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 7.2cm	南西部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
865	8 高台付椀 (須恵器)	底部残存 底 7.0cm	南西部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
867	9 高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 7.4cm	羅周辺 -24.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色・黄灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
868	10 高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 7.0cm	北西部 -8.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
861	11 高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 8.5cm	中央部 10.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
862	12 高台付椀 (須恵器)	1/2残存 底 9.2cm	中央部 19.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	

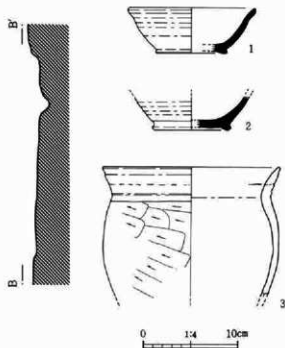
第4節 平安時代の住居と出土遺物

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
13 863	高台付轆 (須恵器)	ほぼ完形 □ 17.0cm 高 7.3cm 底 7.6cm	南東部 10.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
14 869	高台付皿 (須恵器)	ほぼ完形 □ 14.0cm 高 2.6cm 底 7.0cm	南東部 -6.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
15 870	高台付轆 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.7cm 高 3.5cm 底 6.5cm	北東部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
16 872	壺 (土師器)	1/2残存 □ 11.9cm	南東部 17.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部縦方向直削り。肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い菱ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 菱ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
17 873	壺 (土師器)	1/2残存 □ 20.8cm	北東部 -2.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い菱ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 菱ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
18 874	壺 (土師器)	1/2残存 □ 17.1cm	壺周辺 24.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い菱ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 菱ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
19 876	壺 (土師器)	1/2残存 □ 20.4cm	壺周辺 10.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下半縦方向直削り。体部上半～肩部横方向直削り。頸部粗い菱ナデ。口縁部横ナデ。 内面 菱ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
20 875	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.2cm	壺周辺 6.0cm	①砂粒を含む。 ②褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部下半縦方向直削り。体部上半～肩部横方向直削り。頸部粗い菱ナデ。口縁部横ナデ。 内面 菱ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第94号住居跡 (第213・214図、図版54・75) 位置 II区37A—36グリッド



第213図 第94号住居跡実測図



第214図 第94号住居跡出土遺物実測図

第II章 検出された遺構と遺物

本住居跡は、29号溝が廃棄された後に営まれたが、北西部がごみ穴による攪乱で壊されており、遺存状態が芳しくなかった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、東辺の竈以北が40cm程張り出した不整丸方形を呈する。規模は、東西方向2.50m・南北方向3.00mを測り、床面積は7.5㎡程になるとと思われる。主軸方位はN-46.5°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高5～14cmのローム層の壁面を検出した。

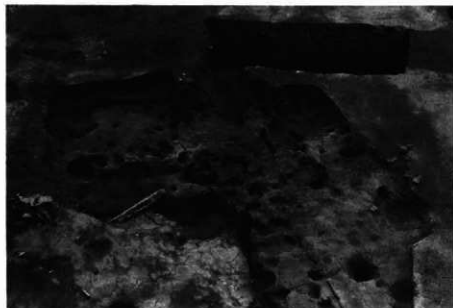
床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む褐色土を客土して整地しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には径60～72cm・深さ13cmの貯蔵穴が穿たれており、炭化物・焼土を多量に含む暗灰褐色土が詰まっていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、径40cm・深さ14cmのP₁を検出したが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から40cm程南寄りの位置に、角礫と灰褐色粘土を使用して構築されていた。左袖が70cm程張り出し、燃焼部は屋外に有る。焚口幅53cm・奥行84cmを測り、全長95cmを確認した。火床面の中央には、支石として利用した川原石2個が残っていた。掘り方は不整半円形で、火床面下には35×75cm・深さ10cmの長円形の窪みが認められた。

遺物は、ほぼ全域に散らばって出土した。

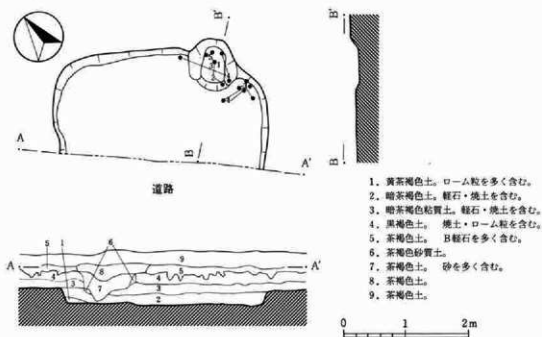
第89表 第94号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 877	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 13.6cm 高 4.8cm 底 7.6cm	竈周辺 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 878	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 8.4cm	北東部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
3 879	土 釜 (須恵器)	1/2残存 口 19.0cm	南東部 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	外面 体部斜め方向旋削り。胴部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

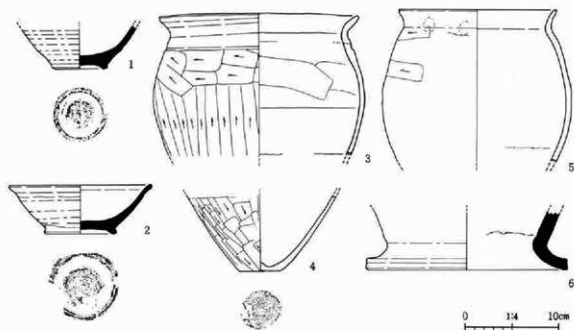


第98号住居跡 (第215・216図、図版54・76) 位置 II区15B—48グリッド

本住居跡は、南側が生活道路にかかっていたため未完掘である。平面形は、北辺に竈を持ち、各辺がやや膨らみを持った隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向3.45mを測り、南北方向は1.60mまで確認した。



第215図 第98号住居跡実測図



第216図 第98号住居跡出土遺物実測図

第11章 検出された遺構と遺物

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高5～11cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北辺の北東隅に、粘土を使用して構築されていた。袖が40cm程張り出し、燃焼部はちょうど壁際位置し、焚口幅38cm・奥行53cmを測り、全長67cmを確認した。火床面は6cm程窪んでおり、強く焼けていた。掘り方は、不整半円形に約10cm掘り窪めていたが、特別な遺構は認められなかった。

遺物はほぼ全域に散在して検出された。西側の床面上には工作台上に使用したと思われる偏平な石が据えられていた。

第90表 第98号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形 (須恵器)	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 880	高台付横 (須恵器)	1/2残存 底 5.8cm	竈周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
2 881	高台付横 (須恵器)	1/2残存 口 15.3cm 高 5.1cm 底 7.7cm	竈周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 971	土 釜 (須恵器)	1/2残存 口 21.4cm	竈周辺 -9.0cm	①砂粒・細塵を含む ②にぶい褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部縦方向削り。肩部横方向削り。頸部直ナデ。口縁部横ナデ。 内面 強い直ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 883	鉢 (須恵器)	1/2残存 底 4.3cm	竈周辺 -9.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③酸化炎・良好	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部斜め方向削り。 内面 回転によるナデ。	
5 882	壺 (須恵器)	1/2残存 口 16.8cm	竈周辺 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色 ③酸化炎・硬質	外面 体部削い直ナデ。口縁部横ナデ。 内面 直ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 884	甕 (須恵器)	1/2残存 底 21.4cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	

第99号住居跡 (第217・218図、図版54・76) 位置 II区10B-45グリッド

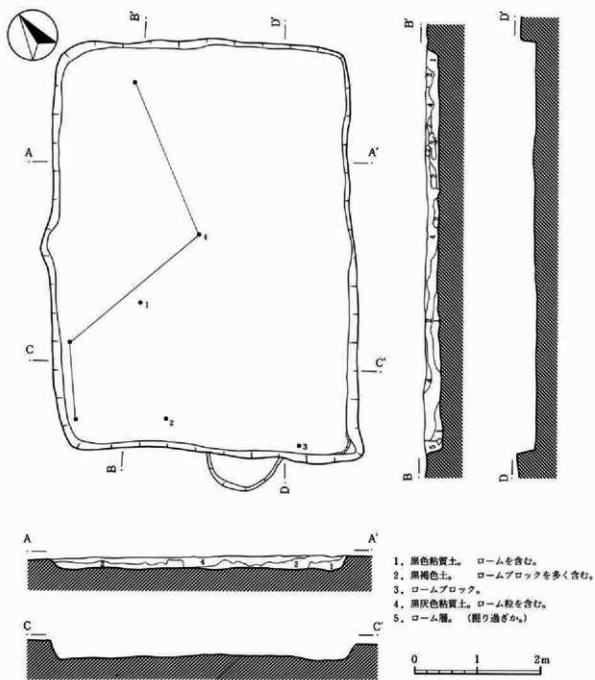
本住居跡は、28号溝及び耕作に伴うと考えられる土坑が重複していたが比較的良好な遺存状態であった。平面形は、南北方向が長く南東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向4.70～4.85m・南北方向6.50mを測り、床面積は29.2m²である。西辺の走向はN-31°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高21～30cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さで客土して整地して使用していたが、踏み締まりはさほど強くなかった。南東隅部に、僅かながら焼けた痕が認められたが、竈の痕跡とは考えにくい状況であった。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、壁際が窪んでおり、浅い落ち込みが認められたが、特別な遺構は検出されなかった。また、本住居は、覆土の状況から推して、かなり短時間の内に埋没したものと思われる。

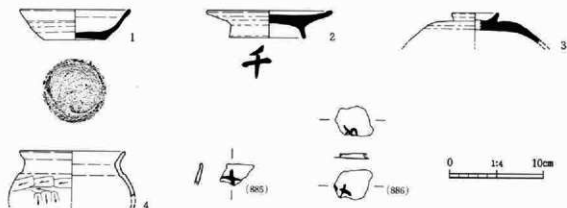
遺物は、南西部に集中して出土したが、細片が多かった。

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第217図 第99号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第218図 第99号住居跡出土遺物実測図

第91表 第99号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色③焼成	成・整形の特徴	備考
1 887	坏 (須惠器)	1/2残存 口 11.9cm 高 3.2cm 底 6.6cm	南西部 22.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 888	高台付皿 (須惠器)	1/2残存 口 13.5cm 高 2.8cm 底 8.1cm	南西部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「千」
3 889	蓋 (須惠器)	1/2残存 径 5.0cm	南西部 22.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 天井部回転整形有り。 内面 回転によるナデ。	
4 890	小型甕 (土師器)	1/2残存 口 11.4cm	南西部 床面直上	①砂粒を含む。 ②いり赤褐色 ③還元炎・良好	外面 体部縦方向整形有り。肩部横方向整形有り。肩部強い横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 底ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第103号住居跡(第219・220図、図版38・76) 位置 II区25B-39グリッド

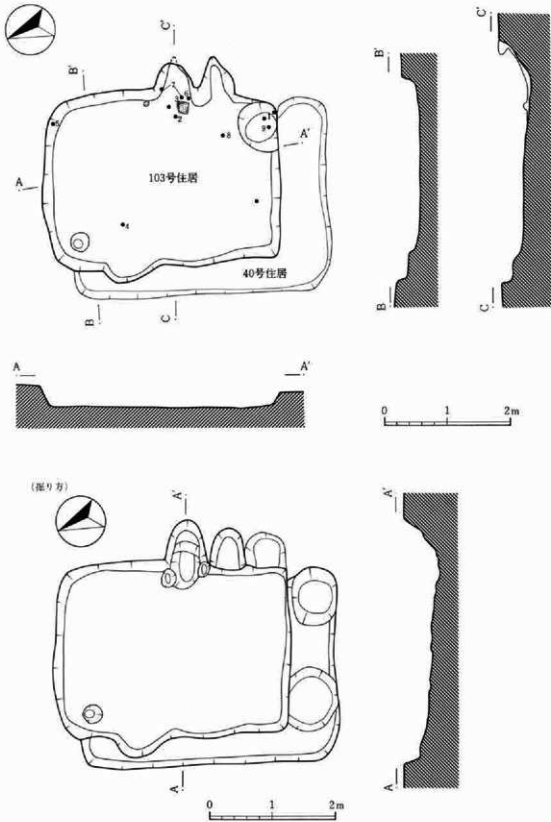
本住居跡は、南辺及び西辺の上部を40号住居跡によって壊されていたが、掘り込みが深かったために比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、西辺がやや歪んだ隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.75～3.05m・南北方向3.78mを測り、床面積は8.6㎡である。主軸方位はN-19°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高20～32cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約5cmの厚さで客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。南東隅には径80cm・深さ22cmの載頭円錐状の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器壺と須惠器杯が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。また、床面下精査の結果、径約30cm・深さ20cm前後の小ビット3個と、径70cm・深さ18cmの載頭円錐状のビットを検出したが、共に性格は不明である。

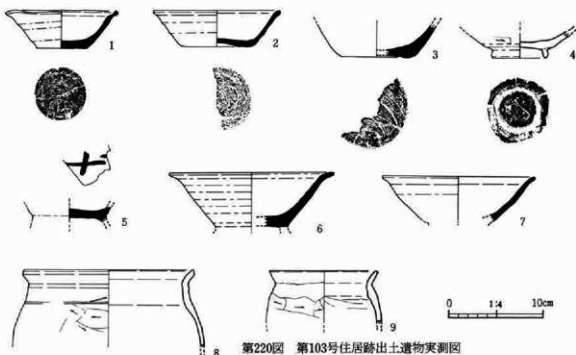
竈は、東辺の中央から27cm程南寄りの位置に、須惠器壺の破片と粘土を使用して構築されていた。焚口はちょうど壁際に有り、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出す。焚口幅50cm・奥行55cmを測り、全長78cmを確認した。火床面には炭と焼けた川原石2個が残っていた。掘り方は不整半円形で、10cm程窪んでいたが特別な遺構は認められなかった。

遺物は南東部に多くまとまって出土した。



第219図 第103号住居跡実測図

第II章 検出された遺構と遺物



第220図 第103号住居跡出土遺物実測図

第92表 第103号住居跡出土遺物観察表

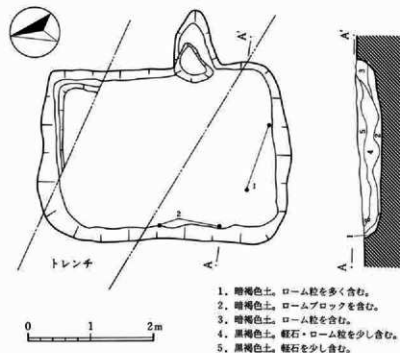
No	部種・器形	残存・法量	出土状況	胎土①・色調②・焼成③	成・整形の特徴	備考
1 515	環 (須恵器)	完形 口 12.0cm 高 4.0cm 底 5.4cm	南東部 -13.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	口唇部に沈 澱が認めら れる。
2 516	環 (須恵器)	1/2残存 口 13.7cm 高 3.8cm 底 6.8cm	竜周辺 5.0cm	①砂粒を含む。 ②浅黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
3 517	環 (須恵器)	1/2残存 底 8.0cm	竜周辺 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②淡褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。 内面 回転によるナデ。	
4 518	高台付碗 (須恵器)	下半部完存 底 6.0cm	北西部 2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化炎・硬質	外面 底部砂底。貼付け高台。体部直用り。 内面 寛ナデ後、丁寧なナデ。	
5 521	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 底 8.1cm	北東部 17.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(刺落) 内面 回転によるナデ。	底部内・外面 に墨書有 り。 釈文不明
6 1189	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 17.6cm	竜周辺 4.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(刺落) 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
7 1197	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 16.3cm	竜周辺 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②淡褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
8 523	壺 (土師器)	1/2残存 口 18.3cm	竜周辺 -13.0cm	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向直用り。頸部強い寛ナデ。口縁部 横ナデ。 内面 寛ナデ後、内面。口縁部横ナデ。	
9 522	壺 (土師器)	1/2残存 口 11.6cm	貯蔵穴中 -15.0cm	①砂粒を含む。 ②赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向直用り。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第110号住居跡 (第221・222図、図版55・76) 位置 VI区26D-47グリッド

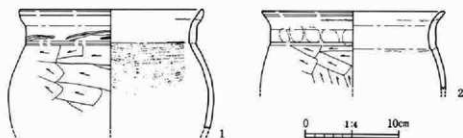
本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されたが、試掘調査によるトレンチによって中央部を削平してしまつたために、遺存状態が芳しくなかつた。平面形は、東辺に竈を持ち南北方向が長い横長型で、比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向2.75m・南北方向4.00mを測り、主軸方位はN-11°Eである。床面積は8.3m²である。

壁は30°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高20~49cmのローム層の壁面を検出した。東辺の中央部については、掘り方調査の結果によって推定線を記して参考とした。

床面には多少の凹凸が認められ、南側ののみ掘り方に約10cmの厚さで客土し、他は掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。なお、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかつた。また、床面下精査の結果でも特別な遺構は認められなかつた。



第221図 第110号住居跡実測図



第222図 第110号住居跡出土遺物実測図

第93表 第110号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 891	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.8cm	南東部 2.0cm	①砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部上半~肩部横方向削り。頸部強い窪ナデ。口縁部横ナデ。 内面 強い窪ナデ後、粗いナデ。口縁部横ナデ。	
2 892	壺 (土師器)	1/2残存 □ 19.6cm	南西部 21.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向削り。肩部横方向削り。頸部指節圧痕を強い窪ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 窪ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

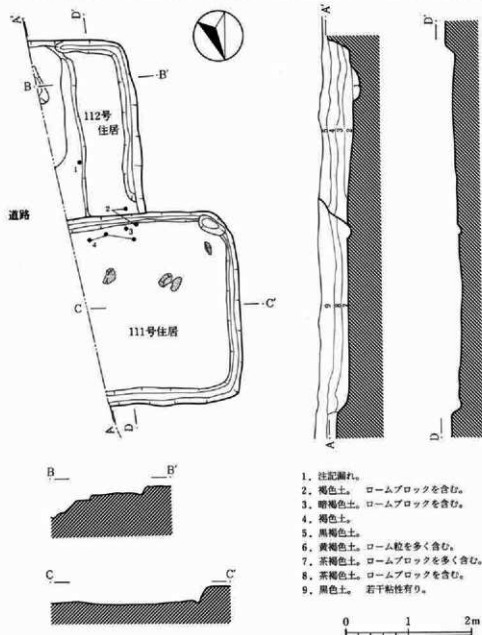
第II章 検出された遺構と遺物

竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていたと考えられるが、トレンチによって上半部を削り取ってしまったために、詳細は不明である。掘り方調査の結果、燃燒部は馬蹄形に壁外に張り出し、火床面下には径約65cm・深さ9cmの不整形の穴が穿たれており、暗褐色土が詰まっており、一部が焼土化していた。

遺物は、西及び南の壁際に散在して出土した。

第111・112号住居跡 (第223・224図、図版55) 位置 VI区23D-31グリッド

両住居跡共に、東半部が生活道路にかかっていたため未完掘である。先後関係は、土層断面に明らかなように、112号住居→111号住居の順である。111号住居跡の平面形は、南西部がやや歪むが、東西方向が長い間



第223図 第111・112号住居跡実測図

丸方形を呈すると考えられる。

壁は、現状で20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高17～19cmのローム層の壁面を検出した。(土層断面の観察では24cmまで確認できたが、南壁の一部については調査手順の関係から残し得なかった。)

床面は中央部が若干窪んでいたが、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。確認された範囲内においては、各壁下に、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は、南半部に集中して出土した。布目瓦が多く検出されたことが注目される。

第112号住居跡

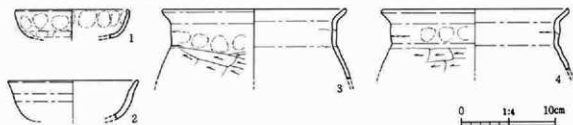
本住居は、前述の通り、未完掘である上に111号住居跡によって掘り壊されてしまっていたため、遺存状態が極めて悪かった。平面形は、他の遺構の様相から推して、東西方向が長い隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西方向1.55m・南北方向2.25mの範囲まで確認できた。

壁は30°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高10～13cmのローム層の壁面を検出した。

床面は、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に凹凸が認められた上に東側が4cm程低くなっていた。全体的に踏み締まりは弱く、西辺から南辺にかけて、幅約15cm・深さ5cm前後の周溝が「L」字状に巡っていた。また、発掘調査地の境界部分にピットが穿たれていたが、詳細は不明である。(土層断面の記録では、本住居に先行しないしは伴うものであることになっている。)なお、確認された範囲内においては柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

出土遺物は少なく、土師器杯及び須恵器杯の底部破片が4点検出されたのみである。



第224図 第111・112号住居跡出土遺物実測図

第94表 第111・112号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法址	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 893	杯 (土師器)	1/2残存 口 12.3cm	北西部 4.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部手持り寛削り。体部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 894	杯 (土師器)	小破片 口 14.0cm	南西部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部粗いナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。	
3 895	壺 (土師器)	小破片	南東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向寛削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 896	壺 (土師器)	小破片	南東部 2.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向寛削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	

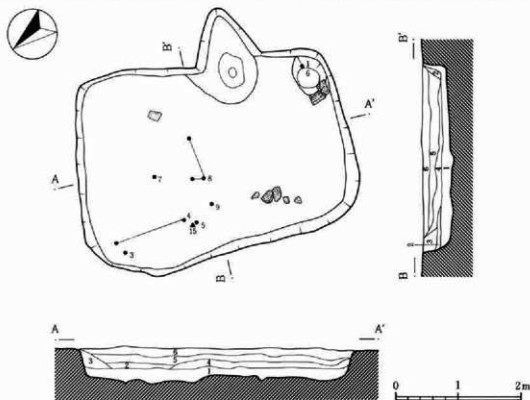
第II章 検出された遺構と遺物

113号住居跡 (第225・226図、図版56・76) 位置 VI区17D-40グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち各辺共に若干の歪みが有る横長型で、西側が開く隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向4.00～4.50m・南北方向2.65～3.25mを測り、床面積は11.4m²である。主軸方位はN-30°-Eである。

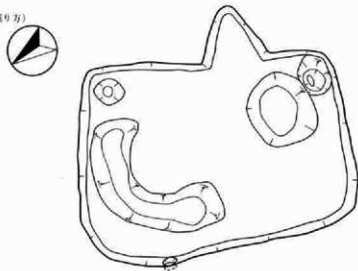
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高24～31cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む褐色土を客土して整地して使用



- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1. 茶褐色土。ロームブロックを多く含む。(掘り方埋土) | 4. 暗灰褐色土。若干粘性有り。 |
| 2. 淡褐色土。ローム粒を含む。 | 5. 暗灰褐色土。ローム粒を含む。 |
| 3. 黄褐色土。ローム粒を多く含む。 | 6. 褐色土。F.A.・ローム粒を含む。 |

(掘り方)

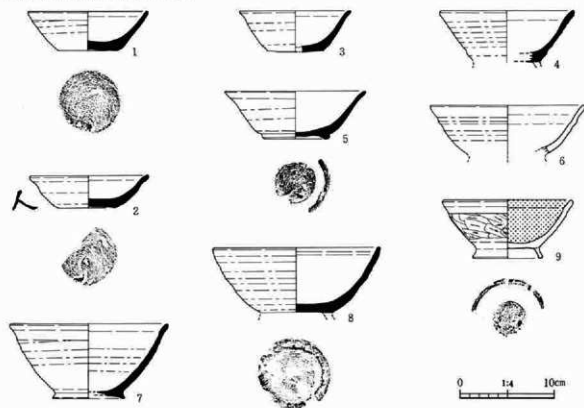


第225図 第113号住居跡実測図

しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には長径70cm・短径50cm・深さ24cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、南東部において100×120cm・深さ12cmの隅丸方形のピットを検出した。

竈は、東辺の中央から25cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部はちょうど壁際に有る。現状で壁外に40cm程張り出す。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。床面に密着した状態で焼石が8個出土したが、恐らくは竈に使用されていたものと思われる。分散状態から推して、住居の廃棄に当たって、意図的に竈を壊したものと考えられる。他に、刀子が出土している。



第226図 第113号住居跡出土遺物実測図

第95表 第113号住居跡出土遺物観察表

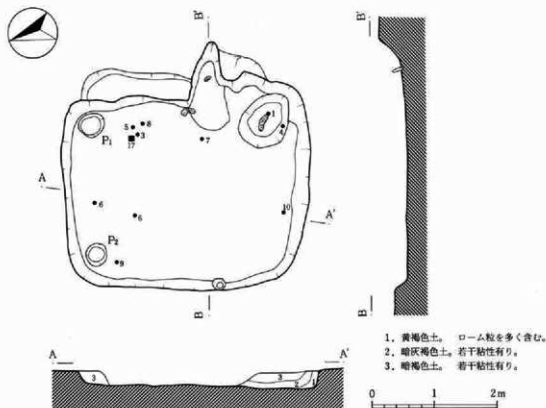
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 897	環 (須恵器)	写残存 口 13.0cm 高 4.1cm 底 6.4cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロタロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 898	環 (須恵器)	写残存 口 12.8cm 高 3.5cm 底 6.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロタロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端削い紋り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	体部外面に 墨書有り。 釈文「人」
3 899	環 (須恵器)	写残存 口 11.9cm 高 4.3cm 底 6.0cm	北西部 16.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白・黒褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロタロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端削い紋り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
4 900	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 14.4cm	北西部 12.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(割落)口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 901	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 15.2cm 高 5.1cm 底 7.2cm	北西部 4.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 905	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 16.6cm	貯蔵穴中 5.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
7 902	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 17.1cm 高 7.9cm 底 7.7cm	北西部 床面直上	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
8 903	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 18.0cm	中央部 -1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炎・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。(割落)口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
9 904	高台付椀 (須恵器)	片残存 □ 13.9cm 高 6.2cm 底 7.5cm	北西部 1.0cm	①砂粒を多く含む。 ②褐色 ③還元炎・硬質	外面 底部砂盛。貼付け高台。体部削削り。口縁部横ナデ。 内面 黒色処理。磨き。口縁部横ナデ。	

第114号住居跡 (第227・228図、図版56・77) 位置 VI区20D-44グリッド

本住居跡は、試掘調査時のトレンチにより東壁の上半部を一部壊してしまっていたが、全体としては重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に應を持ち南北方向が長い



第227図 第114号住居跡実測図

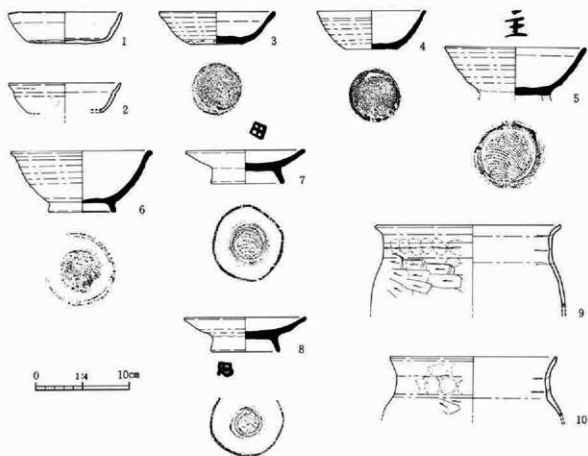
横長型で、南北両辺がやや歪んだ隅丸方形を呈する。(東辺の竈以北の張り出しについては、棚状施設の可能性も考えられるが、明確にし得なかった。)規模は、東西方向2.90~3.02m・南北方向3.90mを測り、床面積は9.7㎡である。主軸方位はN-18.5°-Eである。

壁は、現状で25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高18~33cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められるが、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、長径95cm・短径75cm・深さ30cmの長円形の穴が穿たれており、土師器杯・須恵器杯各1個及び焼石が出土した。覆土はローム粒を含む暗褐色土であり、貯蔵穴と考えられる。北辺の東西両端には、2個の円形ピットが検出された。P₁は径約40cm・深さ20cm、P₂は径35cm・深さ10cmを測るが、いずれも性格は不明である。本住居よりも後の所産である可能性が高い。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から47cm程南寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。右袖部は明確にし得なかったが、焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は「Uの字」状に壁外に張り出す。火床面の中央部には、支脚に使用した石が立てられたまま残っていた。また、火床面の下には、長径90cm・短径70cm・深さ15cmの長円形の窪みがあり、焼土粒・ロームブロックを含む暗褐色土が詰まっていた。左袖には砂岩の加工材が崩れた状態で残っており、焚口幅40cm・奥行80cm程の大きさになると考えられる。

出土遺物は少ないが、ほぼ全域に散らばって出土した。



第228図 第114号住居跡出土遺物実測図

第96表 第114号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 906	坏 (土器器)	ほぼ完形 □ 12.2cm 高 3.2cm	貯蔵穴中 -14.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち荒削り。底部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 907	坏 (土器器)	1/2残存 □ 12.0cm 高 3.2cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②に白い褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 908	坏 (須恵器)	ほぼ完形 □ 12.4cm 高 3.4cm 底 5.5cm	北東部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り未調整。体部下端手持ち荒削り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
4 909	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 11.7cm 高 4.0cm 底 5.4cm	貯蔵穴中 -10.0cm	①砂粒を含む。 ②灰黄褐色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り未調整。体部下端削い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 910	高台付椀 (須恵器)	高台部欠損 □ 15.0cm	北東部 -1.0cm	①ほぼ均質 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り後、高台貼付け。(剥落) 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「主」
6 911	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 15.1cm 高 6.4cm 底 7.2cm	北西部 -2.0cm	①砂粒・細礫を含む。 ②に白い褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
7 912	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 □ 12.8cm 高 3.5cm 底 7.8cm	龍馬辺	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「田」
8 913	高台付皿 (須恵器)	1/2残存 □ 13.0cm 高 3.6cm 底 7.4cm	北東部 -2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転永切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「田」
9 914	甕 (土器器)	小破片	北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②に白い褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向荒削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
10 915	甕 (土器器)	小破片	南西部 12.0cm	①砂粒を含む。 ②に白い褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向荒削り。頸部指頭圧痕を粗い荒ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 荒ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

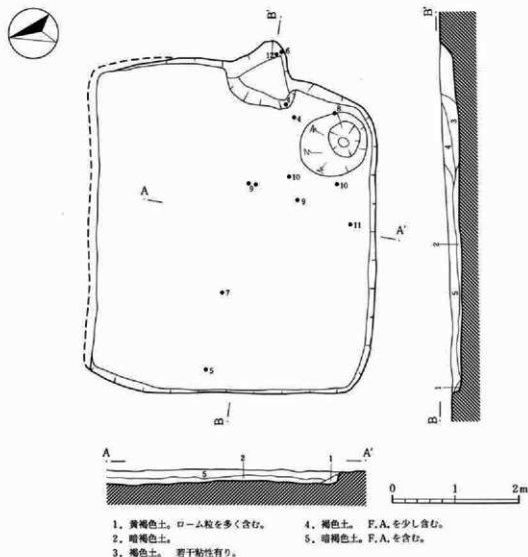
第115号住居跡 (第229～231図、図版56・77) 位置 VI区40D-17グリッド

本住居跡は、北側が移転前の民家の敷地にかかっていたために北壁の上端を明らかにし得なかったが、比較的良好的な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち東西方向が長い縦長型で、東辺がやや張り出した隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向5.20m・南北方向4.45mを測り、床面積は21.4㎡である。主軸方位はN-12°-Eである。

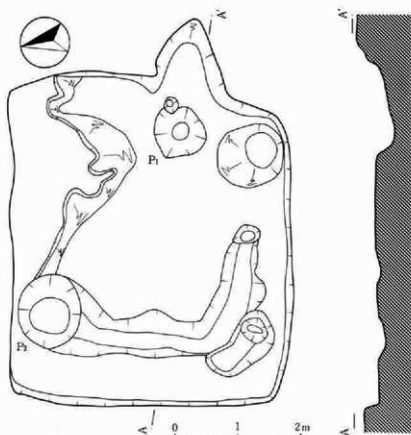
壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高約30cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームブロックを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には長径110cm・短径100cm・深さ32cmの長円形の貯蔵穴が穿たれていた。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。床面下精査の結果、2個のピットと深さ10cm程の不整形の落ち込みを検出した。P₁は径約90cm・深さ17cm、P₂は径125cm・深さ23cmを測るが、性格は不明である。

竈は、東辺の中央から50cm程南寄りの位置に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかつ



第229図 第115号住居跡実測図



第230図 第115号住居跡掘り方実測図

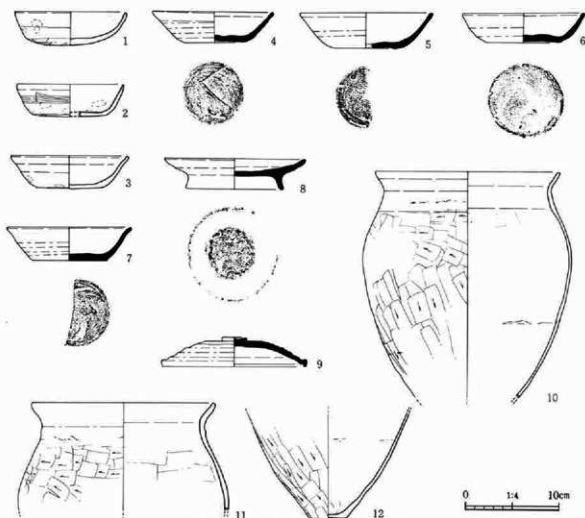
たが、燃焼部はちょうど壁際に有る。火床面は4cm程窪んでおり、下部には径約80cm・深さ19cmの円形ピットP₂が認められた他は特別な遺構は検出されなかった。

遺物はほぼ全域に散在して出土した。

第97表 第115号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法址	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 916	坏 (土器器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.5cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②明褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 股ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 918	坏 (土器器)	1/2残存 口 11.5cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 股ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 917	坏 (土器器)	1/2残存 口 12.7cm 高 3.5cm	電周辺	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持り置削り。体部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 股ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 919	坏 (須恵器)	ほぼ完形 口 13.0cm 高 3.2cm 底 6.5cm	電周辺 2.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
5 920	坏 (須恵器)	1/2残存 口 14.2cm 高 4.7cm 底 6.6cm	北西部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②灰オリーブ ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
6 921	坏 (須恵器)	1/2残存 口 13.1cm 高 3.1cm 底 7.8cm	電周辺 25.0cm	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端削り・絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第231図 第115号住居跡出土遺物実測図

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
7 922	坏 (須恵器)	5/残存 口 13.3cm 高 3.5cm 底 8.0cm	中央部 3.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転口クロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
8 923	高台付皿 (須恵器)	5/残存 口 15.2cm 高 3.2cm 底 10.6cm	南東部 25.0cm	①砂粒を含む。 ②におい橙色 ③還元炭・やや軟質	右回転口クロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 924	蓋 (須恵器)	5/残存 口 15.3cm 高 3.0cm 底 2.6cm	中央部 3.0cm	①砂粒・細糠を含む ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転口クロ整形。 外面 天井部回転覆削り。積み貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	口唇部笠状 工具による ナデ。
10 925	壺 (土師器)	5/残存 口 19.6cm	南東部 1.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向覆削り。肩部縦方向覆削り。頸部指頭圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
11 927	壺 (土師器)	5/残存 口 19.7cm	南東部 8.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 肩部縦方向覆削り。頸部指頭圧痕を粗い篋ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
12 926	壺 (土師器)	5/残存 底 3.8cm	覆面辺 2.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部覆削り。体部縦方向覆削り。 内面 篋ナデ後、ナデ。	

第116号住居跡 (第232・233図、図版56・77) 位置 VI区28D-40グリッド

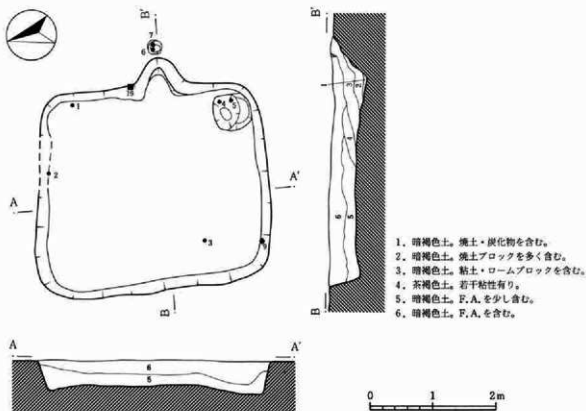
本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に竈を持ち、南北方向が長い横長型で、北西隅がやや乱れた隅丸不整形を呈する。規模は、東西方向2.12~2.18m・南北方向2.26~2.45mを測り、床面積は9.7㎡である。主軸方位はN-11°-Eである。

壁は、上半部はやや崩れてしまっているが、ほぼ垂直に掘り込まれており、現存高37~50cmのローム層の壁面を検出した。なお、北壁の一部がやや張り出したようになっていたが、図面記録に残せなかった。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部が4cm程高くなっていたが、掘り方をそのまま整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には55×60cm・深さ27cmの隅丸方形の穴が穿たれており、内部から須恵器碗2個体が出土した。覆土の記録は残されていないが、全体の様相から推して、貯蔵穴と考えられる。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

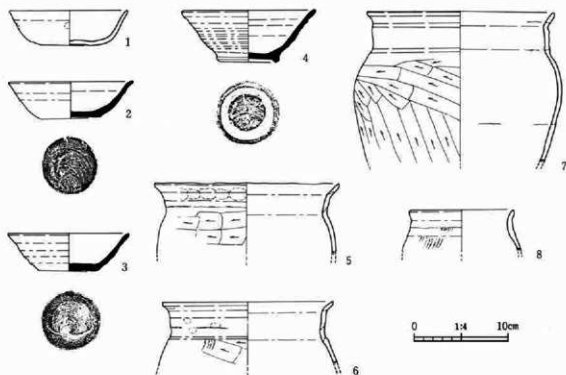
竈は、東辺のほぼ中央部に、粘土を使用して構築されていた。竈の先端部を明確にし得なかったが、現状では焚口はちょうど壁際に有り、燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出す。火床面は約6cm窪んでおり、特別な掘り方は無かったが、火床面下には長径95cm・短径65cm・深さ23cmの長円形の掘り込みが有り、焼土粒を多量に含む暗黄褐色土が詰まっていた。燃焼部からは約60°の傾斜で45cm程立ち上がり、煙道部に至る。煙道部には土師器甕を逆さに伏せて補強材として使用していた。焚口幅50cm・奥行80cm程の大きさになるものと考えられる。

出土遺物は少ないが、ほぼ全域に散らばって出土した。なお、南西部からは、榛名山二ツ岳給源の軽石製紡錘車が検出されている。他に、磁石・刀子が出土している。



第232図 第116号住居跡実測図

第4節 平安時代の住居と出土遺物



第233図 第116号住居跡出土遺物実測図

第98表 第116号住居跡出土遺物観察表

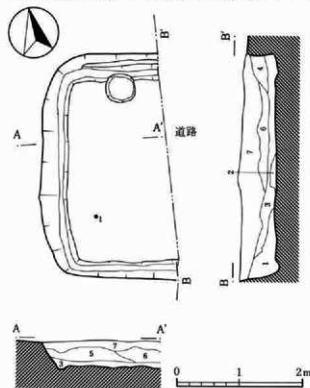
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①粘土②色調③構成	絞・整形の特徴	備考
1 928	環 (土師器)	1/2残存 口 12.6cm 高 3.6cm 底 6.0cm	北東部 7.0cm	①砂粒を少し含む。 ②橙・黒褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部を持ち覆削り。肩部指面圧痕を粗い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
2 929	環 (須恵器)	完形 口 13.3cm 高 3.7cm 底 6.4cm	北東部 8.0cm	①砂粒を少し含む。 ②淡黄色 ③還元炭・硬質	右回転ククロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
3 930	環 (須恵器)	1/2残存 口 13.1cm 高 3.9cm 底 6.3cm	南西部 5.0cm	①砂粒を含む。 ②黒色 ③還元炭・硬質	右回転ククロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端倒い絞り込み。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
4 931	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.3cm 高 5.4cm 底 5.8cm	貯蔵穴中 9.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元炭・やや軟質	右回転ククロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付。口縁部横ナゲ。 内面 回転によるナゲ。口縁部横ナゲ。	
5 933	壺 (土師器)	小破片 口 19.8cm	貯蔵穴中 3.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向削削り。頸部指面圧痕を粗い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
6 935	壺 (土師器)	小破片 口 18.4cm	甕周辺 24.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向削削り。頸部指面圧痕を粗い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	口唇部に沈線が認められる。
7 972	壺 (土師器)	1/2残存 口 20.0cm	甕周辺 24.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 体部縦方向削削り。肩部横方向削削り。頸部指面圧痕を粗い寛ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
8 934	壺 (土師器)	1/2残存 口 11.2cm	甕周辺	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化炭・良好	外面 肩部横方向削削り。頸部へ口縁部横ナゲ。 内面 寛ナゲ後、丁寧なナゲ。口縁部横ナゲ。	

第117号住居跡 (第234・235図、図版57) 位置 VI区14D-42グリッド

本住居跡は、東半部が生活道路にかかっていたため未完掘である。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈すると思われる。規模は、南北方向3.53mを測り、東西方向は西壁から2.10mの範囲まで確認した。西辺の走向はN-13.5°-Eである。

壁は、現状で25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高32~43cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。壁下には幅15cm前後・深さ約4cmの周溝が巡っていた。北西隅には径46cm・深さ44cmの円筒状の穴が穿たれていたが、性格は不明である。確認された範囲内においては柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

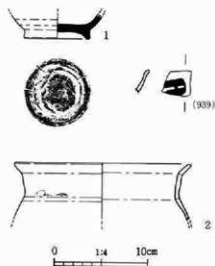


1. 暗褐色土。ロームブロックを含む。
2. 注記漏れ。
3. 暗褐色土。ロームブロックを少し含む。
4. 暗褐色土。ローム粒を含む。
5. 黄褐色土。ローム粒を多く含む。
6. 黒褐色土。ローム粒を含む。
7. 黒褐色土。軽石・ロームブロックを少し含む。

第234図 第117号住居跡実測図

竈については全く資料が欠く。

遺物は、鑿と考えられる鉄製品と須恵器碗の底部破片が1点出土したのみである。



第235図 第117号住居跡出土遺物実測図

第99表 第117号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 938	高台付碗 (須恵器)	底部残存 底 7.1cm	北西部 2.0cm	①胎土②色調③焼成 ①砂粒を少し含む。 ②にふい黄褐色 ③還元炎・やや軟質	右回転クワ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
2 940	壁 (上部器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②にふい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向用形。頸部指頭圧痕を粗い瓦ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 瓦ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

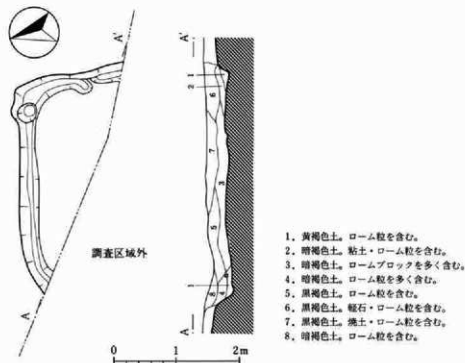
第118号住居跡(第236図) 位置 VI区20D-46グリッド

本住居跡は、両側が生活道路にかかっていたため未完掘であり、北辺及び東辺の一部を検出したにとどまっていた。平面形は、北・東辺共にやや歪んだ隅丸方形を呈すると思われる。

壁は25°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高13~17cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方をそのまま整地して使用しており、中央部が若干高くなっていた。壁下には幅15~20cm・深さ5cm前後の周溝が巡っていた。なお、確認された範囲内においては柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。また、遺物も全く出土していない。



第236図 第118号住居跡実測図

第120号住居跡(第237・238図、図版78) 位置 IV区29D-26グリッド

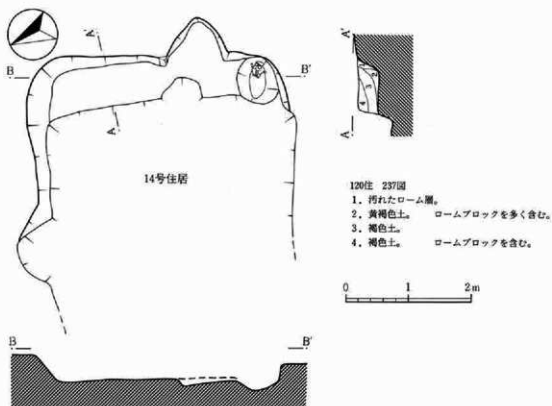
本住居跡は、殆どが114号住居跡によって掘り取られてしまっていたために、極めて部分的な遺存状態であった。規模は、南北方向4.10mを測り、東西方向は東壁から98cmの範囲まで確認した。東辺の走向はN-26°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高28~42cmのローム層の壁面を検出した。

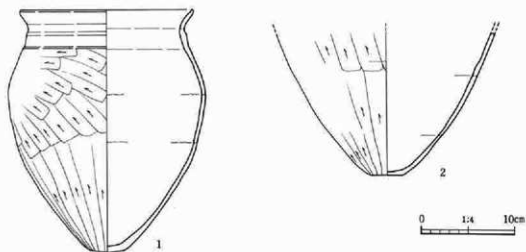
床面はほぼ平坦で、掘り方をそのまま整地して使用しており、強く踏み締められていた。南東隅には、長径75cm・短径60cm・深さ12cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から土師器甕が押し潰された状態で出土した。なお、確認された範囲内においては、周溝及び柱穴は検出されなかった。

竈は、東辺の中央から70cm程南寄りの位置に、砂岩の加工材と粘土を使用して構築されていた。左袖部には加工石材が立てられたまま残っていたが、焼け込みが弱かったためにやや掘り過ぎた可能性がある。現状で、焚口幅90cm・奥行65cmを測る。

遺物は、土師器杯・甕が各1個体出土したのみである。



第237図 第120号住居跡実測図



第238図 第120号住居跡出土遺物実測図

第100表 第120号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 1022	壺 (土師器)	1/2残存 口 18.5cm 高 25.6cm 底 3.6cm	壺周辺	①胎土を含む。 ②にふい褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部直削り。体部下半縦方向直削り。体部上半斜め方向直削り。肩部横方向直削り。頸部指頭圧痕を粗い篦ナゲで消す。口縁部横ナゲ。 内面 篦ナゲ後、ナゲ。口縁部横ナゲ。	
2	壺 (土師器)	1/2残存 高 3.5cm	壺周辺	①砂粒を含む。 ②にふい褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部直削り。体部下半縦方向直削り。 内面 篦ナゲ後、ナゲ。	

第121号住居跡 (第239・240図、図版57・78) 位置 III区41B-31グリッド

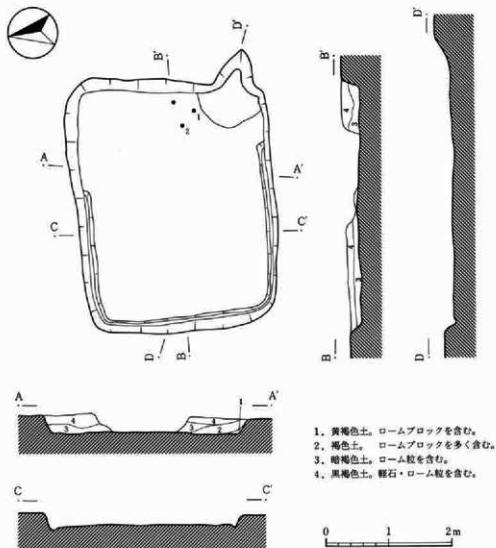
本住居跡は、北東部に95号土坑が重複していたが、比較的良好な遺存状態であった。平面形は、東西方向が長い縦長型で、北東部がやや歪むが比較的均整のとれた隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.98m・南北方向3.14mを測り、床面積は10.7m²である。主軸方位はN-7.5°-Eである。

壁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高15~35cmのローム層の壁面を検出した。

床面はほぼ平坦で、掘り方に約10cmの厚さでロームを多量に含む黄褐色土を客土して整地して使用しており、全面に亘って強く踏み締められていた。東半部を除いた壁下には、幅約10cm・深さ2cm前後の周溝が巡っていた。また、床面下の精査の結果でも特別な遺構は認められなかった。

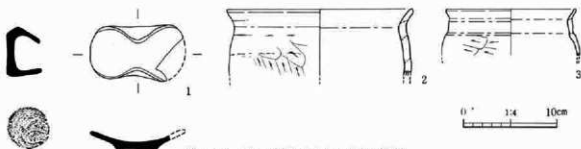
竈は、東辺の南東隅に、粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部が馬蹄形に壁外に張り出し、火床面が若干窪んでいた。火床面下には、長径65cm・短径50cm・深さ約15cmの長円形の掘り込みが有り、焼土を多量に含む黄褐色土が詰まっていた。焼土・灰の分布状況から推して、袖がやや張り出し、焚口幅40cm・奥行60cm程の大きさになると考えられる。

出土遺物は少なく、竈前面に集中して出土した。耳皿は東壁際にずり落ちたような状態で検出された。



第239図 第121号住居跡実測図

第11章 検出された遺構と遺物



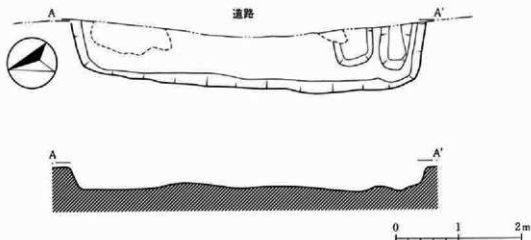
第240図 第121号住居跡出土遺物実測図

第101表 第121号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
1 942	耳 (須恵器)	1/2残存 口 10.1cm 高 3.6cm 底 4.3cm	甕周辺 14.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 944	壺 (土師器)	小破片	甕周辺 21.0cm	①砂粒を含む。 ②にぶい黄褐色 ③還元灰・硬質	外面 体部縦方向両削り。肩部～頸部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 943	小型 壺 (土師器)	小破片	不詳	①砂粒を含む。 ②にぶい褐色 ③還元灰・良好	外面 肩部横方向両削り。頸部指頭圧痕を粗い横ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第122号住居跡(第241・242図) 位置 III区30B-38グリッド

本住居跡は、III区の南東部に位置しており、東側が生活道路にかかっていたため未完掘である。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、南北方向5.50m・東西方向0.94mを確認した。西辺の走向はN-18°-Eである。



第241図 第122号住居跡実測図



第242図 第122号住居跡出土遺物実測図

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高18～30cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、中央部がややこんもりとしていた。南北の壁際には焼土の分布が認められたが、床面精査の結果でも掘り方をそのまま整地して使用しており、特別な遺構は検出されなかった。覆土及び全体の様相から推して、焼失家屋の可能性が考えられる。また、南壁際には深さ17cm程の落ち込みが2箇所あったが性格は不明である。確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

竈については全く資料を欠く。

遺物は、覆土中から土師器・須恵器の細片が出土したが、実測に耐えられるような接合関係は得られなかった。比較的大きい破片を図化した。

第102表 第122号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 947	罎 (土師器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②にぶい橙色 ③酸化灰・硬質	外面 体部斜め方向篋削り。肩部横方向篋削り。頸部～口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 948	坏 (須恵器)	小破片	覆土中	①砂粒を含む。 ②褐色 ③還元灰・硬質	右回転クロ整形。 外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明

第124号住居跡（第243～245図、図版57・78） 位置 VI区38D-9グリッド

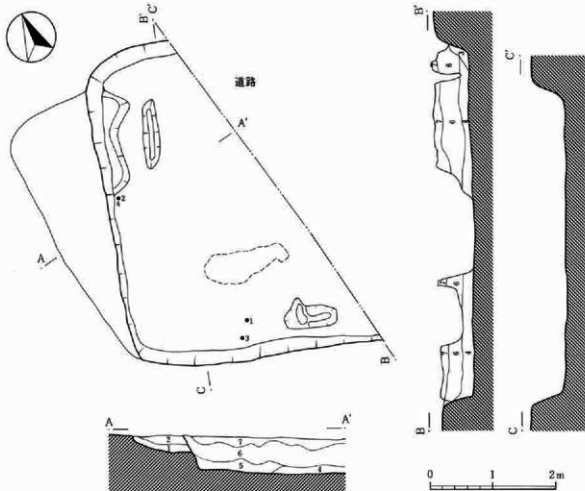
本住居跡は、東側が生活道路にかかっていたため、未完掘である。また、ゴミ穴が多数重複していた。平面形は、南辺がやや歪んだ隅丸方形を呈すると思われる。規模は、南北方向5.70mを測り、東西方向は西壁から3.90mの範囲まで確認した。西壁の走向はN-12°-Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高49～52cmのローム層の壁面を検出した。

床面には多少の凹凸が認められ、周辺部のみ掘り方に約5cmの厚さで褐色土を客土して整地して使用しており、全面に互って強く踏み締められていた。西と南に浅い窪みが認められ、南側には長さ140cm・高さ15cmの焼土の高まりが見られた。なお、確認された範囲内においては、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。床面下精査の結果、幅約20cm・深さ10cm前後の溝が三重に巡っており、中央部には径120cm・深さ16cmの不整形の穴が認められた。

竈については全く資料を欠く。

遺物は全体に散在して出土したが、少量であった。

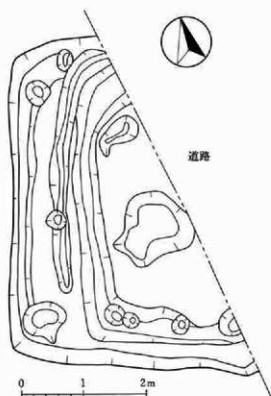


1. 注記漏れ。
2. 注記漏れ。
3. 褐色土。ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色土。F.A.・焼土・炭化物・ローム粒を含む。
5. 暗褐色土。F.A.・ローム粒を含む。
6. 暗褐色土。F.A.を含む。
7. 黒色土。B軽石を含む。

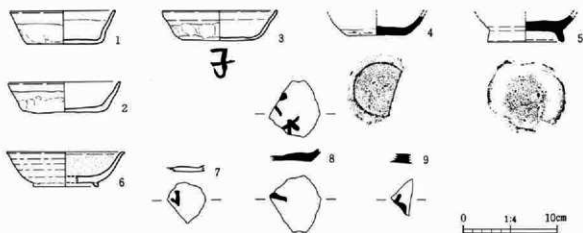
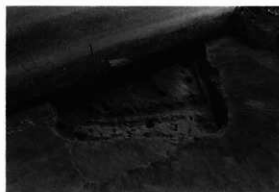
第243図 第124号住居跡実測図

第103表 第124号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 949	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 11.3cm 高 3.5cm 底 8.3cm	南西部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち蔑削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
2 950	坏 (土師器)	口縁部欠損 口 12.0cm 高 3.1cm 底 8.5cm	北西部 床面直上	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち蔑削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
3 951	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.2cm	南西部 3.0cm	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち蔑削り。体部指頭圧痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	底部外面に墨書有り。 釈文「子」
4 952	坏 (須恵器)	1/2残存 高 6.2cm	北西部 床面直上	①砂粒を含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ製形。 外面 底部部転赤切り未調整。体部下端手持ち蔑削り。 内面 回転によるナデ。	



第244図 第124号住居跡掘り方実測図



第245図 第124号住居跡出土遺物実測図

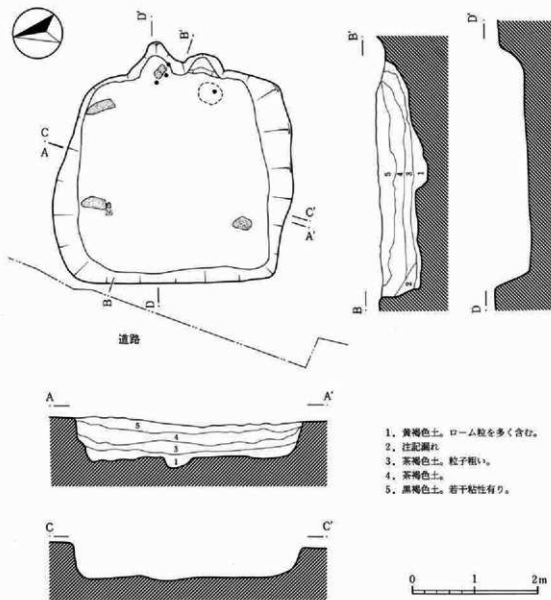
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
5 963	高台付碗 (須恵器)	底部完存 底 8.1cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	
6 1199	高台付碗 (灰胎陶器)	口残存 口 12.6cm 高 3.7cm	覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転器周り。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第125号住居跡 (第246~248図、図版57・78) 位置 VI区44D-14グリッド

本住居跡は、重複遺構が無く単独で検出されており、良好な遺存状態であった。平面形は、東辺に壘を持ち、北東部がやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は、東西方向3.35m・南北方向3.50mを測り、床面積は8.8㎡である。主軸方位はN-8°-Eである。なお、本住居は建て替えが行われた可能性が大きい。

壁は15°前後の傾斜を以て掘り込まれており、現存高43~57cmのローム層の壁面を検出した。なお、南北の壁面は、床面から約10cm上部に段を持っていた。

床面には多少の凹凸が認められ、掘り方に約10cmの厚さで黄褐色土を客土して整地して使用しており、ほぼ全面に互って強く踏み締められていた。南東隅には、径30~35cm・深さ35cmの長円形の貯蔵穴が穿たれており、内部から遺物が出土したが所在不明になってしまった。床面下精査の結果、中央部において径105~120cm・深さ27cmの不整形形のピットを検出した。内部から土師器壺の口縁部破片が出土した。なお、周溝及び柱穴は検出されなかった。

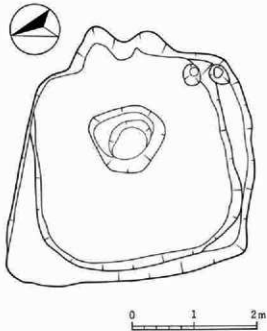


第246図 第125号住居跡実測図

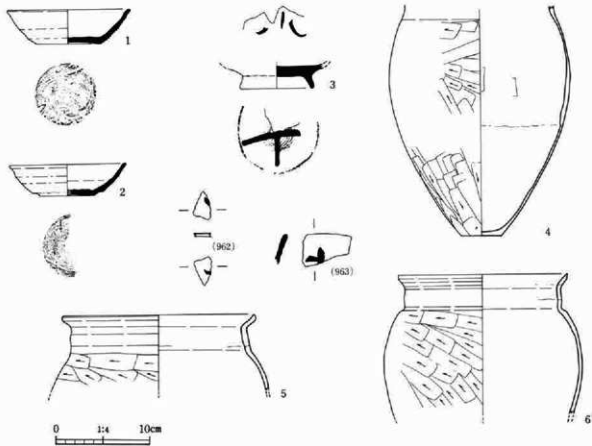
第4節 平安時代の住居と出土遺物

竈は、東辺の中央から20cm程北寄りの位置に、川原石と粘土を使用して構築されていた。袖部を明確にし得なかったが、燃焼部はちょうど壁際に有る。更に、これと接するように別の竈痕が確認された。

遺物は、南東部に集中する傾向が認められたが、量的には少なかった。



第247図 第125号住居跡掘り方実測図



第248図 第125号住居跡出土遺物実測図

第104表 第125号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 959	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 13.2cm 高 3.6cm 底 6.8cm	甕周辺 28.0cm	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 960	坏 (須恵器)	1/2残存 □ 12.4cm 高 3.3cm 底 5.8cm	覆土中	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
3 961	高台付椀 (須恵器)	1/2残存 □ 10.3cm 底 8.0cm	覆土中	①砂粒を含む。 ②淡黄色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文不明
4 964	甕 (土師器)	1/2残存 底 4.2cm	甕周辺 14.0cm	①砂粒を含む。 ②明赤褐色 ③酸化炎・良好	外面 底部削り。体部下半縦方向削り。体部上半斜め方向削り。肩部横方向削り。 内面 罫ナデ後、丁寧なナデ。	
5 965	甕 (土師器)	1/2残存 □ 20.8cm	甕周辺 11.0cm	①砂粒を含む。 ②によい褐色 ③酸化炎・良好	外面 肩部横方向削り。頸部指頭圧痕を粗い罫ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 罫ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
6 966	甕 (土師器)	1/2残存 □ 18.0cm	甕周辺 19.0cm	①砂粒を含む。 ②によい褐色 ③酸化炎・良好	外面 体部上半斜め方向削り。肩部横方向削り。頸部指頭圧痕を粗い罫ナデで消す。口縁部強い横ナデ。 内面 罫ナデ後、ナデ。口縁部強い横ナデ。	

(2) 掘立柱建物跡

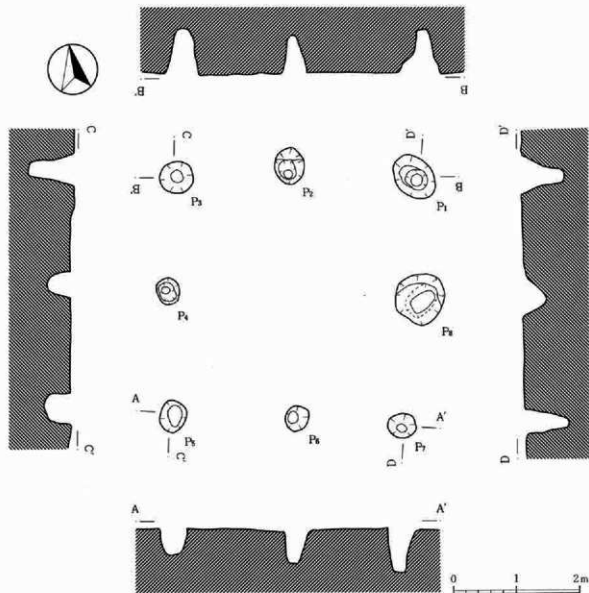
第1号掘立柱建物跡 (第249図、図版86・87) 位置 VI区35D-42グリッド

本建物跡は、南側1.5m程には116号住居跡が有るが、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は2間×2間で、南北方向が若干長く南東部がやや歪んだ不整形の建物跡である。規模は、東西方向3.90m(13尺)・南北方向3.75m(12.5尺)を測り、棟の走向はおよそN-10°-Eである。

柱穴は、径50~80cm・深さ35~70cmの不整形形の掘り方で、間柱の柱穴がやや浅い傾向が認められた。柱痕は確認されなかった。柱穴の配置を見ると、P₆がややずれている。

柱間寸法は、桁方向が6尺・6.5尺で、梁方向が6尺・7尺で設計されたものと思われる。

所属時期を特定できるような出土遺物は全く無かったが、一応、平安時代の遺構としておく。また、本建物跡の西側にも柱穴と思われる掘り込みが幾つか検出されたが、建物跡は認められなかった。



第249図 1号掘立柱建物跡実測図

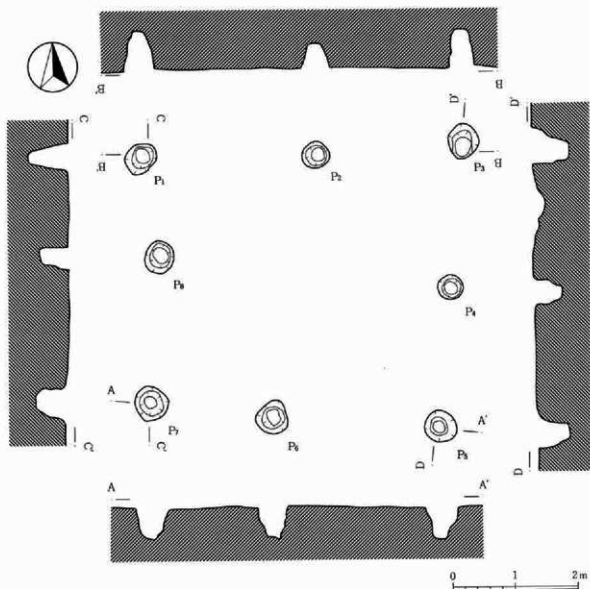
第2号掘立柱建物跡 (第250図、図版86・87) 位置 VI区40D-30ポイント付近

本建物跡は、南側2.0m程には3号住居跡が有るが、重複遺構が無く、単独で検出された。平面形は2間×2間で、東西方向が若干長く北西部が著しく歪んだ東西棟の不整形建物跡である。規模は、東辺4.50m(15尺)・南辺4.65m(15.5尺)・西辺3.90m(13尺)・北辺5.10m(17尺)を測り、棟の走向はおよそN-88°-Wである。

柱穴は、径40~60cm・深さ40~62cmの比較的整った円形の掘り方で、しっかりとしていた。底面の一部では柱痕が確認されており、径20cm前後の柱が立てられていたものと考えられる。柱穴の配置を見ると、P₁がずれており柱の通りが悪い。

柱間寸法に規則性は認められない。

所属時期を特定できるような出土遺物は全く無かったが、一応、平安時代の遺構としておく。



第250図 2号掘立柱建物跡実測図

住居跡出土の金属・石製品、瓦

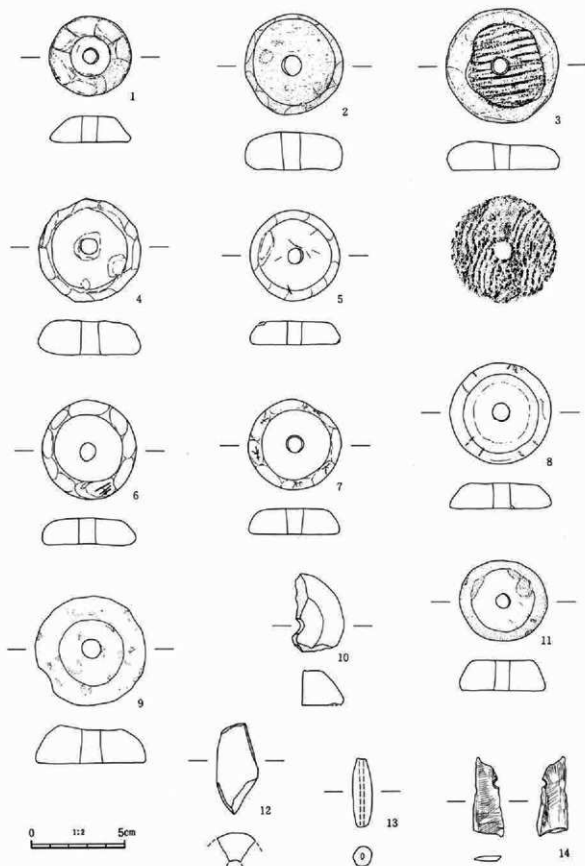
ここでは、住居跡出土の土器以外の遺物について図示した。遺物の概要は、それぞれの表に掘られた。なお、住居跡以外の遺構から出土したものについては、第6節として後にまとめた。

第105表 紡錘車・土鍾・石製模造品観察表

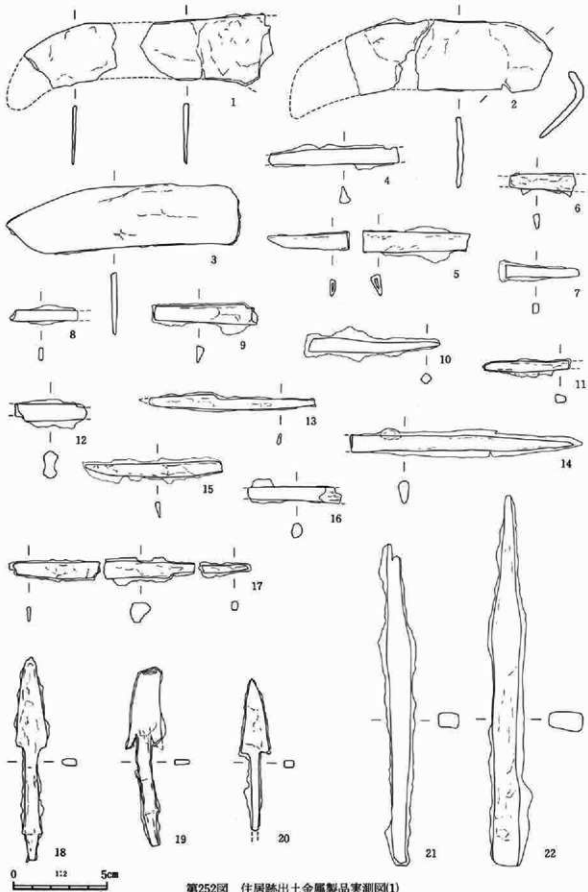
No	名称	出土遺構	概				要
1	紡錘車	2号住	底径 4.4cm	厚さ 1.5cm	孔径 0.8cm	重さ38.1g	蛇紋岩製
2	紡錘車	7号住	底径 5.1cm	厚さ 2.1cm	孔径 1.0cm	重さ55.2g	軽石製(標名山二ツ岳)
3	紡錘車	7号住	底径 6.0cm	厚さ 1.6cm	孔径 0.9cm	重さ65.4g	須恵器の再生品
4	紡錘車	8号住	底径 5.5cm	厚さ 1.9cm	孔径 0.9cm	重さ64.7g	流紋岩製(砥沢?)
5	紡錘車	12号住	底径 4.9cm	厚さ 1.4cm	孔径 0.8cm	重さ51.1g	蛇紋岩製
6	紡錘車	36号住	底径 5.2cm	厚さ 1.5cm	孔径 0.9cm	重さ67.4g	蛇紋岩製 線刻文字 王
7	紡錘車	37号住	底径 5.0cm	厚さ 1.5cm	孔径 0.9cm	重さ56.7g	蛇紋岩製 線刻文字 天・矢・未・方
8	紡錘車	91号住	底径 5.4cm	厚さ 1.5cm	孔径 0.9cm	重さ68.3g	蛇紋岩製 線刻文字 令
9	紡錘車	116号住	底径 6.0cm	厚さ 2.0cm	孔径 1.2cm	重さ60.8g	軽石製(標名山二ツ岳)
10	紡錘車	III区	底径(5.0cm)	厚さ 1.8cm	孔径(0.9cm)		土製
11	紡錘車	IV区	底径 4.6cm	厚さ 1.9cm	孔径 0.9cm	重さ42.5g	流紋岩製
12	土 鍾	13号住	現存長4.9cm				
13	土 鍾	V区	長さ 3.7cm	最大径1.0cm	孔径0.25cm	重さ 4.1g	
14	剣 形	115号住	現存長4.2cm 厚さ 0.3cm				

第106表 住居跡出土金属製品一覧表

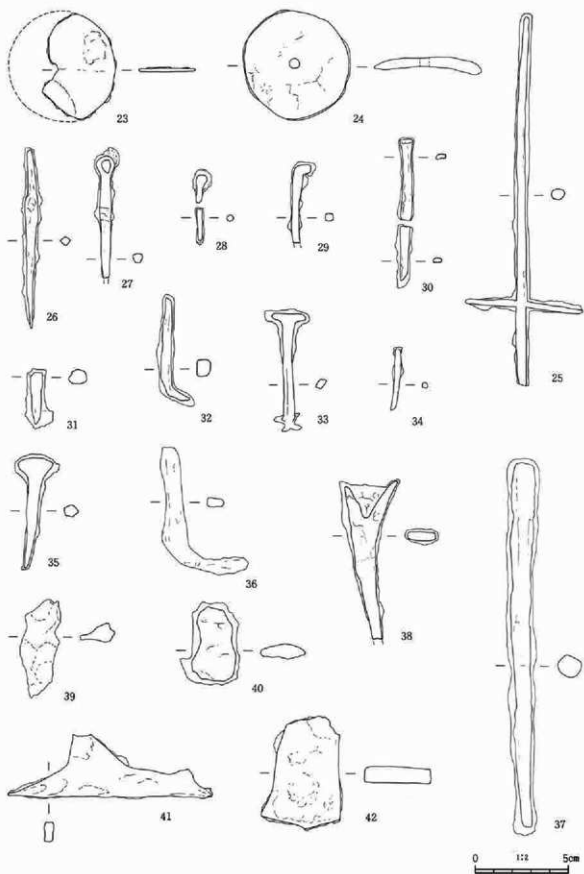
No	名称	出土遺構	長さ	重さ	備 考	No	名称	出土遺構	長さ	重さ	備 考
1	鎌	1号住	4.7	27.0		22	鋸?	8号住	19.7	82.3	
2	鎌	38号住	4.5	26.4		23	紡錘車	22号住	5.7	8.9	
3	鎌	60号住	12.6	27.4		24	紡錘車	69号住	5.7	31.5	
4	刀子	8号住	7.1	8.1	覆土中出土	25	紡錘車	68号住	19.6	48.1	
5	刀子	8号住	4.4	11.9	右側 5.8cm	26	釘	6号住	9.2	8.6	
6	刀子	4号住	3.7	3.7	覆土中出土	27	釘	6号住	6.9	6.1	
7	刀子	8号住	4.3	3.7		28	釘	6号住	1.8	1.8	
8	刀子	13号住	3.5	2.9		29	釘	8号住	4.2	4.9	
9	刀子	14号住	5.5	7.6		30	釘	8号住	4.4	4.9	
10	刀子	20号住	7.3	11.6		31	釘	37号住	3.2	4.4	
11	刀子	25号住	4.7	3.8		32	釘	42号住	6.0	9.0	
12	刀子	8号住	3.7	5.9		33	釘	31号住	6.5	10.9	
13	刀子	38号住	8.9	5.8		34	釘	33号住	3.3	1.2	
14	刀子	20号住	12.4	17.3		35	釘	58号住	6.1	14.8	
15	刀子	113号住	7.5	5.8		36	不明	96号住	6.9	14.9	
16	刀子	8号住	5.1	5.1		37	不明	42号住	19.7	79.5	
17	刀子	116号住	4.9	13.3		38	不明	7号住	8.5	21.1	
18	鎌	23号住	10.8	13.9		39	不明	45号住	5.1	8.6	
19	鎌	33号住	9.5	8.5		40	不明	44号住	4.4	16.3	
20	鎌	39号住	8.0	8.4		41	不明	66号住	10.8	20.6	
21	鋸	117号住	16.9	71.1		42	不明	7号住	5.8	70.4	



第251図 紡錘車・土錘・石製模造品実測図



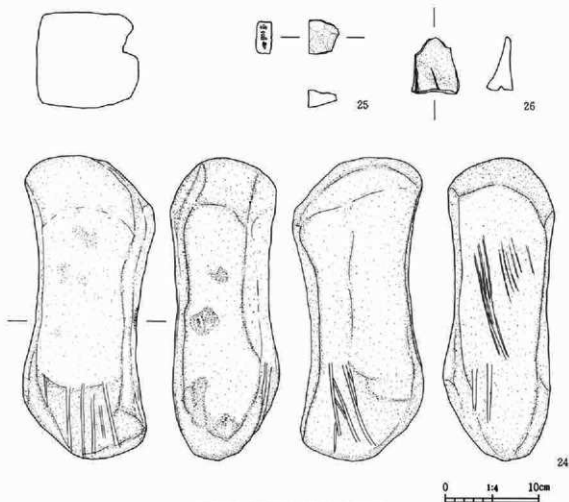
第252図 住居跡出土金属製品実測図(1)



第253図 住居跡出土金属製品実測図(2)



第254図 住居跡出土砥石実測図(1)

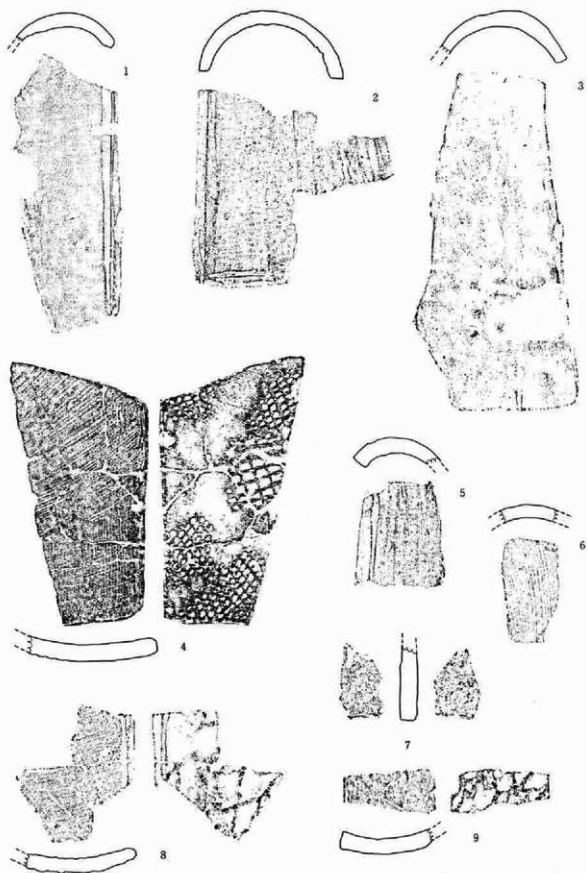


第255図 住居跡出土砥石実測図(2)

第107表 住居跡出土砥石一覧表

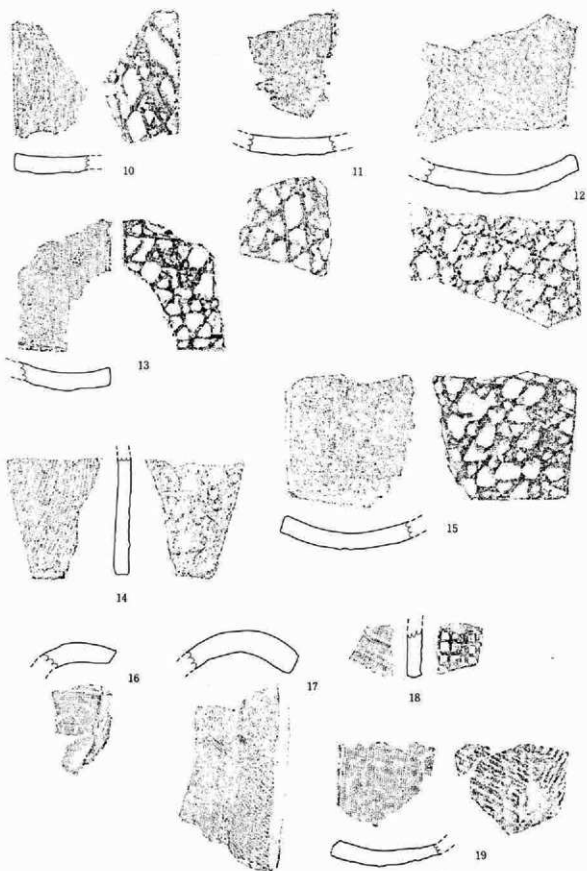
(単位 cm・g)

No.	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	No.	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石	材
1	1号住	5.9	5.4	4.2	179	流紋岩	(砥沢?)	14	71号住	7.1	4.0	2.2	78	流紋岩	(砥沢?)
2	8号住	6.1	2.8	2.2	38	流紋岩	(砥沢?)	15	87号住	7.6	5.7	1.2	60	泥岩	
3	8号住	5.2	3.9	2.0	50	流紋岩	(砥沢?)	16	91号住	10.4	5.3	2.1	115	流紋岩	(砥沢?)
4	16号住	6.8	3.2	1.6	45	流紋岩	(砥沢?)	17	114号住	7.1	4.9	3.3	89	流紋岩	(砥沢?)
5	28号住	5.1	2.8	1.8	33	流紋岩	(砥沢?)	18	115号住	6.7	5.0	3.4	121	流紋岩	(砥沢?)
6	31号住	8.0	2.4	2.7	70	流紋岩	(砥沢?)	19	116号住	7.5	6.1	3.5	163	流紋岩	(砥沢?)
7	31号住	9.2	4.8	2.9	210	流紋岩	(砥沢?)	20	121号住	7.2	4.2	1.9	79	流紋岩	(砥沢?)
8	37号住	5.5	3.3	2.1	52	流紋岩	(砥沢?)	21	29号住	8.6	7.8	7.0			
9	37号住	7.5	4.2	3.6	103	流紋岩	(砥沢?)	22	121号住	8.1	3.0	1.6	57	流紋岩	(砥沢?)
10	38号住	6.3	3.6	2.2	65	流紋岩	(砥沢?)	23	78号住	4.4	2.9	2.0	28		
11	42号住	6.4	4.0	2.0	50	流紋岩	(砥沢?)	24	92号住	32.1	14.1	10.1		輝石安山岩	(粗粒)
12	46号住	7.0	3.1	1.7	40	流紋岩	(砥沢?)	25	121号住	3.6	3.2	1.8	30	泥岩	
13	54号住	5.0	4.8	4.0	114	流紋岩	(砥沢?)	26	125号住	5.9	5.1	2.7	67		



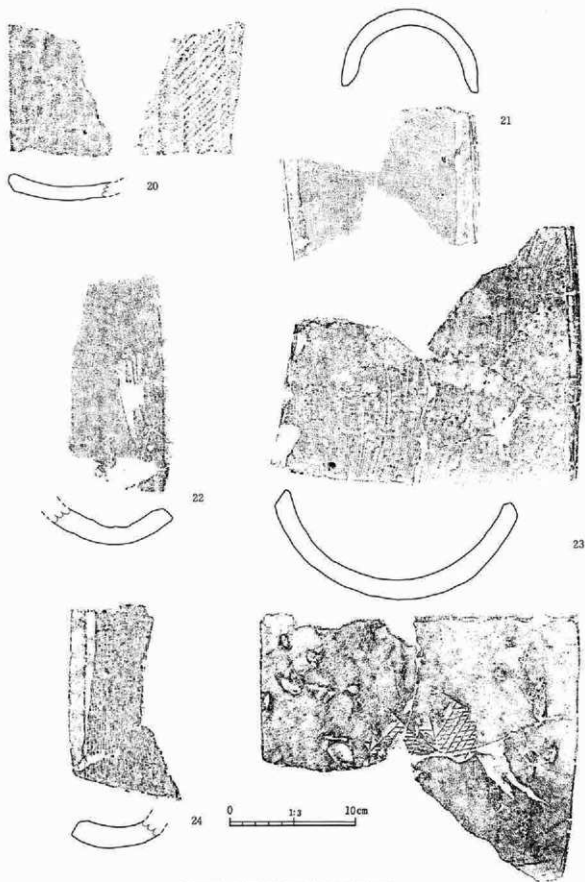
第256図 住居跡出土瓦拓影・実測図(1)

0 1:3 10cm

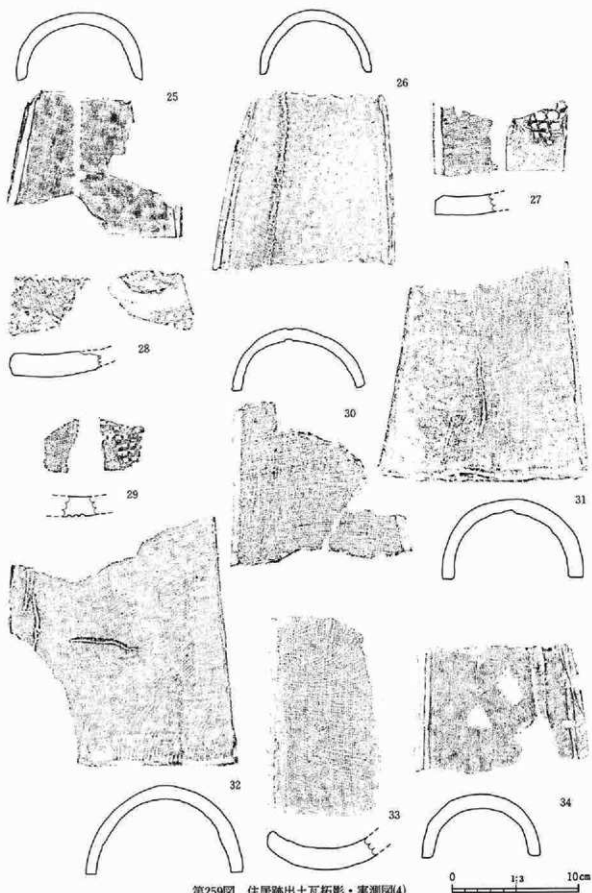


第257図 住居跡出土瓦拓影・実測図(2)

0 1:3 10cm



第258図 住居跡出土瓦拓影・実測図(3)



第259図 住居跡出土瓦拓影・実測図(4)

第108表 住居跡出土瓦観察表

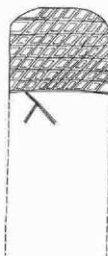
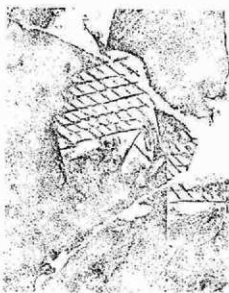
No	種類	厚さ	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	丸瓦	1.5	9号住	①黒色砂粒を含む。 ②におい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向のナデ。 凹面 細かい布目痕。粘土板糸切り痕が認められる。横巻き作りか？。側面面取り3面。	
2	丸瓦	1.6	9号住	①白色粒子及び砂礫を含む。 ②淡黄褐色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 縦方向の荒削り後、ナデ。 凹面 細かい布目痕。布の合わせ目・横骨痕が認められる。横巻き作り。側面面取り2面。	
3	丸瓦	1.9	9号住	①白色粒子を含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 縦方向の荒削り後、ナデ。一部に布面圧痕が認められる。 凹面 布面を指ナデで粗く消す。粘土板糸切り痕・粘土板合わせ目が認められる。横巻き作り。側面面取り2面。	
4	平瓦	1.8	9号住	①白色砂粒を少し含む。 ②灰白色。 ③還元炎・軟質。	凸面 ナデ。正格子の印目。 凹面 粘土板糸切り痕が認められる。横巻き作りか？。側面面取り2面。二次焼成を受ける。	
5	丸瓦	1.7	9号住	①白色粒子及び砂礫を含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向荒削り後、ナデ。 凹面 細かい布目痕。横骨痕が認められる。横巻き作り。側面面取り2面。2と同一個体か？。	
6	丸瓦	1.4	10号住	①白色粒子を含む。 ②灰色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 縦方向荒削り後、ナデ。 凹面 布目痕ははっきりしない。粘土板糸切り痕が認められる。	
7	平瓦	2.0	12号住	①黒色粒子を含む。 ②灰色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 粗い布目痕。	
8	平瓦	1.6	12号住	①白色砂粒を含む。 ②灰色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 粗い布目痕。粘土紐？接合痕が認められる。横巻き作り。側面面取り3面。二次焼成を受ける。	
9	平瓦	1.6	12号住	①黒色粒子を含む。 ②淡黄褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。	
10	平瓦	1.9	12号住	①黒色粒子を含む。 ②灰白色。織状。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。	
11	平瓦	1.8	12号住	①黒色粒子を含む。 ②淡黄色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。二次焼成を受ける。	
12	平瓦	2.1	12号住	①黒色粒子を含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。	
13	平瓦	1.9	12号住	①黒色粒子を含む。 ②淡黄色。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。	
14	平瓦	1.6	12号住	①黒色粒子を含む。 ②淡黄褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。	
15	平瓦	1.8	12号住	①黒色粒子を含む。 ②淡黄色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕が認められる。一枚作りか？。側面面取り2面。二次焼成を受ける。	
16	丸瓦	2.0	25号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②におい褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 縦方向荒削り後、ナデ。 凹面 布目の一部を指ナデで消す。粘土板糸切り痕・横骨痕が認められる。横巻き作り。側面面取り2面。	

第Ⅱ章 検出された遺情と遺物

No	種類	厚さ	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
17	丸瓦	2.7	36号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 布目の一部指ナデで消す。粘土板未切り痕・横骨痕が認められる。桶巻作り。側面取り3面。	
18	平瓦	1.6	37号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 正格子の印目痕。 凹面 布目痕。横骨痕が認められる。桶巻作り。	
19	平瓦	1.8	67号住	①白色粒子を少し含む。 ②淡黄褐色。 ③還元炎・軟質。	凸面 縄目の印目痕。後に縦方向の粗い篋削り。 凹面 粗い布目痕。二次焼成を受ける。	
20	平瓦	1.5	67号住	①砂粒・細塵を多く含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・軟質。	凸面 縄目の印目痕。後に縦方向の粗い篋削り。 凹面 粗い布目痕。粘土組織合痕・横骨痕が認められる。桶巻作り。側面取り3面。二次焼成を受ける。	
21	丸瓦	1.7	76号住	①白色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 縦方向のナデ。 凹面 細かい布目痕。側面取り3面。	
22	平瓦	2.2	76号住	①黒色粒子を含む。 ②黄灰色・にぶい褐色が稀発。 ③還元炎・焼締め。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 布目痕の一部指ナデで消す。横骨痕が認められる。桶巻作り。側面取り2面。	
23	平瓦	2.1	76号住	①白色粒子及び砂塵を含む。 ②灰色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 縦方向篋削り後、斜格子印。ナデ。 凹面 布目痕の一部指ナデで粗く消す。粘土板未切り痕が認められる。側面取り2面。	
24	平瓦	2.3	76号住	①白色及び黒色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 布目痕の一部指ナデで消す。側面取り2面。	
25	丸瓦	1.4	78号住	①白色粒子を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 粗い布目痕・布の合わせ目が認められる。側面にも布目が少し認められる。一枚作りか？。側面取り2面。	
26	丸瓦	1.2	77号住	①白色・褐色粒子及び砂塵を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 布目痕・布の合わせ目が認められる。桶巻作り。側面取り2面。	
27	平瓦	2.0	82号住	①黒色粒子を含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	凸面 正格子の印目。 凹面 粘土板未切り痕が認められる。桶巻き作りか？。側面取り2面。	
28	平瓦	2.4	84号住	①白色・黒色粒子を含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質	凸面 正格子の印目。 凹面 布目痕。	
29	平瓦	2.2	88号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②灰色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 正格子の印目痕。 凹面 粗い布目痕。	
30	丸瓦	1.4	85号住	①白色粒子を含む。 ②灰黄色。稀発。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。 凹面 布目・横骨痕が認められる。粘土組織桶巻作り。側面取り1面。	
31	丸瓦	1.7	100号住	①白色粒子を多く含む。 ②灰褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向篋削り後、ナデ。厚さが不均一。 凹面 布目痕。粘土組織桶巻作りか？。側面取り2面。	
32	丸瓦	1.7	95号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 回転による横ナデ。 凹面 細かい布目・粘土板板切り痕が認められる。桶巻作り。側面取り1面。	

第4節 平安時代の住居と出土遺物

No	種類	厚さ	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
33	平瓦	2.2	108号住	①白色粒子・砂礫を多く含む。 ②黄灰色。 ③還元炭・硬質。	凸面 縦方向のナデ。線刻有り。 凹面 布目痕・粘土板糸切り痕が認められる。横巻作りか？。側部面取り3面。	
34	丸瓦	1.6	111号住	①白色・褐色粒子を含む。 ②におい黄褐色。 ③還元炭・軟質	凸面 縦方向のナデ。 凹面 細かい布目痕。布の合わせ目が認められる。横巻作り。側部面取り2面。	



瓦の叩具 (S = 1/4)

第5節 その他の遺構と出土遺物

本節では、前項までに収録しなかった遺構と遺物をまとめた。各遺構の時期比定が完全に出来なかったために時代別配列を避けて、同種遺構でまとめた。

(1) 小 鍛 冶 跡

本遺跡の調査によって2箇所の小鍛冶跡を検出した。いずれも、遺構自体の遺存状態は芳しくなく、竈の羽口片・鉾津及びチップスの出土によって遺構と認定したものである。共存する良好な出土遺物が無いために時期は特定できないが、2号小鍛冶跡については、隣接する26号溝に投げ込まれた土器の様相から推して、一応、平安時代の遺構と考えておきたい。また、2つの遺構は直線距離で約450m程離れており、対照すべき明確な遺物を持たないが、ほぼ同時期の遺構と思われる。なお、各遺構の概要は以下の通りである。

1号小鍛冶跡(第260～262図、図版88～90) 位置 V区10D-42グリッド

8号墳の南東部に位置しており、一部が周堀を壊して営まれていた。3個の隅丸不整形ピットから構成されており、P₁は長径1.30m・短径66cm・深さ20cm、P₂は長径1.20m・短径66cm・深さ11.5cmを測り、長径の走向はそれぞれN-87°-E・N-63°-Eである。P₃は二段になっており、長径4.50m・短径3.90m・深さ40cmの不整形ピットのほぼ中央部に長径90cm・短径60cm・深さ63cmの隅丸方形ピットが穿たれていた。中央部やや北東寄り底面が強く焼けており、赤変していた。その上部には多量の焼けた河原石がまともについていた。或はこの部分に炉体が有ったのかもしれない。

遺物はP₂から羽口片2点、P₃から羽口片と大型の砥石が出土した。

2号小鍛冶跡(第260～262図、図版88～90) 位置 II区0B-42グリッド

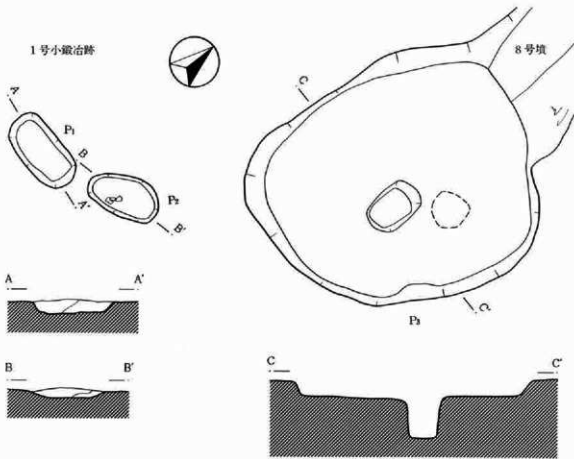
26号溝の西側に位置しており、2個の長円形ピットから構成されている。P₁は長径70cm・短径50cm・深さ4cm、P₂は長径78cm・短径60cm・深さ8cmを測る。P₁・P₂は1m程の間隔をおいて配置されており、長径の走向はP₁がN-12°-E、P₂がN-40°-Eでややずれている。

2つのピットとも底面が強く焼けており、覆土中及び周辺部から多量のチップスが検出された。また、26号溝とは1.5～2.0m離れているが、竈の羽口片や焼けて鉾津の付着した河原石が溝の下部に多量に投げ込まれていた。なお、椀形鉾津が多量に出土しているため、かなりの回数に亘って操業されたと考えられる。

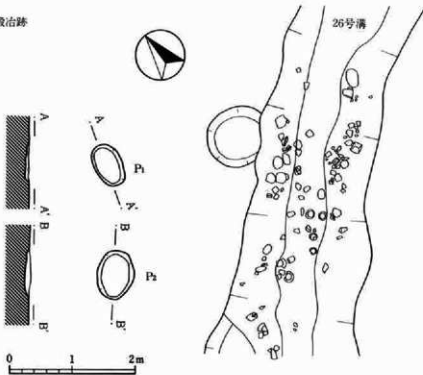
遺物は、羽口片・砥石が溝中より出土した。

小鍛冶跡に関連する遺物として羽口11点を及び椀形鉾津7点を図示した。なお、今回の調査において、前記2遺構の外に8・37・60・84・91号住居跡及びI区グリッドから6件の羽口が出土しているが、いずれも破片であるため図示し得なかったものが22点ある。鉾津についてはごく一部を掲げただけであり、科学的な分析も行っていない。羽口については6・7以外は基部が欠損しているため十分な観察は出来ないが、先端部の溶解状態及び変色状態を観察したところ、羽口の軸に対してほぼ垂直に変化しているものと、45°近い角度を持っているものがあった。また、端部は青灰色を呈するが、その内側に淡い黄橙色を呈する部分が2.5～4.0cm幅で認められた。このことから、炉体の厚さ及び羽口の使用部位が類推される。即ち、炉体の厚さは、羽口を使用する部分ではおよそ4cm前後であり、羽口には炉の底部に近い位置で使用するもの(軸に対してほぼ垂直に変化しているもの)と炉の上部で使用されるものとの区別が有ったと考えられる。

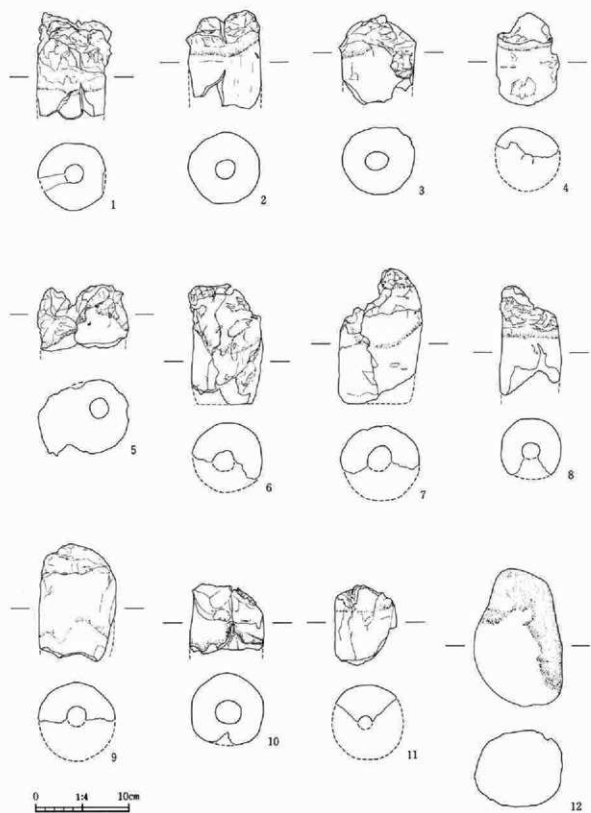
羽口はいずれもスサ入りの精製された粘土で作られており、図示したものの概要は以下の通りである。なお、12は輝石安山岩の川原石であるが、鉾津が付着しており炉体に使われていたものと考えられる。



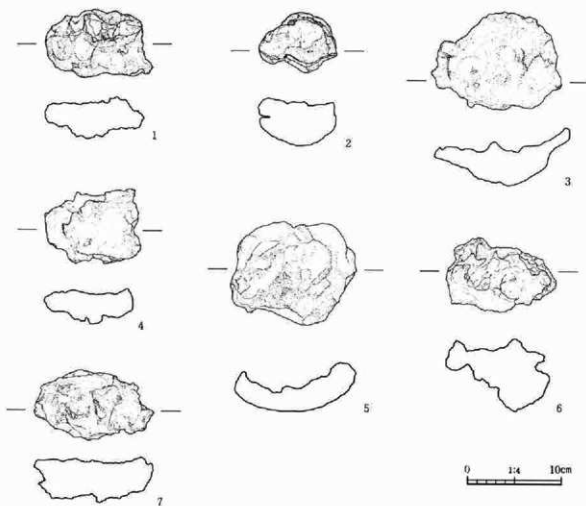
2号小鍛冶跡



第260図 小鍛冶跡実測図



第261図 羽口実測図



第262図 鉤沖実測図

第109表 羽口計測値一覧表

No	出土地	長さ	径	孔径	角度
1	8号墳	11.2	7.2	2.0	大
2	"	10.3	7.7	2.2	大
3	"	9.4	7.7	2.5	大
4	"	9.8	6.8		小
5	"	7.0	7.6	2.1	小
6	26号溝	12.7	7.6	2.3	大
7	"	14.3	8.4	2.8	大
8	"	11.5	6.4	1.9	小
9	"	12.3	8.3	2.0	大
10	"	7.4	7.7	2.5	小
11	91号住	8.5	7.5	1.5	大

(単位 cm)

第110表 鉤沖計測値一覧表

Na	出土地	長径	短径	厚さ	重さ
1	8号墳	11.6	7.2	4.4	430g
2	"	8.4	6.3	5.0	320g
3	"	13.8	10.3	4.3	700g
4	26号溝	10.4	8.0	3.2	340g
5	"	13.5	11.0	3.6	460g
6	38号住	11.7	7.8	7.7	460g
7	36号住	12.8	7.5	4.3	420g

(単位 cm)

(2) 土墳墓・火葬跡

本遺跡の調査によって1基の土墳墓と1基の火葬跡を検出した。なお、I区「F墓」は出土遺物の様相からは近世墓の可能性が高いが、調査担当者の意見に従って「63号土坑」として扱った。また、29・30号住居跡間で検出された57号土坑についても平安時代の土墳墓の可能性が有るが、積極的な証左が無いため「土坑」の項に掲載した。検出した遺構の概要は以下の通りである。

1号土墳墓（第263図、図版91） 位置 I区20A-51グリッド

本土墳墓は、骨片及び副葬品と考えられる銭・煙管・刀子の出土によって墓と認定したものである。遺構ながら、発掘調査現場事務所において遺物を保管している間に骨が紛失してしまったために、被葬者についての科学的分析が加えられなくなってしまった。

平面形は、北西部を削り取られてしまっており不明確な点があるが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、上端部で一辺約70cm・下端部で40～55cm・深さ7～25cmを測る。

調査時の所見によると焼骨が出土しているので、茶毘に付された後に埋葬されたものと考えられる。また、副葬品の組み合わせから推して、被葬者は男性であったと思われる。時期は、寛永通寶が認められたので、17世紀中頃以降であることに間違いはないが、特定できるような遺物は出土しなかった。

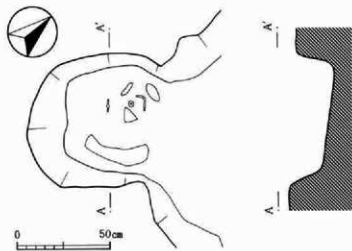
1号火葬跡（第264・265図、図版92） 位置 II区15B-39グリッド

本火葬跡は、骨片及び炭化物の出土状況及び他遺跡での調査例から火葬跡と認定したものである。平面形は、両軸方向に2箇所づつ4箇所の突出した窪みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、長辺260cm・短辺130cm・深さ50cmを測り、長辺の走向はN-25°-Eである。

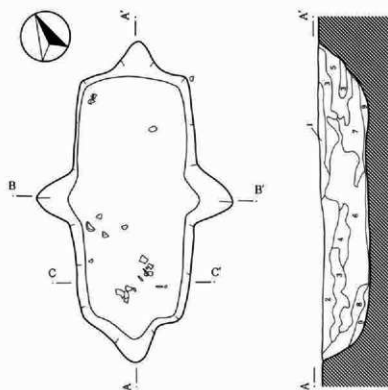
壁面及び底面は強く焼けており、2～5cmの厚さで赤変していた。また、底部には5～10cm程の厚さで炭化物が認められ、骨の破片が混じっていた。

短軸方向の窪みは、棺を支えるために丸木材等を覆って棺と土壇底面との間にある程度の隙間を作るためのものであり、長軸方向の窪みは通風・燃料供給を目的とした施設であると考えられる。

遺物は、土師器・須恵器破片と棺に使用したと思われる鉄器が出土したが良好な出土遺物が無かったために時期は特定できない。他遺跡の調査例から平安時代の火葬施設としておきたい。



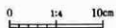
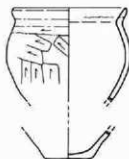
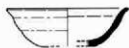
第263図 土壇墓実測図



1. 黄褐色土。 茶褐色土とロームブロックとの混土层。
2. 暗黄褐色土。 黒褐色土とロームブロックとの混土层。
3. 黒褐色土。 やや粘性が有る。
4. 黒褐色土。 3層にややローム粒が混じる。
5. 黄褐色土。 黒褐色土に多量のロームブロックが混じる。
6. 黄褐色土。 5層よりも大きなロームブロックを含む。
7. 黒褐色土。 4層よりもやや細かい。
8. 黒褐色砂質土。 遺物包含層。
9. 機土・炭化物層。



第264図 火葬跡実測図



第265図 火葬跡出土遺物実測図

(3) 井戸跡

1号井戸 (第266・271図、図版93) 位置 IV区35C-18グリッド

本井戸跡はIV区の北西部に、2号井戸と並んで検出された。平面形は、上端部は南北方向がやや長い長円形で、底部は南側がやや張り出した不正円形を呈する。遺構確認面から85cm程下位からは約23°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径2.52m・短径2.35m、底部では径約55cmで最長部は73cmを測る。深さは3.45mで、底面のレベルは81.85mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ1.40m及び2.50m付近に「アグリ」が認められた。上部のものはシルト層中に発達しているため、この部分が湧水層と考えられる。また、下位のものは使用時の水位点に発達したものであると思われるが、調査時には湧水は無かった。

覆土中には径10～30cm大の川原石7個が認められ、廃棄に当たって人為的に埋めたものと考えられるが、深さ約1.20mの位置まで自然に陥没したらしく、黒褐色砂質土の堆積が見られた。

遺物は、上部には多量の陶磁器が見られたが、下層からは土器・須恵器の小破片が出土したのみである。

2号井戸 (第266図、図版93) 位置 IV区35C-18グリッド

本井戸跡は1号井戸の南東約1mに所在する。平面形は、上端部・底部共に比較的整った円形を呈する。遺構確認面から1m程下位からは約29°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径約1.90m、底部で径約44cmを測る。深さは2.90mで、底面のレベルは82.30mである。井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ約2.30m付近の灰褐色シルト層中に「アグリ」が認められた。この部分が湧水層であり、水位点であったと思われる。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は、黒褐色砂質土が二層に分かれて詰まっていたが、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。深さ約1.10m付近で分層でき、上部は自然堆積の様相が認められるので、陥没後に堆積したと考えられる。

遺物は出土しなかった。

3号井戸 (第266図、図版93) 位置 IV区35C-45グリッド

本井戸跡はIV区の南西隅に検出された。平面形は、上端部・底部共に比較的整った円形を呈する。遺構確認面から85cm程下位からは約37°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。深さ1m～2m付近の壁面がやや崩落していた。

規模は、上端部で径約1.90m、底部で径37～51cmを測る。深さは3.25mで、底面のレベルは81.65mである。底面は小礫を含む砂礫層に達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ約2.50m付近の褐色土層中に「アグリ」が認められる。この部分が水位点であり、下部の砂礫層が湧水層であると考えられる。なお、調査時には深さ約25cmの自然滞水があった。

覆土は四層に大別され、底部には使用時に堆積したと思われる5cm程の黒褐色砂質土が認められたが、上

層には径15～30cmの川原石10個が投入されており、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が詰まっていたことから、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。なお、深さ80cm付近で分層でき、上部は自然堆積の様相が認められるので、陥没後に堆積したと考えられる。

遺物は、底面から55cm程上部で須恵器碗の底部破片が出土した。

4号井戸（第266・271図、図版93・98） 位置 IV区25C-15グリッド

本井戸跡は12号住居跡の西側に検出された。平面形は、上端部・底部共に比較的均整のとれた円形を呈する。遺構確認面から35cm程下位からは約34°の角度でややラッパ状の上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.30m、底部で径55～62cmを測る。深さは2.10mで、底面のレベルは83.10mである。井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。比較的安定しており、壁面の崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は二層に大別されるが、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が詰まっており、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。深さ約80cm付近から上部は、陥没後に堆積したと思われる自然堆積の様相を示す暗褐色土が認められた。

遺物は、土師器・須恵器の破片と灰釉陶器瓶が出土した。

5号井戸（第266図、図版93） 位置 IV区15C-15グリッド

本井戸跡はIV区の北東部で検出された。平面形は、上端部は比較的整った円形で、底部は南北方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から70cm程下位からは約35°の角度でラッパ状の上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.50～1.60m、底部で長径56cm・短径45cmを測る。深さは2.85mで、底面のレベルは82.15mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。なお、深さ1.50m付近の壁面がやや崩落していた。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は三層に大別され、底部には使用時に堆積したと思われる黒褐色砂質土が20cm程認められたが、上層にはロームブロックを多量に含む黒褐色土が詰まっており、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。深さ30cm付近から上部は、陥没後に堆積したと思われる自然堆積の様相を示す黒褐色砂質土が認められた。

遺物は、底面から35～85cm程上部で須恵器碗の破片が出土した。

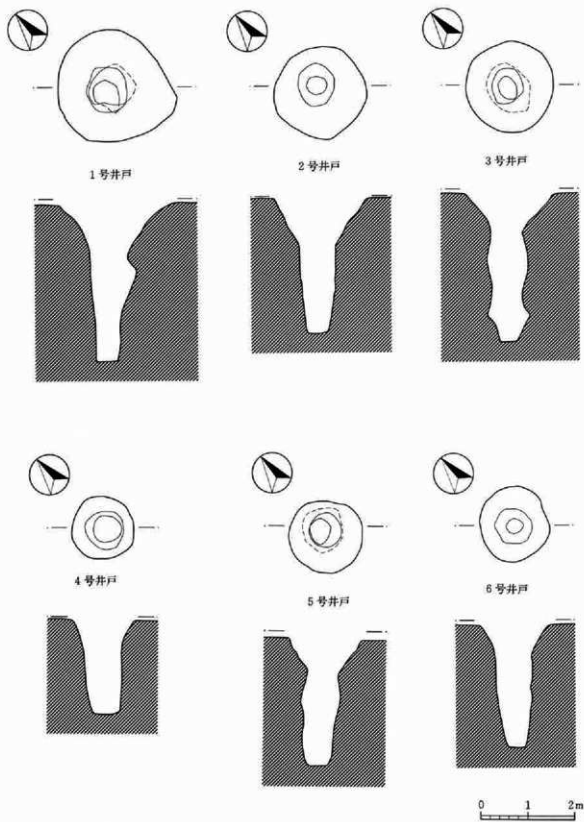
6号井戸（第266図、図版93） 位置 IV区25C-27グリッド

本井戸跡はIV区のほぼ中央部で検出された。平面形は、上端部は比較的整った円形で、底部は東西方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から55cm程下位からは約29°の角度でラッパ状の上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.40～1.60m、底部で径30～38cmを測る。深さは2.70mで、底面のレベルは82.30mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。比較的

第II章 検出された遺構と遺物



第266図 井戸跡実測図(1)

安定しており壁面の崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は五層に分層され、底部には使用時に堆積したと思われる黒褐色砂質土が20cm程認められたが、上層には径10～40cmの川原石7個が投入されており、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が詰まっていたことから、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。深さ40cm付近から上部は、陥没後に堆積したと思われる自然堆積の様相を示す黒褐色土が認められた。

遺物は出土しなかった。

7号井戸 (第267図、図版93) 位置 III区10C-42グリッド

本井戸跡は、III区の西側で24号住居跡と重複して検出された。平面形は、上端部・底部共に比較的整った円形を呈する。遺構確認面から90cm程下位からは約25°の角度でラッパ状の上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.70～1.90m、底部で径約50cmを測る。深さは2.60mで、底面のレベルは82.00mであり、底面は褐灰色のシルト層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ1.50m付近に「アグリ」が認められた。この部分が水位点であり、下部のシルト層が湧水層である。なお、調査時には若干にじみ出る程度であったが、深さ約20cmの自然湧水が認められた。

覆土は三層に大別され、底部には使用時に堆積したと思われる灰褐色砂質土が10cm程認められたが、上層にはロームブロックを多量に含む暗褐色土が詰まっていたことから、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。深さ80cm付近から上部には、陥没後に堆積したと思われる自然堆積の様相を示す黒褐色土が認められた。

遺物は出土しなかった。

8号井戸 (第267図、図版94) 位置 III区45B-30グリッド

本井戸跡はIII区の北東部で検出された。平面形は、上端部は比較的整った円形を呈するが、底部は北側が張り出した不整形円形を呈する。遺構確認面から80cm程下位からは約25°の角度でラッパ状の上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

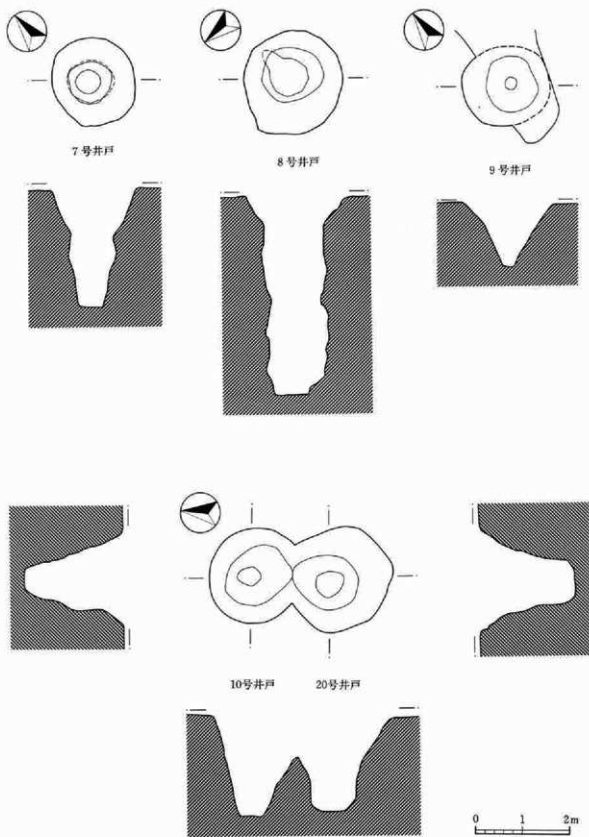
規模は、上端部で径2.10～2.30m、底部では長径1.15m・短径0.80mを測る。深さは4.30mで、底面のレベルは80.20mであり、湧水層と考えられる径5～25cmの隙を含む褐灰色砂礫層を掘り抜いていた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。深さ2.30～3.80m付近に、使用時の水位点に発達したと思われる「アグリ」が認められた。なお、調査時には毎分7ℓ程の湧水があり、深さ約2.10mの自然湧水があった。

覆土は四層に分層され、底部には使用時に堆積したと思われる黒褐色砂質土が40cm程認められたが、上部には遺物を含む黒褐灰色砂質土が1m、径10～20cmの川原石とロームブロックを多量に含む黒褐色土が詰まっていたので、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。なお、埋め戻しの陥没は認められなかった。

遺物は、底面から50cm～1m浮いた状態でガラス片・石炭・陶磁器・桶材などが出土した。

第II章 検出された遺構と遺物



第267図 井戸跡実測図(2)

9号井戸 (第267図、図版93) 位置 III区35B-33グリッド

本井戸跡はIII区の北東部で検出された。平面形は、上端部は東西方向がやや長い不整形円で、底部は比較的整った円形を呈する。遺構確認面から50cm程下位からは約42°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られており、底部に至って急激にすぼまる。

規模は、上端部で長径2.20m・短径1.80m、中間部で径70cm、底部では径約25cmを測る。深さは1.40mで、底面のレベルは83.00mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土はロームブロックを多量に含む褐色土であった。分層し難かったので、廃棄に当たり人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器・陶磁器の破片が出土した。

10号井戸 (第267図、図版94) 位置 II区25B-42グリッド

本井戸跡は、II区の南西部で検出された。平面形は、南北方向が長い不整形円形を呈する。遺構確認面から90cm程下位からは約20°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.90~2.05m、底部で径40~50cmを測る。深さは2.25mで、底面のレベルは82.15mである。底面は褐灰色シルト層に達しており、ここが湧水層と思われる。

井筒構造は確認されておらず、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており崩落箇所は認められなかった。調査時には毎分3ℓ程の湧水があり、深さ約75cmの自然湧水があった。

覆土は三層に大別され、底部に30cm程の厚さで暗褐色砂質土が認められ、底面から85cm程の位置まで、暗褐色粘質土と褐色砂質土が互層をなして堆積していた。上部にはロームブロックを多量に含む褐色土が1.40m程堆積していたことから、使用時にある程度埋まったものを廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

20号井戸 (第267図、図版94) 位置 II区20B-42グリッド

本井戸跡はII区の南西部で、10号井戸と重複して検出された。先後関係については不明である。平面形は、上端部・底部共に南北方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から1.10m程下位からは約29°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径2.30m・短径2.10m、底部では長径65cm・短径52cmを測る。深さは2.15mで、底面のレベルは81.35mであり、湧水層である灰褐色シルト層に達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分4ℓ程の湧水があり、深さ約65cmの自然湧水があった。

覆土は二層に大別され、底部には約60cmの厚さで、ロームブロックを多量に含む黒褐色砂質土が認められ、その上部に径10~15cmの川原石を含んだ黒褐色土が堆積していた。

遺物は、須恵器碗の破片が上層部より出土した。

11号井戸 (第268図、図版94) 位置 II区30A-33グリッド

本井戸跡はII区の南東隅で検出された。平面形は、上端部は比較的整った円形を呈するが底部は東西方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から80cm程下位からは約43°の角度でラック状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られており、底面は二段になっていた。

規模は、上端部で径2.45~2.57m、底部では径55~65cm程にすぼまり、15cm程低い西側の底面は長径38cm・短径17cmを測る。深さは2.70mで、底面のレベルは80.70mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ1.90m付近に「アグリ」が発達していたが、底面の状況から推して、掘り増し前の湧水点である可能性が考えられる。なお、調査時には毎分6ℓ程の湧水があり、深さ約1.80mの自然滞水があった。

覆土は三層に分層され、底部には50cm程の厚さで灰褐色砂質土が堆積しており、その上にロームブロックを多量に含む黒褐色土が約50cm認められた。最上層は厚さ1.70mの黒褐色砂質土であったことから、廃棄後に自然埋没したものと思われる。

遺物は、深さ約50cm付近までの上層部中から碗形スラグが6個出土した。

12号井戸 (第268図、図版94) 位置 II区10B-33グリッド

本井戸跡はII区のほぼ中央部で検出された。平面形は上端部は東西方向がやや長い長円形で、底部は比較的整った円形を呈する。遺構確認面から85cm程下位からは約36°の角度でラック状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径2.15m・短径1.83m、底部では径約60cmを測る。深さは2.00mで、底面のレベルは82.10mである。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。湧水層はブラックバンド下位の灰褐色シルト層であり、調査時には毎分0.8ℓ程の湧水があり、深さ約40cmの自然滞水があった。

覆土は四層に大別され、底部には20cm程の厚さで暗褐色砂質土が堆積しており、その上層には径15~20cmの川原石4個と炭化物及び多量のロームブロックを含む褐色土が1.20m認められ、下部はやや粘性を帯びていた。なお、川原石の表面は強く焼けており赤く変色していた。廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。最上層は陥没後に堆積したと考えられる厚さ約50cmの暗褐色砂質土で、土師器・須恵器の破片が認められた。

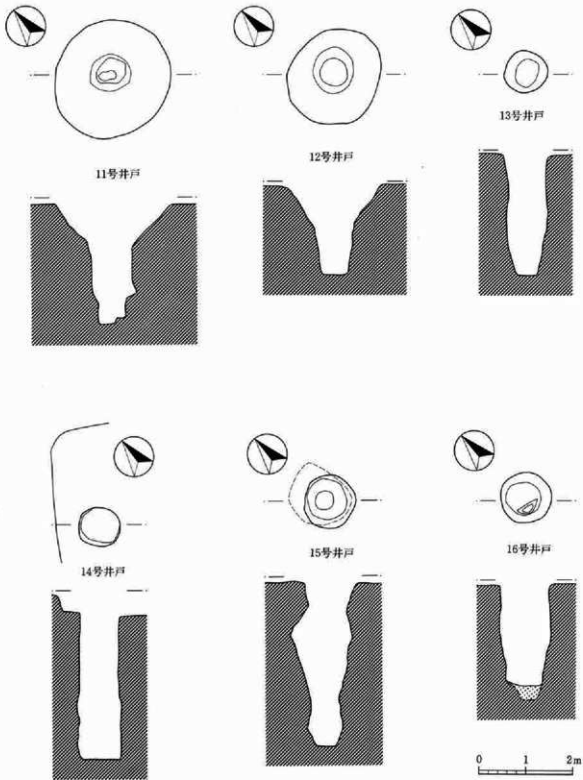
遺物は土師器杯片3と須恵器大甕の胴部破片4が出土した。

13号井戸 (第268図、図版94) 位置 II区15B-39グリッド

本井戸跡はII区の南西部で検出された。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から1.8m程下位まではほぼ円筒状に掘られていたが、下部がややすぼまっていた。

規模は、上端部で径85~94cm・底部では径46~60cmを測る。深さは2.65mで、底面のレベルは81.35mであり、湧水層である灰色シルト層に達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分2ℓ程の湧水があり、深さ約1.15mの自然滞水があった。



第268図 井戸跡実測図(3)

第II章 検出された遺構と遺物

覆土は四層に大別され、底部には110cm程の厚さで暗褐色砂質土が堆積しており、その上部に20cmの暗褐色粘質土と20cmの軽石層が認められた。最上層は、廃棄に当たって人為的に埋め戻したと思われるロームブロックを多量に含む褐色土が詰め込まれていた。B 軽石の降下によって井戸の機能を停止したものと考えられる。

遺物は最下層の砂質土中から土師器杯・須恵器碗が出土した。

14号井戸 (第268図、図版94) 位置 II区20B-33グリッド

本井戸跡は、48・49・106号住居跡を壊して掘られていた。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形形を呈する。遺構確認面から2m程下位からやや広がるが、ほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径80～90cm・底部で径72～82cmを測る。深さは3.50mで、底面のレベルは80.60mであり、湧水層である円礫交じりの砂礫層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分2.5ℓ程の湧水があり、深さ1.9mの自然湧水があった。

覆土は六層に大別され、底部には径5～15cmの円礫が敷き詰められ、その上部に有機質を多量に含む30cmの黒褐色泥土・20cmの褐色砂礫層・20cmの暗褐色砂質土が堆積していた。深さ2.20m付近からは、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたと思われるロームブロックを多量に含む褐色土が詰め込まれており、上部の約30cmは強く突き固められていた。

遺物は、底部から土師器・須恵器・陶磁器の破片及び木片が出土した。

15号井戸 (第268・274図、図版95・99・100) 位置 I区40A-51グリッド

本井戸跡は、I区の西側で21号井戸と並んで検出された。平面形は、上端部・底部共に不整形形を呈する。底部の中心が上端部よりもやや西側にずれているが、ほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で径1.05～1.13m、底部では径40～45cmを測る。深さは3.60mで、底面のレベルは79.90mであり、湧水層と考えられる円礫交じりの砂礫層を掘り抜いて灰褐色シルト層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。深さ約1.10m付近に水位点に発達したと思われる「アグリ」が認められた。なお、調査時には毎分7.5ℓ程の湧水があり、深さ約2.30mの自然湧水があった。

覆土は三層に大別され、底部には有機物を含む黒色粘質土と黒色砂質土の互層状の堆積が1m程あり、その上部に径10～20cmの川原石と遺物を含む黒褐色砂質土が70cm程詰め込まれていた。最上部は径10～20cm程の川原石を含む黒褐色砂質土であった。使用時に埋まりかけていたものを、廃棄に当たって人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物は、底から1m程浮いた状態で陶磁器・木製品などが見られた。

16号井戸 (第268図、図版95) 位置 II区10B-42グリッド

本井戸跡はII区の南西部で検出された。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形形を呈しており、底面の南側が半月状に深さ約30cm掘り窪められていた。掘り方は、ほぼ円筒状である。

規模は、上端部で径約1.10m、底部では径70～75cmを測る。深さは2.45mで、底面のレベルは81.35mであり、湧水層と考えられる灰色シルト層まで達していた。

井筒構造は確認されておらず、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分1ℓ程の湧水があり、深さ約1.15mの自然湧水があった。

覆土は四層に大別され、底部には約30cmの厚さで灰褐色粘質土が堆積しており、その上部には明らかに埋め戻したと考えられるロームブロックを多量に含む褐色土が詰め込まれていた。

遺物は出土しなかった。

17号井戸（第269図、図版95） 位置 II区5B-36グリッド

本井戸跡はII区のほぼ中央部で27号溝及び53号土坑と重複して検出された。なお、井戸と認定する根拠が若干弱い。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形円形を呈する。掘り方は、底面までほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径1.75m・短径0.70m、底部では長径55cm・短径45cmを測る。深さは1.27mで、底面のレベルは82.73mであり、ブラックバンドの上面まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土がぎっしりと詰め込まれており、明らかに人為的に埋め戻された様相を示していた。底面にも砂の堆積は認められなかった。

遺物は出土しなかった。

18号井戸（第269・274図、図版95・99） 位置 II区5B-30グリッド

本井戸跡は、II区のほぼ中央部で19号井戸と並んで検出された。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から90cm程下位からは約36°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られており、底部に至って若干すぼまっている。

規模は、上端部で長径1.80m・短径1.65m、底部では長径60cm・短径52cmを測る。深さは3.50mで、底面のレベルは82.51mであり、湧水層と考えられる径5～15cmの円礫を含んだ褐灰色砂質土を90cm掘り留めている。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ1.20m付近には、水位点に発達したと思われる弱い「アグリ」が認められた。なお、調査時には毎分4ℓ程の湧水があり、深さ約190cmの自然湧水があった。調査時期の関係からか、旧水位点よりも40cm程浅かった。

覆土は三層に大別され、底部には暗褐色の粘質土と砂質土が互層をなして堆積していた。その上部にはロームブロックを多量に含む褐色土が詰め込まれており、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたことを物語っていた。最上層は陥没後に堆積したと考えられる厚さ約1.10mの暗褐色砂質土が認められた。

遺物は、底部から桶の側板あるいは滑車受けと考えられる木片が出土した他は、最上層から陶磁器の破片及び錆びた包丁が出土した。

19号井戸（第269図、図版95） 位置 II区5B-30グリッド

本井戸跡はII区のほぼ中央部で27号溝と重複して検出された。平面形は、上端部は南北方向がやや長い楕

第二章 検出された遺構と遺物

丸不整形形で、底部は東西方向が長い不整形円形を呈する。遺構確認面から60cm程下位からは截頭四角錐状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で1.60×1.95m、底部では長径52cm・短径45cmを測る。深さは1.39mで、底面のレベルは82.51mであり、ブラックバンド下部の灰色シルト層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられるが、上部は井桁を埋めるために隅丸方形に掘られたものと思われる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は二層に大別され、底部には厚さ約30cmの黒褐色軽石層が認められ、その上部には径10～30cmの川原石を多量に含む暗褐色砂質土が詰め込まれていた。なお、上端部の周縁部はロームブロックを多量に含む暗褐色土が強く突き固められている様子が観察された。

遺物は、土師器・須恵器の破片が出土した。

21号井戸 (第269図、図版95) 位置 I区35A-51グリッド

本井戸跡はI区の西側で15号井戸と並んで検出された。平面形は、上端部が不整形円形で、底部はやや歪んだ隅丸方形を呈する。中心がやや西に偏っているがほぼ円筒状に掘られている。

規模は、上端部で径83～88cm、底部では48×57cmを測る。深さは94cmで、底面のレベルは82.56mであり、ハードローム層下部の褐灰色の火山灰層まで達していた。なお、この火山灰層の上部に厚さ約1cmのマンガン凝集層が認められたことから、不透水層と考えられ、井戸と認定する根拠が若干弱い。

井筒構造は確認されておらず、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は安定しており、崩落箇所は認められなかった。調査時には湧水は無かった。

覆土は三層に大別され、底部には約10cmの厚さで黒色砂質土が堆積しており、その上部にロームブロックを多量に含む暗褐色土が40cm程詰め込まれていた。最上層はF.P.を多量に含む黒褐色土が認められた。

遺物は出土しなかった。

22号井戸 (第269・271図、図版95・98) 位置 I区30A-45グリッド

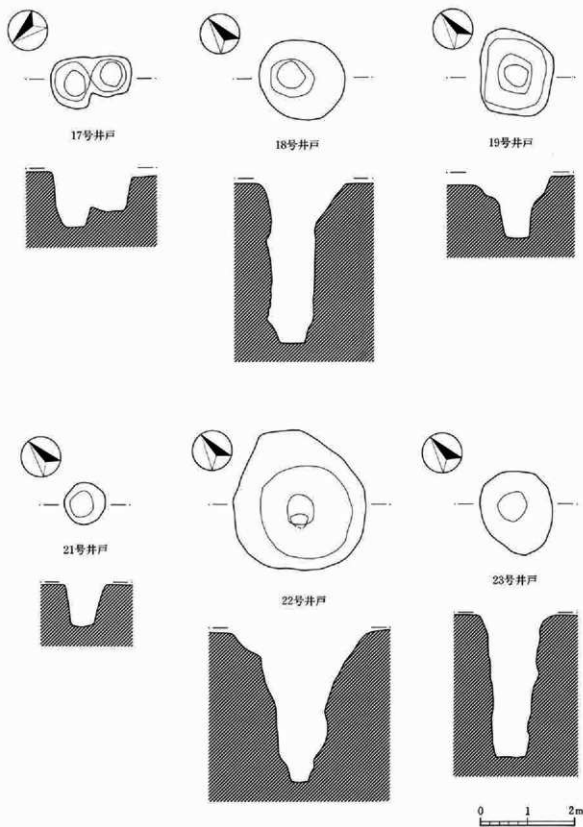
本井戸跡はI区のほぼ中央部で23号井戸と並んで検出された。平面形は上端部・底部共に南北方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から150cm程下位からは約40°の角度でラップ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径3.15m・短径2.80m、底部では長径37cm・短径30cmを測る。深さは3.30mで、底面のレベルは80.20mであり、湧水層である円礫交じりの砂礫層を掘り抜いて灰褐色砂層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は比較的安定しており、崩落箇所は認められなかった。調査時には毎分6ℓ程の湧水があり、深さ約2.10mの自然湧水があった。

覆土は五層に大別され、底部には30cm程の厚さで黒褐色砂質土が堆積しており、その上部に径10～30cmの川原石を含む黒褐色砂質土、杉の小枝を含む黒土が認められ、上部はロームブロックを多量に含む褐色土で埋め戻されていた。

遺物は埋土の中から内耳鍋片・石臼等が出土した。



第269図 井戸跡実測図(4)

23号井戸 (第269・272図、図版96・99) 位置 I区25A-48グリッド

本井戸跡はI区のほぼ中央部で22号井戸と並んで検出された。平面形は、上端部は南北方向に長い長円形で、底部はやや歪んだ不整形円形を呈する。遺構確認面から120cm程下位からは約9°の角度で僅かにラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径1.80m・短径1.50m、底部では径60～65cmを測る。深さは3.10mで、底面のレベルは80.40mであり、湧水層である円礫交じりの砂礫層まで達していた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分7ℓ程の湧水があり、深さ約1.90mの自然湧水が認められた。

覆土は四層に大別され、底部には腐植質を多量に含む黒色砂質土が約60cm堆積しており、その上部にロームブロック及び径10～30cmの川原石を多量に含んだ黒褐色土と炭化物を含む褐色土が詰め込まれていた。廃棄に当たって人為的に埋め戻したと思われる。

遺物は深さ2.0m付近から桶が、2.5m付近から摺鉢の破片が出土した。

24号井戸 (第270図、図版96) 位置 VI区35D-18グリッド

本井戸跡はVI区の北東部で検出された。平面形は、上端部は東西方向がやや長い不整形円形で、底部は比較的整った円形を呈する。遺構確認面から50cm程下位からは約27°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径1.70m・短径1.50m、底部では径37～42cmを測る。深さは3.80mで、底面のレベルは82.40mであり、湧水層と思われる円礫交じりの砂礫層を50cm程掘り込んでいた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ3m付近に弱い「アグリ」が認められたが、全体的に比較的安定した壁面であった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は三層に大別され、底部には黒褐色砂質土が10cm程堆積していたが、その上部にはロームブロックを多量に含む暗褐色砂質土が詰め込まれていた。最上層は陥没後に堆積したと考えられる厚さ約1.50mの暗褐色土が認められた。

遺物は、埋土中より土師器・須恵器の細片が3片出土した。

25号井戸 (第270図、図版96) 位置 VI区30D-27グリッド

本井戸跡はVI区の東側で検出された。平面形は、上端部・底部共に東西方向がやや長い不整形円形を呈する。遺構確認面から60cm程下位からは約31°の角度でラッパ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径2.00m・短径1.80m、底部では径50～55cmを測る。深さは3.32mで、底面のレベルは82.38mであり、湧水層と考えられる円礫交じりの砂礫層を10cm程掘り込んでいた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ2.00～3.20m付近まで弱い「アグリ」が認められた。使用時にはこの部分まで水位があったものと考えられるが、調査時には湧水は無かった。

覆土は四層に大別され、底部には壁面が崩落した褐色土が20cm程堆積していたが、その上部にはローム

ブロックを多量に含む黒褐色砂質土が詰め込まれており、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたことを物語っていた。最上部には陥没後に堆積したと考えられる厚さ約30cmの暗褐色砂質土が認められた。

遺物は底部から須恵器碗の破片が出土した。

26号井戸（第270図、図版96） 位置 VI区45D—45グリッド

本井戸跡はVI区の南西部で検出された。平面形は、上端部は東西方向がやや長い不整形で、底部は南北方向がやや長い不整形を呈する。遺構確認面から1.20m程下位からは約10°の角度でややラップ状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られている。

規模は、上端部で長径1.60m・短径1.35m、底部では径50～60cmを測る。深さは3.50mで、底面のレベルは82.30mであり、湧水層と考えられる小礫交じりの灰褐色シルト層を掘り抜いていた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ2.00～3.00m付近に「アグリ」が認められた。使用時にはこの部分まで水位があったものと考えられるが、調査時には湧水は無かった。

覆土は六層に大別され、底部には壁面の崩落土が1m程堆積していたが、その上部にはロームブロックを多量に含む褐色土が詰め込まれており、最上部には陥没後に堆積したと考えられる厚さ約50cmの暗褐色砂質土が認められた。

遺物は出土しなかった。

27号井戸（第270図、図版96） 位置 VI区40D—42グリッド

本井戸跡はVI区の南西部で検出された。平面形は、上端部・底部共に東西方向が長い不整形を呈する。遺構確認面から40cm程下位からは截頭角錐状に上に広がっているが、下部はほぼ円筒状に掘られていた。なお、東西2箇所に径約20cmのピットが認められた。「跳つるべ」のような施設が有ったものと思われる。また、埋土中に見られる多量の川原石は、上面に敷かれていた可能性が考えられる。

規模は、上端部で長径2.40m・短径2.10m、底部では長径60cm・短径51cmを測る。深さは4.50mで、底面のレベルは81.40mであり、円礫交じりの砂礫層を70cm程掘り込んでいた。

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。深さ2.40～3.60m付近に弱い「アグリ」が認められたが、調査時には湧水は無かった。

覆土は五層に大別され、底部には壁面の崩落土が20cm程堆積していたが、上部は径15～50cmの川原石と多量のロームブロックを含む暗褐色土が詰め込まれており、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたことを物語っていた。

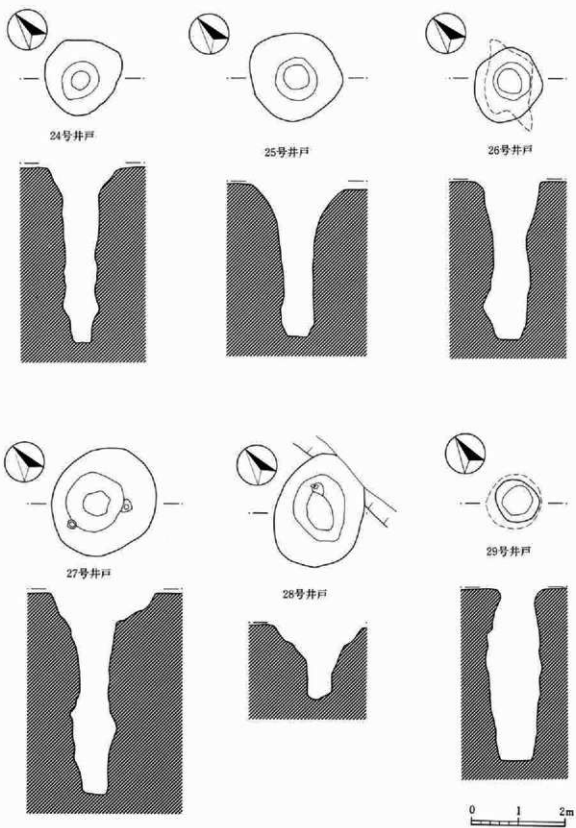
遺物は、埋土中より土師器・須恵器の破片が出土した。

28号井戸（第270・271図、図版96・98） 位置 III区40B—36グリッド

本井戸跡はIII区のほぼ中央部で検出された。平面形は、上端部・底部共に南北方向が長い不整形を呈する。遺構確認面から1.10m程下位からは約22°の角度でラップ状に上に広がっているが、深さ約40cm付近で2段になっていた。なお、下部はほぼ円筒状に掘られていた。

規模は、上端部で長径2.30m・短径1.80m、底部では長径55cm・短径38cmを測る。深さは1.65mで、底面のレベルは82.55mであり、ブラックバンドを15cm程掘り込んでいた。

第II章 検出された遺構と遺物



第270図 井戸跡実測図(5)

井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒朝顔型」の井戸と考えられる。壁面は安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には湧水は無かった。

覆土は二層に大別され、底部に自然堆積の様相を示す厚さ約10cmの暗褐色砂質土が認められたが、上部はロームブロックを含む黒褐色土が詰め込まれており、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたことを物語っていた。

遺物は、深さ約1mの地点で須恵器瓶の口縁部が出土した。

29号井戸 (第270図、図版96) 位置 I区10A-54グリッド

本井戸跡はI区の南東部で検出された。平面形は、上端部・底部共に比較的整った円形を呈する。掘り方は、口を細くして胴部をやや太くしたものと思われる。

規模は、上端部で径83~95cm、胴部は径約120cm、底部では径57~65cmを測る。深さは3.70mで、底面のレベルは79.80mであり、湧水層と考えられる径5~15cmの円礫を含む砂礫層まで達していた。なお、遺構確認面から1.50m程下位の褐灰色シルト層からも湧水があった。

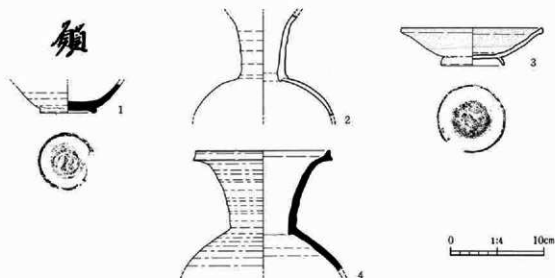
井筒構造は確認されていないが、地山を直接に利用した「地山井筒円筒型」の井戸と考えられる。壁面は安定しており、崩落箇所は認められなかった。なお、調査時には毎分8ℓ程の湧水があり、深さ約2.80mの自然湧水が認められた。

覆土は、底部がやや変色していたが、ロームブロックを少量含む暗褐色砂質土が詰め込まれており、廃棄に当たって人為的に埋め戻されたことを物語っていた。

遺物は、深さ約2.70mの地点で内耳鍋の破片が出土した。

出土遺物

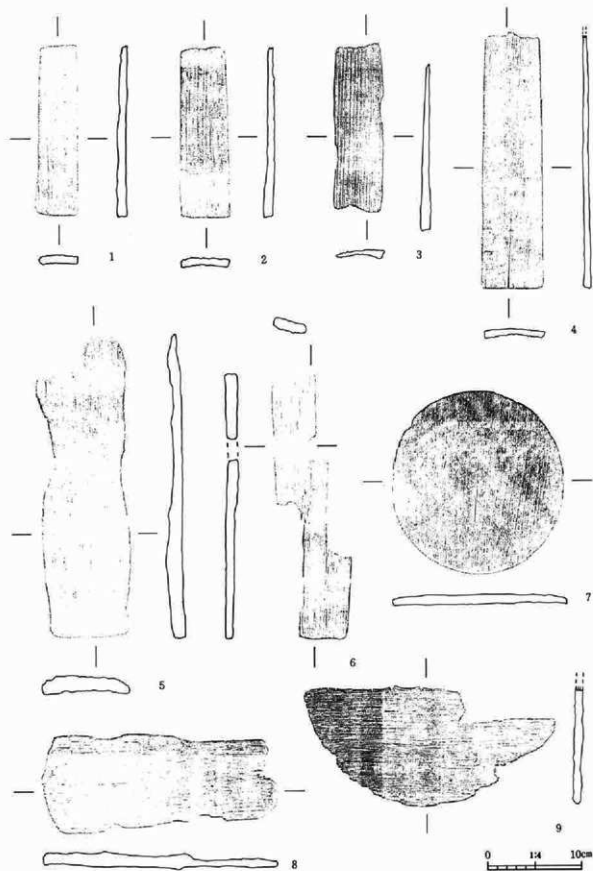
上植木光仙房遺跡の井戸跡からは様々な遺物が出土したが、土器類の大部分は細片であり、殆どのが実測に耐え得るような接合関係は得られなかった。また、29基の井戸跡を調査し、その内の5基（8・14・15・18・23号井戸）から13点の木製遺物が出土した。第273図の角樽は15号井戸から出土したものであり、一部欠損しているが底径10cm・高さ35cmを測り、体部には判読不明ながら墨書が認められた。発掘調査時に保存処理作業を行ったため辛うじて残ったものである。他の遺物については、遺憾ながら保管中に乾燥してしまい、原形をとどめなくなってしまったばかりか、一部には所属遺構が曖昧になってしまったものがある。現状での概要は第112表の通りである。おな、中・近世の陶磁器類については別項で扱った。



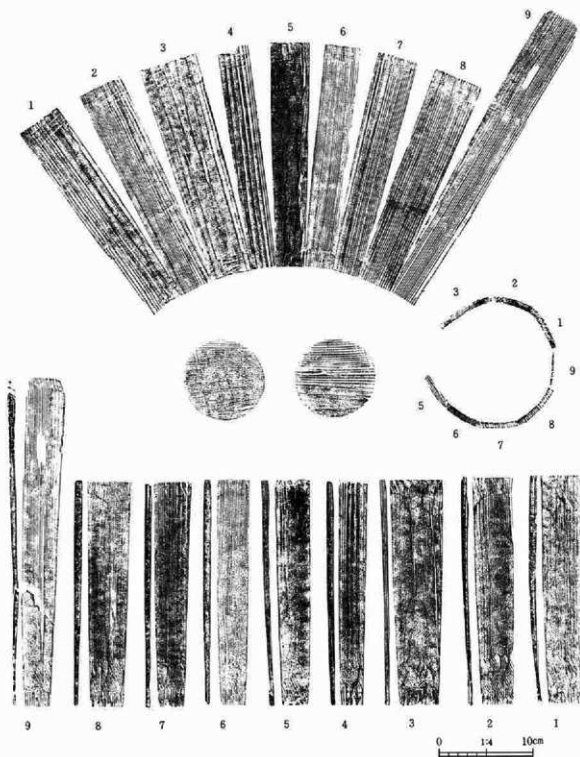
第271図 井戸跡出土遺物実測図

第111表 井戸跡出土遺物観察表

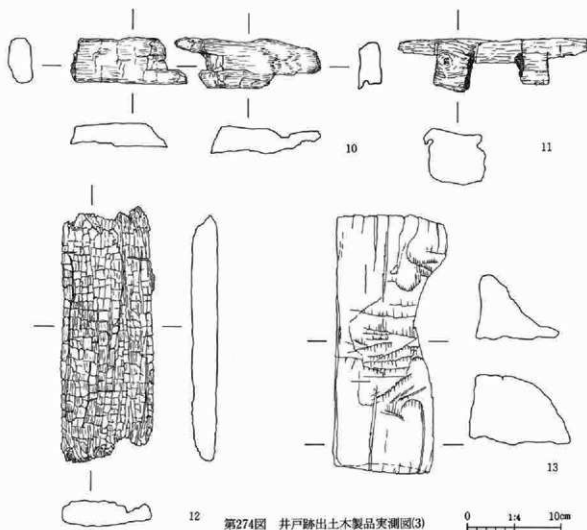
No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 1085	椀 (須恵器)	底部残存 底 6.0cm	1号井戸	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内面に 墨書有り。 軟文「顔」
2 1110	提 瓶 (灰釉陶器)	頸部欠損	4号井戸 覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 濃灰緑色釉。 内面 回転によるナデ。	
3 1118	高台付皿 (灰釉陶器)	1/2残存 口 15.3cm 高 4.0cm 底 6.9cm	22号井戸 覆土中	①均質 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。受け掛けによる濃灰色釉。 外面 底部回転削削り、貼付け高台。口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部強い横ナデ。	
4 1119	長 頸 瓶 (須恵器)	口縁部残存 口 14.4cm	28号井戸	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 口縁部強い横ナデ。 内面 回転によるナデ。	



第272図 井戸跡出土木製品実測図(1)



第273図 井戸跡出土木製品実測図(2)



第274図 井戸跡出土木製品実測図(3)

第112表 井戸跡出土木製品観察表

(単位 cm)

No	長さ	幅	厚さ	出土遺構	特 徴	No	長さ	幅	厚さ	出土遺構	特 徴
1	18.0	4.6	1.2	23号井戸	柱目材の橋の側板。上部をやや厚く作る。下端から2.5cm上にタガの痕跡がある。	8	25.1	10.4	1.6	不 明	板面材の橋の底板。端面は片削ぎされており、側側2箇所ずつ竹釘で接合する。
2	18.1	5.3	1.0	23号井戸	柱目材の橋の側板。1とほぼ同様。	9	26.8	12.7	1.0	不 明	柱面材の橋の底板。端面は平である。竹釘で接合している。
3	17.9	5.4	1.1	23号井戸	柱目材の橋の側板。木芯側を外面にする。下端部欠損か。	10	12.4 15.7	4.9 5.2	2.5 2.7	15号井戸	柱面材、幅1.7cmのホゾ穴が片側から掘られている。用途不明。
4	27.1	6.6	0.8	23号井戸	板目材の橋の側板。下端から1.2cm上に厚さ1.0cmの底板の痕跡がある。	11	20.2	6.0	5.6	15号井戸	下駄の未製品か。一木で台・歯を作る。花緒の穴は穿たれていない。
5	32.1	9.5	1.7	23号井戸	板目材の橋の側板。両側及び端部に横け焦げが認められる。	12	27.0	10.0	2.7	不 明	柱目の板材。両端部欠損。
6	28.0	5.4	0.7	18号井戸	柱目材の橋の側板。木芯側を外面にする。径3.0cmの穴がある。	13	27.4	12.2	7.4	不 明	平載した材の片側を割り落とした工作台。中央部に刃物痕が認められる。
7	19.4	18.2	1.1	不 明	柱目材の橋の底板。端面は平で釘穴は認められない。						

(4) 溝 跡 (第275～280、図版97・98)

本遺跡の調査によって総計36条の溝跡を検出したが、調査区毎に遺構番号を付けたため、明らかに一連の溝と考えられるものでも複数の遺構番号を持つもの(5号溝=8号溝、11号溝=13号溝、20号溝=36号溝、21・22号溝=36号溝、23号溝=29号溝)が有る。なお、調査時に溝番号を付したが検討の結果「土坑」として扱った方が適当と認められるもの(I区・A～J溝)については、次項に収録した。

各遺構の概要は第5表の通りであるが、発掘区の現況図及び地籍図との整合性を検討した結果、道路の側溝(1・2号溝、9・10号溝、31・32号溝)或は耕地や屋敷地の地境の区割りの溝(24・25・30号溝)と考えられるものが認められた。また、重複関係・出土遺物及び覆土の状況から推して、明らかに古代の溝と考えられるものは、21・22・26号溝と23・29号溝のみであり、明確な伴出遺物を持たないものについては詳らかでないが、大半の溝が近世以降のものと考えられる。

なお、5・8号溝、11・13号溝については、奇麗な「箱薬研掘り」状を呈しており、やや古い様相が窺われるが覆土中より近世陶磁器が出土している。

21・22・26号溝については、出土した瓦・土師器・須恵器の様相から推して、9世紀前半の時期が考えられる。性格については積極的証左は無いが、通水の痕跡が認められ、南端部で2つに分岐していることから、集落の東限を画すると共に用水としての機能を果たしていたものと思われる。なお、2号小鍛冶跡関連の遺物の他に、注目すべきものとして緑釉陶器皿が出土している。

23・29号溝については、81・91・93・94号住居跡に先行することが確認されているが、性格は不明である。



第275図 溝跡全体図

第5節 その他の遺構と出土遺物

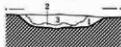
1号溝



1号溝

1. 赤褐色土。
2. 暗褐色土。
3. 褐色土。 F.A.を含む。

2号溝



2号溝

1. 赤褐色土。
2. 暗褐色土。
3. 褐色土。 F.A.を含む。

3号溝



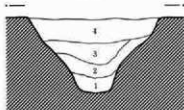
4号溝



7号溝



5号溝



5号溝

1. 暗褐色土。 ロームブロックを少し含む。
2. 暗褐色土。 ロームブロックを含む。
3. 暗褐色砂質土。 ローム粒を含む。
4. 砂層。 ローム粒を少し含む。

6号溝



9号溝



9号溝

1. 褐色土。 ローム粒を含む。
2. 暗褐色砂質土。 F.A.を含む。

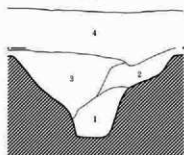
10号溝



10号溝

1. 褐色土。 ロームを多く含む。
2. 黒褐色砂質土。

8号溝



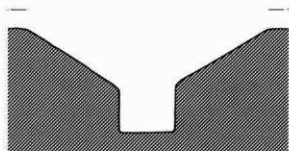
8号溝

1. 暗赤褐色土。 ロームブロックを含む。
2. 暗赤褐色土。 粘性有り。
3. 暗褐色土。
4. 褐色土。

11号溝



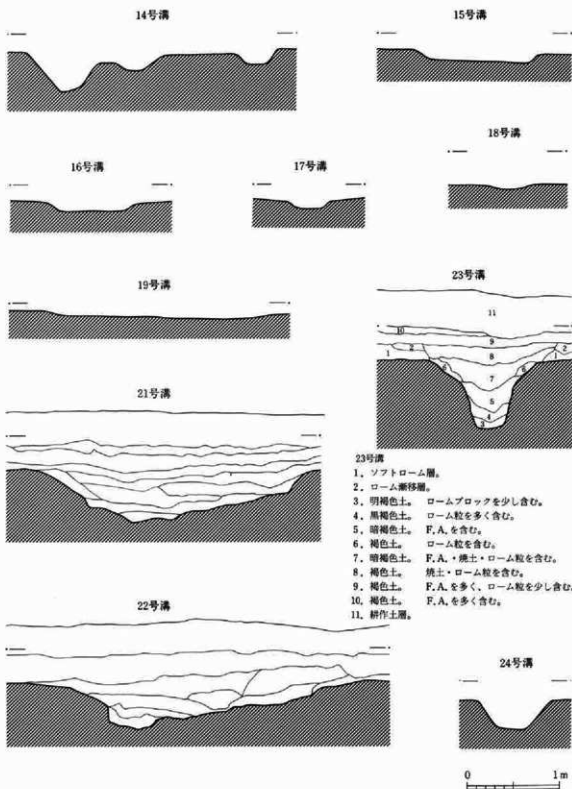
13号溝



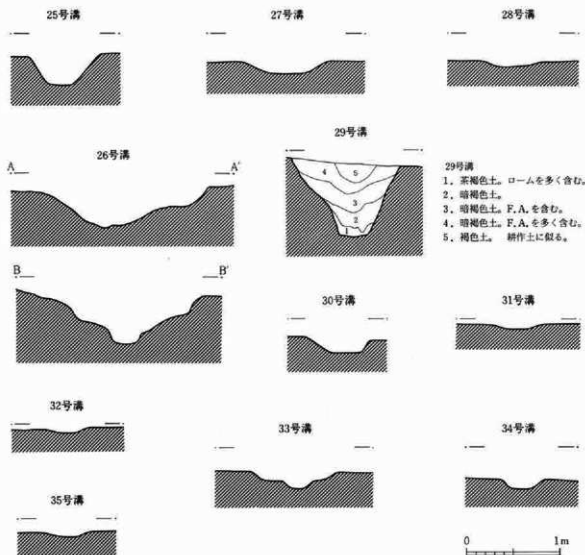
12号溝



第276図 溝跡断面実測図(1)



第277図 溝跡断面実測図(2)



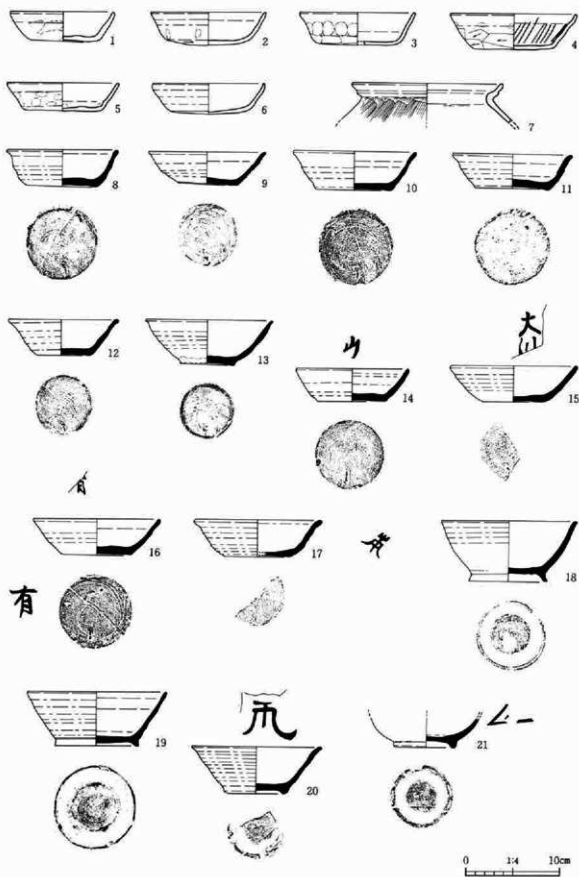
29号溝
 1. 茶褐色土。ローンを多く含む。
 2. 暗褐色土。
 3. 暗褐色土。F.A.を含む。
 4. 暗褐色土。F.A.を多く含む。
 5. 褐色土。耕作土に似る。

第278図 溝跡断面実測図(3)

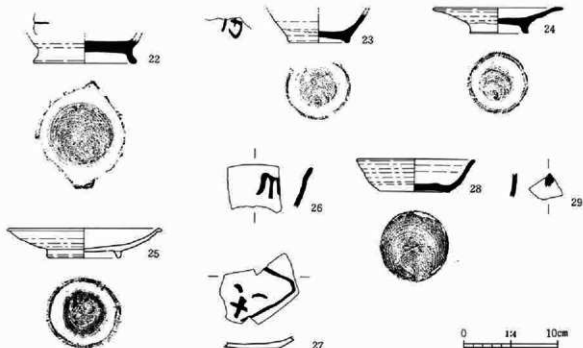
第113表 溝跡出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 967	坏 (土師器)	ほぼ完形 口 11.1cm 高 3.1cm 底 7.4cm	21号溝 中央部	①砂粒を少し含む。 ②褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭瓦痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。	
2 1000	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.5cm	26号溝 南端部	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指頭瓦痕を粗い寛ナデで消す。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。	
3 1002	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.4cm 底 8.5cm	26号溝 北側	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指押さえ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
4 1003	坏 (土師器)	1/2残存 口 13.5cm 高 4.3cm 底 8.5cm	26号溝 北側	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部下半寛削り。口縁部強い横ナデ。 内面 放射状縮文。口縁部強い横ナデ。	
5 1006	坏 (土師器)	1/2残存 口 12.0cm 高 3.0cm 底 8.2cm	26号溝 北側	①砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色 ③酸化炭・良好	外面 底部手持ち寛削り。体部指押さえ。口縁部横ナデ。 内面 寛ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	

第二章 検出された遺構と遺物



第279図 溝跡出土遺物実測図(1)



第280図 溝跡出土遺物実測図(2)

No	器種・器形	残存・量	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
6 1013	坏 (土師器)	ㄥ残存 口 12.0cm 高 3.3cm 底 8.0cm	26号溝 北側	①砂粒を少し含む。 ②によい橙色 ③酸化炎・良好	外面 底部手持ち彫り。体部丁寧なナデ。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
7 1017	壺 (土師器)	ㄥ残存 口 16.2cm	26号溝 北側	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③酸化炎・良好	外面 刷毛目調整。口縁部横ナデ。 内面 麗ナデ後、ナデ。口縁部横ナデ。	
8 993	坏 (須恵器)	ㄥ残存 口 12.0cm 高 3.9cm 底 7.5cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
9 968	坏 (須恵器)	口縁ㄥ欠 口 12.5cm 高 3.4cm 底 6.3cm	21号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
10 991	坏 (須恵器)	ㄥ残存 口 13.2cm 高 4.1cm 底 8.0cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
11 975	坏 (須恵器)	完形 口 12.8cm 高 3.6cm 底 8.6cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
12 974	坏 (須恵器)	口縁一部欠 口 11.8cm 高 3.7cm 底 5.7cm	26号溝 北側	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端彫り。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
13 973	坏 (須恵器)	口縁ㄥ欠 口 13.7cm 高 4.6cm 底 5.6cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炎・硬質	右回転クロコ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	

第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

No	器種・器形	残存・法量	出土状況	①胎土②色調③構成	成・整形の特徴	備考
14 976	環 (須恵器)	完形 口 12.1cm 高 3.5cm 底 7.4cm	26号溝 南端部	①ほぼ均質。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「山」
15 977	環 (須恵器)	1/2残存 口 13.7cm 高 3.8cm 底 6.4cm	26号溝 北側	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「大川」
16 979	環 (須恵器)	1/2残存 口 13.6cm 高 3.8cm 底 7.4cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「有」
17 978	環 (須恵器)	1/2残存 口 13.8cm 高 3.9cm 底 7.1cm	26号溝 南端部	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端弱い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明
18 969	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.5cm 高 6.4cm 底 8.5cm	21号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
19 984	高台付碗 (須恵器)	ほぼ完形 口 15.0cm 高 5.7cm 底 9.0cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
20 986	高台付碗 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm 高 5.0cm 底 6.9cm	26号溝 南端部	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明
21 987	高台付碗 (須恵器)	口縁部欠損 底 6.6cm	26号溝 南端部	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文「△」
22 989	高台付碗 (須恵器)	底部残存 底 11.0cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文不明
23 1191	高台付碗 (須恵器)	口縁部欠損 底 6.6cm	26号溝 南端部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文「田」
24 994	皿 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm 高 2.7cm 底 6.2cm	26号溝 北側	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
25 996	皿 (灰 輪)	1/2残存 口 16.6cm 高 3.1cm 底 8.0cm	26号溝 南端部	①均質。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。掛け掛けによる灰緑色釉。 外面 底部回転調整有り。貼付け高台。口縁部横ナデ。 内面 回転による丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
26 982	環 (須恵器)	口縁部破片	26号溝 覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。外面 口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	体部内面に墨書有り。 釈文不明
27 1014	環 (須恵器)	底部破片	26号溝 北側	①砂粒を多く含む。 ②にぶい棕色 ③酸化炭・硬質	外面 底部～体部覆削り。 内面 丁寧なナデ。	底部内面に墨書有り。 釈文「△」
28 1015	環 (須恵器)	ほぼ完形 口 12.6cm 高 3.5cm 底 7.4cm	29号溝 覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転糸切り未調整。体部下端強い絞り込み。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
29 1016	環 (須恵器)	体部破片	10号溝 覆土中	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元炭・硬質	右回転ロクロ整形。	墨書土器 体部外面に墨書有り。 釈文不明

(5) 土 坑 (第281～296図、図版101・102)

本遺跡の調査によって、総計101基の土坑を確認した。調査記録の不備で、所在が不明になってしまったものが有る。このため、整理作業を進めるに当たり、1/20全体図を基にして形状・規模等から「土坑」と認定できそうなものについても検討を加えたが、必ずしも十分な資料が得られなかったために、所属時期・性格等を解明できたものは殆ど無い。各遺構の概要は第6表の通りである。また、限られた調査記録ではあるが、本遺跡における「新しい土坑」を次のように整理しておきたい。(調査時に遺構番号の付されなかったものについては掲載を割愛した。)なお、明らかに墓塚と認定できるものについては、別項で扱ったが、混在してしまっただかも知れない。

A. 桶を埋設した円形土坑

家庭生活の雑排水の貯蔵用に掘られたものと、墓塚として掘られたものがある。後者の方が規模が大きく、覆土の状況が異なることや副葬遺物が出土する可能性が高いこと等から識別は可能である。前者は、桶を埋設するだけでなく、保水性を高めるために周囲を粘質土で被覆することが多く、便器として同様の物が作られる場合も有る。2基が近接して掘られている場合は、同一の機能を持ったものではなく、肥料として使用する際に糞尿を希釈する必要が有るため、効率的な配置をした結果と考えられる。

B. 耕作に伴うと考えられる長方形土坑

牛蒡・ウド・長芋等の根菜類の栽培床の整備のために掘られた比較的深く、床面の整ったものと、栽培した作物の収穫作業時に掘られた浅いものがある。いずれも、耕地の立地に規制されるが、日照方向の関係から概ね東西方向に掘られる。覆土は、前者の方が比較的疎粒のものを多く含む傾向にある。また、換金作物として栽培する場合を除いては、需要量及び連作障害を避けるために同一形態のものが多数併存したり、著しく重複して掘られることは希である。時期決定の積極的証左は無く、覆土の固さも上面からの墳丘具合によって大きく左右されるため、一概に固く締まっているものが古いとすることは出来ない。なお、甘藷の苗を栽培するために掘られるものがあるが、これは前述のものよりも短く、箱形を呈することが多い。

C. 農作物の貯蔵穴と考えられる長方形土坑

食料・種の冬季保存用で、屋敷地内に掘られたものと、屋敷地に近接した耕地に掘られたものとがある。前者は、家屋と密接に関係しているため、比較的近接して掘られることが多い。後者は、回収効率の関係から耕地の外縁部に近い位置に掘られることが多い。いずれも、寒気を避けるために日当たりの良い場所が選定される。露地で土をかけるだけでなく、内部に断熱効果の有る藁敷や藁等を入れる場合もあり、上部に簡単な覆屋を設けて雨水の浸透を防ぐことが一般的である。時期決定の積極的証左は無いが、前述の通りの規制が有ることから、重複して掘られる場合が多いと考えられる。

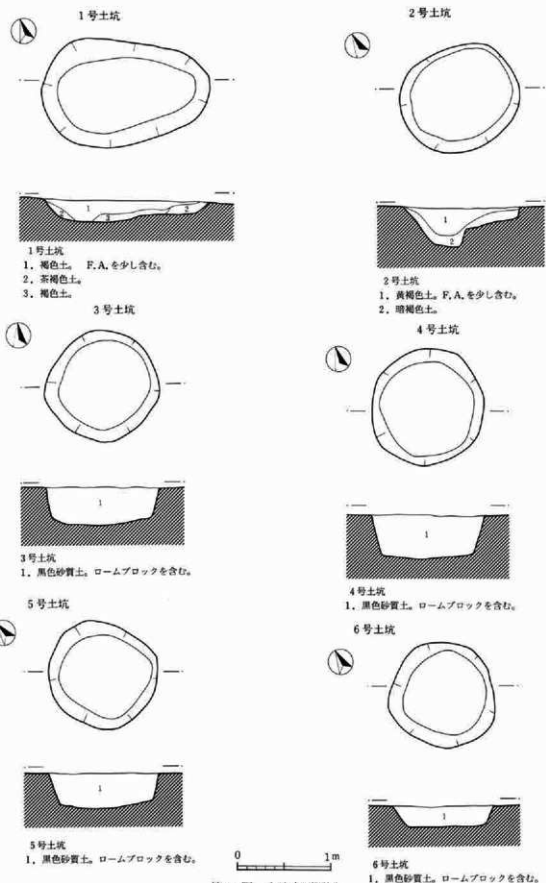
D. 工作物の柱穴と考えられる小土坑

柱根を埋めるために掘られたもので、平面形が円形を呈するものと、隅丸方形を呈するものとがある。底面が大まかに整えられ、覆土の状況が異なることから、植物の根による攪乱とは識別が可能である。

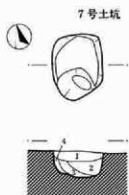
E. 不整形土坑

ゴミ穴・動物の埋葬等のために掘られたもの。

F. その他の土坑

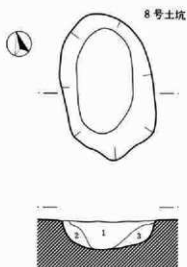


第281図 土坑実測図(1)



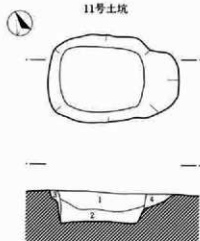
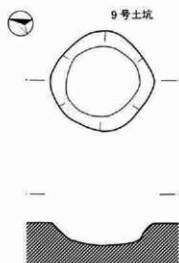
7号土坑

1. 黒褐色土。炭化物を含む。
2. 黒褐色土。ローム粒を少し含む。
3. 暗褐色土。ローム粒を含む。
4. 暗褐色土。ロームブロックを含む。



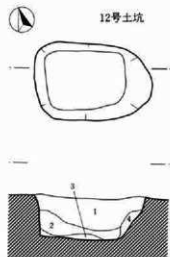
8号土坑

1. 黒褐色土。炭化物を多量に含む。
2. 黒褐色土。炭化物・ローム粒を含む。
3. 暗褐色土。ロームブロックを含む。



11号土坑

1. 暗褐色土。F.A.を少し含む。
2. 暗褐色土。
3. 茶褐色土。
4. 暗茶褐色土。



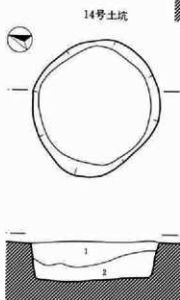
12号土坑

1. 暗褐色土。F.A.を含む。
2. 黒褐色土。
3. 黒褐色土。ローム粒を含む。
4. ロームブロック。



13号土坑

1. 褐色土。F.A.・礫土を少し含む。
2. 暗褐色土。ローム粒を含む。



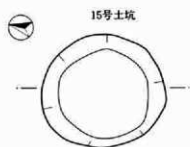
14号土坑

1. 褐色土。ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土。やや粘性有り。



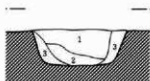
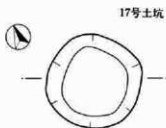
第282図 土坑実測図(2)

第II章 検出された遺構と遺物



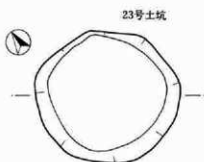
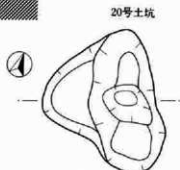
15号土坑

1. 茶褐色土。やや粘性有り。
2. 茶褐色土。
3. 暗褐色土。

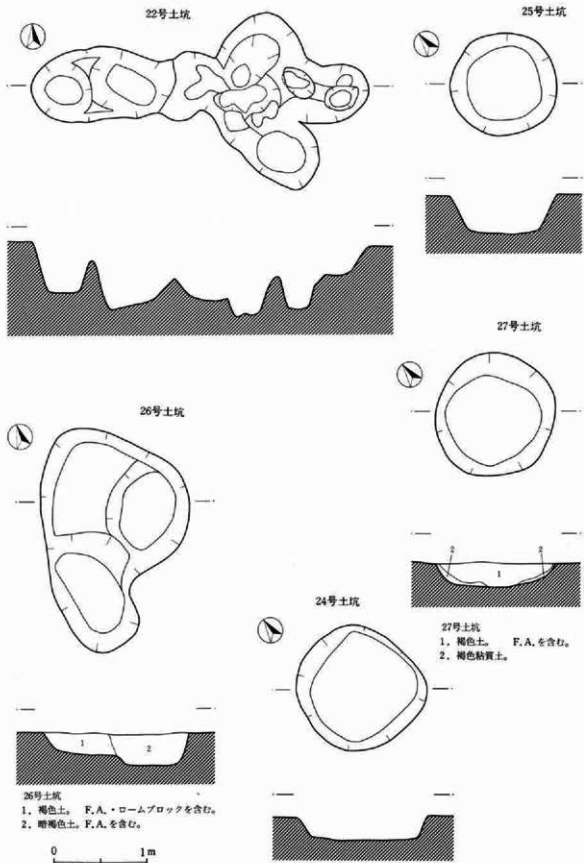


17号土坑

1. 暗褐色土。F.A.を含む。
2. 黒色土。ローム粒を少し含む。
3. 黒色土。ローム粒を多量に含む。

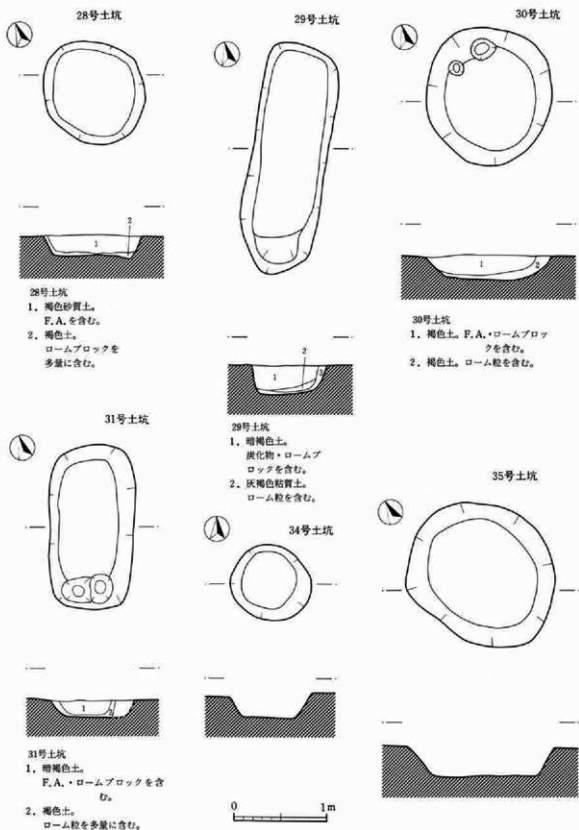


第283図 土坑実測図(3)

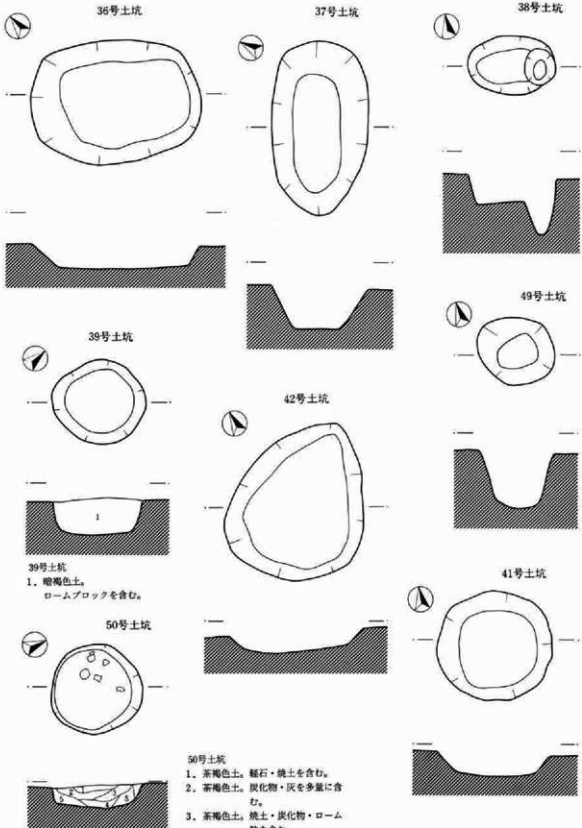


第284図 土坑実測図(4)

第II章 検出された遺構と遺物



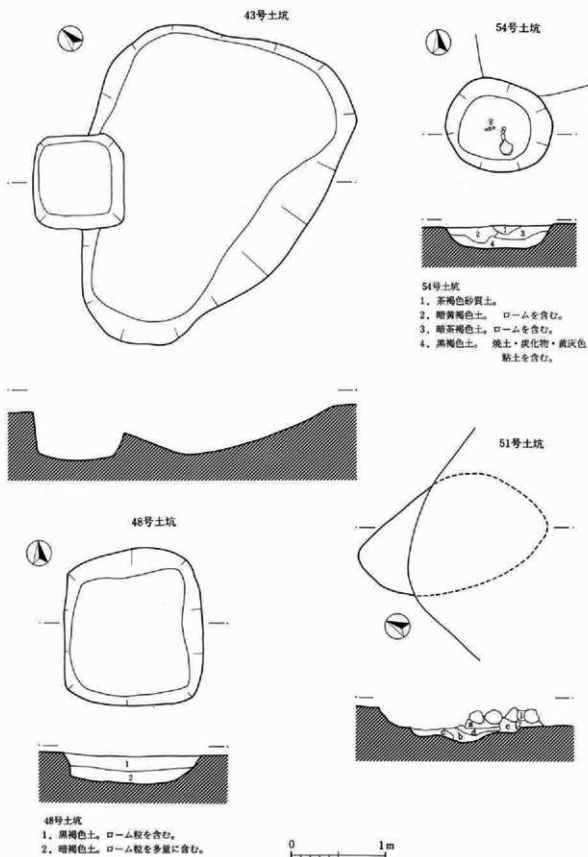
第285図 土坑実測図(5)



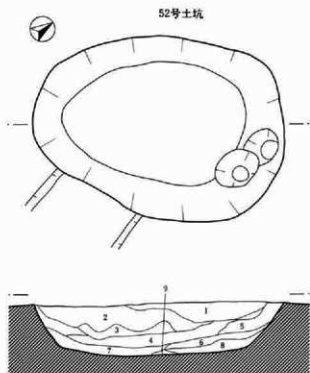
39号土坑
1. 暗褐色土。
ロームブロックを含む。

- 50号土坑
1. 茶褐色土。礫石・焼土を含む。
 2. 茶褐色土。炭化物・灰を多量に含む。
 3. 茶褐色土。焼土・炭化物・ローム粒を含む。
 4. 灰褐色土。炭化物を多量に含む。
 5. 茶褐色土。焼土・炭化物を含む。

第286図 土坑実測図(6)

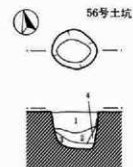
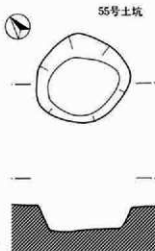


第287図 土坑実測図(7)



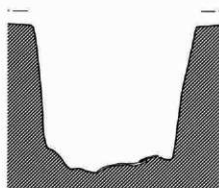
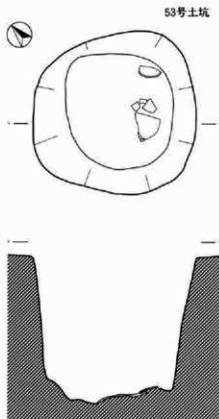
52号土坑

1. 淡褐色土。軽石・ローム粒を多量に含む。
2. 黒褐色土。軽石・ローム粒を含む。
3. 黒褐色土。軽石・ローム粒を少し含む。
4. 黒褐色粘質土。ローム粒を多量に含む。
5. 黒褐色粘質土。ローム粒を少し含む。
6. ロームブロック。
7. 黒灰色土。ローム粒を含む。
8. 黒灰色粘質土。ローム粒を少し含む。
9. 黒灰色粘質土。

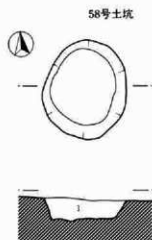


56号土坑

1. 茶褐色土。F.A.を少し含む。
2. 淡茶褐色土。
3. 明茶褐色土。
4. 褐色土。



0 50cm



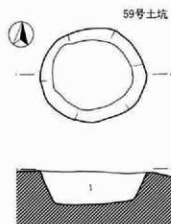
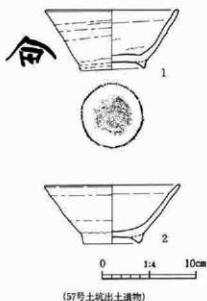
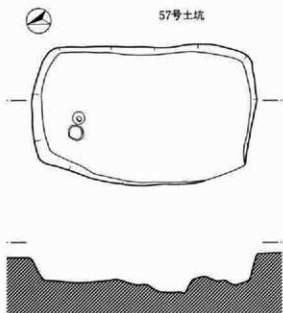
58号土坑

1. 暗褐色土。ローム粒を少し含む。やや粘性有り。

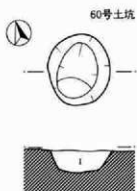
0 1m

第288図 土坑実測図(8)

第II章 検出された遺構と遺物



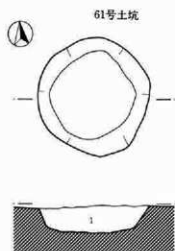
59号土坑
1. 暗褐色土。
ロームブロックを含む。



60号土坑
1. 暗褐色土。
ロームブロックを含む。



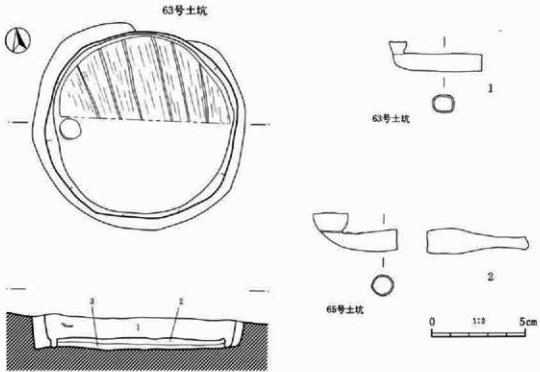
62号土坑
1. 暗褐色土。ロームブロックを含む。
2. 褐色土。ローム粒を含む。



61号土坑
1. 暗褐色土。
ロームブロックを含む。

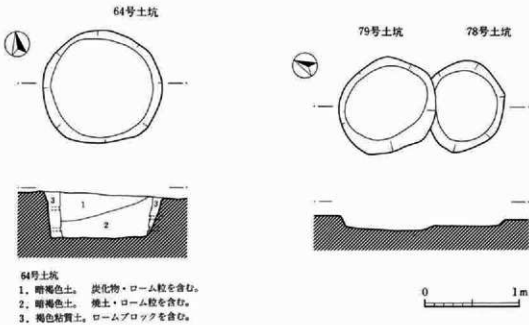


第289図 土坑実測図(9)



63号土坑

1. 暗褐色土。 ローム粒を含む。
2. 白灰色粘土。
3. 褐色土。 ローム粒を多量に含む。



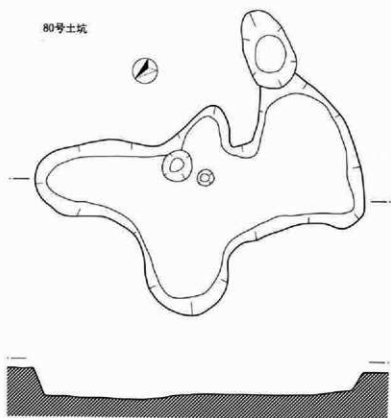
64号土坑

1. 暗褐色土。 炭化物・ローム粒を含む。
2. 暗褐色土。 雑土・ローム粒を含む。
3. 褐色粘質土。 ロームブロックを含む。

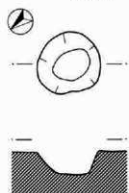
第290図 土坑実測図00

第II章 検出された遺構と遺物

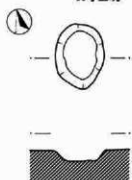
80号土坑



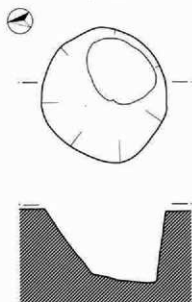
83号土坑



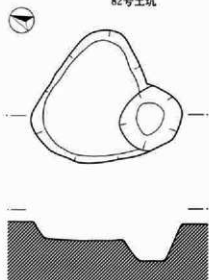
85号土坑



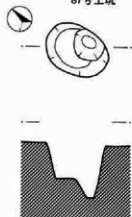
81号土坑



82号土坑



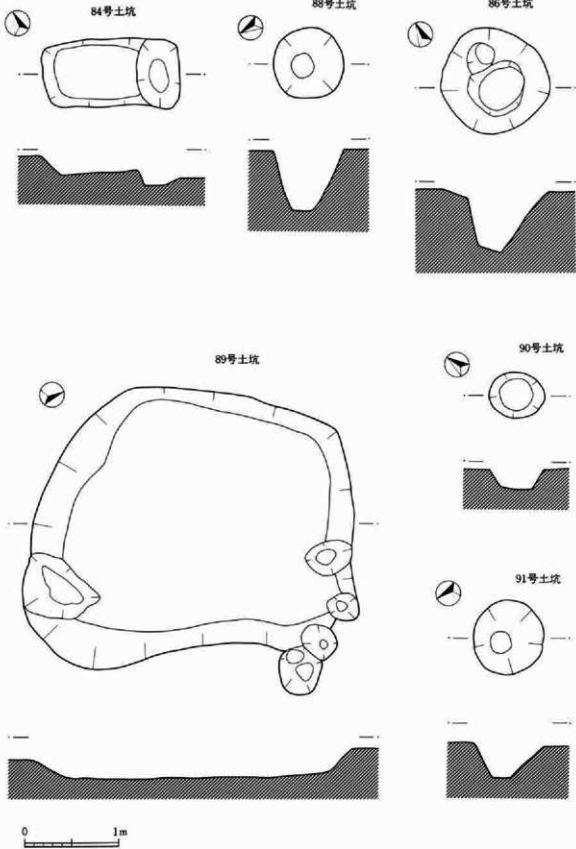
87号土坑



0 1m

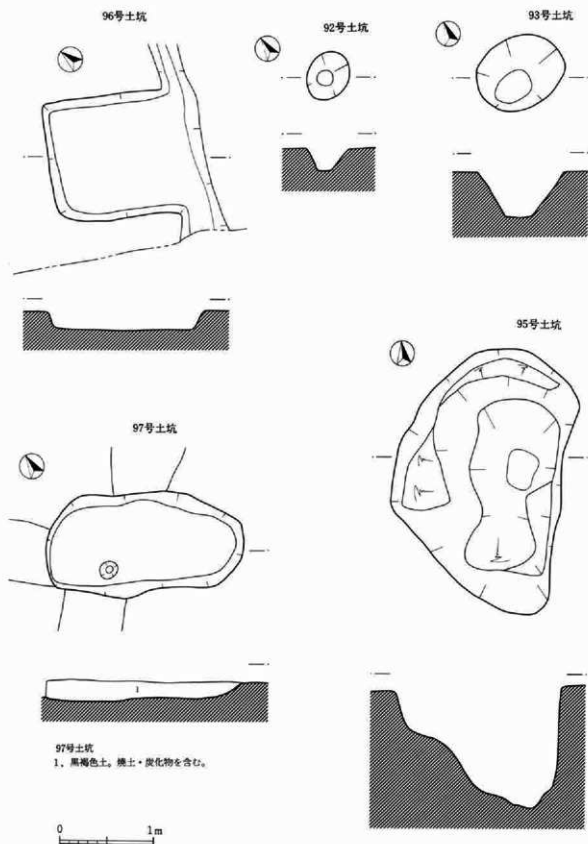
第291圖 土坑実測図(1)

第5節 その他の遺構と出土遺物



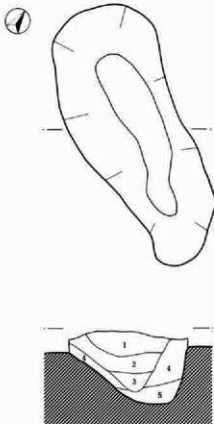
第292図 土坑実測図(1)

第II章 検出された遺構と遺物



第293図 土坑実測図①

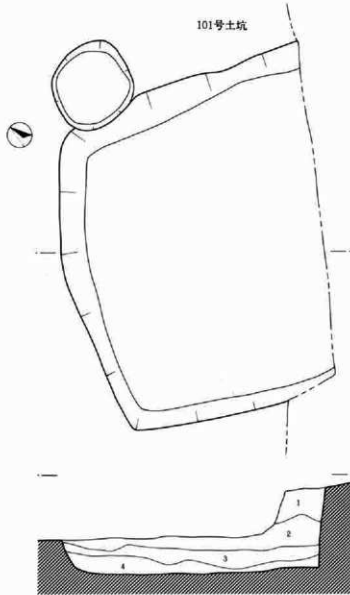
100号土坑



100号土坑

1. 黒色土。ローム粒を含む。
2. 黒色土。ローム粒を少し含む。
3. 黒色土。ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土。ローム粒を含む。
5. 暗褐色土。ロームブロックを含む。

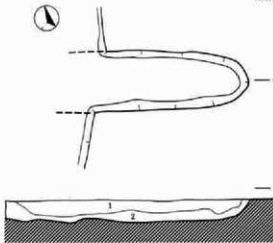
101号土坑



101号土坑

1. 明褐色土。
2. 暗褐色土。
3. 暗茶褐色土。
4. 黒褐色土。

98号土坑

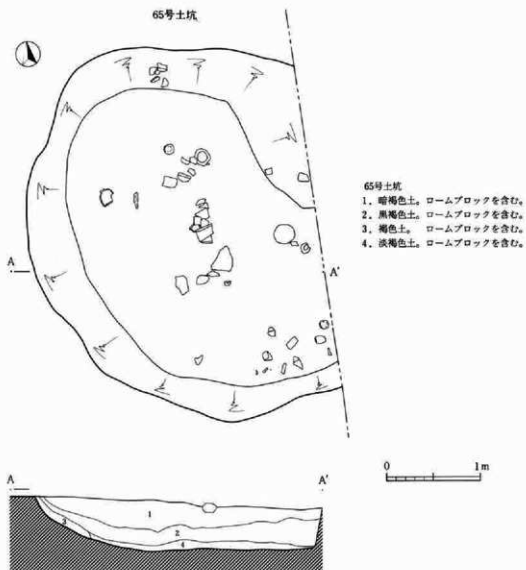


98号土坑

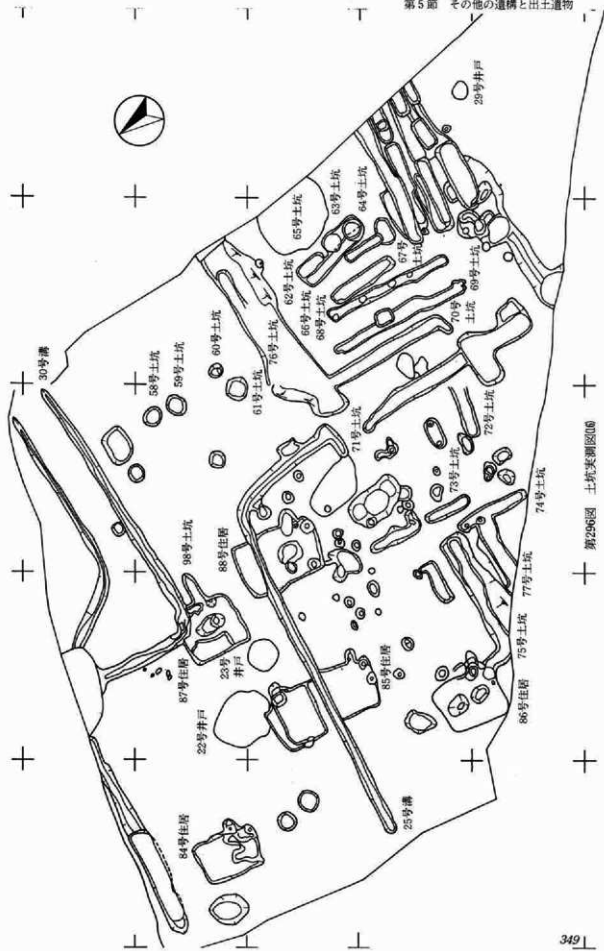
1. 黒褐色土。F.A.・焼土粒を含む。
2. 黒褐色土。ロームブロックを含む。

0 1m

第294図 土坑実測図00

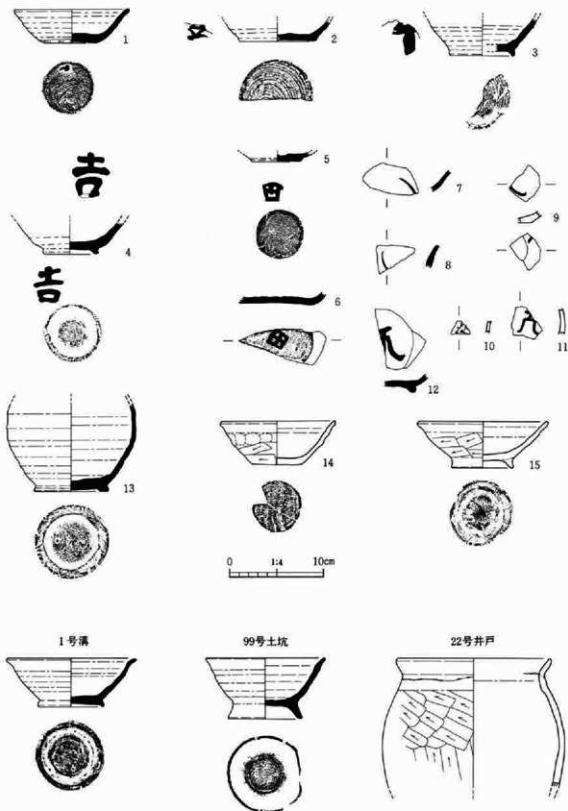


第295図 土坑実測図⑬



第256図 土坑実測図①

第6節 グリッド出土の遺物



第297図 グリッド出土遺物実測図

第114表 グリッド出土遺物観察表

No	器種・器形	残存・量	出土状況	胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1 1167	環 (須恵器)	1/2残存 口 12.4cm 高 3.6cm 底 5.7cm	III区 37B-38	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端磨削。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。	
2 1159	環 (須恵器)	底部1/2残存 底 8.1cm	III区 5C-46	①砂粒を少し含む。 ②灰色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り未調整。体部下端磨削・絞り込み。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
3 1158	高台付轆 (須恵器)	1/2残存 底 6.8cm	V区 北西部	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	体部外面に墨書有り。 釈文不明
4 1160	高台付轆 (須恵器)	底部残存 底 5.8cm	IV区 46C-41	①砂粒を含む。 ②灰白色 ③還元灰・軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。 内面 回転によるナデ。	底部内・外面に墨書有り。 釈文「吉」
13 1175	瓶 (灰釉陶器)	上半部欠損 底 8.0cm	II区	①緻密。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。内外面に降伏輪が掛かる。 外面 底部回転後削り。貼付け高台。 内面 回転によるナデ。	
14 1169	環 (須恵器)	1/2残存 口 12.4cm 高 4.6cm 底 5.4cm	II区	①砂粒を少し含む。 ②ふいふ褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部一部手持ち磨削。頸部指環圧痕。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
15 1168	高台付轆 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm 高 4.9cm 底 6.7cm	III区	①砂粒を少し含む。 ②ふいふ褐色 ③酸化灰・硬質	外面 底部一部手持ち磨削。頸部指環圧痕。口縁部横ナデ。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。	
高台付轆 (須恵器)	1/2残存 口 14.0cm 高 5.1cm 底 7.2cm	1号溝	①砂粒を少し含む。 ②灰白色 ③還元灰・硬質	右回転ロクロ整形。 外面 高台貼付け後のナデのため底部切り難し技法不明。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。		
高台付轆 (須恵器)	1/2残存 口 13.0cm 高 6.5cm 底 7.9cm	II区99号土坑 実態不明	①砂粒を少し含む。 ②浅黄色 ③還元灰・軟質	右回転ロクロ整形。 外面 底部回転未切り後、高台貼付け。口縁部横ナデ。 内面 回転によるナデ。口縁部横ナデ。		
壺 (土師器)	1/2残存 口 16.7cm	22号井戸	①砂粒を多く含む。 ②灰白色 ③酸化灰・良好	外面 体部磨削。頸部へ口縁部横ナデ。 内面 体部上半部磨削。口縁部横ナデ。		

石製品 (第298・299図、図版90・103)

1は、II区のほぼ中央部から出土した粗粒の輝石安山岩で、不整六角柱状を呈する。全長17.4cm・最大幅11.7cm・厚さ7.4cmを測る。側面の一部には研がれて滑沢になった部分が認められる。また、一部に焼けて痕跡が認められることから、砥石を住居の竈の支脚として転用したものと考えられる。

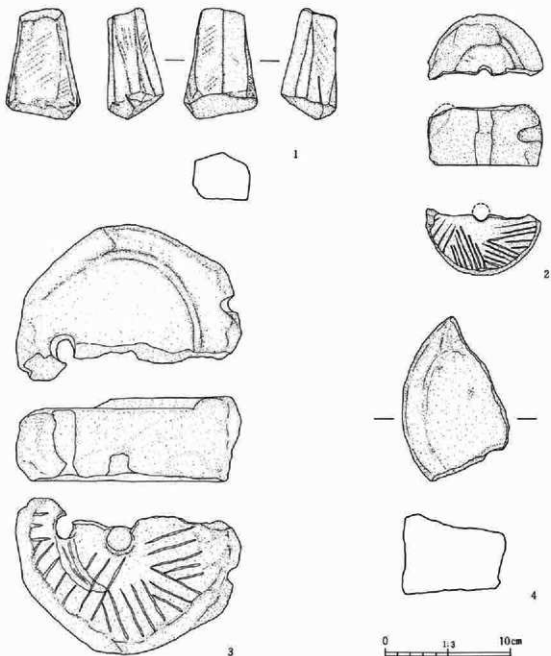
2は、V区の1号溝覆土上部から出土した輝石安山岩製の茶臼の上白破片である。側面の一部には縦方向のノミ痕が認められるが、大部分が剝離している。最大径19.6cm・厚さ9.6cm・重さ1700gを測る。上縁部は大部分が欠損しているがやや内傾しており、径約10.4cmの窪みが掘られている。挽手は横打込み式で、一辺約2.7cm・深さ3.8cmの隅丸方形の穴が穿たれているが、周囲に装飾は認められない。白面の径は18.2cmで、原料供給口(径2.3cm)と芯木受け(径2.8cm)はややずれており、約0.3cmのふくみが認められる。目は、0.6～1.0cm間隔のV字型の溝で、5～7本一組の八分画と考えられる。すり合わせ部は、幅約3cmで滑沢になっている。

3は、III区の北西部から出土した輝石安山岩製の粉挽き臼の上白破片である。側面は殆ど剝離しており、

第II章 検出された遺構と遺物

最大径35.4cm・厚さ13.3cm・重さ13450gを測る。上縁部は幅約4.0cmでやや内傾しており、径24cm・深さ1.5cmの窪みが掘られている。原料供給口は径4.0cmを測る。挽手は一部欠損しているが「つくりつけ式」で、径2.6cmの挽木受の穴が認められる。芯棒受けは滑り止め付きと考えられ、径4.0cm・深さ4.0cmの穴に長さ2.5cmの張り出し部が掘られている。目は、1.5～2.0cm間隔のV字型の溝で、4～7本一組で分画されている(分画数不明)。すり合わせ部は、幅約7cmで滑沢になっている。ものくぼりは楕円形を呈しており、約1.5cmのふくみが認められる。

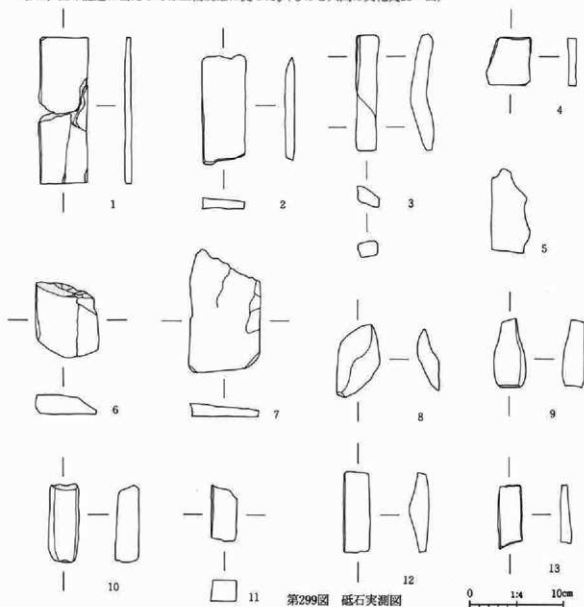
4は、I区の南西部から出土した牛伏砂岩製の粉挽臼の上臼破片である。側面は比較的良く残っており、径36.0cm・厚さ12.8cm・重さ6280gを測る。上縁は剝離が目立つが、径約29.0cmの浅い窪みが掘られている。



第298図 石臼実測図

挽手は「つくりつけ式」とかながえられる。原料供給口の一部が確認できるが、白面の遺存状態が芳しくなく、目の状態・分画数等の詳細は不明である。

なお、白の記述に当たっては三輪茂雄に頼った。(ものと人間の文化史25・白)

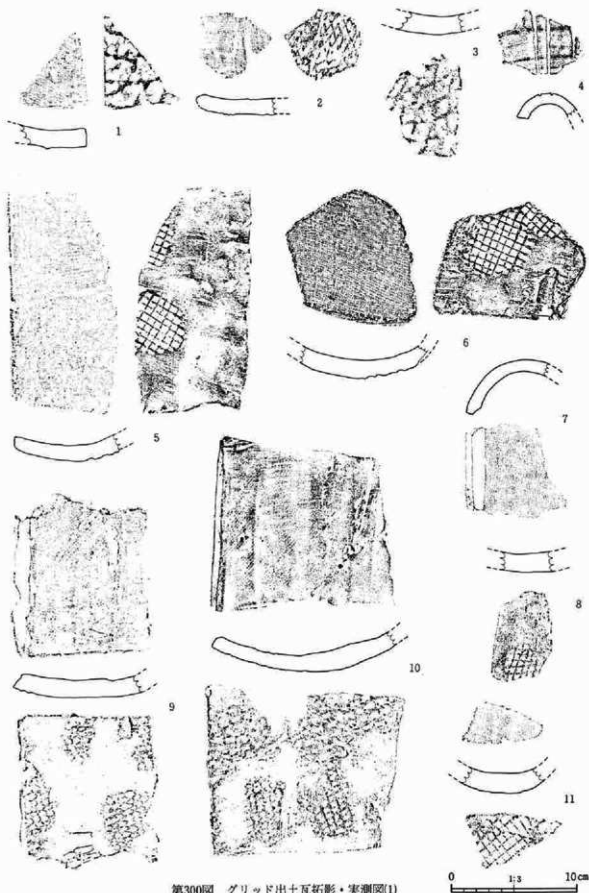


第299図 砥石実測図

第115表 グリッド出土砥石一覧表

(単位 cm・g)

No	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	No	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石 材
1	H土坑	15.2	5.2	0.9	103	泥 岩	8	1号井戸	7.7	4.7	2.2	67	流紋岩 (砥沢?)
2	H土坑	11.5	4.7	1.0	102	流紋岩 (砥沢?)	9	8号井戸	7.2	3.4	2.3	78	流紋岩 (砥沢?)
3	H土坑	12.3	2.5	2.4	88	流紋岩 (砥沢?)	10	I 区	8.2	3.2	2.5	110	流紋岩 (砥沢?)
4	H土坑	5.0	4.6	0.9	36	流紋岩 (砥沢?)	11	I 区	5.9	2.7	2.2	65	流紋岩 (砥沢?)
5	H土坑	8.8	4.3		22	泥 岩	12	I 区	8.5	2.9	2.1	65	流紋岩 (砥沢?)
6	H土坑	7.9	6.8	2.0	170	泥 岩	13	E 溝	6.7	2.6	1.2	29	
7	H土坑	13.0	7.5	1.3	166								



第300図 グリッド出土瓦拓影・実測図(1)

第6節 グリッド出土の遺物



第301図 グリッド出土瓦拓影・実測図(2)

第116表 グリッド出土瓦観察表

No.	種類	厚さ	出土状況	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
1	平瓦	1.8	5号井戸	①砂粒を少し含む。 ②灰黄色。織状。 ③還元炎・硬質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 布目痕。粘土板余切り痕及び横骨痕が認められる。横巻作り。側面面取り2面。	
2	平瓦	1.6	14号井戸	①白色粒子を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	凸面 斜格子の印目。 凹面 布目痕。横骨痕が認められる。横巻作り。側面面取り2面。	
3		2.0	11号溝	①緻密。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・軟質。	凸面 大きな斜格子の印目。 凹面 布目痕を指して丁寧にナゲ消している。 二次焼成を受ける。	
4	脚部	1.1	12号溝	①緻密。 ②灰色。 ③還元炎・硬質。	外面 二条の沈線が認められる。(透かし孔未完成?) 内面 回転によるナゲ。 ※須恵器の脚部であろう。	※須恵器
5	平瓦	1.7	21号溝	①白色砂粒を少し含む。 ②にぶい黄褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 楕円形の正格子の印目。不定方向削り。 凹面 細かい布目痕。横巻作りか?。側面面取り1面。	
6	平瓦	1.9	21号溝	①白色及び褐色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・軟質。	凸面 正格子の印目。 凹面 細かい布目痕。粘土板余切り痕が認められる。	
7	丸瓦	1.3	21号溝	①白色及び黒色粒子を含む。 ②稀灰色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向のナゲ。 凹面 細かい布目痕。側面面取り3面。	
8		2.1	21号溝	①白色粒子を少し含む。 ②灰色と灰白色の織 ③還元炎・焼締め	凸面 正格子の印目。縦方向のナゲ。 凹面 全面指ナゲ。	
9	平瓦	2.0	21号溝	①白色粒子を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 正格子の印目。 凹面 布目痕を指して粗くナゲ消す。粘土板余切り痕・横骨痕が認められる。横巻作り。側面面取り2面。	
10	平瓦	2.2	21号溝	①白色粒子を少し含む。 ②灰色。 ③還元炎・焼締め。	凸面 正格子の印目。 凹面 細かい布目痕を指ナゲで粗く消す。横骨痕が認められ。横巻作り。側面面取り3面。	
11		2.1	21号溝	①白色及び褐色粒子を含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・軟質。	凸面 正格子の印目。 凹面 布目痕。	
12	平瓦	1.9	24号溝	①白色砂粒を含む。 ②灰色とにぶい褐色の織。 ③還元炎・焼締め。	凸面 縦方向のナゲ。 凹面 布目痕を指ナゲで粗く消す。側面面取り2面。	
13	平瓦	2.2	24号溝	①白色粒子をごく少く含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	凸面 斜格子の印目。 凹面 細かい布目痕。粘土板余切り痕及び粘土の合わせ目が認められる。横巻作り。側面面取り2面。	
14	丸瓦	1.2	26号溝	①白色及び黒色粒子を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 縦方向のナゲ。 凹面 細かい布目痕を指ナゲで粗く消す。粘土板余切り痕が認められる。横巻作り。側面面取り2面。二次焼成を受ける。	
15	丸瓦	1.7	26号溝	①粗雑。織状。 ②灰白色。 ③還元炎・硬質。	凸面 回転によるナゲ。 凹面 布目痕を指・置ナゲで粗く消す。粘土紐(?)接合痕が認められる。横巻作り。側面面取り2面。	

第6節 グリッド出土の遺物

No.	種類	厚さ	出土状況	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	備考
16	平瓦	1.3	9号古墳	①白色砂粒を少し含む。 ②褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 指ナデ。 凹面 布目肌。側面取り3面。	
17	丸瓦	1.3	26号溝	①白色砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向の粗い瓦ナデ。 凹面 細かい布目肌。粘土板赤切り痕が認められる。側面取り3面。	
18	丸瓦	1.6	26号溝	①白色砂粒を含む。 ②褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向の粗い瓦ナデ。 凹面 布目肌。横脊が認められる。褐色作り。側面取り2面。	
19	丸瓦	1.4	26号溝	①白色砂粒を少し含む。 ②にぶい褐色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向の粗い瓦ナデ。 凹面 細かい布目肌。側面取り3面。	
20	丸瓦	1.7	26号溝	①白色及び黒色砂粒を少し含む。 ②灰黄色。 ③還元炎・硬質。	凸面 縦方向の粗い瓦ナデ。 凹面 細かい布目肌。側面取り3面。	
21	平瓦	2.1	II区	①白色粒及び砂礫を含む。 ②灰色。 ③還元炎・軟質。	凸面 縄の印目。 凹面 粗い布目肌。中央に浅い分画線が認められる。側面取り2面。一枚作りか？。裏瓦か？。	
22		2.1		①黒色及び褐色砂粒を含む。 ②灰褐色。 ③還元炎・やや軟質	凸面 斜格子の印目。 凹面 布目肌。二次焼成を受ける。	

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

1. はじめに

上植木光仙房遺跡は伊勢崎市三和町に所在する。三和町は、江戸時代を通じて上植木村に属していた。上武道路建設に伴い、村の北方を南東から北西に幅約60mに亘って発掘調査を行った。この調査により、江戸時代中・後期を中心とした陶磁器類943点が出土した。この内、473点が軟質陶器である。今回の報告に当たって、中世の陶磁器はすべて掲載した。近世陶磁器類の掲載に当たっては、出土量の多いH土坑・1号井戸は遺存率の高い個体を選択し、出土量の少ない遺構については時期推定の必要から小片をも選択した。なお、本遺跡出土陶磁器の主体は19世紀代に属するため、選択に当たっては地方窯製品に留意した。軟質陶器については口縁部片159点、体部・底部片314点が出土しているが、口縁部の遺存率の高いものを掲載した。各資料の個別別説明は観察表に記した。

2. 陶磁器について

①H土坑(第289～291図)

H土坑は、調査区南東隅で検出された径4m・深さ50cmの浅いものである。H土坑からは143点の陶磁器と93点の軟質陶器が出土し、それぞれ47点と5点掲載した。出土遺物のうち、明らかな混入は44の龍泉窯系青磁碗のみであり、他はすべて江戸時代の遺物である。

江戸時代の陶磁器中最も古いのは、染付徳利(29)と染付油壺(32)、鳥形色絵人形(37)であり、年代は17世紀後半～18世紀前半と考えられる。18世紀代に属するものは、伊万里系碗(10～12・14・15)、同青磁瓶(33)等がある。軟質陶器では内耳焙烙(48・49)がこの時期に属するが、48は型的に49より新しいと考えられる。18世紀末～19世紀前半の陶磁器は、伊万里系染付丸碗(16～21)、瀬戸・美濃系染付端反碗(27)、製作地不詳の陶器碗(25・26)、水滴(36・40)、植木鉢(43)、搦鉢(46)等がある。軟質陶器では十能(51)がある。この時期になると、地方窯の製品(38・39・41)や近年注目されている堺搦鉢(46)が認められるようになる。これらの中で、下限を示すものとして水滴がある。36は「天保通宝」を模した水滴であり、天保通宝は天保6年(1835)から明治2年(1869)まで製造されていたこと、呉須が人造でないことから、使用年代を天保6年から明治初期に求められる。40の水滴は、安政2年(1855)～明治元年(1868)まで存続した松前藩戸切地陣屋跡で同文様の水滴が出土しており、使用年代を同時期に求めることができる。

②1号井戸(第291・292図)

1号井戸は井戸の中で最も出土量が多く、陶磁器63点、軟質陶器42点が出土し、それぞれ18点と2点掲載している。これらのうち、混入品は内耳碗(20)と焼締陶器壺(17)で、共に中世の所産である。1号井戸の陶磁器は最も古い2・8・9・10・14が18世紀後半にさかのぼる可能性がある程度である。1・3・5・12・18は19世紀前半～中頃と考えられ、5・11・15は幕末～明治時代、6・7・16・19は明治時代と考えられる。1号井戸の廃棄年代は陶磁器から明治時代と推定されるが、江戸時代の陶磁器も量、残存率共に明治時代のもと同様であるため、周辺での居住は継続していたと考えられる。この井戸は後述する絵図や地元の屋敷地からは外れている。

③8号井戸(第292・293図)

8号井戸からは37点の陶磁器、13点の軟質陶器が出土し、陶磁器9点を掲載した。

8号井戸も18世紀代の陶磁器は21と26のみであり、22・24・28は明治時代、他は19世紀前半～中頃の所産である。量的には少ないが、時期的には1号井戸と同様である。25の碗蓋には焼き賑が認められ、つまみ

内には漆で「イロ??(数字か)」と書かれている。また27の皿には鉛ガラスで文字か記号が書かれており、焼き窯ぎされていた可能性が高い。これらの文字・記号は、焼き窯ぎ師が注文者識別のために付した符丁と推測される。今後この種の文字・記号を集成すれば、焼き窯ぎ師の行動範囲を推定する手掛かりになると思われる。

④14号井戸 (第293図)

14号井戸からは4点の陶磁器、5点の軟質陶器が出土し、それぞれ3点と1点を掲載した。いずれも18世紀代の陶磁器類である。

⑤22号井戸 (第293図)

22号井戸からは1点の陶磁器、2点の軟質陶器が出土し、すべてを掲載した。14号井戸同様18世紀代に廃棄されたと考えられる。

⑥F土坑 (第293図)

F土坑は17世紀後半の染め付け皿1点のみの出土であるが、他にキセルの雁首も出土しており、その型式からほぼ同時期と考えられる。

⑦溝 (第293・294図)

溝からは23点の陶磁器類、24点の軟質陶器が出土し、14点と4点を掲載した。溝出土の陶磁器は出土量も少なく、小片であるため時期決定には不十分であるが、全体を見るとH土坑、井戸同様、18世紀～19世紀中頃を主体とし、明治時代のものが少量認められる程度である。

⑧グリッド等 (第294・295図)

住居跡覆土、表土からは陶磁器247点、軟質陶器299点が出土し、陶磁器のみ7点を掲載した。時期的には18世紀～19世紀中頃である。出土量を区毎に見てみるとI区178点、II区185点、III区59点、IV区46点、V区77点、VI区1点となり、東に密な分布を示している。

⑨小 結

以上、各遺構毎に出土陶磁器を概観したが、全体としてはI区～III区に17世紀後半～明治時代に至る遺構が存在し、陶磁器の出土状態も溝を除き一次的な廃棄と考えられる。17世紀後半～18世紀前半の陶磁器はI区だけに認められる。I区は近世・近代の遺構・遺物共に本遺跡内で最も集中する場所であり、屋敷地が近接して存在していた可能性も考えられる。この後、18世紀～明治時代にはI区～IV区に陶磁器・遺構が認められ、西に居住域が拡大していったことが窺える。

3. 絵図・地図との比較

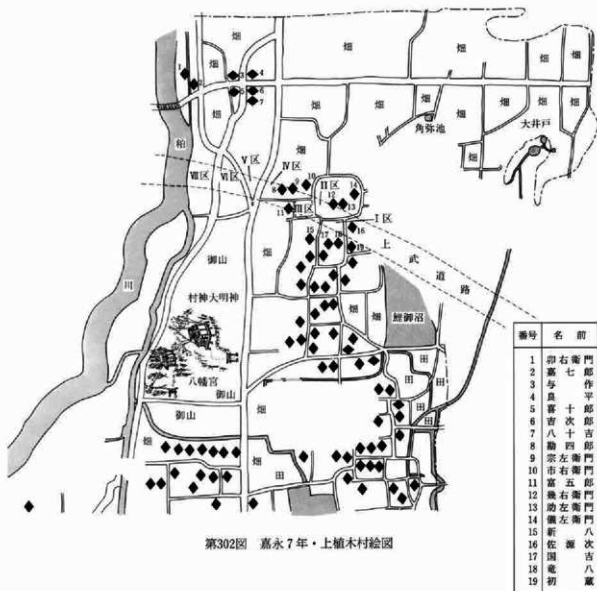
遺跡の所在する伊勢崎市三和町は、江戸時代から明治22年の町村制施行まで上植木村であった。上植木村は、「上植木元文書上帳」⁽⁴⁾によると、元文3年(1738)には百姓家数200軒、職人2人と記されており、農村地帯であることがわかる。また、田は43町8反2畝24歩、畑は102町1反4畝4歩と記されており、畑は田の約2.3倍の広さが有った。田では「下田」、畑では「下々畑」が最も多く、かなり痩せた土地で畑作中心の農耕を行っていたことがわかる。嘉永7年(1854)の上植木村絵図⁽⁵⁾(第286図)によると、水田は村の東縁、西縁の一部と南端に存在するのみであり、多くは畑となっている。この状況は明治時代初期も変わらず、明治6年(1873)の地引絵図⁽⁶⁾(第287図)でも畑の記載が多かつ、「下々畑・下々畑」が多い。

調査区は上植木村北部を南東から北西に横切っている。この部分は、嘉永7年上植木村絵図によると集落の北端付近に当たり、屋敷地周辺と西側(V・VI区)は畑地になっている。この村絵図で調査区内または調査区に近接する屋敷地を見ると、8の勘四郎、9の宗左衛門の屋敷地がIV区に、11の富五郎の屋敷地はIII区

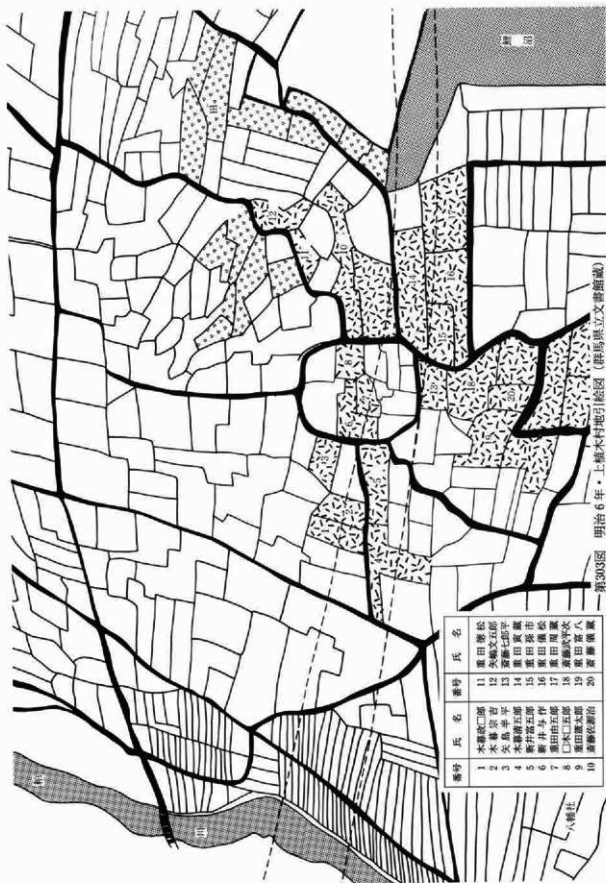
第II章 検出された遺構と遺物

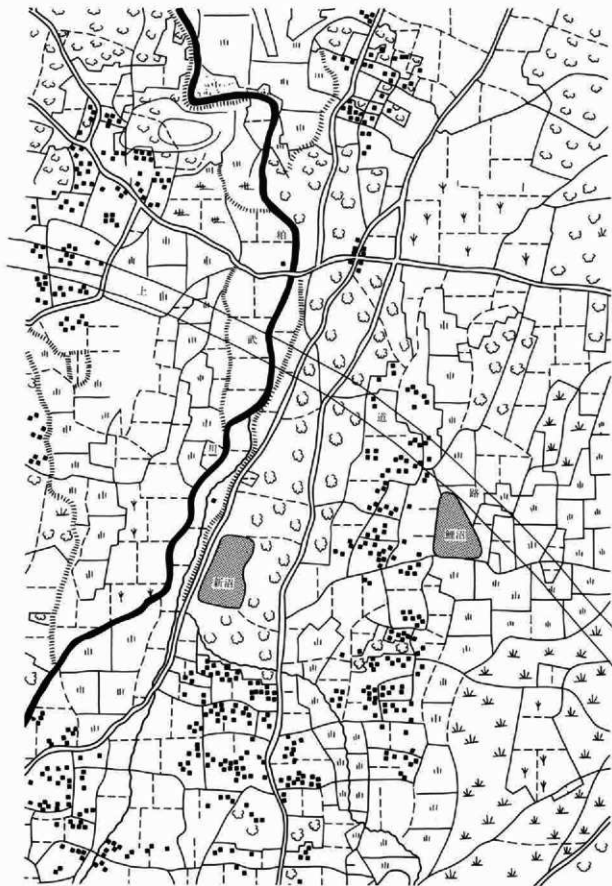
内に存在したと考えられる。また、16の佐源次の屋敷地はI区の東端に存在もしくは接していたと考えられる。17・18の国吉・竜八の屋敷地は近接していたようである。II区の北には12・13の右衛門・助左衛門の屋敷地が近接していた。19年後の明治6年の地引絵図でみると、I区内に七郎平、I区の南と東に武平次・重田孫市の屋敷地があり、II区の北に屋敷地の一部がかかる程度に2戸が描かれている。III・IV区は位置・戸数共に変化はなく、勘四郎の屋敷地は1の木暮政四郎に、宗左衛門は2の木暮宗吉に、富五郎は5の新井富五郎にそれぞれ変わっているが、名前が似ていることから戸主の代変わりと推定される。次に明治29年の地方迅速測図伊勢崎町⁽⁷⁾(第288図)では、III区に2軒、II区の北に1軒、I区とその周辺に6軒の建物が記されており、分布傾向に変化は見られない。

光仙房遺跡では近世・近代遺構の遺存が悪く、遺構から屋敷地を特定することは出来なかったが、絵図から幕末・明治の陶磁器は上記の人々によって使用・廃棄されたと考えられる。この後、調査前までI区からIV区の東は屋敷地、IV区の西からVII区は畑地として利用されており(第2図)、VII区と粕川左岸には各1戸の屋敷地の増加が有り、江戸時代同様居住城が西に拡大していった。



第302図 嘉永7年・上植木村絵図





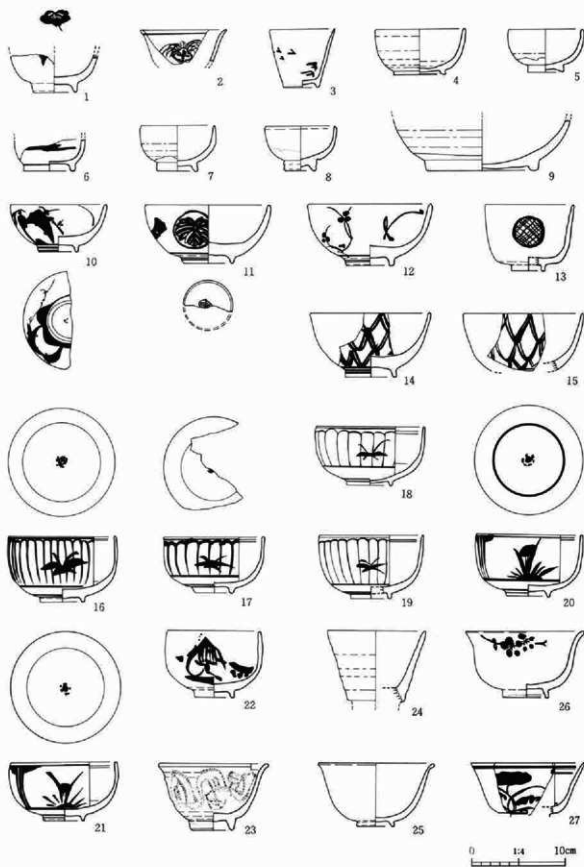
第304図 明治29年・地方迅速測図伊勢崎町 (1/1万)



第305図 明治6年・地引絵図（群馬県立文書館蔵）

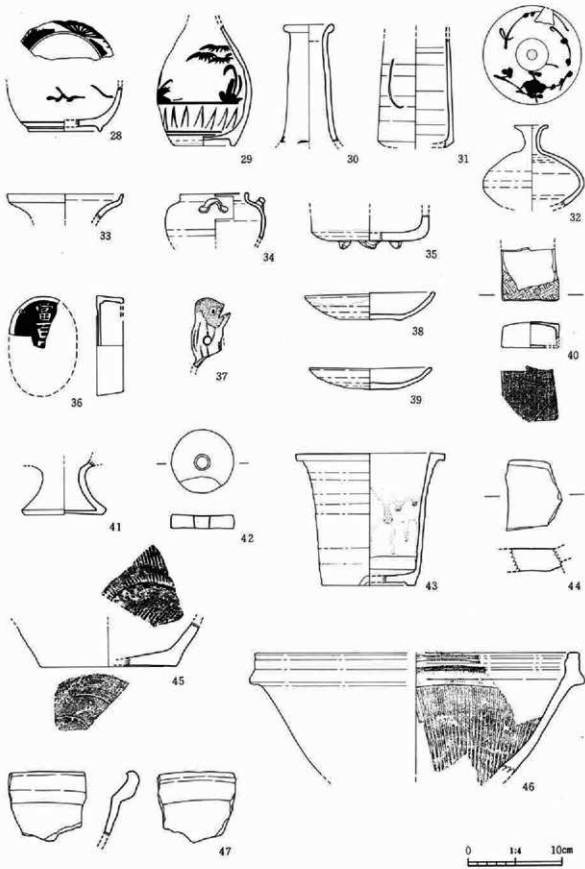
註

- (1) 陶磁器の年代については下記によった
 大橋康二 『肥前陶磁の変遷と出土分布』 『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 昭和59年
 藤沢良祐 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』 瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
 宮石宗弘ほか 『かみた第1・2号古窯』 愛知県教育委員会ほか 1975年
- (2) 日本学術協会編 『日本貨幣史』 昭和36年
- (3) 高橋和樹 三浦正人ほか 『史跡松前藩戸切地陣屋跡—昭和58年度発掘調査概要報告—』 上磯町教育委員会 昭和59年
- (4) 山田武憲 萩原 進編 『上楯木元文書上巻』 『群馬県史料集第二巻 風土記篇（II）』 群馬県文化事業振興会 昭和42年
- (5) 菊地誠一 『嘉永7年上楯木村絵図』 『伊勢崎の村絵図第1集』 伊勢崎市史編纂室
- (6) 明治6年に作成された地引き絵図の「上楯木村」を使用 群馬県立文書館保管
- (7) 参謀本部陸軍部測量局 『伊勢崎町』 『第一軍管地方迅速測図』 明治29年 大日本測量所資料調査部複製

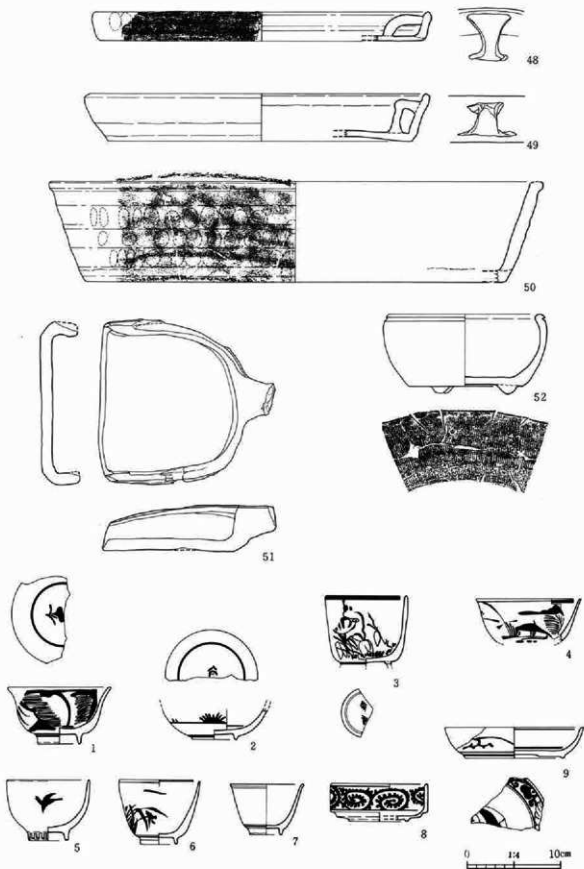


第306図 陶磁器実測図(1)

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

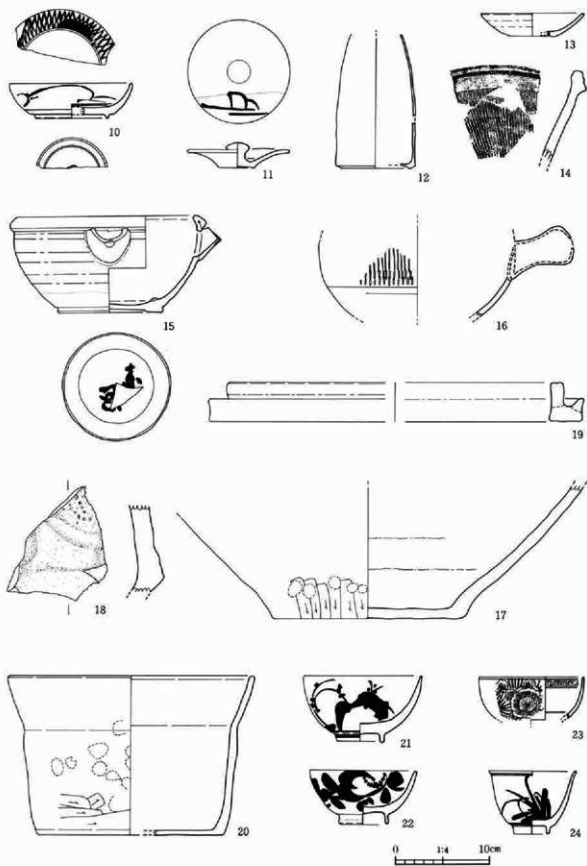


第307図 陶磁器実測図(2)

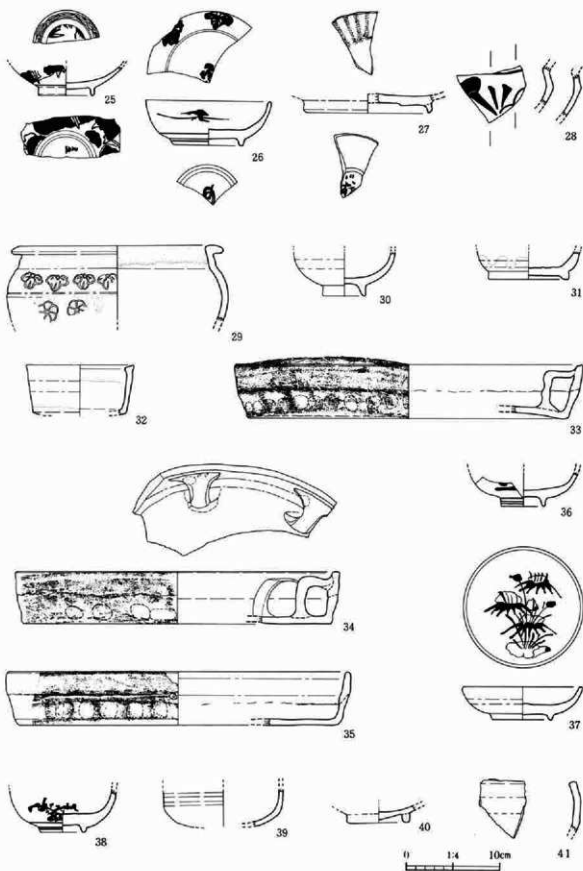


第308図 陶磁器実測図(3)

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

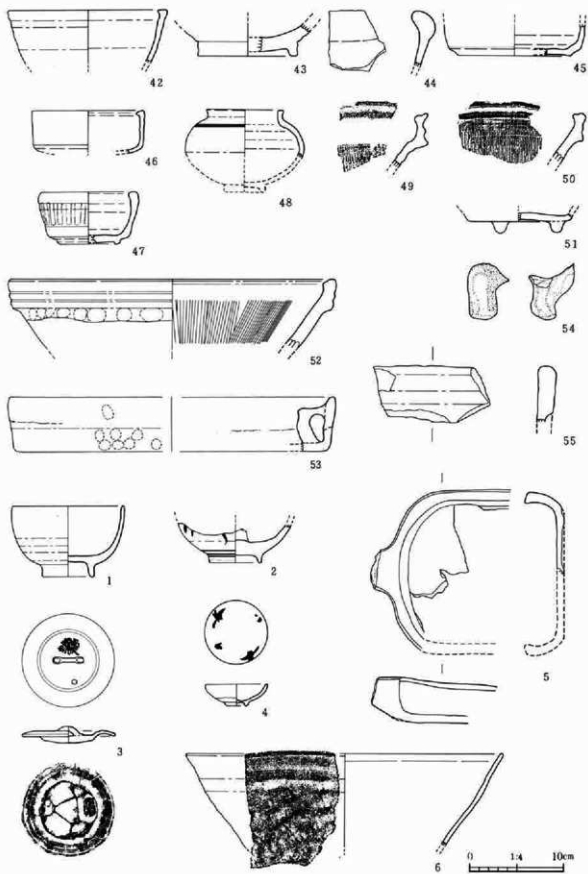


第309図 陶磁器実測図(4)

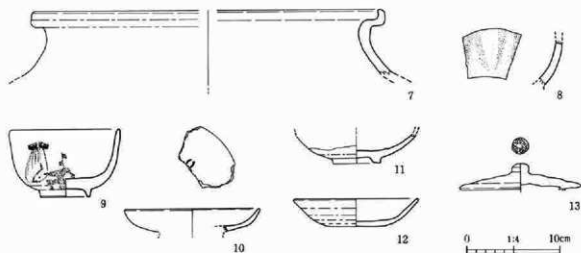


第310図 陶磁器実測図(5)

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について



第311図 陶磁器実測図(6)



第312図 陶磁器実測図(7)

第117表 陶磁器観察表(1)

No.	器種・器別	法量	出土位置	胎土	器形の特徴	輪調・絵付の特徴	備考
1 1056	染付碗	底 3.5cm	H 土 坑	白色。	高台はやや高い。	体部に1ヶ所染付が認められる。底部内面には花文を線書き、濃みを入れている。高台端部と内側は無輪。	伊万里系？ 19C 磁器
2 1067	染付小坏	□ 6.9cm	H 土 坑	灰白色。	口縁部は外反する。	細かい線書きを主体とした染付を行う。	伊万里系 18C 磁器
3 1072	染付小坏	□ 5.2cm 底 3.8cm 高 4.6cm	H 土 坑	白色。	体部は直線的に伸び、高台は底部を挟み込んでいる。	具頂の発色は比較的良い。	伊万里系 19C前半 磁器
4 1060	小 坏	□ 7.2cm 底 4.0cm 高 3.6cm	H 土 坑	淡黄色。 白色・黒色賦 物粒を含む。	全体に器壁は厚い。 高台削り出し。	高台縁以下を除き、灰輪を施す。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
5 1062	小 坏	□ 5.8cm 底 2.8cm 高 3.4cm	H 土 坑	淡黄色。 やや粗く、小 粒を含む。	高台は高いが、高台内は深く挟まない。口縁部は直立気味に立ち上がる。	高台縁以下を除き灰輪を施す。	瀬戸・美濃系 18C後半～19C 陶器
6 1068	染付瓶	底 4.0cm	H 土 坑	白色。	腰部の張りは弱く、胴部は直立気味に立ち上がる。		伊万里系 18～19C 磁器
7 1061	小 坏	□ 5.8cm 底 3.2cm 高 3.6cm	H 土 坑	淡黄色。 やや粗い。	高台は高い。 口縁部は内傾する。	高台縁以下を除き、灰輪を施す。 粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃系 18C 陶器
8 1063	小 坏	□ 5.7cm 底 2.6cm 高 3.5cm	H 土 坑	淡黄色。 やや粗く、小 粒を含む。	高台は高く、外面は沈み状に凹む。 口縁部は直立する。	高台縁以下を除き灰輪を施す。	瀬戸・美濃系 18C後半～19C
9 1079	(片口)鉢	底 12.0cm	H 土 坑	淡黄色。粗い	高台粘付け。	外面高台縁以下に鉛輪を施す。細かい貫入が入る。	瀬戸・美濃系 18C～19C 陶器
10 1048	染付碗	□ 10.2cm 底 4.0cm 高 5.0cm	H 土 坑	灰白色。	底部の器壁は厚い。	高台端部無輪。 体部には簡略化された草花文を施す。具頂の発色は悪い。	伊万里系(波佐見)系 18C後半 ～19C前半 磁器
11 1050	染付碗	□ 10.6cm 底 4.0cm 高 4.6cm	H 土 坑	灰白色。	底部内面の平坦部は広い。口縁部は開き気味に立ち上がる。	体部外面にコンニャク版で刷と不明文様を施し、刺のみ筆書の丸文で囲む。 真鍮は誤植と思われる。	伊万里系 18C前半 磁器

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

No	器種・器別	法量	出土位置	胎土	器形の特徴	胎調・絵付の特徴	備考
12 1049	染付碗	口 9.9cm 底 3.6cm 高 4.8cm	H 土 坑	灰白色。	底部の平坦部は広く、 腰部は張っている。	体部外面には簡略化した草花文を 施す。 呉須は黒ずんだ部分が多い。 高台端部無軸。	伊万里系 18C 磁器
13 1055	染付碗	口 7.1cm 底 2.7cm 高 5.3cm	H 土 坑	白色。	腰部は張り、口縁部は 直立する。	軸は白濁する。 体部に丸文を縦に描く。	伊万里系 19C前半 磁器
14 1051	染付碗	口 9.6cm 底 4.0cm 高 5.1cm	H 土 坑	白色。	底部の筒壁は厚い。	高台無軸。 外面に二重網目文を描く。	伊万里系 18C 磁器
15 1052	染付碗	小片	H 土 坑	灰白色。	底部付近の器壁厚い。	二重網目文を施す。	伊万里系 18C 磁器
16 1042	染付碗	口 8.6cm 底 3.5cm 高 5.2cm	H 土 坑	白色。	高台は低く小さい。 口縁部は直立気味に立 ち上がる。	体部外面に連子格子文と不明点 綴を描く。一部、呉須が馬味を帯 びる。高台無軸。	伊万里系磁器 18C末 ～19C前半
17 1045	染付碗	口 8.0cm 底 3.0cm 高 4.4cm	H 土 坑	白色。	腰部は張り、口縁部は 直立気味に立ち上 がる。	高台端部無軸。体部外面に連子格 子文を施し、その中に三方に点 綴を入れている。	伊万里系磁器 18C末 ～19C前半
18 1043	染付碗	口 8.6cm 底 3.6cm 高 4.7cm	H 土 坑	白色。 緻密。	高台は低く小さい。体 部は丸みを持ち、口 縁部は直立気味に立 ち上がる。	外面に連子格子文と、文様化した 蝶を描く。 高台無軸。	伊万里系 18C末 ～19C前半 磁器
19 1044	染付碗	口 8.7cm 底 3.2cm 高 5.0cm	H 土 坑	白色。	高台は低く小さい。口 縁部は直立気味に立 ち上がる。	体部外面に連子格子文と不明の点 綴を描く。 高台無軸。	伊万里系磁器 18C末 ～19C前半
20 1046	染付碗	口 8.5cm 底 3.5cm 高 4.9cm	H 土 坑	灰白色。	腰部は張り、丸みを持 つ。口縁端部は厚味を 有する。	三本の縦線で3区画し、その間に 高瀬の水仙を簡略に描く。 呉須の発色によい。	伊万里系磁器 18C末 ～19C前半
21 1041	染付碗	口 8.6cm 底 3.3cm 高 4.6cm	H 土 坑	白色。	高台は小さく低い。口 縁部はやや内傾する。	体部外面を3本の縦線で区画し、 その間に高瀬を描く。呉須は全体 に黒ずんでいる。軸は部分的に白 濁している。高台無軸。	伊万里系 18C後半 ～19C初 磁器
22 1047	染付碗		H 土 坑	白色。	高台は小さい。	体部外面に山水文を描く。高台端 部無軸。	伊万里系 18C 磁器
23 1040	碗	口 8.7cm 底 3.4cm 高 5.3cm	H 土 坑	淡黄色。 やや緻密。	腰部の張りは弱く、口 縁は外反する。	外面は素地を描くが工具で練な波状 にナデて文様としている。内面は 白軸、外面は鉄軸を薄く施す。全 面に貫入が入るが、外面は特に細 かい。高台脇以下は無軸。	瀬戸・美濃系？ 19C 陶器
24 1057	碗？	口 7.8cm	H 土 坑	灰白色。	体部、口縁部共に直線 的に開く。	残存部に染付等は認められない。 透明軸を施す。	伊万里系 18C後半？ 磁器
25 1059	碗	口 9.2cm 底 3.0cm 高 5.0cm	H 土 坑	白色。 緻密。	高台は小さく低い。口 縁部は階段状となる。	高台脇以下を除き白軸を施す。貫 入には墨を入れているが、二重貫 入となっているため、墨の入ら ない部分がある。	製作地不詳 19C 陶器
26 1058	碗	口 9.5cm 底 3.6cm 高 5.3cm	H 土 坑	やや粗い。	口縁部は外反し、端反 りとなる。高台内面に 凹線を施す。	内面に白軸、外面に透明軸を施す。 高台端部無軸。口縁部外面、二 ヶ所に梅枝を描く。枝は鉄軸、花 は白磁りで下給付する。 全面に貫入が入る。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
27 1053	染付碗	口 9.0cm	H 土 坑	白色。	口縁部は外反する。	呉須の発色は弱い。	瀬戸・美濃系 19C中頃 ～19C後半 磁器
28 1054	染付碗	底 8.0cm	H 土 坑	灰白色。		外面は簡略化された唐草文、内面 は草文等を描く。	伊万里系 18～19C前半 磁器

第二章 検出された遺構と遺物

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	輪 調 ・ 絵 付 の 特 徴	備 考
29 1071	染付徳利	底 4.8cm	H 土 坑	灰白色。	最大径は胴部中央にある。高台は底部を括り込んでいる。	胴部上半に植物文を描き、下半に縹緋と直線文を描く。高台端部無軸。	伊万里系 17C後半 ～18C前半 磁器
30 1069	染付徳利	口 4.0cm	H 土 坑	灰白色。	頸部は柱状に長く延びる。	頸部下部に具須による染付が認められる。頸部内面下部以下無軸。	伊万里系 18C 磁器
31 1066	燗徳利		H 土 坑	淡黄色。	体部の下端を削り取る。体部の径は上位ほど小さくなる。	内面と体部下端以下無軸。長石軸系の透明釉を施す。体部外面に鉄絵の下絵付を行う。細かい買入が入る。	瀬戸・美濃系？ 19C 陶器
32 1070	染付油壺	口 2.7cm	H 土 坑	灰白色。	器高は低く、最大径は胴部中位にある。頸部は細く、口縁部は開く。	外面に梅花文を描く。具須は黒ずんでいる。	伊万里系 17C後半 ～18C前半 磁器
33 1075	青磁瓶	口 9.2cm	H 土 坑	白色。	口縁部は外反し、上方に立ち上がる。	染付はなく、青磁釉を均一に施す。	伊万里系 18C 磁器
34 1077	小 壺	口 5.2cm	H 土 坑	灰色。 緻密。	胴部の張りはなく、最大径は肩部にある。肩部に取手を貼付ける。	口縁部を除き内面無軸。灰釉を施す。買入が入る。	瀬戸・美濃系陶器
35 1034	香 炉	小 片	H 土 坑	灰白色。	胴部と底部外縁を面取りする。底部に粘土を貼付け足とする。足の端部は使用による擦れが認められる。	胴部以上に胎軸を施す。	瀬戸・美濃系 18C 陶器
36 1073	染付水盃	高 2.2cm		白色。	小判形の水盃と思われる。上面に「首百(文)」を型押しする。	上面の凹みに具須を施し、文字を白く浮かし出させる。側部は無軸。	伊万里系 19C 磁器
37 1078	鳥形色絵 人形	小 片	H 土 坑	白色。	鳥の胴部より上を雑に作る。嘴の下と首の後に接合痕が残る。	体部下端以下無軸。頸部から体部にかけて赤褐色の上絵を施す。	伊万里系 17C後半 ～18C前半 磁器
38 1038	灯明皿	口 10.4cm 底 4.8cm 高 1.9cm	H 土 坑	灰白色。	体部は内湾する。底部内面に目痕あり。口縁端部内面スス付着。	全体に錆釉を施し、体部下平から底部の軸を拭いとる。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
39 1039	灯明皿	口 9.8cm 底 3.9cm 高 1.8cm	H 土 坑	灰色。	底部は小さい。体部は内湾する。底部内面に目痕あり。	全体に錆釉を施し、体部下平以下の軸を拭い取る。口縁端部内面にスス付着。	製作地不詳 19C 陶器
40 1204	水 甕	高 2.0cm	H 土 坑	白色。	直方体。上面は型押しで文様を施す。底部は海面に布目が残る。	長辺と上面のみ白磁軸。	伊万里系 18～19C 磁器
41 1064	ひょうそく	底 6.2cm	H 土 坑	灰白色。 緻密。	胴部下部は面取りをする。胴部上位はあまりびれない。	胴部下部を除き、灰釉を施す。全面に細かい買入が入る。	製作地不詳 19C 陶器 拓原貢に焼き結
42 1120	戸 草	径 6.7cm 高 1.4cm	H 土 坑	淡黄色。 やや緻密。		穿孔部と外縁に灰釉を施す。買入が入る。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
43 1025	植木鉢	口 15.8cm 底 10.0cm 高 14.0cm	H 土 坑	淡黄色。	低い高台を有し、体部は外傾する。口縁部はゆるく外湾し、端部は外方に折り曲げる。高台部の水抜き穴はニケ所。底部の水抜き穴は欠失。	体部下端は軸をカキ取る。口縁部内面から体部下位まで灰釉を施す。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
44 1065	青磁瓶	小 片	H 土 坑	内面底部灰白色。中央に薄い橙色。底部外面淡黄色。		高台内を除き青磁釉を施す。軸は明緑灰色に黄色し、買入が入る。	龍泉窯系 13～14C 磁器

第7節 上植木光仙所遺跡出土の陶磁器について

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	軸 調 ・ 絵 付 の 特 徴	備 考
45 1032	罌 鉢	小 片	H 土 坑	淡黄色。 小礫を含む。	底部糸切痕残る。摺目は15+α本。使用度は高く、底部周縁の摺目はすべて消えている。	錆軸を施した後、体部下位以下の軸を拭い取る。	瀬戸・美濃系 18C 陶器
46 1031	罌 鉢	小 片	H 土 坑	赤褐色。	口縁部は粘土を外方に折り返し段を作り、外面中央を凹ませる。口縁部内面は段をつける。摺目は口縁部部近くまでつけた後強くナゲ消す。摺目は粗く、9本+α。	器面に花鬘を施す。 体部下位の摺目はやや擦り減っている。	堺? 18C後半~19C 陶器
47 1033	罌 鉢	小 片	H 土 坑	淡黄色。 黒色鉱物粒を多く含む。	口縁部は外に屈曲し、端部は内側に小さく曲げる。	錆軸を施す。	瀬戸・美濃系 18C前半 陶器
48 1029 1030	内耳燗燗	□ 36.2cm 底 34.6cm 高 3.1cm	H 土 坑	淡黄色。黒色鉱物粒、白色鉱物粒、赤褐色粒子を含む。	器高は低く、内面の底部と体部の境には丸味を持つ。底部周縁に1ヶ所補修孔が認められる。	口縁部スス付着。内面は異地と同じ色を呈する。	在地製。 18~19C
49 1028	内耳燗燗	□ 37.0cm 底 32.5cm 高 5.0cm	H 土 坑	淡黄色。黒色鉱物粒を含む。	口縁部中位でゆるく内湾する。底部はさきら状。	底部内面ナゲ調整。口縁部横ナゲ後に取手貼付け。腰部貫形。口縁部から口縁部中位にかけて黒染もしくはスス付着。	在地製 18C
50 1026	火 鉢	□ 52.6cm 底 45.2cm 高 10.5cm	H 土 坑	中央灰色。その他は灰白色。	底部の形態、胴の有無は不明。体部、口縁部は直線的に外傾する。口縁部外方につき出る。	口縁部から内面は器表の剥離が著しい。体部には指頭圧痕が多く残る。	在地製 18~19Cか?
51 1027	十 籠	幅 16.8cm	H 土 坑	灰黒色。 白色鉱物粒を含む。	先端の上面は大きく、下面は小さく面取りをし、先を鋭角にしている。	下面及び外面は細かいさきら状になっている。内面はナゲ調整。土手及び取手端部は寛切り後にナゲ調整。	在地製 19C
52 1024		□ 16.8cm 底 12.2cm 高 8.5cm	H 土 坑	淡黄色。 白色鉱物粒を多く含む。	口縁部は内湾する。口縁部外面に凹線を通らす。底部には半球状の脚を3ヶ所に貼付ける。	外面に細い格子状の文様を施す。内面は、弱い凹転を利用したナゲ調整。口縁部は磨かれている。内面は器表の剥離が著しい。	在地製 18~19C

第118表 陶磁器観察表(2)

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	軸 調 ・ 絵 付 の 特 徴	備 考
1 1091	染付碗反碗	□ 8.2cm 底 3.4cm 高 4.5cm	1 井 戸	白色。	高台はやや高く、口縁部は外反する。	高台端部を除き、全面に透明釉を施す。呉須の発色は濃い。染付部の外縁に大きい気泡が並ぶ。	瀬戸・美濃系19C中頃~後半磁器
2 1092	染付碗	底 3.6cm	?	白色。	高台は低く小さい。腰部は丸味を帯びる。	文様は1041と同様と思われる。呉須は黒ずんだ部分がある。高台端部無釉。	伊万里系 18C後半 ~19C前半 磁器
3 1095	碗	□ 11.0cm	1 井 戸	白色。	口縁部を少し外反させる。	濃みを用いた部分の発色はやや強く、盛り上がっている。軸は白濁している。	瀬戸・美濃系 19C 磁器
4 1097	染付盞呑み	□ 7.4cm	1 井 戸	白色。	高台部欠失。	コバルトを用いて染付をすす。	瀬戸・美濃系 明治 磁器
5 1096	小 環	□ 6.6cm 底 3.2cm 高 4.8cm	1 井 戸	白色。	腰部は張らず、内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	高台端部を除き透明釉を施す。体部には角を縁書きし、濃みを入れている。	瀬戸・美濃系 19C後半 磁器

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	輪 割 ・ 給 付 の 特 徴	備 考
6 1088	湯呑み	口 6.4cm 底 3.0cm 高 5.1cm	1 井 戸	白色。		体部に黒薄を染付する。呉須の発色は良い。高台端部無軸。	伊万里系？ 19C
7 1099	小 罎	口 5.8cm 底 2.6cm 高 4.0cm	1 井 戸	白色。	体部は直線的に延び、口縁部はゆるく外反する。	高台端部を除き、全面に透明釉を施すが、軸はやや白濁している。コバルトで圈線を描く。呉須の発色は強い。	瀬戸・美濃系 明治 磁器
8 1100	染付重	口 7.8cm 底 4.6cm 高 3.0cm	1 井 戸	白色。	高台、器高共に低い。口縁端部内面を面取りする。	外面に黒手唐草を描く。口縁端部・端部内面・腰部は無軸。	伊万里系 18～19C 磁器
9 1094	染付皿	小 片	1 井 戸	白色。	蛇の目凹形高台。口縁端部は平坦にする。	呉須の発色は悪く、黒ずんだ部分がある。全面に焼成不足と思われる貫入が入る。	伊万里系 18～19C初
10 1093	染付皿	口 13.0cm 底 7.8cm 高 3.6cm	1 井 戸	灰白色		高台端部を除き透明釉を施す。呉須の発色は悪く、黒ずんだ部分もある。	伊万里系 18C 磁器
11 1088	蓋	径 8.2cm 高 2.0cm	1 井 戸	灰色。 緻密。	薄とし蓋。	下面無軸。上面透明釉。給付部分に白土掛けし、やや果味を帯びた緑色で帆掛船風の文様を下給付する。	製作地不詳 19～20C初期 陶器
12 1088	燗徳利	底 7.4cm	1 井 戸	灰色。 黒色粒子を含む。	器壁は薄く、腰部は面取りする。	腰部以上に灰粉を塗す。貫入が入る。	瀬戸・美濃系 19C 陶器。拓貫に焼き締まる。
13 1089	灯明皿	口 11.7cm 底 5.6cm 高 2.7cm	1 井 戸	淡黄色。 緻密。	底径は小さい。体部はゆるく内湾する。	内面に透明釉を施す。細かい貫入が入る。	製作地不詳 19C 陶器
14 1082	摺鉢	小 片	1 井 戸	赤褐色。 白色の小礫を含む。	口縁部は粘土を折り返し段を作り、外面に2条の凹線を巡らす。口縁内面端にも小さい段をつける。	器面には泥甃を施す。体部下位の襷目はややすり減っている。	堺か 18C後半～19C 陶器
15 1087	片口鉢	口 19.5cm 底 11.0cm 高 10.2cm	1 井 戸	灰色。 緻密。	口縁部は内傾する。口縁部は粘土を外方に折り返し、肥厚させる。片口部は口縁部下位を切り取った後貼付ける底部に目皿もく所認められる。(方形)	体部下位以下を除き灰粉を施す。細かい貫入が入る。	製作地不詳 19C 陶器 底部外面に墨書。
16 1090	行平鍋		1 井 戸	灰色。 黒色粒子が発泡する。	体部に飛びガナを施す。	取手及びその周辺に錆輪を厚く施し、他の部分には薄く施す。底部スス付着。	製作地不詳 明治～大正 陶器。拓貫に焼き締まる。
17 1081	蓋	底 20.5cm 高 14.0cm	1 井 戸	赤褐色・黒褐色。 石灰、白色鉱物粒を多く含む。		無軸。素地の鉄分により体部外面は、光沢のある黒褐色。内面は褐色を呈する。	製作地不詳 13～15C？
18 1084	瓶 掛	小片	1 井 戸	淡黄色。粗い 白色鉱物粒を含む。	腰部凹曲する。	灰粉を塗す。貫入が入る。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
19 1083	不明 火鉢の鉢？	口 36.0cm 底 40.0cm 高 4.2cm	1 井 戸	にぶい黄褐色 白色、黒色鉱物粒を含む。	下部は平組で幅広く作り、立ちあがりはやや外傾する。	変色しているが、ススの付着は認められない。	在地製 明治
20 1080	内耳鍋	口 26.4cm 底 19.8cm 高 16.8cm	1 井 戸	にぶい黄褐色	底部は平組。体部は直線的に延び、口縁部は屈曲して外傾する。	底部のみにぶい黄褐色。他は灰黒色を呈する。	在地製 16C 軟質陶器
21 1102	染付碗	口 9.5cm 底 3.8cm 高 5.2cm	8 井 戸	灰白色。	底部の器壁厚い。口縁部に染け込みがある。	簡略化した草花文を描く。呉須の発色は悪い。	伊万里系 18C 磁器

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

No	器種・器別	法量	出土位置	胎土	器形の特徴	輪調・絵付の特徴	備考
22 1101	甕	口 8.6cm 底 4.0cm 高 4.3cm	8 井戸	灰色、 緻密。	腰部は狭らず、ゆるく 内湾する。	高台を除く全面に透明釉を施す。 外面の一方に植物文を下絵付す。 枝は鉄絵、葉はくすんだ緑、 雪輪状の文様はコバルトで書く。	製作地不詳 明治 陶器
23 1106	染付甕	小片	2 井戸	白色。		染付は濃みを使用せず線書きのみ で書く。	伊万里系 19C 磁器
24 1105	染付猪口	口 7.0cm 底 2.8cm 高 5.0cm	8 井戸	白色。	高台端部外面を面取り する。	外面に葛蘭風の文様をコバルトで 書く。不規則な買入が入る。	瀬戸・美濃系? 明治 磁器
25 1103	染付碗蓋	底 4.2cm	8 井戸	白色。 緻密で断面は ガラス質に見 えない。		つまみの端部を除き、透明釉を施す。 内面には、円形の松竹梅文を 書く。	製作地不詳 明治 磁器。 焼き残ぎ
26 1104	染付皿	口 10.0cm 底 5.6cm 高 3.5cm	8 井戸	灰白色。	底部の器壁は厚い。	高台端部を除き、透明釉を施す。 外面には崩れた唐草文を書く。体 部内面には刺をコンニャク版によ り施す。見込みの五弁花はコン ニャク版か? 裏筋は濃縮と思われる。	伊万里 系（波佐見）系 18C前半 磁器
27 1107	青磁菊皿	小片	8 井戸	灰色の素地は 磁化してい る。	底部は蛇の目凹形高台 とし、高台は高い。底 部の釉をカキ取った部 分には白土を塗る。内 面は型押しで菊花を表 す。底部内面中央はや や盛り上がる。	透明釉を施す。底部中央に文字が 認められる。文字部分は焼き残ぎ に使用される鉛ガラスを焼き付け たものである。	伊万里系 19C 磁器
28 1108	水指?	小片	8 井戸	淡黄色。 緻密。		外面に白土を掛けた後、コバルト で染付をする。外面に透明釉を 施す。買入が入る。	製作地不詳 明治～大正 陶器
29 1109	皿掛	口 22.6cm	8 井戸	やや粗い。白 色鉱物粒、白 色粒子を含む。	肩部はゆるく張り、口 縁部は外方に折れる。	口縁部内面から肩部外面上位に透 明な緑釉を掛ける。緑釉部以下 は錆釉を施す。外面肩部と胴部 にスタンプ文を施す。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
30 1114	甕	底 4.6cm	14 井戸	灰白色。	腰部はやや張り、丸み を帯びる。 高台は高い。	高台端部を除き灰土系?の透明釉 を施す。買入が入る。	唐津系 18C 陶器
31 1113	徳利	底 8.6cm	14 井戸	灰白色。 白色鉱物粒を 含む。		外面に船輪を施し、腰部以下の 灰を拭い取る。船輪もあり。	瀬戸・美濃系 18～19C 陶器
32 1112	香炉	口 11.4cm	14 井戸	淡黄色。	体部は直立し、口縁端 部は内傾する平面面を 持つ。	口縁部内面から外面体部下位に船 輪を薄く施す。	瀬戸・美濃系 18C後半 陶器
33 1111	内耳盤形	口 37.2cm 底 34.2cm 高 5.7cm	14 井戸	中央黒灰色、 その他は灰白 色。	口縁部は直線的に延びる。 口縁部下位に指痕圧痕 が残る。	底部周縁の一部に窪削り。底部内 面ナゲ。口縁部横ナゲ後取手貼り 付け。口縁部スス付着。器表はす べて灰色を呈する。	在地製 18C 軟質陶器
34 1116	内耳盤形	口 34.6cm 底 33.6cm 高 5.5cm	22 井戸	淡黄色。	口縁部は直線的に延びる。 口縁部下位に指痕 圧痕が残る。	腰部窪削り後ナゲ。窪削りは指押 さええの後。底部内面ナゲ。口縁部 横ナゲ後取手貼り付け。取手部分 外面のみスス付着。口縁部外面少 し黒灰。	在地製 18C 軟質陶器
35 1115	内耳盤形	口 36.8cm 底 34.2cm 高 5.6cm	22 井戸	外面黒灰色。 内面底部灰白 色。白色、黒 色鉱物粒を含 む。赤褐色粒 子を含む。		口縁部と内面のナゲは丁寧。体部 中位には粘土接合痕が残る。体部 下位に指痕圧痕が残る。腰部浅い 窪削り。体部に補修孔が1つ認め られる。	在地製 18C 軟質陶器
36 1117	陶胎染付甕	底 4.8cm	22 井戸	灰色。		高台端部を除き透明釉を施す。肩 頂の黄色はにじみ。高台端部は錆 色を呈する。	唐津系 18C 陶器

第II章 検出された遺構と遺物

No	器種・器別	法量	出土位置	胎土	器形の特徴	輪軸・捺付の特徴	備考
37 25	染付皿	口 9.4cm 底 4.8cm 高 2.6cm	F 墓	白色。	高台は内傾する。	底部内面に青帯帯を描く。	伊万里系 17C後半 磁器
38 1136	陶胎染付碗	底 4.8cm	E 溝	灰色。	底部内面の平坦部は広い。	胴部外面に草花文(山水文の一部か)を描く。高台端部無軸。高台端部欠足。	唐津系 18C前半 陶器
39 1135	腰鉢碗	小片	?	淡黄色。 やや緻密。	口縁部下位に4条の凹線を巡らす。	内面に灰軸、外面に鉄軸を掛け分ける。内面にのみ貫入あり。	瀬戸・美濃系 18C後半 ～19C前半 陶器
40 1137	碗	底 5.0cm	E 溝	灰色。 白色鉱物粒を含む。	外面底部中央に糸切痕残る。高台貼り付け。	高台脇以下無軸。胎軸を施す。	瀬戸・美濃系 17～18C 陶器
41 1131	鉢	小片	28 溝	淡黄色。 やや粗い。	口縁部はゆるく内傾する。	灰軸を薄く施す。軸は酸化気味である。細かい貫入あり。	瀬戸・美濃系 時期不詳 陶器
42 1129	片口鉢	口 17.0cm	25 溝	青灰色。 白色鉱物粒を含む。	口縁端部は幅広く面とりし、内側に突き出る。	胎軸を薄く均一に施す。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
43 1142	鉢	底 7.8cm	K 溝	灰白色。 白色鉱物粒を含む。		高台脇以下無軸。鉄軸を施す。	瀬戸・美濃系 17～18C 陶器
44 1130	覆鉢	小片	28 溝		口縁部は内傾する。口縁部は粘土を外方へ折り返し肥厚させる。	内面は灰軸を薄く、外面は青軸を施す。両面に貫入あり。	製作地不詳 19C 陶器
45 1138	徳利	底 12.0cm	E 溝	灰色。	腰部は削削りを行う。	腰部外面に鉄軸を薄く施す。	瀬戸・美濃系 18C 陶器
46 1140	香炉	口 9.0cm	G 溝	灰白色。 緻密。	腰部は扇直し。口縁部は直立する。口縁端部は内面に折り返し、平坦面を作る。	口縁端部から体部外面にかけて灰軸を施す。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
47 1143	染付碗	口 8.0cm 底 5.0cm 高 4.2cm	H 土坑	白色。 緻密。	高台は低く小さい。体部は丸みを持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。	外面に蓮子格子文と、文様化した扉を描く。高台無軸。	伊万里系 19C前半 磁器
48 1125	小壺	口 8.2cm	26 溝	淡黄色。 白色鉱物粒を含む。	最大径は体部中位にある。肩部に5条の沈線を描く。	口縁部～胴部内面と外面に胎軸を施す。貫入が入る。	瀬戸・美濃系 19C 陶器
49 1139	覆鉢	小片	E 溝	石英、長石、小礫を多く含む。	口縁部を上方に引き上げ、外面に3段の突帯を造る。	内外面に胎軸を施す。	信濃系? 18～19C 陶器
50 1124	覆鉢	小片	26 溝	赤褐色。 白色鉱物粒を多く含む。	口縁部は粘土を折り返し段を作る。口縁部外面には2条の凹線を描く。肩部に段をつける。覆目は口縁端部まで施した後ナゲ消す。覆目単位は10本。	無軸。 器表は素地と同じ色調である。	製作地不詳 18C後半～19C 陶器
51 1123	覆鉢	口 34.6cm	26 溝	淡褐色・淡黄色部分が隅状に入る。 白色鉱物粒を多く含む。	口縁部は粘土を外方に折り返し段を作る。口縁部外面には淡い2条の凹線を描く。口縁端部には小さい段をつける。覆目は12本を単位とし、口縁端部から施した後ナゲ消す。体部の覆目は磨りへる。幅8cm程を内面から押さえ、小さく片口状にする。	無軸。 器表は素地と同じ色調である。	堺か 18C後半～19C 陶器

第7節 上植木光仙房遺跡出土の陶磁器について

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	輪 調 ・ 捺 付 の 特 徴	備 考
52 1121	手埴り	底 10.8cm	26 溝	中央黒灰色、 灰白色。器表 黒灰色。	底部平底。短い脚を貼 り付ける。	底部内面ナデ。底部砂底。腰部 ヘラナデ。 軟質陶器	在地製 18~19C
53 1122	内耳埴埴	口 34.8cm 底 33.0cm 高 5.8cm	26 溝	中央黒褐色。 外側はにぶい 褐色。 器表黒灰色。	口縁部は直線的に延び る。	口縁部下位に指頭圧痕残る。底部 内面ナデ。口縁部横ナデ後取手貼 り付け。ススの付着はない。器表 は底部を除き黒灰色を呈する。底 部にぶい褐色。	在地製 18~19C
54 1092	香炉か 手埴り	脚部のみ	G 溝	黒灰色。白色 鉱物粒を含む。	獣足。		在地製 近世
55 1127	火鉢?		22 溝	黒色。黒色鉱 物粒を含む。 器表黒灰色。	器壁は厚く、口縁端部 は丸味を有する。	内外面共に横ナデ。	在地製 中世 軟質陶器

第119表 陶磁器観察表(3)

No	器種・器別	法 量	出土位置	胎 土	器 形 の 特 徴	輪 調 ・ 捺 付 の 特 徴	備 考
1 1144	鉢	口 12.0cm 底 5.6cm 高 7.5cm	78 住	淡黄色。 緻密	高台は高い。 腰部は強らず。丸みを 帯びる。	高台端部を除き、長石軸系の透明 釉を施す。 全体に細かい貫入あり。	唐津系 18C 陶器
2 1147	染付碗	底 4.2cm	66住掘り 方?	白色。	底部内面は蛇の目輪ハ ズ。		伊万里系 18C 磁器
3 1148	水 蓋	径 7.4cm 高 1.3cm	121 住	淡黄色。 緻密。	下面中央は貫削り。 「通八」の押印を施す。	鉄絵を施す。上面に透明釉(長石 軸系)を施す。細かい貫入が入 る。	京焼系 19C 陶器
4 1149		口 6.0cm 底 1.6cm 高 1.7cm	121 住	白色。	高台は小さい。 口縁部は内側して立ち 上がる。	体部外面下位以下無釉。不明文様 を四方に描く。	伊万里系 19C 磁器
5 1146	十 能		88 住 覆 土 中	淡黄色。 黒色鉱物粒を 含む。		底部と外面の器表は細かいきら ら状を呈する。内面及び土手、取手 上面はナデ調整。	在地製 19C 軟質陶器
6 1145	鉢	小 片	87 住	ぶい褐色。 白色鉱物粒、 軽石を含む。	体部は鉢形に直線的に 開く。	口縁部は指輪を利用したと考えら れる横ナデ。内面はナデ。外面は 指圧痕多く、粘土の接合痕残る。 外面スス付着。	在地製 18~19C 軟質陶器
7 1154	壺	口 37.0cm	II 区	灰色。灰白色 部分が縞状に 入る。 長石、白色鉱 物粒多い。	口縁部は外方に屈曲し た後、上方へ立ち上 がる。	肩部和口縁部に自然釉かかる。	常滑 13C中~14C中 陶器
8 1157	青磁碗	小 片	II 区 ドリッド	灰色。	内面底部周縁に片彫り で團縁を施す。 外面は片彫りで蓮弁を 彫り出し筋を持つ。	青磁釉を厚く施す。釉はオリーブ 灰色に黄色する。	龍泉窯系 13C 磁器
9 1155	陶胎染付碗	口 11.8cm 底 7.0cm 高 5.2cm	II 区	灰色。	底部内面は平坦。 口縁部はほぼ直立して いる。	高台端部無釉。体部外面に横山 水文を描くが殆ど見えない状態 である。高台端部鉄足。貫入あり。	伊万里系 18C 陶器
10 1150	皿	小 片	I 区	灰色。 緻密。	口縁部下位に丸味を有 し、口縁部は外傾して いる。	底部内面に鉄絵を描く。灰釉を厚 く施す。貫入あり。	瀬戸・美濃系陶 器
11 1152	青緑釉皿	底 5.2cm		淡黄色。	底部内面は蛇の目輪ハ ズ。高台削り出し。	胴部下位から高台外面以下無釉。 青緑釉を施す。	唐津系 17C後半 ~18C前半 陶器
12 1151	灯明皿	口 10.0cm 底 4.6cm 高 2.2cm	III 区	灰色。 白色鉱物粒を 含む。緻密。	底径は小さく、器高は 高い。	光沢のある錆色の鉄釉を薄く施 し、体部から底部の釉を雑に拭い 取る。	製作地不詳 18~19C 陶器
13 1153	蓋	径 9.7cm		黒灰色~褐 色。 白色鉱物粒を 含む。	つまみ上方に菊花状 の押印を施す。立ち上 がり部欠失。	上面に鉄絵を施す。貫入あり。	製作地不詳 19C 陶器

第三章 調査のまとめ

1. 古墳のまとめ

本調査区からは10基の古墳が調査された。しかし、路線幅や介在する道路のため、完全に調査したものは4基のみである。また、後世の擾乱でその全てが盛土を失っており、外部施設の不明のものが多。その内訳は第120・121表のとおりである。構造からみて、竪穴小石室は横穴式石室に先行する。その意味で竪穴小石室を持つ5基については、その構造から2号墳→3号墳→4号墳の順に築造されたものと考えられる。2号墳の周堀内出土土師器は鬼高I式であり、殖蓮村第71号墳石室前出土の土器より古い様相を示している。6世紀初め頃のものであろう。10号墳は墳丘が失われた上、周堀がない。初めから墳丘を持たないものかも知れない。その意味では他の竪穴小石室が群集する中での階層差とみることできる。

横穴式石室は、6号墳→7号墳→8号墳→1号墳の築造順が考えられる。7号墳は6号墳の周堀を避けている。また、1号墳・8号墳は、墳丘は石室を覆う程度のもので6号墳や7号墳に比べ、規模の縮小化が顕著である。竪穴小石室墳の10号墳と同様、階層差とみることができる。年代を示す遺物が皆無のため、確実な年代を与えられないが、規模が10数mと最小規模に近いこと、周堀幅が狭いこと、7号墳を除いて石室を掘り方内に設置していること等の共通性からみて、竪穴小石室墳から連続して築造された群集墳とみてよい。その年代をあえて示せば6世紀後半から7世紀後半にわたるものであろう。

古墳の分布は南北にさらに広がっており、墳丘を失った古墳が発見されることは確実である。その意味で、本関町古墳群を構成する前述の殖蓮村第71号墳は、重田古墳、関山1・2号墳をも含め、群小の古墳の中核的位置を占めていたといえる。

第120表 横穴式石室墳一覧表

古墳名	外部施設				遺物	石室													その他	
	墳丘形式	規模	周堀			その他施設	開口方位角	掘り方				形式	積み方	壁材	玄室			羨道		
			形状	幅				深さ	形状	長さ	幅				深さ	全長	長さ			幅
1号	不明		なし		なし	鉄釘20	221°	隅丸長方形	4.35	2.70	0.56	四袖型	乱石積	河原石	2.95	1.85	0.83	1.10	0.55	素掘前庭前面に石組
6号	円墳	12~17m長円形	U字形	2.2 0.15 4.2 0.60	なし	—	180°	隅丸長方形	6.00	2.50 3.00	0.60 30cmの容土	四袖型	—	—	3.60	2.40	1.50	1.20	0.60	今回最大の墳丘
7号	円墳	12	不整形形状 南部へこむ U字形	2.6 0.6 3.0 1.0	周堀内に河原石→墓石か	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—	—	—	—	—	周堀の深さからみて、掘り方を持っていないはず
8号	円墳	13 17.5	北東のみ み状 にある	0.9 0.12 1.20 0.3	墳丘のない小石室か	—	南向き	—	—	—	—	四袖型 竪穴状か (小石室)	—	—	—	1.0	0.6	0.3	—	素掘り
9号	円墳		堀の一部のみ	4?	須恵器 葉片1 須恵器 環1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

1. 古墳のまとめ

第121表 竪穴系内部主体古墳一覧表

古墳名	外部施設					遺物の位置	石室													
	墳丘		周堀		その他施設		墳丘上の位置	方位角	掘り方	石室				構造			天井石	石室の状況		
	形式	規模	形状	幅						深	長さ	幅	深さ	壁石材	積み方	長さ			幅	深さ
2号	円墳	8.0	全周	1.35 1.80	0.8 U字形	なし	周堀 土部環3 石室雑瓦土部環1、 石室内9。刀片	東偏	67° (東位)	長方形 しっかりした 長方形掘り方	2.4	1.2	0.25	割石	差し込み	1.80	0.30	0.22 0.24	東半穴 西半4石	長方形の石敷
3号	円墳	11.8	全周か (東・西を欠く)	1.00 1.50	0.3 0.6 逆台形	なし	天井石 上鉄 未盗掘	中央	85° (東位)	隅丸 長方形	3.30	1.70	0.30	河原石	差し込み	2.00	0.32	0.34	9石	長方形の石敷 床に4cmの粘土
4号	円墳	6.0	扶状 (2箇所)	0.40 0.60	0.3 U字形	なし	未盗掘 なし	中央	81° (東位)	長方形	2.90	1.45	0.50	河原石	差し込み	1.86	0.42	0.30	7石	石敷なし 床に20cmの粘土
5号	円墳	8.0	不明 (一部のみ調査)	1.00 1.20	0.2 0.3 U字形	なし	なし	中央	東西位 (ボーリングのみ)	—	—	—	—	—	2.80	0.6	—	—	—	
10号	不明								169° (方位不明)	不整 長円形	3.50	2.10	0.2		小口横 一段のみ	2.50	0.70			10cmの客土 の上に床石あり

2. 集落のまとめ

土器について

本遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡が多数検出された。調査によって得られた遺物の大部分が土器であり、整理に当たっては、集落の様相を解明する手段として、概ね全体の $\frac{1}{2}$ 以上残っているものについて実測図を作成した。これらの中には住居の覆土中より出土したものも含まれるが、床面直上或は、竈・貯蔵穴出土の遺物を以て、遺構に帰属する土器と考え、住居内に於ける生活及び廃棄時点の様相を示しているものと捉えている。土器は、時期や時代の様相を反映するものと考えられ、先学諸氏によって多くの研究が進められ、平安時代土器形式の編年がなされ、更には地域差を考慮した研究段階へと至っている。以下、先学諸氏の研究成果に則り、本遺跡の平安時代集落について見ることにする。

今回の調査で、以下の通り、22件の重複遺構を確認した。

- ・ 3号住→2号住→1号住
- ・ 5号住→119号住
- ・ 120号住→14号住
- ・ 23・24号住(先後関係不明)
- ・ 112号住→111号住
- ・ 36号住→37号住
- ・ 103号住→40号住
- ・ 41号住→43号住→101号住
- ・ 102号住→42号住
- ・ 45号住→44号住
- ・ 49号住→106号住→48号住
- ・ 57号住→56号住
- ・ 58・59号住→96号住
- ・ 63号住→60号住、61号住→62号住→60号住
- ・ 97号住→65号住
- ・ 70号住→69号住
- ・ 104・105号住→75号住
- ・ 77号住→100号住→76号住
- ・ 78号住→95号住
- ・ 92・93号住→91号住
- ・ 72号住→68号住
- ・ 74・107・108・109号住→71号住

土器を分離する基準として、先学諸氏による竈・坏・椀類の形態と器種の組み合わせの変化と、上記の重複遺構関係を基にした。それぞれの住居の遺物遺存状態には格差が有り、総ての住居について等質的に検討出来なかったが、以下、桐原 健氏の「神饌を盛る土器・家神を祀る土器」(『信濃』III31-1 昭和54年)に基づき幾つかの項目を通して本遺跡の住居について考えてみたい。

住居跡の竈について

同一の平面形態をとる住居が必ずしも同一時期に属するとすることはできないが、本遺跡で調査された竪穴住居跡の平面形を、竈の設置位置を目安にして、便宜的に①短壁辺に竈が設置された縦長型と②長壁辺に竈が設置された横長型とに分けてみた。その結果、長方形の長い辺に竈を設置した横長型が65軒、縦長型が17軒という数になった。方向的には東壁に設置した住居跡が殆どであり、北壁に設置されていた62・98号住居跡、南壁に設置されていた41号住居跡及び複数の竈を持った2軒の住居を除くと、位置的に多少の偏りが認められただけである。竈を設置した場所の違いから、本遺跡における住居跡の差異を見いだすことは出来ないと言って良いであろう。なお、8号住居跡では北壁1及び東壁2の計3箇所に、28号住居跡では北壁及び南東隅の2箇所に竈が設置されていた。

埋道部の十分な資料及び上屋構造を復元できるだけの資料を持たないが、竈・戸口の位置は棟入・妻入という別は有るものの、上屋構造と密接に関係しているものと考えられる。また、戸口は居住者の出入り及び

通風・採光の機能を果たすものであり、竈の設置位置が防火や防煙及び戸口による規制を受けたことは十分に考えられる。生け垣等の外部施設の有無も考慮しなければならないが、冬季における北西の強い季節風を避けるために東壁に竈を設置したと考えるのも良いのではあるまいか。

住居を廃棄する時点で竈を壊したと考えられるので、焚口及び掛け口の遺存した遺構は無かったが、住居を建築した時の状況を色濃く反映したと思われる竈の構造材を中心に見てみたい。本遺跡で調査された竈穴住居跡を竈の構築用材別に見てみると、①川原石を使用したもの、②軟質の砂岩状土塊を使用したもの、③瓦を使用したもの、④土器を使用したもの、⑤粘土のみを使用したものがある。未完掘及び竈の遺存状態が芳しくなかったために峻別できないものも有ったが、⑥その他として扱った結果は以下のとおりである。これは、住居が作られた当時の状況を反映しており、延いては住居の分類に貢献するものであると思われる。

①川原石を使用したもの

5, 23, 29, 31, 32, 34, 39, 41, 48, 50, 51, 62, 76, 80, 84, 85, (94), 114, 28, 8

②軟質の砂岩状土塊を使用したもの

2, 6, 7, 12, 14, 15, 20, 30, 120, (13, 19, 22, 23, 35, 38, 42, 47, 71, 72, 73, 82, 91, 103, 113, 125), 8

③瓦を使用したもの

9, 67, 73, 77, 95

④土器を使用したもの

36, 103

⑤粘土のみを使用したもの

1, 3, 4, 119, 10, 21, 26, 33, 40, 43, 101, 44, 45, 46, 52, 55, 56, 57, 58, 96, 60, 64, 65, 66, 68, 69, 70, 78, 81, 86, 88, 89, 92, 98, 110, 115, 116, 121, 25, 37, 38, 28, 8

⑥竈について全く資料を欠くもの

16, 24, 102, 106, 49, 53, 54, 59, 63, 61, 97, 79, 107, 108, 109, 75, 104, 105, 83, 87, 90, 99, 111, 112, 117, 118, 122, 124

この内、13, 19, 22, 23, 35, 38, 42, 47, 71, 72, 73, 82, 91, 103, 113, 125号住居跡については、軟質の砂岩状土塊が出土しているのに②に含めたものである。これは、住居を廃棄するに当たって竈を意図的に破壊したために原位置をとどめなかった結果と考えられるからである。また、⑤に区分されたものの中には遺存状態が芳しくなかったために判断を誤ったものが交じっている可能性が高いと考えられる。

構造材の入手に当たって最も規制が強いのは③の場合であり、本遺跡周辺では上植木庵寺・川上庵寺等で瓦を使用した建物跡が検出されている。③の竈を持つ住居跡は、両遺跡の建物が荒廃した時期以降に作られたと考えてほぼ間違いのないものと思われ、出土遺物の様相から推して、9世紀の中頃には既に荒廃が始まっていたものと考えられる。次に規制を受けるのが、②の竈であろう。①の場合には表面に散布しているものを採集して使用すれば事足りるが、②の場合には、竈の機能を十分に発揮できるような加工が容易で希望のものを入手し易い反面、切り出す手間が必要になってくる。使用された土塊の露頭箇所は特定できていないが、近似した様相を呈する堆積が粕川左岸に認められる。他遺跡における竈用材の変遷との検討は今後の課題としたい。

墨書土器について

本遺跡からは230点余の墨書土器が出土しており、遺存状態の良い資料では、墨痕が鮮やかに残っていて、

土器の使用に伴うかすれが殆ど認められないものも多い。既に発掘調査現場において、多量の墨書土器が出土することに注目していたが、遺物洗浄の際に十分な注意を払い得なかったために識別不能になってしまったものも有るかと思われるので、実数は更に上回るものと考えられ、群馬県下で最も多量の墨書土器が出土した遺跡である。判読出来た文字の種類では「子前」が最も多く、以下、第122表の通りである。電用材として二次的な使用状態ではあるが瓦も出土したが、残念ながら文字瓦の出土は無かった。では、土器或は瓦に文字を記すという行為は、一体何のために行うのか考えた場合に、断定は出来ないが次の5つの場合が想定される。

1. 器物の帰属・用途を明確にするため。
2. 器物を呪具とし一般のものから区別するため。
3. 器物の品質・数量の検収・点検のため。
4. 器物制作者の署名・符號を表すため。(器物の製作に携わる技術者本人を表す場合と、製作を依頼した者を表す場合とがある。)
5. 習書・その他。

本遺跡出土資料は、文章の形をなしたものは勿論無く、文の体裁をとるものも無い。記された内容は、文字とも記号とも考えられるような資料を多く含む。集落遺跡にあって竪穴住居出土の墨書土器を以て、即識字者が居住していた証とすることは適切でないと思われる。当時、「一般集落」の周辺で文字を書くことに精通していた人々として、里正・郷戸主・常郷官人・解任官人・祭祀者等の存在が考えられている。里正や郷戸主は律令支配体制の末端組織に属し、戸籍や計帳の作成に関与していたために文字を弁えていたと思われる。また、元の官人は刀筆の吏として当然、読み書きに精通していたと考えられる。

本遺跡のような集落遺跡出土の墨書土器は祭器として使用された可能性が高いと考えられる。即ち、墨書土器の表面観察では、器は完形を保っていないものが多いが、墨痕が鮮やかで器自体も摩耗痕の少ないものが目立つ。これにより、墨書土器が実際の日常生活における供養具と見るよりは「祭器」であると考えたことの方が蓋然性高いと思われる。そして、墨書土器の出土＝識字者の存在と考えるのではなく、祭の際に使用され、破砕されたものと考えても良いのではあるまいか。祭には、共同体全体で行うものも有るが、個々の竪穴住居にあっての祭は、家宅神の祭儀であり電を祀ると考えて良いと思われる。家にとって火というのが、光と熱とを供するものであり、簡単には発火させ得ないことから重大な関心対象であり、直接に火を使う電が祭の対象となっていったことは想像に難くない。本遺跡の集落の時期よりもやや遅れるが、[兵範記]嘉応二年(1170)五月十日条では、「電神＝祖先神」としており、家族の男が死ぬば男神(右袖)を棄却し、女が死ぬば女神(左袖)を棄却し、電神を新たにした風が存したことが窺われる。また、藤原定家の「明月記」正治元年(1199)四月三十日条には「今夜家神祭云々、件電神日来座坊門、去二十七日渡此宿所坤方」と見えており、「家神＝電神」となっている。電を新たに築く場合に、竪穴部分は従来のもをそのまま使用して電のみを改造・移築したものが一般的なのか、家屋全体を新築することが普通に行われたのか明らかでないが、発掘調査によって検出される遺構からは両方が考えられる。8号住居や28号住居のように複数の電跡を持った住居跡も有れば、新たに家を構える場合、屋敷地には、当然ながら規制が有るために重複遺構として検出される住居跡も有る。そして、家の新築・改築に際しては、集落の住居に定住している祭祀者(家父長層)とは別に、神官・陰陽師・修験者等の専門の祭祀者が集落を巡り歩いて「祭」を指揮していたことが考えられている。このような祭の際に墨書土器が使用されたのではないかと考えられる。

ところで、本遺跡出土の墨書土器は次のように分けられる。

第122表 墨書土器一覧表

No	釈文	器種・器形 土師	器形 須恵	部位 底	出土遺構	備考	No	釈文	器種・器形 土師	器形 須恵	部位 底	出土遺構	備考
30	人	環		内	1号住		213	吉	腕	外	内	16号住	正
31	主	環		内	1号住		220	田	腕	外	外	19号住	正
32	不明	環	環	内	1号住		225	不明	腕	外	外	19号住	正
37	人		環	内	2号住	外面遊 内面左	227	不明	腕	外	外	19号住	正
41	依		環	外	2号住	正	267	九	環	外	外	22号住	底部外縁に刻字×
45	主	環		内	3号住		287	子か	腕	内	内	25号住	
52	主・□	環		内	4号住		288	不明	腕	外	外	25号住	正
57	不明		環	内	5号住	逆	289	不明	皿		内	25号住	
59	不明		環	外	5号住		290	人	環	外	外	25号住	正
60	顔か	腕		外	5号住	右	296	子	環	内	内	28号住	
64	不明	環		外	5号住	?	316	大	環	内	内	30号住	正
71	不明	環		外	6号住	?	318	大	腕		内	30号住	
72	不明	環		外	6号住	?	321	不明	環	外	外	30号住	?
77	丁	環		外	7号住		322	不明	環	外	外	30号住	?
86	不明	環		外	7号住		325	田	腕	外	外	30号住	逆
97	丁	環		内	7号住		347	太	環	内	内	32号住	正
98	丁	環		外	7号住	?	349	大	環	内	内	32号住	正
99	丁	環		内	7号住		350	大	環	内	内	32号住	正
100	不明	環		外	7号住		356	太	腕	外	外	32号住	正
101	不明	環		内	7号住		357	車	腕	外	外	32号住	正
102	丁		環	内	7号住		358	太	腕	外	外	32号住	正
105	不明		環	外	7号住		363	大か	腕	外	外	33号住	正
106	不明	環		外	7号住	?	367	□か	腕	外	外	34号住	正
108	人		皿	外	7号住	正	373	不明	環	外	外	34号住	?
78	丁	環		内	7号住		397	子前	環	内	内	37号住	
115	夫	環		外	8号住	正	398	子前	環	内	内	37号住	
121	不明	環		外	8号住	?	410	子前	環	外	外	37号住	右
124	子前	腕		内	8号住	正	411	不明	環		内	37号住	
128	大		皿	内	8号住		412	子前	環		内	36・37号住	
130	不明	環		内	8号住		413	子前	環		内	37号住	
133	丁	環		外	8号住	正	414	丁	環	内	内	37号住	正
136	田	環		外	8号住	正	415	子前	環	外	外	37号住	正
137	不明	環		外	8号住	正	421	子前	環	外	外	37号住	正
138	刀	環		外	8号住	左	422	子前	環	内	内	37号住	
139	不明	環		外	8号住	?	423	子前	環	外	外	37号住	
140	不明	環		外	8号住		424	不明	腕	内	内	37号住	逆
141	不明	環		外	8号住		425	不明	腕	外	外	37号住	?
142	不明	?	外		8号住	?	433	子前	環	外	外	37号住	右
143	不明	環		外	8号住	?	438	子前	腕		内	37号住	
144	不明	環		外	8号住	?	441	子か	環	外	外	37号住	右
145	不明	環		外	8号住	?	442	子前	環	外	外	37号住	正
146	不明	環		外	8号住	?	443	不明	環	外	外	37号住	?
147	不明	環		外	8号住	?	444	子前	環	内	内	37号住	左
157	不明	環		外	9号住	?	445	不明	環	内	内	37号住	
158	不明	環		内	9号住		448	刀	環		内	37号住	
159	真	環		外	9号住	正	449	子前	環		外	36・37号住	
163	不明	環		外	10号住		450	子前	環		外	36・37号住	
173	依	環		内	12号住		461	刀	環		外	38号住	
174	不明	環		内	12号住	?	476	壺	腕	外	外	39号住	正
175	不明	環		内	12号住		505	田	環	外	外	42号住	正
176	依	環		外	12号住	?	535	人か	腕		内	44号住	正
177	不明	環		外	12号住	?	565	壺	環	外	外	48号住	正
187	依		環	内	13号住		575	不明	環	内	内	48号住	?
195	不明	環		内	14号住		576	子前	環	内	内	48号住	右
198	不明	環		外	14号住	正	577	不明	環	内	内	48・49号住	
199	□	腕		外	14号住		580	不明	腕		内	49号住	?
202	丁	環		外	14号住	正	581	不明	環	外	外	48・49号住	?

第III章 調査のまとめ

No	釈文	器種・器形 土師	器種・器形 須恵	部位 体	位置 底	出土遺構	備考	No	釈文	器種・器形 土師	器種・器形 須恵	部位 体	位置 底	出土遺構	備考
582	子前		坏	外		49号住	右	855	人		坏	内		92号住	逆
583	子前		坏	外		48・49号住	正	859	人		坏	外		92号住	逆
593	不明		坏	外		50号住	?	860	人		坏	内		92号住	逆
594	子前	坏		外		50号住	右	878	不明		椀		内	94号住	
607	不明		坏	外		51号住	正	885	不明	坏		外		99号住	?
618	不明		坏			55号住		886	不明	坏		内		99号住	
622	不明		坏		内	56号住	?	888	千		皿		外	99号住	
624	大		椀		外	56号住	逆	530	太		椀		外	101号住	正
627	大川か		椀		外	56号住	正	521	不明		椀		内	103号住	
628	有か		坏		内	56号住		786	不明	坏	外			109号住	正
629	不明		坏	外		56号住	?	898	人		坏	外		113号住	正
630	不明		坏	外		56号住	?	961	不明		椀		外	113号住	
631	不明		坏		内	56号住	正	910	主		椀	外	内	114号住	正
632	不明		坏		内	56号住		912	田		皿		内	114号住	
637	不明		坏	外		57号住	?	913	田		皿		外	114号住	
638	林		椀		外	57号住	正	929	不明		坏	外		116号住	
644		田	坏	内		56・57号住	正	939	不明		坏	外		117号住	?
646	不明		椀		外	58号住	?	948	不明		坏	外		122号住	逆
647	□		坏		内	58号住		951	子	坏		内		124号住	
653	□		坏	外	内	58・96号住		954	不明	坏		外		124号住	
654	不明	坏		外		96号住	正	955	大か		坏		内	124号住	
1018	不明	坏		外		60号住		956	不明		坏		内	124号住	
672	不明	坏			内	60・63号住		962	不明	坏		内		125号住	
718	子前		椀		内	63号住		963	不明		坏	外		125号住	?
684	□		坏		内	64号住		1016	不明	坏	外			10号溝	?
701	□		坏	外		66号住	正	976	山		坏	内		26号溝	
702	□		坏	外		66号住	正	977	大川		坏	内		26号溝	
703	□		坏	内		66号住	正	978	■		坏	内		26号溝	正
704	□		坏		内	66号住		979	有		坏	内		26号溝	
705	□		坏		内	66号住		980	不明		坏	外		26号溝	
706	不明		坏		内	66号住		982	□		坏	内		26号溝	正
707	太		椀		内	66号住	正	986	□		椀		内	26号溝	
723	不明		椀		内	69号住		987	太		椀		内	26号溝	正
1192	有		椀		内	69号住	逆	989	不明		椀		内	26号溝	
732	太		椀		内	70号住		991	不明		坏	外		26号溝	
733	□		坏	外		70号住	正	1014	大		坏		内	26号溝	
734	不明		坏	外		70号住	正	1191	田		椀	外		26号溝	正
743	子		坏	外		71号住	正	1161	田		椀	外		Ⅱ区	57号土坑 正
744	不明		坏	外		71号住		1085	■		椀		内	1号井戸	
745	不明		坏	内		71号住	?	8	不明		坏	外		6号溝	?
746	不明		坏	外		71号住	?	1158	不明		椀	外		6号溝	土坑?
747	不明		坏	外		71号住	?	9	田	坏		外		7号溝	正
751	有か		椀		内	73号住	正	13	田		坏	外		7号溝	
752	○		椀		外	73号住	?	14	知か		坏	内		7号溝	
753	子前	坏			内	76号住	逆	20	不明	坏			外	8号溝	
754	太		椀		内	76号住	正	21	田	坏			内	8号溝	
757	不明	坏			外	77号住		22	□		椀		内	Ⅱ区	
791	不明		坏	外		80号住	?	1159	至		坏	外		Ⅲ区	逆
805	人		椀		内	82号住		1160	吉		椀		内	Ⅳ区	
807	入か		椀		内	82号住	正	1167	不明		坏	外		Ⅲ区	?
808	不明		坏	外		82号住	?	1170	不明		坏	内		Ⅱ区	逆
809	不明		坏	内		82号住	?	1171	不明		坏	内		Ⅱ区	?
818	吉		?	外		84号住	正	1172	不明		坏	外	内	Ⅱ区	?
838	不明		椀		外	88号住	正	1173	(子)前	坏			内	Ⅳ区	?
844	大		椀		内	89号住	逆	1182	田		坏	外		V区表採	
845	不明		坏	外		89号住	逆	1183	田		坏		内	V区表採	
846	不明		坏	内		89号住	?	1184	不明		坏	外		Ⅲ区表採	?
851	不明		坏		内	91号住	?	1185	不明		坏		内	Ⅱ区表採	
852	子前		椀		内	91号住		1186	不明		坏		内	Ⅱ区表採	

A. 3文字以上書かれた物

「酒人師□」

B. 2文字以上書かれた物

「子前」・「大川」

C. 1文字の物

「車」・「林」・「大」・「人」・「丁」・「吉」・「子」・「田」・「主」・「太」・「有」・「依」・「刀」・「至」・「順」・「山」・「千」・「夫」・「真」・「十」・「知」

D. 「文字+記号」の体裁

「△+太」・「△+大」

E. 釈文不明の物

Aについては、職員令造酒司条に「正一人。(掌らむこと、酒、 酢、 酢飯らむ事。) 佑一人。令史一人。酒部六十人。(掌らむこと、行賜に供せむこと。) 使部十二人。直丁一人。酒戸。」と有り、『新撰姓氏録』には酒人氏が見える。本資料も所有者である酒人某の姓名を記したものの一部であると考えられる。本資料の他に、県下では山王院寺から「酒」字の銅印が出土している。

Bの「子前」については、『萬葉集』巻第二十に、上野国大目・防人部領使上毛野君鞍河が天平勝寶七歳乙未(755年)二月二十三日に進めた12首の歌の内、4首が掲載されている。その中に、「ひなぐもり難日の坂を越えしだに妹が戀しく忘らえぬかも」(4407)という、「他田部子磐前」の歌が見える。防人として筑紫に遣わされるに際して作ったものである。三年の任期を果たして帰郷した彼の、その後の生活を知る史料は残されていないが、「子前」も人名と考えられる。

上植木院寺出土の文字瓦に、隔印された「子」や、「子□」と書きさされたものが見える。また、「子」の墨書・刻書出土遺跡例は多く、県下で数遺跡を数える。有名な「羊子三」瓦は姓名を記したものと思われるが、本例は名前を記したものと考えられる。

「大川」も人名であろう。関連資料としては「大井」が有るが、これは井戸の美称でありその帰属を表すものであると思われる。

C・D・Eについては、即断出来ない。出土状態を含め、より多くの遺跡との比較・検討が必要である。特に、E. 釈文不明の物の中には、次に述べる耳皿と同様に葬儀儀礼と深い拘わりを持つたものが含まれていると考えられるが詳細な検討は後刻に俟ちたい。

耳皿について

本遺跡からは3点の耳皿が出土している。所謂「耳皿」は、箸台として使用されたものであり、『貞丈雑記』に「箸の台と云は、みみかわらけの事也、七五三などの膳、すべて式正の膳には、必みみかわらけに箸をおくなり」と見えている。また、『類聚雑要抄』所載の「保延二年十二月・内大臣殿贈大賈塗園」には、折敷の上に飯や菓子・干物・生物・窪坏物・四種と共に箸台に乗せられた箸が並べられており、深草土器を使用したことが見えている。なお、飯器(口径二尺七寸・尻付深草鉢)は永久年間(1113~1117年)に使用したときに壊れてしまったので、この度は土器色に塗った木製品に替えて用いたことが記されている。これは、保延二年(1136年)には、深草土器の入手が難しかったか、嗜好が木製品に変わったかのどちらかであろうが、わざわざ土器色に彩色したことから推して、「セット」を意識して同様な物を揃えようとしたが、既に入手し得ない状況にあったためと考えることのほうが妥当であり、京都府伏見周辺における土器生産体勢の変化を

第三章 調査のまとめ

窺うことができよう。また、同書には銀製の箸及び箸台の図が掲載されており、箸台の高級品は鶴の形を模したものが使われていたことが知られる。一方、『大日本古文書』からは、写経所の写経生や造寺所の工人等は竹製の箸を使い、箸台は使用しておらず、耳皿が個人々の銘名器となっていなかったことが知られる。即ち、桐原氏の指摘された通り、「貴族にとって箸台は晴れの儀式に限られてはいるものの、供膳具の一つにすぎないのに対し、竪穴住居者にとって耳皿はそれが住居内に存したとはいえ、日常生活の供膳具を超えた用途を持つもの」であったことが知られる。

次に、次表は、管見の及ぶ範囲で、群馬県内の遺跡から出土した「耳皿」を集成したものであり、発掘調査された遺跡数に比して、出土点数が極端に少ないことは予想どおりであった。また、生産遺跡の例を除くと、竪穴住居跡出土のものと同様に考えられる遺構から出土したものととの比率は5：1であるが、葬送儀礼と深い拘わりを持つことが考えられる。副葬品に耳皿が加えられるのがいつ頃なのか明確でないが、下佐野遺跡・北新波遺跡等の例から推して、必ずしも、すべての墓に同じように副葬されたものではないと考えられる。京都府の篠原跡群では、およそ9世紀中頃（前山1号窯段階）に既に耳皿の生産が開始されており、灰軸陶器は10世紀前半頃（K-90号窯段階）から出土している。更に、竪穴住居跡出土例については、個々の集落遺跡を細かく分析していないので憶測にとどまるが、祭祀権を持った家父長層が耳皿を所持・管理しており、日常の祭祀に使用していたものと考えられるのではあるまいか。勿論、日常の祭祀を具体的にすることはできないが、世代の交替に伴って儀器も更新されたことは十分に考えられることであり、耳皿がモニュメントとして副葬されたのではあるまいか。

米井宮前遺跡33号住居跡のように、単一住居から複数の耳皿が出土し、一方には焼成前の穿穴が認められること等、形態・数量について検討課題は数多く有るが、実測図の表現方法に差異があるため個々の遺物を見直して後考に俟ちたい。

なお、緑軸陶器も26号溝及び6号墳周辺から出土しているが、力不足と時間の制約からまとめられなかった。

耳皿出土遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	備考
1	小町田遺跡	太田市龍舞字小町田	56号住居	須恵器	
2	書上上原之城遺跡	伊勢崎市豊城町	708.0Hグリッド	灰釉陶器	
3	歌舞伎遺跡	新田郡尾島町	方形ピット	須恵器	
4	#	#	A区J-12グリッド	須恵器	
5	石之塔遺跡	新田郡飯塚本町大字石之塔			
6	寺家前遺跡	佐波郡埴町大字下畑名字寺家前	C-2号土器室	灰釉陶器	
7	下東西遺跡	前橋市青梨子町・群馬郡群馬町	17号住居	須恵器	
8	#	#	G-19グリッド	灰釉陶器	
9	上野区分館寺・尼寺中間	前橋市総社町・群馬郡群馬町	F区23号住居	灰釉陶器	
10	地域遺跡	#	F区37号住居	灰釉陶器	
11	堤東遺跡	前橋市荒子町	4号住居	須恵器	
12	鳥羽遺跡	前橋市鳥羽町	K63号住居	須恵器	
13	芳賀東部団地遺跡	前橋市榎町ほか	H-321号住居	灰釉陶器	
14	清里・長久保遺跡	前橋市池端町・北群馬郡吉岡村	13区1号墓塚	灰釉陶器	墓塚
15	清里南部(Ⅲ)遺跡	前橋市総社町・青梨子町	34号住居	須恵器	
16	#	#	37号住居	須恵器	
17	空沢遺跡(第五次)	渋川市行幸田	HH-31号住居	須恵器	
18	前中原遺跡	利根郡月夜野町大字真沢	C-63グリッド	須恵器	
19	村主遺跡	利根郡月夜野町大字上津字大原	3号住居	須恵器	
20	#	#	17号住居	須恵器	
21	#	#	M-25グリッド	須恵器	
22	#	#	M-25グリッド	須恵器	
23	洞Ⅰ遺跡	利根郡月夜野町大字月夜野字洞	P-9グリッド	須恵器	
24	#	#	P-9グリッド	須恵器	
25	#	#	P-9グリッド	須恵器	
26	#	#	P-9グリッド	須恵器	
27	#	#	P-9グリッド	須恵器	
28	#	#	P-9グリッド	須恵器	
29	#	#	P-9グリッド	須恵器	洞Ⅰ
30	洞Ⅱ遺跡	#	I-20グリッド	須恵器	洞Ⅱ
31	永井宮前遺跡	利根郡昭和村大字永井	33号住居	須恵器	
32	#	#	33号住居	須恵器	
33	北貝戸遺跡	利根郡水上町大字北貝戸	表探	(須恵器)	
34	別分八幡下遺跡	北群馬郡新南村大字広馬場	I区3号ピット	灰釉陶器	
35	大久保A遺跡	北群馬郡吉岡村大字大久保	I区グリッド	灰釉陶器	
36	#	#	I区グリッド	須恵器	
37	#	#	II区81号住居	須恵器	
38	中尾遺跡	高崎市中尾町	C-20号住居	(灰釉陶器)	
39	#	#	E-26号住居	(灰釉陶器)	
40	#	#	E-33号住居	(灰釉陶器)	
41	下佐野Ⅱ遺跡	高崎市下佐野町字川原	5区56号住居	灰釉陶器	
42	#	#	5区56号住居	須恵器	
43	#	#	8区2号住居	須恵器	
44	#	#	7区113号土壇	須恵器	墓塚
45	#	#	6区8号住居	須恵器	
46	#	#	5区3B号住居	須恵器	
47	舞台遺跡(Ⅱ)	高崎市東間町舞台	10号土壇	緑釉陶器	墓塚
48	舞台遺跡(Ⅲ)	高崎市南間町舞台	6号住居	須恵器	
49	菊地遺跡(Ⅰ)	高崎市菊地町	1号土壇	須恵器	墓塚
50	結貫遺跡	高崎市結貫町	2号住居	須恵器	
51	北新渡遺跡	高崎市北新渡町	A区S X 1	灰釉陶器	墓塚と考えられる。
52	日高遺跡(Ⅳ)	高崎市日高町	表探	須恵器	
53	原田隆遺跡	富岡市田原町平	15号住居	須恵器	
54	川原遺跡	多野郡古井町馬庭字川原	グリッド	須恵器	

墨書土器出土遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	墨書文字	備考
1	小町田遺跡	太田市龍舞字小町田・八臥	子、大田?	
2	小町田遺跡	#	方?	太田東部
3	八幡遺跡	# 上島字八幡 五		
4	賀茂遺跡	# 龍舞字賀茂	大、夫、平、刃	
5	清水田遺跡	# 茂木字清水田	矢田、矢、田、神殿、寺、東、伴、上、三、真?、合?、大?、楊?、南?、朝、天上	太田東部
6	浜町屋敷内C地点遺跡	# 浜町	三新?	
7	舞台C遺跡	# 藤阿久		
8	伊勢崎東流通印地遺跡	伊勢崎市日乃出町	井	
9	上植木関寺遺跡	# 本関町・上植木本町	賀	
10	上植木寺町田遺跡	# 三和田	不明	
11	書上上原之城遺跡	# 豊城町	金、人、布、福、日、乙、子、国?、止?、本?、七、矢、奥、集、四十、平、林、吉、以、口奥	
12	書上下吉祥寺遺跡	# 豊城町	紙、金?	
13	今井南原遺跡	赤根村大字今井	不明	
14	川上遺跡	# 大字下触字川上	至?、寺、信、長、慈、生、炉、大大	
15	女堀遺跡	#	不明	
16	下触向井遺跡	# 大字下触字向井	中、升、中臣	
17	五日午東遺跡群	# 田中通・乙中通	太、日、赤	
18	北通遺跡	#	大門	
19	龍島遺跡	#	郡?、川郡、中、刃、川日	
20	小角田前遺跡	尾島町世良田字小角田前	吉、百人、子、西、土、友、人足、北、豊、大、十、日、石、花、	
21	歌舞伎遺跡	# 世良田	調	
22	十三宝塚遺跡第6次	堀町大字伊与久	不明	
23	十三宝塚遺跡 I	# 大字伊与久字十三宝塚	夫、上、神、田、九、方、吉、北井、栄、	
24	十三宝塚遺跡 II	#	上田、九、万、上、夫、神田、十、大井、忠、田、一、水、高、古、長、中、甲、木、左、方、吉、足、大?、品?、酒?、佐?、樟?、	
25	寺家前遺跡	#		
26	西今井・三ツ木遺跡	# 西今井字中道	七、田、柳田、朝、乙、〇、殿、光、井、甲、沼?	境町調査
27	下湖名遺跡	# 下湖名字新屋敷ほか	左、上、大、太、東、西、井、仙、宜	
28	土橋・三ツ古屋遺跡	# 字土橋・三ツ古屋	下、井?	
29	島商戸遺跡	# 字島商戸	加	
30	明神遺跡	# 字明神	生、川	
31	三ツ木遺跡	# 三ツ木字自光坊	田殿、大、井、田	
32	天神風呂遺跡	大胡町茂木	万、雲、我	
33	天笠遺跡	新里村山上字天笠	木、子、知、成、矢、上、山?、立?、↑?	
34	峯岸遺跡	# 武井字峰岸	不明	
35	岩之下遺跡	富士見村米野・横室	在、	
36	下東西遺跡	前橋市青梨子町・群馬町	丁、乙?	

2. 集落のまとめ

No	遺跡名	所在地	墨書文字	備考
37	上野国分寺、尼寺中間地域	※ 総社町字小見 群馬県群馬町東国分	寺、法花寺、原、大川、水、田、如天夕、當	
38	上野国分寺跡	※	戸下、造仏、口福、吉？、	
39	堀東遺跡	前橋市荒子町字堀東	平、内、山、	
40	柳久保遺跡水田址	※ 荒口町	下内か下？	
41	西大室遺跡群	※ 西大室町字上綱引	申	
42	鶴谷遺跡群	※ 荒口町字下鶴谷	大、	
43	鶴谷遺跡群II	※	太、尺	
44	荒砥東原遺跡	※ 東大室町字西神沢	不明	
45	荒砥北原遺跡	※ 今井町字北原	井？	
46	湯気遺跡	※ 小神明町湯気	不明	小神明IV
47	上原遺跡	※	大、生、臣、福、聖、中、見、成、田、礎、寺上、目、西正部	
48	梅木遺跡	※ 西大室町	不明	
49	山王病寺遺跡第7次	※ 総社町龍社	不明	
50	清里南遺跡	※ 青梨子町	不明	
51	寺田遺跡	※ 元総社町	口	
52	柳久保遺跡	※ 荒子・荒口町	墓	荒砥北部
53	芳賀東部団地遺跡	※ 小坂子・小神明町	龜・跡沢・鳥取・五代・十、神木、耳、犬、真、寺、前、井、藤、上、此	
54	西大室遺跡群	※ 西大室町	南、糸、若	1982.3.31
55	小神明遺跡群V	※ 小神明町字合田	日、内、真	
56	荒砥上川久保遺跡	※ 大室町	二、川、上家、若、可？、	
57	鳥羽遺跡	※ 鳥羽町	不明	
58	天神遺跡	※ 元総社町字早道	不明	
59	檜峯遺跡	※ 上泉・五代町	宅、卒	
60	荒砥島原遺跡	※ 二之宮町	不明	
61	御正作遺跡	大泉町下小泉町字御正作	侯、八田、若嶺	
62	空沢遺跡	渋川市行幸田	本	
63	西沼遺跡	※	甘	
64	大塚遺跡	中之条町	酒	
65	大塚遺跡	沼田市大塚町		
66	藪田遺跡	月夜野町月夜野字藪田	不明	
67	梨の木平遺跡	※	吉	
68	高平遺跡	※	C	
69	村主遺跡	※ 上津字大原	人	
70	三峰神社裏遺跡	※	師生	
71	分郷八崎遺跡	北橋村分郷八崎ほか	刀、	
72	中継遺跡	昭和村大字糸井中継	井	
73	糸井宮前遺跡I	※ 大字糸井	大川	
74	三ツ寺遺跡II	群馬町大字三ツ寺	[上]	
75	三ツ寺遺跡田	※	井	
76	北原遺跡	※ 字北原	妙、行、保、東	
77	上野国分寺周辺地域	※	東院	
78	中継遺跡	赤城村大字三原田字中継	太	
79	東原遺跡	水上町川上字東原	百	

第III章 調査のまとめ

No	遺跡名	所在	墨書文字	備考
80	北貝戸遺跡	#	太	
81	別分八幡下遺跡	糠東村大字広馬場字八幡下	山?	
82	大久保A遺跡Ⅰ区	吉岡村大字大久保	丙、由、千、山、門?	
83	大久保A遺跡Ⅱ区	#	大、今、神、岡、入、下東、寸、下、東、丁?、人か八?、神石?、拍	
84	七日市遺跡	#	不明	
85	清里・陣場遺跡	# 大字陣場	不明	
86	中尾遺跡	高崎市中尾町	林、大、着、小、和、乃、井、若林	
87	下佐野遺跡Ⅱ	# 下佐野町字川久保	七、下、田殿、甲、凡、千、上、二、置、大か太?、大?	
88	新保遺跡Ⅱ	# 新保・新保田中町	不明	
89	雨森遺跡	# 大八木町字雨森	仁、上?、右?、小か川?	
90	下斉田遺跡	# 下斉田町字小芝	十?	
91	上越新幹線22地区	# 下小島・大八木町	三井	
92	菊地遺跡群	# 菊地	全	
93	栗崎遺跡群	# 栗崎町字東原	不明	
94	天田遺跡	# 上大船町字天田	不明	
95	宝昌寺裏遺跡	# 欠中	不明	
96	天王前遺跡	#	主	
97	石神・五反田(Ⅱ)遺跡	#	主	
98	結買遺跡	# 結買町	不明	
99	道場遺跡	榑名町大字本郷字道場	主	
100	井原遺跡	草津町大字前口字家の前		
101	原田孫遺跡	富岡市	正	
102	本宿・郷土遺跡	# 一之宮	寸、仙	
103	黒熊遺跡	吉井町	不明	
104	古城遺跡	安中市板倉字古城	不明	
105	A1区ノ内遺跡群	藤岡市大字小林南・本郷	福	
106	株木遺跡	#	今、田入、加、田、丹、十	
107	石田川遺跡	太田市	大(刻)	
108	蛇川遺跡	#		
109	治良エ門橋遺跡	#	不明	
110	東今泉遺跡	#	獻	
111	曹上遺跡	伊勢崎市	林	
112	伊与久遺跡	埴町	萬	
113	上矢島遺跡	#	布、中、天、寺口、郷、田、長(刻)	
114	河原浜遺跡	大胡町	梵字?	
115	藤生沢遺跡	新里村	万	
116	芳賀北部遺跡	前橋市		
117	芳賀遺跡	#	林殿、神木	
118	陣場遺跡	#	大水(刻)	
119	有馬牟理遺跡	渋川市	水	
120	洲遺跡	月夜野町大字月夜野字洲	六(刻)	
121	師A遺跡	#	内殿、	
122	保渡田遺跡	群馬町大字保渡田	十(刻)	
123	三ツ寺I北遺跡	# 大字三ツ寺	段田、華、上、井、千、紀殿、西東	

2. 集落のまとめ

No	遺跡名	所在	墨書文字	備考
124	御畑遺跡	榑栗村		
125	大八木遺跡	高崎市	三井	
126	巾遺跡	#	毛	
127	十貫稲遺跡	#	泉衆?	
128	熊野堂遺跡	#	十(刻)	
129	田塚遺跡	#	成(刻)	
130	川内遺跡	吉井町	田	
131	赤芝遺跡	宮城村	足	
132	仁田遺跡	松井田町	加	
133	坂上本宿遺跡	吾妻町	車	
134	中江田遺跡	新田町	乙	
135	家岸遺跡	新里村大字浅井字峰岸	安(羅井)	
136	石墨遺跡	沼田市石墨町字新田割	良、淨、氏人、上、六、林、正、若、	

写 真 图 版



遺跡地遠景 (矢印が調査地点)



遺跡地より西側を望む



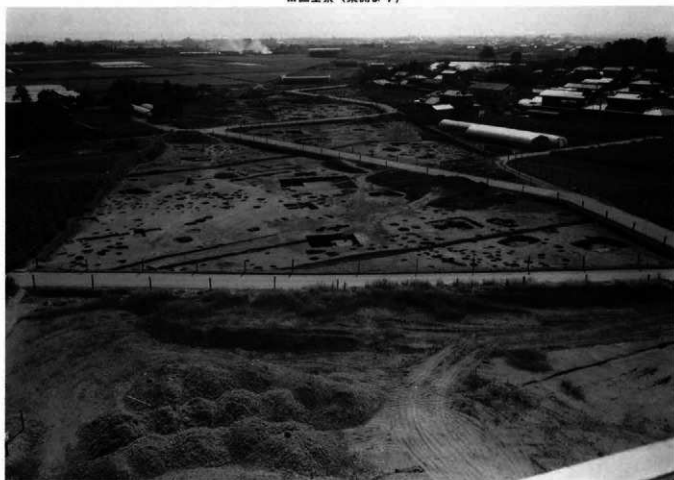
I区全景（東側より）



II区全景（西側より）



III区全景（東側より）



VI区全景（西側より）



V・VI区全景（西側より）



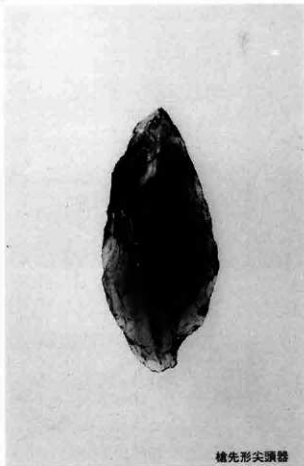
VII区全景（北側より）



遺物出土状況



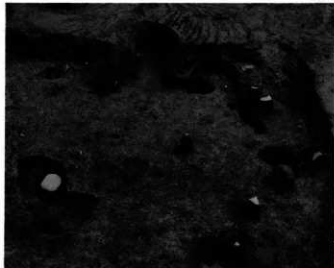
遺物出土状況近接



槍先形尖頭器



陥し穴全景



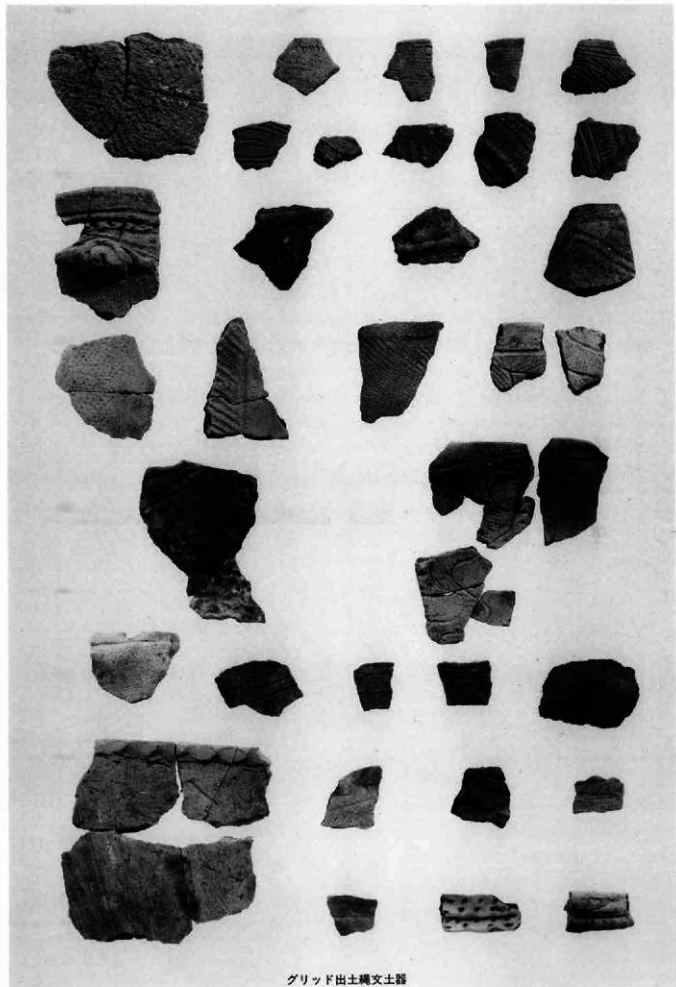
左上：埋設土器検出状況



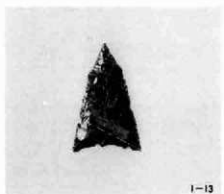
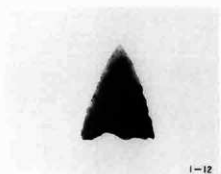
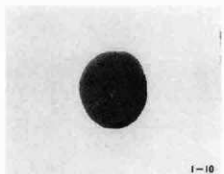
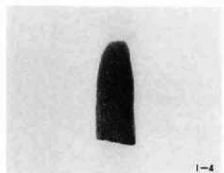
右上：埋設土器全景

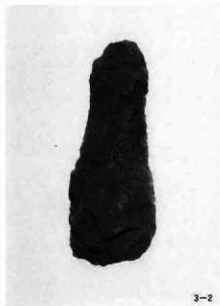
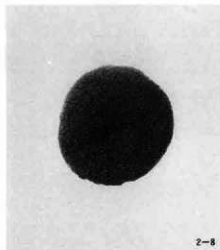
右下：埋設土器

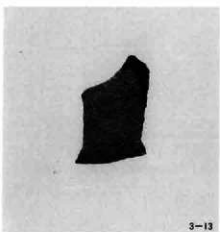
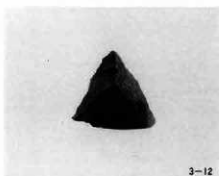
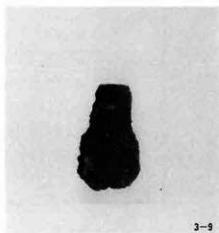
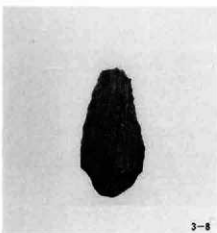
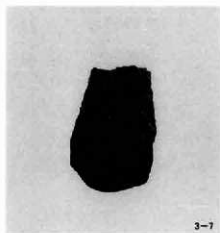


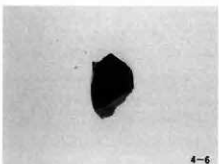
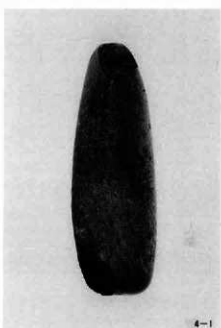
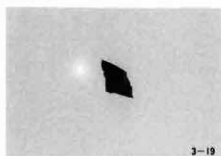
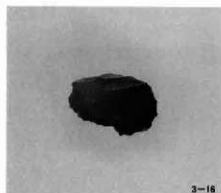


グリッド出土縄文土器











1号墳全景（南西より）



石室検出状況



掘り方全景



石室全景（南西より）



石室側壁



石室全景（北東より）



石室床面掘り方



石室根石・掘り方



2号墳全景（南側より）



周壙内遺物出土状況



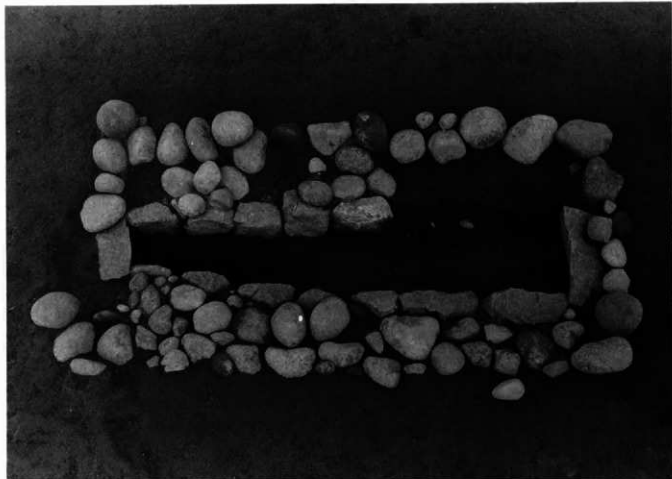
石室検出状況



石室天井石被覆状況



石室天井石残存状況



石室全景



石室掘り方全景



3号墳全景（東側より）



石室検出状況



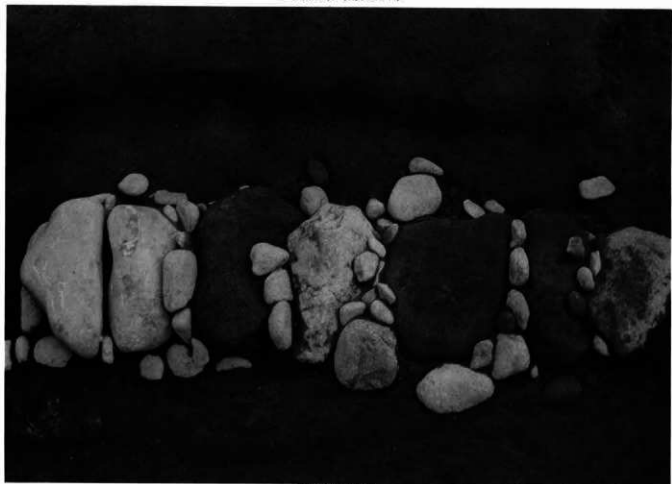
石室全景



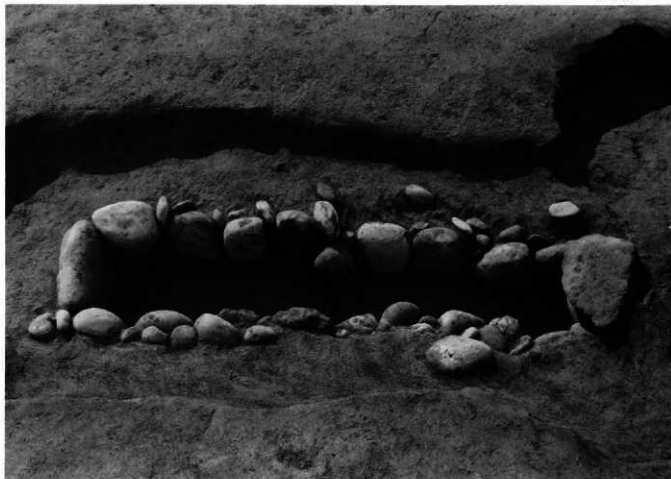
石室掘り方全景



4号墳全景（南側より）



石室検出状況



石室全景



石室掘り方全景



5号墳遠景（北側より）



5号墳全景



6号墳全景（北側より）



石室全景



7号墳全景（南側より）



6・7号墳透景



8号墳全景（南側より）



石室残存状況



9号墳全景（北東より）



10号墳全景



1



2



3



9



10



15



16



17



23

编号71号填



1号墳



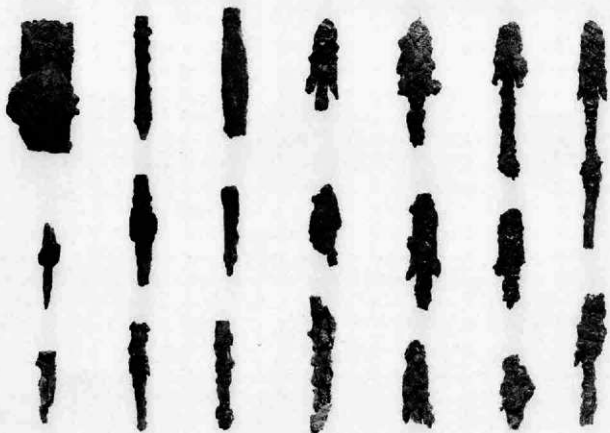
7号墳

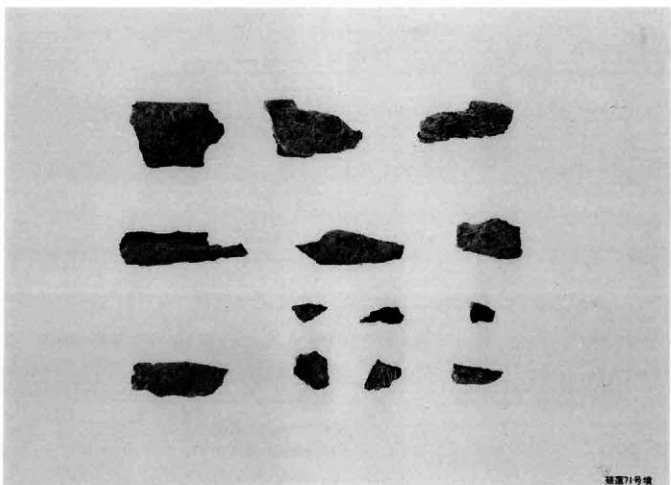
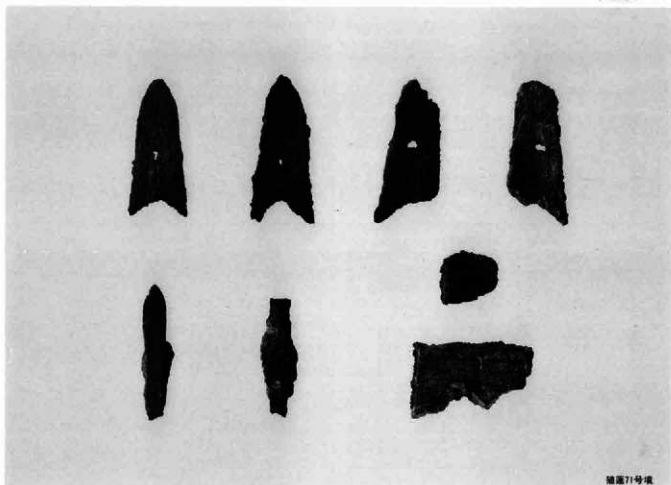


6号墳



2号墳







第1号住居跡全景（西側より）



第1号住居跡窟



第2号住居跡全景（西側より）



第2号住居跡窟遺物出土状況



第3号住居跡全景（西側より）



第3号住居跡窟



第4号住居跡全景（南側より）



第4号住居跡窟遺物出土状況



第5号住居跡全景（南側より）



第119号住居跡電掘り方



第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡竈遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡全景（西側より）



第8号住居跡窟



第8号住居跡窟遺物出土状況



第8号住居跡窟遺物出土状況



第8号住居跡窟遺物出土状況



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡掘



第10号住居跡全景（西側より）



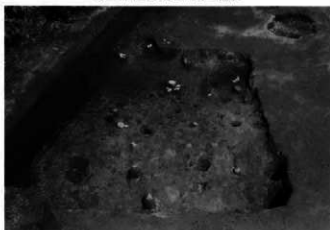
第10号住居跡掘り方



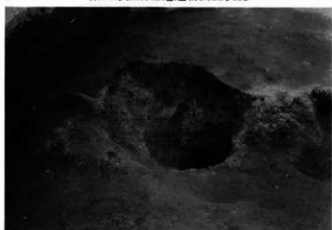
第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡全景（西側より）



第13号住居跡掘り方



第14号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡遺物出土状況



第120号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡遺物出土状況



第18号住居跡全景（東側より）



第18号住居跡



第19号住居跡遺物出土状況



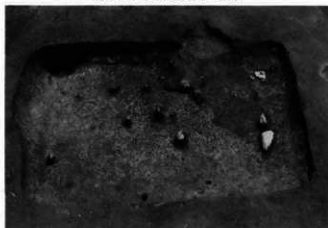
第19号住居跡竈遺物出土状況



第20号住居跡遺物出土状況



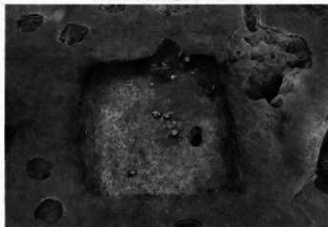
第20号住居跡竈遺物出土状況



第21号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡竈遺物出土状況



第22号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡竈



第23号住居跡全景



第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡掘り方



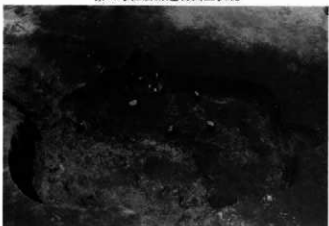
第24号住居跡掘り方



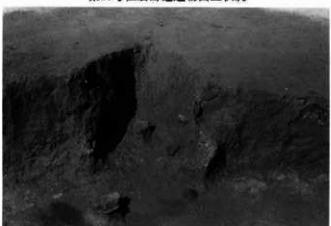
第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡



第28号住居跡遺物出土状況



第28号住居跡遺物出土状況①



第28号住居跡遺物出土状況②



第29号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡遺物出土状況



第30号住居跡全景



第30号住居跡遺物出土状況



第31号住居跡全景 (西側より)



第31号住居跡遺物出土状況



第32号住居跡全景 (西側より)



第32号住居跡遺物出土状況



第33号住居跡全景 (西側より)



第33号住居跡掘り方



第34号住居跡全景（西側より）



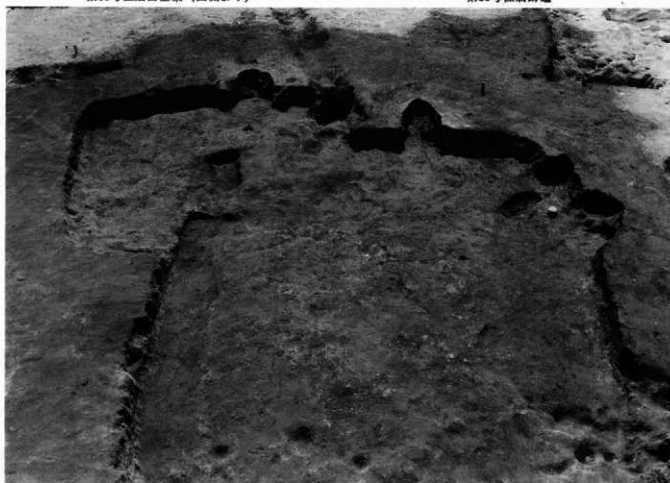
第34号住居跡壙



第35号住居跡全景（西側より）



第35号住居跡壙



第36・37号住居跡全景（西側より）



第38号住居跡全景（西側より）



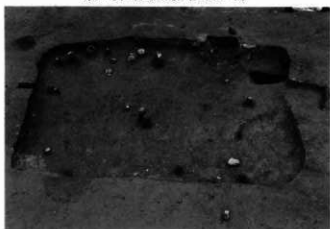
第38号住居跡竈



第39号住居跡全景（西側より）



第39号住居跡竈



第40・103号住居跡遺物出土状況



第40・103号住居跡竈



第40・103号住居跡掘り方



第103号住居跡竈掘り方



第41・43・101号住居跡全景



第101号住居跡全景（西側より）



第101号住居跡露遺物出土状況



第43号住居跡遺物出土状況



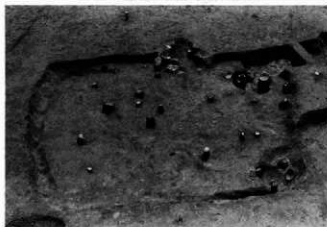
第43号住居跡露遺物出土状況



第42・102号住居跡遺物出土状況



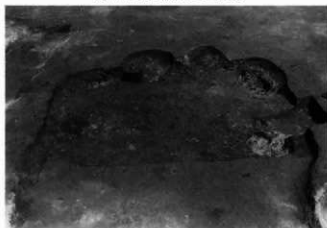
第42号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡遺物出土状況



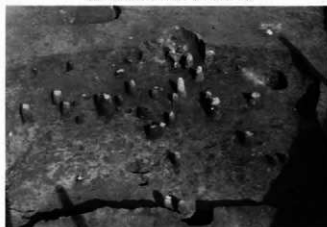
第44号住居跡窟



第45号住居跡全景（西側より）



第45号住居跡窟遺物出土状況



第46号住居跡遺物出土状況



第46号住居跡窟遺物出土状況



第47号住居跡遺物出土状況



第47号住居跡窟



第48・49・106号住居跡全景



第48号住居跡窟・貯蔵穴



第49号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第50号住居跡全景（西側より）



第50号住居跡壺



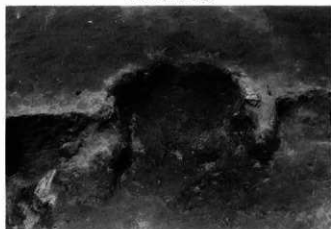
第51号住居跡全景（西側より）



第51号住居跡壺



第52号住居跡全景（西側より）



第52号住居跡壺



第53号住居跡全景（西側より）



第53号住居跡壺



第55号住居跡全景（西側より）



第55号住居跡遺物出土状況



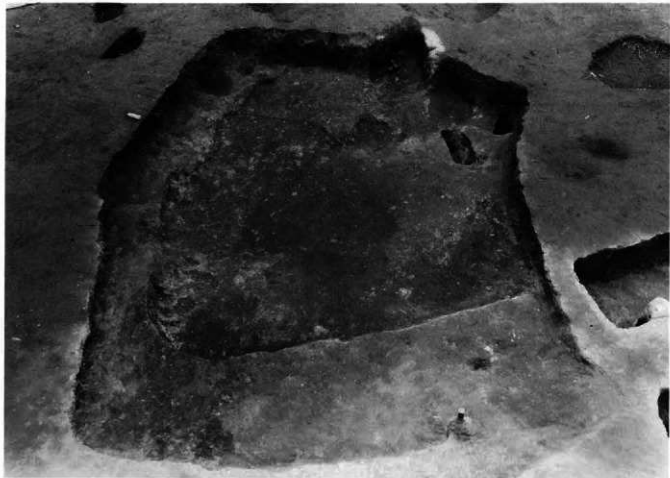
第56・57号住居跡全景（北側より）



第56号住居跡遺物出土状況



第56号住居跡



第58・59・96号住居跡全景



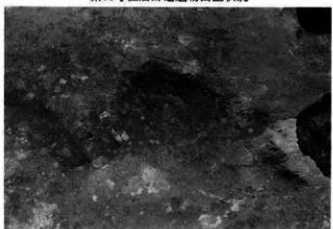
第58・59・96号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡掘り方



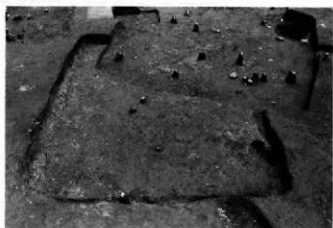
第96号住居跡掘



第60・63号住居跡全景



第60号住居跡遺物出土状況



第63号住居跡遺物出土状況



第60号住居跡竈・貯蔵穴



第60・63号住居跡掘り方



第62号住居跡遺物出土状況



第62号住居跡竈・貯蔵穴



第64号住居跡遺物出土状況（西側より）



第64号住居跡竈・貯蔵穴



第65・97号住居跡掘り方



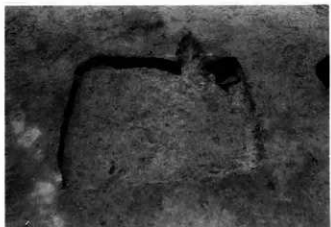
第65・97号住居跡セクション



第66号住居跡遺物出土状況



第66号住居跡竈・貯蔵穴掘り方



第67号住居跡全景（西側より）



第67号住居跡竈



第68号住居跡全景（西側より）



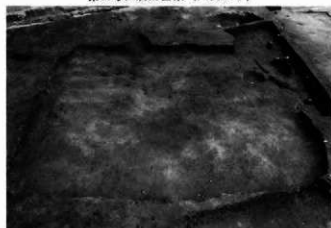
第68号住居跡竈遺物出土状況



第69号住居跡全景（西側より）



第69号住居跡竈遺物出土状況



第71号住居跡全景（西側より）



第71号住居跡竈



第72号住居跡全景（西側より）



第73号住居跡全景（西側より）



第73号住居跡壘



第73号住居跡遺物出土状況



第73号住居跡掘り方



第75・104・105号住居跡全景



第76号住居跡遺物出土状況



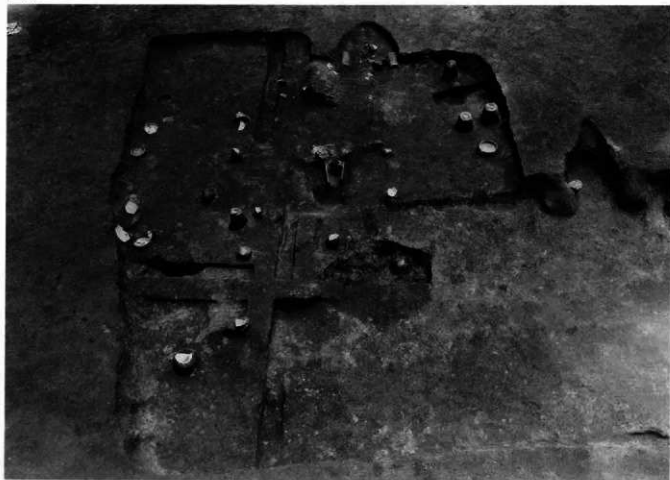
第76号住居跡全景（西側より）



第76号住居跡竈遺物出土状況



第76号住居跡竈・貯蔵穴



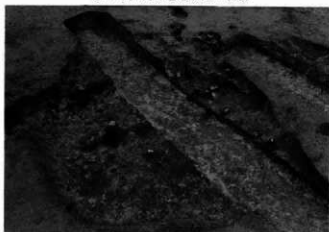
第76・77・100号住居跡全景



第77号住居跡竈遺物出土状況



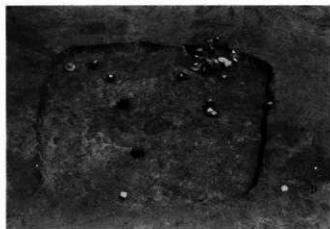
第100号住居跡竈遺物出土状況



第78・95号住居跡掘り方



第78号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第80号住居跡遺物出土状況（西側より）



第80号住居跡・貯蔵穴



第81号住居跡全景（西側より）



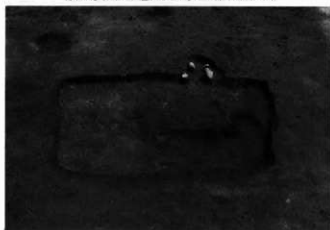
第81号住居跡遺物出土状況



第82号住居跡遺物出土状況（西側より）



第83号住居跡セクション



第84号住居跡全景（西側より）



第84号住居跡遺物出土状況



第85号住居跡遺物出土状況



第85号住居跡竈



第86号住居跡全景(北側より)



第86号住居跡遺物出土状況



第87号住居跡全景



第87号住居跡掘り方



第88号住居跡遺物出土状況



第88号住居跡竈



第89号住居跡全景（南側より）



第89号住居跡竈遺物出土状況



第90号住居跡



第91・93号住居跡全景（西側より）



第91号住居跡遺物出土状況



第92号住居跡遺物出土状況



第92号住居跡遺物出土状況



第94号住居跡全景（西側より）



第94号住居跡遺物出土状況



第98号住居跡全景（南側より）



第98号住居跡遺物出土状況（南側より）



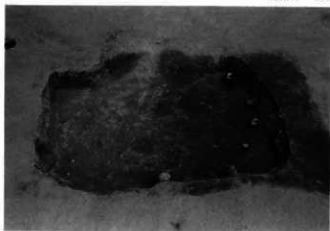
第99号住居跡遺物出土状況（西側より）



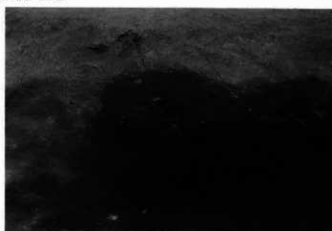
第99号住居跡掘り方（北側より）



第107・109号住居跡全景



第110号住居跡遺物出土状況



第110号住居跡概



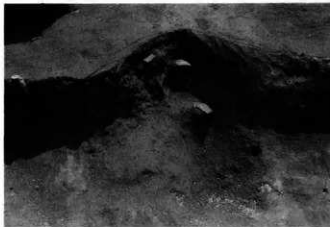
第111・112号住居跡全景



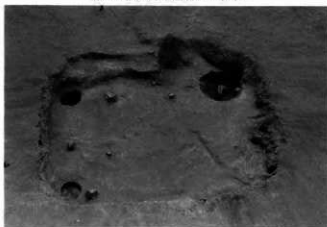
第111号住居跡全景



第113号住居跡遺物出土状況



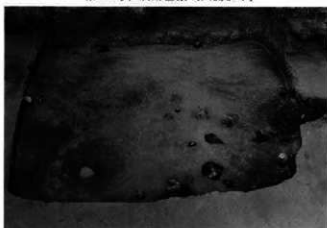
第113号住居跡遺物出土状況



第114号住居跡全景（西側より）



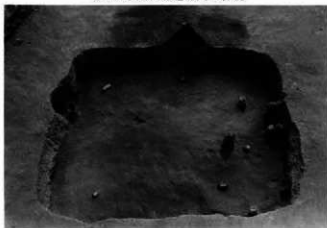
第114号住居跡



第115号住居跡遺物出土状況



第115号住居跡遺物出土状況



第116号住居跡遺物出土状況



第116号住居跡遺物出土状況



第117号住居跡全景（西側より）



第118号住居跡所在地



第121号住居跡遺物出土状況



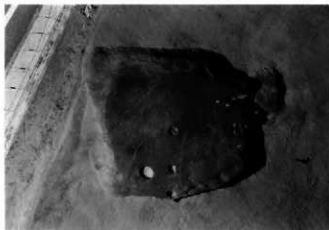
第121号住居跡竈



第124号住居跡遺物出土状況



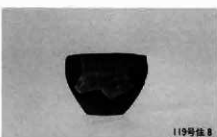
第124号住居跡掘り方



第125号住居跡遺物出土状況



第125号住居跡竈遺物出土状況





6号住5



6号住7



7号住1



7号住2



7号住3



7号住4



7号住5



7号住6



7号住7



7号住8



7号住10



7号住12



7号住19



7号住21



7号住23



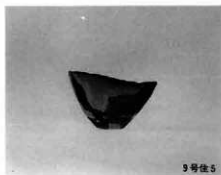
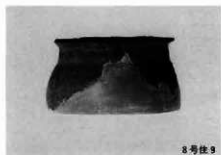
7号住20

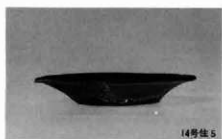
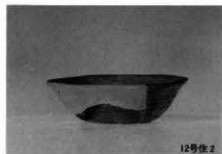


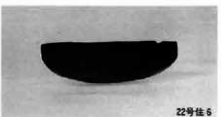
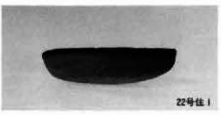
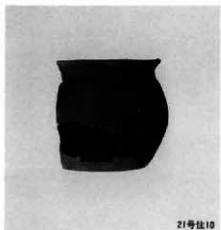
7号住22



8号住18









22号住 8



22号住 9



22号住 10



22号住 11



22号住 12



22号住 13



22号住 14



22号住 15



22号住 16



22号住 17



22号住 18



22号住 19



23号住 2



23号住 3



23号住 14



23号住 6



23号住 7



23号住 9



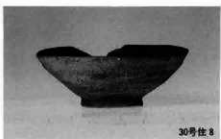
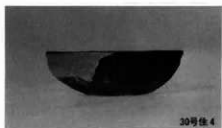
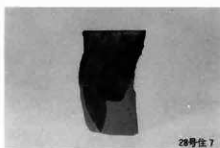
25号住 1



25号住 3



25号住 6





30号住10



30号住12



30号住15



31号住1



31号住3



31号住4



31号住5



32号住1



32号住2



32号住3



32号住4



32号住5



32号住6



32号住7



32号住8



32号住9



32号住10



32号住11



32号住12



32号住13



32号住14





37号住 1



36・37号住 2



37号住 3



37号住 4



37号住 5



37号住 6



37号住 7



37号住 17



37号住 18



37号住 12



37号住 13



37号住 14



36・37号住 27



36・37号住 28



36・37号住 29



38号住 2



38号住 5



39号住 1



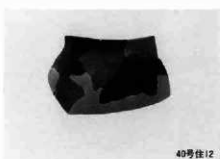
39号住 3



39号住 4

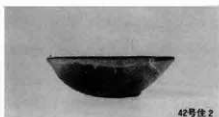


39号住 5





42号住 1



42号住 2



42号住 3



42号住 5



42号住 6



44号住 2



44号住 3



44号住 4



44号住 5



44号住 6



44号住 7



44号住 8



44号住 9



45号住 1



45号住 3



45号住 5



46号住 6



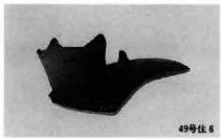
46号住 4



47号住 3



46号住 5





51号住 9



51号住 10



51号住 11



52号住 1



52号住 2



52号住 3



54号住 1



55号住 2



56号住 1



55号住 4



55号住 5



56号住 2



56号住 3



56号住 4



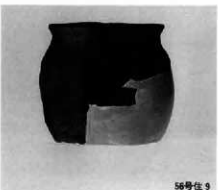
56号住 6



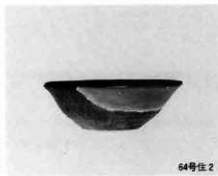
56号住 7

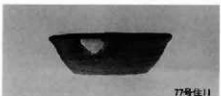
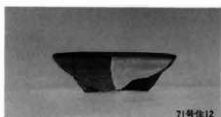


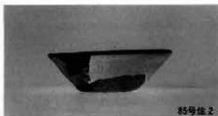
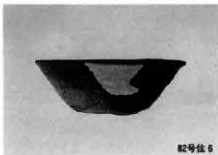
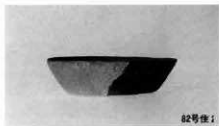
56号住 8

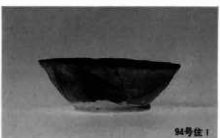
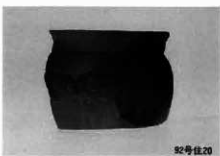
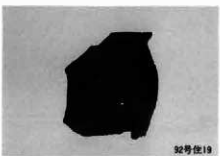
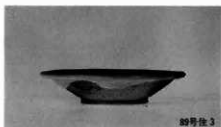


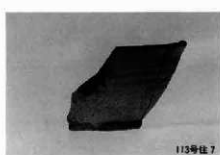
56号住 9













114号住 1



114号住 3



114号住 4



114号住 6



114号住 7



115号住 1



115号住 2



115号住 3



115号住 4



115号住 5



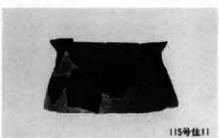
115号住 6



115号住 8



115号住 9



115号住 11



115号住 12



115号住 10



116号住 7



116号住 4



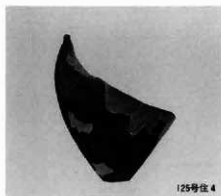
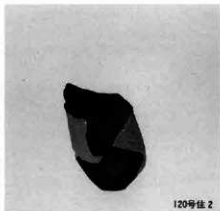
116号住 1



116号住 2

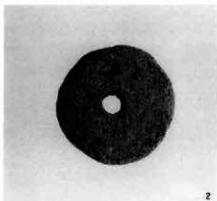


116号住 3

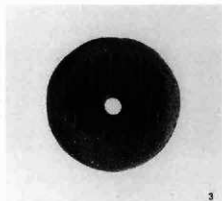




1



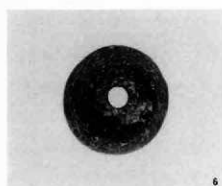
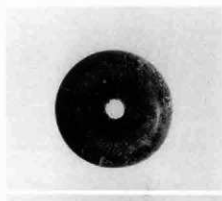
2



3



4



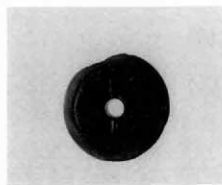
6



5



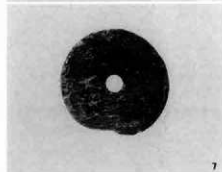
8



9



10



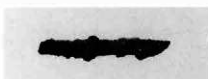
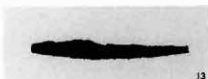
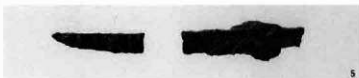
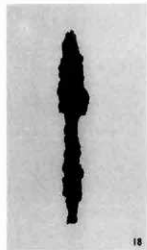
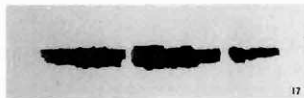
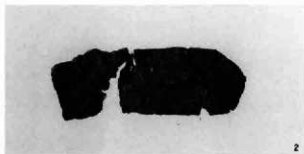
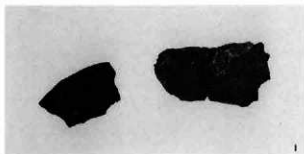
7

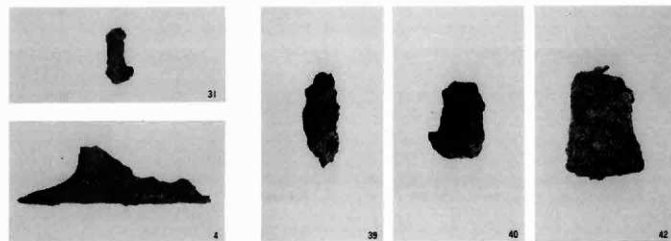
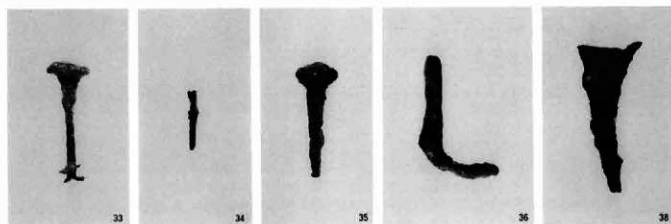
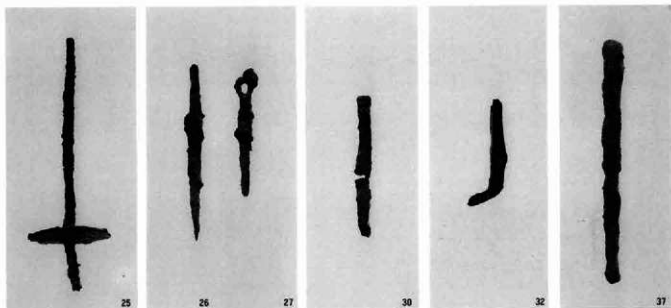
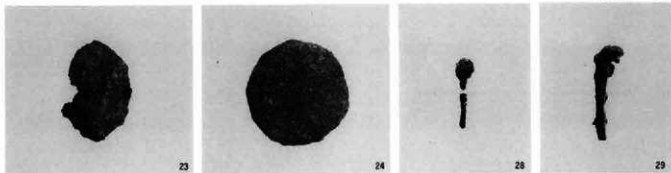


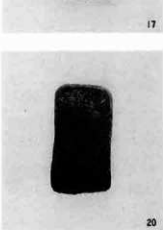
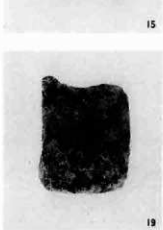
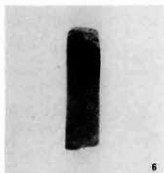
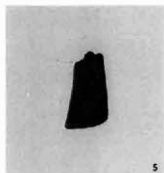
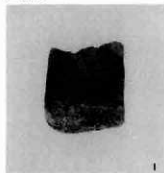
11

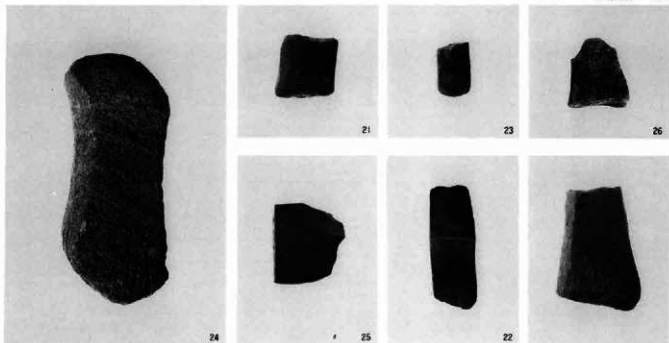


石製模造品









7号住竈用材



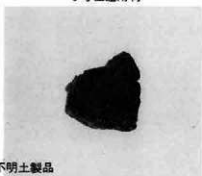
8号住竈用材



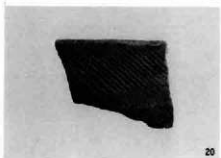
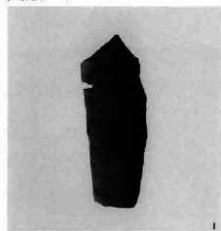
125号住竈用材

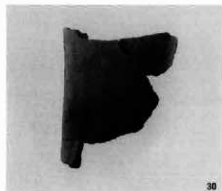


20号住・不明土製品

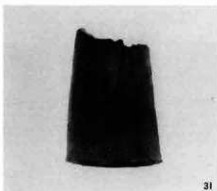


15号住竈用材

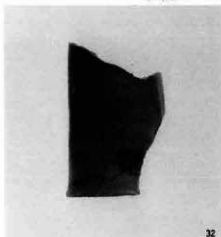




30



31



32



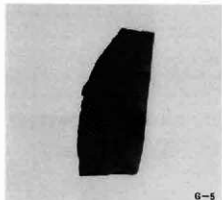
33



34



G-3



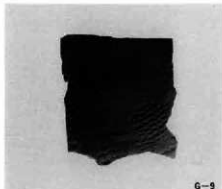
G-5



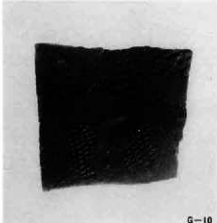
G-6



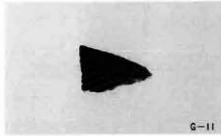
G-8



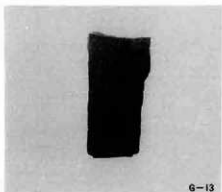
G-9



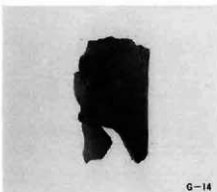
G-10



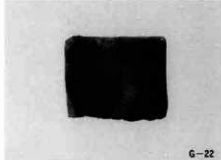
G-11



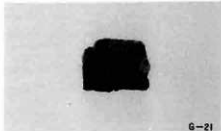
G-13



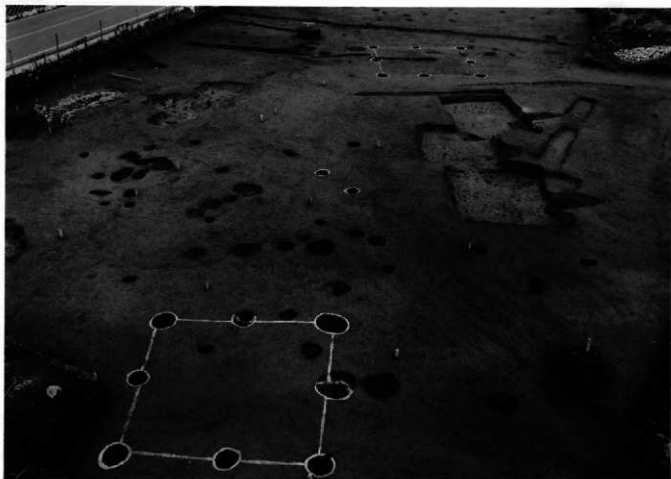
G-14



G-22



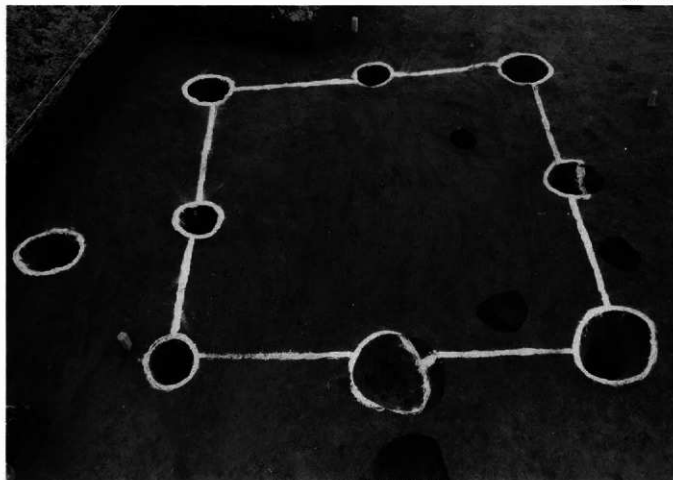
G-21



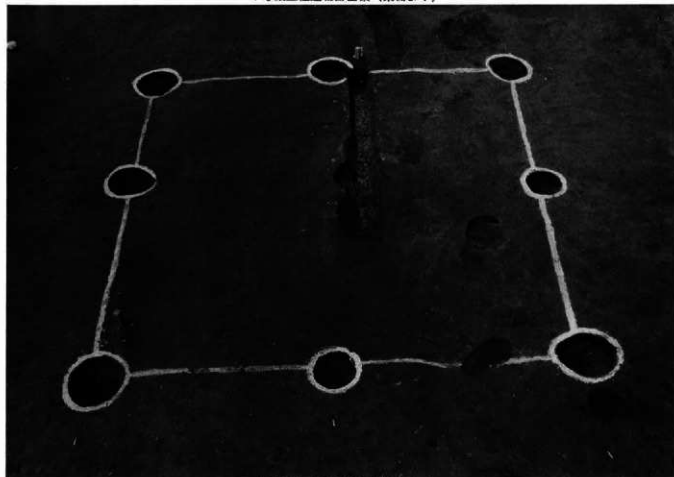
掘立柱建物跡遠景（南側より）



第一次調査・VI区近景（南側より）



1号掘立柱建物跡全景（東側より）



2号掘立柱建物跡全景（東側より）



1号小鐵冶跡遠景



遺物出土狀況



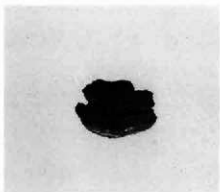
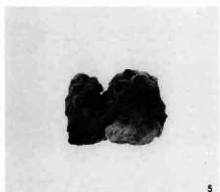
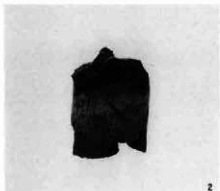
1号小鐵冶跡近接

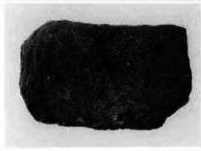
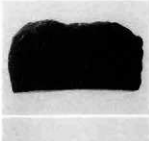
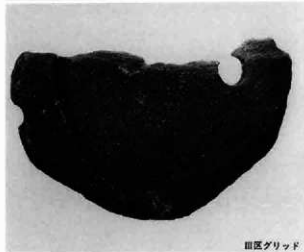
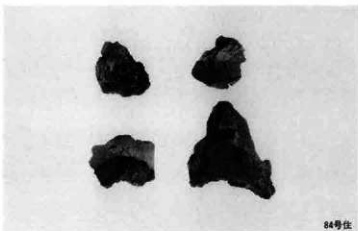


遺物出土狀況



2号小鐵冶跡遺物出土狀況







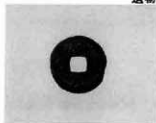
1号墓全景



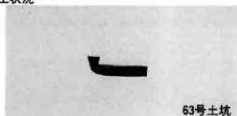
遺物出土状況



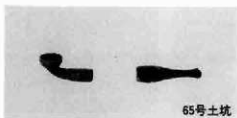
遺物出土状況近接



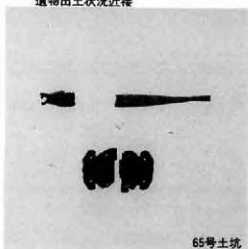
1号墓 (開元通宝)



63号土坑



65号土坑



65号土坑



火葬跡遺物出土状況



火葬跡全景



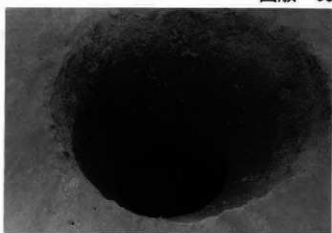
地層断面



調査風景



1号井尸全景



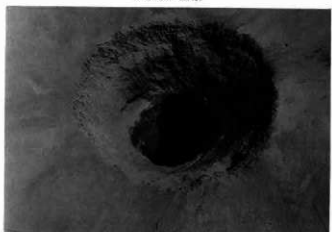
2号井尸全景



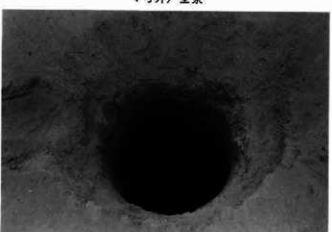
3号井尸全景



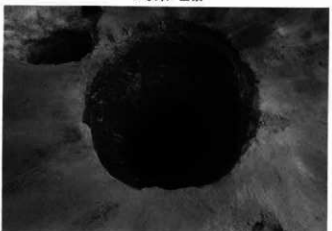
4号井尸全景



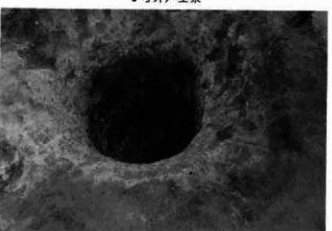
5号井尸全景



6号井尸全景



7号井尸全景



9号井尸全景



8号井严全景



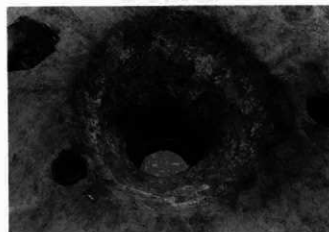
8号井严底部



10·20号井严全景



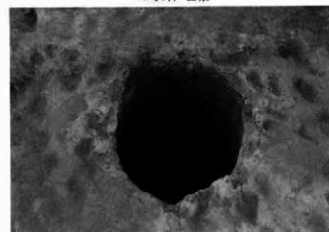
11号井严全景



12号井严全景



13号井严全景



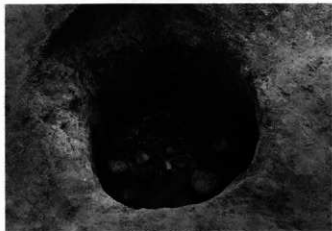
14号井严全景



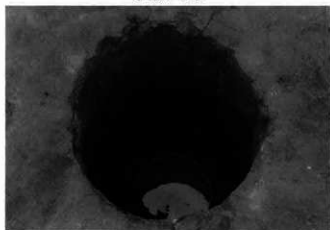
14号井严上部



15号井尸全景



15号井尸底部



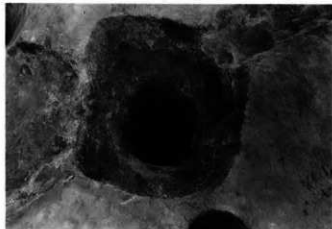
16号井尸全景



17号井尸全景



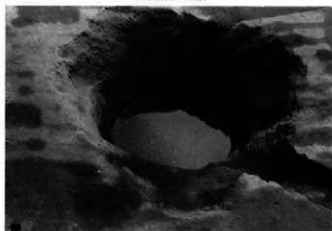
18号井尸全景



19号井尸全景



21号井尸全景



22号井尸全景



23号井尸全景



24号井尸全景



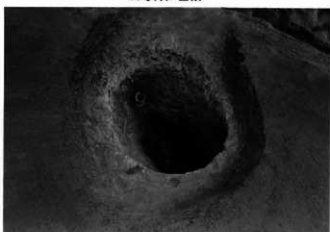
25号井尸全景



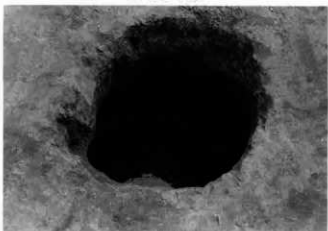
26号井尸全景



27号井尸全景



28号井尸全景



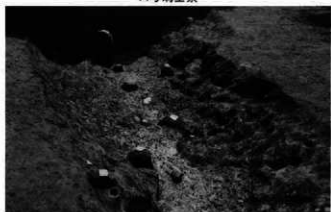
29号井尸全景



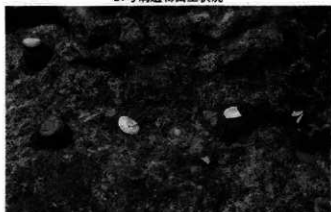
14号沟全景



21号沟遗物出土状况



26号沟



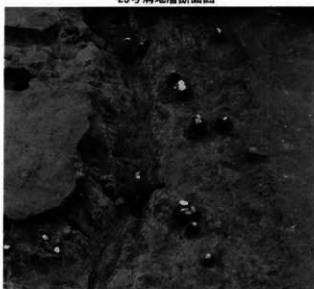
26号沟遗物出土状况



23号沟地层断面图



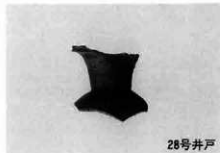
29号沟地层断面图

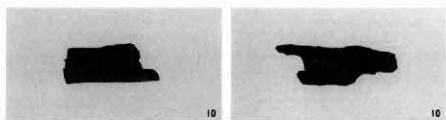
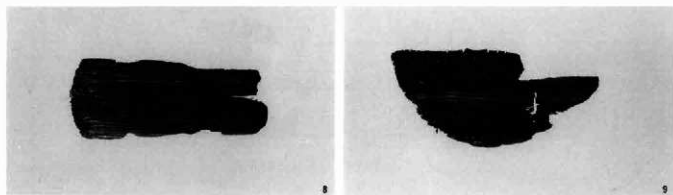
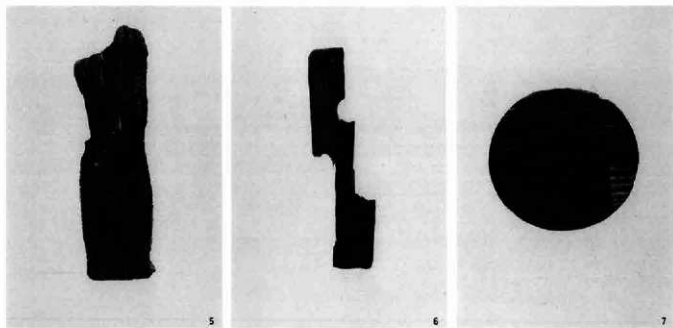
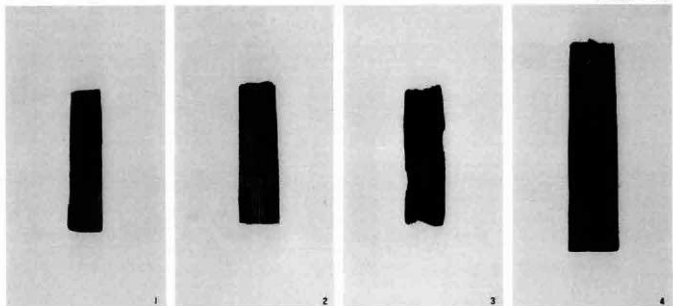


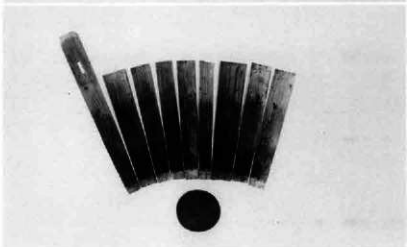
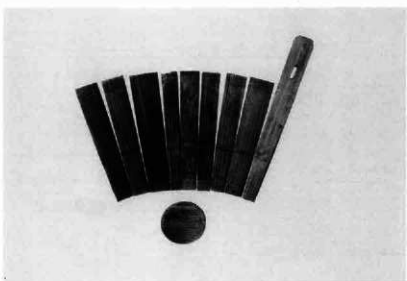
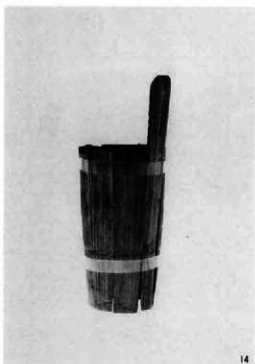
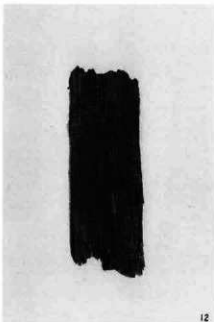
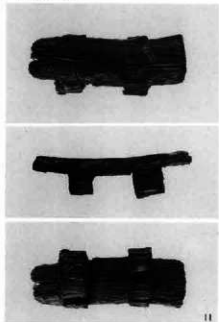
22号沟遗物出土状况

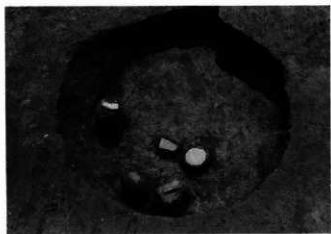


36号沟全景

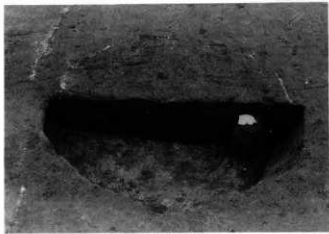




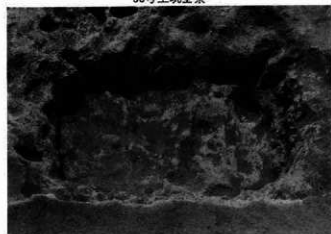




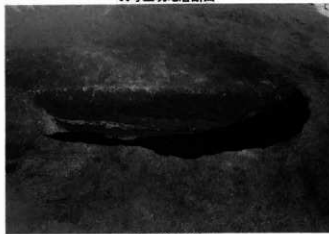
50号土坑全景



50号土坑地层断面



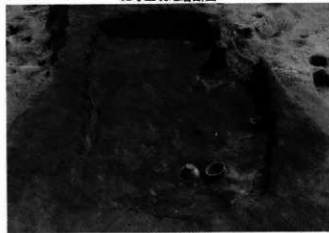
51号土坑全景



52号土坑地层断面



53号土坑全景



57号土坑全景



63号土坑全景



63号土坑掘り方全景



64号土坑全景



65号土坑全景



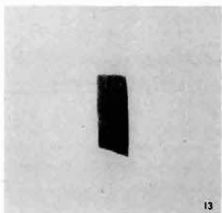
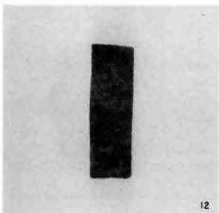
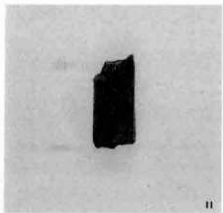
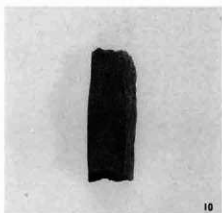
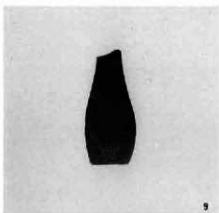
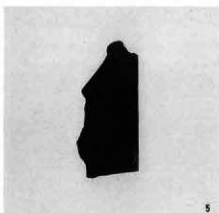
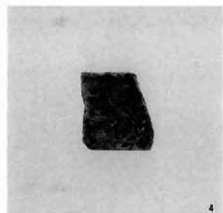
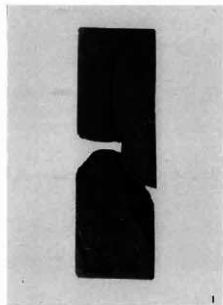
95号土坑全景

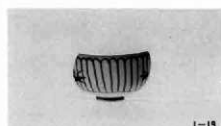
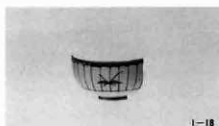
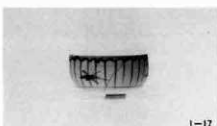


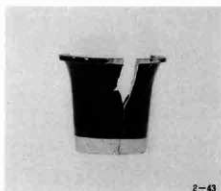
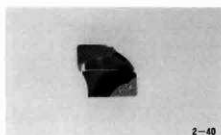
101号土坑全景

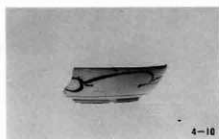


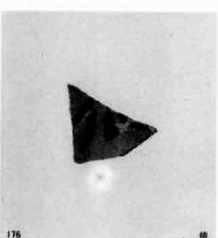
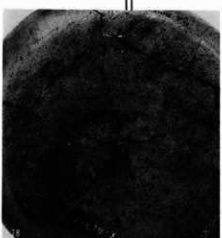
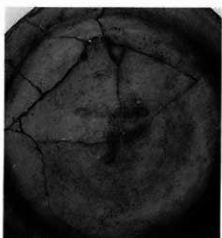
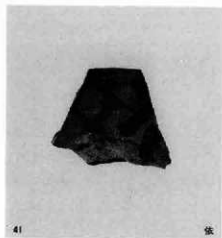
I区土坑群全景

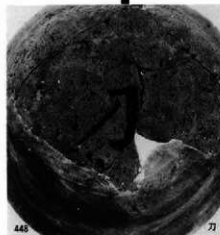


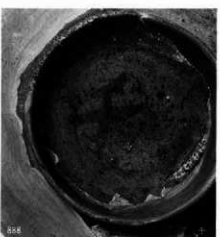
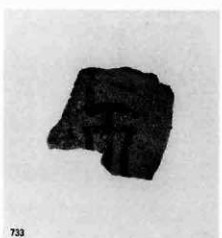


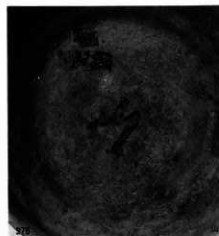












群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第30巻

上植木光仙房遺跡

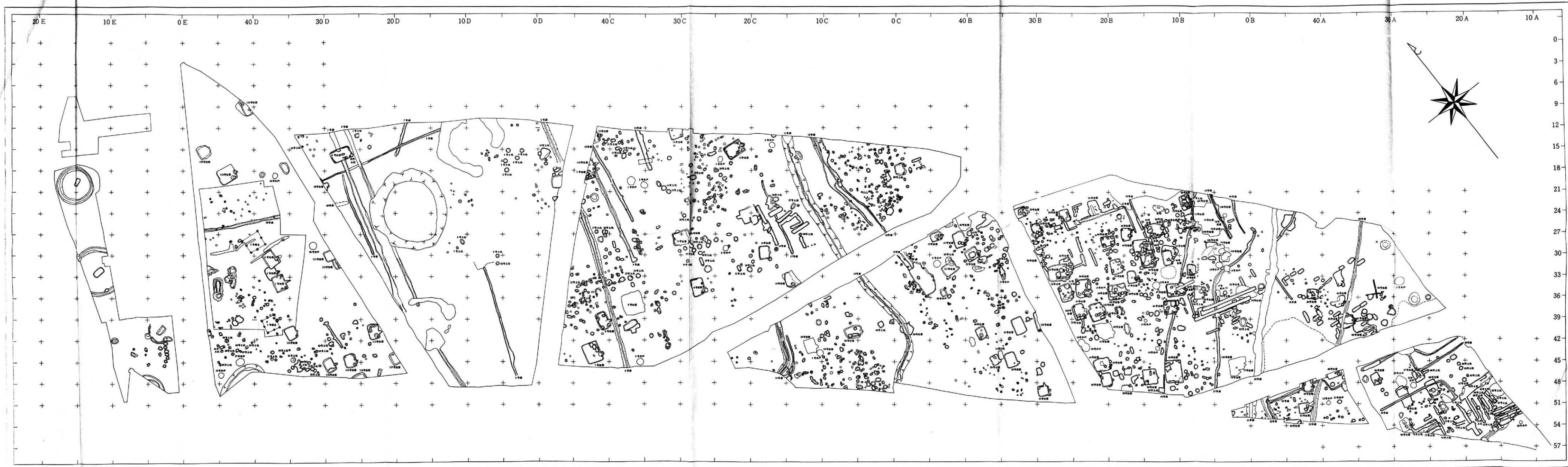
一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



上植木光仙房遺跡全体図